女系家族

ブッチャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女系家族

【Ｎコード】
Ｎ３１８４Ｇ

【作者名】
ブッチャー

【あらすじ】
四人の姉と妹がいるツッコミ上手の主人公が、失踪した父を探したり探さなかったりする話

第1話：賑やか家族

「ちょっとアマゾンへ」

会社でリストラされた親父が言った一言

その言葉を最後に、親父は蒸発した

第1章

【アマゾンの秘宝】

「なんで止めなかったんだよ、馬鹿兄貴！！」

親父が蒸発した次の日、親父の部屋から見付かった日記を見て本当にアマゾンへ旅立った事が分かり、父ちゃんっ子だった春菜は俺に噛み付いた

「だから通販だと思ったんだよ！　最近、妙に凝ってたしさ！！　だいたいお前だって、いきなり『ちょっとアマゾンへ～』なんて言われて止めるか普通？　あれじゃ近所のスーパーへ行くレベルだぞ！」

「だーかーら馬鹿なんだよ兄貴は！　ＡｍａｚｏｎはＡｍａｚｏｎでアマゾンはアマゾン！」

「あ～ん？　じゃ……アマゾン！　今のはどっちだ！」

「……う、うるさい馬鹿野郎！」

「こーら、お兄ちゃんに向かって馬鹿野郎なんて言っては駄目よ～」

昼飯をノンビリと作っていた母ちゃんが、言い争う俺らの中にノンビリと割って入る

「でも！」

「は～る～なちゃん？」

にこやかに笑っている母ちゃんの細目が光った！

「何でも無いです！　ごめんなさい、お兄様！！」

春菜は最敬礼をし、コソコソと部屋へ逃げ帰った

「ふぅ……。それにしても困った人よね～」

「ああ。たく、あの親父は何をやってんだか」

母ちゃんと暫くため息を付き合っていたら、タンクトップと下着姿の夏紀姉ちゃんが2階から降りて来る

「うるさいな～。あたし、昨日徹夜なのよ？　ゆっくり寝かせてよ～」

めっちゃ酒くさい

「あのなぁ、それどころじゃ無いだろ。親父がアマゾンへ行ったんだぞ！」

「アマゾンでもストロンガーでもどっちでも良いから静かにしてよ～」

そう言って2階へと戻っていった

「あの子、昨日男の子三人持ち帰って来たから疲れているのね……。ゆっくり休ませてあげましょう」

「いや、怒ろうよそれ！」

朝コソコソと出ていった奴らはそれかよ！

母ちゃんに詰め寄ろうとした時、玄関の廊下からパタパタと走る音がする

「ただいま～！　あ、お兄ちゃん。ただいま！！」

「ああ、お帰り雪葉」

「ちょうど良かった！
ねぇお兄ちゃん、さっき面白そうなＤＶＤを借りて来んだ、今から一緒に見よ？」

「それどころじゃ無いんだけどな」

俺はレンタルの袋を受け取って開ける

「ん、何々？　濡れた妹、止めてお兄ちゃん。そこはおへそなの、か。わー面白そーってこんなもん見れるか！！」

俺はＤＶＤを床にたたき付ける

「せ、せっかくお兄ちゃんと見ようと思って借りてきたのに。ひどいよ～」

お兄ちゃんのバカと捨て台詞を吐き、雪葉は泣きながら2階に上がっていった

「今のは貴方が悪いわね。後で謝っておくのよ」

母ちゃんは諭す様に言う

「う、うん分かった……って、どう考えてもあいつの方が悪いでしょ今の！！」

「こーら。人のせいにしたら駄目でしょう。めっ！」

「だ、だってあいつまだ小学生だよ！？　ヤバいよあいつ！将来歌舞伎町の蝶になっちゃうよ！？」

「大袈裟ね～。あの子はお兄ちゃんと妹って単語が気になったから借りて来ただけよ。多分、内容なんか理解してないわ」

「そういう問題じゃないだろ！　あんたの教育甘すぎない！？」

「……あんた？」

母ちゃんの細目が光る！

「ま、ママ」

「あら～懐かしいわね～。昔はママ、ママって呼んでくれてたのよね～」

ママ、もとい母ちゃんは俺を抱きしめ、いい子いい子と頭を撫でてくる

「や、止めてくれよ、母ちゃん」

「そお？　残念……」

母ちゃんは本気で残念がっている

「……」

「……？　うわっ！」

いつから居たのか、俺の横に制服姿の秋姉が立っていた

「……ただいま」

「お、お帰り」

「お帰りさない、秋」

「……ん」

秋姉は持っていた竹刀とバックを置き、冷蔵庫からプリンを取り出した

「もうすぐお昼よ?」

「べつばら」

秋姉は皿を出し、若干プルプル震える指でプリンをプッチンした

「秋姉~、みんな酷いんだよ~」

俺は秋姉に泣き付く。秋姉だけは昔から俺の味方だ

「ん」

秋姉は俺の頭をナデナデした

「親父がいなくなったってのに皆、自分勝手でさ~」

「……」

「特に夏紀姉ちゃんが酷くて、話すらまともに聞かないんだよ~」

秋姉は突然ガタンと立ち上がり、スプーンを口にくわえたままキッチンを出て行ってしまった

机には半分残ったプリン

愚痴ばかり言って怒らせてしまったかな……

「ち、ちょ！　　あ、アキ、こ、こらぁ！」

「な、なんだ？」

暫くして廊下の方が騒がしくなり、慌てて行ってみると、秋姉に首根っこ捕まれた夏紀姉ちゃんが半泣きで引きずられている所だった

「あ、秋姉……様？」

「……はい」

そう言って秋姉は俺に夏紀姉ちゃんを渡し、キッチンへと帰っていく

廊下に残されたのは、唖然とした俺と、下を向いてしゃがみ込んでいる夏紀姉ちゃん

こめかみがピクピクと震えている

「……あ、夏紀姉ちゃん。僕、宿題あるから」

逃げ出そうとしたが、足を捕まれてしまう

「……ちょ～っと、お姉ちゃんの部屋に行こうね～」

口元は笑っているが、目が全く笑っていない

「や、やだなぁ姉ちゃん。もうすぐお昼でえぇぇ！？」

今日の力関係

母＞秋＞夏＞春＞雪＞俺≧父

つづく。生きていれば

第2話：夏のクイズ番組

「さぁ始まりました、クイズどっちがバカヤロウ。解答者は……」

親父が蒸発して三日。未だ戻らない親父に、俺達は怒り、歎き、涙を流す

「4番ね」

「3番だろ？」

「バーカ1番だって」

「2だよ2ー」

「……3」

「あらあらぁ、み○のこの顔。素敵だわ～」

「正解は、4番です！」

「え～2じゃないの～」

「ちぇ、夏姉の一人勝ちかよ」

「ふふ～ん。あんた達とは頭の出来が違うのよ、出来が」

夏紀姉ちゃんは、食べたいおやつを一つ挙げる

今日は日曜日。我が家の行事の一つお食事デスマッチの日だ

クイズに正解した人間が、一週間の好きな食事やおやつを一つずつリクエストする。

この日ばかりは普段遊び歩く夏紀姉も、すぐ家に帰ってくるのだ

「また４ね。プロデューサーやる気あるのかしら？」

「２だな」

「馬鹿だな、兄貴。これ１だよ」

「……２」

「さーん！」

「あらぁ、み○も良いけど中○彬のねじりハチマキも中々」

「正解は４番です！」

「ふふん。どーよ？」

そう、この戦いは夏紀姉ちゃんが断トツに強い

流石は一応大学生と言った所か

「な、夏姉。あのぉ、私、カツ丼食べたいなぁ～なんて」

「ん～？　あ～なんか肩凝って来たわー」

「はいはい、おもみしまーす」

常に正解率が低い春菜は、いつものように、ご機嫌取りに走った

「……ふぬけた犬は、豚と同じ」

「あ、秋姉……様？」

「……次、がんばろ」

「は、はい」

「それでは此処でシルエットクーイズ。先ずは一部をご覧下さい！」

「……ドラえもんかしら？」

「ぽにょだとおもうな～」

「ピカチュウだろ？」

「バーカ、ミッキーマ」

「春菜、それは止めなさい」

「……ぴっぴか……ぴ？」

「アキ～あんたピカチュウ知らないでしょ？　全く。いっつもコ

イツに合わせるんだから」

夏紀姉ちゃんは、ぽかりと俺の頭を叩く

「……おやつ一緒に選びたいから」

「あ、秋姉ちゃん～」

「ん」

秋姉ちゃんに抱き着くと、頭をナデナデされた

夏のクイズ番組　2

「正解は、ドンカバチョです！」

「またエライマニアックなもん出して来たわね？」

夏紀姉ちゃんは腕を組んでウンウンと頷く

同じく頷いているのは母ちゃんだけだ

「夏紀姉ちゃん」

「何よ？」

「本当は歳、幾つ？」

答えの代わりに蹴りが飛んで来た

「さあ、それでは最後の問題です！」

今のところ、夏紀姉ちゃんが八割正解

次いで俺達ビューティー・ペアーが三割

雪葉が二割弱

春菜に至っては、ゼロ。わざとじゃないの、マゾじゃないのって言うぐらい当たらない

「うお～次こそ当てる～！！」

「まだ夕食とおやつの一回分と、日曜日のお昼が空いているわよ～」

母ちゃんの言葉に、俺達の目の色が変わる

「次は……早押しにしない？」

夏紀姉ちゃんが、静かに提案した

正解者が三回分を独り占めか……

「良いぜ」

俺が頷くと、まっ先に春菜が便乗した

一応俺らの中で最も運動神経の良い春菜。奴は早押しに全てを賭けるようだ

それだけなら潔くてカッコイイが、もし自分がハズレても夏紀姉ちゃんが当たれば良いやと言う姑息さが見え隠れしている

「う～ん……いいよ！」

既にお目当てのホットケーキを手に入れている雪葉もちょっと悩んだ後に、頷いた

秋姉は言わずもがなだ

「それでは問題……３５８１×２８５７は！！」

なんだこの問題！　こんなもん暗算で分かる筈が！！

「おっしゃ！！」

何ぃ？　春菜！？

「５８５７だ！！」

てめぇは小学校からやり直せ！！

心で突っ込んでる間にも、夏紀姉ちゃんは着々と暗算し、頷き始めた

駄目だ、分からない！！

そもそも問題は何だったっけ！？

「……よし」

夏紀姉ちゃんが、完璧だと声を上げる

もう駄目だ！

俺は泣きそうな顔で秋姉を見た

「！　……１０２３０９１７」

「……はい？」

秋姉の突然の声に、夏紀姉ちゃんはひょっとこの様な顔をした

「正解は、１０２３０９１７です！」

「……ウイナ」

今日のクイズ王

母＞秋＞夏＞俺＞雪＞＞＞＞＞春＞父

つづく。多分

第3話：春のラブレター

親父が失踪して一週間。俺達は夜も眠れない毎日を過ごしていた……

「この！　この！」

「なんの！　波動拳！！」

テレビに映る【ＫＯ】の文字

俺の操作しているカラテマンが、春菜の操作しているチャイナネーチャンに勝利したのだ

「くっそ～！　もう一回！」

「もう1時だぜ？　明日も学校だし、そろそろ止めようよ」

「勝ち逃げは駄目だぁ～」

春菜は駄々をこねる

「そうだなぁ、後一回ぐらいなら良いけど……」

「ほんと！？」

「一つ条件がある。俺が勝ったら……」

「おはよう母ちゃん」

自分の部屋で制服に着替えた俺は、眠い目を擦りながらキッチンにいる母ちゃんに声をかけた

「あら、おはよう。朝ご飯食べる？」

「うん」

朝ご飯はパンとみそ汁にスクランブルエッグ

他はどうだか知らないが、家では普通のメニューだ

その朝ご飯をちょっと急いで食べていると、バタバタと廊下が騒がしくなる

「おはよう！」

そして入って来たのは春菜だ。急いで着替えたのだろう、制服のリボンが曲がっている

「おはよう春菜」

母ちゃんが春菜のリボンを直した

「よう、春菜」

「おう、兄……お、お兄ちゃん」

昨夜の条件、それは

「ほ、本日はお日がらも良く……」

今日一日、可愛い妹でいる事だ！！

「ぷぷっ！」

「くっ！　お、お兄ちゃんそ、そろそろ学校へ行かないと遅れちゃうよ？」

春菜にとって可愛い妹のイメージとは、雪葉らしい言動が微妙に似ている

「お、そうだな。途中まで一緒に行くか？」

「誰が！」

「あれぇ、さっきまで居た俺の可愛い妹は何処に～」

「～～っ！　お、お兄ちゃん！　と、途中まで一緒にいこ！」

「ああ、行こうぜ～」

途中までからかってやろ～っと

「じゃ、行って来まーす。ほら春菜」

「ま、待ってよ、お兄ちゃん！　行って来ます、お母さん」

「行ってらっしゃい。

ふふ。相変わらず仲の良い兄妹ね～」

学校までの道。俺の高校迄は歩いて２０分

その途中に春菜の中学校がある

「今日は良い天気だな、春菜。手でも繋ぐか？」

「はぁ！？　嫌だよ、んな事！」

「あれぇ？　俺の可愛い妹ちゃんは？」

「ぐ、ぐぬぬぬ！」

春菜は歯を食いしばり、怒りに震える手で俺と手を繋ぐ

「よかよか。……痛っ！？　いてぇよ！」

「お兄ちゃん、ごめ～ん。嬉しくて思わず力がぁ！」

ギリギリと握って来やがった！？

「な、な～に。い、妹のスキンシップぐらいなんて事ないっさ！」

俺も強く握り返す

「ヌグググ！？！」

「オガガガガ！！」

暫し春菜と戦っていると、後ろから声を掛けられる

「お～い、春菜～」

「あん？　　ああ、直也か」

春菜の同級生か、振り返ると爽やかな少年が走って向かって来る所だった

「お、おはよう。……この人は？」

「あ？　　私の兄……お、お兄ちゃんです！」

そう言って春菜は俺の腕を組む

「い、いや、もう良いって」

春菜の耳にヒソヒソと話す

「うるさい！　　私は約束を破らないんだよ」

「あ、あの、初めまして。俺、春菜の……さ、佐藤さんの同級生で、山上直也と言います！」

直也君は俺に頭を下げた

「初めまして。春菜の兄です」

良さそうな子だ

「ほらぁ、いつまでもこんな奴と挨拶してないで、早く行こ、お兄ちゃん」

「と、分かった、分かった直也君も一緒に……」

「じゃー教室でな、直也！」

「お、おう……」

春菜に引っ張られ、呆然としている直也君を置いて俺達は歩き出した

「良いのか、春菜？」

「んな情けない所、いつまでも見せられるかよ！」

春菜は顔を真っ赤にしている

「おっ、もしかして奴に気があるとか？」

「はぁ？　何馬鹿言ってんだよ。あいつとは同じクラスだから嫌なんだよ、あいつ性格悪いし！」

「性格悪そうには見えないけどな」

意外と腹黒いのか？　よくある話だ

「あいつこの前、人の机ん中に溶けた飴とハンカチを入れて来たんだよ！　これが俺の気持ちだとか手紙に書いてさ！

私はその溶けて教科書についた飴を、泣きながらハンカチで拭いた

んだよ！？　その間、あいつはチラ見でニヤニヤ高笑いさ！
ちくしょ～」

春菜は悔しそうに叫ぶ

この間？　それはもしかして3月の……

「ほら、早く行くぞ、お兄ちゃん！」

今日の勝者

母＞俺＞春＞＞＞＞直≧父

つづく。だろう

第４話：雪の友達

親父がアマゾンへ旅立ち、半月

殆ど金を持って行かなかった筈の親父。今頃腹を空かせていないだろうか？　俺は心配で、ご飯も喉を通らない

「母ちゃん、今日のおやつなんだっけ？」

「焼きたてのどうぶつさんクッキーよ～」

母ちゃんはオーブンを指差す。甘いバターの匂いだ

「お、良いね～」

キッチンのテーブルに座って待つと、チーンと焼き上がる音

「はい、出来た」

「お～」

母ちゃんが皿を出し、取り分ける

「はい、どうぞ」

「ありがと～。……あれ？」

母ちゃんはもう一つの皿を出したが、やたら大きい

「そんなに食うの？　母ちゃん」

「違うわよ～、これは雪葉の分。あの子のお部屋に持って行って貰ってもいいかしら？」

「あいよ」

俺は皿を受け取り、２階にある雪葉の部屋へ持って行く

それにしても、こんなに食うとは……。今はちっこくて細いが、そのうち糖尿病を気にするぐらいに……

「あははは！　宮ちゃん凄～い」

雪葉の笑い声だ

俺はドアをノックする

「は～い」

ガチャリとドアが開く

「あ、お兄ちゃん！　お菓子持って来てくれたの？」

「ああ。友達か？」

「うん！」

可愛らしい雪葉の部屋に、三人の女の子が座っていた

「こ、こんにちは……」

「ああ、こんにちは」

メガネをかけた大人しそうな子だ。頭良さそう

「おーっす！」

「お、おっす」

髪を短く揃えた男の子の様な子だ。活発そうで良い

「なに？　この人」

「……」

性格悪そうなクソガキだ。きっと、ろくな大人にならないだろう

「……何よ？」

顔は内面を現すってのは本当だな

「みんなに紹介するね、お兄ちゃん」

雪葉は俺から皿を受け取り円卓へ置いた後、クイクイと俺の手を引っ張る

そして座らせられた俺は、ガキんちょに囲まれた

「雪葉のお兄ちゃん！　かっこいいでしょ～」

雪葉は俺の背中に抱き着きながら言う

「う、うん。素敵な人だね」

「いやいや、そんな。君の方も素敵な子で」

「優しそうな兄ちゃんじゃん！　羨ましいぜ～」

「おっ、そうか！　お前は兄弟いないのか？」

「かっこいい？　はっ！」

「てめぇは帰れ！！」

その後の紹介から、メガネの子が鳥里さん。ボーイッシュの子が美月だと言う事が分かった

後は生意気なガキだが

「何？　私の名前？　聞きたいのなら頼めば？」

「いや、いい」

「っ！　そ、そう。わ、私だって別に教えたく無かったから！」

「知ってるし」

「な、なんでよ！」

「お前、自分の胸見てみろよ？　よく見えるぜ？」

俺はニヤリと笑った

「なっ！？　こ、このばかぁ変態！！」

花梨は顔を真っ赤にし、部屋を出て行った

「お、お兄ちゃん、そ、そんな……お、お兄ちゃんがろ、ろり……」

雪葉は驚き戸惑っている

「あ、わ、私そろそろ、帰ろうかな……」

鳥里は警戒している

「なんだあいつ？　……なあなあ、兄ちゃんサッカーとか好き？」

美月は空気を読んでいない

「え？　何この空気？」

ピンポーン

チャイムが鳴り響き、少し経った後、階段を昇る音

その後に開くドア

そこには涙ぐむ花梨と、組織の犬が……

「こ、こいつが私の胸を見て『俺はお前の全てを知っている、俺が揉んでおっきくしてやるよ』って言って！」

「き、貴様ぁ！　まだ学生の分際で、なんつー性癖をしていやがる！！」

それから僕は、花梨の胸に付いていたネームプレートの事を、カツ丼なんか食べながら、一生懸命に説明しました。終わり

今日の力関係

母＞犬＞雪＞花＞鳥＞月＞＞＞＞＞俺≧父

つづく。社会に復帰出来れば

第5話：秋のお弁当

「あ～」

昼休みの教室。俺の声が響く

「どうした？」

そう聞くのはダチの太郎だ

「弁当忘れた！」

今日は朝、行く所があり、いつもより相当早く家を出た

それでも時間ぎりぎりだったので、慌てて出たのだがそれが運のつき

「あちゃ～、購買で買って来いよ」

山田は人ごとの様に言う。なんて冷たい男だ！

「今月、厳しいのに……」

ガックリ肩を落としていると、廊下の方で俺の名前が聞こえる

「お～い、秋先輩が呼んでるぞ～」

その声に、クラス中が廊下を見た

「秋先輩来てるの！」

「サ、サイン貰って来ようかな！？」

「何しに来た！？　何しに来たんだ！！　まさか俺に告白かぁ～」

俺は人目を気にしながら、コソコソと廊下へ出る

廊下では、下級生に囲まれた秋姉が、ぽつんと立っていた

「あ、秋姉！」

「……あ」

秋姉はスルスルと生徒を避け、俺の前へ出る

「ど、どうしたの秋姉？」

「……これ」

生徒達が緊張した面持ちで見守る中、秋姉は右手を挙げる

その手にあるのは沢山の猫が描かれている包み

これは……

「俺の弁当！」

「……わすれてた」

「ありがとー」

「ん」

そう言って秋姉は、やっぱりスルスルと生徒達をかわし、自分の学年へ帰っていった

「あ、秋先輩に弁当を持って来させるなんて……」

「お前の血は何色だ!!」

「ひ、ひぃぃ!?」

俺はクラスメート達に揉みくちゃにされながら、席へと逃げ帰る

「ふぅ、ふぅ……酷い目にあった」

どんな時でも席に着いたら追撃しない。それが僕らのルールです

クラスメート達は舌打ちをし、去っていった

「大変だったな。それにしても秋先輩……相変わらずカッコイイな!」

「ま～ね」

弟として鼻が高い

「さすが我が学校が誇る剣士だよ」

「ま～ね！」

秋姉は女子剣道部の主将をやっていて、昨年のインターハイで個人3位を取った実績がある

その戦い方は晴れた秋空の様に爽やかで、付いたあだ名が高秋の女剣士

美人で強くて、カッコイイ俺の自慢の姉だ！

「……ふひひひ」

「……お前、超気持ち悪いな」

「おっと、失礼」

俺は我を取り戻し、いつもの紳士へと戻る

「さ～て今日のお弁当は何かな～」

俺はワクワクしながら包みを解き、蓋を開け……

……

「な、何じゃこりゃ～！」

「はっ！？」

余りの光景に、一瞬意識が飛んだが、山田の声で戻って来た

そのお弁当は、ＴＶなら確実にモザイクが掛かる様な色と形になっており、何とも言えない異臭が漂う

「く、くせぇ！　　くせぇ、くせぇー」

「さ、サ○ンよ！？　サ○ンなのよ！！」

「う、うげぇぇえ。た、助け……」

クラス内は一瞬でパニックとなり、皆逃げ出したり気を失う

残ったのは耐性がある俺だけだ。そんな俺の意識も、もうじき途切れるだろう

「あ、秋姉……」

そう、これは秋姉の唯一の弱点

秋姉は壊滅的に料理が下手なの……だ

……グチャ

一時間後、病院で目覚めた俺は、弁当箱に顔を突っ込んで瀕死の状態だったと言う

その頃の剣道場

「秋先輩！　　もう一本お願いします！！」

「……うん。……喜んでくれたかな？　　あの子」

今日の戦闘力

弁当＞＞＞＞秋＞＞＞＞＞クラスメート＞俺≧山＞父

つづけ……られるだろうか？

第6話：母のキャンプ

親父が居なくなり、一月

母はその寂しさからか、その熟れた肉体を一人熱くするのだった……

［オーイェーイ、サコー、サコー］

「たこ～、たこ～」

［イェイ、イェイ、サコーサコー］

「たこ～、たこ～」

妙な掛け声がリビングから聞こえ、俺はリビングのドアを開けた

そこにはタコ踊りをしている母ちゃん

「な、何やってるの？　母ちゃん？」

「ビ、ビリー・〇ードキャンプ～」

「そ、それはまた微妙な物を……」

うちの母ちゃんはちょっと遅れている

この間もこんな事があった

『母ちゃん、おかわり！』

『どんだけ～』

……あ、後こんな事も

『母ちゃん、おかわり！』

『残念！　もうないの～』

……そ、そういえば昨日も

『母ちゃん、おかわり！』

『あると思います！』

……これはまだ新しいか

「い、一緒に、はぁ、はぁやらない？　ふぅ、ふぅ」

「いや、遠慮しておくよ」

俺はハゲより杉〇彩の方が良い

俺は母を生暖かい目で見守る事にした

１０分後、ハゲが皆を呼び寄せキャンプは終局へ近付く

「オッケー、オッケー、アソコノケー。アーイエー！　フィーアーチャンピオンマガジンサンデー！！」

「イエーイ！！」

母ちゃんはソファーへ座っている俺に抱き着き、大はしゃぎだ。何だか俺も楽しくなる

「イエーイ！！」

「オーイエー！　サンキュー」

「イエスー・ウィー・キャン？」

「イエス！　イエス・ウィ・キャン！！」

「イエス・ウィ・キャン、イエス・ウィ・キャン！」

その時、ぽとんと何かが落ちる音がした

リビングのドアを開けている雪葉が、手荷物を落とし唖然とした表情でこちらを見ていた

「……お、おかぁ……お、おにぃ……」

「……ン？　ユキーハドウシタノデスカー？」

「う、うわぁぁあん！」

突然雪葉は泣き出して、リビングを飛び出して行った

「う、うわ！　な、なんだ？」

「……あの子もそう言う年頃になったのね」

何かを悟っている母ちゃん

「大丈夫、後でホットミルクを持っていくわ。さぁ、今日はお赤飯よ！」

「？　ま、いいか」

今日のカロリー消費

母＞雪＞父＞ハゲ＞俺

つづく！

第7話：風の少女

不思議な少女と出会った

その少女は俺よりずっと年下だと思うのに、そんな感じが一切せず、何と言うか大人びていて、凄く透明感のある少女だった

「遅刻、遅刻～」

朝、学校への登校。遅刻しそうだった俺はパンをくわえて走っていた

そして、曲がり角を曲がったその時！

「うわっ！」

「きゃっ！？」

俺は少女とぶつかったのだ

「あいたた～。……だ、大丈夫？」

「うん、僕は大丈夫。お兄さんは？」

「あたし？　あたしは……」

いや、この回想、俺じゃ無いだろ！？

えっと……ああ、そうそうこれだ！

「大丈夫か？　坊主」

俺はぶつかった少年に手を伸ばす

「え？　嫌だなぁ。こんな格好しているけど、僕、女の子だよ？」

少年、もとい少女は俺の手を取って立ち上がり、被っている帽子を脱ぎながら、そう言った

帽子の下は意外と長い髪で、よく見ると可愛らしい顔をしている

キンコンカンコーン

「あ……遅刻か」

「ごめんね、お兄さん」

「いや、俺の方が不注意だった。どうだ、もし暇ならマックでも食いに行かないか？」

「あは、僕が女の子だって分かったからナンパかな？」

「ふっ、生意気なガキだ」

俺達は暫し笑いあって、マックへ行く事にした

「僕の名前は風子。風の子と書くんだ」

お互いの名前を名乗り合いマックを出る頃には、すっかり打ち解けていた

そして、俺達は河川敷へと行く

「そうか、先月転校して来たのか」

「うん。これで7回目」

河川敷を歩く俺ら。風子は石を蹴飛ばし、寂しそうに呟いた

「そんなに！　凄いな」

「僕のお父さんは、絵かきだからね」

岬君みたいな奴だ

「でもね、そんなに悪くは無いんだ」

「どうして？」

「四季折々の様々な景色が見れるし……」

風子は足を止める

「一期一会。色々な人に会った。そう、こうしてお兄さんにもね」

「風子……」

風が強くなり、どちらとも無く別れを意識する

「……また会えるか？」

「ふふ、どうだろう。僕は同じ場所に居ないからね」

「ふっ、風は止められないそういう事か」

「でも、お兄さんとはまた会える気がする。そう、お兄さんからも風の匂いを感じるから」

俺達は微笑み合い、そして別々の道を歩き出す

さよならなんて言わないさ

風はいつでもそこにあるから

……

「ただいまー」

風子と別れてから学校へ行き、夕方家へ帰った俺は、廊下で床を掃

除している母ちゃんに声をかけた

「お帰りなさ～い。ちょうどよかったわ～」

「うん？　何が？」

「雪葉を呼んで来てくれる～？」

「ああ、良いよ」

俺は2階へと上がり、雪葉の部屋をノックした

「は～い」

ガチャリとドアが開く

「よ、雪葉。母ちゃんが呼んでるぞ」

「うん、分かった！　あ、そうだ、お兄ちゃん新しいお友達紹介するね」

俺は部屋に引っ張られた

部屋に居た女の子は立ち上がり、ぺこりと頭を下……げ？

「始めまして。僕、佐藤さんのお友だ……」

「……」

「うん？　どうしたの風子ちゃん？　あれ、お兄ちゃん？」

「……」

「……」

なんかもう、すんげー気まずかった

今日の気まずさ

俺≦風＞＞＞＞＞雪＞父＞母

つづきます。

第8話：夏のお昼寝

昨日夜の事です

夏紀姉ちゃんが、いきなり僕の部屋に乗り込んで来ました

『あんた、あたしの部屋に勝手に入ったしょう！』

『は、入ってないよ』

『嘘！　分かってるのよ、あんたぐらいしか怪しいのいないんだから！』

『入って無いって！』

その後もやれ変態だの、シスコンだの散々罵倒して下さいまして

『あらあら～、どうしたの～』

と、母ちゃんまで来る始末

『あ、母さん！　こいつ私が居ない間にあたしの部屋へ入って、脱いだし……ま、まあとにかく勝手に入ったのよ！』

『あら～ごめんなさい。私もお昼頃に入ったわ～』

『え？』

『だって夏紀、洗濯物貯めるんだもの』

『え？　じ、じゃあ、あたしの下着は……』

『洗ったわよ～』

その後、夏紀姉ちゃんは僕に謝らず

『ふ、普段から怪しいのが悪いのよ！』

と、言って部屋を出て行きやがりました

そんなこんなで、今俺は夏紀姉ちゃんの部屋にいるんだけど……

「汚い部屋だ」

脱ぎっぱなしの服に、転がるペットボトル

ビールの缶がテーブルに山積みだ

「さて……と」

「むにゃ……むにゃ」

俺は下着姿でみっともなく寝ている夏紀姉ちゃんへ、静かに近寄る

そうこれは復讐だ。この女の身体に、俺の怒りと恥辱を刻んでやるのだ

「ふふふ」

俺は夏紀姉の股を広げた

「えーと、右の太ももには……」

おらがいなかっぺ大将。此処に参上！！

「左の太ももは、と」

あたいの人生、バケラッタ

「……ぷっ！」

ぶっとい油性で、文字と絵を書く

後は腹と、顔に……

「ぐえっ！？」

突然、夏紀姉ちゃんの足が俺の首を挟む！！

「な～に～を、しているのかしら？」

「あ、はは。おはようお姉様。あ、僕、宿題がぁぁあああ！？」

今日の被害

俺＞＞＞＞＞＞夏＞＞＞父＞＞＞母

つづく……かしら？

第9話：春の純真

夕方。部屋でコーヒーを飲みながら一人将棋を指していると、ドアがノックされた

「開いてるよ～」

ガチャリとドアが開き、入って来たのは春菜だ

「兄貴～聞きたい事があるんだけどさ」

「ん？　宿題か？　いいよ教えてやる」

たまには兄貴らしい所でも見せてやろう

「コンドームって何？」

「ぶふぅー！！」

「き、汚ねーな！？　何だよいきなり！！」

「ごほ、ごほ……そ、その台詞、俺の方こそ言いたいよ。一体何処からその単語が……」

「ん？　これ」

そう言って、春菜は俺に一冊の本を渡す

「うん？　冒険野郎、藤○弘？」

開いているページを読んでみる

［仲間とはぐれ、彼等を捜そうと更にジャングルの奥地へ進んだ私は、道に迷った］

「……何で奥地に行ったんだ？」

捜すんなら、来た道を戻るべきでは？

［しかし、必死の捜索にも関わらず彼等は見付からない。私は諦め、彼等を待つ事にした］

「さっき自分で迷ったって言ってるのに、あくまでも自分が捜してるってスタンスを崩さない所が、流石ヒーローだ」

［だが、３日経っても彼等は現れず、次第に食料も尽きてきたのだ］

「……中々面白くなってきたな」

［捜索から５日目。ついに手持ちの食料が無くなる。そして飢えた私は、意識朦朧とし、フラフラとジャングルをさ迷った。そこに現れたツキノワグマ］

「あれ？　ひょっとしてこの人、日本にいない？」

［私は襲って来たツキノワグマを必殺のライ〇ーキックで倒し］

「お、此処はやっぱりラ〇ダーなんだ」

［そのまま熊を丸呑みした］

「怖っ！？　この人怖いよ！！」

「静かに読めよ、兄貴」

「あ、ああ、悪い悪い」

後でこの本、借りよう

［そんなこんなで、喉が渇き、水を求めさ迷うと、私は小さな川を発見した］

フムフム

［コンドーム最高！］

「はぁ！？」

俺は文を飛ばして居ないか読み直す。だが飛ばしていない

［こうして私は生き残ったのだ　第４部完］

「コンドームのとこ意味分からなくてさ～」

俺の横に来た春菜が、本を覗き込みながら言う

「……俺にも分からない」

奴が何考えて生きているのか

「んで、ちょっと貸して」

春菜に本を返すと、春菜はペラペラとページをめくる

「と、ここだ、ほら」

本の巻末に、用語説明が載っていた

「ん？　どれどれ」

か行

【カラスミ】　・珍味

「まあ確かに」

【身体が重いの……】　・妊娠した可能性がある愛人の台詞

「知らねぇよ」

【キリンビール】　・アサヒの方が好きだ

「いや、知らねって」

【熊】　・かゆ……うま

「何処のゾンビだよ。ウケ狙いかコノヤロウ」

「うるさいな～、黙って読めって」

「はいはい」

【コンドーム】　・はにかみながら、お父さんやお兄ちゃんに聞いちゃおう☆

聞いたらその詳細をハガキに書いて下記の住所に……

「……この本、捨てろ」

「は？　嫌だよ！　８００円したんだぞ、これ」

「２０００円やるから捨ててくれ……」

「いらねーやこれ」

春菜は本を掴んで二つに破った

「で、結局コンドームってなんだよ？」

「……水筒の代わりにしたんだろ、多分」

今日のライダー

藤＞＞＞父＞＞俺＞春

つづく。かもしれない

第１０話：雪のかくれんぼ

「お兄ちゃん、雪葉かくれんぼしたい！」

戦いはそんな言葉で始まった

０８：２５

「かくれんぼ？　かくれんぼねぇ」

高校生にもなって、やる事だろうか？

「また今度な」

「う～最近お兄ちゃん、遊んでくれない！」

「なら家で遊ぼうぜ。軍人将棋買ったんだよ、昨日」

「やーだ！　かくれんぼしたい！！」

「そうだねぇ、もう少し雪葉が大きくなったらやろうねぇ」

「……ぐす……お、お兄ちゃん雪葉の事、嫌い？」

「かくれんぼ最高ォー！　やるぞー！！　」

０９：４０

近所にある市立公園。日曜日だけあってそれなりに人が多いが、公園の面積がとても広いので、そんなには気にならない

そんな公園で俺と雪葉は、手を繋ぎながら雪葉の友達を待っていた

「あ、みんなだ！　お～い」

雪が呼ぶと、まっ先に走って来たのはジャージ姿の子

「雪！　雪の兄ちゃん！　おーっす！」

「おーっす！」

「よう、美月！　今日も元気だな！！」

相変わらず元気な子だ。見ているだけでこっちも元気になる

続いて来たのは、可愛らしい服を着た子だ

「こんにちは、雪ちゃん」

「うん、こんにちは」

「こ、こんにちは」

「……ひっ！？……ど、どうも」

「は、はい。なんか色々すみません」

相変わらず警戒している鳥里。誤解はいつ解けるのだろうか……

次に来たのは半ズボンに、シャツ、帽子と男の子の様な格好をした子だ

「やあ雪」

「うん、風ちゃん」

「そしてお兄さん」

「よう、風子」

「ふふ」

そして最後に来たガキ

「こんにちは、雪」

「うん！　花梨ちゃん」

「それと……ふん！」

「けっ！」

俺達は顔を背け合う

「お兄ちゃんと花梨ちゃん仲悪いのかな……」

「心配いらないよ、雪。　二人とも照れているだけだから」

「違う！」
「違う！」

「ほらね」

「わぁ、仲良いんだ～。よかった！」

無邪気に笑う雪葉に、俺達は毒気を抜かれた

「……風子、後で覚えてなさいよ」

「分かったよ、花梨」

風子は花梨のガンを、アッサリとかわす。さすがに役者が違うな、ちょっとカッコイイ

「……ふ、ガキと張り合っていてもしょうがない。許してやるよ、花梨ちゃん。はっは」

俺は、風子の様に大人の余裕を見せる為、花梨の頭を馬鹿にするようにグリグリ撫でた

「～～っ！　　そ、それはどうも！！」

花梨が俺の足を踏む

「ぐっ！　　ふ、ふふふ」

「あ、あはは、あはははは」

笑いながら睨み合う俺達を雪葉は嬉しそうに見ていた

１０：０２

「じゃーんけーんぽい！」

六人でするじゃんけん

俺だけパーを出す

「あら、あんただけパーなんだ」

花梨が含み笑いをした

「……」

「あーいこでしょ！！」

数回のじゃんけん。結局俺が負けた

「ふふ。それじゃお兄さん頑張ってね」

「ど、どうも……」

「お兄ちゃん、またね！」

「うっひゃー！　隠れろ隠れろ！！」

「ふん。ま、せいぜい頑張りなさい」

「……花梨、俺はお前を一番最初に見付けてやる」

「よ、呼び捨てにしないでよ！」

そして皆、それぞれ隠れに行った

１０：０７

「九十九、ひゃーく」

俺は百数え、目を開ける。いよいよかくれんぼのスタートだ

さてかくれんぼ。当たり前だが皆の姿は無い

「結構広いからな」

かくれんぼは基本的に捻くれている奴ほど近くに隠れる傾向がある様に思える

それで言うと、一番捻くれてる花梨は直ぐ近くに居そうなものだが……

俺は直ぐ後ろの、人が隠れられそうな茂みを掻き分けてみる

「まぁ、いくらなんでもいる訳……」

茂みの中で花梨と目が合う

「……何よ」

「……お前、捻くれてるなぁ」

「な、何よ！」

１０：１２

「さて、アホな子は見付けたし……」

「誰がアホな子よ！！」

「他の子は何処だろう」

俺は地面に足で円を書き、花梨をその中へ入れてから探索に向かう

広い公園内。隠れても良い範囲は約、１００メートルとしている

その１００メートル以内にあるのは展望塔と、花畑、木々に温室それと管理室

一先ず俺は、花畑の方へと向かう

花畑はチューリップやチューリップ、チューリップなどの沢山の花

がってチューリップ以外の花分からねーよ

「……花畑って結構隠れ易いかもな」

花畑は子供がしゃがめば見えなくなる程度の高さがあり、様々な色が目を錯覚させる

此処を捜すのは結構骨だなぁ

一回りしたら別の所を捜そう

「……」

「……ひっ……」

「……」

俺は無言で、今来た道を戻る

「！……ぅ…ぅ……」

「……み、見つけましたよー鳥里さん」

「あっ！　い、いや、やだぁ！」

「……と、とりあえず始めに居たとこで待っててな」

そう言って俺は逃げ出す

なんだかもう泣きたくなってきた

１０：２８

その後、温室や木々の間を調べてみたが残りの連中が見当たらない

俺は始めの場所へと戻る

「いつまで私を待たせる気よ！？　このマヌケ！」

クソガキの第一声だ

「仕方ないだろ、公園広いんだし簡単には見付からないって」

「いい歳なんだからもっと頭を使いなさいよね！
いい？　残りは風子と雪と美月。その中で多分、風子は常に鬼が見える場所にいるはず」

「鬼が見える所？」

「そう。相手の視線を気にせず、安全に行動を観察出来る場所。要するに、高い所ね」

「展望塔か！」

このガキ、侮れねぇ！

「次に美月。あの子の性格を考えると、あの子は同じ場所で隠れる事はしないはず。だから風子を見付けた後、今度はあんたが上から観察しなさい。うろちょろしてるから」

「な、成る程。……それで先生、うちの妹は何処でしょうか？」

俺はこのガキ、もとい先生のお言葉を待つ

「……雪は」

「雪は！」

「あ、あんた自分で考えなさいよね！　妹でしょう！？」

「ま、まぁそうだけど……」

あいつの性格か。あいつは甘えん坊で泣き虫でさみしがりや……あれ、良いとこ無くね？

いやいや動物や花が好きな優しい子でもある。って事は花畑か温室か？　一応、捜したんだけどな

「あの子、時折予想もつかない事するからね……」

ため息混じりに花梨は呟いた

雪のかくれんぼ　2

１０：３５

俺は展望塔へ向かい、エレベーターに乗る

展望塔の高さは約５８メートル。マンションで言えば１５階ぐらいの高さだ

ガキんちょに言われて来てみたものの、風子は本当に居るのだろうか？　適当に言ったんじゃ無いの？　あいつ

そしてエレベーターの扉が開き、俺は展望室へ……

「う、疑ってすみませんでした、先生！！」

「やあ、遅かったね、お兄さん」

展望室には風子は一人しか居なく、風子はガラス窓の傍で立て膝をついて座っていた

「ほら、お兄さん。見てご覧、良い眺めだよ」

「そうか？　どれどれ」

俺は立ち上がった風子の横に並ぶ

「おお～」

風子が言う様に、高い所から見る春の公園内は、彩りに溢れ美しい

「ふふ。みんな幸せそうだ」

「ん？　　ああ」

風子の視線を追うと、楽しそうに駆け回っている子供連れの家族や、愛を語る恋人達

「僕にはちょっと眩し過ぎる風景だよ。……僕を見付けてくれてありがとう。お兄さん」

風子は俺を見上げ、優しく微笑んだ

「風子……。ふ、いつでも見付けてやるさ。お前の……風の通り道をな」

１０：４１

風子が居なくなった後、俺は一人顔を赤くしながら後悔していた

どうも風子と話してると、訳の分からないワールドへ連れて行かれる

「あ、後は雪葉と美月！」

無理矢理気を取り直し、展望室から公園内を眺めていると、青い服を着た子供が右へ左へうろちょろしていた

「マジで居た！」

青い子、美月は何処かに隠れたと思ったら直ぐに出てきて、またダッシュで何処かに行く

「落ち着きね～」

俺は展望塔を降り、美月の元へと走った

「……見付けた！　美月！！」

「あっ！　兄ちゃん！！」

美月は走って逃げ出す

「ち、ちょっと！　み、見付けたって！！」

「逃げろ～」

「こ、こら～み、見付けたって言ってるだろ～」

「あはははは！！」

１０：５７

「兄ちゃん、超はえ～」

俺に捕まった美月は、座り込む俺の首へ背中からしがみつき、けら

けらと笑う

「ハァ、ハァ、ハァ、ゴホゴホ、……は、始めの場所で待ってろ」

「うん、分かった！」

そう言って美月は走って行った

「タ、タフな奴……」

11：02

さて色々と疲れたが、ようやく後一人となった

「雪葉か……」

この天才サイコメトラーの俺でも、雪葉の行動だけはイマイチ分からない

先程花梨が言った様に、雪葉は普段大人しいが、稀に大人顔負けの事をする

例えばそう二年前の冬、俺が冬休みに一人で一週間の京都旅行へ行った時の事だ

若かりし頃の回想←

京都に滞在し三日目、その日、俺は馴染みの旅館へと泊まりに行った

『あら若旦那、お久しゅうございます～』

『おう、女将！　相変わらずの女盛りじゃのう！！』

俺は女将のケツを触る

『嫌やわ～若旦那。オイタをする手はこうどす～』

そう言って、女将は俺の指を軽くつねった

『はっはっは、こりゃ堪らん！　退散じゃ、退散』

そんなこんなで、その旅館の一等部屋。南斗鳳凰の間へと行く

『それではごゆっくり～』

『うむ』

俺はいつもの部屋に満足し窓を開けた

窓の外は庭園で、木々がうっすら雪化粧をしている

『今年も良い女じゃ！　はっはっは』

それからさて、風呂でもと浴衣を取り、露天風呂へと行く

風呂の更衣室では中学生ぐらいの子供が、ブリーフ姿のまま恥ずかしげにしていた

『こら坊主！　男はのう、男はいつでも裸一貫じゃ！！』

俺は見本にと、素っ裸になる

坊主は俺のそんな姿と股間を見て頷き、自信ありげにブリーフを脱いだ

『はっはっは！　立派、立派！！　はっはははは』

で、でけぇ！！

俺は動揺を悟られぬ様、そそくさと露天風呂へと入った

露天風呂は広く、表にあるが、熱気が凄いおかげであまり寒く無い

俺は体を洗い、湯舟へと浸かる

『ふぅ、染みるのぉ』

頭にタオルを乗せ、ババンバンバンバンと鼻歌をしていると、草葺き藁の向こうからおなご達のハシャグ声が聞こえた

『そう、お兄さんを捜して……大変だったのね』

『大丈夫よ。さっき女将に確認したら、ちゃんと此処に泊まってるって言っていたから』

『あ～もう！　こんな可愛い子を残して何やってるのかしら！！』

女達は尚もはしゃいでいる

『やかましいのぉ』

『それが女ってもんだよ、兄さん』

背中に観音様を背負った爺さんが、俺の独り言に付き合う

『ほぅ、爺さん。若い頃大層遊んだ口だね？』

『ふっはは！　わしはまだ現役じゃい！！』

『こりゃ元気な爺さんだ！』

俺達は暫し笑いあった

そして散々温まった後、俺は湯舟を出る

『兄さん、今度どっかであったら一杯やろう！』

『ああ。ホットなミルクを頼むぜブラザー』

そして、俺は更衣室で浴衣を着て露天風呂の外へ……

へ？

『……あ……お、おに、おにぃ……おに、っっ～～！！』

どっかで見た様な気がするガキんちょが、女風呂の前からブルース・スミス（アメフト）の様な的確なタックルをしてきた！！

『ぐはぁ！？』

『お兄ちゃん、お兄ちゃんお兄ちゃん、お兄ちゃ～ん！！　う、うわぁー』

そう、雪葉は俺を追って一人で京都まで来たのだ

部屋に捜さないで下さいと手紙を残して……

こんなアホな……い、いや可愛い妹だ。果たして何処に隠れているやら

１２：１５

あれから一時間。まだ雪葉を見付ける事が出来なかった

途中で雪葉の友人達も雪葉を探し始めたのだが、やはり見付からない

「……何処に居るんだ」

もうすぐ昼時。そろそろ一度引き上げないといけない時間だし、流石に心配になってしまう

「何処に隠れたのかしらあの子……」

「……雪は意外性の固まりだからね、僕にも読めない」

花梨や風子達の声にも、若干の心配が混ざり始めた

「向こうにも居なかったよ！」
「はぁ、はぁ……です」

俺達と反対側方面を見てきて貰った、烏里さんと美月。しかし、成果は無かった

「そっか……もう昼だし帰っても良いぞ、雪葉には俺が言っておくから」

「嫌よ」

「う、うん。……早く、雪葉ちゃん見付けてあげたい」

「私、もう一度向こう捜して来る！」

「決まりだね。じゃあ僕は向こうを捜して来るよ」

「お、お前達……」

なんと美しき友情か

「よし、なら花梨はあっち、烏里さんはそっち。俺はこの辺りを捜す！」

「あんたに命令されるのは気に入らないけど……良いわ、行って来る」

「い、行ってきます」

子供達は散らばり、俺もまた周囲を捜す

「一体何処に……」

しかし、5分、10分と時間は過ぎて行き……

「ゆ、雪葉～！」

俺は恥ずかしいとか、そんな思いを忘れ、走り叫んでいた

しかし、これだけ捜しても見付からないなんて……ま、まさか神隠しに！

「雪葉～！！」

「お兄さん」

「え？」

穏やかな声で呼ばれ、そちらを向くと、微笑む風子の姿があった

「見付けたよ」

「ほ、本当か！　よ、良かった」

カクンと膝の力が抜けた

「うん。向こうだよ、行こう」

風子に連れられ、しばらく歩く。そして着いた場所は、展望塔の裏に広がる林の中だった

「この奥だね」

「そうか」

この中は随分捜したんだけどな……

「あそこだよ」

指差す方を見ると、既に子供達が集まっていて、俺の姿を見付けた美月が手を振った

「兄ちゃん～、こっち、こっち～」

「ああ」

雪葉は何処……に？

子供達の中心には、大きなダンボールに包まって横になっていらっしゃるお方が……

「こ、こちらはホームがレストな方のご寝室では？」

刺激しない様、さっき避けた場所だ

「良いから、こっちから覗いてみなさいよ」

「う……で、では失礼します」

恐る恐る花梨が居る方から覗き見ると……

「ゆ、雪葉!?」

雪葉っぽい頭が見えた!

「んぅ……すーすー」

「……もしかして、寝てるか?」

「みたいね。全く、心配させて」

花梨は、まるで世話の焼ける妹か何かを見ている様な表情で優しく呟いた

「たく、本当だぜ」

「ん……」

ダンボールを避かし、雪葉を抱き起こしてみるが、全く目を醒ましやがらない

「仕方ないな……よっと」

しゃがみ込んで、雪葉をおんぶする

「……じゃ、引き上げるか。ごめんな、みんな。んで、ありがとう。帰りジュースでも飲もう、奢るよ」

「奢り!?　やったぁ!　あっ!　な、なんて喜ぶと思ったら大間違いよ!」

「やった！　私、コーラが良い！！」

「僕はコーヒーをお願いしようかな」

「わ、私は……お水」

「うむ、うむ。花梨は？」

「……ココア」

今日のスネーク

雪＞＞＞＞＞風＞月≧鳥＞＞＞＞花

続こ

第11話：秋の夕暮れ

「ただいま～」

学校が終わり、俺は家へと帰って来た

「誰も居ないのかな？」

家の中は静まり返っていて返事が無い

まぁ静かな家もたまには良いか

俺はキッチンへ行き、冷蔵庫から牛乳を取り出してリビングのソファーへ座った

「牛乳、牛乳、牛乳だーとくりゃ」

パックに口をつけ一息に！

「……おかえり」

「ブホォ！！」

「……大丈夫？」

秋姉はキッチンから雑巾を持って来て床を拭く

「あ、秋姉！　一体どこから！？」

「？　……ん」

秋姉はベランダを指差した

「あ、べ、ベランダに居たんだ」

我が姉ながら気配が無い人だ

俺が戸惑っている間に秋姉は、牛乳の飛び散った床やテーブルを拭き、そのまま洗面所へ雑巾を洗いに行こうとする

「あ、ごめん、秋姉。後は俺がやるよ。ありがとう」

「ん」

俺は秋姉から雑巾を受け取り、洗いに行った

「さて、洗い終った、と」

リビングへ戻ると秋姉の姿は無く、俺はベランダと出てみる

ベランダでは、三人掛けのベンチに座った秋姉が、ボンヤリと庭を見ていた

「横座ってもいい？」

「ん」

秋姉の横に座ると、秋姉が何を見ていたのか分かる

「ウグイスかい？」

「……うん」

秋姉は静かに頷く

秋姉の側はいつも静かで穏やかだ。余計な言葉はいらない

俺も同じ様に、ボンヤリとウグイスを見ていた

……

…あれ？

いつの間に寝てしまったのか、目を開けると空は夕暮れ時になっており、俺の頭は横になっていた

体にはカーディガンがかけられている

「……おきた？」

「……え？　あ……」

体と顔を仰向けにすると、上から覗き込む秋姉の顔

頭の下には柔らかい枕って

「ご、ごめん秋姉」

「……気にしないで」

秋姉は俺の頭を優しく撫でる

「……なんか懐かしいな」

昔、風邪を引いた時もこうして秋姉は頭を撫でてくれたものだ

「……変わらない」

「え？」

「……甘えっ子」

「……敵わないな、秋姉には」

俺は起き上がり、伸びをする

「カーディガン、ありがとう。寒く無かった」

秋姉は首を振り、微笑んだ

「ただいま～」

「お、母ちゃん帰ってきたな」

「ただいま！」

「帰ったわよ」

「しゃー腹減ったー！」

次々と帰ってくる家族達

「……あ」

秋姉が指差す

「うん？　あ」

指に釣られて見たその場所には、先程のウグイスの横に、いつ来たのか別のウグイスが並び、頭を重ね預けていた

「……入ろ？」

「ああ」

俺達は、リビングへと戻る

「……ね」

「ん？」

「たべたいものある？」

「え！？」

「……作る」

「……はい」

今日の正露丸

俺＞＞＞＞＞＞＞＞夏＞＞＞＞雪＞＞＞父＞春≧母≧秋

つづく。と思う

第１２話：月の特訓

ピンポーン

家の中にチャイムが響く

リビングでお茶を飲んでいた俺は、玄関へと急いだ

「は～い」

ドアを開けると、美月の姿

「こんちはーっす」

「おー、美月。遊びに来たのか？」

「うん！」

「あ～でも雪葉居るかな？　あいつ今日、友達と図書館に行くとか言ってたから」

「知ってるよ。誘われたけどあたし、図書館嫌いだから」

「そうなのか？　じゃあ何しに？」

「兄ちゃんと遊びに来たんだよ！　兄ちゃん、ワールドサッカー野郎持ってるんだろ？　あれ、あたしも超欲しいんだけど、ＰＬ３じゃん？　高くて買えないって」

美月は両腕を上下に数回振って、悔しさを表す

ＰＬ３。どこぞの学園みたいな名前だが、れっきとしたゲーム機だ

このゲーム機は値段がとても高く、４万もする

「良いぜ。遊んでいけ」

「やった～」

そして始まった美月のゲームプレイ

美月はこのシリーズに慣れているのか、それなりに鋭い操作をする

だが甘い！

「美月、右サイドがお留守だぞ！！」

「わ、分かってるよ！　えい！！」

「美月、センタリングの取り方が甘い！」

「分かってるって！」

俺の熱血指導（ウザい）のお陰で、美月は大分上手くなって来た

「美月よ、あの厳しい修業の日々。よく耐えたな」

「はい、師匠！」

「だがな、世界は広い。上には上がいる。そうお前の前にも！！」

「そ、それは！？」

「この俺だ！！」

そして俺と試合をする

２０分後

「勝った～！」

はい、負けました

「よ、よくぞ私を越えた。お前にもう私が教える事は無い」

「し、師匠……」

「強く……強く生きるのだぞ……ガク」

「師匠？　師匠！？　し、師匠～！！」

コンコン、ガチャリ

「おやつよ～」

「わーい！！」

「ぐぇ」

美月は俺の腹を踏ん付けてリビングへと向かって行った

おやつはケーキだった

「なあなあ師匠」

美月はショートケーキをほうばりながら、俺に尋ねる

「なんだ？」

「百人一首って知ってる？」

「百人一首？　あんまり知らないな」

「そっかぁ」

美月は残念そうに呟く

「何かあるのか？」

「うん。今度クラスで百人一首大会やるんだけど、その日の給食賭けてるんだ」

「給食？　んなもんどうでもいいじゃねーか」

「良いわけ無いじゃん！　その日は揚げパン、カレー、ヨーグルトの神のフルコースだよ？　どれ一つ外す事が出来ない完成され

たフルコースだよ!?」

「そ、そうか、すまない」

百人一首か。秋姉なら詳しいと思うが、正直秋姉はあまり人に教えるのは向いていない

後、詳しそうなのはアレしか居ないが……

「……母ちゃん、今日夏紀姉ちゃんいる?」

俺はキッチンにいる母ちゃんへ声を掛けた

「う〜ん。寝てると思うわよ〜」

休みの日となると、本当にアレは寝てばかりだな……

「夏紀姉ちゃん?」

美月がクリクリとした目で俺を見上げた

こんな純粋な子をアレと会わせても良いのだろうか?

「いやいや、駄目だ」

「うん?」

「この家にはな、夏紀姉ちゃんって言う貧乏神に近い存在が居て、それと会っただけで金は落とすし、遅刻はするし、バナナには滑るし……わっ!?」

なんだ？　急に視界が！！

「だ～れだ」

……

俺の額から汗が流れる

「ア、アンジェリーナ・ジョリーですか？」

「貧乏神よ？　うふふふ」

「あ、あはははは……すみません」

「……ま、子供がいる前だから許してあげるけど、次は無いわよ」

「は、はい！」

ようやく視界が解放された

「こんちは、姉ちゃん」

「こんにちは。雪葉のお友達？」

「うん。姉ちゃんは？」

「雪葉のお姉ちゃんよ。こいつの姉でもあるけど」

ポカッと俺の頭を叩く

「あ！　師匠を叩くな！」

美月は夏紀姉ちゃんの前に立ち、俺を庇う

……ええ子や

「え、師匠？　これが？」

「そうだよ！　百人一首教えて貰うんだ！！」

「え？」

「え？」

俺と夏紀姉ちゃんの声が重なる

「……あんた、こんないたいけな子を騙して良心痛まないの？」

俺の（怒）メーター３アップ

「別に騙して無いって。俺だって本を読みながらなら教えられるって」

「無理無理。あんたは百人一首じゃなくて、百鬼夜行でも読んで妖怪の名前でも覚えてなさい」

俺の（怒）メーター５アップ

「そうね。珍しく時間空いてるし、ちょっと教えてあげるわ」

「空いて無い時間の方が少ない無い癖に……」

「何か言った？」

俺の小声に夏紀姉ちゃんは即座に反応する。地獄耳め

「な、何でもないよ！　それより早く教えてやれよ」

俺と夏紀姉ちゃんが話している間、美月は退屈そうに足をぶらぶらさせていた

「あ、ごめんなさい。ちょっと百人一首取って来るわね」

「持ってるんだ……」

そして夏紀姉ちゃんはいそいそと、自分の部屋へ戻って行った

月の特訓　2

数分後、夏紀姉ちゃんは戻って来て、リビングのテーブルには百人一首が並んだ

俺と美月は一緒のソファーに座り、前に立つ夏紀姉ちゃんを見上げる

「さて、それじゃ百人一首を教えるわね」

「お願いしまーす！」

「先ずは百人一首の基本的な事から。百人一首は鎌倉時代、藤原定家が１００人の歌人の歌を年代順に集めた物が原形で……」

「……なあ兄ちゃん」

美月は俺に体を預けてくる

「これ、聞いて無いと駄目？」

「……いや、寝とけ」

「うん……」

美月は、そのまま目を閉じた

「5、7、5、7、7で構成されるその和歌は……」

……俺も寝たい

15分後

「秋の田の　かりほの庵の　苫をあらみ　我が衣手は　露にぬれつつ」

「美月、起きろ」

「ん、うんん？　……あ、兄ちゃん。おはよぉ」

美月は目を擦り、ぼーっとしている

「そろそろだぞ」

「うん？」

「基本的には全部の句を覚えるのが1番手っ取り早いし、良いのだけど最低上の句と出だし2文字と、下の句最初1文字を覚えておけば何とかなるわ」

「2文字？」

「そう。例外はあるけど、殆どの句は最初2文字で判断出来るわ」

「へ～」

美月が感心した声を上げる

「でもね、2文字だけ覚えようとしても、中々上手く行かない。そ

こで語呂合わせなのよ」

「語呂合わせ？」

「そう。例えばさっきの天知天皇の歌。秋の田の　かりほの庵の
苫をあらみ　我が衣手は　露にぬれつつ」

夏紀姉ちゃんは、よく響く声で読み上げる

「これを、飽きた我が衣って覚えるのよ。同じ服ばかり着ていたのね」

「普段の夏紀姉ちゃんと同うげ！？」

夏紀姉ちゃんは俺に百人一首の箱を投げて来やがった

俺の（怒）メーター7アップ

「あ！　師匠になにするんだ！！」

美月は俺の前で両手を広げて立ち、夏紀姉ちゃんへ向かってウゥ～
と、威嚇をする

……ええ子や

「いいのよ。本当は、お姉ちゃんに構って貰えて喜んでるのだから」

「なっ！？」

「そうなの？　兄ちゃん」

「ち、違っ」

「ほんと、いつまでもガキなのよね～。ほらほら～お姉ちゃんでちゅよ～」

俺の（怒）メーター８アップ！

「さて、それじゃ続きね」

それから一時間。俺達は夏紀姉ちゃんの話を聞き、いよいよ実践する事となった

「いい？　上の句しか読まないから、あんた達は手元にある和歌シートを見ながらならべく早く取るのよ」

シートは夏紀姉ちゃんのお手製だ。
あいうえお順に全和歌が書いてある

昔、これを使って覚えたのかな？

「じゃ、行くわよ。花の色は　うつりに」

「はい！」

美月が一枚の札を取る

「どれどれ……うん、合ってる。花の色は　うつりにけりな　いた

ずらに　我が身よりふる　ながめせしまに……小野小町。歳を取る女の悲しさを歌った歌よ」

「へ～」

「これはそうね……花の色は我が身より超きれい！　あんたと同じで自分の容姿に自信が無いのね」

俺の（怒）メーター１０アップ！！

「夏紀姉ちゃん！！」

「何？　やる気？」

夏紀姉ちゃんは指をポキポキ鳴らす

「……秋姉～！　夏紀姉ちゃんが俺を～」

「な！？　ち、ちょ！？　や、やめ、ご、ごめん！　ごめんなさいって！！」

「……ふふん。これに懲りたら少しは自分の立場を弁えるんだな」

「ぐっ、このガキ……」

「秋姉～～～～」

「すみません、調子乗っていました。もうしません」

勝った！

「秋なら部活行ってるわよ～」

洗濯物を両手に抱えた母ちゃんが余計な事を言う

「……うふふ」

「あ、あはは」

夏紀姉ちゃんは俺に内股を掛け、倒れた俺の上でマウントポジションを取った

「ひ、ひぃい」

「うふふふふふ」

「兄ちゃん達、楽しそうだなぁ……」

「た、楽しくねぇ！！」

ガチャリ

その時、リビングのドアが開く

そこから現れたのは！！

「……ただいま」

竹刀を背負った秋姉ちゃんは、いぶかしげに俺達を見下ろしている

「ア、アキ！　　……お、お帰り～」

「あ、秋ね、うぐ！？」

夏紀姉ちゃんに口を押さえられる

「フガフゴ！？」

「き、今日のクイズであんたの好きな食べ物取ってあげる」

俺の耳元に口を寄せ、夏紀姉ちゃんはコッソリと呟いた

「……フガ？」

「一食よ」

「……フゴ！」

「三食～！？　ふざけてるの？　あんた」

「フ～ガ？」

「くっ！　分かったわよ！二食とおやつ一つ！」

俺はこっくり頷いた

月の特訓　3

「それで、かくかくしかじかなんだ」

秋姉に百人一首の練習をしている事を説明し、参加をお願いする

「えーと秋ちゃん？　一緒にやろうよ！」

美月は秋姉の手を取りソファーへと引っ張った

「……あき……ちゃん」

「ほら、あたしの横に座って！」

「……ん」

どうやらお互い気に入ったようだ

「アキは無愛想なわりには子供に好かれるのよね。さて、それじゃ続きしましょうか」

その後も暫くやったが、美月が意外と早い！

気付いた時には俺が2枚、秋姉が0枚、美月は13枚となっていた

「……すごいね」

秋姉は美月の頭を撫でる

「へへ～」

秋姉、百人一首とか苦手なのかな

「アキ、あんた本気でやってる？」

「……」

「秋ちゃん、本気でやって無いの！？　駄目だよ、本気でやらなくちゃ！！」

「……うん」

秋姉は夏紀姉ちゃんを、余計な事言いやがってコノヤロウって目で見た後、頷いた

「それじゃ行くわよ～。せ」

パシン

「……うら」

パシン

「……さ」

パシン

「……」

夏紀姉ちゃんが俺を困った様な顔で見る

「……」

俺も同じ様に困った顔をして、首を横に振った

「……すげー、超すっげー！！」

美月は秋姉ちゃんをキラキラした目で見る

「秋ちゃん、超、超、ちょ～すっげーや！　師匠って呼んでいい？」

「……ん」

秋姉ちゃんは頷いた

「やった～新師匠！！」

「み、美月～」

「何、兄ちゃん？」

あれ、師匠降板？

「師匠、もっと百人一首教えて」

「ん……これ……むすめふさほせ……これ……取り札……」

その後、秋姉ちゃんは不器用ながらコツや、取り方等を説明し、夏

紀姉ちゃんが横からフォローする

俺はすっかり、かやの外

「……母ちゃん、手伝う事ある？」

「無いわよ～」

「そう……」

そして夕方。

「じゃー帰るね！」

「また来なさいよ」

「うん！　なっちゃんも、師匠もありがと！！」

「……ん」

いつの間にか夏紀姉ちゃんもあだ名ですか？　へ、仲の良い事で

「兄ちゃん」

美月はいじけている俺の側に来て、俺を見上げニッコリと笑う

「え？」

「また遊ぼーね！」

……ええ子や

「あ、ああ！　またな美月！！」

「バイバーイ」

家の外まで出て行って、三人で美月を見送る

「本当、良い子よね」

「ああ……ところで美月は強くなったのか？」

「……無双」

「……の、飲み込み早くてね～。まさか小学生が遊びでやる大会だとは思わなかったから」

その後、雪葉に百人一首の結果を聞くと、美月はクラス全員分の給食を手に入れたそうな……ちゃんとみんなに返したらしいけど

今日の師匠

秋＞＞＞俺＞夏＞母＞月＞父

つづきまっせ

第13話：母のジャパネット

「ただいま〜」

今日は半ドン。俺はお昼で終った学校から家へ直行直帰した

さ〜て、昼食べて着替えてゲーセンだ！

〔ジャパ〜ネット、ジャパネット〕

「ん？」

リビングへと入る時、ネット通販でお馴染みの、あの音楽が聴こえてきた

「おかえりなさ〜い」

リビングのソファーは、テレビを見ている母ちゃん

「お昼はピザよ〜」

キッチンのテーブルには焼く前のピザ。母ちゃんはソファーから立ち上がろうとしている

「いいよ、焼くだけだからテレビ見てろよ」

「そお？　ありがと〜」

ピザをオーブンに入れて、5分ぐらいにしておく

〔さあ始まりました、ジャパネットタ◯タ。今日ご紹介するモンスター商品はこれだ！　出てこいや！！〕

相変わらず、派手な番組だ

〔ちゃららちゃん。桐たんす～〕

「あら～」

母ちゃんはメモ用紙を取り出した

〔この桐たんす、ただの桐んすじゃございません。お金取ります！　なんちゃってハッハッハ〕

「うふふ」

「あれ、今の面白いの？」

チーン

お、焼き上がった

俺は焼き上がったピザを手に、ソファーへと行く

〔さぁこの本場中国製の桐たんす！〕

「桐たんすの本場って中国だっけ？」

「新潟よ～」

〔今なら、一個買うと七個ついて来る！〕

「明らかに在庫処分じゃない？」

〔ナウなヤングにベラマッチョ！！〕

「いつの時代の若者だよ」

「あら～去年ぐらいじゃ無かったかしら～？」

「……」

〔そして気になるお値段は～〕

ドラムが鳴り響く

〔ポッキリ一兆円！！〕

「くだらねー。駄菓子屋の婆さんジョークかよ」

「そんなにお金無いわ～」

母ちゃんはガッカリと肩を落とす

……幾らまで出す気だったんだろ？

〔なんちゃって～！　実は一万円だよ～ん〕

く～イライラするー

「あら～お母さん騙されちゃった～」

「そ、そう……」

〔さあ、いよいよ電話受付の時間だぞ！　今すぐ受話器を手に取るんだ！！〕

「は～い」

「ああ、購入はもう決定なのね……」

母ちゃんはジャパネットへ電話をした

〔さあ次は巷で話題のヘアアイロンだ！　メモの用意をしろ！！〕

「あら～」

母ちゃんはメモ用紙を取り出す

「ああ、それも買うつもりなんだ……」

今日のタ〇タ

タ＞＞＞＞＞母≧俺≧父

つづくぜぃ

第１４話：父のアマゾン

その男は深い森の中を走っていた

体の至る所は木々の枝で擦り血が滲み、息も荒い

それでも男は走り続けていた

なぜなら

「カンホマ、ダンホマ、アマリリス！！」

「エルタモ、マルタモ、カリフォルーニア！！」

追われているからだ！！

男の名は佐藤。冒険家である

彼はほんの数ヶ月前迄、普通のサラリーマンをやっていた

だが、突然のリストラ

彼は悩み、リストラされた事を家族にも言えず、毎日図書館へ行ったり、妻の作った弁当を公園で食べたりしていた

そんな事をしていたある日彼に運命の日が訪れる

その日もいつもと同じ様に弁当を広げ、食べていると彼の側に一人のホームレスがやって来た

そのホームレスは酷くやせ細っていて今にも死にそうな顔色をしていた

優し過ぎるほど優しい彼は妻のお弁当はやれないと、自分の財布から僅かなお金を取り出し、ホームレスへと渡した

ホームレスは涙を流し、ある地図を渡す

『アマゾンの秘宝』

ホームレスの名は田中

若かりし頃、７つの海をまたに掛けた大冒険家だった

田中は冒険で天文学的な財産と地位を築いたが、彼の最後となった冒険で深い傷を負ってしまい、入院している間、親族や友人達に騙されその財産を取られたと言う

『その地図はわしの傷が癒えたら、行こうと思っていた物じゃ』

だが、体の傷と、心の傷が彼に再び立ち上がる力を与えてはくれなかった

『この地図をあなたに譲ろう。売れば幾らかにはなるじゃろう』

それで宜しいのですか、と聞く彼に田中は微笑む

『わしの夢は終ったのじゃ後は次の世代に任せよう』

彼は迷った。自分はどうすればいいのか

彼は考えた。愛する家族達を幸せにする為に自分が出来る事を

そして彼は悩みに悩み、田中にある事を聞いた

『秘宝の価値？　まぁざっと数百億と言う所かのぉ』

翌日、彼は自分の生命保険の額を上げ、アマゾンへのチケットを購入した

「ウタマーロ、ウタマーロカツラウタマーロ！」

「サカタ、サカタ、アホーノサカタ、フガフガ！！」

逃げる佐藤を追うのは秘宝の番人達

顔に様々なペイントをした屈強な男達だ

「エイヤー」

槍が幾つも飛んでくる

佐藤はその槍をかわし、川へと飛び込む

川の流れは強く、佐藤は流されていった

「アイツバカダーコノカワアブナイシヌシヌ」

番人の言う通り川にはごつごつした石が沢山あり、一つでも当たれば死ぬ可能性すらある

佐藤はそんな川に流されながら思う

愛する家族達の事を

愛する妻、愛する娘達、そして愛する息子……

「父さんは、父さんは！　頑張るー！！」

深い森の中、佐藤の声が響き渡った

今日のアマゾン

父

つづく。かな

第１５話：花のお買い物

夕方。学校から帰宅する途中、俺の携帯にメールが入った。母ちゃんからだ

「今日の夕食はすき焼きです。先程ひとよんふたまる時に材料を買いにスーパーへ出掛けましたところ、迂闊にも卵の購入を失念してしまいました。帰宅時にご購入お願い致します。かしこ」

相変わらずキャラに似合わないメールを書く人だ

少し面倒だが、卵の無いすき焼きは寂しいので、俺はスーパーへと向かう事にした

夕暮れ時のスーパー

タイムサービスの時間だからか、なかなかに混んでいる

俺は卵を購入し、ちょっとスーパー内をうろついた

「さあ、続いてのタイムサービスはサンマ！　サンマが１０円！
お一人様三尾まで！！」

あっという間に一斉に集まるおばさん達。凄いパワーだ

そんなおばさん達を唖然としながら見ていると、この場の雰囲気とはちょっと似合わない女の子が、必死におばさん達の中へ混ざろう

としていた

軽くカールかかった栗色の腰まで届く長い髪に、ひらひらとした服

そんなお嬢様風の子に、おばさんパワーと対抗する術は無く、おばさん達の後ろでもがくだけだ

しかし女の子は諦めていない

「ふっ良い根性だぜ！」

俺は女の子の逆サイドからおばさん達へ突っ込み、おばさん達のラリアットや肘打ちに耐え、サンマを一尾づつ確実に取っていく

そしてワゴンに残った最後の一尾！　俺が頂く！！

俺達は最後の一尾を取ろうと、オームの子に群がる大人達の様に腕を伸ばした

「ダメー！！」

「ナウ○カ！？」

「これは花梨が買うの！！」

そう言って最後の一尾をお嬢様風の女の子が手に取る

だが強く握ったのだろう、ぐちゃりと言う音が静かになった店内で響いた

「あ……」

おばさん達が次のセールへと向かっていく中、女の子と俺だけが残されていった

女の子は肩を落とし、潰れたサンマを袋づめしている

「……なぁお嬢さん。このサンマを貰ってはくれないか？　間違えて買ってしまったよ」

俺は女の子の横に立ち、袋に入ったサンマを差し出す

「！！　ほんと！？　ありがと……う？」

「なーに、サンマも君に買われた方……が？」

「……」

「……」

「な、なんであんたがあんたであんたのあんたに！？」

「お前がサンマでサンマのサンマがまんま！？」

お嬢様は花梨だった

俺達は暫し驚きあう

「……どこかで見た事ある奴だと思ったら。何してるんだお前？」

一段落した後、俺は花梨に聞いてみた

「あ、あんたこそ、こんな所で何してるのよ」

「買い物だよ、買い物。お前こそなんだよ」

「わ、私は……買い物よ。て言うか見て分かるでしょ！　バカじゃないの！！」

バカって……

「そっか、偉いな」

「〜〜〜っ！　ば、バカじゃないの！？」

バカって……

「……ほらサンマ」

「い、いらない！」

「そう言うなよ、お前の為に取ったんだから」

「なぁっ！？　え……えと……バカじゃないの！！」

バカって……

「受けとってくれ無いのなら、ワゴンに戻すしかないんだけど、一度袋詰めした物だから店に迷惑かもな」

「……ん！」

花梨はそっぽを向いて俺へ手を突き出す

「うん？」

「ん！！」

「あ、ああ、はい」

花梨の手にサンマの袋を持たせると、花梨はそそくさと逃げて行った

「しかし妙な所で会ったものだ」

卵を買い、スーパーを出て一人呟く

まあでも同じ近所に住んでいる訳だし、こういう事もあるか

一人で納得しつつ、俺は家へと向かって歩き出す

……

「だからこれ以上まけられ無いってば、お嬢ちゃん」

「ん？」

数分歩き、家の近くにある八百屋の側を歩くと、そこの店主が困っ

た声を出していた

ちょっと気になり、離れた所から様子を見てみる

「でもほら良く見てみなさい。このキャベツは此処と此処が虫食ってるし、人参には傷が幾つもあるわ。キュウリはひん曲がって細いし……こっちのと比べて品が悪すぎるじゃない！」

「だからさ～、見切り品なんだよ」

「見切り品？　これで良く品なんてて言えるわね？　これなんてもう萎びてきてるじゃない。スーパーだったらごみ箱行きよ？」

「たは～参ったなぁ……ええぃ！　分かった、分かった！！全部で３０円で良いよ！」

「あはっ！　ありがとう、大将」

「この笑顔に負けるんだよな～」

店主は苦笑いし、野菜を値段交渉していた女の子に手渡す

その女の子は機嫌良さそうに鼻歌を歌いつつ振り返った

「ふんふ～ん、らら～……あっ！」

「……よ、よう」

「な、な、な、な、な」

「な？」

ナタリー・ポートマン？

「何をしているのよ、あんた！」

「家に帰る所だけど……買い物か？」

「そうよ！　見て分から無い！？　ほんっっっとバカじゃないの！！」

……あれ？　なんだか泣きたくなってきた

「そ、そうか。ご苦労様」

「べ、別にあんたの為に買った訳じゃないから！」

「そりゃそうだろ」

「ふん！」

花梨は俺を睨みつけ、去っていった

「……それにしても」

俺ってバカなのかな……

今日のテンション

花＞＞父＞八百屋＞＞＞＞＞＞俺

つづきます

第１６話：夏の一日

ＡＭ　００：２５　帰宅

「今、帰ったぞ～」

玄関から夏紀姉ちゃんの声がした。この声からしてベロンベロンに酔っ払ってる様だ

「なんだよ～誰もいないのかよ～さみしいじゃないかよ～」

……うるせー

仕方ないので俺は玄関へ行く事にした

「うるさいぞ、夏紀姉ちゃん。夜中なんだから静かにしろよ」

夏紀姉ちゃんは玄関で座り込んでいる

「たく、下着見えるぞ」

「あ～こいつスケベ！　あひゃひゃはは。このシスコン野郎め！」

殴りたい

「いいからほら、部屋行くぞ部屋」

「へや？　部屋ヤダー此処で寝るんだい！！」

「馬鹿、風邪引くって」

「ヤダヤダー！　此処で寝る～」

こうしていてもラチがあかない。俺は夏紀姉ちゃんを横抱きで担ぎ、部屋へ連れて行く事にしたが……

「重っ！？」

めちゃくちゃ重っ！！

「重くない～！　えい！」

夏紀姉ちゃんは俺の首に腕を巻き付け、体重をかけてくる

「ぐ、な、なにを……」

「イジワル言う弟なんか嫌い！」

「ぐぇ！」

俺は膝を落とし、夏紀姉ちゃんを離そうとしたが、夏紀姉ちゃんは俺にしがみついて離れない

「し、死ぬ、俺死ぬ！」

「大丈夫よ～」

「うげぇ」

苦しさから仰向けに倒れた俺に、夏紀姉ちゃんは直ぐに反応し即座にマウントポジションを取った

「あんたはグレイシー一族かよ！」

「あんた、昔姉ちゃんの事が大好きだったわよね～。お姉ちゃん、お姉ちゃんってそれこそウザいぐらいにさ。でも今はアキにばっか頼るのよね～」

「そ、そんな事は無いですよ？　夏紀お姉様」

「お姉ちゃん、ちょっとさみしいな～。……だからぁ」

夏紀姉ちゃんは俺に顔を寄せて来る。こ、このパターンは！

「今日はこのまま寝る！」

夏紀姉ちゃんは俺を下敷きにしたまま目を閉じた

「じ、冗談じゃないよ！　俺まで風邪引くよ！！」

逃げようともがいても、相変わらずガッチリと固めれていて、脱出出来ない！

「た、助けて……」

ＡＭ　０６：０８　起床

うぅ～。うぅ寒いよぅ、重いよぅ……

「……ん、うぅん……う？……なっ！？」

「うぅ、うぅ助けて、助けて」

「な、何をしてるのよ！」

「……ん？　はっ！？」

朝か！　体が痛い！！

「……ついに此処まで落ちぶれるなんてね。姉ちゃん流石にショックだわ」

「はい？」

「姉の寝床に夜ばいするなんて……もうあたしの手に負えない。……明日、精神科の病院へ行こう？　大丈夫よ、シスコンは病気じゃない。ちょっと心が迷っているだけだから」

「ふざけるな！！」

ＡＭ　０７：３５　朝食

朝食はソーセージとベーコン、それと目玉焼きにみそ汁、ご飯だ

「いや～今朝は驚いたわ」

テーブルを挟んで俺の正面に座っている夏紀姉ちゃんが苦笑い混じりに言う

「……けっ！」

もう二度玄関へ出迎えてやるものか！

「ほら、拗ねない。男らしく無いわよ」

そう言って夏紀姉ちゃんは俺にソーセージを一本くれた

「お～ありがとう！」

まぁ、許してやるか

「あ、雪葉、醤油取ってくれるか？」

夏紀姉ちゃんの左隣に座っている雪葉の側にある醤油

俺からはちょっと遠い

「うん、おにーちゃん。はい、おしょーゆ」

「サンキュー」

「えへー」

相変わらず雪葉はいい子だ

「……雪、ソース取って貰っていい？」

「はい」

「ありがとう、雪」

「うん」

「……え？」

夏紀姉ちゃんは首を傾げながらソースをかけている

どうしたんだろ？

「……うわ！」

夏紀姉ちゃんを見ていたらみそ汁を零してしまった！

「あちゃー」

「……ん」

ふきんを探していたら、隣に座っている秋姉が立ち上がり、テーブルや床を拭いてくれた

「い、いいよ、自分でやるよ」

「……大丈夫」

「あ、ありがとう」

秋姉はいい人だ

「……きゃ！」

「ん？」

夏紀姉ちゃん？

「牛乳零しちゃった！」

「……はい」

秋姉は夏紀姉ちゃんにふきんを渡し、椅子に座り直す

「……あれ？」

夏紀姉ちゃんは首を傾げながら拭いている

どうしたんだろ

「兄貴、スキあり！！」

「おっと、どっこいカウンター」

テーブルの上座に座っている春菜が、俺のソーセージを狙って来たが、皿をかわし逆にベーコンを頂く

「あ～ちくしょ～」

「……春菜、スキありよ！」

突然、夏紀姉ちゃんが春菜のソーセージを盗む

「え？……ああ、うん……足りなかったのか？」

「……あれぇ？？」

夏紀姉ちゃんは首を傾げながらソーセージを食べた

「なんだよ、さっきから」

俺は夏紀姉ちゃんに聞いてみる

「いやその、ちょっと態度が違うような……よそよそしいって言うか……」

「それはね～」

キッチンにいた母ちゃんが夏紀姉ちゃんの後ろに立つ

「あなたが、朝、滅多にみんなとご飯食べないからでしょう？」

母ちゃんの細目が光った！

「ご、ごめんなさい。もっと早く起きる努力します……」

ＡＭ　０７：５５

「じゃ、行ってきます」

夏紀姉ちゃんは車に乗って、大学へと行った

「夏紀姉ちゃんも、たまには早く行くんだな」

「夏姉、単位がヤバいらしいぜ」

「よくあれでいい点取れるよな」

夏紀姉ちゃんは大学でもトップレベルの成績を取ってくる

大学では七不思議の一つに数えられているらしい

「兄貴も頑張れよ」

「お前、人の事、言えないだろ……」

夏の一日　2

ＰＭ　１７：５５　帰宅

「ただいま～」

部屋で詰み将棋をやっていると、玄関から夏紀姉ちゃんの声がした。
今日は早いな

「ま、いつもアホみたいに遊び歩いてるからな～」

いくら夏紀姉ちゃんでも疲れてんだろう

「こら～！！」

「ひぃい！？」

突然俺の部屋のドアが開き現れた夏紀姉ちゃん

ロンＴに短パンと、いつもながらエロい格好してやがる

「どーよこれ！」

そういって見せて来るのは深緑色のシフォンワンピースだ

「はぁ、良いんじゃないでしょうか」

どうでも

「おーし、今日はこれだー！」

夏紀姉ちゃんは、バタンと力強くドアを閉め、何処かへ行った

「訳が分からねぇ……」

ＰＭ　１８：３４　外出

「行って来ま～す」

夏紀姉ちゃんの声だ。元気な人やな～

「お兄ちゃん～、ご飯だよ～」

「あいよ～」

飯だ、飯だ～！

ＡＭ　００：２２　帰宅

「今、帰ったぞ～」

「……駄目な人間だなぁ」

俺はため息を付きつつ、玄関へと向かう

「お～シスコン野郎か～　やっぱり姉ちゃんが好きなのね～」

夏紀姉ちゃんはフラフラと俺に近付きよろける

「おいおい」

夏紀姉ちゃんを抱き支えてやると、夏紀姉ちゃんはそのままスースと寝息をたてて眠ってしまった

「……本当、駄目な人だなぁ」

「ん～……ちゃん……うぃ～」

夏紀姉ちゃんは俺を昔の頃の呼び方で呟く

「全く……どんな夢、見てんだか」

マウントポジションか？

……つーか

「重い」

2階迄は無理だなこりゃ

ＡＭ　０６：０２　起床

「な！？　あ、あのガキぃぃ！！」

「……ん？」

リビングのソファーで寝ていると、夏紀姉ちゃんの怒鳴り声が聞こえた

続いてドタバタと廊下や階段を駆ける音

「なんだ、なんだ?」

「あら～起きたの～」

「ああ、母ちゃん……何かうるさくない?」

「そうかしら～」

バタン！

リビングのドアが開く

そこには下着姿の夏紀姉ちゃんだ

「夏紀姉ちゃん、なんちゅーはしたない格好を……」

「あ、姉を部屋に連れ込み服を脱がして、あ、あまつさえ隠すなんて……こ、この変態が！！」

……その後ですか？　蹴りがきましたよ。ええ、本気のハイキックでしたね首からポキっと可愛い音がなりました

服ですか？　僕の部屋のベットの下から出て来ましたよ。ええ、自分で脱いだんじゃ無いですか？

姉ですか？　事情をしった母ともう一人の姉に大層搾られましたよ

僕ですか？

「病院だよ！！」

今日の被害者

俺＞＞＞＞＞＞父＞春≧秋≧冬≧母＞＞夏

つづけ

第17話：春のお見舞い

此処は近所の病院。俺は先日から入院している

症状はムチウチ。素敵な名前だ

幸い軽い物で、入院する必要までは無かったが、母が念のためにと知り合いだった病院の院長にお願いして5日間の入院となったのだ

さて、入院。部屋も沢山空いていたので、個室と相成った訳だが……

「あはははは！！」

「……」

「くは～ひゃはははは！！」

「……」

「うひゃうひゃひゃ！！」

「やかましい！！」

春菜が毎日病院にやってくる。何の嫌がらせだコノヤロウ

「なんだよ！　わざわざ見舞いに来てやってん……ひゃはははは！！」

春菜は夏紀姉ちゃんが毎日貢ぎ……もとい買って来てくれた果物や

プリンをバカ食いしながら、これまた夏紀姉ちゃんが貢ぎ……買ってきた漫画を読んでいる

「お前なぁ～。お前の場合明らかに見舞いじゃない物が目当てだってんのが見え見えなんだよ」

「違うって！　メロ……兄貴も大切だよ！！」

「も、かよ。しかも小説の主人公が俺より先に出て来たぞ？」

「え？　メロンだよ？　メロン伯爵？」

「分かってるよ！　皮肉だよ！　メロスだよ！」

「あ～メロスね、メロス。ウルト○マンだっけ？」

「お前もう帰れ……」

「なんだよ～せっかく見舞い持って来たのによ～」

「お見舞い？」

たく、我が妹ながら人が悪いな

春菜は持ってきたボストンバッグに手を突っ込み、見舞い品を出す

「ほら、アロエの鉢植え。健康に良いんだぜ～」

「わ～い。しっかり根が張っていて、立派なアロエだね～ってお前マジ帰れ！」

翌日

「うひゃはははは！」

「……」

「ひゃーは！　汚物は消毒だ～」

「お前、それ笑える漫画じゃねーだろ！？」

翌々日

「く～く～く～」

「……」

「う～にか～おか～け」

「何かこぇーよ！？　つーか家に帰って寝ろよ！！」

退院日

「退院おめでとう兄貴！」

「……ああ、ありがとよ」

結局毎日来やがった

「家に兄貴が居ないとさ、やっぱり寂しいよ」

「春菜……」

ふ、何だかんだ言っても可愛い妹か

「さ、早く帰ろうぜ！　兄貴。兄貴のＰＬ３パスワード登録してるからゲーム出来ないんだよ」

「……俺、此処に住む」

今日の切なさ

俺＞＞父＞＞＞＞＞春

つづくか？

第１８話：雪の不機嫌

その日は朝から変だった

「いただきまーす」

「飯だ飯だ～」

「ん……いただきます」

「……」

いつものように母ちゃんと夏紀姉ちゃんを抜いた４人で朝食を食べていると、雪葉の様子がおかしい事に気付く

「どうした、雪葉？　食欲無いのか？」

「……うん」

雪葉は囁く様に呟いて、下を向く

「雪葉……」

「……春お姉ちゃん、雪葉のご飯食べてくれる？」

「へ？　良いけど？」

「ありがとぉ……ごちそうさま……」

雪葉はリビングを出て行く

「どうしたんだろ、雪葉」

「さぁ？　腹でも減ってんじゃないの？」

駄目だコイツ

「……心配」

「そうだな、秋姉」

秋姉はコクンと頷き、朝食の雪葉が出て行ったドアを交互に見る

「秋姉？」

「……食べて？」

「いや、雪葉とは俺が後で話するから秋姉はちゃんと食べなよ」

「……でも」

「ほ、ほら二人とも大人しいし、上手く話せないかも知れないだろ？　此処は歳が近い俺に任せて」

秋姉と雪葉じゃ下手をすると無言大会に成り兼ねない

「……はい」

秋姉はガックリと肩を落としてしまった

「あ、べ、別に秋姉が悪い訳じゃないからな！　ご、ごちそうさま！！」

急いで食べ、俺は気まずいリビングを脱出する

春菜ならどんな空気の中でも、多分大丈夫だろう

「おかわり～」

春菜スゲー！！

春菜をコッソリ尊敬し、俺は雪葉の部屋へと行く

コンコン、コン、ココン

リズミカルなノックだぜ

「……ふぁい」

少し篭った声の後、ドアが開く

「……お兄ひゃん」

ひゃん？

「……入っても良いか、春菜？」

「……うん」

雪葉は俺を部屋に入れ、直ぐにベットで俯せになった
夏紀姉ちゃんならともかく雪葉のこういう態度は珍しい
「……大丈夫か？　雪葉」
「……」
「雪葉。何があったのか分からないけれど、一人で全部を抱えこまなくて良いんだぜ？　例えそれがどんな事でも、兄ちゃん受け入れるから……」
「……」
「言いたくないのか？　……分かった、なら待ってやる。んで、どんな時でも側に居てやる。……だから頑張れよ雪葉。頑張っても駄目な時は、いつでも兄ちゃんに頼ってくれよな」
「……」
「じゃ、また後でな」
「……にぃ……」
「ん？」
「お、おにぃ……ちゃん」
体を起こし、顔を上げた雪葉の顔は涙でぐしゃぐしゃだった

これは大変な悩みを抱えているな……

「雪葉」

俺は雪葉の隣に座り、肩を抱く

細く小さい肩だ。こんな肩にどれだけの悩みを……

「どうした、雪葉？」

「はが……ひっく…はが」

「はが？」

「歯が痛い……」

……歯かよ

「……そ、そうか。大変？　だな」

「起きた時からずっと、ずっと痛くて、ご飯も食べれなくて」

しゃくりあげる雪葉の背中をさすりながら、涙と鼻水を拭いてやる

「だからって、泣き過ぎだぞ雪葉」

「お兄ちゃんのせい！　あつ！？」

雪葉は右の頬を押さえる

「どれ、口開けてみな」

「あ～」

「……右の歯か？」

「あう」

雪葉はコックリと頷く

「下か？」

「うあ」

「上か」

「あう」

「……ふむ。ちょっと穴空いてるかもな」

つーか暗くていまいち分からねー

「口閉じていいぞ」

「うん……」

雪葉は、再び頬を押さえる

「それぐらい痛いって事は結構悪くなってるかもな」

「ええ！？」

「驚くとこか？　今」

「ど、どうしよう、お兄ちゃん～」

「どうしようってお前。歯医者だろ」

「……」

「歯医者だろ」

「……」

「いや、歯医者だろ？」

「あ、お兄ちゃん！　フーフーだよ、フーフー！」

「はい？」

「怪我をした時にやってくれるやつ！」

そう言って雪葉は再び口を大きく開ける

「……お前」

何か色々心配になるじゃないか……

「……おにーひゃん？」

「……いや、歯医者」

「もうっ！　歯医者、歯医者って！　お兄ちゃんは歯医者の回し者なの！？」

「い、いや、お前、歯痛でちょっとおかしくなってきてないか？」

頭とか

「歯医者に行ったからって治るとは限らないでしょ！　雪葉は歯医者なんて信じない！！　人は裏切る生き物なの！　弱肉で強食なんだから！！」

雪葉は再び、ベットで俯せになる。完全にヘソを曲げてしまったようだ

「……お、お前が欲しがってた筆記用具、買ってやろうか？」

ぴくんと雪葉の体が動く

「服も買ってやろうかな」

再びぴくんと動く雪葉。海老みてーだ

「歯、治ったら駅前のカフェでパフェを一緒に食おうぜ」

雪葉はこちらを見て様子を伺っている。仲間にするまで後、一息だ

「す、水族館行こうぜ！　んで、その帰りにファミレスだ！」

「……いく」

「お？」

「……歯医者行く」

「よっしゃ！！」

雪葉が仲間になった

雪の不機嫌　2

さて、そんなこんなで俺達は近めの歯医者へと向かう

手を繋ぎながら歩く小道。一歩、一歩歯医者に近付く毎に雪葉の足どりが重くなっていく

「お、お兄ちゃん」

「ん？」

「ふ、風水的にそっちは駄目だと思う……」

「……こっち南だっけ？」

「そう！　今日の南は良くないってテレビでやってたよ」

「そっか。ま、こっちは東だから大丈夫だな」

「ええ！？」

雪葉は口を開いたまま固まる。雪葉にしては珍しく大きなリアクションだ

「ほら、行くぞ」

固まり続ける雪葉を引きずって、俺は歯医者の前へとたどり着いた

「あ……あぅ」

歯医者の看板を見た雪葉の顔は引き攣っていて、ちょっと可哀相だと思う反面、笑ってしまいそうになる

「大丈夫だよ、雪葉」

「……う、うん」

俺達は歯医者のドアを開けた

カランコロン

「いらっしゃいませ～」

「……」

「……」

「今日は何ですか、歯ですか？　歯ですよね？　てゅーか歯医者ですもんね！」

割と綺麗系の女性なのに、テンションが凄い

「え、ええ。妹が痛がっていまして」

「歯が痛い！？　それは大変です！　何でもっと早く来なかったんですか！！」

「あ、はい、すみません」

良く分からないが、俺が悪いらしい

「ほら、早く保険証出しなさい！　今、客いないから即やれますから！！　やろうよ！！」

「は、はぁ……」

俺が雪葉の保険証を出すと直ぐさま書類に写しはじめる歯科助手

「……雪葉？」

その間、やけに静かな雪葉を見てみると、雪葉はカタカタと震えていた

「大丈夫だよ雪葉」

「で、で、で、でも」

「大丈夫だ、俺がついている」

「あら？　じゃあお兄さんも早く保険証出して！」

歯科助手さんはいきなり俺に詰め寄る

「はい？」

「早く！！」

「は、はい！」

勢いに負けて出してしまう

「……はい、オッケー！　よし行きますよ！！」

そして連れていかれたのは治療室

そこに現れた黒覆面

「ようこそ、我が診療室へ」

「あ、はい。お邪魔しました……さ、さあ帰ろうか雪葉！」

「あ……おあ……お……え？」

雪葉は混乱している

「あれ？　ウケなかった？おかしいなぁ」

そう言って先生？　は黒覆面を取った

「ごめんね、昨日合コンでウケたから……」

黒覆面を取った姿は、童顔の可愛い女性だった。ショートヘアが良く似合っている

「先生、駄目ですよ」

「あ、やっぱり？」

「そこは、ようこそショッカー実験場へ、です！」

「……本当？」

「いえ、嘘です」

「なんや嘘かいな～」

歯科医師さんがツッコミを入れる

「……」

「……」

「……エヘッ」

「さ、帰ろうか雪葉」

雪葉は首が取れそうな勢いで頷いた

「ち、ちょっと待って！　これはその、小意気なジョークでお子様の緊張をほぐそうとしただけで……腕は確かだから！　他より上手いよ～安いし！！　ね、たっちゃん！！」

「はい！　南ちゃん」

「……はっ」

「は、鼻で笑った！　鼻で笑われたよ、たっちゃん！！」

「……はっ！」

「たっちゃんまで！？」

……ああ、駄目だこりゃ

「あの～、帰っていいですか」

「駄目！　保険証返さないわよ！！　ね、竜子」

「はい、お返しします」

「なんでやねん！」

再びツッコミを入れる南ちゃん。くだらね～

「……ぷっ」

「ん？　どうした雪葉？」

「あははは！　おもしろーい！！」

「……」

子供のウケるポイントって……

「お兄ちゃん。雪葉、大丈夫かも」

「そ、そうか？」

疑いの眼差しで、二人を見てみる

「ふっ、竜子」

「はい、南先生」

竜子さんは、一度診療室から出てゆき、何かの紙を持って戻って来た

「ご苦労。ほら見なさい、チェリー」

「誰がチェリーやねん！」

ツッコミを入れつつ、紙を見る

歯科医師国家試験の満点証明だ

「自分の才能が怖いわ」

「俺はあんたが怖いわ」

「わ～上手いですね。チェリーの癖に」

「……雪葉、本当に此処でいいか？」

「うん。あんまり怖くないから」

「そうか」

兄ちゃんは直ぐに出て行きたいよ……

「……それじゃ南ちゃん、妹お願いします」

「はいよ！　って南先生て呼びなさい！！」

そして雪葉を残し、俺は診察室を出て行った

４５分後

待合室で待っていた俺の元に、笑顔の雪葉が帰って来る

「ただいま、お兄ちゃん！」

「おかえり。大丈夫だったか？　変な事されなかったか？　改造とか」

「うん！　全然痛く無かったし」

腕は本当に良いのか？

「ふふ。良く頑張ったわね～、雪ちゃん」

診察室から南ちゃんと竜子さんが出て来た

「うん！　南ちゃん、竜子ちゃん。ありがとう！」

「……ふ、この無垢な笑顔を見る為に私は頑張っているのよ」

「キモいですね、南ちゃんは」

「……そ、それでは僕ら帰りますね」

これ以上、この人達と関わっていては雪葉の教育上、良くない気がする

「あら、次はお兄さんですよ？」

「ええ！？」

「雪ちゃんが頑張ったんだから、チェリーも頑張んないとねぇ」

「がんばってね、お兄ちゃん！」

雪葉はキラキラした目で俺を応援している。この目を裏切る訳には……

「……宜しくお願いします。南先生」

雪葉。お前の風水、大当りだよ……

「よ～し！　竜子、診察室へレッツラゴーよ！！」

「あいよでやんす」

今日の虫歯

雪＞＞俺＞＞＞父＞南＞＞＞＞竜

つづくさ

第１９話：直の告白

「お兄さん！」

朝の登校時、突然後ろから声をかけられた

振り返ると爽やかな少年

「ん？　あ、えっと直也君だっけ？」

「はい、直也です」

直也君は屈託の無い笑顔で頷いた

「俺に用かい？」

「は、はい！　い、いえ……はい！」

「……何だ、言ってみな」

「は、はい！　は、はる、は、はる、はるらっ痛！」

舌を噛んだようだ

「……と、取り敢えず学校目指して歩こうぜ」

「は、はい！！」

俺達は並んで歩く

「……」

「……」

「……」

「……えっと、直也君？」

「はい！」

「あ、いや……春菜がどうかしたのか？」

「えっ！！　どうしてそれを！？　……やっぱ流石、春菜のお兄さんだ」

直也君はゴクリと唾を飲み込む

「いや、分かるって。……で、春菜が何か？」

「あ、その……もうすぐ春菜の……あ！　す、すみません！！」

突然直也君は俺に向かって頭を９０度下げる

「わっ！？　な、何が？」

「さっきからお兄さんの前で春菜さんを呼び捨てにしてしまいました！　殴って下さい！！」

「お、おいおい」

「おもいっきし、来て下さい！」

直也君は後ろで手を組み、仁王立ちをする

コイツ顔に似合わず、体育会系か！

「なにあれ……」

「カツアゲじゃない？」

俺達を登校する生達がジロジロと見る

「い、いや、良いよ！　春菜が呼び捨てを許してるんだろ？俺は気にしないから」

「う、器もでけぇや……。あの、ありがとうございます。すみません俺、態度悪くて……」

「そんな事無いよ。で、春菜がどうかしたのか？」

「は、はい。あの、春菜さん、もうすぐ誕生日ですよね」

「ああ、明後日だな」

「それでプレゼント買ったんですが……」

「そっか、ありがとう」

「……あのお兄さんの方から春菜さんに渡して頂けませんか？」

「え？　自分で渡した方が良いんじゃないか？」

「それがその……なんか、警戒されてて」

「警戒？　春菜が？」

食い物を見せれば、包丁を持った相手でも着いて行きそうなあの春菜が？

……万が一にもそんなデンジャラス野郎に着いて行かない様、帰ったらキッチリと教え込もう

「はい。先月迄そんな事無かったんですが……」

「先月……ああ、飴がどうこうって奴か」

「なっ！？　……マジですげぇ。春菜のお兄さん、船越〇一郎か……」

「いや、違うよ」

「器でけぇし、勘も半端じゃないし、船越だし……春菜が慕う訳だ」

「別に慕われて無いぞ」

「……俺、頑張ります！　今は全然だけど、いつかお兄さんにハッキリと好きだって言える様になりますからー！！」

直也君はそう叫び、走って行った

「……え～」

追いてかれた俺は、周りの突き刺さる様なこの視線をどうしたら良いんだ？

今日の兄貴

俺＞＞父＞＞＞直

つづける

第２０話：秋のトランプ

コンコン

夕食後、しばらく部屋で年刊将棋通信を読んでいたら部屋のドアがノックされた

この家で俺の部屋をノックするのは三人しかいない

その一人、母ちゃんはノック後すぐ入って来るし、雪葉はもう寝る準備をしている頃だろう

「どうぞ、秋姉」

「……うん」

秋姉は静かに部屋へ入って来る

「どうしたの？」

「……これ」

「ん？　トランプ？」

「……おしえて？」

「あ、ああ……えっと、何がしたいのかな？」

「？」

「いや、ほらババヌキとか神経衰弱とか」

「……ダウト？」

秋姉は少し悩んだ後、そう答えた

秋姉にルールを説明しながら突然どうしたの？　と聞くと、今度ゴールデンウイークに部活の合宿があり、その時に新入部員とのコミュニケーションの為やるらしい

律儀な秋姉の事だ。色々勉強したのだろう、ダウトも基本的な事は分かっていた

「えっと……何が分からないの？」

「……ダウト」

「え？　ま、まあ取り敢えずやってみようか」

「……ん」

ただ、二人でやると終わらないんだよな

5分後

「終わったよ……」

秋姉は一度もダウトを宣告しなかった

「……強いね」

俺を見て微笑む秋姉

「あ、あのさ、ダウト宣告しなくちゃ。怪しいのあったでしょ？」

「……ん」

「じゃ、もう一度やろう」

再び置いていく

「……」

カードが無いな

順番と違う数字をおく

「……ん」

秋姉の動きが一瞬止まったが、再びカードを置きはじめた

「……えい！」

数字が違うカードを5枚ほどいっぺんに置いてみる

「……ん」

秋姉の動きが一瞬止まったが、再びって

「秋姉、ダウトだよ、ダウト！」

「……あ」

秋姉は自分が出そうとしていたカードを裏返す。指定された数字では無かった

「……凄いね、敵わない」

秋姉は再び微笑む

「ち、違うよ！　秋姉がダウトって言うんだよ！」

「あ……うん」

「……じゃあ、今のは無しにして……次、俺ダウトのカードを出すよ？」

「……ん」

俺は適当なカードを出す

「……」

「……」

「……ダ、ダウト」

「よし！　それで良いんだよ、秋姉！！」

「……そっか……このタイミングなんだ」

俺達は手を取り合って喜ぶ……大袈裟か？

それから秋姉はコツを掴んだのか、次々と正確にダウトをしていく

流石、相手の心理を読むのが上手いな

「よし、もう大丈夫だね」

「……ありがとう」

「うん。……あ、まだ寝るまで時間あるし、春菜呼んでババヌキでもやろうか」

「……ん」

今日のババヌキ

秋＞＞＞＞＞＞俺＞＞春≧父

つづけれ

第２１話：夏の夜長

夏の夜長

〔バッキャロー！〕

〔ウア、な、何しゃがる、タカシー〕

〔ミツヒコ、俺達は、俺達は仲間じゃないか～〕

〔タカシー！？　俺が間違えていたぜぇ！　うぉー〕

〔分かってくれたか！　さあ、皆で歌おうぜ。あの太陽に向かってさ〕

〔音程はずすなよ～、タカスィー〕

〔ミツヒコだって音痴でゴワス〕

〔はっはーさぁ歌おう〕

ラララララー、ララララ

「……なぁ」

「……」

「なぁ！！」

「なんだよ、今泣けるとこなんだぞ！」

その言葉の通り、春菜の目が潤んでいる

「つーか、わざわざ俺の部屋で見るなよ！」

深夜１０時頃。春菜は突然ゲームをしていた俺の部屋に入って来て、人のベットを占領した

今はそのベットにねっころがって青春映画を見ている

「ぐず……だって……ブルーレイ無い……うぅ、泣ける」

「人の枕に鼻水垂らすな！」

一時間後

「あ～、良かった！」

「……そうか？」

「最後の試合の前日、タカシがインドへ行ったじゃんか？　あれが無ければカレーは出来なかったんだよ」

「……色々言いたい事あるけど、疲れたからいいや。ほれ、どけ」

「……なんか急に眠くなって来た。このまま寝る」

「寝るじゃねーよ！　部屋に帰れ部屋に」

「たまにはベットで寝たいんだよ～。毎日布団なんだからさ～」

「和室選んだお前が悪い」

因みに秋姉も和室だったりする

「なら兄貴も一緒に寝ようぜ。それなら平等だろ？」

「何に対して平等なのか全く分からねーが、お前、寝相悪いから嫌なんだよ」

一緒に寝て、顔面を蹴られた記憶がある

「昔だろ、昔。今は無呼吸だから」

「……本当に無呼吸なら耳鼻科行け」

「とにかく、私はもう動かないぞ」

そう言って春菜は掛け布団を頭迄すっぽり被る

「……仕方ねーな」

俺は電気を消す

「じゃ暖かくして寝ろよ」

「おやすみ～」

俺は春菜を残してリビングへと向かった

リビングでは母ちゃんがソファーに座り、梅昆布茶を飲みながらドラマを見ていた

「母ちゃん、俺も昆布茶貰っていい？」

「良いわよ～。今、容れるわ～」

「いいよ、ドラマ見てな」

〔犯人はこの中にいるゼニガタアザラシ〕

動物刑事、オラがアニマル

動物を使い、犯人を追い詰めてゆくアニマル刑事の活躍を描いた作品だ

〔まちナウマン象！　お前は既に袋のね、ね、ね……ネズミ小僧！！！〕

「それ、人」

相変わらず、激しくつまらなそうだ。春菜は母ちゃんに似たのだろうか？

「あら～ネズミ小僧って人なの～？　……ネズミ男の亜種かしら」

母ちゃんは一人で悩んでいる

「……前、遠山の金さんと女ネズミ小僧が戦ってたろ？」

「……あ～」

ポンと手を鳴らす母ちゃん

納得してくれただろうか

３０分後

ドラマは終わり、母ちゃんは先に寝るわねとリビングを出て行った

広いリビングに一人残り、少しの寂しさと、開放感を暫し味わう

「……何時だ？」

ふと時計を見ると、もうすぐ深夜１２時になる頃だ

そろそろ寝るかな

俺は、廊下の物入れにある布団を取って来ようと、リビングを出た

「布団、布団っと……」

ガチャリ

布団を取り出していると、玄関のドアが開く

「うぃ～今帰ったぞ～」

そこに現れたのはすし詰めを片手に帰って来た夏紀姉ちゃん

し、しまった！　いつもより少し早く帰ってきやがった！

「ん～……おっ？　そこにおわすは愛する弟ちゃんではござらぬか～、あは、あはははは！！」

ヤバい！　ＬＥＶＥＬ７だ！！

以前、夏紀姉ちゃんの飲み友達が、泣きながら送って来た事を思い出す

「やあ、お帰り姉様。それでは僕はこれで」

俺は早足でリビングへ向かう

「あいや、またれい！」

夏紀姉ちゃんは素早くブーツを脱ぎ、スタン・ハンセン並のラリアットをして来た！

「ぬげっ！？」

俺は仰向けにぶっ倒れる

「ぬげ？　脱げってか！　……ふふ、大和撫子足るもの殿方に言われ脱がない訳にゃあ、参らぬなぁ」

そう言って夏紀姉ちゃんは服をぽっぽと脱ぎはじめ、倒れている俺の馬乗りになった

「実の姉に向かって脱げだなんて変態にも程があるわねぇ？　ほ～ら、お望み通り後はブラとパンツだけ。脱がせられるものなら脱がしてみなさい？」

夏紀姉ちゃんは蛇の様に舌なめずりをしている

こ、殺される

「か、母ちゃん！　秋姉！助けて～！！」

「二人とも一度寝たら起きてこな……」

夏紀姉ちゃんの額から汗が流れる

夏紀姉ちゃんの背後には、犬柄の可愛いパジャマを着た鬼が一匹いた

「……」

「あ、お、お、起こしちゃった？」

「……起きてた」

「お、お姉ちゃんはそろそろ眠ろうかなぁ」

「……行こう？」

「ど、どこへ！？」

「……さあ？」

夏紀姉ちゃんは悲鳴と共に何処へと引きずられて行った

夏の夜長　2

「ひどい目に遭った……」

夏紀姉ちゃんが連れて行かれた後、リビングへと戻る

それにしても、すっかり目が覚めてしまった

なんかテレビやって無いかな……

夏紀姉ちゃんが持って帰ったすし詰めを食べながら、つまらないテレビ番組を適当に見る

「マジでつまらないな」

ぼやいていると、リビングのドアが開いた。夏紀姉ちゃんだ

「はぁ……」

ため息を付く姉ちゃん。酔いは覚めているみたいだ

「お疲れ」

「正座させられて３０分。アキのやつ、殆ど喋らないんだもの……」

再びため息を付き、俺の横へと座る

「ちょっと悪酔いだったわね、ごめん」

俺が最後に食おうと思っていた中トロを、いきなり食いやがった！

「ああいう酔い方は彼氏に嫌われるぜ？」

俺が彼氏だったら引くわ。中トロ盗ったしさ

「はぁ？　それ嫌味？　男が居ない姉に対する嫌味かコノヤロウ！」

夏紀姉ちゃんは俺の頬を左右に引っ張る

「ら、らって夏紀姉ちゃんよく誰か、家に呼んでるじゃねーか」

「ああ、あいつらは後輩や飲み友達。もし本当に男だったら、雪葉が居るのに家へなんか呼ばないわよ」

そうなのか？　紛らわしいな。中トロ盗ったからか？

「そういう誤解を招く事をしてるから彼氏出来ないんじゃねーの？」

「……そうかもね。でも今、男欲しく無いし、恋愛とか面倒臭いのよね」

場末のバーにいるホステスの愚痴かよ……。中トロ盗ったくせに

「……なんか寂しい事、言ってるな」

「そういうあんたはどうなのよ、彼女と上手くやったるの？」

「いつの話だよ。とっくに別れてるって」

「え!?　そうなの?　いつよ?」

「半年前かな?　死兆星が見えたからとか言ってた」

「……別れて良かったわねそれ。でも、そんな事も知らなかったなんてちょっとショックだわ」

「そうか?」

「それだけみんなと話して無いって事よね……はぁ、お酒止めようかな」

つーか、なんでこんなマジな話を夜中にやらなきゃあかんのだ?

「ま、たまには皆と夕食たべな」

「……うん。でもあたし、空気悪くしてない?」

「はぁ?」

「ほら、あたしが居るとなんか皆よそよそしいって言うか……」

「そんな事無いよ。気にしすぎだよ」

「そうかしら……」

夏紀姉ちゃんは黙ってしまう

「はぁ……俺さ、夏紀姉ちゃんの事、大好きだよ?　尊敬もして

る。春菜や雪葉だってそう思ってるし、もっと話す機会を欲しがってる」

「……生意気よ」

夏紀姉ちゃんはコツンと俺の頭を叩き、微笑んだ

相変わらず夏紀姉ちゃんの微笑みは優しくて魅力的だ

「……あれ？　今、アキ入って無かったわよね？」

「ま、まあ秋姉は夏紀姉ちゃんの事なんか尊敬してないんじゃないかな～って……」

「……なんか？」

「……あ」

今日の泣き顔

俺＞＞＞＞夏＞＞春＞＞＞＞母≧秋

つづけたい

第２２話：父の目覚め

アマゾン下流

近くの村に住む少女が、川の水を汲みに行くと、川から流れて来る何かを見付けた

「ナンカナガレテキタヨ！テカヒトジャン？　タイヘンネ」

以下翻訳←

「みんなを呼んで来なくちゃ！」

少女は村の住民を呼び、流れて来た人間、佐藤を川から引き上げた。

そして２日後

「……う、うぅ」

ずっと目を覚まさなかった佐藤の意識が覚醒する

「こ、ここは……？」

そこは薄暗く、最低限の生活設備だけがある藁葺き小屋の中

「僕は一体……」

佐藤は頭を押さえ、記憶を呼び起こす

「そうか、僕は秘宝の門番に……」

その時、布で出来た出入口が開いた

「らーらら……あっ！」

鼻歌を歌いながら小屋へと入って来た少女は、起き上がっている佐藤を見て声を上げ、慌てて何処かへと行ってしまう

「……あの子が僕を助けてくれたのだろうか？」佐藤は痛む体を無視し、姿勢を正して少女が戻って来るのを待った

数分後、少女は１００歳を越えるかも知れぬ老人と共に戻って来た

「ワシの名はウリガド、この村の長じゃ。そしてワシの後ろに隠れているのが、孫娘のアルテル。お主を最初に見付けたのも、この子じゃ」

ウリガドの声は低く、そして重く腹に響く

「私の名は佐藤。この度は大変なご迷惑をお掛けしました」

佐藤は深く頭を下げた

「ほほ、なーに構わぬさ。ワシはこの子に説得されただけだからのう」

ウリガドはアルテルの背を軽く押す

アルテルはちょっと困った顔をしながら佐藤の前へと出た

「君が僕を助けてくれたのだね。……本当にありがとう」

嘘偽りの無い感謝を微笑みに乗せて言う佐藤。アルテルは少し顔を赤くしながら頷く

そんなアルテルを見て、佐藤は日本に残した娘の顔を思い出す

「まぁ、傷が癒えるまでゆっくりとしていくがよい」

「感謝の言葉もありません」

佐藤を残し、小屋を出て行く二人。途中、アルテルは振り返り、若干躊躇しながらだが確かに微笑んだ

佐藤の頬も自然と上がる

「……そうだ、今日は誕生日だったね。……おめでとう、春菜」

一人小屋へ残された佐藤は遠く日本にいる娘を想い、そっと目を閉じてそう呟いた

今日のアマゾン2

父

続く

第２３話：春の誕生日

今日は春菜の誕生日。俺は雪葉を連れ、デパートへ来ていた

「お兄ちゃんは何をあげるの？」

「ん～あいつが喜びそうな物か……」

春菜は食べ物以外では、漫画や青春映画、後ドラ○もん（旧）が好きだったりする

「ドラ○もんグッズにしようかな」

目覚まし時計や、クッション。ドラ焼きでも買って帰るか

「でも春お姉ちゃん、余り部屋に物置かないよ？」

「そうなんだよな。あいつあの性格の割にはスッキリした部屋を好むからな」

買ったのはいいが、直ぐに押し入れ行きになるかも知れない

「後はゲームと……スニーカーか」

ナイキのエアーフォース２が欲しいとか何とか言ってた気がする

「雪葉は何をプレゼントするんだ？」

「雪葉はね～、内緒っ！」

雪葉は悪戯っ子の様に、にっぱりと笑う

「はは、なんか俺も楽しみになって来たよ。さて、見たい所あるか？」

「ん～ん。お兄ちゃんについてく」

「そっか。じゃスポーツ用具店にでもいこうか」

「うん！」

このデパートは三階のフロアがスポーツ店のテナントが立ち並んでいる

俺は、スニーカーを専門に置いてある店へと入った

「桂三枝でいらっしゃ～いシューズショップ明日のホームランへようこそ～」

現れたのは、スーツを着たやけにクネクネしているオッサンだった

「……どこだろうな、ナイキの靴は」

「あ、向こうの看板に！」

「お、でかした雪葉」

「えへー」

「……えっと、お客様？　シューズショップなのにホームランですよ？　桂三枝ですよ？」

「ああ、俺達そういうネタどうでもいいですから。なあ雪葉」

「うん。……あ、ちょっと面白かったよ？　ありがとおじさん。……それじゃ行こ、お兄ちゃん」

雪葉はぺこりと頭を下げ、俺の手を取りニコニコとナイキコーナーへ向かう

「も、申し訳ございませんでした！！」

そしてオッサンの叫び声が店内に虚しく響いた

「この間の歯医者といい、最近この町にも変な連中が増えたな？」

ナイキのコーナーで、靴を探しながらぽつりと呟く

「南ちゃんやたっちゃんはいい人だよ？　優しかったし、面白かったもん」

「……まぁ、悪い人達では無いんだろうけどな」

「うん……あっ！　あったよ、お兄ちゃん」

そう言って見せてくれたのは、確かに春菜が言っていた靴だ

よし、これを買って……

「い、一万五千円だと！」

「ええ！？　この間お母さんと食べに行った、フグの一人前フルコースと同じ値段！？」

あ、あの女、息子に内緒でなんて幸せな食生活をおくっていやがる！！

「お、お兄ちゃん。雪葉、協力するよ？」

険しい顔をする俺を、お金が足りないのだろうと思ったのか、雪葉は自分のがまぐちを開いてお金を取り出す

「はい、お兄ちゃん」

ニッコリと笑いながら、折り畳まれた五千円と小銭を握り締め、俺に差し出す雪葉

お、お兄ちゃんそれ貰えないっ！

「いいんだ、雪葉。兄ちゃん、金あるんだ。少し驚いただけだから」

雪葉の頭を撫で、お金をしまわせる

……此処まで来たら買うしかねぇな

俺はしぶしぶ、春菜のサイズに合う靴を選びレジへと持っていった

「ありあとした～」

やる気もテンションも無いさっきのオッサンに金を払い、ショップを出る

「さて、これでプレゼントは購入したし……雪葉、文房具と服見に行こうか？」

「えっ！？　で、でも……いいよ！　帰ろ？　お兄ちゃん」

そうは言うが、目が泳いでいる

「まあまあ、兄ちゃんについて来な」

それから遠慮する雪葉を何とか説得し、雪葉が気に入った筆箱と服を購入する

「さ、そろそろ帰ろう」

「うん！　お兄ちゃん、ありがとう！！」

春の誕生日　2

「お誕生日、おめでとう！」

午後5時。春菜の誕生日会が始まった

メンバーは夏紀姉ちゃんを除く家族全員（父、忘却）と春菜の友達5人だ

この5人は、どうやら特に仲が良い友達を呼んだらしく、みんな気兼ね無しにお祝いしている

ただ……

男一人はきつい

「春菜、直也君は？」

「え？　呼んで無いよ。あれを呼ぶわけ無いじゃん」

遂にあれ呼ばわりか……

「この人が春菜のお兄ちゃんか～。へ～」

茶髪の女の子が、俺を覗き込む

「何だよ、人の兄貴がそんなに珍しいのか？」

「べっつに～」

膨れっ面の春菜に、茶髪は含み笑いでごまかした

「春菜、春菜！　これプレゼント！！」

黒髪の女の子は……って髪で判断するのも酷いな。春菜、名前言わないかな……

「お、サンキュー絵里！」

絵里さんか、よし覚えたぜ

「私、真理……」

このアホ！

それからみんな次々とプレゼントを渡していき、次は雪葉の番となる

さて、雪葉のプレゼントは何だろうか

「おめでとう、春お姉ちゃん！」

「ユキ～ありがと」

「はい、プレゼントだよ」

雪葉は、絵を渡す

それは春菜や俺達が朝食を食べている絵だ

絵は拙いながらも細部までキッチリと書かれていて、一目で時間と手間が掛かっているのが分かる

「ありがとう雪！　ねーちゃん、すっげー嬉しいぞ！」

春菜は雪葉をギュッと抱きしめた

「お、お姉ちゃん。まだだよ、もう一つあるの」

「え？　でも私、めっちゃ満足してるぜ？」

「ちょっと待っててね」

雪葉はトテトテと、リビングを出て行く

「……何だろ？」

俺達は雪葉が戻って来るのを待った

「お待たせ！」

戻って来た雪葉は、ダンボールに色を塗って作った黒いシルクハットの帽子と、ステッキを持って現れた

「春お姉ちゃんの誕生日を祝って、手品します！」

「お、頑張れ、雪葉！」

「雪葉ちゃん、頑張れ～」

「良いぞ、雪！！」

みんなの歓声が沸く中、雪葉はちょっとテレた顔をして、ステッキをクルッと回した

すると、ステッキの先から花が出てきて、その花を春菜に渡す

「やるなぁ」

感心していると、母ちゃんが後ろに来た

「あの子、練習してたからね～」

「すげー妹だよ」

雪葉は次々と手品を披露していくが、段々と本格的になっていく

始めは温かい目で見ていた俺達は、次第に真剣な目となっていった

「はい、カナさんがサインを書いてくれた、スペードの5はこのレモンの中に入っています！　切って下さい」

春菜の友達がレモンを切ると、その中にはサイン入りスペードの5が！

「え～！？　なんで～？」

驚き戸惑う俺達

「か、母ちゃん、雪葉どれぐらい練習を……」

「去年の年末にマジックの特集を見てからかしら～。一日に1時間は練習してたわよ～」

……本当にスゲー妹だ

「これで終わりです。ありがとうございました！」

雪葉のお辞儀で手品は終わり、リビング内は拍手の渦に包まれる

「ほんとありがとな、雪。すげー楽しかった！！」

「お誕生日本当におめでとう、春お姉ちゃん！」

こうして誕生日会のテンションはマックスになったのだが、最後は俺か……

何かとっても渡しずらいんですけど

「は、春菜～」

ワイワイ騒ぐみんなの視線をコソコソと避け、小声で春菜を呼ぶ

「ん？　お、兄貴。どうした？」

「お前にプレゼントだ」

「え！？　兄貴が私に？　珍しいなぁ」

春菜はわざわざデカイ声を出して皆に知らせやがった

「去年もあげただろ！」

「え？　ん～～？　あ！　もしかして、あの相撲まんじゅうの事か！」

「あ、ああ」

「あれはビックリしたね。相撲取りの顔がめっちゃリアルなんだもんな。嫌がらせかと思ってたよ」

あははと笑う春菜

一年間、ずっと嫌がらせだと思われていたのか……

「と、とにかくホレ」

春菜に紙袋を渡して後ろを向く

「なんだ、なんだ～」

ガサガサと袋を開ける音がする

……ふ、それを履いて部活頑張れよ春菜

「お～先週私も買った靴じゃん。これいい靴なんだよな～ありがと」

素直に喜ぶ春菜。凍り付く周り。引き攣る俺の顔

「高かったろ？　　五千円もするもんな～」

「ええ！？」

雪葉が驚きの声を上げた

「ありがとな、兄貴！　　……兄貴？」

「よ、喜んで貰えて兄ちゃん、兄ちゃん嬉しいよ！」

これは悲しくて出た涙じゃない。嬉しくて出た涙さ

俺は肩を落とし、元居た場所へと戻った

「ど、どうした、兄貴？」

「ち、ちょっと、春菜！」

茶髪の子が、春菜を引っ張って耳打ちをする

まぁ、つまらない物をプレゼントした僕には関係無い事でしょうけど

「え！？　　何でそんな事しないといけないんだよ！」

「良いじゃない減るもんじゃないんだし」

「い、嫌だよ、みんないるのに……」

「大丈夫、パーティーの余興よ！　春菜だってお兄さんに感謝してるんでしょ？」

「……ちぇ、意味分かんねーよ」

春菜は渋々と言った顔で俺に近寄る。僕には関係無い事ですがね

「……ありがとな、兄貴」

春菜はボソッと呟き、俺の頬にキスをした

「なっ！？」

「いいぞ～春菜！」

「きゃ～！！」

「あら～」

雪葉の時と同じぐらい、場は盛り上がる

「あ～うるせー！　もう自棄だ、食うぞ～」

春菜はリビングに特攻し、出前の寿司や母ちゃんが作った料理を食いまくる

「……ふ、まだまだ子供か」

「……嬉しそう」

「うわっ！？　　あ、秋姉、いたんだ……べ、別に嬉しく無いっすよ？」

「？　　春菜嬉しそう」

「え？　　あ、ああ……そうだな」

「こら～そのいくらは私のだぁ！」

おめでとう、春菜

今日の存在感

春＞＞雪＞＞＞友≦母＞俺＞＞＞＞＞＞秋＞＞父

つづけさま

第２４話：鳥の誤解

学校帰り、今日発売のチャンプを立ち読みしようと、俺はコンビニへ入った

雑誌コーナーには、俺と同じような制服姿の野郎どもが数人いて、邪魔くさい

立ち読み何かしないで、きちんと買えってんだ！

「おっと、ごめん」

身勝手な若者に腹を立てながらチャンプを取ろうとした時、横の人にぶつかってしまった

「あ、いえ。大丈夫です」

「すまないな……あ、直也君か」

「あ！　春菜さんのお兄さん！？　こ、こんちわーっす！！」

直也君は手を後ろで組み、腹から声を出す

「あ、ああ。こんにちは。……取り合えず出よう」

突き刺さる視線に堪えられなくなり、俺は直也君を連れてコンビニを出た

「す、すみません、つい」

「ああ、気にするなよ。昨日は春菜の誕生日、来なかったんだな？」

「……はい。実はプレゼントも渡せてなくて」

「ふむ……そうだな」

春菜が嫌がる事はしたくないが、直也君が少し可哀相でもある。どうしたものか

「……謝れ」

「すみませんでした！！」

「い、いや俺じゃなくて春菜に学校で謝れ。あいつはああいう性格だから、きちんと謝れば根に持たない」

「は、はい」

「直也君に悪気があった訳じゃないってのは分かってるけど、あいつ言い訳とか弁解は聞かないんだよ。一度謝ってしまった方がいいと思う」

「……分かりました、謝ります。実は俺も謝りたかったのですが、余計怒らせるんじゃないかと怖くて」

「……まぁ確かに怒らせると怖いかもな」

多分、俺より喧嘩強いし

「ま、とにかくそう言う事で」

「はい！　ご指導、ご鞭撻の程、ありがとうございました！！」

「うむ、よかよか」

それから俺達は、中学校や高校の事を話す

「そういえば春菜さん、テニス苦手なんですよ」

「ふ～ん春菜がねぇ」

あいつは運動神経しか神経が無いんじゃないかってぐらい、どんなスポーツでもこなす

「どうも自分で球を上げて打つのが苦手みたいです」

「そうか、ありがとう」

「はい？」

今度、春菜とテニスをしよう。もしかして始めてスポーツであのモンスターに勝てるかもしれん

「ククク」

「？」

一人含み笑いしていると、後ろから女の子の声がした

「直也兄さ～ん」

「うん？　　ああ、宮ちゃん」

直也君は振り返り、女の子の声に応える

妹かな？

俺も挨拶しようと振り返る

「あっ！　　あ、あ……」

振り返った俺の顔を見て、凍り付いた女の子は、雪葉の友達の鳥里さんだった

「どうしたの？　　宮ちゃん」

直也君はしゃがみ、鳥里さんと同じ高さの視点にして尋ねる

「そ、その人……」

「うん？　　ああ、俺の先輩だよ。色々な事を教わっているんだ」

「……」

鳥里さんは、怯えた目で俺を見上げる

此処は一つ、誤解を解こう

「鳥里さん」

「は、はい……」

俺は顔を両手で隠す

「？」

「ばぁ！！」

俺の必殺！　梅干し食べたタコ入道！！

この顔で俺は、小さかった頃の春菜や雪葉を笑わせてやったものだ

「ぶっ！？　あは、あはははは！　す、すみませんお兄さん、そ、その顔っあははは！！」

「ふ、また一人笑わせてしまっ……たか？」

「……」

鳥里さんは固まってしまっている

「あ、あの～鳥里さん？」

「……ひっく」

「え？」

「グス、ひっ、えっぐ」

「ええ！？」

泣き出してしまった！

「な、ど、あ？　　え、な、直也！！」

「は、はい！！」

「どうしたらいい！？」

「えぇ！？　　え、ええと、宮ちゃんは駅前のケーキ屋に売っているシュークリームが好きです！！」

「よし、でかした！　　一階級特進だ！！」

「こ、光栄です！！」

後の事は任せ、俺は駅前に向かい疾走した

「ただいま！」

「早っ！？　　さ、さすが春菜のお兄さん……すげぇ」

直也君はゴクリと唾を飲む

「はい、シュークリーム」

まだ少しグズッている鳥里さんに、シュークリームが入った箱を渡す

「！？」

鳥里さんはビクッとし、直也君の後ろに隠れてしまった

「宮ちゃん？」

直也君は不思議そうに俺と鳥里さんを見比べる

「……参ったな」

こんな時、雪葉が居てくれたら……

そんな時、思いが通じたのか奇跡が！

「あら、宮じゃない。何してるの？」

鳥里さんに声を掛ける買物袋を持った少女。彼女は！

「はぁ……花梨か」

花梨じゃなぁ……

「あ、あんたは！　って、その溜息は何よ！！」

「いや、ちょっと期待が外れて……」

「わ、私だって会いたく無かった！」

「いや、会いたく無い訳じゃないんだ。俺、花梨の事気に入ってるし」

「ひうっ！？　ごほ、ごほ……な、何を」

「芸人みたいで面白い」

「～～～～っ！」

花梨は俺に近付き、ローキックをしてきた

「いて、いて、いて、って本当に痛いよ！！」

三回とも正確に同じ場所を蹴りやがった

「ふん！」

花梨は腕を組んで、そっぽを向いてしまった

「か、花梨ちゃん……」

今だ直也君の後ろに隠れている鳥里さんが、か細い声で花梨を呼ぶ

「え、何？　うん？」

呼ばれて横へ来た花梨へ、鳥里さんは耳打ちをする

「……で……な……」

「え？　　あいつが？　　別に怖くないわよ？」

「か、花梨ちゃん、こ、声が！」

「大丈夫よ。もしあいつが変な事をしてきても守ってあげるから」

「で、でも……」

「ちょっとあんた！　　こっちに来なさい！！」

「は、はい」

俺は二人に近寄る

「よく分からないけど、あんたが悪いんでしょ？　　宮に謝りなさいよ」

「は、はい……鳥里さん、ごめんなさい」

「あ……う……」

「宮、こいつの事、許してあげられる？」

「な、何かをされた訳じゃない……から」

「そう。ま、こんな奴嫌いなのは仕方ないけど、多分そんなに悪い奴じゃないから」

花梨は俺の足をポンポンと叩く。なんか散々だ……

「宮ちゃん。先輩がいい人だってのは俺が保障するよだから……ね」

「直兄さん……はい。あ、あの今までごめんなさい、雪ちゃんのお兄さん」

鳥里さんは頭を下げる

「あ、ああ。こっちこそごめんね。と、そうだ、みんなでシュークリーム食べようか」

「わぁシュークリーム！　あっ……ふ、ふん子供の食べ物ね」

「六個あるから花梨の鳥里さんには2個だ」

俺はみんなに配る

「春菜さんのお兄さん、ゴチになります！！」

「し、仕方ないわね。食べてあげる」

「あ、ありがとうございます」

それから俺達は近くの公園へ行き、ベンチに座る

そして食べたシュークリームは、確かに美味かった

「……ありがとな花梨」

「あ、頭なでるな！！」

昨日の好感度（鳥）

直＞＞花＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞俺≧虫

今日の好感度（鳥）

直＞＞花＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞俺＞＞虫

つづくか！？

第２５話：雪の水族館

ゴールデンウィーク初日

俺は雪葉と水族館へ来ていた

「お兄ちゃん、マンボウだって！」

繋いだ手を引っ張る雪葉

「かわいー」

「そうだな。かわいい……かもな」

あんまり可愛くないな

「マンボウさん、マンボウさん……あ、こっち向いた！」

「おー」

横を向いていても変わった顔だが、前を向いたら何とも言えない愛嬌がある顔になるな

「……えへへ」

雪葉が俺を見上げてニッコリと笑う

「ん？　どうした？」

「んーん。あ、お兄ちゃん向こうは深海魚コーナーだって」

「お、行ってみようか」

「うん！」

深海魚コーナーは薄暗く、殆どが標本や映像だが、一カ所だけ水槽がある

その水槽の小さな穴から雪葉は中を覗く

「うわぁ、……凄いなぁ。お兄ちゃん、見てみて」

「どれどれ」

覗いて見ると、長細くグロテスクな魚

「ぬぅ」

夢に見そうだ

《ただ今より、屋外プールにてイルカ達のショーを始めます。是非ご覧下さい》

「お兄ちゃん！　雪葉、イルカさん見たい！！」

雪葉の目がキラキラしている

「ああ、行こう」

屋外プールに出ると、既に沢山の人達が居たが、辛うじて前の方の席に座れた

「皆さん、こんにちはー」

インストラクターのお姉さんが元気良く挨拶をする

「こんにちは」

ぺこりと頭を下げる雪葉

「今日は来てくれてありがとう！　マッキー君もミーコちゃんも喜んでるよー」

お姉さんがそう言うと、プールからイルカが二匹跳ねる

「わぁー」

雪葉は興奮の声を上げる

「ふふ……あ、ラムネ2本お願いします」

横に来た売り子さんから、瓶のラムネを購入し、雪葉に渡す

「ありがと、お兄ちゃん」

ビー玉を落とすタイプのラムネだ。何だか懐かしい

キャップを使ってビー玉を落とし、溢れる前に口をつけて飲む

「たは～良く冷えてる」

「ん、ん～！」

「ん？　ああ、ビー玉外せないのか？」

「だ、大丈夫！　雪葉あけられるよ」

「そうか。瓶押さえてやるから、両手でやってみな」

「う、うん……えい！」

雪葉が両手で上から押し付けると、ビー玉はカランと落ちた

「出来た！」

「雪葉、溢れる、溢れる」

「あ！」

雪葉は慌てて飲み口に口をつける

「……危なかったぁ」

「ほら、口」

持っていたハンカチで、雪葉の唇からこぼれたラムネを拭いてやる

「ん～。……ありがと、お兄ちゃん！」

その後もイルカショーはつづがなく行われ、雪葉のテンションがＭＡＸになった頃、見物客も参加出来るショーが始まった

「はい、次はアシカの輪投げショーです！　手伝ってくれる子はいるかな？」

何人かの子供は直ぐに手を挙げ、ステージへと呼ばれたが、雪葉は手を挙げようかどうか迷っている

「俺達もやろうか、雪葉」

「う、ううん。見てるだけでいいの……」

「はい！　俺達も参加します！！」

「お、お兄ちゃん！？」

「はい、元気なお兄さんありがとうございます！　それではお兄さん方もステージへお願いします！！」

「さ、行こう雪葉」

俺は椅子から立ち上がり、雪葉に手を伸ばす

「う、うん……」

その手を握り、雪葉はコクリと頷いた

雪の水族館　2

最後に会場へ上がった俺達は、一際大きな拍手で出迎えられる

雪葉は、おれの袖を掴んだまま離さない

「はい、それじゃ皆さん輪をどうぞ」

会場に上がったのは八人。一人一つずつ輪を貰い、順番に並ぶ

「さ、アシカのアッシー君の登場です！　芦ノ湖に居たりするかもなアレとは違いますからね！」

「……アレ？」

「ネッシーの仲間な」

首を傾げる雪葉の頭を撫でてやる

「それじゃあ……アシカ、出てこいや！！」

お姉さんが叫ぶとドラムが鳴り響き、奥からゆったりと出て来たアシカ……

「アシカ？」

あんなんだったけ？　もう少し小さくて毛が濃かった様な……

「つーかそれオットセイじゃん！」

「ちっ！　……え～何ですか～」

「お、お姉さん、今、舌打ちしなかった？」

「アシカでもオットセイでも良いじゃ無いですか～。似たようなもんだし」

「水族館の職員が言う台詞じゃないだろ！？」

俺達は暫し睨み合う

「お、お兄ちゃん……」

雪葉の声で我に返ると、会場はどっちでも良いから早くやれやって雰囲気に包まれていた

「……ど、どっちでも良いです」

「は～い。それじゃあお兄さんもアッシー君と遊ぼうね」

「は～い」

もう、どうでもいいや

俺達はお姉さんの誘導で、アシカもどきの3メートル前へと行く

「一人一回ずつ投げて、アッシー君がキャッチ出来たらアッシー君人形とサインをプレゼントします！」

「サインってアッシー君の手形かな？」

雪葉が期待を篭めた声で呟く

「私のですよ」

「いらねぇよ！　子供の期待を裏切んなよ！！」

何なんだこの水族館は！？

「えぐい水着姿の生写真付き」

「ナイスガール！」

「……お兄ちゃん？」

雪葉がジト目で俺を見上げた

「おっと失礼」

俺はいつもの紳士に戻る

「さぁ、性少年が納得した所で」

「字が違いますよ～」

「アシカショー始まりだコノヤロウ！！」

うわ～！　と会場が声援で埋まる

「アシカ！　アシカ！」

「アシカー愛してる～！」

「いいぞアシカー、おっぱいネーチャンも最高！」

会場はスタンディングオベーションだ

「……なぁ、雪葉」

「……うん、お兄ちゃん」

二人で顔を見合わせ何と無くため息

「それでは最初の子の挑戦です！」

雪葉と同じくらいの男の子が、恐々輪を投げる

……バシン！

アシカもとい、オットセイが弾きやがった！？

「……う、うわぁあん！」

泣く子供を慌ててなだめるお母さん。盛り上がる会場にこやかに拍手するお姉さんとオットセイ

「……地獄絵図だ」

「お、お兄ちゃん。あのアシカさん怖い……」

雪葉は俺の脚にギュッとしがみつく

「だ、大丈夫だ。兄ちゃんが付いてるぞ」

それからも奴は輪を弾き、時にはフェイントを混ぜつつかわす

「強い、強過ぎるぞアシカ君！　このままベルト防衛か！？」

「……別に良いけどさ」

次は俺達か

「先にやるぞ、雪葉」

「う、うん」

不安そうな雪葉から離れ、俺はアシカの正面に立つ

「……」

「……」

ガンの飛ばし合いだ

「アシカもどきが、俺を舐めるなよ？」

「アオッ！　アオッ！」

ヤロウ挑発していやがる

「お兄ちゃん、頑張って！」

「ああ、任せとき！」

右手に輪を持ち、投げ

「！　……アオ？」

「投げないよ～。騙されてやんの～」

「アオ！！」

オットセイは怒り、身を乗り出す

今だ！

「死ねぃ！！」

俺は輪をオットセイに投げた。輪はオットセイの頭をくぐり首へ！

「おっとっと」

首へと入る瞬間、横のアマが輪を掴みやがった！？

「はい残念。また来週」

「今、入ってた！」

「のーん。駄目よ、失敗。さよならナリ～キテレツ～」

「む、むかつく」

「さ、いよいよ最後の挑戦者です！　最後はとても可愛い女の子ですね。お兄さんとは大違い」

「あれ？　俺、もしかして嫌われてる？」

なんか釈然としないが、これ以上文句を言っても仕方ない

「ほら、雪葉。頑張れよ」

「う、うん」

雪葉は渋々オットセイの前に出る

「アシカさん……」

「オウ！　オウ！」

オットセイは巧に頭を振っている。奴はやる気だ！

考えろ、冷静な頭と熱いハートで奴の弱点を！

「それでは輪投げ、お願いします！」

お姉さんの声に雪葉は輪を握り、下からエイッと思い切り投げた

輪は、オットセイの真上に高く上がり、落ちて来る。オットセイは余裕をこいて動くのを止める

パシャン！

突然プールでイルカが跳ねた音

その時、俺の頭に一筋の光が射す！

「後ろにシャチだ！！」

「オウ！？」

オットセイの動きが固まる

「ふ、やるわね」

お姉さんが空中に手を伸ばし、輪を取ろうとした

「客席にブラッド・ピットが！」

「残念ね。私はシブメン専門なの」

「Ｋ〇ＮＩＳＨＩＫＩだ！！」

「なんでＫ〇ＮＩＳＨＩＫＩ！？　って伏せ字になって無いから！！　……あ」

雪葉の輪は見事オットセイの頭をくぐり、首にぶら下がった

会場は大歓声と拍手に包まれる

「やったな雪葉！」

「で、でも……」

雪葉の視線を追うと、ひざまついているお姉さんとオットセイ

「負けたわ……完璧に。さすが力石だ、参ったぜ」

「お姉さん意外と歳、食ってる？」

お姉さんは一度俺を睨んだ後、会場の奥へ行ってデカイぬいぐるみを取って来る

「何はともあれ、私達の負けね。はい、どうぞ」

しゃがんで、雪葉へと渡すお姉さん

「うわぁ！　ありがとう、お姉さん！！」

「どういたまえまして」

「え？」

「基本的にオヤジだよね、お姉さん」

「シブメン専門ですから。はい、お兄さんには生写真」

「ふん。貰ってやろう」

えぐい水着かぁ。紐？　それとも貝殻！？

ワクワクしながら写真を見ると……

「……えぐいな～」

「えぐいでしょう」

スクール水着を着たお姉さんが、立て膝をついて縦笛を吹いている写真だった

「何故にスクール？」

「シブメン専門ですから」

「色々言いたいけど……疲れた。帰ろうか雪葉」

「うん！」

嬉しそうにぬいぐるみを抱きしめる雪葉

「……ま、楽しかったかもな」

今日の満足度

雪＞＞俺＞＞＞＞父

続けれる

第２６話：秋の合宿

秋の合宿

「ただいま～」

「ただいま！」

「……おかえり」

水族館から帰ると、スポーツバックを持った秋姉がちょうど出掛ける所だった

「秋姉、合宿かい？」

「……うん」

「頑張ってね、秋お姉ちゃん！」

「……うん」

「３日間だっけ？　ちょっと寂しいけど行ってらっしゃい！」

「え？　……う、うん」

「？」

秋姉は何故か困った顔をして、家を出て行った

「何か秋姉、困って無かったか？」

「うん。ちょっと変だったかも」

「う～む」

我が姉ながら考えている事が読めない人だ

「微妙に気になるが、秋姉なら大丈夫だろう」

秋姉は一人で大抵の事は出来るし、口下手ではあるけれど、本当に困った時は誰かに頼る事が出来る人でもある

逆に夏紀姉ちゃんは一切、人に頼らない。家族としては一番心配させるタイプの人間だ

「ま、心配は置いといて、疲れたな。夕食まで休もうか」

「うん。今日はありがと、お兄ちゃん」

笑顔の雪葉に、担いできたぬいぐるみを渡し、俺は自分の部屋へと行く

「少し昼寝でもするかな」

そして俺はベットに寝転んで目を閉じた

……

ピリリリ、ピリリリリ

「……ん？」

ピリリリ、ピリリリリ

携帯が鳴っている。誰だろう

俺は携帯へ手を伸ばす

ピリ……

「あ」

電話は切れてしまった

着信歴は公衆電話

「う～む」

「ご飯ですよ～」

母ちゃんの呼ぶ声だ

「は～い」

飯だ、飯だ！！

「でね、でね、アシカさんがね！」

夕食は煮込みうどん

雪葉は今日行った水族館の事を、一生懸命話している

「へー楽しそうじゃん！　てか、私も誘え～」

「お前、朝から居なかったじゃん」

「部活だったけど、水族館行くなら休んだし」

「いや、部活優先しろよ」

ぶーぶと文句を言っている春菜を無視し、うどんを食べ終える

「ごちそうさま」

「から松～」

……もはや突っ込むまい

「あ、お兄ちゃん」

椅子から立ち上がると、雪葉が俺を呼び止めた

「ん？　どした？」

「後でお部屋に行っても……いい？」

雪葉は上目遣いで窺う様に尋ねる

「ああ。ゲームでもするか？」

「うん！」

よっぽど楽しかったのか、どうやら今日の雪葉は甘えっ子モードらしい

部屋に入りベットに転がってマンガを読む

マンガを読み終え、何気なく携帯を見ると、夕食を食べていた時間に着信があったらしい

着信歴は公衆電話

「……」

……誰だ一体

コンコン

「はい、開いてるよ」

「……おじゃまします」

雪葉は寝巻姿で、マクラを抱えていた

「うん？　マクラ？」

「うん……。駄目？」

「ふふ、雪葉は甘えっ子だな」

雪葉を手招きして、頭を撫でる

「いいぜ。雪葉は寝相良いしな」

「やった！　お兄ちゃん大好き！！」

そう言って雪葉は俺のベットに自分が寝るスペースを作る

「ふ、まだまだ子供だな」

何か可愛い孫を見ている心境……。

いやいや！　妹だろう！？

「と、取りあえずゲームをやろうぜ！」

「うん！」

それから一時間、パズルゲームやら格闘ゲームで盛り上がっていると、雪葉が欠伸をし始めた

「そろそろ寝るか？」

「……もうちょっと」

ゴシゴシと目を擦る雪葉を軽く撫でる

「また明日も遊ぼう」

「……ん」

眠そうにふらつく雪葉の体を支え、ベットに寝かせる

「おやすみ、雪葉」

「おやすみなさい……」

電気を消し、少し側に居てやると、直ぐに寝息を立てはじめた

「……おやすみ」

さてと、アイスでも食って風呂に入るか！

携帯を持って静かに部屋を出る

もうみんな寝たのかリビングには誰もおらず、何と無く寂しくて携帯を開いてみと、着信歴

……公衆電話

時間は雪葉とゲームをやっていた頃だ

「……」

ピリリ、ピリリリ

「っ！？」

携帯が鳴る

「……」

俺は震える手で電話に出た

「……」

「……」

長い沈黙

「……も、もしもし？」

「……あ……よかっ」

「ひ、ひぃぃい！？」

電話を切り、電源を落とす

「な、何だ今の！？」

聞き取りにくかったが、確かに女の声で“あの世”って言っていた！

「何だよあの世って！？」

恐怖新聞とかそういう類の物なのか！？

震える足を動かし、ソファーへと座る

呼吸を落ち着け、辺りを見回すと、見慣れた筈のリビングが、異様な雰囲気に包まれていて……

「っ！」

俺は慌てて部屋へと戻った

真っ暗な部屋。急に強くなって来た風

俺は雪葉の横に潜り込み、息を潜める

ガタン！！

「ひっ！？　……風か」

恐怖で思わず雪葉を強く抱きしめてしまった

「……ん」

雪葉もまた霊的な何かを感じているのか、俺の胸に顔を埋め、抱き着いて来る

「だ、大丈夫だ。兄ちゃんが守るからな」

「ん……に……」

大丈夫だ、明日になればただの間違い電話で笑い話になる

きっとそうだ。きっと……

「……」

いつしか俺は深い眠りへとついた

……

コン、コン

「……？」

コン、コン

「っ！？」

コン、コン……コン

「な、何？」

部屋のドアがノックされる音

「な、なにさ！？」

コン、コン……ガチャリ

「ひぃぃ！！」

布団を頭迄被り、呪文を捕らえる

「悪霊退散、悪霊退散、悪霊退散、悪霊退散ー！！」

「……だ、大丈夫？」

「え？」

聞き慣れた声に布団から顔を出すと、僅かな月明かりに照らされた秋姉の姿

秋姉は心配そうな顔に、多くの汗を流している

「あ、秋姉？」

「……よ、良かった」

秋姉は起き上がった俺をギュッと抱きしめる

秋姉の胸は激しい鼓動を立てていて、その体は熱く、汗だくだと言うのに何故か甘い匂い

「ど、どしたの？？」

「……心配した」

それからまだ寝ている雪葉を起こさぬ様、ゆっくり部屋を出て、リビングへと行く

そこで話を聞くと、どうやら先程からの電話は秋姉だったらしい

秋姉は寂しげな俺を心配して電話した所、俺が悲鳴を上げた物だから、気が気でなかったとの事

「……そろそろ学校に戻るね」

汗が引いた後、秋姉がぽつりと呟いた

「自転車で送って行くよ」

「……大丈夫」

「送らせて」

「……ん」

家を出ると少し肌寒い満月の夜

学校迄の距離を秋姉とドライブだ

「でも、あんなに何度も掛けて来なくて良いのに」

特に一度目の着信と、二度目の着信の間なんて１０分と無いし

「……私、二回しか掛けて無い」

「……え？」

今日の精神的疲労

俺≦秋＞＞＞＞父＞＞＞＞＞＞＞雪

続いてる

第27話：夏の休日

ゴールデンウイーク2日目

俺は朝飯を食べ、雪葉とゲームをし、少しだけ勉強をしてからコンビニと本屋に行き、家に戻って昼飯を食べて……

「ふぁ～、……あ～頭いた～」

昼飯を食べていると、夏紀姉ちゃんがリビングへと入って来た

「……かゆ」

Tシャツと短パン姿の夏紀姉ちゃんは、腹をボリボリ掻いている

普段外へ出掛ける時と、同一人物とは思えない

「な、夏紀姉ちゃん？　いくら休みだからって余りにも……」

「うっさいわね。姉の休日に、ごちゃごちゃ言うんじゃ無いわよシスコン！」

「シ、シスコ……」

可愛い弟をシスコン呼ばわりとは……なんて酷い女だ

「何よその目は」

「な、夏紀姉ちゃんには弟をいたわる気持ちが無いのかよ！」

いっつも変態扱いしやがって！

「いたぶる？　いたぶって欲しいのかしら？
そうねぇ、アキも居ないし……ふふ。良いわよ？」

蛇の様に舌なめずりをする夏紀姉ちゃん

「な、夏紀姉……様？」

「ふふ……うふふふ」

「ひ、ひぃい！？」

15分後

「ふぅ。変態な弟を持つと苦労するわ」

肌がツヤツヤとしている夏紀姉ちゃん

「か、関節が、腰が……」

「さてと、出掛けるから準備しなさい」

「は、はい？」

「ドライブ行くわよ。雪葉も連れて」

「ハァ？　何言って」

「……ょん」

ゴニョゴニョと何かを呟いた

「何？　聞こえないって」

「コミュニケーションよ！　あんたが言ったんでしょうが！！」

「お、俺が言ったって……あ！」

たまには雪葉達と話せって言ったあれか！

「だからって突然言われても困るっての。俺達にも予定と言うものが」

「あんたが欲しがってた桃太郎侍のサイン色紙、あげるわよ」

「行きましょう、姉様」

「よし、それじゃ雪葉を呼びに行くわよ」

「イエッサ！」

敬礼をし、雪葉の部屋の前へ

コンコンとノックを鳴らす

「……」

「いないのかしら？」

「う～ん、さっきまで居たけれど……」

もう一度ノックをする

「……雪葉？　いないのか？」

「……ちょっと覗いても大丈夫かしら？」

「俺に聞かないで下さい」

「使えない男ね！　良いわよ、あたしが覗くから」

夏紀姉ちゃんはゴクリと唾を飲んだ後、静かにドアを開ける

「あんたは覗き魔かよ」

「ああん！？」

ま、間違えて口に出してしまった！

「ゆ、雪葉が先だろ！」

「あ、そ、そうね、ごめん」

何とかごまかして部屋の中を覗くと、ベットの上で抱き枕を抱えて眠る雪葉

「……寝てるわね」

「そうだね」

「……にぃ」

「ん？　寝言かしら」

「んぅ……あ、だめぇ、お兄ちゃん……すき」

「……」

「……後で警察行きましょう？」

「はぁ！？」

何、勘違いしてるんだこのアマは！！

「……そ……」

「しっ！　続きがあるわ」

「す……き焼きに味噌……ダメ」

俺達はドリフの様にずっこけた

「どういう寝言よ！」

「ね、姉ちゃん！　起こしてしまうから」

「あ、ごめん……ごめんね雪。おやすみなさい」

俺達は静かにドアを閉める

「……姉ちゃん」

「はいすみませんでした、ごめんなさい」

なんつー心の篭ってなさ！

「けっ！　ドライブは駄目になったがサインは貰うからな！！」

「何言ってるのよ、行くわよドライブ」

「へ？　だ、だって雪葉は寝てるし春菜と秋姉は部活出し……」

「あんたが居るでしょう」

３０分後

「……」

車庫の前で待たされる俺

「待たせたわね」

夏紀姉ちゃんは、きちっとしたスーツにレイバンのサングラスをかけて登場した

「ど、どちらの西部警察から？」

「誰が渡哲也だ！！」

ぽかりと殴られる

「乗りなさい」

夏紀姉ちゃんは愛車であるスカイライン　３７０ＧＴ　タイプＳＰに乗り込み、助手席を開ける

「ど、どちらへ行くのですか？」

俺は連れて来られた猫の様に尋ねると、夏紀姉ちゃんはニヤリと笑い

「風に聞きなさい」

と、アクセルを踏み込んだ

これが悪夢の始まりだとはその時の俺は気付きもしなかったのです

……

夏の休日　2

「どう、中々気持ちいいでしょ？」

町から少し離れた峠道。夏紀姉ちゃんとのドライブは意外と順調で、中々楽しい物だった

「ああ！　風も涼しいし、凄く気持ちいいよ」

「ふふ。山の麓で温泉あるから、後でひとっぷろ浴びようか」

「良いね！」

今日の夏紀姉ちゃんは何か優しくて良いぜ！

「こんなに気分が良いならもっと早く誘えばよかったかな」

「姉ちゃん……」

「この先がちょっと良い景色がなのよね～」

ニコニコしている夏紀姉ちゃん。だが、次の瞬間その笑顔が凍りついた

後から猛スピードで突っ込んで来る車

車は甲高いスチール音をたて、タイヤを削りながらカーブを曲がり、俺達を抜かしてぶっ飛んで行く

そして、まるで邪魔だといわんばかりのクラクション

「なんなんだアイツ!?　危ないな!」

「……」

「な、夏紀姉ちゃん?」

夏紀姉ちゃんのこめかみがピクピクと動く

「い、嫌よね交通ルールを守らないアホは。私達はルールを守ってゆっくり……」

背後から爆音がする

それは車の一台や二台では出せない音

「も、もしかして走り屋のコースなのか此処?」

「ひ、昼には出ない筈なのだけどねぇ」

夏紀姉ちゃんの声が震えている

不安で怯えている?　初めて聞く人にはそう聞こえるかも知れない

でも俺は知っている!　この声の震え方は!?

ゴオオ、ゴオオオと、地響きが起き続いて凄まじい勢いで迫る車達

その車はクラクションをガンガンと鳴らし、俺達を抜く時に邪魔だ

バカヤロウと罵声を！

……バキン！

何かが割れる音にハッとし横を見ると、サングラスを握り潰していた夏紀姉ちゃん

「……バカヤロウだ？　ああ！？」

「な、夏紀姉様？」

「あたし達姉弟を舐めた事を後悔させてやんよ！！」

「ち、ちょっと！？　の、のんびりドライブをぅうおおおお？」

夏紀姉ちゃんはアクセルを強く踏み込み、それと同時にＧが体にのしかかる

姉ちゃんは左手でシフトチェンジをって

「ＡＴだってこれ！」

「なんで！？」

「アンタいっつも乗ってるだろ！」

夏紀姉ちゃんはアクセルを吹かす

カタン

一瞬揺れたと思った後、またアクセルを強く踏み込む夏紀姉ちゃん

第２８話：春のこいのぼり（前書き）

夏の休日は、ちょっと中断です。何気に雪のかくれんぼも途中ですが、その内書き足します。

第２８話：春のこいのぼり

部屋で将棋番組を見ていると、いきなり春菜が部屋に飛び込んで来た

「兄貴ー！！」

「どうした？」

春菜がいきなり入って来るのはいつもの事なので、流石に俺も慣れっこだ

「河川敷でこいのぼり大会やってるぞ！　行くしかないって！！」

「あ～俺パス。今、テレビが良い所で……」

「なんだよ……雪や夏姉とは出掛けたくせにさ」

「こいのぼり超みてー！」

春菜にしては珍しい拗ね方をしたので、思わず俺はそう叫んでいた

着替え、外に出ると五月晴れの空

少しジメっぽいが、風があるので不快感はあまりない

「しかしこいのぼりか、なんか久しぶりだな」

男は俺しかいないから、ひな祭りに比べるとショボイイベントだった

「だよな！　今日風あるからきっと凄いぜ～！！」

妙にテンションが高い春菜としばし歩き、こいのぼり会場へと着く

「ひゃー、すっげー！」

河川敷には、ぱっと見では数え切れない程のこいのぼりが、針がねに吊されていた

普通のこいのぼり、派手なこいのぼり、かわいいこいのぼり、ちょっと不気味なこいのぼり……

「……これは確かに凄い」

どうせ、たいしたことないと思っていたら大間違いだ

「な！　凄いだろ！？　一緒に来て良かったろ！　ほら近くに行こう！！」

春菜は俺の腕を引っ張り、河川敷の丘を下る

「は、春菜、ちょっと」

強引な春菜に苦笑いしながら着いて行く、強い風が吹いた

バサバサバサバサ！！

風になびく強音。びっくりして見上げると、空を泳ぐ色彩りのこいのぼり達

まるで海だ

「……誘ってくれてありがとな、春菜」

俺が礼を言うと、春菜はキョトンとしたが、次の瞬間

「ああ！」

と、ニッコリ笑顔で頷いた

それから暫くこいのぼりを見ていると、春菜がぽつりと呟く

「……ところで兄貴」

「何だ？」

「あのタコ焼き美味そうじゃない？」

「……」

「向こうに金魚掬いもあるんだよな～」

コイツまさか俺を財布代わりに……

「……ちょっとだけな？」

「え！　やったね！！」

今日の浪費

俺＞＞＞＞＞父＝春

続けて

第２９話：父の聖剣

佐藤がウリガド達に救われてから早一週間が過ぎた
村秘伝の薬草のお陰か、体の傷は大分癒え、村の住民と打ち解けて来た頃、その事件は起きる

「うん、美味しそうな魚が釣れた。アルテル達に食べさせよう」

魚籠に数匹の新鮮な魚を入れ村へ帰ろうとする佐藤の目に、モクモクとした黒煙が映る

「あ、あれは！」

村の方角！？

佐藤は釣り道具をほうり投げ、村へと急いだ

「ヒャッハー！　酒だ女だひらめきだー！！」

「Ｉ　ａｍ　ｈｕｎｇｒｙ.　Ｉｔ　ｉｓ　ｄａｎｇｅｒｏｕｓ.」

「ブルンブルン！　俺様は川の下流にある村のひらめき村長だー！！　食料よこせー」

強靭で凶悪な肉体を持つ数十人の男達が、村の中で暴れ回っている

「女、女！　ヒャッホーイ」

「食い物、食い物！　マンモスうれぴー！！」

「引き上げじゃ、引き上げじゃー！！」

ウオオオー！！

女や食料を担いだ男達が村から逃げようとしている

「ま、待ちなさい！」

佐藤は男達の前に立つ

「何だお前！」

「君達！　自分が何をしているのか分かっ」

バキ！

突然横から殴られ、佐藤の意識は一瞬で飛ぶ

そして目覚めた時には、荒れ果てた村の中だった

「……う、うう」

「……目が覚めたかの？」

ウリガドは疲れた声で言う

「ぼ、僕は……あ！　む、村は！？」

起き上がり、周囲を見回すと崩壊した家々や怪我をした男達

「村はもう全滅じゃ。此処を出て行くしかあるまい」

「そ、そんな……エルテル達は？」

「連れて行かれた」

「なっ！　た、助けに」

痛む体を無視し、立ち上がる佐藤

「無理じゃ。奴らはひらめき族の者達。森の悪霊に取り付かれた凶悪な者なのじゃ、精霊から見放された我らでは勝てぬ……」

「しかし！」

「勝てぬのじゃ……」

ウリガドは血が滲む程、拳をにぎりしめる

……凄まじい怒りだ

「……私は行きます」

「サトウ！？」

「私はこの村の者ではありません。私が敗れても貴方方には何ら影響はありません」

「ば、馬鹿な事を言うでない！　お主が死ねばエルテルが！」

「そのエルテルを救いに行くのです」

ウリガドを真っ直ぐに見つめる佐藤

（何と強く真っ直ぐな目じゃ……。この優しげな男にこれ程までの激情があったとは）

ウリガドは視線を落とす

「着いて来なさい」

そして、村の奥へ向かう

聖なる祭壇の洞窟。

村人以外の者を入れた事がない神聖なる場所

洞窟内には淡い緑色の光が地面から、上へゆっくりと昇って行き、幻想的な雰囲気をかもちだす

「……綺麗だ」

「……ニ十年前、この場所に邪悪なる者が入った。その者の名はオルテガ、我が弟。奴はこの奥に眠る2本の剣を狙っ

たのじゃ」

その剣は魔剣アホカニスト

その剣は聖剣エクスカリパー

「弟は力を求めておった。この星を支配する力を」

「星を……支配」

「聖剣は聖なる者にしか手に出来ぬ剣。魔剣は魔に堕ちた者が手にする剣。弟は魔剣に魅入られたのじゃ」

「……何て事だ」

「今、弟は下流にあった村を総て支配した。もうじき上流に攻め寄るつもりじゃろう……」

「……」

「わしらはオルテガを止めようと、聖剣を手に取ったが、剣に拒否されてしもうた」

「……」

「……お主ならば」

「え？」

「お主ならば抜けるかも知れぬ」

洞窟の最奥。清純で厳格な息苦しい場所
そこには左右に二つの祭壇があり、右側の祭壇には一本の長剣が奉られていた

「聖剣、エクスカリパーじゃ」

「これがエクスカリバー」

「そう、エクスカリパーじゃ」

「……息子に見せてあげたいな」

「さあ、サトウよ！　聖剣を手に取れぃ！！」

「はい！」

佐藤が祭壇に近付き剣を手にした瞬間、洞窟内はまばゆい光に包まれた

「ぬ、ヌオオオ！？」

「な、なんて温かな……」

光が治まり、ゆっくりと目を開けたウリガドの目に映ったのは、聖剣を掲げる勇者の姿

「おお……おおお！！」

ウリガドの目から涙が零れ落ちた

「……僕は行きます。エルテルを救いに！」

今日の聖剣

父

つづくのか？

第３０話：月の訪問

ピンポーン

ゴールデンウイークの最終日。リビングで母ちゃんとお茶を飲んでいると、チャイムの音が鳴った

「は～い」

「俺が出るよ、母ちゃん」

「そお？　ありかと。いい子ねー」

頭を撫でようとしてきた手を華麗にかわし、玄関へ

「はい、今出るよっと」

ドアを開けるとナップサックをしょっている美月の姿

「おっす！」

「お、美月！　おっす。
雪なら……」

「図書館！　今日は兄ちゃん達と遊びに来たんだ」

「おーいいぜ。上がりな」

「はーい！」

元気よく家へ上がる美月

「秋姉は朝、合宿から帰って来た所だから少し休ませたいんだ。今はナマケモノと暴れ馬がいるけど、どっちと遊ぶ？」

「ナマケモノ？　馬？」

「ああ。ナマケモノ……夏紀姉ちゃんには前に会ったろ？　暴れ馬は俺の妹で春菜って言うんだが、美月と気が合うかもな」

「ふーん。あ、でもまずこれやろ？」

そう言ってナップサックから出したのはＰＬ２のゲーム、キャプテン翼子

熱い必殺技が面白い少女サッカー漫画をゲーム化した物だ

「お、翼子じゃん！　俺、超上手いよ？」

「ほんと!?　じゃ勝負だよ!!」

「よし、俺の部屋に着いて来い！」

「はーい」

それから2時間。夢中になってゲームをやっているとぐ～っと美月の腹が鳴った

「腹空いたか？」

「うん。何か食べさせて？」

クリクリとした目で俺を見上げる美月

「そうだな。じゃちょっと待ってな」

そう言って部屋を出てリビングへ行く

母ちゃんは出掛けたのか、姿が無かった

「何かあるかな？」

冷蔵庫を開けると、焼肉用のカルビとツナ缶。後キャベツ

「ふむ」

キャベツを千切りにし、カルビを焼く

「ほっと」

ご飯を丼に注ぎ、キャベツと焼いたカルビを載せて、ツナを少々。
最後にわさびを添え、醤油を少し垂らす

「よし」

美月に持っていってやろう

「はい、おまち」

部屋に戻り、丼とお茶をテーブルに置く

「いっただきまーす！」

両手を合わせ、一口食べる美月。もぐもぐと一生懸命噛んでいる

「うまーい！　兄ちゃん、これ超うまいよ！！」

「そ、そうか？　おかわりあるから沢山食べてな？」

「うん！　……兄ちゃんのお嫁さんになればこうゆうの毎日食べれるのかなぁ」

美月はぶつぶつと何かを呟いている

「ん？　どした美月」

「……うん、兄ちゃん！　結婚しよう！！」

「ああ！　ってなに言っとりますがな！？」

びっくりし過ぎて思わず関西人（エセ）になってしもうた

「あたしの事嫌い？」

急に潤んだ瞳になる美月。やっぱ女は凄い！

「いや、早過ぎますよ？　僕達はまだお互いの両親にも挨拶してい

ないじゃないですか？」

しどろもどろに訳の分からない説明をすると、美月はニッコリ笑って

「そっか！　じゃまた今度で良いや」

と爽やかに言った

「そ、そう？」

ホッと息を撫で下ろし、食べ終えた丼を美月と一緒にキッチンへ片付ける

「はい兄ちゃん」

「サンキュー」

丼を受け取って素早く水洗い

「よし、終わりっと」

「兄ちゃん、兄ちゃん。次は何やろっか？」

「んーそうだなぁ……」

バターン！　リビングのドアが突然開く

「腹減ったぞ！　なんか作くれ～」

暴れ馬、もとい春菜が飢えた野獣の目で俺を見据えた

「は、春菜」

「春菜？　暴れ馬の？」

「グルルルル～！」

唸り始めた！？　ヤバイ！

「い、今オムライス作ってやるよ」

「ああ！　……ん？　兄貴の友達？」

俺の横に居る美月の存在にようやく気付きやがった

「うん！　坂本美月！！　よろしくね、姉ちゃん！」

「おう！　よろしく！」

リビングのソファーにドカッと座った春菜。興味を持ったのか、美月は春菜に近寄る

「姉ちゃんは兄ちゃんの妹なんだよね？」

「ああ、そうだぜ」

「雪や秋ちゃん、なっちゃんも居るし……兄弟が沢山居ていいな～」

「う～ん、そうかもな。夏姉は頭良いし、秋姉は頼りになる。雪は可愛いし、兄貴は中々使えるし……」

俺の評価は中々使える程度なのか……

「……出来たぞ」

皿に盛りつけて、キッチンのテーブルに置く

「お～！　サンキュー」

春菜は飛び込む様に椅子に座り、勢いよくがっつく。……男らしいな

「だ～！　うんまー！！」

「そうか？」

美月といい春菜といい、美味そうに食ってくれるから作りがいがあるぜ

「兄ちゃんってほんと料理上手いんだねー」

「か、簡単な物だけどな」

……照れるぜ

「ふー食った、食った」

「早っ！？」

ちゃんと噛んでるのか？

「さーて飯も食ったし、川で釣りでもしてくるかー」

オッサンの休日かよ……

「春菜、少し俺達と遊ばないか？」

「ん？　珍しいな兄貴が私を誘うの。良いぜ、何するんだ？」

「そうだな……美月は外と中、どっちで遊びたい？」

「外！」

「よし。じゃ外でサッカーでもするか」

んでもって家を出て向かう近所の公園
先に歩く俺の後ろで、美月と春菜は器用にリフティングしながらついて来ている
「やるじゃん！」
「春ちゃんも上手！」
僅かな間に随分仲良くなったみたいだな
「もうすぐ広い道路に出るから手で持っときなよ」
「はーい」
美月はボールを数回足の甲でリフティングした後、真上に蹴り上げ、落ちてきた所を胸に抱いた
「……上手いな」
俺よりも遥かに上手い
「兄ちゃんの方がもっと上手いよ！」
「……え？」
「翼子一度も勝てなかったもん」

あ、あれはゲームですよ美月さん……

「う～ん、兄貴はあんまり運動得意じゃないけどな」

「……そうなの？」

つぶらな瞳で俺を見つめてくる美月

「……上手いよ？」

し、しまった！　思わず嘘を……

「だよね！」

「練習したのか？　それなら誘えよ～」

少し拗ねた様に言う春菜

「お、お前は部活だったしさ」

嘘はこんな風に嘘を呼ぶのか……

広い道路を渡り、木々に囲まれた狭い公園へ

公園の中は人が少なく、場所を目一杯使える

「じゃー先ずはパス回しでもするか」

三角形になる様に8メートル程離れ、春菜は俺にパスをした

「おっと」

ボールをノーバウンドでトラッピングして、美月へ

美月は踵でボールをポンと上げて、春菜に

それを数分繰り返し、なんだ楽なもんだとすっかり調子に乗った俺は、致命的な間違いを起こした

「春菜～もっと強めに来いよ～」

「ん？　オッケー」

春菜は左足を強く踏み込んで、振り上げたバネのある右足をボールへ下ろした。良いフォームだ。インステップキックって奴だな

そのボールは、俺の顔目掛け弾丸の様に……

「……はっ！？」

気付くと俺は、公園のベンチで横になっていた

そんな俺を心配そうに見下ろす春菜と美月

「目、覚ましたか？　大丈夫かよ」

「あ、ああ」

起き上がって辺りを見る。……？　き、記憶が飛んでる！？

「な、何が起きたんだ？」

「私のパスを兄貴が顔面で受けたんだよ」

「……パスで？」

パス……パス？

「あっ！　思い出したってパスじゃないだろアレ！」

タイガーとかサイクロンとかそんな類いのシュートじゃないか！！

「兄貴が強くしろって言うから……」

「い、言ったけども！」

「あ、また鼻血」

美月がハンカチで俺の鼻を拭く

「兄ちゃん、大丈夫？」

泣きそうな声だ

「あ、ご、ごめんな。大丈夫だよ。ありがとう」

美月の頭をぐりぐり撫で、立ち上がると、頭がくらっとした

「うわっと!?」

「と、危ないな」

倒れそうになった俺の体を春菜は支え、次に背を向けしゃがみ込む

「……どした?」

「背負ってやるよ、兄貴」

「い、いいよ!」

「遠慮するなって。ほら」

「……遠慮なんかしてねってのの」

いくら何でも小柄な春菜に俺を背負える訳ねーべさ

「早くしろよ~」

「……はいはい」

無理だと分かれば諦めるだろう。仕方なしに春菜の背に乗ると……

「よっと。じゃ帰ろ~ぜ」

いとも簡単に持ち上げやがった!?

「お、重くないのか?」

「うん？　別に」

何者だコイツ！？

「春ちゃん。辛くなったらあたしが代わるね」

流石に無理だろ！？

「サンキュー。でもま、近いし兄貴は軽いから大丈夫だぜ」

……僕は６０キロありますけど？

「昔はこんな風によく兄貴におぶられたよな。これからは私が背負ってやるからな」

「……それ何十年か後に歳老いた親へ言うべき台詞じゃないか？」

その後も力強くおぶられ、何とも言えない恋しさと切なさと心細さを感じつつ家へと着く

人に見られなかったのは幸運だった

「よし、着いたっと。歩けるか兄貴？」

「大丈夫だっつーの」

これ以上情けない所を見せられるかっての

「そっか。じゃお先に！　ただいまー」

ドタバタと家に入って行く春菜

「さて、俺達も入るか」

「……兄ちゃん」

「ん？」

「はい、ボール」

美月は持ってくれていたサッカーボールを、俺に手渡した

「ああ。ありがとう」

「うん。……じゃあたし帰るね。今日はゴメンね兄ちゃん」

「へ？　何で美月が謝るんだ？」

春菜ならともかく。てかあいつ謝ってないな！

「あたしが外で遊ぶって言ったから……」

「そんなの美月が悪い訳じゃないって、気にし過ぎだっての。……まだ時間あるなら家で遊んでいきな、そろそろ秋姉も起きるだろうし」

「でも……」

「友達だろ？　つまらない遠慮するな」

「兄ちゃん。……うん！」

ハンカチも洗わないといけないしな

今日の鼻血

俺＞＞＞＞＞父≦春≦月

ツヅケ

第３１話：風のさようなら

夕方５時。コンビニへ行くついでに美月を家まで送る

「じゃーね、兄ちゃん！」

「ああ、またな美月！」

ぶんぶん手を振る美月に負けないぐらい手を振ると、美月は更に大きく手を振った

「む！　やるな！」

「バイバーイ！！」

「ああ！！」

太陽のような美月の笑顔をちょっと惜しみながら、俺は振り返りコンビニへと向かう

美月の家から歩いて５分の場所にあるコンビニ、家族マート

家族マートに入って必要な物をカゴに入れ、アイスケースの前へ

「……アイスでも買って春菜に見せびらかすか」

あいつが一番好きなホームランバーを１０本買ってコンビニを出ると、強い風が吹いた

「おっと……」

強いけど、清々しく清純な風だ。
まるで秋姉のよう……なんてね

「やあ、お兄さん」

「ん？」

横から呼ばれ、右を見ると帽子を深く被った男の子

「……って風子か！」

「偶然だね。いや運命なのかな？」

「運命？」

「ふふ。……少し時間良いかな？」

「ああ、いいぜ」

「ありがとう。それじゃ河川敷の方に行こう」

風子と共に川の方へと向かい歩く

「……」

「……」

奇妙な沈黙。お互いに話すきっかけを探している感じ

「……ほら」

「え？」

「ホームランバー。一本やるよ」

「……懐かしいな。ありがとう、お兄さん」

風子はホームランバーを舌で軽く舐めた

俺もホームランバーを口にくわえ、黙々と食べる

一本目……二本目……三本

「……当たり」

「ん？」

三本目を食べようと、紙包みを破いた所で風子がボソッと呟く

「ふふ、当たりだよ？　お兄さん」

俺に当たりと書いてあるアイスの棒を見せる風子は、歳相応の可愛い笑顔だった

それから１０分程度歩いて河川敷へと着く

「……座ろうか？」

河川敷と川を繋ぐ石階段。その一番上に座り、風子と川を眺める

夕日の光に淡く反射し、緩やかに流れる川

「綺麗だね」

「ああ」

「……本当に綺麗だ」

風子はこの景色を焼き付けるかのように凝視し、そして満足したのか、ゆっくり視線を外した

「僕、引っ越すんだ」

唐突の言葉

「……ああ」

予想していた言葉

「……いつだ？」

「明日」

「雪には？」

「言ってない。お兄さんが最初。そして最後」

「……お前らしいな」

「僕は風だからね」

そう言い微笑む風子は、とても大人びていて、ガキな俺は気の利いた一言すら言えない

「誰かにお別れを言いたかった。この町はとても楽しかったから……未練だね」

「風子……」

「目を閉じて、お兄さん」

「え？」

「僕の最後のお願い」

「……分かったよ」

瞼を閉じる

「僕が良いと言うまで開けちゃ駄目だよ」

「分かった」

俺は更に強く瞼を閉じた

「……ありがとう」

多分、心からのお礼

そして

「……ん」

左の頬に触れる柔らかい感触

「……風子？」

「開けちゃだめ」

耳元で甘く囁く声と、俺の瞼に優しく触れる指

「わ、分かった！」

高鳴る鼓動をごまかす様に強く頷き、風子の言葉を待つ

……？

「まだか？　風子」

その問いに答える声は無く不安に目を開けると、風子の姿もまた無い……いや、風子が被っていた帽子だけポツンと置いてあった

「……風子？」

帽子を手に取り、風子の姿を捜す

河川敷の上、十数メートル先に風子の姿

「……風子」

「……お兄さん」

風子の長い髪が、風になびく

「……行くのか？」

「うん」

「……」

「……さようなら、お兄さん」

振り返り、歩き出す風子

まるでこれが今生の別れかの様に

「っ！！　さよならなんて言うな風子！　風は、風は必ず舞い戻って来る！　お前は俺達の元に必ず戻って来る！　そうだろ？　そうだろ！　風子ー！！」

「……ありがとう、お兄さん」

最後に風子は泣き笑いの顔を見せ、風の様にあっさりと去っていった

「……風子」

せっかく雪とも仲良くなったってのに！

「くそ！　くそー！！　太陽のバカヤロー！！」

俺はこのやり場の無い怒りを、沈んでゆく太陽に向かっていつまでも吠え続けた

ちなみにアイスは溶けていた

「あ、兄貴のバカヤロー！」

今日の涙

風≦俺＞＞春＞＞＞父

つづく

第３２話：風のこんにちは

ゴールデンウイークが開け今日からまた学校が始まる

ベットから起き上がり、時計を見ると朝七時。窓のカーテンを開けると外は快晴

だけど俺の心はドンヨリしていて晴れない

「……はぁ」

ため息一つ漏らし、ベットに座り込む

「……雪葉に何て言おう」

昨日からずっと悩んでいたが、結局答えは見付からなかった

部屋を出て居間へ行くと、秋姉がキッチンのテーブルで朝飯を食べていた

「おはよう、秋姉」

「……うん。おはよう」

秋姉の横に座ってバナナを食べる

「……」

「……大丈夫？」

「え？」

「元気……ない」

秋姉は心配そうな顔で俺を見つめる

「秋姉……。大丈夫！」

雪葉の兄である俺が、いつまでも暗い顔してたらあきまへんな！！

「よし！」

雪葉に話そう！！

「秋姉、雪葉はまだ寝てるのかな？」

「……飼育委員」

「飼育委員？」

雪葉は放送委員だったような……

「……手伝いに」

「あ、なるほど」

雪葉はいい子やな～って

「昨日の内に言えばよかったな」

不思議そうな顔をする秋姉に軽いフォローをして、俺は早めに家を出た

んで学校。久しぶりって程でもない友達と適当な話をして授業をこなす

その間も雪葉と風子の事ばかり考えていた

今頃、風子は遠い旅の空だろうか

そして突然の別れに雪葉は泣いているだろうか？

だけど同じ空を見ている限り、いつでもまた風に会える

だから友の旅立ちを笑って見送ってあげようぜ？

な、雪葉

「……放課後ケーキでも買って帰るか」

ハードボイルドな雰囲気を纏いつつ駅前へ。んでもって高いケーキを財布が空になるまで買い、家へと帰る

「ただいまんぼう。雪葉帰ってる？」

「お帰りんごすた～。いるわよ～」

玄関で掃除機をかけていた母ちゃんに声を掛け、二階へ上がる

今頃、雪葉は枕を涙に濡らし……

「あはははは！」

あれ笑ってる！？

「ゆ、雪葉～兄ちゃんですよ～」

控えめにノック

「あ、お兄ちゃん！　今出るね～」

ガチャリと開いたドアから出て来たのは、満面笑顔の雪葉

「なーに、お兄ちゃん？」

「え、えっと……あ、ケーキどうですか？」

「わぁー！　駅前のケーキ屋さん。ありがと、お兄ちゃん！」

雪葉の笑顔を見て俺は確信心する。雪葉は……

「わ、わざと明るく……」

「うん？」

いいさ、兄ちゃんには分かる。その笑顔の奥にある愛と哀しみが

「ふ、気付かない内に随分でかくなりおって」
小首を傾げる雪葉の頭を軽く撫でてやる
「ん～？　……えへ」
「さ、ケーキ食おう。いつもの紅茶で良いのか？」
「うん！　あ、風子ちゃんは何飲みたい？」
「そうそう、風子は何飲み……へ？」
慌てつつ雪葉の部屋を覗くと、円卓の前でちょこんと座っている風子
「こ、こんにちは、お兄さん」
「こ、こんにち……は？」
き、今日引越すんじゃ？
「？　どうしたの、お兄ちゃん」
「え？　あ、いや……」
目を白黒させていると、風子がポソリと呟く
「ち、中止になったんだ、……引越し」
視線を下に逸らし、モジモジする風子

「……そ、そうか」

「う、うん」

なんかもう、すんげー気まずい

「お兄ちゃん？　風子ちゃん？」

「……でもめっちゃ嬉しいぜ！　これからも宜しくな、風子！！」

「……ふふ。宜しくね、お兄さん」

キョトンとする、雪葉に後で理由を教えてやろうと思いつつ、俺はこの早過ぎる再会を目一杯喜んだ

今日の笑顔

風≦俺＞＞雪＞＞＞＞＞父

続くっ！

第３３話：母の朝食

その日は朝から夜だった

などと１０代には分からない事を言いつつ窓を閉め、真っ黒な曇り空を隠す様にカーテンも閉める

「……まだ６時半か」

ちょっと早く起きすぎたけど、リビングにでも行くか

んで向かったリビング。キッチンのテーブルには制服姿の秋姉と、着替えた雪葉が座っていた

「お早う」

「……お早う」

「おはよ、お兄ちゃん！」

この二人はいつ起きてるんだと思う程、朝が早い

「おはよ～。今日の朝ご飯は和食よ～」

そしてのどかな顔をしているが、母ちゃんもまた朝が早い

「和食か」

母ちゃんは凝り性だから、きっと栄養バランスを考えた素敵な朝食を……

「おみそ汁とカツ丼それにおしんこ～」

「わー、油っぽくってボリュームたっぷり。朝から健康に悪そーって夕飯でしょこれ！？」

びっくりしながら秋姉と、雪葉を見ると、確かにカツ丼を食べている

「2人ともよく朝から食べれるね」

「……朝ご飯は元気の源」

どこかのコンフレークCMみたいな事を言う秋姉

「今日は春お姉ちゃんのリクエストなんだよ」

もぐもぐ食べながら説明してくれる雪葉

「……ああ、そう言う事ね」

相変わらず空気を読まない奴だ

「それで春菜は？」

雪葉のほっぺに付いた米粒を取りつつ、秋姉の横に座る

「もう食べて部活行ったわよ～」

「春お姉ちゃん三杯もお代わりしたんだよ！　凄いよね！！」

満面笑みの雪葉

「……あいつは色々な意味でアホだな」

しかし朝からカツ丼か……

若干うんざりしていると、肉を揚げる良い音がした

次に匂い。醤油や砂糖、みりんや出し汁が混ざった様な甘じょっぱい匂い。そしてみそ汁の匂い

ぐ～

腹が鳴る

「はい、お待たせ～」

そんな言葉で出てきたのは銀色に輝き立つ米と、その上に威風堂々と横たわるキツネ色のトンカツ

トンカツは、とろ～っとした半熟の卵とじに包まれていて、その姿たるやドレスを着た貴婦人の様

俺はその貴婦人をダンスに誘うべく、箸を伸ばす

……ごくりっ

喉が鳴った

「そ、それでは」

震えた声、震える指

お、俺は緊張しているというのか！？

「……食べないの？　お兄ちゃん？」

「ごめん、ごめん。いただきまーす！」

サクッ！！

噛んだ瞬間、俺の口の中で宇宙が広がった

サクサクでふっくら。それでいて柔らかく、肉汁が口一杯広がり、

尚且つ暴れる

こ、これは……

「うーまーいーぞー！！」

カツのＩＴ革命や！

「うふふ。いっぱい食べてね～」

「ああ！　母ちゃん、さすが！！」

箸が……箸が止まらないぜこんちくしょう！

がつがつとカツを食べ、食い終わり、力溢れた所で秋姉と雪葉が家を出る時間となった

「いってきまーす！！」

「行ってらっしゃい雪葉。秋姉も行ってらっしゃい」

「ん。……行ってきます」

「行ってらっしゃ～い」

二人を玄関で送り出して、再びリビングへ

「こぶ茶飲む～？」

「うん」

母ちゃんがお茶を入れてる間、ソファでぼーっとテレビを見る

「はい、どうぞ～」

母ちゃんは反対側のソファーに座り、ガラステーブルへ湯飲みを二つ置いた

「ありがとう」

一つを手に取り、息で軽く冷ます

「……ふぅ」

飲んだ熱々のこぶ茶は、俺の心をほっとさせてくれた

「おいし？」

「うん」

「うふふ」

「はは」

いつもは慌ただしい朝。こんなふうに母ちゃんと二人きりで、ぼーっとするのも久しぶりだ

「母ちゃん」

「なーに」

「呼んでみただけ」

「あら～。うふふ」

「……へへ」

なんか落ち着くぜ

んな風な感じで時間を過ごしていると、あっという間に学校へ行く時間

手早く準備をして、いざ学校へ

「それじゃ行ってきます」

「行ってらっしゃ～い」

笑顔が優しい細目の母ちゃんは、やっぱり玄関まで見送ってくれた

「気をつけてね～」

「あいよ！」

母の日は何を買ってやろうかなんて迷いつつ、俺は学校へ行く事にした

今朝の胃もたれ（二日酔い含む）

雪＞夏＞＞＞秋≧俺＞母＞＞＞＞＞＞＞父＞春

続けな

第３４話：花の雨宿り（前書き）

この頃の花梨は、既に魔法少女です（短編参照）余計な設定を増やしてしまいました……。ハリーポッターを見なければ良かったかも

第３４話：花の雨宿り

学校が終わり放課後。突然降り出した雨は、数分後には地面に突き刺さる様な大雨となっていた

「傘持って来て正解だったな」

俺の聡明な判断力に一人で感心していると、一丁目公園前にたどり着く。缶コーヒーでも買って、飲みながら帰ろうかな

公園に入り、自動販売機でコーヒーを買っていると、軽い視線を感じた

その視線を追うと、公園の屋根付きベンチの下でぽつんと座っていた小学生が、プイっとそっぽを向く

「ん？　あれは……花梨か」

傘忘れて雨宿りって所か？

俺は花梨の方へ近付いてゆく

「……何よ」

近付いた俺に対し、花梨の第一声がこれだ。相変わらず可愛くない

「傘、入ってけよ。一緒に帰ろう」

「なっ！？　い、嫌よ！　誰かに誤解されるかも知れないでしょ！

！」

「いや、されないから」

されたら俺の方がヤバい

「それに私は傘が無くなって……」

言葉を止める花梨。濡れて帰る気か？

「こらこら。せっかく綺麗な髪をしてるんだし、わざわざ濡れて帰る必要は無いだろ？」

「いっ！？　ば、バカじゃない……の」

怒らせてしまったのか、顔を下げる花梨

「……はぁ、仕方ないな。ほら」

傘の取っ手を花梨の方へ突き出す

「え？」

「貸してやるからこれで帰りな」

「あ、あんたはどうするのよ」

「走って帰るよ、俺は髪短いし」

拭けば直ぐ乾くだろ

「それじゃまたな！」

「……あ……ね、ねぇ」

走りだそうとした俺を、花梨が呼び止める

「ん？」

「い、いっしょに……」

「へ？」

雨音がうるさくて聞こえない

「さ、さっさと帰りなさいよ！　バカ！！」

「あ、ああ。花梨も早く帰れよ！」

何で怒られないとアカンのかよく分からんが、俺は慌てて雨の中を駆け出した

「……バカ」

今日のずぶ濡れ

俺＞＝春＞＞＞＞花＞雪＞＝秋＞＝夏＞＝母＞＝父

つづけや

第３５話：父の戦い

前回のあらすじ

聖剣エクスカリパーを抜いた佐藤は、ひらめき族が支配するアマゾン川の下流へと向かった

だが、ひらめき村の支配者ひらめき村長は、佐藤に四天王を送る

『さ、流石だぜ佐藤……私の負けだ』

四天王の一人、タマラン。愛に殉ずる星、殉星を持つ男！

そのタマランを、佐藤は討ち果たす

『タマラン……』

『ふ、だが私はお前の拳では死なん！』

タマランはふらつきながらアマゾン川へと向かう

『私は！　……さらばだ佐藤！！』

『タマラーン！』

川へ落ち、流されてゆくタマラン

『死ぬ事は……死ぬ事は無かった！』

強く拳を握りしめる佐藤。その拳からは、血が流れ続ける

それは泣く事を許されない男の涙なのかもしれない

そんな事がありつつ、ひらめき村に辿り着いた佐藤

そこは、川は枯れ、地は裂け、あらゆる生命体が絶滅したかにみえた

だが……

『この聖帝が支配する村へ何しに来おったのだ、佐藤よ！！』

村長は生きていた！

『皆を救いに……貴方の野望を砕きに！』

『ならば死ねぃ！』

そして三日ぐらい激闘が続いたりして、ようやく本編

「そ、村長、もう止めてくれ……」

戦いから四日目の夜。疲労で遂に倒れた佐藤へ、村長オルテガはトドメの一撃を放った

その一撃は魔剣の一撃。受ければ身体は腐り、助からない

しかし、その一撃を己の身体で庇い受けた男がいた

「き、貴様はマルコメ！」

そう、人のために生きる義星を持つ男マルコメ。かつて佐藤に敗れた四天王の一人、マルコメが佐藤を庇ったのだ！

「村長……俺達は間違っていたんだ。力で……力だけで村を支配してはいけなかったんだ！！」

「えーい喧しい！　邪魔だどけぃ！！」

オルテガはマルコメの身体を蹴り飛ばし、胸に突き刺さった剣を抜こうとしたが抜けない

「な、なに！」

「ふ、例えこの身体が朽ちようとも……抜かせぬさ。今だ佐藤！俺の身体ごと貫けいぃ！！」

マルコメの凄まじき覇気。佐藤の身体に奮えを呼び、立ち上がる力を取り戻させた

「マ、マルコメ……し、しかし……僕は」

「貴様は何をしに此処に来たんだ！　皆を救う為だろうが！！」

「だ、だけど君が犠牲に……」

「……人間を救うってのは半端な事じゃねぇんだよ。己の犠牲だけで大切な奴が救えるってんなら、誰もがそうしてるさ……」

「……」

「俺は昔、妹を助けられなかった……他人を犠牲にする事を怖れたからだ」

「で、でもそれは！」

「ああ、外道だ。自分の大切な者を守る為に他人を大なり小なり犠牲にする……まさしく外道だ」

「……外道」

「背負ってくんだよぉ。自分の罪を……その罪を背負えねぇ奴は人なんか救えねぇ」

「罪を……背負う」

「迷うんじゃねぇ、迷いは未来を閉ざしちまう。さぁ、佐藤。お前の手で未来を……愛を救うんだ！」

「マルコメー！！」

佐藤はアマゾンへ来て初めて涙を流した。
その涙は炎より熱く、氷より透明で……

「……もう良いかね？」

若干うんざりしたオルテガが、佐藤に尋ねる

「あ、はい。時間取らせてすみませんでした」

「うむ……。ふ、ふふふはははは！　愛故に人は苦しみ弱くなるのだ！　私に愛など要らん！！　あるのはこの身を焼かんばかりの欲望と怒りよ！」

オルテガはマルコメの身体へ更に魔剣アポカニストを沈め、強引に引き抜いた

「グ、グワアアア！！」

「マルコメ！？」

「さぁ……決着をつけよう佐藤！」

今日のうんざり

村長≧筆者＞＞＞＞父

続き……たくないな

第３６話：雪のお風呂

「ただいまー」

公園からダッシュで7分。ようやく家に着いた頃には濡れ鼠状態だった

「お帰りなさい。あら～、ずぶ濡れね。傘を持って行かなかったのかしら～？」

「持ってったけど、忘れちゃったよ」

「うふふ、うっかりやさんね。ちょっと待ってて～」

そう言うと、おっとりな母ちゃんにしては珍しく急ぎ足で、洗面所へと入っていった

その間に制服を脱いで、軽く搾る

「は～い、お待たせ～」

そう言って母ちゃんが持って来てくれたのはフカフカのバスタオルだ。ありがたい

「サンキュー母ちゃん！」

「今お風呂にお湯入れてるから後で入りなさいね～」

「はーい！」

「制服も直ぐに乾かさないとね～」

母ちゃんは俺の制服を籠に入れ、リビングの方へ持って行った

俺は部屋に行き、お湯が入るのをひたすら待つ

「……さ、寒いな」

夏近しとは言え、濡れた身体でじっとしているのはキツイ

「お風呂沸いたわよ～」

母ちゃんの声だ！

「待ってました！！」

洗面所へダッシュで向かいソッコーでトランクスを脱ぐ

んで、浴室のドアを開ける

「お！　今日は入浴剤入りか」

乳白色の湯と、甘い香り。そして暖かい湯気が心地よい

「う～さみー」

熱いシャワーを頭から身体に降りかけ、ゴシゴシと全身をしっかり

洗う

最後にもう一度、頭からシャワーを被り、いよいよ湯舟だ！

ザパーン！

多めに入れていたらしいお湯は、俺が入ったせいで浴槽から大量に溢れ、モワッと濃い湯気を生む。だが、それが

「気持ちー！」

……あったまる

暫く目を閉じ、風呂を楽しんでいると、ガラガラと浴室のドアが開いた

「ん？　母ちゃん？」

ドアの方を向くと、タオル片手に驚いた顔をしている雪葉の姿

「お、お兄ちゃん！？」

「おお、雪葉。お前も雨に降られ……ゆ、雪葉？」

「あ……う……ぅ」

顔を真っ赤にさせ、小さいタオルで身体を隠しながらへたり込み、涙ぐむ雪葉

「ど、どうしたんだ？」

「お、お兄ちゃん……は、はだ……か」

「？　……あっ！」

そういう年頃か！！

「だ、大丈夫だぜ雪葉！　全然見てねーし！！」

「ぐす……う、……うん」

「に、兄ちゃん直ぐに出るから！」

「あ……ご、ごめんなさい。大丈夫……だから」

涙を指で拭きながらニコッと笑う

なんか物凄い罪悪感だぜ

「し、しかし……」

「平気だよ、お兄ちゃん」

立ち上がり、怖ず怖ずと浴室内へ入って来る雪葉。若干震えた体が痛々しい

「……兄ちゃん、目閉じてるからな」

「……うん」

後ろを向いて目を閉じ、身動き一つ取らないで、ひたすら待つ

……こんな気まずいなら早く出りゃよかった

それから数分。身体を洗い覚悟を決めたらしい、雪葉が呟く

「雪葉も……入るね」

「ああ」

俺はならべく湯舟の端に移動する

ちゃぽんと湯舟が跳ねる音がし、お湯の量が少し増えた感覚

「目、開けていいよ……お兄ちゃん」

「あ、ああ」

言われた通り目を開けてみると、雪葉はまだうっすら赤い顔を逸らしながら、湯舟に入っていた

長い髪が邪魔になるのか、頭にはタオルを巻いている

「無理させてごめんな、雪葉」

入りたく無かっただろうに

「う、ううん。無理なんてしてない」

「……ありがとな」

人を気遣う優しい子に育ったものだ。兄ちゃんは嬉しいぞ

それから微妙に気まずい時間が流れた後、雪葉がポツリと呟いた

「お兄ちゃんと一緒に入るのが嫌だから泣いたんじゃない……よ？」

「分かってるって」

「……うん」

軽く微笑んでやると、雪葉もホッとしたように笑った

……取り敢えず落ち着いたみたいだな。俺もホッとしたぜ

「……しかし、こうして雪葉と風呂に入るのも久しぶりだな」

これが最後かな？　そう思うと少し寂しくなったりもする

「ごめんね、お兄ちゃん。雪葉なんだか恥ずかしくって……」

「ふふ。気にするな」

雪葉の頭を軽く撫で……

「オッシャー風呂だー！」

突然浴室のドアが開き、春菜がすっぽんぽんで中に入って来やがっ

た！？

「お！　兄貴に雪もいたのか！！　さては傘忘れたんだな～」

そう言うと春菜は風呂椅子にどかっと座り、大股を広げてガシガシと髪を洗い始める

「気持ちー！　兄貴～背中流してくれよ」

「は、春お姉ちゃん……」

「ん？　早く流してくれよ兄貴」

「……お前はもう少し恥じらいを持て」

今日の思春期

雪＞＞＞＞＞俺＞＞＞＞＞＞＞＞＞春≧母≧父

つづけや

第37話：秋の手作り　1

佐藤家次女、佐藤　秋。俺の姉だ

秋姉は学校のミスに選ばれる程綺麗で、スタイルもよく、勉強も出来る

性格は穏やかで、優しく、かつしっかり者。その上、スポーツも万能だ

……非の打ち所がない、我が姉ながら完璧過ぎる。

こんなパーフェクト超人が世の中に存在して良いのだろうか？　いや良いに決まっている！　何故なら俺の姉だから！！

……しかし

「……いっぱい食べてね」

何故料理だけこんなに下手なんだあぁー！！

さかのぼる事、五時間前。午後一時の事だ

「それじゃ、行ってくるわね～」

「行って来まーす！」

「お土産期待しろよー」

明日は日曜日。母ちゃんと雪葉そして春菜は、昔お世話になった親戚の家へ泊まりがけで遊びに行く事となった

ついでに有名なレストランにも行くらしく、三人ともおめかしをしている

「春菜が普段着でスカート履くの久しぶりに見たな」

しかも膝上１０センチのミニスカート。こんな短くて大丈夫なのか？

「ヒラヒラしてるから嫌なんだけどな！　ま、これは短いから動き易いけど」

ちらっとスカートの裾を上げる春菜

「お、お姉ちゃん！」

すかさず雪葉がカバー。雪葉がいれば大丈夫そうだ

「ま、とにかくいってらっしゃい。気をつけてな」

「は～い。お金は戸棚に置いてあるから、ご飯は出前でも取ってね～」

「ああ」

ピザ食おーっと

「それじゃお願いね～」

「あいよ！」

三人を見送って、部屋に戻る。んで昨日買ったゲームを起動

「……ふむ、これが翼子の新しい必殺技か」

ＰＬ３専用ソフト、キャプテン翼子５～そして宇宙へ～を、数時間プレイしていると、玄関の鍵が開く音がした

この時間なら多分秋姉だろう。夏紀姉ちゃんならもっと遅いはず

何と無く耳を済ませていると、ガチャリと向かいの部屋が開く音がした。やっぱり秋姉だ

「セーブして……よっと」

ゲーム機の電源を落とし、秋姉の部屋へ向かう

コンコン

軽い二回のノック。秋姉は寝ていない限り、これだけで確実に気付く

ガチャリ。ドアが静かに開き、髪をポニーテールに縛った私服の秋姉がどうしたの？　と、俺を迎えた

「部活お疲れ様。朝も言ってたけど今日、母ちゃん達いないから何か食べたい物があったら言ってね」

「……あなたが食べたい物で良いよ？」

「秋姉の食べたい物が俺の食べたい物さ！」

ピザ？　忘れたね、そんな物は

「……やさしいね」

秋姉は優しく微笑み、俺の頭を撫でてくれた

「へへ！」

やっぱ秋姉は最高だぜ！

「……夕ご飯までに決めておくね」

「ああ！　じゃ後で」

秋姉と別れて再び自分の部屋へと戻る。んで、ゲーム起動

「さーて。美月が悔しがるぐらい練習するか」

それから麦茶片手に日が暮れるまでゲームをし、遊び疲れた所で時計を見上げる

午後六時六分六秒

「不吉だな……うっ！？」

突然の悪臭。思わず鼻を押さえる

生ゴミ？　そんな生易しい臭いじゃない。言うなれば泣きたくもないのに号泣したくなるような不可思議で奇妙な臭いだ

臭いはどうも部屋の外から漂ってくるらしい

「ま、まさか……」

嫌な予感をびしびしと感じながら、俺は部屋のノブを回した

部屋から出ると、異臭は益々酷くなった

どこから臭いが？　一瞬で分かった。

リビングへと続くドアから紫色の煙が洩れていたからだ

……ごくり。唾を飲み込み俺は一歩、また一歩とリビングへ近付いて行く

そしてたどり着いたドアの前。臭いはもはや刺激臭となって、俺の喉や目を痛めつける

……開けたくない。開けたら何かが終わってしまいそうな異様な雰囲気

「……うぅ」

しかし、いつまでもこうしていても仕方がない

俺は覚悟を決め、ドアノブを捻った

秋の手作り　2

そこは魔界だった。

リビングのドアを開けると臭いは更に強くなり、部屋中、紫色の煙に包まれていた

死臭。嗅いだ事は無いが、分かる。これは生き物が死んだ時の臭い

……

「……はっ！」

一瞬、意識を失いそうになったが何とか持ちこたえ、俺は一歩、また一歩と死地へと向かう

リビングの奥にあるキッチン。距離にして、たかだか5メートルの距離だ

たったそれだけの距離で、数回気を失いそうになりながらも、たどり着いたキッチン。

そこには機嫌良さそうに何かをしている秋姉の後ろ姿があった

「あ、秋姉？　何をしているの？」

何をしているのかなんて分かってるさ。分かっているが最後の希望を胸に、俺は秋姉に尋ねた

「ん……夕食作ってる」

やはり!?

「ロールキャベツとステーキ。……ミディアムでいい？」

振り返り、優しく微笑む秋姉。いつもは天使に見えるその微笑みが、今は死神に見える

「ウ、ウエルダンで……お願いします」

こうなったら秋姉を止める事は出来ない。せめて生焼けだけは避けなくては……

「ん……もうすぐだから……テーブルで」

死を待てば良いのですね、お姉様

俺はもうじき売られる小牛の様に、テーブルに座り震えながらその時を待った

「……おまたせ」

死の宣告と共にテーブルへ置かれた三つの皿

ステーキと、ロールキャベツだ。後一つは何だか分からない

黒くて丸くて、つやつやで……本当に何だこれ？

「……いかめし。夕方放送してたクッキング番組でおいしそうだったから……」

おむすびを放送しろよテレビ局！！

「……冷めないうちに」

「う、うん……い、いただきまーす！　う、うまそー一人でくっちゃうぞー」

棒読みにならなかっただろうか、震えていなかっただろうか

「くす。……いっぱい食べてね」

「う、うん！」

先ずはステーキを一口。ステーキと言うよりは炭に近いが……

「……焼き過ぎたね。ごめんね」

「ううん！　美味いよ、本当に美味いよ！！」

炭になった程度なら、姉への愛でいくらでも美味しく食べられる

「……よかった」

次は一番危険そうな、いかめしだろう

これさえ乗り切れれば、何とかなりそうだ

「い、いかめし好きなんだよね」

……ねちゃ。箸で簡単に割れたいかめし。中から紫色の液体が、ドロリと零れた

「……」

「……」

秋姉は期待を込めた目で俺を見つめる

ええい！　ままよ！！

息を止め、ガブリと食らい付く

「……ぐっ！」

口の中で、ナメクジを噛んでいるような感覚

味は酸っぱく、生臭く、僅かに甘く、酷く辛く、それでいてまろやかで、バターっぽく、尚且つ苦く、アルコール臭い。一体どうやったらこんな味が……

「……どうかな？」

「……う、美味いよ？」

目が勝手に泳いでしまう

「ん……隠し味のジャムとスコッチがよかったかな」

嬉しそうに頷く秋姉

「ま、マヨネーズと梅酢も入ってるよね～」

「あ……ばれちゃったね。隠し隠し味」

そう言って、秋姉にしては珍しく子供っぽく笑った

この顔が見れただけで、食べたかいがあったかな

「後はロールキャベツか」

見た目は普通のロールキャベツ。油断は出来ないが、これなら大丈夫だろう

「さて、どれど……れ？」

たしかに見た目は良い。匂いも美味しそうだ

しかしフォークでキャベツを刺した瞬間、本能で分かった。これは毒だと

「……どうしたの？」

固まる俺を不思議そうに見る秋姉

「う、うん？　あ、あまりに美味しそうだから食べるの勿体なくて」

「くす。……いっぱいあるから」

「う、うん！　いただきまーす！」

覚悟を決め、震える手で一口食べる

「……ん？　あれ？　意外とふつ……う！？」

ドグン！！　心臓の鼓動が急激に早くなり、身体中から汗が噴き出た

次に耳が！　耳に集音機でも付けたかの様に、大小様々な音が次か

ら次へと入って来る！！

「最近不景気だなぁ」

「あら、お父さん働いて無いのだから関係ないじゃないですか」

「だよな～あははは」

「ウフッうふふふふふふふふふ」

隣の家の会話！？

「い、一体これはどういう……っ！？」

震えが……震えが止まらない！？

「だ、大丈夫？」

世界がぐるぐる回り……世界は、宇宙は煌めく！

『雪葉、お兄ちゃんのお嫁さんになる！』

雪葉、兄ちゃんがいなくなっても元気でな。お前のその優しさは、きっとみんなの助けになる。みんなを宜しくな

『兄貴の料理は最高！　大好きだよ兄貴……あ、料理の事だからな！』

春菜、落ちてる物は拾って食べるなよ。俺がいなくなっても今まで通り明るく元気に育つんだぜ

『……ずっと傍に居るからね。だから安心して』

秋姉、子供の時からお世話になりっぱなしだったね。何も返せなかったけど、俺の分まで幸せに

『たく、ケンカするのも良いけどさ、相手選びなさいよ……で、あたしの弟を泣くまで殴ったテメェ！　殺すぞ！！』

夏紀姉ちゃん。なんだかんだ言って、最後にはいつも俺を守ってくれたね、ありがとう。酒は程々にな……姉ちゃん

『私の所へ産まれてきてくれてありがとう。母さんいっつも思ってるわ～』

母ちゃん……

『強く、優しく育ってくれてありがとう。僕は君を誇りに思うよ僕がいない間、家族をよろしくね』

父ちゃん……。今まで、今までありがとうございました！！

人生とは一瞬の煌めき。そして走馬灯は人生の輝き。人はその一瞬の煌めきを生き、自分だけの輝きを……

「ぬわはっ！？！」

「っ！？　だ、大丈夫？　び、病院……」

「だ、だい……じょうぶ」

あ、あやうく臨界へ突入する所だった……

「ふぅ……ふぅ……うぐわ！」

第二波が！？

「び、病院へ行こう！？　え、ええと……ひ、ひゃくとうばん」

「あ、あ……あき」

俺はもうすぐ意識を失うだろう。この料理は破壊力がありすぎた

だが、俺は最後に言わなくてはいけない。この愛すべき姉の為に

「う……うまかっ……た……よ……秋……ね……」

午前１２時、リビング

「たっだいまー！　って此処にもいないのかよ～。姉ちゃん寂しいーぞー！　うぃっく……ん？　ロールキャベツ？　あいつが作ったのかしら。

……ふふ、酔って帰った姉の為に残しておくなんて、中々可愛いとこあるじゃない。明日お小遣いでもあげようかしらね」

今日の緊急病棟

俺≦夏＞＞＞＞＞秋≦父

つづめ

第３８話：夏の会話

薄暗い部屋。消灯時間が過ぎた病室の中だ

この前ムチウチで入院した病院に、またもやお世話なる事となった俺。しかも今回は２人部屋

「……夏紀姉ちゃん」

「……なによ」

「食べたんだあれ」

「……」

「何だったんだろ、あれ」

「……口に含んだ瞬間、雑草の味がしたわ」

「俺は貝の味がした」

「……なんであんなに料理が下手なのかしらね」

「舌は普通な筈なんだけどね」

「……ハァ」

「……ハァ」

10分後

「ねぇ」

「ん？」

「暇だから何か話なさい」

「ん……ちょっと俺の方へ手を伸ばしてみて」

「何よ、繋ぎたいの？」

「いいから」

「……」

「ありがと……生命線長いな」

「よく見えるわね」

「まあね。……頭脳線も長いな」

「……手相って誰が考えたのかしら」

「さあ……金運線、短か」

「……何か言った？」

「いや、なんでも」

「そう……あ」

「ん？」

「昨日、ちゃんと財布を持って帰ったかな……」

「……やっぱり」

「何か言った？」

「……いや、なんでも」

再び１０分後

「……姉ちゃん」

「何よ」

「俺達って結構不幸に巻き込まれるよね」

「……」

「そういう星の下に生まれたかな……」

「……あ、あんたと一緒にしないでくれる？　あたしは幸運の星の下に……」

「声、上擦ってるよ」

「うっさい！」

三度１０分後

「点滴の成分知ってる？」

「いや、知らない」

「水と糖分なのよね」

「そうなんだ」

「そうよ」

「……」

「……」

「……そういえばこの病院、焼却炉が裏庭にあるの知ってる？」

「焼却炉ぐらい珍しくないでしょうに」

「じゃ、身元や保険証がない患者さんを無料で診てあげてるの知ってる？」

「へぇ……初耳だけど、そんな事して良いのかしら」

「じゃあさ、その患者さん達が二度と病院から退院しなかったって

話、知らないよね」

「……ち、ちょっと。止めてよ」

「あの焼却炉だけどさ、夜中にしか使われてないらしいんだよね」

「や、止めなさいって！」

「時折さ、裏庭からうめき声が聞こえるのは……」

「止めろって言ってるでしょ！！」

「いて！？　ティッシュ箱投げるなよ！！」

「うるさい！」

四度１０分後

「……ね、ねえ」

「……」

「ねぇったら」

「……」

「ね、寝ちゃった？」

「……」

「し、信じられない……この馬鹿、先に……」

「……もしかして怖いの？」

「べ、別に怖くないわ！　そ、そんな事より起きてるなら起きてるって言いなさいよ！」

「いや、うるさいって言うから」

「……小学生見たいな拗ね方しないでくれる？」

「……で、なにさ」

「……繋いであげても良いわよ？」

「……もしかして手の事？」

「ちょうどあんたは右手、あたしは左手と開いてるから……ま、まぁたまには姉らしい事をしてあげようかと思ってさ」

「……手を繋ぐ事が姉らしい事なのか？」

「何か言った？」

「いや、なんでも……はい姉ちゃん」

「ま、まったく。ほんとシスコンよね……ん？　ふーん、しっかり男の手になってきたわね」

「姉ちゃんの手は変わらないな。昔のまま、暖かくて大きい手だ」

「大きくないわよ！」

「い、いやそういう意味じゃなくって……いた！　痛いって夏紀姉ちゃん！」

今日の握力

夏＞＞＞俺≧父

つづけざる

第３９話：春の特訓

「ほら、もっと早く走れ！」

病院を退院した俺を待っていたのは、春菜による理不尽な特訓だった

「む、無理。もう無理……」

「だらしがないぞ兄貴！　そんなんだから何度も入院するんだよ！」

「余計な……っ、フゥお世話……ハァ、ハァ」

「たく、しょうがないな～。近くの公園で少し休むから、そこまでダッシュ！！」

「うぅ」

それから死ぬ思いで辿り着いた公園。近くはなかった

「はい、十分休憩！　しっかり息を整えな」

「あ、ありがとうございます」

公園の温い水をガバ飲みし、石段に倒れこむ

「ふぅ……死ぬ所だった」

「まだ五キロぐらいしか走ってないだろ？　情けないな～」

「無茶言うなって。つか俺より夏紀姉ちゃんをしごけよ。不規則、不衛生、運動不足と成人病まっしぐらだぞアレは」

「……夏姉に私が何か言えると思う？」

「……無理だな」

アレに何か言えるのは母ちゃんか秋姉ぐらいだ

「だろ？　……良し、十分経った！」

「え！　ま、まだ二分ぐらいだろ！？」

「何となく十分経ったから休憩終了！」

「ひ、酷過ぎる……」

なんて妹だ。親の顔が見てみたい

「ほら、行くぞ兄貴。次はスピードを上げる練習だ！　今までの様な生易しい特訓じゃないからな！！」

確信した。今日、奴は俺を殺す気だ

「……春菜、俺お前の事好きだよ」

「は、はぁ！？　な、何だよいきなり！」

「春菜は俺の事、嫌いなのか？」

「べ、別に嫌いじゃ無いけど……ど、どっちかって言えば……って何言わせるんだよ馬鹿兄貴！！」

「別に嫌いじゃ無いんだな？　なら俺が何をした～。何で俺を殺そうとするんだ～」

「……は？」

「もうヤダ！　お家帰る～」

「……取り敢えず後五キロ走るから」

「ひ、酷過ぎる……」

その後も春菜のシゴキは続き……

「も、もう殺せ！　いっそ殺してくれ！！」

「死にたいのか、クソ虫！　なら走れ！　走って走って、走り死ね！　ほらもっと走れ！　心臓が破裂するまで走ってみやがれ軟弱ゴミ虫兄貴！！」

「う、薄々気付いていたが今確信した……お前はドS……ガク」

次の日、高熱を出して寝込んだ事は言うまでも無い

今日のサディスト

春＞＞＞＞＞＞＞＞俺

つづく

第４０話：雪の看病

「ハァハァ……や、止めてくれ殺さないでくれ春菜……」

コンコン

「ああ、春菜様……わたくしめは卑しいゴミ虫でございますぅ。お許しをお許しを～」

ガチャリ

「……お兄ちゃん？」

「う～ん、う～ん」

ペタ

「……おでこ熱い。酷い熱」

ヒンヤリ

「う、うぅ？」

頭が冷たくて気持ち良い

うっすらと目を開けると、心配そうに俺を覗き込む妹の姿があった

「う……ん？　雪葉？」

「大丈夫？　お兄ちゃん」

「ん、……ああ。ちょっとキツイけど大丈夫」

「……良かった。おでこのタオル、温くなったら言ってね」

「ありがとう雪葉。すまないねぇ」

「お兄ちゃん……。雪葉ね、春お姉ちゃんを怒ったの。体が余り強くないお兄ちゃんを無理させたんだもん」

「う……」

雪葉にも貧弱だと思われているのか……。これはちょっと運動しないと駄目かも

「とにかく今日は雪葉がずっと側にいるね」

雪葉はマザーテレサの様な慈愛に満ちた目で俺を見つめた

「大丈夫だって。俺の事より宿題はやったのか？」

「うん、終わらせたよ」

「風呂は入ったか？」

「うん」

「歯、磨けよ～」

「もう磨いたよ～」

「そっか」

「うん。もう今日はやる事無いよ。だからずっとお兄ちゃんと一緒」

雪葉はエヘヘと笑い、俺の手を握った

「して欲しい事があったら雪葉に言ってね」

「して欲しい事か……」

さて、此処で説明しなくてはなるまい！　佐藤家四女、佐藤雪葉は佐藤の中で一番世話好きである。

どのくらい世話好きかと言うと、以前我が家の庭へ入って来た瀕死の小鳥を数ヶ月看病して怪我を癒し、最終的には野生に帰した程だ

そして佐藤家長男であるこの俺は、初めて産まれた男として散々両親に可愛がられた揚句、当時は優しかった夏紀姉ちゃんや、今も優しい秋姉。更にはいつも俺を庇う雪葉に囲まれてすくすくあまあまと育って来た

そんな世話好きな雪葉と、世話され好きが俺

此処は遠慮などせず、素直に甘えるのがジャスティスと言う物なのだろう

「兄ちゃんプリン食べたい」

「うん、分かった！　買って来るね！！」

「こらこら待ちなさい。いくらコンビニが近くにあるからって、女の子が一人で出歩いて良い時間じゃないだろ？　春菜に行かせな」

「え？　で、でも春お姉ちゃんも女の子だよ？」

「あれは雌だ。正式名称アバレオオグイピポポタマスと言ってマウンテンゴリラの一種だ。仲間にナマケウバノミオヤジクサイって言う……天上に住まう美しい女神達が……」

ドアを軽く開けて、薄ら笑いと怒りの表情で部屋を覗いていらっしゃいました

「遺言は？」

「愛しています、お姉様」

「あーにーきー！！」

「知ってるか？　ゴリラって地球上で最も優しくて偉大な生き物なんだってよ」

「熱で苦しんでるって言うから見に来てやった姉に対して随分ふざけた事を言ってたじゃない？」

「……ゴリラってそんなに偉大なのかー」

「ちょっと春菜。あんなアホの口車に乗せられてどうするのよ。ゴリラは所詮ゴリラよ。豚ゴリラよ？」

「豚ゴリラ！？　くぅうう～兄貴！！」

「い、いや今のは俺が言ったんじゃ」

俺の言い訳も聴かず、二人は指をポキポキ鳴らしながら近寄って来た

「ひ、ひぃいいい！」

直ぐに訪れるであろう死に怯え、俺は小鹿の様に目を閉じ震え上がる

「……あれ？」

一向に攻撃が来る気配が無い

「いったい何が……」

俺は恐る恐る目を開けるすると俺の目前には……

「……め、女神」

女神が二匹の醜悪なモンスターを前に、俺を庇っていらした

「夏お姉ちゃん！」

「は、はい！」

「春お姉ちゃん！」

「は、はい！」

「お兄ちゃんは今、病気なの！　いじめるなら出て行って！！」

「え、えっとべ、別にいじめてる訳じゃ……な、なあ夏姉！」

「そ、そうよ～これは家族のスキンシップって言うか私達なりの励ましって言うか……」

「……ほんと？」

「もちろん！」

「もちろんよ！」

「……そっかぁ。ごめんなさいお姉ちゃん達」

「い、良いのよ～。さ～プリンでも買いに行きましょうか春菜！」

「あ、ああ！　行こうぜ夏姉！！」

二人は慌てて振り返り、ドアの方へ……

「キャー！？」

「うわ～！？」

「……プリン」

ドアの前にはいつの間にかコンビニ袋を持った秋姉が立っていた。

……我が姉ながらほんと気配が無い

「秋お姉ちゃんプリン買って来てくれたんだぁ」

「……うん。みんなの分あるから食べよ？」

秋姉は腰を抜かして座り込んでいる夏紀姉ちゃんと春菜にプリンを渡し、ベットの側に寄って正座をする

「……はい、雪葉」

「ありがと、秋お姉ちゃん」

「……はい」

「ありがとう！」

流石秋姉。俺の一番好きなメーカーだ

ガチャ

プッチンとプリンをあけると同時にドアが開いた

「……あら～みんな此処に居たの～」

「母ちゃん？」

「桃の缶詰よ～みんなで食べましょう」

それから夜中までみんな俺の部屋に居て、うかうか寝てられる状態じゃなかったけど……

「お兄ちゃん、あ～ん」

「ほら、卵酒。飲みなさい」

「兄貴～肉食え、肉！」

「……ん。体拭くね」

「後でお粥食べましょうね～」

なんか幸せだぜ！

今日の幸福度

俺＞＞雪＞＞＞秋≧母≧≧春≧夏＞＞＞＞父

続けばいい

第４１話：月の勉強会

ピンポーン

土曜日の昼下がり、家のチャイムが鳴った

鳴ったら基本、俺が出る事にしている

なぜなら母ちゃんは出るのが遅いし、秋姉は余り昼には居ない。雪葉は新聞勧誘や押し売りを断れないし、春菜もまた雪葉とは別の理由で断らない

夏紀姉ちゃん？　ありゃ駄目だ。震度五の地震が来た時も寝ていた人に、俺は何の期待もしない

そんなこんなで玄関から一番近い位置に部屋がある、俺が出る事にしているのだ

なので今日も今日とて、俺は玄関に行き、ドアを開けた

「はいよっと……ん？　美月か！」

開けた先には灰色の短パンを履き、飛んでるペンギンの絵がプリントされたＴシャツを着ている美月の姿があった

「遊びに来たのか？」

キャプテン翼子、勝負するしか！

「……ううん」

美月は元気なく首を振る

「そ、そうか？　キャプテン翼子５があるんだけど……」

「え！？　キャプテン翼子５！！　すっげー買ったんだ！」

「あ、ああ！　おっもしれ～ぞ～。月を利用するシュートがあってな、ネオタイガーアルティメットバッファローキリマンジャロピンクシュートと言うのが……美月？」

始め嬉しそうだった美月の顔が、どんどん暗くなってゆく

「ど、どうした美月？　腹でも痛いのか？」

「……兄ちゃ～ん」

慌てて聞くと美月は、くりくりっとした大きな目に涙を一杯ためて

「勉強教えて～」

と、俺の服の裾を掴みながら言った

「さて、本日は佐藤ゼミナールへようこそおいで下さいました」

「はーい！」

俺の部屋。床に小さいテーブルを出し、そこに持って来た教科書とノートを出した美月

一人しか居ない生徒だがその分しっかり教えられる筈だ。今日、俺は鬼教師となる！

「それで美月は何が分からないんだ？」

算数か？　国語か？　可愛いもんだぜ

「ドイツ語！」

「はぁ～成る程ねぇ。俺も昔は苦労させられたもんだ。うんうんドイツ、ドイツっと……ドイツ語！？」

「うん！　ほら」

そう言って美月は俺に教科書を見せた

……確かにゲルマンだ

「な、何でドイツ語を勉強しているんだ？」

引き攣る顔をごまかし、美月に尋ねる

「世界の子と友達になるためって言ってたよ。ドイツ語やフランス語、英語って三つコースがあったんだけど、わたしサッカードイツ好きだからドイツ語にしたんだ」

「……えっと、進学校でしたっけ？」

「うん？」

美月は首を横に傾げる

「……な、夏紀姉～」

俺は部屋を飛び出し、押し入れ……もとい二階で寝ているであろう夏紀姉ちゃんを呼びに行った

月の勉強会　2

「さて、本日は夏紀アカデミーへようこそ」

案の定寝ていた夏紀姉ちゃん。

部屋に叫びながら飛び込んだ俺にボブ・バックランド並のチキンウィングフェースロックをして下さった

技を食らい、悲鳴を上げた俺を慌てて助けに来た美月。

その時、下着姿で喜々としながら可愛い弟の右腕をへし折ろうとしていると言う、凄まじい姿を美月に見られてしまった夏紀姉ちゃんは、部屋に閉じ篭ってしまう

そして三十分後、則ち、今の姿がこれだ！

「じゃあ、まずは基本からよ」

紺色のリクルートスーツを着て、普段かけない眼鏡を掛け、髪を一つに束ねて薄化粧までした夏紀姉ちゃん

時折優しく微笑むその姿は、知らない人間が見たら知的で優しそうな美女……だなんて、たわけた事を思うかも知れない

だが、この右腕の痛みが奴が人では無く鬼と呼ばれる類の生き物である事を俺に教えてくれる

「ドイツ語のアルファベートの発音は分かるのかしら？」

「はーい！　えっと、アー、ベー、ツェー、デー、エー」

「あら、凄いわね。うちの弟なんてアルファベットすら分からないのに」

俺の（怒）ポイントが3アップ

「じゃあ基本すっ飛ばして本題行きましょう。美月は何が分からないのかしら？」

「……うん。ヒアリングって言うんだっけ？　ドイツ語の会話を聞くんだけど、上手く聞き取れなくて」

「進学校……じゃないわよね。最近の小学校は凄いわね～。あんた今の時代に生まれなくて良かったわね。日本語だって怪しいぐらいだしさ」

俺の（怒）ポイント4アップ

「そうね～。じゃあ今からゆっくり日常会話をしてみるから聞き取れたら返事してみて」

「はーい！」

「イッヒ　フオイエ　ミッヒ　ズィー　ケネン　ツー　レルネン」

「あ……えっと、えっとゼアー　エアフロイト！」

「あら！　ドイツ語で返事してくれるなんて凄いじゃない美月！」

「なっちゃんのドイツ語が聞き取り易かったからだよ！」

喜ぶ二人。かやの外な一人

「……ジュース入れてきます」

「あたしミルヒカフェー美月は？」

「へ？」

「あればオランジェンザフトが飲みたい！　無かったら何でも良いよ、兄ちゃん！」

「……もう一度言って貰っても良いですか？」

「カフェオレとオレンジジュースでしょうに。使えないわね～」

「俺の（怒）ポイント８アップ」

「ああん？　（怒）ポイントだぁ？」

しまった！？　口に出し出してた！

「い、イカリングだよ！　イカリングが食べたいな～って」

「……そういえば、あんた。昔からポイントがどうとか言ってたわね？」

夏紀姉ちゃんはポキポキと指を鳴らす

「あれってもしかして、あたしに対しての怒りをポイントにしているのかしら？」

そして蛇のような舌なめずりをし、ゆっくりと近付いて来る。

俺の体は恐怖でカエルの様に硬直し、身動き一つ取れない

「シスコンなだけかと思ったら執念深さまであったとはねぇ……駄目な弟を持つと苦」

「ザック　ドッホ　ゾー　ヴァスニヒト！」

「へ？」

突然美月が何かを言い、俺を庇うように夏紀姉ちゃんの前に立った

「み、美月？」

「兄ちゃんはわたしの大切な友達なんだから！」

「美月……。ふふ、そうね。言い過ぎたわ」

夏紀姉ちゃんは、何故か嬉しそうに美月の頭を撫でる

「……あ～あんたが欲しがってたＤＶＤ？　オレンジジュースを買いに行くついでに買ってくれれば？」

そう言って夏紀姉ちゃんはポケットから財布を取り出した

「は？　オレンジジュースなら冷蔵庫に」

「早く買いに行け！」

財布を顔面に投げ付けられた僕は、（怒）ポイントを上げても良いのでしょうか？

月の勉強会　3

十五分後

「か、買って来ましたお姉様」

しかし何故俺は買って来てしまうのだろう？

「遅い！　もう飲んでるわよ！！」

その言葉通り、夏紀姉ちゃんと美月の手にはコップがある

「ご、ごめんね兄ちゃん」

「……いいんやで」

美月はな～んもわるうない。悪いのは人の心を持たない鬼だけや……

「ほら、凹んでないでさっさと財布返しなさい」

「はいよ。……ＤＶＤサンキュ」

「……ふん」

夏紀姉ちゃんはそっぽを向き、一息でカフェオレを飲み干した

「さてと、勉強の続きをしましょうか」

「ヤー、なっちゃん！」

キーンコーンカーンコーン

近所の学校から微かに聞こえる五時のチャイムが鳴った

「……よし、此処まで。よく頑張ったわね！」

「はい！　なっちゃん先生」

元々基礎は出来ていた美月。

僅かな時間とは言え、夏紀姉ちゃんの優しく時に厳しい熱血指導のかいがあって、横で見ていても中々ドイツ人じゃんってレベルまで成長した

「美月は頭で理解していても、耳が慣れて無かっただけ。今日このぐらい会話を聞き取れる様になったのなら、明日の小テストぐらいなら楽勝よ。後は本当に慣れるまで先生に教わるなり、ドイツの映画を見るなり、あたしに会いに来るなりして勉強あるのみ」

「はい！」

「うん。と、もう夕方だけどご飯食べてく？」

「んーん。家で食べる。今日はコロッケなんだ！」

満面の笑みで答える美月を見ていると、思わずこっちも嬉しくなるぜ

「ふふ、そっか。ならまた今度一緒に食べましょう？　美味しいの作ってあげる」

夏紀姉ちゃんは優しく微笑むが、それは自分で料理を作る人が言う台詞ではないだろうか？

「何か文句ありそうな目ね？」

「……いいえ」

秋姉が居ない今、鬼の機嫌を損ねる訳にはいかない

「それじゃわたし、そろそろ帰るね」

夏紀姉ちゃんに睨まれている間に、美月は手持ち袋に教科書やノートを入れ、帰り支度をしていた

「あ、ええ。ほら、送ってあげなさい」

「ああ」

「え！？　兄ちゃんわたしの家まで送ってくれんの！　やったー！」

バンザイをしながらぴょんと跳ね、美月は部屋を出て玄関へと先に行く

「……あんなにいい子が何であんたに懐いてるのかしらね」

「……夏紀姉ちゃんに懐くよりかは」

「今、何か言った？」

「……いいえ」

「なっちゃん～おじゃましました～」

玄関から美月の声がする「ああ、ええ！　ちょっと待って」

夏紀姉ちゃんは慌てて部屋を出て、玄関へと行く

いつも客のことなんざ気にもしない夏紀姉ちゃんにしては珍しい反応だ

「明日は雨か……」

雨で済めば良いけど

「また来なさいよ」

「うん！」

夏紀姉ちゃんに遅れる事数十秒。美月は靴を履いてドアを開けている所だった

「じゃ、送って来るよ」

「ええ。あ、ついでだから帰りに本買って来て」

「はい、はい」

弟＝パシリの方程式が、既に出来上がってしまっている。だが、明

日からは違うぞ！

内心の笑みを隠し、俺は美月を追って家を出た

「お待たせ」

「うん。いこ？」

美月の家へまで並んで歩くアスファルトの道。太陽は沈んでおらず、空もまだ青い

「それでね……あ」

キャプ翼子やサッカー、ドイツの事で盛り上がっていると、突然美月が足を止めた

「美月？」

何かを見ているその視線を追うと、買い物帰りと見られる中学生ぐらいの男の子と五歳ぐらい離れていそうな女の子の姿があった。

二人は兄妹なのか、買物袋を持っていない手を仲良さそうに繋ぎながら歩いている

「……兄ちゃん、手繋ご？」

「手？」

「うん。……ダメ？」

「良いぜ、ほら」

左手を差し出すと、美月は嬉しそうに右手で握った

「うっわ～、兄ちゃんの手でっけーなぁ。わたしも高校生になったらこのぐらいになるかな？」

なれば良いなと期待を篭めて美月は言うが……

「多分ならない方が良いと思うぞ」

「そんな事無いよ～サッカーボールとか片手で持ちたいし」

「う～んだけどな、女の子は小さい方が可愛いと思うぜ」

「兄ちゃんは小さい方が好き？」

「え？　あ、ああ」

俺よりデカイとちょっと嫌かも

「ふ～ん……」

美月は急に無口になり、俺の顔をじっと見つめる

「どした？」

「ううん、なんでもないよ。……でもやっぱり雪は羨ましいなぁ。わたし兄弟とか居ないからさ」

「そっか」

「兄弟欲しいなぁ。なっちゃんや秋ちゃん。兄ちゃんみたいな」

「……またいつでも遊びに来いよ？」

「うん！　ありが……ダンケ　シエーン、兄ちゃん！！」

「ああ。ニヒツ　ツ　ダンケン、美月」

そんな事を言いながら笑い合う俺達は、周りから見たら兄妹に見えていたかもしれない

「ただいま～」

美月を送って、本も買って来た。さーて夕食までＤＶＤ見よ～と

「ふんふふ～ん……うわっ！？　な、何でまだ俺の部屋にいるんだよ！」

部屋のドアを開けると、夏紀姉ちゃんがベットの上で足を組み、妖しく微笑んでいた

その夏紀姉ちゃんの指が机を指差す。指された机の上には見覚えあるパッケージ……

「あっ！　そ、それは！？」

「コンビニの袋なんかに適当に入れておくから姉ちゃん見ちゃった

じゃない」

夏紀姉ちゃんは俺がさっき買ってきたＤＶＤ【暴力的な姉を従わせる２０の方法！　これで貴方も調教師】を手に持ち、再び微笑む

この微笑みの意味は……

「覚悟しなさい？」

「し、しないと駄目ですか？」

「さあ？　好きにしなさい」

「ひっ！？　た、助けて秋姉～！」

もうじき訪れるであろう死を前に、僕はまだ帰らぬ姉を求め、力の限り叫びました。

今日のドイツ人

夏＞＞秋＞＞父＞月＞＞俺

続ければ

第４２話：秋の甘やかし

さて、突然だがうちの家族はみんなモテる

秋姉は当然として、顔だけは美人の夏紀姉ちゃんに可愛い雪葉、町内で人気者の母ちゃん。そして春菜

そう春菜。奴は男女関係なく異様にモテる。

昨日もラブレターを貰ってきやがったが、読みもしない

そんなモテモテ家族の華麗なる長男、俺

当然俺も……何で俺はモテないんだ！　俺は醜いアヒルの子だとでも言うのか！？

コンコン

一人で苦悩していると、ドアがノックされた

「はいよ、今出るよ」

低いテンションでドアを開け……

「……おはよう」

「おはよう、秋姉！！」

テンションＭＡＸ！

「……ん」

秋姉は軽く微笑み、制服のポケットから自分の櫛を取り出して、俺の寝癖を撫でてくれた

「ど、どうしたの？　こんなに早く」

むず痒い様な照れ臭さをごまかす為に尋ねると、秋姉は僅かに顔を暗くした

「あ、秋姉？」

「……母さん、風邪で寝込んでる」

「え？　風邪？　大丈夫かな……」

「……よく休めは大丈夫。心配しないで」

優しく微笑む秋姉。この微笑みだけで俺は三杯ご飯が食える

「そっか。秋姉がそう言うんなら大丈夫だね」

「……ん。だから今日のお昼」

ま、まさか！？

「……学食で良い？」

「勿論！！」

ありがとう神様！

「……ごめんね。材料無くてお弁当作れなかった」

しょんぼりとする秋姉。こんな顔は見たく無いけど……

「気にしないで、秋姉。秋姉の気持ちだけで十分さ！」

「……優しいね。はい」

秋姉は財布を取り出し、俺に千円札を渡す

「え？　い、いいよ、自分で出すよ」

「……遠慮したら駄目だよ？　足りなかったら言って」

秋姉はそう言って、そっと俺の手に千円を握らせる。

……三時間は洗わない様にしよう

「ありがとう秋姉」

「……うん」

再び微笑む秋……いやむしろ女神

「……朝ご飯は」

「お、俺、コンフレーク食べたいなぁ！！」

「……そう」

ごめんよ秋姉。でも朝から秋姉のご飯は命に関わって……

「……準備するね」

「え！？　……う、うん」

流石にコンフレークは失敗しない……よね？

「い、行ってきます……うぇっぷ」

コーンフレークへ牛乳の代わりに青汁を注ぐと言う、画期的かつ大胆な健康料理を作ってくれた秋姉。

俺の胃が悲鳴を上げているが、それはきっと太陽が黄色いせいだ

「……行ってきます」

俺に続いて秋姉が家を出る

「それじゃ行こうか、秋姉」

「……うん」

俺達は学校へ向かって歩き出す。

夏近し、蝉の鳴き声、耳響く。なんて適当な俳句を捻ってしまうぐらい蝉は煩いが、空は快晴で風も心地良い

「いい天気だね、秋姉」

「……うん」

秋姉の髪が風に揺れ、サラサラとなびく

もし秋姉の出ているシャンプーのコマーシャルがあったら、俺は店のシャンプーを買い占めるね

「……危ないよ」

ぼーっと秋姉を見ていたら、秋姉は俺の左手を軽く引いた。すると、後ろから車が俺の横を通り過ぎる

危ないって言っても、歩道を歩いている訳だから俺にぶつかる筈が無いと思うんだけど……

「……手、繋いで歩こうか？」

「そうだね！　車、危ないし！！」

危ないさ！　五分に一度ぐらいしか車は通らないこの整備された通学路でも、車は危ないのさ！

自分でそう納得し、秋姉の冷たくて、ちょっと荒れた手を握った

「秋姉は相変わらず手が涼しいね」

「……うん。竹刀振って皮が厚くなったからかな？」

「でも昔から冷たかったよ。手が冷たい人は心が暖かいんだよね」

「……ありがとう」

秋姉は優しく微笑む。この微笑みだけで俺は三キロ走れる

それからも秋姉と色々な事を話して……

「もう学校か……」

近すぎる！　せめて後、５０００メートルは必要だ！

「……あっという間だったね。……お昼どうするの？」

妙にあっちこちから感じる視線を無視しつつ、秋姉と校舎に向かって歩く

「今日は学食かな」

久しぶりに山盛りカレーとソバセットが食べたい

「……一緒に」

「一緒に食べる！！」

俺はぶっ壊れた水のみ鳥の様に何度も頷いた

秋の甘やかし　2

「ふんふふふ～ん」

「どうした？　機嫌良さそうじゃん」

ホームルーム前の教室。鼻歌を歌う俺に、太郎が声を掛けて来た

「ん？　分かるか？　分かってしまうか？　ふふ……ふひひ」

勝手に頬が緩んでしまう

「……お前、超キモい」

「おっと失礼」

いつもの紳士に戻り、俺は涼やかに微笑んだ

そして朝のホームルームが始まり――

「あ」

っと言う間に昼休みだぜい！

「昼ダァーッ！！」

「うお！？　な、なんだよ、そんなに腹減っていたのか？」

「ふふ、まぁな」

発想が貧しいな太郎よ。そういう事にしておいてやろう

「……なんかスゲー見下されてる様な気がすんだけど？」

「気のせいだ。それより俺は早く学食へ……」

その時、廊下がざわめき始めた

「あ、秋先輩だ！」

「美しい……さすが俺の女（妄想）」

「こっち見たぞ！　俺に気があるのか！？　参ったな、俺、彼女居るんだけど……いや貴女が望むなら僕は愛に生きましょう。さぁ秋、僕の胸に飛びごはっ！」

「なげぇよ！」

そして俺とちょっと似てるじゃないか！

「……暴力、だめ。……ごめんね」

俺が蹴っ飛ばした山田に秋姉は蹴った所を軽く撫でながら謝罪する。

なんつー羨ましい奴だ！

「い、いや良いっすよ。アイツと俺はマブでダチっすから……佐藤！　頭や股間も蹴って良いんだぞ！　お前の友情！　受け止めてやる」

「俺の友情より鈴木の愛を受け止めてやれ。な、鈴木」
隣のクラスの鈴木が山田を睨む。山田の彼女だ
「……てへっ」
「行こう？　山田君」
「ど、どちらへ？」
「体育館裏」
「た、体育館裏!?　何でそんな怪しげな所へ……ち、ちょっと、引っ張るな！　やだ、止めてくれ～」
山田は悲鳴を上げながら連れ去られていった
こんな騒ぎの中でも、みんなは秋姉に夢中で気にもしない。むろん俺も
「あ、秋先輩！　写真撮っても良いですか？」
「ん」
「秋先輩～、握手してください」
「ん」
「秋先輩！　付き合って下さい！！」

「図々しぞテメェ！」

「ナメてんのかコラァ！」

どさくさに紛れて告白した奴は、俺が手を下す迄も無く、ボコボコにされてゆく

……我が姉ながら恐ろしい人気だ

「あ、秋姉。そろそろ食堂に……」

「うん。……暴力だめだよみんな。仲良く」

「はーい！」
「はーい！」
「はーい！」

コーラス隊の様に、クラス中の声が揃った瞬間だった

ざわ……ざわざわ

食堂。普段はそんなに混んで居ないが、秋姉が食堂へ入った瞬間、ほぼ満席となった

しかし、俺と秋姉の周りだけ空いている。そして俺に突き刺さる悪意ある視線！

「き、今日は混んでるね」

頼んだカレーとソバを食べながら秋姉に話し掛ける。ちなみに秋姉はオムライスだ

「……そうだね」

視線に気付いてないのか、それとも慣れているのか、いつもと全く変わらない秋姉

「……あ」

そんな秋姉は何かに気付いた様な声を上げて俺に手を伸ばす。そして

「……ご飯」

俺の口許からご飯粒を取って、そのまま自分の口へ含んだ

「……はしたなかった？」

少し恥ずかしそうに微笑む秋姉

この微笑みで俺は円周率３０００桁まで言える

……パリン、パリン、パリン

あちこちからコップが割れる音。そして更に強くなった憎しみを感じる視線

「……何だか腹いっぱいになってきたよ」

「ん。……無理はだめだよ？　残しても良いからね」

「大丈夫さ！　ここのカレー美味いし。オムライス美味しい？」

「ん。……一口食べる？」

「うん」

「ん。……はい」

秋姉は一口分スプーンで掬い、俺の口元に運ぶ

「あ～ん……美味い！」

普段の一億倍は美味い！

「……もっと食べる？」

「い、いやいいよ。視線がおっかないし……」

もはや殺意と言っても良いかもしれない

「それじゃまた家で」

夢のような時間は不粋なチャイムの音と共に終わり、秋姉と食堂の前で別れる事となる

「ん。……お昼、楽しかったよ。また……」

「また一緒に食べようね秋姉！」

「……うん」

そして教室へ戻った俺。迎えてくれたのは怒りと憎しみの視線だけだった

「……所詮俺は孤独な旅人か」

るーるるーとハミングしながら席へと座る

「それにしても秋姉は人気あるよな」

太郎へ話し掛ける

「学校一のアイドルだからな。美人で強くて頭も良くて優しい。一つだけ欠点があるけどな」

「欠点？」

料理か？

「ま、欠点って程でも無いけどな。それが良いって言ってる奴もいるし」

「ふ、ふ～ん」

あの料理が良いって言える奴って……鉄の胃を持っているのだろう

か？

「……しかし、秋姉もそうだけど、本当うちの家族はみんな人気あるよ。てゆーか何で俺だけモテないんだ！」

顔か！　顔が悪いのか！

「……気付けよシスコン」

今日のシスコン

俺∞

続かし

第４３話：母の風邪

「ただいま～」

シーンと静まり返った玄関。二足しか無い靴

秋姉と春菜は部活だろうし、夏紀姉ちゃんもまだ大学だ。

雪は友達か何かと遊んでいるのだろうか？　家に居る気配が無い。

今は家に居るのは俺と……

「おかえりなさ～い。こほ、こほ」

どてらを着て鼻水垂らしている母ちゃんだけだ！

「か、母ちゃん、寝てないと駄目だろ？　それにどてらって……」

暑く無いのか？

「う～ん、でもずっと寝てたし～」

ふらふらとリビングの方へ歩いてゆく

「危ないなぁ」

俺は母ちゃんの横に立って、肩を貸す

「ありがと～」

「ああ。何か食べたい物ある？」

「さっき雪葉が買い物に行ってくれたわ～。キムチ鍋よ～」

「い、良いね。スタミナ付きそうだ」

今は夏ですよ母様……

「と、とにかく今日は俺が作るから母ちゃんはゆっくり休みな」

「ありがと～。母さん嬉しい」

母ちゃんはギュッと俺の首を抱いた

「ち、ちょっと、止めてくれよ」

妙な気恥ずかしさを感じながら、母ちゃんをリビングのソファーへ座らせる

「大丈夫？　母ちゃん」

「平気よ～」

母ちゃんは弱々しく微笑んだ

「とにかく暖かくして……いや、十分暖かそうだね」

母ちゃんの額に浮かぶ大量の汗が物語る

「……どてら脱いだ方が良くない？」

「いっぱい汗をかいて直ぐ治すのよ～」

母ちゃんの細目が燃えている。もはや誰も止められないだろう

「なら……」

洗面所へ行き、タオルをゲットだぜ！

「……ほら。せめて汗拭きな」

「ありがと～」

母ちゃんはタオルで顔を拭き、次にどてらを肩までめくって首筋や背中、胸と体を拭いてゆく

……なんて言うかサスペンスドラマに出てくる温泉の女将みたいな無駄な色っぽさがある拭き方だ

「すっきりよ～」

「タオル、ビショビショじゃんか。もっと小まめに拭かなきゃ駄目だよ」

「は、は～い」

申し訳なさそうな母ちゃん。この顔はレアだな。写メ撮っとくか？

パタン

玄関のドアが閉まった音が、微かにする

「……ただいま」

そしてリビングのドアが開き、心配そうな顔の雪葉が入って来た

「お帰り、雪葉」

「おかえりなさ～い」

「ただいまお母さん。それと、お兄ちゃんっ」

ホッとした顔をして、雪葉はトコトコと俺の傍に寄る

「買い物ご苦労様。偉いぞ」

「うん！」

「さて、と。それじゃ夕飯の仕度をしようかな」

制服の上を脱ぎ、袖を捲る。……秋姉が帰ってくる前に終わらせよう

「はい、お兄ちゃん。雪葉も手伝うね！」

「お！　そうか？　なら一緒に作ろうな！」

「うん！」

雪から買い物袋を貰い、一緒にキッチンへと向かう

「……うふふ」

そんな俺達を見て、母ちゃんは嬉しそうに笑った

「お兄ちゃん、雪葉は何すれば良い？」

雪葉は自分のお小遣で買った、ちょっと大人っぽい（雪葉談）花柄のエプロンを掛けながら尋ねる

「そーだなぁ」

雪葉はこの家で三番目に料理が上手い。お菓子作りが主だが、包丁等を使わせて危ないと言う事は無い

「鍋の下拵えは俺がやるから、米を研いでくれるか？」

「うん！」

地味な仕事でも素直に頷いてくれる。これが夏紀姉ちゃんなら

『研げは？』

と冷たく言い放ち、冷蔵庫からビールを取って部屋へと戻るだろう

「……本当にいい子だな雪葉は」

素直に育ってくれて兄ちゃん嬉しいよ！　何だか涙が出て来るぜ、ちくしょい！！

「ど、どうしたの、お兄ちゃん？　キムチが目に染みるの？」

キムチを包丁で食べやすく切っている俺に、雪葉が心配そうに尋ねた。

これが夏紀姉ちゃんなら……

『その涙、一滴でも食べ物に落としたらあんたの目からはキムチの汁が流れる事になるわよ？』

と、真顔で言いながら冷蔵庫からビールを取って部屋へと戻るだろう

「……本当、似なくて良かった……いて」

雪葉を温かい目で見ていたら、包丁で指を切ってしまった

「お、お兄ちゃん！？　待ってて、今、絆創膏と消毒液持って来る！」

雪葉は俺が平気だと言う間も無いぐらいに、慌ててキッチンを出て行ってしまった

「……良い子や」

これが夏紀姉ちゃんなら

『あら、馬鹿でも血は赤いのね？』

とか言って俺を罵倒……

「する筈は無いか、流石に」

「あら、血が出てるじゃない？　馬鹿ね」

惜しいっ！

いつの間にか居たのか、キッチンとリビングを繋ぐドアの前で、夏紀姉ちゃんが腕を組んで俺を見ていた

「雪葉が慌ててキッチンから出て来たから何かと思って来てみれば……」

そう言いながら夏紀姉ちゃんは俺に近付く

夏紀姉ちゃんの格好は、へそが見える程、短いＴシャツに、ボクサーパンツだ。

相変わらず家に居る時はまともな格好をしない

「どれ？　ふ～ん、ちょっと深いわね」

夏紀姉ちゃんは俺の指を手に取り、そのまま口に運んで……くわえた！？

「な、何事！？」

秋姉ならともかく、夏紀姉ちゃんがこんな事をするはず！？

「……偽物ですか？」

「……あんなＤＶＤを買って来るぐらいあたしって酷い？」

「へ？」

「……まずい！　安い血だわ！！」

洗面所に、ぺっと吐き出す夏紀姉ちゃん

「な、何だそりゃ！？」

なんなんだ一体！

俺の困惑を余所に、水でうがいをし始めた夏紀姉ちゃん。

それをア然としながら見ている俺

「お兄ちゃん！　絆創膏だよ！！」

そこへ絆創膏を手に、キッチンへ飛び出して来た雪葉

「あ、ありがとな」

何とも言えない気まずさを無視し、雪葉から絆創膏を受け取って指に貼る

「痛そう……あれ？　夏紀お姉ちゃん？」

居たの？　そんな言葉が後に付きそうだ

「い、今頃気付かれるなんて……。どうせあたしは存在感の無い暴力女だわよ」

ぶつふつと独り言を言いながら、夏紀姉ちゃんはキッチンを去っていく。　背中の哀愁がなんだか泣かせるぜ

「どうしたんだろ、夏紀お姉ちゃん」

「気にするな、誰もが一度は悩む事さ。さ、料理の続き始めようぜ？」

「うん！」

そんでもって三十分後

「完成したぜ雪葉！」

「うん！　美味しそうだね、お兄ちゃん！」

「あら～、うふふ」

雪葉と手を取り合って喜んでいると、今度は母ちゃんがキッチンへ入って来た

「母ちゃん？　寝てなきゃ駄目だよ」

「大丈夫よ～。こう見えても母さん、強いんだから～。……くしゅん」

「あ～ほら。雪葉、母ちゃんを寝かせてくるからちょっと鍋、見ておいてくれるか？」

主に春菜のつまみ食いを防ぐ為に

「うん。……お母さん」

「大丈夫よ～」

雪葉にニッコリと微笑む母ちゃん。
体を支えると、全体が凄く熱く、まだ熱が下がっていない事を教えてくれた

「……やっぱり母は強しって奴だな」

なにげなしに呟くと、母ちゃんは俺の頭を軽く撫で

「貴方達が居てくれるから母さんは強くなれるのよ～」

と、いつもの細目で優しい眼差しを俺に向け、そう言った

「……か、風邪早く治せよ！」

なんか照れ臭くて、思わず母ちゃんから顔を背ける。
そんな俺に母ちゃんは珍しく間延びさせずに

「はい」っと頷いた

母ちゃんを部屋へ運んで三十分。ご飯が炊き上がり、鍋も完成だ

「うぅ……美味そう」

先程帰って来た春菜は鍋をのぞき見て呟く。
普段なら即つまみ食いするのに、今日はしない

「……ただいま」

暫くすると、秋姉も帰って来た。急いだのか、額に汗が浮かんでいる

「おかえり。それじゃ、ご飯にしようか！」

俺は母ちゃんを呼びに、再び部屋へと入った

「ご飯出来たよ、母ちゃん」

「は～い」

部屋の襖を開けると、電気がついていない暗い部屋に光が入る。
母ちゃんはこんこんと咳をしながら、よいしょと起き上がった

「リビングで食べれるかい？」

「此処で良いわよ～。風邪をうつす訳にいかないし、一人で食べるわ～」

「駄目だよ、母ちゃん。風邪の時はみんなで食わなきゃ」

俺だってそうしてもらって元気が出たんだ

「珍しく夏紀姉ちゃんも出掛け無いで夕食を待ってるからさ」

「……ありがと～」

母ちゃんは俺の頬にチュっとキスをした

「や、止めろよ～」

「あら～」

クスクス笑う母ちゃん。……照れ臭いぜ

「……じゃあ、ご飯食べよう」

「は～い」

それからみんなで夕食。母ちゃんを中心にワイワイ騒いで……

「全快よ～」

母ちゃんのＨＰが回復したぜ！

「みんなが居て、母さん幸せ～」

今日の家族愛

母＝俺＝春＝秋＝夏＝雪

続けてみたら？

第４４話：夏の無実

母ちゃんの風邪が見事完治し、迎えた母の日

その日の夕方、我が家は大変な盛り上がりを見せていた

「旨い酒、旨い料理！　後は綺麗どころの芸者だけってね！！」

母の日の為、昨日から下準備をしていた（俺が）料理の数々。
それら料理や夏紀姉ちゃん秘蔵の酒が、リビングの長テーブルに所狭しと並んでいる

「あ～美味しい！　久しぶりだわ、こんなに美味しいお酒」

料理をつまみながら、機嫌よさ気に酒を飲む夏紀姉ちゃん。酔いどれＬＥＶＥＬは３と言った所か

「ほら飲みなさい！　役不足だけど今日はあんたがあたしのホストよ」

夏紀姉ちゃんが俺のコップ半分にブランデーを注ぐ。
そしてウォッカを入れてちゃんぽんにしやがった

「さあ飲めや歌えや！　此処は桃源郷！！　ほら一気よ、一気！」

「……」

何故、酔いどれ姉ちゃんを誰も止めないかって？

それは……

「目～が～ま～わ～る～わ～」

「うう……夏姉は鬼だぁ」

「……お酒、二十歳を過ぎてから……まだ……だめ」

「すぅ……すぅ」

俺と夏紀姉ちゃん以外、全滅しているからだ！

そう、何を隠そう母ちゃんと春菜、秋姉は酒がとても弱い

夏紀姉ちゃんの巧みな話術で、飲まされた二人。そして無理矢理飲まされた一人！　今や我が家は酔いどれ一人に支配されていた！

ちなみに雪葉はお休み中

「な、夏紀姉ちゃん。俺もそろそろヤバイんだけど？」

かれこれ一時間は飲まされ続けている

「ふふ。……夜はこれからよ？　二人で甘い夜を過ごしましょう？」

夏紀姉ちゃんは俺の顎に手を沿えて、優しく撫でたが……

「全然甘くねー！」

むしろ胃から酸っぱい何かが喉を掛け上がってますがな！！

「ウダウダ言わないで飲みなさい！　飲んで吐いてまた飲んで、それを血が出るまで続けてこそ酒に強くなるのよ！」

「そんな某体育大学のシゴキみたいな飲み方はいや～」

テーブルから逃げ出す俺を、夏紀姉ちゃんが追う

「え～い飲まんか～」

「た、助けて～」

そして部屋の角であっさり捕まり、ゴリラ並の怪力で抑えられ追い詰められた俺！　どうなる！

「お兄ちゃん！」

――奇跡が起きた

雪葉がむくりと起きて、俺を呼んだのだ！

傍若無人な夏紀姉ちゃんに怒っているのか、いつになく勇ましい顔付きをしている

そして雪葉はズンズンと俺達に近寄り、俺達の間に割って入った

「ゆ、雪葉？」

流石の夏紀姉ちゃんも、いつもと違う雪葉の剣幕に戸惑う

「ど、どうしたんだ？　雪葉」

俺もなんだかビクビクもんだぜぃ！

「お兄ちゃん！！」

「は、はい！！」

雪葉は俺の顔をじっと見上げ……

「……チュウして？　雪葉にでこチュ～」

急に甘え始めた！？

夏の無実　2

「ゆ、雪葉？」

「ん～お兄ちゃ～ん」

雪葉は真っ赤になった顔で俺に擦り寄る……ってか

「酒くさっ！？」

「お酒～？　雪葉、お酒嫌い。でもお兄ちゃんは好きぃ」

そう言って、俺の首にギュッとしがみつく雪葉。めっちゃ体が熱い

てゆーか誰だ、雪葉に酒を飲ませた奴は！

それは誰だ、誰だ、誰だ

などと十代には分からない歌を脳内で流しつつ、俺は夏紀姉ちゃんを睨んだ。推理するまでも無い

「な、なによ？　べ、べつにあたしが日本酒を飲ませた訳じゃ……」

「語るに落ちたなデビ○マン！　何故日本酒だと断定出来る！！」

テーブルにはビールや赤ワイン、日本酒にブランデー、そして数多くのコップが立ち並び、誰が何を飲んだのかなど、一見では分からない

「……観念しなよ、夏紀姉ちゃん。今ならまだ自首になるんだ」

俺は夏紀姉ちゃんの肩に優しく手を置き、微笑んだ。

夏紀姉ちゃんはうなだれ、ぽつりぽつりと真相を語り出す

「……あ、あたしがやりました。雪の飲んでいたサイダーのコップを間違えて取ってしまい、気付いた時には、あたしのコップが雪の手に……」

「……悲しい事件だ」

「う……うう……」

顔を伏せて泣き崩れる、ほろ酔い姉ちゃん。

そんなコントをしている間も雪葉は首にしがみついたまま離れない。もはやコアラだ

「て事は、俺はユーカリなのか？」

「んに～」

「ぎゃ～！？」

雪葉の攻撃！　雪葉は俺の耳をあまがみした！？

俺の精神に8のダメージだぜぃ！

「こ、こら噛むな！　俺は葉っぱじゃないぞ」

「知ってるよ！　お兄ちゃんは雪葉のお兄ちゃんだもん！！」

プ～と頬を膨らませる雪葉
な、何を怒ってるんだコイツは？
「最近お兄ちゃん、雪葉に冷たい！　お家に居ても秋お姉ちゃんや夏紀お姉ちゃん達ばっかり構うんだもん……」
秋姉はともかく夏紀姉ちゃん？　構って、と言うより絡まれてが正しい気がする
「休みの日はもっと雪葉と遊んで欲しいの……」
潤んだ瞳で真っ直ぐに俺を見つめる雪葉。
昔から雪葉のこの目には逆らえない
「……分かったよ。今度の日曜日、いっぱい遊ぼうな雪葉」
「……えへ」
雪葉はホッとした様に笑い、目をつぶる
「……大すき、おにぃ」
そして、穏やかな寝息をし始めた
雪葉の体をゆっくり引き離し、代わりにひざ枕をする。
羽の様に……ってのは大袈裟だが、軽い雪葉の頭。この軽さが心地良い

「お休み、雪葉」

「……ん……に……ぃ」

「……ふふ」

良い夢をな

「はっ！　何を聞くかと思えば動機ですって？　雪葉を殺害する動機なんて無いわよ！　馬鹿な弟ならともかくね！！」

夏紀姉ちゃんをほっといてたら、随分物騒な話になっていた。

めんどくさいから更にほっとこう

「あたしは無実よ～！」

「いや、有罪でしょう。むしろ極刑？」

「ああん！？」

「む、無罪確定！　おめでと～」

「本当！？　やったわ、勝訴よ！！　酒だ酒だ～祝い酒だ～」

「ち、ちょっと待って、それ以上飲むと姉ちゃんの酔いどれＬＥＶＥＬがアップ……や、止めっ！　俺のコップに酒を注がないでくれ～」

今日の良い夢

雪＞＞＞＞＞春＞秋≧母＞父＞＞＞＞＞俺≧夏（悪夢）

続けたる！

第４５話：花のスイートハニー

「マイスイートハニー、花梨は僕の恋人さ」

虚ろな目で俺は花梨のクラスメート達にそう宣言した

「も、もう！　ダ、ダーリンったら。花梨恥ずかしい」

虚ろな目で俺の腕に抱き着く花梨。花梨のクラスメート達はドン引きで、俺は生きているのが嫌になった

何故こんな目に？　それを説明するには時間を少し、遡らなくてはなるまい

遡ること一時間前、学校帰りの事だ。

空に爛々と輝く土曜日の太陽。その熱波を我慢出来ず、俺はソフトクリームを買うべく近くにあるコンビニへと向かった

その途中、俺は知ってる奴の後ろ姿を見掛ける

『……なにやってんだアイツ？』

それが一番最初に思った事だ。アイツとは電柱の陰で隠れているソイツ。　スカートが落ち着きなく左右に揺れている

俺はソイツに近寄り、後ろから声を掛けた

『おい』

『キャー！？』

『ギャー！？』

悲鳴を上げ、振り向きざまに飛んできた花梨の爪先蹴り！　俺の弁慶へ八十のダメージ！！

『な、何をするんだよ花梨！？』

『あ、あんたか……ってあんた！　いきなり声を掛けないでよね！！』

相変わらず可愛くないガキんちょだ

『何やってんだよ、こそこそと』

『しっ！　バカ！　見付かるじゃない！！』

花梨は口許に人差し指を立て、シーっとジェスチャーをする

『見付かるって言われてもな……何に見付かるんだ？』

『……ストーカー』

『……ああなんだ、アレか』

思春期特有の勘違いって奴だな。俺にもあったぜ

『それじゃ俺はアイス買って帰るよ』

俺は花梨を横切って、向かいのコンビニへ……

『まーちーなさーい！』

『ぐぇ！？』

花梨が襟首を引っ張りやがった！

『変態に怯えるか弱い女の子を無視してアイスですって！？　あんた本当に男！！』

『うっ』

夏紀姉ちゃんを彷彿とさせる覇気だ。

コイツ将来あんな化け物になるんじゃ……そうはさせるか！！

『そうだな、ごめん。ストーカーだって？　確かに心配だ。俺に出来る事なら何でもやる、言ってくれ』

じっと花梨の目を見て、俺は言った

『……ぅ……』

花梨は目を逸らし、地面へと視線を下げた。

……お、怒ってらっしゃる？

『ほ、本当に何でもするの？』

『へ？　あ、ああ。どんと来い！』

何を言う気だコイツ！？

『なら……』

花のスイートハニー　2

ｍｉｓｓｉｏｎ１

【奴を確認せよ】

『で、どれがストーカーなんだ？』

俺も電柱の陰に隠れて聞いてみる

『あいつよ！』

花梨が指差す方向にはコンビニがあり、そのコンビニの駐車場でたむろっている小学生らしき連中が五人

『……水色の服着てる奴か？』

デブで目つきの悪いメガネ。偏見なのかもだが、非常にストーカーっぽい

『その隣よ』

その隣にはオレンジのシャツを着た小狡そうな狐目

『なるほどな。あれは確かにそういう事をしそうな目だ』

『そうでしょう？　友達に言ったらそんな訳無いって言うのよ。みんなまだ子供だから分かって無いのよね』

『花梨も十分子供だろ』

『むっ！　私の何処が子供なのよ！』

『い、いやだって小学生だし……』

雪葉達よりかは大人っぽいけどさ

『な、なによ！　わ、私の胸を触りたいってとか言ってた癖に！！』

『ち、ちょっと待て！　俺がいつそんなデンジャラスな発言を！？
それに声が大きい！！』

『え？　あ、そうね。ストーカーに見付かっちゃうわね』

そういう問題じゃ無いんだが……

『しかし見れば見る程スケベそうな目をしているな。デブに媚びへつらってるし』

肩まで揉んでやがる

『え？　……ああ、田村君の事か。そっちじゃ無いわよ』

『へ？　だって後、隣にいるのは……』

バスケットボールを器用に指で回している優しそうな美少年

『バスケットボールを持ってる子よ』

『……はは～ん』

なるほどな

『な、なによ？』

『お前、好きなんだろ？』

『な！？　な、何言ってるのよ！　ばか！！』

この反応、間違いない。　俺はやらしくニタニタと笑ってみる

『な、なによその顔……』

『良いから良いから。分かってるって』

『う……』

『なぁ、好きなんだろ？』

『っ！　だ、誰があん』

『あの子が』

『たなん……は？』

『だけどストーカーは駄目だぜ？　嫌われ……どうした？　腹でも痛いのか？』

花梨は下を向き、肩をプルプルと震えている

『……か』

『うん？』

『ばっっっっかじゃないの！！！』

花梨のその声は半径１５０メートル内に響いたと言う

花のスイートハニー　3

mission2

【敵を見極めろ!】

「あれ？　花梨？　そんな所で何してんの？」

「うっ……」

花梨の大声は、コンビニにいた小学生達にも当然聞こえてしまい、その中の狐目……田中だっけ？　そいつが花梨の元へ来て声を掛ける

「べ、別に何もしていないわよ」

「ふ～ん」

探るような狐目。ガキんちょの癖に嫌な目をしているな

「やあ花梨」

そんな狐目とは対象的な爽やか美少年が、他の小学生達と一緒に花梨に近付き話し掛けた。

その声は優しげで、体型はスマート。パッチリ二重が涼やかだ

「……坂田」

花梨は、露骨に嫌そうな顔をして美少年から顔を背けた

「花梨も来たし、俺らももう公園行くわ。じゃーな坂田。から揚げサンキューな！」

デブ眼鏡は美少年っつか坂田？　からバスケットボールを受け取り、去ってゆく

「……あんたは行かないの？」

苛立ちと呆れを含んだ声の花梨

「行かないよ？　だってずっと花梨を待ってたんだから。今日、このコンビニで卵の安売りがあるから必ず来ると思ってたけど、一人で待つのは退屈だし、隙を付かれる恐れがあるからね」

坂田少年は、ニッコリ笑ってそう言いましたってか、ストーカー決定！　イェーイ！！

「さぁ花梨。遊びに行こう？　駅前のデパートでパフェ奢ってあげるよ」

坂田少年は花梨の手を取ろうと、腕を延ばした

「待てい！」

ｍｉｓｓｏｎｉ３

【花梨を渡すな！】

「花梨は俺と商店街のタコ焼きを食いに行くんだよ」

坂田少年の腕から花梨を庇うべく、花梨の体を抱き寄せる

「っ！？　ぅ……」

スカートの両端を、ギュっと握ぎる花梨。奴が怖いのか、僅かに震えている両肩が痛々しいぜ

「……貴方は誰ですか？」

坂田少年の目が、初めて俺に向いた

「俺はコイツの……」

何だ？　妹の友達？

「か、彼氏よ！」

「そうそう、彼氏、彼氏……彼氏！？」

いつの間に！？　い、いや違うだろ俺！！

「ば、馬鹿！　お前何言って……」

「彼氏……よ」

そう言って俺を見上げた花梨の瞳には、不安と怯えがあって……

「ふっ。そうだったね、マイスイートハニー」

思わず俺は歯を光らせ、サムズアップしていました

さて、そんな感じで現在

坂田少年は、なら恋人の証明してみせろと、わざわざ携帯で花梨のクラスメート（女ばっかし）を呼び出した訳で……

「ああ、マイスイートハニー。君は花だ蝶だ、梨だ。さぁ手を出して、僕と踊ろう（棒読み）」

「嬉しいわダーリン。何て素敵なあたしの恋人（棒読み）」

そして俺達は踊り出す。もう訳が分からない

「ち、ちょっと。何で踊らなくちゃならないのよ」

花梨に合わす為、腰を低くした俺の耳元で、花梨は囁く様に言った

「……何でだろうな」

理由は俺にも分からない

効果は合ったらしい

「あ、あんなに密着して……ま、まさか本当に？」

「うわぁ、凄いなぁ花梨は。……もうキスとかしてるのかなぁ」

のんびりとした優しい顔の子が、その顔に似合わない余計な事を言

いました

「あ！　そ、そうだ、キスだよ！　本当に恋人ならキス出来るよね！？」

Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｆｉｎａｌ

【恋人の証明をせよ！】

「キ、キス～！？」

キスと言う言葉に、花梨は驚き戸惑ったってか、最近のガキんちょはマセてるな

「……キ、キスは出来ないわ」

悔しそうにそう言い、下を向く花梨

「ほら、やっぱり！」

対して、それみた事かと鬼の首を取ったかの様に喜ぶ坂田少年

ガキんちょとは言え、流石にちょっとムカつく。　夏紀姉ちゃんの所へ連れて行って、教育でも……生きろよ、少年

「キスは出来ないけど！」

坂田少年に訪れるであろう悲劇と苦難を哀れんでいると、何故か花梨はキッと俺を睨み、正面に回る。目が怖いぞ

「ど、どうしたんだい、ハニー？」

「……弟達意外では初めてだから」

ボソッとそう言い、俺の右手を両手で掴む。そして――

「ん？　なぁっ！？」

自分の胸に当てた！！

「そ、そんな！」

「あ、あたし達はこうゆう仲よ！」

キャー、っと歓声を上げる花梨のクラスメート達

びっくり仰天の俺

そんな俺は、花梨の柔らかい……柔らかい？

「も、もう良いでしょ！　手を胸から離しなさいよね！！」

「あ、ああ」

花梨は顔を真っ赤にして照れている。もしかして花梨は……

「そ、そんな……そんなぁ！？　ぼ、僕の花梨ちゃんが、こんな死んだ魚のような目の男と○で×で♂♀な仲だったなんて……」

「言いたい事がありすぎて、何から言えば良いか分からないぞコラァ！！」

何が♂♀な仲だ！

「♂♀？　何よそれ？」

「……花梨は知らなくて良い」

「な、なによ！」

「花梨ちゃんの、花梨ちゃんの……花梨ちゃんのおいらんスケベっ娘！！」

坂田少年は泣き叫びながら俺達の逆方向へと走り去って行った

「待ってよ坂田く～ん。あ、また明日ね花梨。あと彼氏さん、花梨を宜しくね！」

「またね花梨、それと彼氏さん！　花梨を大切にしてよ？」

「花梨、今度ダブルデートしょっ。それじゃさようなら、お兄ちゃん」

「やっぱり、キスは人前じゃ出来ないよねぇ。ごめんね花梨」

「じゃ、オレも行くよ。楽しかったぜ花梨、お兄ちゃん。二人きりだからってエロい事したら駄目だぞ！」

洒落にならない事を次々と言いながら坂田少年を追い掛ける花梨のクラスメート達（五人）

……君は泣かなくて良いぞ、坂田少年。泣きたいのは俺だ

「み、みんな好き勝手言って！　坂田も坂田よ。昔は素直な子だったのに」

「昔から知ってるのか？」

「幼なじみよ。同じ病院で同じ日に産まれたの。因みにあたしが先。昔はよく遊んだんだけど、最近は余り遊ばなくなってたわね」

「そっか」

ストーカー云々じゃなくただ単純に、仲の良い友達が自分から離れてしまって、寂しかっただけなのかもな

「ところで、何でさっきから視線を逸らしてるんだ？」

一度も目を合わせない

「うっ……。よ、良かったわね、願いが叶って！　でも勘違いしないでよね、今回は特別よ、特別！！」

腕を前で組み、赤い顔を更に真っ赤にしながら、花梨はそう俺に言った

「……」

それを微妙な気まずさで聞く俺

「……な、何よ。何か言いなさいよ」

「あ～。花梨は大人びているけどさ……」

「……あ、あたしが何？」

「雪葉より胸小さ」

その続きは腹に飛んできた強打の為、言えませんでした。終わり

今日のハニー

花

続いて欲しい？

第４６話：春の巨大魚

ピッポッパッポ……

トゥルルル、トゥルルル

ガチャ

「はい、大人悩み相談室です」

「あ、もしもし。相談に乗って欲しいのですけども」

「どのようなお悩みですか？」

「それが先日の事なんですけども、先日……」

『兄貴ー、巨大魚釣りに行こうぜ！』

日曜日の朝、部屋で月刊将棋クラブを読んでいると、部屋に春菜が飛び込んで来て、いきなりそう言った

手には釣竿、頭には麦藁帽子。なんて腕白なんだ……

『巨大魚？　ブラックバスとかか？』

『……ふ』

格好に呆れながら仕方なく話しに乗ってやると、春菜は鼻で笑いやがった

『な、なんだよ?』

『次元が違うって。つか兄貴は知らないのか?』

『何を?』

『伝説の巨大魚を』

~伝説の巨大魚~

むかし、むかし。麦藁帽子がよく似合う、元気な少年がおりました。その少年は釣りがとっても好きで、その熱心さから周りからには釣りキチなどと呼ばれ……

『それ漫画だろ?』

『違うって! 岡崎のじいちゃんから聞いたんだよ』

『岡崎のじいさんか……』

悪い人では無いけど、話しが大袈裟なんだよな

『とにかく、我孫湖に伝説の巨大魚が居るんだってよ。く~燃えるぜ!』

春菜は拳を握りしめ、力強くそう言った

「お元気な妹さんで良いじゃありませんか。私には弟が居るのです

が、妹さんの元気を見習って欲しいです」

「いえ、まぁ元気無いのは良いんですけどね」

ガタンゴトンと揺れる電車の中。釣竿と釣り道具を持った俺達は何か間抜けだ

『つか春菜』

『なんだよ』

『……お前ブラジャーしてないだろ？』

色付きのTシャツを着ている為、はっきりとは見えないが、それでも形は分かる

『当たり前だろ？　釣りに行くのに、んな邪魔くさい物してられるかっての』

「……当たり前ですか」

「当たり前らしいです。あいつ来年は高校生ですよ？　あいつ割とスタイル良いんです。電車内でも男どもの視線が気になって……」

「げ、元気があって良いじゃないですか。わ、私の母も下着をせずにコンビニとか行きますよ？」

「そ、そうですか。

……まぁ元気なのは良いんですけね」

「他にも何か？」

「ええ、実は……」

春の巨大魚　2

『今日はいい天気だし、絶好の釣り日和だな！』

俺らが住む町から電車に揺られること四十分。
着いた場所はデカイ山と美味い空気が素敵な、ど田舎だ

『相変わらず何も無い駅だな』

『ん？　川とか山があるじゃん。畑もめちゃくちゃあるし』

『そう言うのを何も無いって言うんだよ』

駅前にコンビニすら見当たらない。シティーボーイの俺にとっては何とも面白みが無い町だ

『お、兄貴！　飛行機だぜ？　うぉ～うるせ～』

『……ほんと元気だよなお前』

その元気さを兄ちゃんに分けて欲しいよ

『んじゃそろそろ行こうぜ、兄貴！』

『おー』

『気合いが足りないぞ兄貴。私達はこれから強敵（とも）と戦わないといけないんだからな』

『分かった、分かった。行くぞ～！！』

『お～！！』

俺と春菜は高々と拳を突き上げ、飛行機雲が伸びる蒼天に向かって叫んだ

「……駅に人が居なくて本当に良かったです。あいつと一緒にいると、テンション高くなってしまうんですよ」

「仲が良いのですね。私の所は、もう姉離れしてしまっているので、少し寂しいです」

「照れ臭いだけだと思いますよ。今度外食に誘ってみたらどうですか？」

「外食ですか？」

「はい。バシッと化粧やオシャレをして、大人の女ってのを見せ付けてやって下さい」

オシャレをして、化粧をした秋姉……

「……むふふ」

「ど、どうかしたのですか？」

「あっ！　い、いいえ。ちょっと想像しただけですから」

「想像？」

「あ～、そ、それより僕の話しの続きを聞いて下さい！」

「あ、は、はい！　どうぞ！」

「ええと、春菜は……」

駅からガタガタ揺れるバスに乗って一時間。
それから結構重い荷物を担ぎ、山道を三十分歩き……

『や、やっと』

『着いた！』

我孫湖は山の麓にある、周囲長が1キロあるか無いかの小さな湖だ。
一時期、天然のウナギがいるとか居ないで話題になり、人が押し寄せたが、今では訪れる者も少ない

『相変わらず綺麗な湖だよな』

透明って程では無いが、苔も少なく、浅い所なら土まで見える。
時より木々の合間から吹く風と、穏やかな揺れる水が、心地良い

『……いる』

『は？』

『奴がいるぞ兄貴』

春菜はグイッと袖を捲った後、いきなりショートパンツを脱いだ。
白い生地の左右に小さいリボンが付いた、珍しく可愛い下着を履いていてって

『何してんだお前は!?　こんな所で脱ぐな!』

『兄貴が担いでるバックからジーパン出してくれよ。こんなスボンじゃ奴と戦えない』

「周りに誰も居なかったからって、普通躊躇しません?　と言うか、せめて先にジーパンを取り出してから脱げよと」

「……周りに人が居なくて良かったですね」

「居ても脱ぐと思いますよ、あいつなら」

「……」

春の巨大魚　3

竿に素早く餌を付け、見事なキャストで湖の中心に針を落とす春菜。
俺の方は餌を付けるのにすら苦労している

『よ～し釣るぞー』

『春菜～、餌付けてくれよ』

『たく、仕方ねーな兄貴は』

春菜は少し嬉しそうに餌を付け、竿を俺へ渡す

『ほらよ』

『サンキュー』

『さ～て、釣るか！』

一時間後

『……釣れないな』

『巨大魚専用の針と餌を使ってるからな。そう簡単には釣れないって』

二時間後

『……釣れないな』

『奴は警戒心が強いらしいな。持久戦になるぞ』

五時間後

『あ～～～！　釣れねぇぞこのやろう！！』

『落ち着けよ兄貴。奴の活動時間は夜から明け方なんだよ。まだ早い』

冷静に言う春菜。普段短気な癖して、こういう時に限って仏のような落ち着きを見せやがる

『まだ早いったってもう夕方だぞ？　そろそろ帰る準備をしないと……』

『今日泊まりだぜ？　明日も休日だし、母さんには許可とってあるし』

『……俺、帰って良いか？』

『……良いけどさ、兄貴は私の事、心配じゃないのか？』

横に座っている俺の顔をジッと見て、春菜にしては珍しい言い方をした

『……分かったよ、付き合うよ』

本気で置いて帰れる訳無いだろ

『さっすが兄貴！　んじゃ頑張ろうぜ！！』

『その前に腹ごしらえしないか？　腹が減って仕方がない』

『ん？　そうだな、じゃあ弁当食べよう。母さんが用意してくれたんだ』

『お、そいつは嬉しいな』

いそいそと担いで来たスポーツバックを開け、弁当らしき包みを……

『……母ちゃんが用意したんだよな？』

包みに触れた瞬間、寒気を感じた。何だこの悪寒は……

『ああ。台所に二人で食べてって置き手紙が……あ、あれ？　母さんの字あんなんだったかな』

『ま、まさか！』

あわてふためきながら弁当を取り出し、蓋を開けると……

《カア、カア……ガアアアア！？》

鳴いていたカラス達が一斉に逃げた！？

『あ、秋姉の弁当じゃねーか！！』

『う……うげ』

『こ、こら、吐くな！　耐えろ！！』

秋姉、ごめん！

『えいやー！！』

強烈な刺激臭に耐え、弁当の中身を湖に投げ捨てる。

すると、湖から魚が何匹もプカーっと浮かんで来た

『……大丈夫か春菜？』

『た、助かった……ありがとう兄貴』

『ああ。いつでも守ってやるよ春菜』

『兄貴……』

お互い、涙でぐちゃぐちゃになった顔を見つめ合いながら、俺達は生還出来た喜びを分かち合う

『……秋姉の弁当駄目にしちゃったな』

『……仕方無いさ。秋姉には俺から謝っとくよ』

余りの美味しさに、森の動物達が奪って行ったって事にしよう

『だけど食べる物、無くなっちまったな』

『私のバックにカセットコンロとカップラーメンが入ってるぞ。後は浮いてる魚を取って焼こう』

『……ほんと逞しいな、お前って』

「……」

「……凄いお弁当ですね」

「……僕の姉は本当に素晴らしい人なのですが、唯一料理だけは壊滅的なんです」

姉ラブな俺でも、あの料理だけは食えない

「私も料理が苦手だったのですが、練習している内に確か作れる様になりました。お姉さんもきっと……」

「……ありがとう。その希望を胸に、毎日を生きてゆきます」

多分無理だろうけど

春の巨大魚　4

夕方になり、あっという間に日は落ちて辺りは真っ暗になる。山の夜は早いのだ

『……』

『……』

カップラーメンと魚を食ってから一時間。俺達は一言も喋らず、ただ竿を見ていた

『……寒い』

もう夏とは言え山の、それも水辺にいるんだ、体感温度は十度あるか無いかだろう

『ん？　寒いのか？　ならこっち来いよ、兄貴』

春菜は手招きをする

『お、カイロでもあるのか？』

期待を胸に春菜へ近付くと、春菜は俺の手を取って引っ張った

『こ、こら』

バランスを崩し、転びそうだった俺を春菜は力強く抱き留め、ギュッと優しく抱きしめる

『……ほら、こうすれば暖かいだろ？』

『あ……春菜さん……っておい！　何でそんなに男前なんだよお前！？』

直ぐに離れ、抗議

『何で怒ってるんだ？　あ！　もしかして兄貴、照れたのか？』

悪戯っ子の様に、春菜はニヤつく

『照れたのは照れたけどさ……』

普通に照れさせてくれ

『たく、しょうがねーな兄貴は～』

春菜は、やっぱり何故か嬉しそうにそう言い、自分の着ているシャツを脱いだ

下着をしていない為、中学生にしては大きめ胸がもろに飛び出し、俺は慌てて周囲を警戒する

『な、何をしてんだお前は！』

『私、あんま寒く無いからこれ着ろよ。私はタオル羽織るからさ』

『お、お前なぁ！』

『また私のせいで兄貴が風邪引くの嫌だからさ』

鼻を擦り、照れ臭さそうに笑う春菜って

『どんだけ男前なんだよお前は！？』

「……」

「……お、お兄さん思いなのですね」

「え、ええ。良い妹……なのでしょうか？」

本当は男なんじゃ？

「ですが、お悩みになる事は無いと思いますよ。お話をお聞きしていると本当に仲の良い御兄妹の様ですし、少しぐらい男の子っぽくてもそれは個性で……」

「あ、違います。僕が悩んでいるのは春菜の事では無くて」

「え？　それでは何をお悩みになられているのでしょう？」

「巨大魚って何処で釣れま」

ガチャ……ツー、ツー

「……」

今日の釣りキチ

春＞＞俺＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞電

続けたら

第４７話：雪の作文

高坂小学校四年、佐藤　雪葉

私の家は、三人の姉と一人の兄。それに、お母さんと今は出張でお留守にしているけど、優しいお父さん。そして私の七人家族です

姉や兄はみんなとっても優しくて、末っ子の私は甘えてばかり。中でも兄には、いっつもわがままを言ってしまって、困らせてしまいます

でも兄は、仕方ないなぁって顔で私のわがままを聞いてくれて、私も、ごめんなさいと思うのだけど、やっぱり兄に甘えてしまいます

ううん、兄にだけじゃありません。いつも勉強を教えてくれる夏お姉ちゃんや、私を暖かく見守ってくれる秋お姉ちゃん。　色々な遊びを教えてくれる春お姉ちゃんに、優しいお母さんにも沢山甘えてしまっています

このままじゃ駄目だ、しっかりしなきゃ。逆にみんなを助けてあげなきゃ

お父さんが居ない今、守られているだけじゃ駄目だ。みんなを私も守らなきゃ

いつもそう思っているけれど、私の出来る事なんて凄く小さい事。
守られて、甘えてばかりの私じゃ頼りにもならない。

だけど、みんなの事が大好きな気持ちは誰にも負けてない！　大好きなみんなの為に、私も何かをしてあげたい

だからお兄ちゃん、お姉ちゃん、お母さん。私に出来る事があったら何でも言ってね。私、一緒懸命頑張るから

最後に、私の家族へ

私は、この家族の元へ産まれて来て、本当に幸せです

お父さんが居なくて少しだけ寂しいけど、みんなが側に居てくれるから大丈夫です。

いつも本当にありがとうみんな。
お仕事大変だろうけど頑張ってね、お父さん

「……」

「ど、どうだった？　お兄ちゃん」

「雪葉っ！」

「は、はい！」

「愛してるぞ！！」

兄ちゃん感激や～！

花マルが付いた雪葉の作文を読み終え、俺のハートは震えた

「お前のでこにキスさせろ、このやろう！」

「あ、あわ、お、お兄ちゃん」

戸惑う雪葉を捕らえ、でこにキス

「あっ……は、恥ずかしいよ、おにぃちゃん」

「良いんや、良いんやで恥ずかしがらなくても良いんやで。俺達は相思相愛やないか！」

雪葉の顔中にキスの嵐だぜ！

「あ、あう……うぅ」

親父の代わりに、俺がお前を守ってやる！　そう固く決心し、俺は……

ガチャ

「……何を血迷ってるのかしら？　あんた」

ドアから鬼が現れた

「……ですよね」

いくらなんでもテンションを上げすぎた

「お……にぃ。雪葉、もう……だ……め」

顔を真っ赤にし、力無くくたーっと床に寝転ぶ雪葉

そして我が前に立つ鬼

「……迂闊だったわ。シスコンって妹も対象内なのよね」

「ま、待ってくれ姉ちゃん！　こ、これを見てくれ！！」

「あ～ん？　遺書かなに……か」

夏紀姉ちゃんの瞳から、一滴の涙がこぼれる

「う……ううん……あれ？　夏お姉ちゃん？」

「愛してる！」

夏紀姉ちゃんは雪葉を羽交い締めにし、やっぱしキスの嵐！

「きゃ！？」

「あたしも大好きよ、雪葉～」

「お、おねぇ……や、やだ止めて、た、助けてお兄ちゃ～ん！」

ガチャ

「な～にをしてるのかしら～」

真の鬼が現れた。細目がギラリと光っている

「ま、待って母さん！　これを見て！！」

以下ループ

そして、十分後

俺らは皆、雪葉の部屋で正座をさせられていた

「……みんなハシャギ過ぎ」

「す、すみません」

「ご、ごめんなさ～い」

「ご、ごめんよ秋姉」

「……私じゃなく、雪に謝って」

「うっ」

秋姉は、いつになく怒っている

「ご、ごめん雪葉」

「んーん。ちょっとビックリしただけだから。秋お姉ちゃん、雪葉怒ってないよ？　だから」

「……ん。もうこんな事したら駄目だよ、みんな」

「はい！」
「は～い」
「分かりました！」

一糸乱れぬ返事をし、足の圧迫から解放された俺達は、痺れに苦しむ

その間、秋姉は雪葉の作文を読んでいた。そして優しい微笑み

「……よく頑張ったね、雪。良い作文だよ」

「……えへ」

軽く雪葉の頭を撫でる秋姉。ちょっと羨ましいぜ

雪の作文　2

「私も何か書くぞ～」

秋姉と雪葉を、ぼーっと見ていると、野次馬だった春菜がいきなり宣言する

「お前は文才無いんだからやめとけよ」

人の事は言えないけど

「うっさいな兄貴は！　たまには私を応援しろよな！！」

「はい、はい。頑張りなよ」

「ああ！」

「う……」

冷やかし半分に言ったのに、春菜は嬉しそうに頷いた

「書き終わったら見せるから、面白かったら褒めろよな～」

「作文は面白がらせるものじゃないぞ。でも……読んでやる」

……なんか照れ臭いな

「うふふ。さぁ、そろそろ夕食にしましょ～」

「待ってました！」

「は～い」

「ビール飲も～っと」

「よーし食うぞ～！　……あれ？　どうしたの秋姉？」

みんながリビングへ向かう中、秋姉は雪葉の作文を持ったまま、じっと見みていた

「……懐かしいな」

そして、何かを思い出したかの様に目を細める。　その細目もまた、美しい……。い、いや、そうじゃなくって！

「懐かしい？」

「花まる。あなたがくれた」

「花まる？　……あっ！」

俺がいたいけな少年だった頃、×がついた秋姉の作文に花まるをつけた事がある

あれは確か夏休みの宿題で、大人顔負けの作文を書いた秋姉に、馬鹿担任は親に書かせたと思って×をつけたんだったな

「よく覚えてるね」

「ん。……宝物」

そう言って秋姉は、俺ですら久しく見ていない超レアな顔を……ようするに、

ニッコリと笑った！

今日のテンション

俺＞＞＞

第４８話：直の肩たたき

「おーれはジャイアン、ガーキ大将～」

秋姉の満面の笑みを見て高くなりすぎたテンションを下げる為、夜の街を散歩する俺

あんな顔をする秋姉を見たのは久しぶりだ。

きっと雪葉の作文が凄く嬉しかったんだろう、俺もめっちゃ嬉しかったし

「……ふふ」

後で雪葉にお小遣でもやるか

そう思い、開けた財布は三百七十円のみ。肩たたき券でも良いかしらしかしそんな物を十歳の妹にあげて、喜ぶだろうか？

「うむ～。ん？　お、直也君か」

ジャージ姿の直也君が、こちらへ向かって走って来ている

「フッ、フッ、フッ……あ！？　お兄さん！　こんばんはっス！！」

直也君は走るのを止め、直立不動をした

「あ、ああ。こんばんは」

相変わらず真面目だな。……此処は一つからかってみるか

「俺は君の兄になった覚えは無い」

冷たい目と声で言い放つ

「っ！？」

俺の言葉に直也君は絶句し、肩を震わせた

「……なんちゃって～嘘だ……よ？」

「も、申し訳ございません！！」

去年、親父が会社の上司にした時の様な、見事な９０度のお辞儀。

お前は高嶋〇伸か？　等と十代には分からないツッコミを入れそうになる

「お、俺、俺、なんて失礼な事を……」

直也君の瞳に、涙が滲む

「な、直也君？　冗談だからね？」

「上段……。分かりました！　来て下さい！！」

手を後ろに組んで、歯を食いしばる直也君

「な、直也君？」

「上段蹴り、ガツンと喰らわせて下さい！！」

「い、いや違うって」

「はい！　血が出る迄打って下さい！！」

「人の話しを聞け！」

十分後

「す、すみません。俺、なんかテンパっちゃって」

「い、いや良いさ」

ようやく落ち着いた直也君を公園に誘い、ベンチに座る

「喉、渇いただろ？　何か飲むかい」

「はい！　直ぐ買って来ます！！」

「こらこら」

自販機目掛け、走り出そうな直也君の手を取り、座らせる

「俺が買って来るよ」

「そ、そんな！」

「後輩にカッコつけさせてくれないか？」

１２０円でカッコつくかどうかは微妙だが

「……佐藤さんは普段からカッコ良いです」

直也君は遠慮がちに俺を見つめ、ポソリと呟いた

「直也、お前……ってなんだこの空気は！？」

思わず告白しそうになったじゃないか！

「と、とにかく奢るからな！　コーヒーで良いか！！」

「は、はい！　ゴチになります！！」

「よかよか」

三分後

「肩たたき券ですか？」

「ああ。雪葉にあげようかと思ってるんだけど……喜ぶかな？」

「う～ん。雪葉ちゃん、肩凝ってるんですか？」

「前に揉んだけど、ぷにぷにだったな」

「でしたら肩たたき券よりも、お掃除券とかお買い物券の方が良いかも知れません」

「……なるほど。肩たたき券欲しいのは俺だもんな」

「佐藤さんは肩凝ってるんですか？」

「ああ、ってかお兄さんでも良いぞ」

「え？　で、でも……」

「気にするなよ」

「あ、あざっす！　佐藤さんって、頼りになる兄さんって感じがすげぇするんで、何か嬉しっス」

「頼りになる？　……ふふふ。見る目があるじゃないか。出世するぞ？」

「こ、光栄です！」

「うむ～。肩凝りの話しをしていたら凝って来てしまったよ」

「お揉みします！」

即座に俺の肩を揉みはじめる直也君

「……ふふふ。気が利くな、お前。何処まで出世する気だ？」

「い、いける所まで頑張ります！」

「ふふ……どうだ？　俺のは硬いだろう？」

「はぁ、はぁ。す、凄いっス。た、たまらないっス」

夜の公園で怪しく笑う俺と、緊張で息を荒くしながら肩を揉む直也君。　そんな二人に、近所の人が組織の犬に連絡するのには、そう時間は掛からなかった

二時間後

「……酷い目にあった」

職務質問から解放され、家に戻った俺。そして俺は、途中でコンビニに行かなかった事を後悔する事となる

「あら？　良いとこに帰って来たわね。今日は部屋で飲むから付き合いなさいよ」

「え？　で、でも僕、明日学校が……」

「学校が……何？」

「……はい。朝まで付き合います」

今日の災難

俺＞＞＞＞＞＞直＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞夏

つづけないで……

第４９話：夏の酔いどれ

ＬＥＶＥＬ１

「ん～、今日一日も疲れたわ。でも心地良い疲れなのよね～」

機嫌が少し良くなる。テンションＬＥＶＥＬは３

ＬＥＶＥＬ２

「最近どう？　学校でうまくやってる？　姉ちゃん、お小遣あげよっか？」

優しくなる。テンションは３

ＬＥＶＥＬ３

「ひ、酷いわ。みんなしてあたしをのけ者にして」

被害妄想が強くなり、涙もろくなる。テンションは１

ＬＥＶＥＬ４

「大体さ～、酒なんて物は酔ってなんぼなのよ。あ～、あたしは酔って無いわよ？　うひゃひゃひゃひゃ」

グタグダになる。テンションは５

ＬＥＶＥＬ５

「どうせあたしなんて、なんの役にも立たない女よ。笑えば？　笑いなさいよ！」

愚痴っぽくなり、絡み始める。テンションは２

ＬＥＶＥＬ６

「……うふふ。うふふふふ」

無駄にエロくなる。テンションは５だな

ＬＥＶＥＬ７

「あらよっと！　五臓六腑に染み渡る、酒を片手に盆踊りっとくりゃ」

言動がおかしくなる。テンションも７

そして、最大ＬＥＶＥＬの８

「……ふふ。ほらぁ、姉ちゃんの所へおいで」

昔に戻る！！

「どうしたの？　恥ずかしいの？　……もう、可愛いなぁ」

誰こってれ？　紛れも無く夏紀姉ちゃんですよ。　この夏紀姉ちゃんを、まだ小さかった春菜や雪葉は覚えてないだろうな

「姉ちゃんのとこ……来てくれ無いの？」

泣きそうな目と声で夏紀姉ちゃんは言う。こんな時、俺は……

「夏紀お姉たんっ」

昔に戻る！

「大好きだよ～」

甘えた声を出して、夏紀姉ちゃんに抱き着く俺だが、お気づきだろうか？　声と身体が震えている事を

「も～甘えっ子なんだからぁ」

チュッと、俺のつむじにキスをして、頭を胸で抱きしめる夏紀姉ちゃん

優しいじゃないかって？

……ふふ。

「ん～も～可愛い、可愛い、可愛い～！！」

みしっ

俺の頭から、そんな破壊音が聞こえた

「な、夏紀お姉たん。ちょっと痛いよぅ」

「あっ、ごめんなさい。何処が痛い？　頭？　痛いの痛いのとんで

け～」

「わ、わぁ！　痛いの無くなった～。ありがとう夏紀姉ちゃん」

「……姉ちゃん？」

夏紀姉ちゃんの目が険しくなる

「お、お姉たん！」

「……うふふ」

夏紀姉たんは妖しく笑う

……まずいな。このままではアレが始まってしまう

夏の酔いどれ　2

「お、お姉たん。ぼ、僕そろそろ眠くなっちゃった」

アレが始まる前に逃れようと、俺はわざとウトウトする

「……眠いの？」

「う、うん……眠い」

「そっか……。一緒に、おねむしようか？」

「ぼ、僕、もう一人で眠れるよぅ」

「……そっか、男の子だもんね。なんだか寂しいけど、あたしも弟離れしなきゃ駄目よね」

夏紀姉たんは寂しそうにそう言い、目を伏せる

「夏紀姉たん……。僕はいつまでも夏紀姉たんの弟だよ」

離れて暮らす事になっても、夏紀姉ちゃんに何かあったら飛んで行くさ

「だから寂しがる事なんて……な、夏紀姉たん？」

「姉ちゃん決めた！　弟離れする！！」

「ね、姉たん？　そ、そう焦らずに」

「うるさい！　するって言ったらする！」

「で、でも」

「ええい、うるさい！」

「あうち！」

夏紀姉たんのチョップが俺の頭に命中。３のダメージ

「うぅ……酷いよ夏紀姉たん」

「っ！？　……あは」

夏紀姉たんは恍惚の吐息を漏らす

「可愛い弟を虐める。あたし……」

「ね、姉たん？　だ、駄目だよ？　覚醒したら駄目だよ？」

「あたし、あんたの事、大好き」

「ね、姉ちゃん。ありがとう、俺もぉ！？」

にたり。夏紀姉たんは口許だけの笑みを浮かべた

「だから……うふふ」

ゆらりと立ち上がり、俺に迫る夏紀姉たんって言うかヤバイ！！

「……ねぇ、抱きしめて良い？」

選択肢が出ました

はい

いいえ↑

「いいえ」

「ぎゅー」

夏紀姉ちゃんは俺に覆いかぶさり、左腕関節を素早くキメた

「ギャー!?　折れる、折れる、折れる～!!　つか、それ抱きしめてない～!!」

「ああ……可哀相。もっと痛がって？」

「どういう神経してんだアンタ!?」

「ああ……その顔、ゾクゾクする。姉ちゃん、イケナイ事に目覚めそう」

「目覚めないで!　気をしっかりもって!　まだ立ち直れるから!」

「うふ……うふふふふふふふふふふ」

「ひぃぃぃぃ！！　た、助けて秋姉た～ん！！」

あの日と同じ様に、俺は秋姉たんの名前を力いっぱい叫んだ

「秋ならまだ小学校……あ、あれ？　何、このデジャブ」

ガチャリ

「……」

ドアが開き、眠そうに目を擦るパジャマ姿の鬼が現れた。戦闘力は５３００００ぐらいか

「……あれ？　アキが大人に？？　ひっ！」

夏紀姉ちゃんを見下ろす秋姉の目が、次第に怒りを帯びてくる

「……姉さん？」

「は、はいっ！！」

「……私の部屋」

「え……で、でも、もうおねむの時間で……」

「行く」

「はい！」

夏紀姉ちゃんは俺を解放し、素早く部屋を飛び出していった

「た、助かった……。ごめんね秋姉」

「ん。……大丈夫。災難だったね、ゆっくりお休み」

秋姉は俺に優しい微笑みを浮かべ、秋姉を追って下へと向う

「ありがとう、秋姉」

昔も今と全く同じ様に助けられた記憶がある

思えばあの日からだったな、俺が夏紀姉ちゃんよりも秋姉を頼る事になったのは

「あ、謝るから何か喋って～」

階段下から夏紀姉ちゃんの声が聞こえる

「夏紀姉たん……か」

昔は良かったなぁ……。　今の夏紀姉ちゃんも好きだけどね

今日のノスタルジック

俺＞＞＞＞＞秋＞＞＞夏

続くね

第５０話：秋のライバル

インターハイ県予選が、明後日から始まる五月末の夜

秋姉は俺の部屋に来て、最後の仕上げに公園へ竹刀を振りに行きたいと言った

「……付き合ってくれるかな？」

「もちろん！」

秋姉は夜の十時を過ぎると、決して一人では出歩かない。

これは秋姉が高校一年生だった頃の親父の言い付けなのだが、律儀に守っている。

俺が知っている限り破ったのは、合宿の時ともう一日だけだ

「……ありがとう」

「全然さ！！」

そんなこんなで夜の公園

髪を後ろに縛り、竹刀を片手にトレーニングウェアに身を包む秋姉。

その姿もまた美しい

「……ジュース、のむ？」

「ううん、良いよ。俺の事は気にしないで」

「ん……すぅ」

秋姉は、一度深く息を吸い、ゆっくり吐きながら竹刀を上段に構え、前を見据える

その凛々しくも美しい姿は、俺のハートに一本勝ち！

「ふっ……はっ！」

一歩踏み出し、竹刀を振り下ろす。次の瞬間には竹刀を再び上段に構えながら元の位置に戻る

それを何度も何度も素早く反復する。十、五十、百……

秋姉の顔は次第に上気してきて、額には汗が玉の様に浮かぶ

周囲からは高秋の女剣士と呼ばれる程、爽やかで涼しげに試合をする秋姉は、天才等と呼ばれたりもするが、秋姉は基本、努力の人だ。

料理なんかも相当努力してくれているのを俺は知っている。……し、知ってはいるんだけど

「……ふぅ」

秋姉は竹刀を振るのを止め、一息ついた

「タオルだよ秋姉」

俺は、お蝶夫人にタオルを渡す岡ひろみの様に、いそいそとタオルを持って行く

「……ありがとう」

微笑む秋姉。俺はこの微笑みだけで、タオルを三百枚買ってこれる

「今年も予選、大丈夫そうだね？」

「……ん」

少し考えた後、秋姉はしっかりと頷く。

それだけ努力をして来たと言う事だ

「……でも油断大敵」

「秋姉に油断なんて無いでしょ？」

試合はいつも全力。この真っ直ぐな気性と不器用さが、インターハイで優勝出来ない理由だと言われている

「……うん。……あ、あのね」

「さ、佐藤　秋さん！？」

秋姉が何かを言おうとした時、張り上げた女の声が公園に響いた

「な、なんだ？」

声の方を見ると、暗がりで良くは見えないが、制服姿らしき女が一人。

ズンスンとこちらへ近付いて来る

「やっぱり佐藤　秋さんですね！」

そして俺達の前に立った女は、余り見慣れない制服を着ていた。右手にはバック、左手には竹刀を入れる包み。

髪は秋姉より少し短いセミロングで、肌の色は秋姉には及ばないが、白くて艶やか。スタイルは秋姉には劣るが、均整が取れていて、容姿も秋姉には敵わないが、ツリ目がクールな美女。ようするに秋姉最高！！

「ん……宮田さん？」

「あ……。私の事、覚えていてくれたのですね。嬉し……って
そうじゃ無いです！
え、えっと……こ、此処で会ったら百年目ですよ！　いざ、尋常に勝負しなさい」

「何を下郎が！」

時代劇めいた口調しやがって！

「このお方をどなたと心得るか無礼者め！　打ち首にするぞ！！」

「な、何ですか貴方！？　いつからそこに？」

「始めから居たよ！」

「う～～ん。居ましたかね？　記憶（眼中）に無いです。あ、すみませんが関係無い人はフェードアウトしてもらって良いですか？」

「な、何を～」

文句を言おうと、俺は無礼者に向かって一歩足を踏み入れる

バシンッ！

その瞬間、俺の前で二本の竹刀が弾けた

「……流石ですね、秋さん」

「……」

互いに相手の持つ竹刀を弾こうと、腕に力を篭める二人。剣先が震える

「あ、ありがとう秋姉」

無礼者が左手に持った筒から右手で竹刀を抜き、そのまま俺の胴を払おうとした所を、秋姉が同じく竹刀で止めて下さったのだ

「……ん」

「秋……姉？　この子、秋さんの弟？」

「ん。……弟」

「そ、そうでしたか」

無礼者は力を緩め、竹刀を退く

「失礼しました。どこぞの変質者かと思っていましたので」

「本当に失礼だな、あんた！」

「宮田　かなたと申します」

宮田さんは竹刀を収めながら、俺に向かって頭を下げる

「宮田　かなたさん？」

変わった名前だな

「……どんな字で書くんだろ」

「……剣です」

俺の独り言に、宮田さんは呟く

「剣？」

「……剣道の剣です」

「……な、なるほど～。良い名じゃないですかいなでござる」

何て言って良いのか分からず、口調がおかしくなってしまう

「……父が剣道の道場を開いているのですが、子が出来たら必ず名前に剣を付けようと……。一番最初は剣子だったそうです」

「そ、それはまた……」

酷い名前だなぁ

「……かわいい」

「え！？」

「え！？」

秋姉の呟きに、俺と宮田さんの声が重なった

「……な、なんでも……ない」

恥ずかしげに顔を伏せる秋姉。この顔だけで俺は改名出来る

「……はっ！？　と、とにかく、勝負してもらいますよ！！」

「……此処じゃだめ」

「なら私の家に！」

ズイッと身を乗り出し、秋姉に迫る宮田さん

「まてい！！」

「うわっ！？　な、何ですか？」

「さっきから黙って聞いておれば何と身勝手な女子よ！　主ごとき秋様が出るまでも無いわ！！　此処は姫が家臣、佐藤」

「あ、名前要らないです余計な事、覚えたく無いので」

「さ、さと……うぅ」

名前の代わりに、涙がこぼれた

「……泣かないで」

秋姉はハンカチをポケットから取り出し、俺の目元を優しく拭く。
シトラスの香りが心地良い

「うん！　もう泣かないよ俺！！」

「……ん。偉いね」

俺の頭を撫で、微笑む秋姉。この微笑みだけで俺は……

「……」

「……ふふ。俺は大丈夫さ、秋姉」

本気でドン引きしている宮田さんの顔に、俺の姉ラブモードは終了。
慌てて、いつもの紳士に戻る

「……と、とにかく勝負してもらいますよ！」

「……私闘は、だめ。それに制服……汚れるよ？」

あくまでも勝負を挑む宮田さんに対し、やんわり断わる秋姉

「脱ぎます！」

そう言い宮田さんは、スカートの端を両手で掴んでグイッと下ろした

「ま、待って！　街中で脱ぐのは……ブルマ？」

「ちょっと待って下さいね。リボンが外しずらくって……」

続いて、上も脱ぐ宮田さん。学校指定なのだろうか、白い体操服だ

「よし。……これで良いですか！」

キリっとした表情で、宮田さんは秋姉を見据えるが……

「ブ、ブルマに体操服。そして竹刀。何てマニアックな……」

「な、何ですかその変質者を見るような目は！　言っておきますが動き易いんですよこれ！！」

そうは言うが、宮田さんの顔は真っ赤だ

「……へぇ」

取り敢えず頷いておく

「……わ、私だって脱ぐ事になるとは思っていませんでした。此処までしたんです！　是か非でも勝負させて頂きますよ！！」

そう言って宮田さんは、竹刀を中段に構え、剣先を秋姉の左目に向けた。俗に言う青眼の構え

「……剣道を私闘の道具にしたら駄目。勝負するならじゃんけん」

相変わらず冷静な秋姉。素敵だ……

「じ、じゃんけん？」

「ん、じゃんけん……だめ？」

「じ、じゃんけんと言われましても……」

「ん……」

困り顔の秋姉と宮田さん

よ～し、此処は俺が！

「俺とじゃんけんで勝負しろ！　掛かってきやがれ宮田さん！！」

「受け入れるのが早いですね！？　……まぁ良いでしょう。負けたら大人しく退散しますが、勝ったら秋さんと勝負させて頂きますよ」

「何を言っておるか、この愚か者め！　主の相手は、この俺じゃ！

！　俺が負けても秋姉とは戦わせんぞ！！」

「ち、ちょっと待って下さい！　それじゃ私にメリットが……」

「俺が負けたら服を全部脱いで、宮田さんにやるよ！　それで満足かこのスケベ！！」

「いりませんよ、そんなもの！」

「……そんなもの？　母ちゃんが買って来たパンツをそんなものだと！　ゆ、許さんぞカカロッ」

「君、本当に秋さんの弟ですか？　余り……と言うより、全然似てませんね」

「悪かったな！」

どうせ俺は醜いアヒルの子だよ！！

「ん……虐めたら駄目」

秋姉は俺を庇う様に、そっと俺の前に立つ

「べ、別に虐めてませんよ。……どうしても勝負駄目ですか？」

「……明後日。試合場で」

「……判りました」

ガクっと肩を落とし、頷く宮田さん

「無理を言ってしまい、申し訳ございませんでした。……秋さん、またいつか試合……して下さいね」

宮田さんはバックと制服を手に取り、にこっと笑ったが、無理している事がまる判りだ

「……ん」

そして、何かを言いたそうに頷く秋姉の気持ちもまる判り

「……それでは失礼します」

宮田さんはブルマ姿のまま振り返り、とぼとぼと公園の外へ向かって歩き出す

「……待ちなよ。何かあるでしょ？」

俺は、秋姉が聞きたがっている事を代わりに尋ねる

「……」

プライドがそうさせるのか、宮田さんは何も答えない

「……秋姉、聞いてあげて」

「うん。……聞かせて、宮田さん」

秋姉の言葉はいつも少ない。だけど、その言葉には偽りや、ごまかしは無い。

今も様子がおかしい宮田さんを本気で心配し、出来れば力になりたいと思って聞いているのだ

そして本気の言葉ってのは、必ず相手に届く

「……明後日の予選出れないんです。今回だけじゃなくて、これから先もずっと」

秋姉の言葉を受けた宮田さんは、気弱げな声でそう答えた

「……どうして？」

「……あ、明日、アメリカに……転校……ぐす」

宮田さんの足は止まり、声には僅かな震えが帯び始める

「……アメリカ？」

「……はい。父の転勤で、父がどうしても家族で行きたいと」

「……」

「……その事についてはもう納得しています。私も父の側にいてあげたいですから。ただ、どうしても試合の事が……秋さんとの試合が心残りだったんです」

体操服の袖で目元を拭い、振り返った宮田さんの瞳には涙など無く、真っ直ぐな視線からは強い意志を感じた

「そ、それで……秋さんがこの辺りに住んでいると聞きまして、もしかしたら秋さんに会えるかもって思い、先々週から学校帰りにこ

の公園に寄って鍛練していたんです」

顔を赤らめ、モジモジと照れ臭そうに宮田さんは答える……って言うかブルマ姿でモジモジされると、なんだかモジモジしたくなるぜ

「自分でも馬鹿な事しているって思っていたのですが、家に居ても落ち着かなくて……。でも、さっき秋さんを見掛けた時は本当に嬉しかった。何となく報われたって気がして……。あ、此処で試合をしてと言うのは、つい勢いで言っちゃいました。本気じゃないので忘れて下さいね」

笑顔の宮田さん。その笑顔は少し寂しげだが、どこかスッキリとしていた

「……一本だけ」

そんな宮田さんに秋姉はボソッと呟いて、

「……試合。しよう？」

と、優しく微笑んだ

秋のライバル　4

「……」

「……」

公園の中央。宮田さんと秋姉は向かい合う

「……ありがとうございます、秋さん」

「……ん」

ルールは寸止めの一本勝負。突きと小手は禁止

「……それでは」

「……うん」

二人はニ歩進み、礼をする。そして三歩進んだ所で蹲踞（そんこ）し、次に竹刀を構える

秋姉は左諸手上段。対する宮田さんは中段、青眼の構え

「……」

「……」

互いの目を捉えたまま、動かない二人

「……す、凄いな」

二人の間に、見えない球の様な圧迫感を感じる

「……」

その玉の中に、秋姉が一歩入る。だが、ほぼ同時に宮田さんも下がる

それを再び詰める秋姉。ゆるりと下がる宮田さん

秋姉の上段は火だ。相手の間合いを侵略し、打ち破る攻めの剣

対して宮田さんの中段は水の様に感じる。流れに逆らわず、さりとて自己は譲らない

「……勝負は一瞬で決まる。そう、星々の煌めきの様に」

つかさっきから適当な解説をしている俺は、男塾の冨樫気取りか？

「……やぁ！！」

「うわっ！？」

自分のキャラ立ちに微かな迷いを感じていると、秋姉が気合いの掛け声をあげた。こんな大声出るんだ……

「ふぅ……アァ！」

秋姉の気合いに、宮田さんが応える。そして初めて宮田さんの方か

ら足を前に進めた

「……」

「……」

詰まる間合い。後一歩でお互いの剣は届く

上段は主に面を狙う構えだ。面へ振り下ろす速さは他の構えよりも遥かに早い。

青眼は自分の間合いを保ち、面や小手、胴を狙うカウンター型の構え。小手が禁止されている今、上段に対しては胴を狙うのがベターだろう

『突きは勿論ですが……小手も禁止しましょう。秋さんの試合が近いのに万が一の事があってはいけませんから』

そう宮田さんは言った。秋姉に対し自分が不利になる条件を出した宮田さん。一体何を狙っているのか……

「たあ！！」

掛け声と共に宮田さんが先に動いた。秋姉に向け右足を無防備に踏み込んだのだ

「っ！」

上段は下がり知らずの構え。秋姉も素早く踏み込み、宮田さんの面に向かって竹刀を振り下ろす

決まった。横で見ている俺ですら完璧だと思ったタイミングだ。
　実際に試合をしている秋姉なら尚更そう思っただろう。だが、秋姉の剣はかわされていた

振り下ろされた瞬間、宮田さんは左足一本で跳ぶ様に後ろへ下がり、紙一重で剣先をかわす

「ヤー！！」

そして間一髪を入れず、竹刀を引き戻す秋姉に左片手下段からの胴。一本だ

「……参りました」

「……」

信じられないと言った風に、竹刀を構えたまま呆然とする宮田さん。
　その宮田さんに対し秋姉は敗北を宣言し、礼をする

秋姉がこんな完璧に負ける所を見るのは初めてだな……

秋姉の上段は宮田さんの中段に比べ、間合いが広い。そして秋姉は懐に入られない様に、相手の間合い外から打ち込む癖がある。ようするに踏み込みが少し浅い

そこを宮田さんはつき、見事一本を取った訳だけど、この踏み込みの速さは……

「……凄いな」

地面を見てみると、竹刀を避けるのに跳んだ足跡と、踏み込んだ時に出来たと足跡がはっきりと残っている。
思い切り踏んだとしても、俺ではこんな風には残らないだろう

「ん……」

俺の横に立ち、同じ様に足跡を見て頷く秋姉。
そして、未だ呆然としている宮田さんの前へと近寄った

「……強くなったね、宮田さん」

微笑みながら、相手を讃える秋姉。相手の事を認めた時に出す表情だ

「あ……、あ……」

多分、秋姉に負けないぐらい努力をしてきた宮田さん。
強くなったと言う秋姉の一言は、きっと宮田さんにとって、何よりも聞きたかった言葉だったんだと思う。
宮田さんの表情はたちまち崩れ、ぽろぽろと涙を零し、子供の様にしゃくり上げた。だけど……

「……はいっ！」

と、凄く良い笑顔で返事をしたから

今日の冨樫

俺

続けたき

第５１話：剣のグッドバイ

「お早う秋姉」

「……ん。おはよう」

秋姉と宮田さんが勝負をした翌日早朝。リビングのソファーでココアを飲んでいた秋姉に朝の挨拶

「……今日だね」

「……ん」

今日、宮田さんはこの町を離れる。

午前十一時二十二分。これが宮田さんの乗る電車の到着時間だ

「……」

「……秋姉。今日、学校休めば？」

昨日からずっと宮田さんの事ばかり考えていたのだろう、少し寝不足気味な秋姉。その疲れた顔を横に振る

「……だめ。私は主将だから」

「……そうだね」

明日はインターハイ県予選。午前中、部員の皆と最後の仕上げをす

るらしい。
　そんな大切な時に、主将である秋姉が部に出ないと言う事は出来ない

「……お願い」

「分かってるよ、秋姉」

秋姉は自分の代わりに俺に宮田さんを見送って欲しいと、二本の竹刀が交差する可愛いらしいキーホルダーと、一冊のノート。そしておにぎりを……お、おにぎり？

「……新幹線の中で」

「……よ、喜ぶよ、きっと！」

つ、作り直さなきゃ

「……ごめんね」

「謝らないて秋姉。俺も見送りたかったから。それに学校サボれるし」

「……ありがとう」

微笑む秋姉。この微笑みだけで俺は学校を三年サボれる

「でも三年で転校だなんて大変だね」

アメリカの高校に通うのだろうか

「？　……宮田さんは、まだ二年生」

「同じ学年か！」

宮田さんめ！　大人っぽい雰囲気で俺を騙し……てないか

「じゃあ、後輩だったんだ」

「……ん。……去年、二回戦目に試合したのが初めて」

「強かった？」

「……うん、忘れられないぐらい強かった。でも昨日はもっと強かったよ？　いっぱい努力したんだね」

嬉しそうな秋姉。いつもより口数も多く、俺まで嬉しくなってしまう

「……そっか。きっと秋姉を目標にして努力したんだろうね」

「ん。……そうなら凄く嬉しい」

そう言って本当に嬉しそうに微笑んだ。その微笑みは俺のハートに

「一本勝ち！！」

「っ！？　……ど、どうしたの？」

「あ、い、いやつい」

「？？」

不思議そうに俺を見つめる秋姉の視線にドキドキしつつ、時計を見ると六時五十分

「そろそろ時間だね」

「……ん。行って来ます」

竹刀とバックを手に取りリビングのドアへと向かう秋姉

「行ってらっしゃい、秋姉。宮田さんの事は任せてね」

「……うん。ありがとう」

秋姉は少し寂しそうに頷き、リビングを出ていった

「よし、出来た」

秋姉が学校へ行ってから三時間。自分でも中々凄いなって思えるちらし寿司が出来た

「奮発して蟹まで（夏紀姉ちゃんのおつまみ）入れてしまった……」

後が怖いが、適当に酔わせてごまかせば何とかなるだろう

「……そろそろ行くか」

宮田さんが乗る新幹線は五つ隣の駅に来る。

まだ時間に余裕はあるが、早く行って困る事は無い

「秋姉の荷物を……」

このおにぎり、どうしようか……

※

「はぁ、はぁ、はぁ……や、やっと着いた……」

電車賃をケチり自転車で来たら、道に迷うと言う典型的なボケをやってしまった……だけど間に合って良かった。

とは言え、もう時間は余り無い。急がないとあきまへん

駐輪場に自転車を置き、入場券を購入。そしてホームへ直行

「宮田さんは……いた！」

宮田さんは階段を上がって直ぐ横のベンチで、文庫本を読んでいた。
水色のワンピースが涼しげだ

「宮田さん！」

「え？　あ、佐藤君？　本当に来てくれたんですね」

「昨日、行くって言ったろ？　秋姉も来たがっていたんだけど……」

「この大切な時期に見送りに来られてしまったら私、困っちゃいますよ。インターハイ、応援していますとお伝え下さい」

「あいよ。はい、これ弁当。良かったら電車ん中で食べて」

ちらし寿司が入った弁当包みを渡す

「後、これ秋姉から。ノートとキーホルダーと……お、おにぎり。
ノートには宮田さんの剣道で秋姉が気付いた事や、うちの住所とか書いてあるみたい。キーホルダーは秋姉のお気に入りみたいだね」

ノートとキーホルダー、そして……お、おにぎりの入った手提げ袋を渡す

「秋さんが？　……嬉しい」

宮田さんは本当に嬉しそうに袋を受け取り、ギュッと抱きしめた

「お弁当もありがとうございます。朝から何も食べていないので、お腹ペコペコなんです」

「……おにぎりは食べられなそうだったら食べなくて良いから」

俺には秋姉の作ったおにぎりを、捨てる事が出来なかった……

「はい？」

「あ、いや何でも……」

「？？　ん～、良く判りませんが……実は私もお二人に渡す物があったりします」

そう言って宮田さんはトランクを開ける

「先ずは秋さんになのですが、これを」

取り出したのは、金の刺繍が見事な錦布だ

「もし良かったら竹刀を仕舞うのに使って下さいね」

「ありがとう、きっと喜ぶよ」

「はい。……それで佐藤君には……」

宮田さんは照れ臭そうにしながら、巾着袋を手に取った

「佐藤君にはこれです。これには私の……下着が入っています」

「し、下着！？」

「お、大きな声を出さないで下さい。……昨日のじゃんけん勝負、私の不戦敗ですから」

「で、でもあれは……」

「……お気に入りの下着なんです。大切にしてあげて下さい」

ポッと顔を赤らめ、モジモジと身体をくねらす宮田さん

な、なんやこのトキメキは。俺はそんな趣味無いはずなのに……

「……ま、まぁ、あれですな。勝負は勝負で勝負ですたいな」

何を喋っているのか自分でも分からない

「くす……あ、そろそろ時間ですね」

「え？　あ、ああ、そうだね」

その言葉通り、駅には電車が入って来る

「名残惜しいですがお別れです」

「……そうだね」

「……ふふ。こうして駅のホームで向かいあっていると、別れを惜しむ恋人同士に見えるかも知れませんね」

新幹線の扉が開き、宮田さんは乗り込む

「それでは……さようならです佐藤君」

「……またね宮田さん。……グッドバイ」

「……発音、下手ですね」

「わ、悪かったな」

ホーム内にピピピピピと甲高い音がなり、いよいよ別れの時間がやって来る

「……グッドバイ、宮田さん」

「……グッバイ佐藤君。君の見送り、嬉しかったですよ」

そう言ってニッコリと宮田さんは笑った。
秋姉に負けないぐらい素敵な笑顔

そして、扉は閉まる

別れの切なさも、悲しさも無視してあっさりと動き出す電車。
あっという間にスピードが付き、別れを惜しむ間もなくあっさりと行ってしまう

「……もう見えなくなっちゃったよ」

少しぼーっとした後、何と無く構内にある喫茶店に入り、無駄に時

間を潰す

「……はぁ」

別れってのは悲しいな。せっかく知り合えたってのに

「……ええい！　ウダウダしても仕方が無いさっさと帰るか！！」

そう強がってはみても、中々テンションが戻らない

トボトボと駅を出て、トボトボと駐輪場へ行き、コギコギと自転車に乗る

今頃宮田さんは空港に着いているだろうか？

「そう言えば袋……」

し、下着って言ってたな

「……よし、ぱっと開けたるか！！」

自転車を止め、周りに人通りが無い事を確認し、俺は袋の紐を解く

「……ん？　人形？　それと……」

袋の中には、手作りなのか秋姉と俺に雰囲気が似ている人形と、メモ用紙のような紙が入っていた

その紙を手に取ると、何かが書いてある

「ん？　なになに……」

［ひょっとして期待しました？　下着なんてあげる訳無いじゃないですかスケベですね！］

「なっ！？　……はは！　騙しやがったなチクショ～。いたいけな少年を弄びやがって～！！」

吠えながら見上げた空は雲一つ無い快晴。この青空は、きっと何処までも続いている

だから、この声は届くはず

「この仕返しは必ずするからな～！　絶対また会おうね宮田さ～ん！！」

また会える日を確信し、俺はそっと人形をポケットにしまい、秋姉が待っているであろう家に向かって、力強く自転車を漕ぎ出した

今日の腹痛

剣＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞俺≦秋

続きたく候

第５２話：春の無敵

佐藤家三女、佐藤　春菜俺の妹だ

春菜は運動神経がとても良く、初めてやるスポーツでも一時間あればそれなりの形にする事が出来る。それが一年も続くものなら、どの競技でも全国レベルまでになるかもしれない。

秋姉が努力の人だとすると、春菜は天才と呼べるだろう

次に春菜は良くモテる。多分、我が家で一番モテている。それはさっぱりとした性格にもよるが、美形揃いの華麗なる我が一族の中で、最も美人顔だからだと専門家は指摘する

そう、非常に、非常に、ひじょ～に認めたくは無いがっ！　春菜は我が家で一番美人だと言われる事が多い

例えばこんな例がある。私のクラスメート、太郎君との会話だ。

先週彼が久しぶりに私の部屋へ遊びに来た時の事だ

『お前の部屋、相変わらず片付いてるな～』

感心した様に言い、床へ腰を下ろす太郎

『まぁな。秋姉にだらし無い所を見せる訳にはいかないしよ』

『秋さんな～、超美人だし、一緒に暮らしてりゃ気を使うわな』

『むふふ、ま～な』

『たくマジで、羨ましいぜ。夏紀さんもすげぇ綺麗だし、雪葉ちゃんも可愛いしよ～』

太郎は心底羨ましそうに言うが……

『……夏紀姉ちゃんならあげても言いぞ』

『……遠慮しておくわ』

夏紀姉ちゃんの本性を知っている太郎は、静かに首を振った

『……ま、確かに顔だけは良いけどな、アレも』

ガチャ！！

突然開く扉、まさか！

『ひぃっ！？　す、すみません！　太郎の馬鹿が僕の愛するお姉様を、顔しか取り柄の無い酒飲みだと馬鹿にしまして、説教をしていた所です！』

マッハで土下座っ！

『ち、ちょ、お前！？　何言って……』

太郎の言葉が途切れる

『な、何してる！　貴様も早く土下座しろ！！』

『あ、いや……夏紀さんじゃなくて……』

『ん？』

恐る恐る顔を上げると……

『何してんだ兄貴？』

春菜だった

『あ？　……なんだ春菜かよ、脅かすなよな』

『脅かせたのか？　わりぃ。ん？　お、太郎じゃん、久しぶりだな～』

『あ、はい……えっと春菜ちゃん？』

『ん？　なんだ？』

『い、いや……』

『なんだよ～』

太郎に詰め寄る春菜。太郎はオロオロと視線を迷わす

『で、どうしたんだよ春菜』

『ん？　暇だから遊ぼうぜ！』

『……まぁ良いけどよ。太郎も良いか？』

『あ、ああ……』

それから夕方までゲームをし、太郎が帰る時間となる

俺はコンビニに行く為、太郎と一緒に家を出た

『春菜の奴、隠れて練習してやがったな～』

いつの間にか、格闘ゲームで俺と五分の勝負をする様になっていた

『……』

『……さっきから様子が変だけど、どうかしたのか？』

『……な、何だあの美少女は！！』

『は？』

『何なんだよ、何なんだよ、何なんだ～！！』

『ぐぇ！？』

太郎は俺の襟を掴み、揺さぶる

『何であんな美少女がお前の家に～！！』

『ええぃ、離せ！！』

『あ、す、すまん、つい興奮して……』

『たく……。美少女って誰の事だよ？』

『誰って春菜ちゃんの事に決まってるだろうがぁあああああ！！』

夕焼けに向かって吠えたその大声は、太郎の姉ちゃん（めっちゃ怖い）まで届き、その翌日太郎の弁当にはおかずが一品も入っていなかった。余談である

さて、何故このような話を私はしているのか。それは……

「がつがつ」

「……」

「がつがつがつがつ」

フライドチキンを両手に掴み、がつがつと口いっぱいに頬張って食べるその姿は、どうしても美少女だと思えないからだ

「……春菜」

「がつが……んぐんぐ。……なんだよ？」

「……本当に良く食べるよな、お前」

「ん？　腹減ってるし」

此処は隣町のデパート

明日、試合に望む秋姉の為に秋姉が好きなデパ地下名物【プリ子さんちのプリン饅頭】を買って来ようと、宮田さんを送った帰りに寄ってみた俺

お目当ての物を買い、ぶらぶらと食品売場を見ていると、タメ歳っぽい奴らが興奮した様に何かを話しているのが聞こえた

『やっぱ駄目だったな、俺らじゃ相手にもしないって』

『分かってんけどよぉ～あんな可愛いの滅多にいないしさぁ』

『つか、マジで可愛かったな……。加山　里美にちょっと似てるし』

加山　里美。実力派の若手で、今、人気絶好調の女優だ。

切れ長の目元と、シャープな口元。一見冷たそうに見えるが、どこと無くあどけなさが残るその顔は、蠱惑的な程、魅力に溢れている。秋姉には敵わないけど

『……』

実はちょっとファンだったり

『でも五階にあるバイキングレストランのショウウィンドウの前で、何やってたんだろうな？』

素晴らしく都合の良い会話を聞き、まるで神に操られたかの様に俺は五階へと向かった

先月改装したばかりのデパート。また真新しいエスカレーターに乗り、レストランフロアへと出る

バイキングは確か……あっちか

俺は右奥にあるバイキングレストランに向かって歩く。すると、ショウウィンドウの前でキョロキョロしているショートカットの女の子が居た

『……あれかな？』

後ろから見てもスタイルは良く、確かに可愛いであろう雰囲気はある

『うむ～』

しかしあの後ろ姿、どっかで見た事があるような気が……いや、どっかって言うか今朝……

『……は、春菜？』

『ん？　あ！　兄貴！』

振り返った春菜は、喜びに満ち溢れた素晴らしい笑顔をしており、その笑顔のまま俺に向かって一言言った

『金貸して』

そして現在に至る

「がつがつ、がつがつ」

「……たく、いきなり金とか言うから何事かと思ったよ」

「がつ……んぐ。悪かったって言ってるだろ？　しつこいぞ兄貴」

「ば、馬鹿！　ばれたらどうするんだよ！！」

「あ、と……私の兄貴しつこくてさ～」

「へ～春菜の兄貴はしつこいのか～」

「あ、あははは」

何故、こんな白々しい話しをしているのか？　それは、春菜が持つ割引券に秘密がある

【カップル限定！　４５分、食べ放題が二人で１０００円！！】

『秋姉のプリンを買いに来たんだけど、そんとき貰ったんだ～。行こうぜ兄貴！』

そう、春菜もプリンを買いに来ていたのだ

「しかし三十分も店の前をウロウロするとか……何だか俺、悲しくなって来たよ」

「でもこんなチャンス逃せる訳ねーじゃん。ここ普段高いし」

「まぁ……確かに」

普段は一人五千円取る

「何でこんなに安いんだろうな？」

「さあ？　どうでもいいじゃん」

「……」

何だか嫌な予感がするのは気のせいだろうか……

「ほら、もっと食べろよ寿司か何か取って来ようか？」

「……ありがとよ」

だが、お前の食ってる量を見たら食欲が無くなって来た……と、言わない所が兄の優しさだろうか

「そういえばお前、さっきナンパされたか？」

「ん？　ナンパかどうか知らないけど、ご飯食いに行こうって言われたな」

「どうして行かなかったんだ？」

「知らない奴とご飯食べるの嫌だよ」

せ、成長しているっ！

「そ、そうだ、それで良い。今度何かあったら先ず俺に連絡しなさい」

「良いのか！？　実は今日も兄貴を呼ぼうかずっと悩んでたんだよ～。でも私が誘うと兄貴嫌がるかなって……」

春菜は料理を置き、上目使いで遠慮がちに俺を見る

「……別にお前と一緒に居るの嫌じゃないぞ。てか、お前最近、よく俺に構うな？　以前は余り話さなかったのに」

「だって兄貴嫌がってたじゃん。……今は親父居ないし、家の中じゃ兄貴ぐらいしか遊び相手いないからな～」

わざとらしく明るい口調で言う春菜

そうだ、すっかり忘れていたが家には親父が居たんだった……。

春菜はお父さんっ子だったから、ずっと寂しかったんだな……

「……兄ちゃんの胸で泣いてええんやで？」

この兄の胸でお前の涙を乾かしてやる！

「はぁ？」

返ってきた反応はドライだった

「それにしてもカップルだらけだな」

三十席あるレストラン内は、右も左もカップルだらけだ

「そりゃ安いからな」

……本当にそれだけだろうか？

「……兄ちゃん、とっても嫌な予感がするぞ」

「心配すんなって。何があっても私が守ってやるから」

そう言って腕に力こぶを作る真似をする春菜。何て頼もしい奴……

「おっ！　ローストビーフの追加が来た！　よ〜し、取ってくるぞ〜」

「……俺も何か食うか」

そういえば向こうに毛蟹があったな

俺はレストランの魚介類コーナーへ行き、トレイを手に蟹が置いてある長テーブルの前へ……

「カップルチャーンス！」

「うわっ！？」

蟹を取ろうと手を伸ばした時、謎のシルクハット紳士がテーブルの下から現れた

「おめでとうございます蟹を選んだ貴方にカップルチャンスです！」

「……はい？」

「さぁ、恋人を呼んで下さい！」

「……は、春菜～」

「もっと！　心と魂を込めて！！　愛を響かせ、轟け青春！！」

「春菜～！！」

ああ、何て俺はノリに弱い男なんだ……

「グレイト！　イッツ、クレイジーボーイ！！」

「あんたがやらせたんだろうが！」

「ど、どうした兄……」

声は春菜に届き、春菜は慌てて俺の元へ来たが、横にいる紳士を見て言葉に詰まる

「……あに？」

訝しげな紳士。ピンチだぜぃ
一体どうやってごまかすつもりだ春菜!?

「……まる」

なんだそりゃ!

「オーウ、アニマルアルか〜。ミーもアニマル好きザンスよブロッケン」

「……何処の人種を目指してんだよ、あんたは」

「さて、問題です」

「いきなりだな!?」

「あちらの映像をご覧下さい」

紳士が指を差す方を見ると、中央に大型のワイドテレビがあり、画面にはカップルらしき男女が仲睦ましそうにドライブをしている

「映像クイズです。この二人は何処に向かっているのでしょうか?」

「何処にったって……」

「何個かのヒントが出ますから、ヒントが出終わる前にお答え下さい。早い内に当てるとポイント高いです。それではスタート!」

掛け声と共に映像は動きだし、次々と写真の様に画面が切り替わっていった

「ん～森？　いや山の麓か？　麓に車を停めて……ロープ？　登山？　それにしては軽装だし……ん？　薬？　風邪薬か何かかな？　車内に遺書って書いた手紙を残してって、富士の樹海か！？」

「正解！　お見事！！」

「嫌なクイズ出すなよ！」

「ちなみにこの後、女性の方のみ樹海から出て来ました」

「後味悪っ！？」

「見事正解されたお二人には、なんと３０ポインツっ！！」

ざわ……ざわざわ

周りのカップル達がざわめく

「な、なんだ？」

「普通は一問５ポイントなのに、いきなり３０だべか～おら達も油断できねっぺ」

「んだんだ」

近くに居たカップルが判りやすい説明をしてくれた

「てかポイントって言っても……」

「ポイントを得るクイズに挑戦する為には、当たりの料理を手に取らないといけません。取った料理は一人前完食する必要があります」

「ふ～ん」

結構色々食ったけど、当たりが少ないのかな？

「優勝すれば商品券十万円と、三十回分のお食事券！」

「春菜っ！！」

「任せとけ！」

そう言うと、春菜は直ぐに料理へ飛び付いた。そして食って食って食いまくる！

「は、早い……奴め、力を隠していたのか……」

俺ですらビビる勢いで食いまくる春菜。ぶっちゃけ少し引く

「はい、キノコサラダでクイズゲット！」

「よしっ！　よくやった春菜！！」

「映像クイズです」

「またかよ！」

「あちらの画像をご覧下さい」

クリスマス～クリスマスったらクリスマス♪

そんなクリスマスの定番ソングが流れ、ツリーの下で仲睦ましく手を繋ぐカップルの映像が始まった

「って、この女、さっきの女か！」

「予算が無いので同じ女優の方を使わせて頂いています」

「なら男も同じ奴を使えよ！」

さっきは二十代ぐらいの男だったが、今は三十後半の金持ちそうな男に変わっている

「さて、このカップル。この後、何処に向かうでしょうか？」

「何処って……」

「幾つかのヒントでお答え下さい」

画像が変わってゆく

「ん？　夜の繁華街、レストラン……は素通りして、どんどん奥に……ネオンが煌めく通りを抜けて怪しげなホテル街へ……ま、まさか」

「分かった！　屋台のラーメン屋だ！！」

「ば、馬鹿！　これはラブ」

「正解！」

「はい？」

「映像の右端に、ちらっと屋台が出ているんですね～。５０ポインツ！」

「やったぜ！」

ガッツポーズの春菜

「これで現在一位のいなかっぺカップルに続く二位へと上がった美少女としもべカップル。残り時間は三分ですが、逆転はあるのか！？」

「誰がしもべだ！　って突っ込んでる場合じゃ無い！！　春菜！」

「ああ！」

春菜と俺は、料理を片っ端から食らい続ける。その姿は鬼神の様だったと後に語られる

「そ、創業十周年企画の初日。カップルデーから凄い二人が現れました……。これは歴史に残る戦いです！　お、そのカツ丼は！？当たり、映像クイーズ！！」

「ハァハァ……ま、またか」

「やったな！」

カツ丼片手に俺の元に来る春菜。当たったんだからもう食わなくて良いのに……

「あちらの画像をご覧下さい」

そう言って出た映像は、部屋の隅でポツンと座っている女の姿って！

「またこの女か！」

「この女性は何をしているでしょうか」

「何って……」

「時間的にこれが最後のクイズになるでしょう。さぁ、映像スタート！」

「止めなくちゃ……止めなくちゃ……」

暗い部屋。電気も点けず女はぶつぶつと呟く

ガチャリ。ドアが開き、若い男が入って来た

「……正也」

「……綾子」

正也と呼ばれたホスト風の男は、綾子の姿を見て表情をしかめた

「……綾子、もう止めるんだ。お前の身体が壊れちまう」

本気で女を心配しているのだろう、悲痛な声だ

「止められないの……」

しかし女は首を振る

「綾子！」

「止まらないの……」

暗くて良く見えないが、手の指に何か細い物を握っている。ま、まさか薬

「カ○ビー」

「かっぱ○びせんか！」

「正解！　１００００ポインツ！　優勝は貴方がたカップルに決定！！」

「く、くだらね～」

マジになった俺が恥ずかしい

「優勝おめでとうございます！　それではスポンサーであるカ○ビーから全国一部で使える商品券十万円をプレゼント！」

「一部なんだ……。でも嬉しいぜ！　やったな春菜！！」

「ああ、兄貴！」

「あ！　馬鹿っ！！」

ざわ……

春菜の一言で、会場はざわめく

「兄貴……ですか？」

静かに尋ねるシルクハット紳士

「あ、いや、ぼ、僕達はその……」

「まさか二人は……」

「す、すみ」

「禁断のカップル！」

「ませ……ん？」

「彼女のような美少女のボーイフレンドにしては死んだ魚の様な目をしているとは思っていましたが、そんな事情が……。それは確かに目も死にますね」

「別に死んでないから、元気だから！」

「事情は分かりました。そういう事でしたら問題ありません。宜しいですか皆さん！」

紳士は会場に居るカップル達に問いた

「ああ！」

「勿論よ！」

「頑張れ二人とも！」

カップル達は拍手と共に暖かい声援を俺達に送った……その時っ！

「ちょっと待つだべ！」

いなかっぺが吠えた！！

「百歩譲ってカップルだとしても証拠が無いだべさ！」

「んだんだ」

「ぐっ……痛い所をついてきやがる」

「む～、証拠って言われてもなぁ」

言葉に詰まる春菜

……やっぱ騙す訳にはいかないか

「……もう諦めようぜ、春菜。帰りにタイヤキ買ってやるからさ」

「……花月堂のタイヤキ十個だぞ」

「あ、ああ」

高いんだよなアレ……

「むふん。やっぱり証明出来ないっぺね。本当にカップルなら証拠にキスでもするけんね！」

「田作さんスケベだす～獣だす～」

「ふっ。オラが獣になんのは花ちゃんの前でだけさ」

「田作さん……」

「お花……」

見つめ合い、勝手に盛り上がるいなかっぺカップル。もうどうでもいい気がしてきた

「ん？　キス？　そんなんで良いのか？」

そう言うと春菜は俺の正面に立ち、俺を見上げる

「？　どした？」

春菜は背伸びし……

「ん」

「ぶっ！？」

俺にキスしやがった！？

「な、何をするのよ、春菜！」

困惑し、女化するあたし

「何ってキスだろ？　それより兄貴の口、カニ臭いぞ」

あたしとは逆に、春菜は平然としていますわ

「……ま、負けたっぺ。キスなんてハレンチな真似は恋人同士しか出来ないだっぺンタックス」

「スポンサーだべ～」

「お前ら実はスタッフだろ！？」

「とにかく優勝はアンタらだべがな！　おめでとだがや！！」

「最強無敵カップル、此処に誕生です！」

いなかっぺと、紳士の言葉に会場のボルテージはＭＡＸ！
そして何故か胴上げや握手会、果ては記念撮影までして、帰り道
「今日は楽しかったな、兄貴！」
「……」
「兄貴？」
「あのなぁ春菜、気軽にキスなんかするなよ。キスってのは、本当に大切な人とだけにするもんだぞ」
「ん？　私は兄貴や親父それと母さん。姉ちゃん達に雪の事が一番大切だぜ？　まぁちょっと恥ずかしかったけどな！」
「い、いや、そう言う事じゃ無くて……」
「ん？　なんだよ？」
「……ま、そのうち分かるよな。焦る事無いか」
俺の妹は、大切な人を恥ずかしがらず素直に大切だと言える強い妹だ。
　コイツがいつ、どんな奴を好きになるかは知らないが、コイツが選ぶ奴ならきっと最高の男だろう。そいつが春菜にキスの大切さと意味を教えてやれば良い
「って誰だ、そのクソ幸せ野郎は！　兄ちゃん簡単には認めませんよ！」

久しぶりに春菜の頭をクシャっと撫でる

「な、なんなんだよ～」

「ま、とにかく。俺もお前が大切だぜ、春菜！」

「い、言わなくても分かってるよ！　たく……。　あ、ところで兄貴。タイヤキの約束忘れてないよな？」

「本当に空気読まないよな、お前って……」

因みに商品券は、会場にいたカップルみんなに分けました

「私は、お食事券があれば良いからな！」

今日の食事量

春＞＞＞＞＞田＞＞＞＞＞＞俺

つづりゃ

第５３話：風の迷い

秋姉のインターハイ県予選が始まる今日。
秋姉を応援すべく、試合会場へ向かってチャリンコを漕いでいる俺の耳へ、綺麗な声の歌が微かに届いた

「……良い声だな」

時計を見るとまだ時間に余裕がある。俺はセイレーンに誘われる船乗りの様に、声の方へ向かって自転車を漕いだ

「ら～ら、ら～らら。る～る、るる～」

「……」

近づくにつれ、透明になってゆく声。夏紀姉ちゃんにいたぶられ、傷付いた俺の心を癒してくれる

「……こっちか」

歌がはっきりと聞こえる場所に来ると、小さな公園があり、そのベンチで足をパタパタさせながら座っている男の子らしき子供が居た

「……あの子か」

もっと近くで聞きたいな

俺はそっとチャリンコを置き、邪魔にならない様向かいのベンチへ
……

「ら……っ！　……」

びっくりさせてしまったのか、男の子の歌が止まる

「あ、ご、ごめんな。あんまりにも歌が上手いからつい……って風子？」

「え？　あ、あれ？　お兄さん？」

男の子は風子だった

「てっきり男かと思ったよ。相変わらずボーイッシュだな」

「ふふ。お兄さんだけだよ、僕を男の子と間違えるの」

風子は被っている帽子を脱ぎ、長い髪を風にさらす

「お兄さんには女の子と見られていたいな」

「ふっ、生意気な奴め」

「ふふ……ところでお兄さん。せっかくの偶然だよ？　駅前で軽く食事でもしようか」

「あ、悪い。行きたいんだが、秋姉の試合があってな。もう行かないといけないんだ」

「……そう。秋さんの試合会場は駅の近くだったりするのかな？」

「ああ、一キロぐらいだったと思うぞ」
「僕が応援に行くのは構わないかい？」
「ああ。秋姉もきっと喜ぶよ」
「ありがとう」
「いやこっちこそな」
風子とチャリが置いてある場所へ行き、サドルを跨ぐ
「後ろに乗りな。ハブ付いてるから」
「うん」
風子はサっと乗り、俺の肩に手をのせた
「んじゃ行くか。落ちるなよ」
「大丈夫だよ」
風子の言葉を受け、俺はチャリを漕ぐ。穏やかに吹く風が気持ち良い
「ところで風子」
「なにかな？」
「歌、上手いんだな」

「……ふふ。ストレートに言われると、ちょっと照れるね」

「照れる事は無いぜ。本当に上手かったぞ」

「子供の頃の癖で、寂しい時につい歌ってしまうんだ」

「……寂しい時？」

「そう。少し心に迷いがあったんだ。……でもお兄さんが来てくれた。

その瞬間、僕の迷いは晴れ、進むべき道を見つける事が出来たんだ。ありがとう、お兄さん」

「そうか、良かったな」

「うん」

「ところで風子」

「なにかな？」

「お前、道に迷ったんだろ？」

「……いじわる」

今日の迷子

風

都筑区

第５４話：鳥の悲鳴

試合会場である武道館。

県立の公園内にあるこの武道館は、第一、第二と二つの道場があり、その第一が今日、剣道予選をする会場だ

「着いたぜ」

第一道場の前。沢山の車が停まっている駐車場の端にある駐輪場へ自転車を置く

「大きな道場だね。それに強そうなお兄さん、お姉さん達ばかりだ」

風子の言葉通り、武道館へ向かう生徒達は、皆、一様に強そうな面構えをしている

「県内の猛者が一同に集まる日だからな。みんなただ者じゃないさ」

「その中で秋さんはトッププクラスに居る。……尊敬してしまうよ」

「……そうだな」

俺も少しはしっかりしないと……

「あ、あの……助かりました」

自分の将来に微妙な不安を覚えていると、駐輪場の裏から緊張に震えた声が俺の耳に届いた

「気にしないで良いよ。たまたま通り掛かっただけだからさ」

「本当に助かりました！　そ、それでこれ、わたしの携帯アドレスなのですが……」

「うん？」

「こ、今度お暇な時にでも連絡下さいっ！　ありがとうございました！」

女生徒は男子生徒へ何かを渡し、ぽかんとする男子生徒から逃げる様にそそくさと武道館の方へ向かっていった

「……ふむ。あの女生徒は男子生徒に気があるな」

「ふふ。覗きだなんてお兄さんも中々趣味が悪いね」

「ふっ覗きじゃないさ。たまたま駐輪場の裏に草むらがあって、たまたま入り込んだだけさ」

「ふふ、そうだね。……あ、彼、振り返るよ。僕らも此処を離れようか」

「そうだな……あれ？　……な、直也君！？」

「え？　……あ、お兄さん！　こんちわっす！」

振り返った男子生徒は直也君だった

「どうして此処に？」

「はいっ！　俺が尊敬する秋先輩の応援に来ました！！　……お兄さんは何故草むらに？」

直也君は、草むらにしゃがみ込んで隠れている俺達に視線を合わす為、同じ様にしゃがみ込んだ

「……と、登山家は山がそこにあるから登る。俺は草がそこにあるから入った。……男の行動に理由なんかは要らないさ。そうだろ？」

「か、かっけぇ……。流石お兄さん！　目から鱗が落ちました！！」

「そ、そうか？」

な、なんて単純な奴……

「ふふ。お兄さんのお友達は面白いね」

「あれ？　そちらの方はお兄さんの？」

「僕は風見　風子。お兄さんの御兄妹である雪葉さんの友達です」

「あ、そうなんだ。じゃあ宮ちゃんとも？」

「はい。……ところでお兄さん。もう草むらから出ても良いのかな？」

「そ、そうだな」

草むらで自己紹介……。物凄く馬鹿っぽいな

「じゃあ出るか……よいしょっと。お、葉っぱが頭に付いてるぞ」

草むらから出て、風子の頭に付いている葉を落とす。さらっと流れる髪が心地良い

「ありがとう、お兄さん」

「ああ。……ところで直也君、よかったら俺達と一緒に行動しないか？」

「宜しいのですか！？　あざっす！！」

応援団の様に手を後ろに組み、頭を下げる直也君

「よかよか」

「お兄さんとご一緒出来るなんて嬉しっス！　……あ、宮ちゃん達も一緒でも構いませんでしょうか？」

「ん？　鳥里さん来てるのか？　もちろん構わないぜ」

「あざっす！　今、美月ちゃん達と一緒なのですが、そろそろ来る頃だと思います」

「直也兄さ～ん！」

その言葉通り、少し離れた場所から鳥里さんの声が響いた。

声の方を振り返ると、手を振って駆けてくる鳥里さんの姿。その

後ろには美月や花梨も居る

「お、みんな一緒か。応援に来てくれたんだな」

「あっ！　兄ちゃん！」

「おう、美月！」

俺を発見した美月に、軽く手を振る

「あははっ！」

笑顔で嬉しそうに駆け出す美月。大分先を走っていた鳥里さんをあっさり追い越し、俺の元へとたどり着く。てか鳥里さん遅っ！

「師匠の応援に来たよ、兄ちゃん！！」

「ああ。ありがとよ、美月！」

元気一杯の美月。夏と美月は良く似合う

「……はぁ、はぁ、はぁ……な、直也兄さん」

美月に遅れる事、数秒。　ふらふらだが、ようやく鳥里さんも直也君の元へたどり着いた

「大丈夫？　宮ちゃん。ほらドリンク飲んで」

直也君はカバンから半分凍ったペットボトルを取り出し、鳥里さんへ渡す

「あ、ありがとうございます……あ、蓋が開いて……」

「あ、ごめん。ちょっと口付けちゃってたんだった。新しいの買って来るよ」

「あ……あの……えと……はい」

鳥里さんはペットボトルと直也君の顔を見比べ、残念そうにドリンクを返した

「直也君。それ、私も一口飲みたいなぁ」

「うん。はい、どうぞ美月ちゃん」

「ありがとう！」

鳥里さんとは違い、あっさり口を付ける美月。

相変わらず春菜並に空気を読まない奴だが、素でやってる分、以外と男を手玉に取る悪女になるかも……

鳥の悲鳴　2

「こんにちは、直也さんそれと……ふんっ！」

「けっ！」

最後に花梨が俺達の元へと来る。直也君には真摯とも言える態度で挨拶をしたが、俺には挨拶すらしやがらない

「こんにちは、花梨ちゃん」

「はい。……雪はまだ来ていないのかしら？」

わざと俺を無視して風子に尋ねる花梨。嫌味な奴だぜ

「雪葉は後で母ちゃん達と来るよ。……そう、母ちゃんの車で」

母ちゃんの運転。それは秋姉の料理に続く佐藤家三大恐怖の一つである

そう、母ちゃんの運転は凶悪なのだ。

普段のゆっくりとしたテンションからは考えられない運転をあの女はする

「もう少し時間あるし、喫茶店で何か飲むか？　奢るぜ」

「え、奢り？　やったぁ……あ、ふ、ふんっ！　そ、そんな物で機嫌取ろうとしてもそうはいかないわよ！！」

驚き、笑って、次に怒る花梨。忙しい奴だ

「……もしかしてまだ怒ってるのか、あん時の事を」

「べ、別に！」

「……悪かったよ。なんか恥ずかしくてな、照れ隠しだったんだ」

「……え？」

「分かるだろ？」

ガキんちょ達に散々冷やかされ、取り残されたあの時の恥ずかしさは言葉では言い表せないぜ！

「……うん」

花梨も思い出したのか、顔を赤らめ、下を向く

「……兄ちゃん！　早く喫茶店に行こう？」

「うわっ！？」

グイッと俺の右手を両手で引っ張る美月。力強くて兄ちゃんびっくり

「分かった、分かった。野郎ども、行くぞ～！」

「お～！」

そのまま美月の左手を握り返し、公園内の喫茶店へといざいかん

「あ……ま、待ちなさいよアンタ達！」

「……ふふ。三角……いや四角だね。お兄さんも大変だ」

「俺達も行こう、宮ちゃん」

「はい、直也兄さん」

んでもって歩く事三分。周囲を見事な花壇に囲まれている喫茶店の前。

花壇には……白い花とかピンクの花とか色々あって

「見事なヒメシランやヒャクチョウゲですね、お兄さん！」

「勝ったつもりか！」

「うわっ！？　す、すみません！　俺はいつもお兄さんに完敗ですっ！」

「……ふ、ちょっと大人げ無かったな。すまない直也君」

「お兄さん……いえ！　俺の慢心をお兄さんの気合いが吹き飛ばしてくれました！　あざっす！」

頭をしっかり下げ、感動で打ち震える直也君。俺はその直也君の肩に手を起き、顔を上げさせる

「直也、お前……」

「お兄さん、俺……」

見つめ合う俺ら

「熱い眼だ……。こんな熱い眼をした奴を俺はお前の他に知ら……
……」

「……」

「……」

「……」

「……ふふ」

こ、こんなに冷たい眼をしている奴らも他に知らないっ！

「……行きましょう、美月。アレに関わっちゃいけないわ」

「……兄ちゃん、わたしと遊ぶより直也君と遊ぶ方が楽しそうだね」

花梨と美月は冷たい眼をしたまま、駐車場へと戻って行った

「あ……な、直也兄さん私、信じてます！」

「……ふふ。宮は強いね僕も一応信じているよ、お兄さん」

だが眼が泳いでいるぞ二人とも

「て、言うか一体何の話しだ？」

「……う～ん。あっ！　お兄さんがカッコ良すぎて照れたのでは！？」

「直也君～。それは嫌味か～。お前の方がカッコイイだろ～」

「そ、そんなこと無いっス。俺なんて全然で」

「さっきモテてたの見てたぞ～コノコノ」

直也君の頬っぺたを軽くつつく

「あ、痛たっ！　やりましたね、お兄さん！！」

直也君は仕返しとばかりに俺の脇腹をつつき返してきた

「お、生意気な！　それならこうだ！！」

「あうっ！　そ、そんな所をつつくなんて……。そんなお兄さんにはこうです！！」

「うわっ！？　だ、大胆な奴だな。こんな人前でそんな所を！」

「参りましたか～お兄さん！」

「まだまだだぜ～」

それから一分ぐらいつつきあって……

「あはは！　やっぱりお兄さんには敵わないや」

「直也君も中々やるーっ……ん？　あ、ごめんな風子、鳥里さん。退屈させ……と、鳥里さん？」

鳥里さんはア然とした表情をし、身体をガタガタと震わせていた

「ど、どうしたの宮ちゃん？　寒いのかい？」

「そ、そんな……な、直也兄さんが男の人と……い、いやあああ！？」

「み、宮ちゃん！？　待って！！」

悲鳴を上げ、逃げ出した鳥里さんを直也君が慌てて追う

「……な、なんなんだ？」

残された俺は、ただただ困惑するばかり

「ふふ。流石に僕もちょっと引いたよ」

そう言って風子は駐車場の方へ歩いて行く

「な、なんなんだ一体？」

俺、何か悪い事したか？

「ま、待って、宮ちゃ～ん！」

「いーやー！！」……あ、鳥里さん速いじゃん

今日の好感度（鳥）

直＞＞＞雪≧花＞月＞＞風＞＞＞秋＞＞＞＞＞＞＞＞＞俺＞＞＞虫

今日の好感度

花＞月≧雪＞＞＞風＞＞＞直＞＞＞秋＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞虫＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞俺

つづる

第５５話：花の禁句

１０分の追いかけっこの末、直也君は烏里さんを捕らえる事に成功。
しくしくと泣く烏里さんを慰めつつ、捕らえられた宇宙人の様に左右で挟んで花梨達が待つ駐車場へと連行する

「もう泣かないで宮ちゃん」

直也君は烏里さんへ優しく声を掛けるが、烏里さんはイヤイヤと首を振って泣き止む気配が無い

代わりに俺が声を掛けると……

「と、烏里さん、ジュースでも飲む？」

キっ！　と睨まれてしまう

「……」

「……」

俺と直也君は顔を見合わる。お互いに困り顔だ

さてどうしたものか、直也君。花梨ちゃん達にフォローをしてもらいましょうか

そんな風に、直也君とアイコンタクトをしている内に駐車場の前へと辿り着く

「お、みんな居るな。おーい」

キキキキー！

突然、甲高いブレーキ音が公園内に響く

「……ま、まさか」

嫌な予感がし、音がした方向を見ると、武道館入口に伸びる道路のカーブを見事なドリフトで曲がりきり、こっちに向かって突っ込んで来る軽自動車!?

「か、母ちゃん!?」

母ちゃんが運転しているであろう暴走車は、勢いを落とす事無く俺達の目の前で右へと直角に曲がり、車輪を浮かしながら空いている駐車場のスペースへ入りピタっと止まった

相変わらず慣性の法則を無視した運転だ

「……」

シーンとする周り。誰一人言葉を発しない

がちゃ

そんな沈黙の中、助手席のドアが開き、雪葉がよろよろと車から出て来る

よろよろ、よろよろ……あ、こけた

「大丈夫か、雪葉！」

慌てて駆け寄る俺

「あ……うぅ……お、に……」

雪葉は俺を見上げながらカタカタと震えた。

……可哀相に、一体どれほどの酷い目にあったと言うんだ

「もう大丈夫だぞ雪葉。この兄がお前を守る！」

「お、お兄ちゃん……お兄ちゃん！」

ひしっと抱き合う俺ら。美しい兄妹愛に周りは感動の拍手を……

「な、涙が止まらないです、お兄さんっ！」

一人以外はしていなかった

花の禁句　2

「あらぁ～、どうしたの雪葉？　お兄ちゃんに意地悪されたのかしら～」

雪葉に続き、元凶が車から下りて来る

シャネルの黒いワイドスーツに身を包み、胸元には深緑色の高そうなブローチを付けた母ちゃん。　一体何処のお嬢様ですかって感じだが、母ちゃんは本当にお嬢様だからな

「母ちゃん、雪葉を乗せる時は安全運転でって言っただろ？」

未だ震えている雪葉を、直也君達に預け、母ちゃんに文句を言う

「分かってるわよ～。こんなにゆっくり走ったの母さん久しぶり～」

駄目だ、気付いてもいない。よし、此処は俺がビシッと

「母ちゃん！　母ちゃんの運転は心臓に悪いんだよ！！　見てみろよ、この雪葉の小さな胸を！　こんな小さな胸に母ちゃんの運転が耐えられると思うか？　いや耐えられる訳が無い！　いい？　良く聞きなよ母さん。雪葉の胸はなぁ、雪葉の小さな小さな胸はなぁ……ん？　どうした花梨？」

花梨はワナワナと震えながら俺の前に立ち……

「公衆の面前で何ぬかしてんのよアンタは～！」

「ふぐりこっ！？」

腹に強打！？

「な、なにをするんですか？」

余りの強打にしゃがみ込み、ついつい敬語になってしまう俺

「お、お兄ちゃん！　花梨ちゃん！！　何でお兄ちゃんを叩いたの！？」

俺の元へすっ飛んで来る雪葉。狂暴な子供から庇ってくれるらしい

「え？　な、なんでって……だって」

「兄ちゃんに何するんだよ花梨！」

「み、美月」

「花梨ちゃん。今、お兄さんが大切なお話をしていた所だよ。何も理由が無いのに殴ったら駄目じゃないか」

「な、直也さんまで……だ、だってそいつが！」

「お、俺が？」

な、何をしたんだ？

「っ……ご、ごめんなさい」

顔中に？マークを浮かべていると、花梨は元気無く俺に謝った

「……気にしすぎだったわ。普通に聞いていれば普通の会話だものね」

「普通に？　あっ！　お前、勘違いしたな！！　全く、はやとちりな奴だな。自分の胸が小さいからって気にしすぎだぞ。まぁ確かにそれじゃ将来心配になるのは分かるけど大丈夫。いつか花梨も人並みに……どうした、花梨？」

花梨はワナワナと震えながら再び俺の前に立ち……

「アンタわざとやってるでしょう！？」

「ひでき！？」

腹部に強打！

「な、何をなさるの？」

余りの痛さに女化

「……それはお兄ちゃんが悪いと思う」

妹が敵になった

「お兄さんはもう少し女の子の気持ちを勉強した方が良いね」

風子も敵になった

「兄ちゃん、花梨に胸は禁句だよ」

美月までっ！？

「うっ……」

俺は三人の小学生に責められ、がっくりと肩を落とし……

「って何で、いちいちわたしの胸を見るのよアンタ達は！」

「……ふふ、気にする事無いさ花梨」

「そ、そうだよ。大丈夫だよ！　……きっと」

「でも動き易そうで羨ましいなぁ花梨は」

「な、慰めないでよ！」

今日の大きさ

母＞＞＞＞月＞＞風＞鳥＞雪＞＞＞＞＞＞＞＞花

「納得いかないわよ、この比較！！」

つづらし

第５６話：雪の見つけもの

「酷い目にあった……」

花梨の打撃を受け、未だダメージから回復しない俺。
みんなを先に武道館へ行かせて公園のベンチで体力の回復を待つ。
公園では夏の花があちこちに咲いていて、今、俺が休憩しているベンチの周りも華やかだ

「しかし雪葉は花好きだな～」

俺を心配してか、俺の側に残った雪葉。
白いワンピースに麦藁帽子を被り、嬉しそうに花壇を見て回っている。雪葉には花が良く似合う

「それにしても暑いな

秋姉は大丈夫だろうか

「……あれ？　あっ！　お兄ちゃん、お兄ちゃ～ん！！」

ぐだーっと空を見ていると、雪葉は突然驚いた様な声を出し、ベンチで座っている俺の元へ駆けて来た

「何か珍しい花でも見付けたのかな？」

可愛い奴め

「どうした雪葉～」

俺も雪葉の方へと走る

「お兄ちゃん、雪葉向こうで、どーてー見付けたよ！」

ドテンっ

顔面を地面に強打！

「お、お兄ちゃん！？」

「だ、大丈夫、大丈夫……な、何を見付けたって？」

耳、悪くなったかな

「どーてー♪」

雪葉は、ものすげぇ笑顔で言ったってっ！

「コラ！！」

「ひうっ！？　お、お兄ちゃん？」

びくっと身体を震わせ、困惑した顔で俺を見上げる雪葉

「そんなもの見付けて来るんじゃありません！」

「で、でも」

「雪葉！」

「は、はい……ごめんなさい、お兄ちゃん……」

ぽろぽろと雪葉の目から涙がこぼれた

「あ……と、まぁ雪葉。別に怒ってる訳じゃないからな。ただ、ちょっと女の子が人前で言って良い言葉じゃないから注意しただけだから」

「……うん」

「た、タコ焼き食お～美味しっぞ～。あ、それ、タッコ焼き、タッコ焼き」

奇妙なタコ踊りをしながら屋台へ向かう。屋台のおっちゃんが、果てしなく嫌な顔をしていた

雪の見つけもの　2

「おっちゃん、タコ焼き二つ」

「あいよ」

熱々のタコ焼きを受け取り、ベンチへ

「さ、食べよう雪葉」

「……うん」

テンションが超低い

「ほ、ほらあーん」

「うん。……あーん」

一応食べてくれるが、明らかに傷付いている。
もっと優しく注意すべきだった……

しかし雪葉は誰を見て童貞と言ったんだ？

「ワオ！　こんな所に本が落ちてるよルーシー」

疑問に思っていると、胡散臭い日本語を話す、やけに厚着の外国人カップルが突然現れた

「高村光太郎作　道程ねアタシこれで三キロやせたわ」

「おう、そいつは凄い。実はボクもこのサウナスーツで～」

深夜の通販に出て来そうな謎の外国人により、さっき雪葉が何を見付けたのかを知る

「……ごめんな雪葉」

「え？」

「好きなのか？　高村光太郎」

何故落ちてたのかは謎だが

「……うん。今、授業でやってるの。どー……」

「道程な。延ばさないでお言いなさい」

「……言って良いの？」

「ああ。兄ちゃんが勘違いしていた。さ、言ってみなさい」

「……道程？」

「うむ。道程だ」

「道程なの？　お兄ちゃん」

「うむ。道程だ」

「道程なんだぁ。延ばしちゃ駄目なんだね」

「ふふ。そう、道程さ」

それから暫く道程、道程と言い合って……

「あいつです、お巡りさん！」

いつ屋台を離れたのか、タコ焼き屋のおっちゃんが組織の犬を連れ、公園に入って来た

「ん？　何か事件でもあったかな……す、凄い形相で俺らに向かって来るんだが？」

嫌な予感が……

「ん？　あっ！　また貴様か！！　今度は、いたいけな少女にいかがわしい言葉を連呼させていたそうだな！？」

「な！？　ご、誤解だぁああ！！」

俺、逃亡。追う組織の犬そして雪葉も俺を追う

「お、お兄ちゃん～」

「まて～この変態が～」

「何でこんな目に遭わなきゃならんのだ～」

三人の声は公園内でいつまでも響いたと言う

「って、秋姉の試合見に行かねーと！　雪葉、作戦七だ！！」

「うん！」

作戦七、それは禁断の必殺技

「すぅ……誰か助けて～お兄ちゃんが変な人に追いかけてるの！」

悲痛な雪葉の声に公園内の人間がダッシュで集まってくる

「何だ何だ～」

「あの組織の犬野郎が少年を追い回してるんだってよ」

「何！？　少年に一目惚れをした組織の犬が国家権力を使って少年を篭絡しようとしている？」

凄い勢いで、おひれが付いて広まる噂に組織の犬は顔を真っ青にした

「助けて～お兄ちゃんがお兄ちゃんが」

「あ、いやその……あ、安全確認！　ほ、本官は職務に戻りますっ！」

逃げてゆく組織の犬

「ふ、悪は滅びる定め。正義は勝つのだ」

「大丈夫？　お兄ちゃん」

決めゼリフを吐いていると、雪葉が俺の側に寄って来て、心配そうに声を掛けて来る

「ああ。作戦七【大声で助けを呼ぶ】大成功だ。ありがとう雪葉」

「えへ」

「さ、行こうか秋姉の所へ」

「うん！」

今日の始末書

犬

九十九

第57話：秋の試合

剣道インターハイ予選。団体戦と個人戦があり、先に団体戦が行われる

五対五でやる試合は、先に三勝した方が次の試合へと進める訳だが、うちの学校はシードなので、二回戦から始まり四回勝てば優勝だ

「よかった、間に合った……あれ？　結構混んでる？」

二階にある観戦席。余り人気が無い筈の剣道なのに、ほぼ満席だった

「あ、カメラまで入ってる」

何かあるんだろうか

「おーい、こっちだよ雪葉に兄ちゃ～ん！」

入口付近の最前列の席でみんなが待っていた。こんな良い場所を一列占拠とは……多分母ちゃんの力だな

「雪葉お兄ちゃんのとなりが良いな」

「あら～」

空いていたのは母ちゃんの両隣だったが、母ちゃんは雪葉の為に一つズレた

直→鳥→花→月→母→俺→雪の布陣だ

試合は既に始まっていて四ヶ所でそれぞれ戦っている。
　試合中は当然、皆防具に身を包んでいて、男女の区別すら出来ないのだが、何と無く華やかに見えるのは何故だろう

ざわ

汚れた目で試合を見ていると、辺りが急に騒がしくなって来た。中には写メを撮る者も居る

「あ、秋お姉ちゃん！」

「え？　あ！　本当だ」

雪葉が指さす方を見ると白い袴に赤いべっ甲の防具が冴える秋姉の姿があった。
　髪をサイドアップし、前を見据える我が姉の何と美しき事か

「秋姉～！」

少し距離が離れているので聞こえはしないだろうが、俺は手を振りながら秋姉を呼ぶ

ざわ……ざわざわ！

「今、あそこの奴が姉とか言わなかったか？」

「まさか弟？」

周囲が更にざわめく。どうやら秋姉は有名らしい

「……ふふふ」

そうです。あれは僕の姉ですよ

俺はピノキオ並に鼻を高くする

「……まさかな」

「居るのよね、有名人の身内を名乗る奴って」

「佐藤さんも大変だな。あんな死んだ魚の様な眼をした奴に身内呼ばわりされて」

「あ、こっち見たわ！　なんまいだぶ、なんまいだぶ～」

「……」

泣いても良いですか？

「秋お姉ちゃん、頑張って～」

「雪葉、今応援すると俺みたいに」

「あ～ん。あんな可愛い妹欲しい～」

「あそこの女の子達、みんな可愛いよね。佐藤さんの身内かな」

「う～ん。流石佐藤さんの身内！　品性ってのがあるよな！」

「……」

「泣いても良いのよ～」

「か、母ちゃん……母ちゃん～！」

抱き着いた母ちゃんは、優しい匂いがしました

秋の試合　2

母ちゃんに慰められている間に一回戦が終わり、いよいよ俺らの高校、秋姉達の出番となる

《二回戦第一試合場、聖南学園、立身付属。第二試合場、新井高校、相商学園。第三試合場、光沢高校》

アナウンスが我が母校の名を出した瞬間、会場は割れんばかりの歓声と、くらくらする様なフラッシュに包まれた

「A・K・I～っ秋！」

「っ秋！　っ秋！　秋、秋、秋っ！」

「あ～き～、あきらめるな～僕らの～あき～」

何処に隠れていたのか、昭和の匂いがする訳の分からん集団まで、いきなり応援席から出る始末

こ、これは一体……

「さ、流石、秋さんですね……」

直也君が戸惑いを感じさせる口調で呟く

「まさかこの人達、全部秋姉目当て？」

「全員では無いでしょうけど人気者よね～。母さんびっくり～」

相変わらずの細目で頬に手をやりながら、おっとりと母ちゃんは言う

……本当にびっくりしています？

「それにしても、いつの間に俺の秋姉がこんな人気者に……」

「『俺』……の？」

雪葉の大きな目がギラリと光る！

「ぼ、僕らの……です」

か、母ちゃんの技をいつの間に！？　お、恐ろしい子っ！！

《皆様、お静かにお願いします。試合が始められません》

「あき～あ～き～あきあきあ～き～ぃいい」

「ウヒャヒャ……ウヒャヒャヒャヒャ！」

アナウンスが注意しても周囲の興奮冷めやらず、ってか恐っ！

この騒ぎの中、秋姉は身動き一つ取らず試合場の外でピンと背筋を伸ばし正座をしている。

まるであの空間だけ、俗世から切り取られた様に美しい

「……頑張ってね、秋姉達」

もちろん声が聞こえた訳では無いだろうけど、俺が応援したのと同

時に秋姉がこちらをチラッと見た

そして姿勢や表情は崩さないまま、膝の上に乗せた左手を軽くこっちに向けて振る

「見たか今!?　秋様が俺に手を振って!!」

「馬鹿!　ＡＫＩは俺に振ったんだよ!　見て分かるだろ!!」

秋姉が誰に振ったかでケンカをし始める昭和の愚民ども。だが奴らは間違えている!

「秋姉は俺に手を振ってくれたんだよ、この俺だけにな!!」

愚民どもに噛み付く俺

「『俺』……だけ?」

雪葉の大きな目がギラリと光った!

「ぼ、僕達……です」

ゆ、雪葉め、いつの間にこれほどの覇気を……

秋の試合　3

「光沢高校先鋒、間渕　鮎美。真田高校先鋒、山田　花」

妹の気に怯えていると、秋姉達の試合が始まった

試合場の中央で竹刀を構える二人の剣士は、身内のひいき目では無いけれど、うちの高校の方が堂々としている様に見える

「開始！」

さぁ試合が始まるぜ！

「一本、一本、いっぽんぽん！！」

秋姉の試合以外は早送り

初戦は秋姉の出番無く、完勝だ

「……うちの高校、結構強いんだな」

キャーキャー喜ぶ雪葉達を横目に、感心した様に呟く

「フフン、知らないのかね君」

「え？」

呼びかけられて振り返ると、ビデオカメラ片手にニヤリと笑う、細顔の中年眼鏡

「光沢高校は、佐藤　秋の名が有名過ぎて他の子達は影に隠れがちだけどね、二年の田宮も、なかな……でもやはり秋さんだね。技、力、気。その全てが郡を抜いている。彼女に勝てる子なんて、そうは居ないんじゃないかな」

秋姉の情報以外は全面カット

「成る程、流石俺の姉。……ところで貴方は？」

「ふ。私は聖南学院の女子剣道部スペシャルアドバイザー、　だ！」

秋姉の名前以外は、削除

「へ～」

「……スペシャルアドバイザー、　だっ！」

「へ～」

「……す、スペシャルアドバイザーの……」

「日永　宗院さんね～。覚えたわ～」

母ちゃんがおっとりと呟いた

「お、奥さん……奥さ～ん！　ぐぼっ！」

感動で抱き着こうとした宗院さんの鼻面に母ちゃんの左肘。にこやかに微笑みながらやるから恐ろしい

一分後

「こ、今年はうちが頂きますよ」

流れる鼻血をハンカチで押さえながら、宗院さんは言う

「うちの新しいレギュラーで徳永と言う二年が居るのですが、それを秋さんにぶつけます」

「……ほう。しかし俺の……お、俺達の秋姉に二年が勝てるとでも？」

「……うちはね、全国狙っているんですよ。しかしくじ運が悪くてね、去年は二回戦目にそちらの学校に敗北しました。よほど悔しかったのでしょうね、それから一年、主将の竹内を始め、以下部員１７名。一人も脱落する事無く、厳しい鍛錬に耐えてくれましたよ。中でも徳永は、書いた私ですら躊躇してしまう程のスケジュールをこなしてくれました」

嬉しそうに話す宗院さん

成る程、中々の自信だ。だけど

「秋姉は勝つよ。間違いなく」

自信なんか無い。これはただの確信だ

「……ふふ。君に話し掛けて良かったですよ」

蛇の様な眼で、下から上へとなめ回す様に俺を見る宗院さん

……ま、まさかホモ

「試合後、またお会いしましょう。私の執念が勝つか」

「俺の信頼が勝つか」

俺達はニコリと微笑み合い、その場を立ち去るって俺が立ち去る必要は無いな

「なんだか主人公っぽかったわ～」

座り直した俺に、母ちゃんが嬉しそうに言った

「ふ。俺はいつでも主人公さ」

「……馬鹿じゃないの？」

「やっと喋ったと思ったらそれかい！」

花梨にツッコミつつ、俺は部員を前に微笑んでいる秋姉に、頑張ってと小声で応援してみた

今日の主役

秋＞＞徳≦院＞＞俺＞母

つづませる

第５８話：院の作戦

三回戦目、秋姉が始めて試合場に立った

右足を前に出し、中段で構える。頭から足先まで釘を打ったかの様に真っ直ぐだが、あくまでも自然体でもある

秋姉の登場で一時期、凄まじい騒ぎになったが、今は張り詰められた氷の様に静かだ

「光沢高校、佐藤　秋。三浦立身高校、今村　早紀……」

現在、勝敗は二対二。この一戦で全てが決まる

「開始！」

「ハァ！　ハァ！　ハアアアアア！！」

相手の選手が、気合いを吐き出す。なんつー大声だ

「ヤアアアアア！！」

「うぉう！？」

相手よりもデカイ姉の声にビビる俺

相手、今村さんもビビったのか僅かに下がった

「くっ！」

今村さんの構えが、青眼から八相に変わる。高校生にしては珍しい
秋姉は更に右足を前に出し、竹刀を頭上に構えた
上段の構え。大柄で、秋姉より１０センチ近く上背がある今村さん
を前にしても、秋姉の構えは揺るがない

「ぐ……あ、アア！」

恐怖からか、秋姉の左小手を狙う逃げ腰の一撃
秋姉は僅かに後ろへ下がり、竹刀をかわす
秋姉の強さの秘密は、この完璧とも言える足さばきによる所が大き
い。
　上下左右、まるで氷を滑っているかの様に動く
武道に『もしも』等無いし、それは本人にとって失礼な事かもしれ
ない
だけど、もしも宮田さんとの試合が普通の道場であったら……

「一本！」

継ぎ足で相手の懐に飛び込み、秋姉の竹刀は相手の面に落とされた。
そして見事な残心
残心は武道や芸道では必ずと言っても良いほど行われる。
　武士が刀を当たり前に持っていた時代、僅かな気の緩みが命取り

となる勝負が多々あった。
　そんな勝負で例え相手を圧倒し、斬り捨てたとしても、倒れた相手はまだ生きていて、自分の隙を狙っているかも知れない。故に直ぐ追撃や反撃が出来る様、心を残す。要するに油断しないって事だもっとも、今では美の観念が高い

「何読んでるの、お兄ちゃん？」

「ん？　ほれ」

雪葉に背表紙を見せる

「オイラも明日から剣道家？　お兄ちゃん、剣道やるの？」

「いや、読んでるだけだよ」

何故なら俺は解説キャラだから

「んん？」

不思議そうに首を傾げる雪葉

「し、試合が始まるざますよ！」

十代には分からないであろうネタでごまかす俺

「あ、うん！」

「ふんが～」

さ、流石母ちゃん……

院の作戦　2

二本目はあっさり決まった。今村さんは八相から正眼に変え、面から左小手、そして胴の連撃

しかし、その全てを捌き今村さんが引いた所で面打ち。これで一本、次の試合へと進む

「……やはり強い」

試合が終わり、ホッと息をついた俺の耳に、観客席横の階段からそんな呟きが聞こえた。何となしに見てみると

「宗院さん!?」

「ふふふ」

「暇なんですか？」

さっき格好良く何処かへ行ったと思ったのに

「う……顧問では無いから控室に入れないのですよ」

そう言い、聞いてる方が鬱になりそうな溜息をつく

「セクシャルアドバイザーでしたっけ」

「スペシャルね、スペシャル」

よいしょっと、宗院さんは俺の後ろの椅子に座ったが……

「そこ、誰かの荷物置いてありません？」

「海外では荷物を置いて離れる事など、どうぞ持って行って下さいと言っているようなものです。持って行かないだけ感謝して欲しいですね」

タチの悪いオッサンやな～

「お兄ちゃん、ジュース飲む？」

自分のがまぐち財布を持ち、俺に尋ねる雪葉。
花梨や美月達も席を外して雪葉の周りに集まった

「みんなで買いに行くのか？　ちょっと待ってな……ほら、千円。みんなで使いな」

「でも……」

「たまには兄貴らしい所を見せとかないとな」

「お兄ちゃん……ありが」

「ありがとうございますでは行きましょうか、お嬢さん方」

俺から千円を取り、仕切り出す宗院さん

「てか自分で買ってくれません？」

「……歩合給なんですよ私」

「はぁ」

「去年は二回戦で敗退……分かるでしょう？」

宗院さんは死んだ魚の様な目で俺を見る

「そ、そんなに少ないのですか？」

「……確定申告へ行った際、所員に桁が一桁違いませんかと尋ねられましたよ」

ふぅ、と絶望感漂う溜息

「……お昼ご飯でも食べて下さい」

その溜息を聞き、いたたまれなくなった俺は、そっと５００円を宗院さんの手の平に置いた

「……ありがとう。君は間違いなく出世する。私が保証するよ」

出世していない人に保証されても……

「とは言え、私も大人です。只で貰う訳には行きませんね……。次の徳永の試合を見てください。面白い物を見せてあげましょう」

それでは、と雪葉に千円を返して宗院さんは去って行った

「……意味深な事を言いやがる」

一体何が起きると言うのだ

「ふ～。便所、混んでたな～って何故俺の荷物がぺちゃんこに！？」

宗院さんが座った席に、誰か戻って来たらしい

「……俺もトイレに行くか。途中まで一緒に行こう、雪葉」

「うん！」

宗院さんの真意。次に行われる徳永さん達の試合で見極めてやる！

第５９話：徳の驚異

準決勝。徳永さんが居る聖南学園の対戦高は宮田さんが居た学校、新井高校だ

「行くぞ、宮田の為にもアタシらは絶対かぁああっつ！！」

「うおりやあああ！！」

円陣を組み、吠える新井高校の部員達。志半ばで学校を去った宮田さんを思ってなのか、異様に気合いが入っている

対して聖南学園。皆、正座をしたままピクリとも動かない

「先鋒、前へ」

主審の声で二高の生徒が動き出す

わざわざ俺の分まで買って来てくれたジュースを飲みながら表示盤を見てみると、新井高校の先鋒は、一年生だった。頑張れ

相手の聖南学園は……

「……あれが徳永さん」

頭に布を巻いている為、髪の長さは分からないけど、長い髪が似合うだろう、冷たいとも言える切れ長の眼。美人だ

「剣道やってる人って美人ばかりなのか？」

思わず呟いた俺に、母さんは自分を指差し

「母さんが良い例ね～」

と、言った

「……剣道部だっけ？」

前は茶道部、その前はバスケ部と言っていたような……

「１８ヶ所掛け持ちしてたから～」

「……」

相変わらず謎な人だ

「ヤーー！！」

謎過ぎる母ちゃんを見ている間に、試合は始まっていた

正眼と正眼。二人ともごく普通の構えだ

「ヤーヤーヤアア！」

前、後ろと小刻みに移動し、新井高校の一年生、曽宮さんは声で威嚇する

「……」

徳永さんは全く動かない

「む……ヤア！」

痺れを切らしたのか、曽宮さんは牽制とも言える払い小手（裏払い）をした

「一本！」

払いは見事に決まり、小手打ち一本。あっさり決まってしまう

「弱い？」

あるいは曽宮さんが強いのか。

しかし一本取られた徳永さんに、焦りの様子は見られない

「あの子、強いわね～。でもああゆうの母さん嫌い～」

徳永さんを見ながら母ちゃんが何か言ったが、多分たいした事じゃないだろう、聞き流す

二本目。剣道の試合は三本までしか無い。次の一本を取られたら終わりだ

一本取った事で曽宮さんは調子に乗ったのか、二段、三段と攻める

小手→面→面

面↓胴

胴から離れて、小手。息もつかせぬ攻めだ

しかし

「ぜ、全部防いでる？」

しかも殆ど動いていない

「ぐっ……ああ！」

何を打っても決まらない事に苛立ったのか、曽宮さんは思い切り踏み込んで全力の面を狙う

その竹刀を、徳永さんはガシっと抑えた。鍔ぜり合いだ

パアン

「……え？」

「面あり、一本！」

一瞬で決まった面。徳永さんは鍔ぜり合いになってすぐ、鋭く左足を引いき、引きながら竹刀を振りかぶって面を打ったのだ……って、早すぎて余り見えなかったけどな

「す、凄いね、お兄ちゃん」

驚きの声を上げ、俺の裾を引っ張る雪葉

「こらこら服が伸びるべさ」

ざわ

苦笑いしながら雪葉の頭を撫でていると、会場が突如ざわめいた

「な、なんだ？」

慌てて試合を見ると、徳永さんは正眼から竹刀を上段へと上げていた

「……上段か。これが面白い事？」

秋姉への対策なのだろうか？　しかしずっと上段をやって来た秋姉に、上段は余り良い作戦とは思えないけど……

疑問に思いながら見ていると、徳永さんは竹刀から右手を離し、左手だけで持った。あ、あれは！

「ひ、左片手上段！！　冗談だろ！」

「……馬鹿じゃないの？」

「別にシャレじゃないから！」

片手上段なんて、難しくて有段者でも滅多にやらない構えだ。二段を持っている秋姉ですらやらない

「う……く」

見慣れない片手上段と、間合いが格段に広くなった徳永さんに、曽宮さんは躊躇しているのだろうか動きに落ち着きが無い

「……ヤアア！」

だが覚悟を決めたのか、徳永さんの間合いに飛び込んだ曽宮さん。

すかさず片手面を打つ徳永さん。確かに速い

「無効！」

片手の面は余程強く打たない限り、浅く見えてしまうので有効打になりにくい。これは剣道の常識である……多分

「ハア！！」

曽宮さんはそのまま攻める。狙いは面だ！

徳永さんの竹刀はまだ、構えを取っていない。曽宮さんの勝

「かわした！？」

「胴あり、一本！」

徳永さんは曽宮さんの面をかわし、胴を打ってそのまますれ違った。

あれは

「面抜き胴ね～」

「俺のセリフ！」

俺は解説キャラにもなれないのか！？

徳の驚異　2

「一本、それまで！」

徳永さんの後も聖南学園の選手は勝ち続け、一番最初に決勝への切符を手にした

続く秋姉達も、苦しいながらなんとか勝ち抜き、３０分の休憩を挟んで決勝となる

「それにしても強かったな、聖南学園」

「うん！　特に徳永さんが凄かったね」

雪葉の言う通り、徳永さんは特に強く見えたが、主将の竹内さんは勿論、副将の新井さんも侮れない。他の二人も強力だ

「だけど宗院さんも馬鹿だな～。秋姉は大将なんだから先鋒である徳永さんと戦う筈ないのに」

「この大会は特別で～、一試合毎に順番を変えられるのよ～」

「へ、へ～」

ほんと何でも知ってるなこの母

「秋姉は大将から動かないだろうから……徳永さんを大将に持って行くのかな？」

それを秋姉に忠告して、対戦相手をずらせば……

「……いや、駄目だな」

きっと秋姉は微笑みながら首を横に振るだろう

みんなのインターハイへの出場を賭けた大切な試合だ、人から見れば自分勝手とも馬鹿らしいとも思うかも知れない

だけど、そんな不器用な姉だからこそ俺は深く尊敬している。そして、それは多分部員達も……

「……凄いな、秋姉は」

なんだか自分が情けなくなってしまう

そんなネガティブな一言は、母ちゃんの耳に届いてしまったらしく、母ちゃんはギュッと俺の頬をつねった

「痛っ！　や、止めてくれよ～」

「確かに秋は母さんから見ても、凄い子だと思うわ～。で～も～貴方だって凄いのよ～」

「て、言われてもなぁ」

特に特技とか無いし

「貴方が居るから私達はお父さんが居なくてもバラバラにならず、楽しく暮らせているのよ」

と、間延びせず母ちゃんは言うが……

「こ、高校卒業したら親父の代わりに働けと言う事でしょうか？」

「貴方って、たま～に凄く馬鹿よね～」

「……」

それが俺の凄さですか？

徳の驚異　3（前書き）

話、飛ばしてます。何故か？　話の都合上、図書館で剣道の事を調べんとアカンからです。

いつになるか分かりませんので、とりあえず先に進めます。「俺はアンタが図書館へ行くまで待つんや！」と、私の心を震わせる言葉を言って下さる方は、読まずに今暫くお待ち下さい！

徳の驚異　3

徳永さんは下段の構えを取る。ええと下段の構えは７３ページに…
…

「ん？　少し変だな」

本に書いてある写真と違い、左腕が縮こまっている。あれじゃ、残打が遅れてしまうだろう。一体何を考えて……

「っ！？　つ、突きあり一本！！」

「なっ！？」

秋姉が少し間合いを詰めると、竹刀はまるでにゅっと突然現れたかの様に秋姉の喉元に突き刺さった

徳永さんの予備動作は殆ど無く、秋姉は反応一つ出来ていない。あれは

「あれは無拍子よ～。完璧では無いけれどあの年齢であそこまで使えるなんてよっぽど努力したのね～」

母ちゃんが細目を更に細め、感心した様に言った

言ったが！

「何でそんな事、知ってるんだよ！？」

「母は何でも知っている～」

「また古いネタを……」

十代どころか二十代すら分からないだろう

「い、いや、そんな事よりも！」

よほど強力な突きだったのだろう、秋姉はよろよろとふらつきながら試合場の中央へと戻った

「あ、秋姉……」

「あ……お姉ちゃん」

弱気な俺の声に触発されたのか、雪葉や花梨達も泣きそうな顔で秋姉を見つめる

……秋姉が負ける？

「秋姉……あう！？」

母ちゃんが俺の頬を引っ張る

「こ～ら。貴方が秋を信じてあげなくてどうするのよ～」

秋の一番近くに居たのは貴方でしょ？

優しくそう言う母ちゃん

「……ああ！」

俺が凹んでてどうするんだ！　秋姉はまだ諦めていない！！

「頑張れ、秋姉！！」

苦しいのだろう、まだ足取りは悪い。だが中央に立ち、しっかり相手を見据えている秋姉に俺は声の限り応援した

「お姉ちゃん～、頑張ってぇ」

「秋さん、気合いです、根性です！」

「負けたら駄目だよ、師匠～」

「わ、わざわざ見に来てあげたんだから、勝ちなさいよね！」

偉そうな奴が居る！？

思わず花梨の方を見てみると、突然大声援が湧いた

「秋の構えが変わったわ～」

母ちゃんに言われ見て見ると、秋姉の構えは確かに変わっていた

それは徳永さんと同じ下段。視線は徳永さんの手元に向けている

「あ、秋姉が下段？」

初めて見た……

俺と同じ様に秋姉の下段に戸惑ったのか、徳永さんは僅かに竹刀を揺らした

その徳永さんに向かい、秋姉はまるで自分の家に帰ったかの様な気軽さて歩を進めた。俺から見ても分かる隙だ！

「あ、秋姉ー！！」

バシンっ！

試合場に響く弾ける音。

秋姉の面を掠り、通り過ぎる徳永さんの竹刀

「は、外した？」

いや違う、無拍子から来る徳永さんの突きを、下段から打ち上げ外させたのだ。もはや勘で打ったとしか思えない反応の速さ

「……す、すげ」

誰かが漏らした言葉は、会場にいる全員の思いを代弁していただろう、ゴクリと唾を飲む音があちこちから聞こえた

「あら～わざと隙を見せたのね～」

呑気だね母ちゃん。と、それどころじゃない！

「い、いけ～秋姉！！」

「っ！　ヤアアアアアアアア！！」

一撃必殺の無拍子をかわされ、身体を崩した徳永さんへの面

パアンっ！

澄み切った竹刀の音。

そして――

「面あり、一本！！」

審判の高らかな宣言が、静かな会場に響いた

今日の一本

秋

鼓け

第６０話：俺のおかげ

試合が終わり、一時間。車で帰る母ちゃん達（雪葉は青ざめていたが…）を見送り、俺は一人公園のベンチで余韻に浸っていた

そんな俺の元へ余裕の表情を浮かべる宗院さんが近付いて来る。

目が泳いでいるのは指摘しないであげよう

「負けましたよ佐藤君」

「俺も騙されました。上段はフェイクだったんですね？」

「あわよくば上段で一本取りたかったのですけどね。もう少し動揺してくれると思っていました」

「試合中、秋姉は動揺しないよ」

集中力が半端じゃないからな

「ん……でも、びっくりし」

「……君は秋さんを本当に信じているのですね。休憩時間中、秋さんに上段の事を伝えなかったのでしょう？」

「……ま、まぁね。俺は秋姉を信じているからな」

忘れてたとは言えない

「……ありが」

「しかし……ハァ」

魂まで出てきそうな溜息だ

「二年連続で負けてしまいましたし、新しい職場を探さないといけませんねぇ」

「クビですか？」

「ストレートですねぇ。……個人戦が終わるまでは居ます。個人戦、優勝逃しませんよ」

「秋姉は強いよ？」

「……ふふ」

「ふふふふ」

「ふふふふふふふ」

「ふふふふふふふふ」

「……こちらにいらっしゃったのですか、セクシャル先生」

二人で不気味に笑いあっていると、黒くて長い髪が美しい美人が現れた。この人は……

「スペシャルね。と、言うかいつまで間違えるつもりなのですか、徳永さん」

「すみません。英語が苦手なもので」

「中間テスト、総合で学年5位でしたよね、君」

「マークシートでしたので」

「……コホン。紹介します佐藤君、この子が徳永です」

「徳永　綾音です。綾ちゃんと呼んでみて下さい」

「……あ、綾ちゃん？」

「なぁに？　おに～ちゃん」

「……」

「萌えました？」

「なにが！？」

「……変な子ですみません」

「えっへん」

「なにこの会話！？」

誰か助けて下さい！

助けを求め、俺は左を見て

「うひょう!?」俺の左横には、いつの間に来たのか秋姉が居た。
宗院さん達も目を丸くしている
「い、いつからそこに?」
「……さっきから居た」
ジト目の秋姉。や、やばい、拗ね始めている!
「は、話しに夢中になって気付かなかった~。ごめんね、秋姉」
「ん。……そろそろ帰ろう?」
「え? 部員の人達と帰るんじゃ……」
「みんなは先に……。貴方と一緒に帰りたかったから」
「う、うおおおおおおおおー!!」
ビックボーナス!
「……佐藤さん」
突然のボーナス浮かれている俺とは対象的に、静かな声で秋姉を呼ぶ徳永さん
「ん……徳永さん」
「……ふぅ。負けました、秋さん。本当にお強いですね、改め

て見るとめちゃくちゃ美人ですし」

「……ん」

お、秋姉が照れてる。レアだ、写メの準備を！

「人生楽しくて仕方が無いでしょう、こんちくしょうめ！」

絡み始めた！？

「てゆーか私の突き、どうやって見破る事が出来たんですか！？」

「見破ってない……」

「え？　で、ですが完璧に……」

「この子のおかげ」

「へ？」

お、俺ですか？

「……声、届いたよ。ありがとう恭介」

秋姉は穏やかに微笑み、そう言った

「……秋姉」

俺の方こそ、いつもありがとう。秋姉

「……はぁ。なんだかもう、完全に負けたって感じです。そちらのパートナーは可愛い弟。こっちはセクシャル眼鏡ですからね」

「君ねぇ……」

珍しく褒められた！

「可愛いッスか俺！？」

「二人とも眼は死んでますけど」

「死んでないから！」

「そうですよ！　まだ死んでません！！」

まだなんだ……

「まぁ、どっちでも良いです」

良くは無いけど……

「見たいアニメがありますので、私はもう帰りますが……秋さん。個人戦は負けませんよ」

「……ん。私も……負けない」

お互いの目を見つめ合う二人。火花が散る

こいつは個人戦も見に来ないと！　……学校サボって

「……個人戦、楽しみです。さて、帰るとしますか。眼鏡、車を用意して下さい」

「君ねえ……。それでは佐藤君、またお会いしましょう」

秋姉では無く、俺にそう言い、徳永さんと去って行く宗院さん。やはりホモ！？

「……私達も」

「帰ろうか秋姉」

秋姉と自転車に乗って走る帰り道

防具や竹刀は顧問の先生が持って行ってくれたらしい。気が利く奴め

「……今日は」

「ん？」

「ありがとう」

背中越しに感じる、秋姉の温もりと感謝の気持ち

「気にしないで。俺も秋姉の勇ましい姿が見れて楽しかったから」

「ん……ねぇ」

「ん？」

「今度一つだけ……してほしい事、何でもしてあげる」

その直後、僕が運転する自転車が電柱にぶつかった事は言うまでもありません

今日の怪我

俺＞＞＞＞＞徳＞＞秋

続けるびん

第６１話：夏のお兄ちゃん

「……今、大丈夫？」

試合の翌日。夕食を食べ終え、リビングでのんびりテレビを見ていた俺に秋姉が声をかけて来た

「ん？　大丈夫だよ。何かな？」

「……昨日の約束。してほしい事、ある？」

「昨日の約束？」

「ん。……なんでも言って」

「……あっ！」

昨日のアレって本気だったのか！？

「……ゲーム欲しい？　スーパーファ○コン？」

ゲームをやらない秋姉の内部では、ゲームの時代はスーパー○ァミコンで止まっている

「いや、そんな物より！」

「ん」

なんてこったい、日々真面目に生きている俺への神様からのスペシ

ャルサプライズだぜ！　どうする、俺！？

「耳かき、いや、此処は贅沢にひざ枕か！？」

「……ひざ枕しながら耳かき？」

グレイト！

い、いや、待て！　そんな刹那的な喜びよりも普段絶対頼めない事を！！

「よ、よし、決めた！　今日一日、秋姉は俺の妹になってもらう！！」

「……？」

秋姉は顔にハテナマークを浮かべて、小首を傾げた。

なんて可愛い人なんだ……ってもしかして引いてる！？

「あ……と、あ、はは。ほ、ほら、お、お兄ちゃんとか呼んでもらったりなんかしちゃったり……なんて」

「……」

秋姉は無言で俺を見つめる

「う……あ、あはは。な、な～んちゃっ」

「いいよ」

「へ？」

「いいよ。……お兄ちゃん」

「う、うおおおおおおおおおおー！」

我が生涯にいっぺんの悔い無しぃいいいい！！

「大声……駄目だよ、お兄ちゃん」

うおおおおおおおおおおおおー！！

神よ、私は初めて貴方に感謝致します！

「……騒がしいと思ったら。何やってるのよあんたら」

ドアの前で腕を組みながら俺達を見下ろす、呆れ顔の悪魔が現れた。

これは貴方用意した試練なのですか、神よ！

「……交換ごっこ」

「交換？」

「ん。今日は私が妹」

「……相変わらずくだらない事をやってるわね。どうせその馬鹿の提案でしょ？　ほとほどにしなさいよ、シスコン」

「シ、シスコ……」

相変わらず酷い姉だ

「……新鮮。結構楽しい」

「ふ～ん。ま、あたしは興味ないけど」

そう思うならさっさと出て行きやがれ！　等とは口が裂けても言えない俺が可愛い

「……お兄ちゃん、明日私がお弁当作るね」

「え？」
「え？」

な、何でいきなり弁当の話に？

「妹だから」

妹、関係ないよね！？

「作らせて。……お兄ちゃん」

上目使いで俺を見つめる秋姉。そんな顔を見て俺は……

「あいよ！」

今年一番きっぷが良い返事をしていた

夏のお兄ちゃん　2

「ふ～ん。……うふふ」

何故か夏紀姉ちゃんが妖しく笑う。こんな時、この女はろくな事を言わない

「……ねぇ、お兄ちゃん？　私、肩凝って」

「僕は貴女の兄ではありません。どなたかと勘違いしておりませんか？」

狂暴な妹など要らん！

「……良い度胸しているわね？　お兄ちゃん」

「なんでしょうか妹様」

指をポキポキ鳴らす妹には逆らえない

「分かれば良いのよ。ほら、さっさと肩を揉みなさい、お兄ちゃん！！」

胡座をかき、肩を指差す夏紀姉ちゃん

「で、では揉ませて頂きます……」

「右肩の方が凝ってるから、気合い入れて揉みなさいよ、お兄ちゃん！」

な、なんて可愛くない妹だ……

可愛くない妹の、めちゃくちゃ硬い肩を揉んでいると、秋姉が俺の後ろに来た

「秋姉？」

「……お兄ちゃんの肩、私が揉むね？」

これが可愛い妹だよ！　妹、最高！！

「あ～気持ち～。酒とつまみが欲しいわね～」

最悪だなこの妹。妹じゃなくて、オヤジじゃないんスかこれ？

天国と地獄を同時に味わっていると、廊下から母ちゃんがリビングへと入って来た

「みんなで肩揉み～？　母さんも混ぜて～」

「良いよ。それじゃ、妹よ。母ちゃんの肩を揉んであげなさい」

「こ、このっ」

「どうしたんだい、妹ちゃん？」

「わ、分かったわよ、お兄ちゃん」

「？？」

俺と夏紀姉ちゃんの会話を、不思議そうに聞く母ちゃん

「今、弟と姉を交換してるんだよ」

「あら～楽しそうね～。それじゃ母さんはみんなの妹よ～」

「それは無理だよ」

「それは無理ね」

夏紀姉ちゃんと俺の声が綺麗にハモる

「そうぉ？　残念～」

母ちゃんはガックシと肩を落とし、お茶入れるわね、っとキッチンへ向かって行った

「……行った？」

「うん、行った」

「……いくら何でも妹は無理よね」

「だよね～。全く、自分の歳を考えて喋って欲しいぜ」

「ほんとよね～、若作りだけどもう四十」

夏紀姉ちゃんの言葉が止まる。その額にはいくつもの汗

「過ぎにはとても見えないわよね～、いつまでも若いし、美人だし

自慢の母親よ～」

「……もう手遅れ」

ああ、手遅れだ。俺にも分かる。ドアの向こうに何が立っているかを

……ガチャリ

スローモーションのように扉がゆっくり、ゆっくりと開く

そして……

「……鬼」

オボンにお菓子とお茶のセットを持った細目の鬼が、眼をギラギラ光らせ立っていた。

どうやらリビングでお茶を入れるつもりだったらしい

「ねぇ、夏紀？」

優しく穏やかな声だ。まるで赤子を抱く母親のように

「は、はい」

だが、夏紀姉ちゃんの声は震える。俺の身体も！

「人には、触れてはいけない痛み（年齢）があると思わない～？」

オボンをテーブルに置いて、優しく尋ねる鬼

「ご、ごめ」

「そこに触れたら後は、も～」

拳を握り、夏紀姉ちゃんにせまる母ちゃん。夏紀姉ちゃんの目には涙が浮かび、いやいやと顔を振った

「ご、ごめんなさ」

「うめぼし～」

で、出た！　母ちゃんの必殺技！！

「う……うぎゃあああああああああああ」

夏紀姉ちゃんのこめかみに拳を当て、ぐりぐりと押し付ける母ちゃん。

めちゃくちゃ痛いんだよなアレ……

「……しかし獣のような叫び声だな」

他人事の様に呟くと、夏紀姉ちゃんは涙目で俺を睨む

「ぐ……う、ううん。んあ、ああん！」

いや、色っぽい声を出されても……

「……さて、僕はそろそろ宿題をやろうかな」

立ち上がり、リビングを出ようとする俺の肩に、母ちゃんの手がに

ゅっと伸びた

「次は貴方よ～」

「……許して」

「だ～め」

「た、助けて秋姉」

「……頑張って、お兄ちゃん」

「な、夏紀ねぇさ～ん」

「い、一緒に逝きましょう？　お兄ちゃん」

「だ、誰か助けて～」

「さ～いくわよ～」

「い、逝きたく無い、逝きたく無い～。う、うぎあああああああああ」

今日の妹ちゃん

秋＞＞＞＞夏＞＞母？

続きりん

第６２話：春の朝

土曜日の早朝、部屋のベットでスヤスヤ寝ていた僕の元に、機嫌よさ気な春菜が来ました

「なんだい、あ、そこに鉄道があるから連結しないでね」

「また寝ぼけてるのか？　仕方ね～な～」

ベットの上に乗り、俺を跨がる春菜。兄貴様を全く敬っていないらしい

「跨がるなよ～。背が伸びなくなったらどうするんだ～」

「お～き～ろ～」

春菜は俺の顔を、左に右にと引っ張りやがる

「あ～止めろ～」

「起きるか！」

「あ～分かった、分かったよ～」

俺に穏やかな日々は無いらしい

「起きるから、どいてくれ～」

「……なんか急に眠くなって来た。寝る」
春菜はごろんとベットにねっころがり、俺から枕を奪いやがった
「お前なぁ～……俺も寝る」
文句言うのも面倒臭い
「枕半分空けろ～」
「私の腕使え～」
そう言って右腕を伸ばす春菜
「あのなぁ……普通、逆だろ？」
「じゃあ腕、伸ばせよ」
「ほらよ」
頭を浮かした春菜から枕を奪い、代わりに左腕を入れる
「兄貴の腕枕、硬いから嫌なんだけどな」
「ふふふ。マッスルだからな」
「骨だろ、骨……ふぁーあ」
「でっけー欠伸」

「う～眠い～」

「寝ろ寝ろ」

俺も、もう一眠りっと

「ん～。……あ！」

春菜は突然ガバッと起き上がる

「どした？」

「朝飯、呼びに来たんだった！！」

「……早く言えよ」

今日の冷や飯

夏＞＞＞俺≧春＞＞＞＞＞＞母＞＞秋≧雪

続けました

第６３話：雪の科学

「お兄ちゃん、雪葉と雲作ろ？」

日曜日の昼下がり、僕の部屋に来た妹が奇妙な事を言って来ました

「蜘蛛ねぇ。……折り紙か何かで作るのか？」

雪葉は虫を嫌がる子じゃ無いけれど、蜘蛛とゴッキーさんだけは苦手だったのに……。ふ、これが成長か

「うんん。ペットボトルで作るんだよ」

「ペットボトル？」

「うん」

「……雪葉。ペットって付いているけど、ペットボトルはペットを飼うボトルでは無いんだよ」

「うん？」

諭す様に言うと雪葉は首を捻り

「ペットボトルは和製英語で、動物さんのペットとは関係無いよ？お兄ちゃん」

と、優しく教えて下さいました

１０分後

「雪葉と！」

「お兄ちゃんの」

「ドキドキ科学実験コーナー」

「こ、コーナー」

俺の部屋で突然始まったＮ○Ｋ番組。今日はペットボトルで雲を作る実験だぜ！

……いい歳して何をやっているのだろう俺は

「じゃあ、お兄ちゃんせんせ。お湯の温度を測って下さい」

「はい、雪葉助手」

雪葉に言われた通り、ボールに入れたお湯の温度を測る俺。
てか何故俺が先生なのだろうか？　……先生っぽくしてみるか

「出来たぞよ雪葉助手」

「はい、せんせ！　それじゃ、お湯をこのペットボトルに入れて下さい」

「うむ。……これで良いかね」

「はい！　次にマッチでお線香に火をつけて、煙を5秒……お兄ちゃん、お願いして良い？」

マッチと線香を持って、遠慮がちに聞く雪葉助手

普段は火を使う事を禁止されているからか、火を使うのを躊躇ってしまうらしい

「お任せあれ」

マッチと線香を受け取り、ペットボトルに煙を送る

「ありがとう！　それじゃペットボトルのフタをきつくしめて、煙が消えるように上下に振って下さい」

「はいざんす」

言われた通り何度か振ると煙は消え、無色透明となった

「今です！　両手でペットボトルを押して、お兄ちゃん！」

「は、はい！」

ペットボトルをキュっと押す

「素早く力を抜いて、お兄ちゃん！！」

「は、はぃい！！」

力を抜くと、ペットボトルが曇り出す。これが

「これが雲です。……やったぁ！」

「ほう、これが雲か……成功だな、雪葉助手！」

「はい、せんせ♪」

今日の科学

俺Ω雪β

続

第６４話：秋のパンドラ

月曜日の昼頃、僕の姉が教室に手作りの弁当を持って教室に来ました

「……お弁当」

「……え？」

「……妹だから」

まだ続いてたの！？

「あ、ありが……う！？」

秋姉から弁当を受け取ると、急に肩がズシンと凝りはじめた

「ん。……じゃあまたねお兄ちゃん」

悪戯っ子の様な軽い微笑みと共に、去ってゆく秋姉

そして……

「さ～と～う～！！」

殺気立つクラスメート達

「何だ今の会話は！？」

その中でも一番殺気立っている男。佐藤　秋ファンクラブの幹部、英明君（16歳）が血走った目で俺に迫って来る

見た目、戦闘力共にカンダタに近く、我がクラスの番長的存在だ

「久しぶりだな英明。単位足りてるか？」

「うるせぇ！　それよりさっきの会話は何だって聞いてるんだよ！！」

「何って……姉弟の会話だろ、普通の」

「普通じゃ無いだろ！」

「あ、やっぱり」

流石に俺でも分かる

「さてと」

カンダタを無視し、席に着く俺。弁当を机に置く

「待て、話は終わって……何してるんだお前」

机からガスマスクと手袋を出し、お香を焚いて生薬をお茶代わりに紙コップに注いだ俺を見て、カンダタは不思議そうな顔をした

「……俺の後ろに立つな。死ぬぞ」

「な！？　は、ハッタリじゃねぇ……この迫力は一体……あ、あれ

？　他の奴らは？」

クラス内には、もはやカンダタと俺しか残って居なかった

「……忠告はした」

俺は弁当の包みを、ゆっくりゆっくりと解いてゆく

「な、なんだ？　急に空が曇っ……て……ま、まて！　何だか良く分からないが、それを開けては危険な気が」

「秋姉のファンクラブを名乗るならなぁ」

「や、止めてくれぇえええ！！」

俺はホックを外し、弁当の蓋を一思いに外す！！

「ひ、ひぃいいいい！」

「……はは」

箱の中に希望は無かった

※

「あ、もしもし、光沢高校の教師で金岡と申しますが……ああ、そうですいつもすみませんね。はい、はい、また何ですけども、今回は救急車二台お願いします。え？　はい、二人です。一人はいつもの奴なんですけどもね……あ～あははは、全くですね～。全く馬

鹿と言うか、何と言いますか。でも、まぁ可愛もんですけどね、姉の作った弁当を残さずに食べる所とかね」

今日の完食

俺

ごちそうさまでした

第６５話：夏の地獄

月曜日の真夜中。寝ていた僕の部屋に、やけに陽気ないかりや……
もとい姉が来ました

「おいっす！」

「な、なんだよ？　寝てるんだぞ！」

「なに～、姉が起きてるのに弟が寝てるだと～」

僕の姉は弟を語るジャギ様のように憤り、ベットから布団を剥ぎ取ります

「な、何を」

「姉より先に寝る弟なんて存在しないのよ！」

いや、もう理不尽とかそういうレベル越えてません？

「ご、ごめん」

だが謝ってしまう俺が可愛い

「うぃっく……良いわよ別に。どうせアタシなんて……」

突然テンションが下がる夏紀姉ちゃん。Ｌｅｖｅｌ　３かな

「ど、どうしたの？　何か嫌な事でも？」

「アタシなんてハワイじゃない？　だから大王なのよ！！」

れ、Ｌｅｖｅｌ　７だと！？

「南の～国の大王は、ほれ」

「そ、その名も高きカメハメハ」

「カメ……あんたのカメ見せなさい」

「はい？」

「アンタの股に一匹飼っているでしょうが！　うひゃひゃひゃひゃ」

「……」

「……」

呆れ顔で見ていると、夏紀姉ちゃんは急に無口になった。気持ちが通じてくれたのだろうか

「……きもぢわるい」

「……え？」

「うぃ～」

夏紀姉ちゃんはフラフラと俺の側に近寄り……

「……って、ちょっと待って！　この展開は定番の！？」

「う～……お」

大変お見苦しい展開になりました。今暫くお待ち下さい

「うぅ……グス」

夜中の二時。姉が吐き散らかした汚物を泣きながら掃除する俺

姉ですか？　寝ていますよスヤスヤと

「うぃ～酒～向かい酒持ってこ～い」

「……なんつー寝言だ」

「……うぐ」

起き上がる姉

「ひぃ！？」

怯える俺

「……脱ぐ」

履いているスカートに手を掛ける姉。目は既に肉食のソレとなっている

「……な、夏紀姉……様？」

「脱がせ～」

「ひぃ！？」

牙を向き、俺に襲い掛かる獣

獣は何故か俺のパジャマを脱がそうと、引っ張りやがった

「ち、ちょっと！　や、止めて！？」

「良いでは無いか、良いではないか～」

「い、いやあああ！」

※

チュンチュン、チュンチュン……

「な、何してるのよアンタは！？」

バタバタバタ！！

スズメも逃げ出す咆哮で目を覚ます俺。だが、辺りは真っ暗で、何も見えない

「う……こ、此処は」

地獄？

「……ぐえ！？」

太い蛇のような物に、首を締め付けられる。一体何事！？

「あ、姉の股に顔を突っ込んで寝るなんて……遂に此処まで堕ちたのね」

怒りと諦め。そして憐憫を感じさせる声

「……アタシの責任ね。アンタが狂ったのは、この美しい姉が居たから」

哀しそうに呟く夏紀姉ちゃん。しかし、締め付ける力は全く緩まない

「ね、姉……ちゃん？」

「いいよ、責任取ってあげる……。さ、姉ちゃんと一緒に逝きましょう」

「よ、酔ってるね？　まだ少し酔ってるね！？」

このネガティブさはＬｅｖｅｌ　３か！

「……酔ってないわよ？」

カラン

ベットの上から床へ、何かが転がる

「おっとアタシのヘネシーが……」

「あ、あの後、また飲んだなアンタ！？」

「股に突っ込んでるのはアンタでしょうが！！　うひゃひゃひゃひゃ」

れ、Ｌｅｖｅｌ　７！？

「た、助け……うぷ！」

口元を股で塞がれた。召喚の呪文が唱えられない

「呼ばせないわよ～」

「ん～んん～」

「さ～、お姉たんと遊びましょうね～」

Ｌｅｖｅｌ　８！？

「い……いやぁ」

「ん～可愛い～！　も～大好き！！」

そして地獄が始まる

今日のドS

夏＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞母＞＞＞＞＞＞雪＞秋＞＞＞俺

つとむ

第６６話：月のわんこ

火曜日の夕方、学校から帰った僕に母が素っ頓狂な事を言ってきやがりました

「デートしましょ～」

「え？　嫌だよ」

学校から疲れて帰って来たってのになんで母ちゃんとデートせにゃあかんのだ

「今日、北海道の知り合いから毛蟹が届いたのよね～」

「行きましょう、母様」

「あら～うれし～」

そんなこんなで私服に着替えて、母ちゃんとお出かけだ

家を出ると、斑雲の赤い空。明日は雨だろうか

「で、一体どこに行くのさ？」

「駅裏のスーパーよ～。タイムセールで卵がお一人様一パック２０円～」

「安っ！？」

価格破壊や！

「今日は牛丼と卵とじよ～」

「やったねママ、明日はホームランだ」

十代には分からないネタを言いつつ、駅前へとたどり着く。
デパートぐらいしか大きな建物が無い駅前は、相変わらず閑散としていて、どこと無く物悲しい

「春菜か雪葉も呼びたかったわ～」

駅裏に続く踏切の信号を待ちながら、母ちゃんは残念そうに言う

「うちは結構、卵使うからね」

2パックでは三日持たないだろう

「残念だわ……」

母ちゃんは、ふぅっと、せつなげに溜息をつく

「そんなにテンション下げなくても……ん？」

閉まった踏切の向かいに見覚えのある姿があった

「美月？」

美月（多分）は、白い中型犬の散歩をしているらしく、踏切が開くのを待ちながら、しゃがみ込んで犬を撫でている

「お～い、美月～」

「んん？　……あっ！　兄ちゃん！！」

ぴょこんと立ち上がり、ぶんぶんと手を振る美月

「やっぱり、美月だったか」

この間は何故か微妙に冷たかったが、今日は大丈夫らしい

「あら～美月ちゃん～。……ふふふ～」

母ちゃんは細目をさらに細くし、不気味に笑った

「か、母ちゃん？」

「卵、もう一パックゲットよ～」

「……逞しいね、母ちゃん」

月のわんこ　2

「と言う訳で一緒に買い物行きましょ～」

何が、と言う訳なんだろうか？

「うん、良いよ」

突然過ぎる誘いにも関わらず、美月は承諾してくれた。なんて良い奴……

「少し遠回りになるけど大丈夫？　タロ」

連れている犬に美月が話し掛けると、タロと呼ばれた犬はピコピコと尾を振る

「うん！　それじゃ、行こ！　兄ちゃんに雪のママ！！」

「レッツラ・ゴ～」

「……」

本当４０代の人間だよね母ちゃんって

「疲れたら抱っこしてあげるからね」

歩きながら生暖かい目で母ちゃんを見ていると、美月がタロに優しく声を掛けた。

随分気を使っているんだなと、感心して見ていたら、その理由に

気付いてしまう

タロの白い毛は所々が薄くなっていて、足取りも頼りない。口は開けっ放しで、よだれが垂れている。老犬なんだ……

「……可愛いなコイツ。種類は何て言うんだ？」

「マルチーズ！　タロを褒めてくれてありがと、兄ちゃん」

美月は自分が褒められたかの様に喜ぶ

「お前も可愛いぞ～、美月」

そう言いながら、美月頭をクシャっと撫でる。相変わらずサラサラしていて、撫で心地が良い

「本当に？　……兄ちゃんに褒められるのって、なんだか凄く嬉しい」

撫でられた美月は、憂いを帯びた大人っぽい表情で微笑んだ

「……」

ぽかーん、としてしまう

「……どうしたの、兄ちゃん？」

「……み、美月さん……ですよね？」

「え？」

元気まるだし脳天気って感じだった美月が、こんな表情をするとは
……

「女の子は大人になるのが早いのよ～」

静かだと思っていたら、いきなり変な事を言い出しやがる

「ウ～～ワン、ワン！」

「何故吠える！？」

「あ、駄目だよタロ！　ごめんね兄ちゃん」

「い、いや大丈夫だけどさ」

俺、犬好きのに……

「タロちゃんは美月ちゃんを守っているのね～。でも安心して～、
この子の好みは年上だから～」

「人の好みを勝手に決めないでくれません？」

俺の理想はあくまでも姉（優しい方）であり、年上が好きと言う訳
では無い

「……そうなんだ」

美月が沈んだ声で呟いた

「……どした？」

「え？　な、なんでもないよ、兄ちゃん！」

「ん？　そうか？」

良く分からんが、とりあえず、俺をずっと睨んでるタロを宥めてはくれないだろうか

「と〜ちゃく〜」

なんやかんやと話している内に、あっという間にスーパーへとたどり着いた。目指す宝は後少しだぜ！

「行くわよ〜」

「ウィッス！」

「あ、此処、ペットを抱いて入ったら駄目な所なんだ。あたしはタロと一緒に居るから、二人が戻ったらあたしが買いに行くね？」

「あら〜気付かなかったわ、ごめんなさ〜い」

「しっかりしてるな、美月は」

卵を買う為に、人を巻き込む誰かさんとは違うぜ

「それじゃ少し待っててね〜」

「はーい！」

美月とタロを店の前に残し、いざ出陣！

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……混んでるねぇ」

意気込んで店内に入ったが、卵売り場の前は混雑していて、足の踏み場も無い

「……邪魔ね」

ボソッと呟く母ちゃん。一瞬、目が開いていたような……

「か、母……様？」

「ほんとに、混んでるわね～」

あ、いつもの母ちゃん

「これじゃあ買えないんじゃない？」

「大丈夫よ～」

「いや大丈夫と言われても……」

三十人近くの人間が、半径五、六メートル内にぎっちり詰まっているという奇跡の中、卵を取って来るなど不可能だ

「卵よこせ！」

「殺すぞコラ！」

「……」

彼女らは、もはや人では無い。卵を狙う獣どもだ

「そこでちょっと待っててね～」

そう言って母ちゃんは、気軽に獣の檻へと入って行った

「あ、危ないよ母……ちゃん？」

い、今、笑って？

「卵、卵、た～ま～ごふが！？」

「その卵をアタクシに寄越すザマス！　その卵もぐは！？」

狂暴なおばちゃん達が一人、また一人と沈んでゆく

その屍の中を悠々と歩く一人の細目の女。背中に鬼が見える

「卵ゲットよ～」

「……」

その前に、警察に身柄をゲットされてしまいますよ、母様

月のわんこ　4

「タ、タロ？　どうしたのタロ！？」

卵を買い、スーパーを出た俺達。
スーパーの前では、うずくまっているタロを美月が必死に呼んでいた

「タロ！　タロ！！」

「どうした、美月！」

「に、兄ちゃん……。タロ、急に元気無くなったの……ど、どうしよう」

美月は涙をぽろぽろと流し、すがるように俺を見つめた

「タロ？」

呼ぶと、タロは弱々しく俺を見上げる

「……病院だ。病院に行くぞ美月！」

「え……う、うん！」

「よし！」

タロを抱き抱え、俺は記憶を辿り動物病院がある場所を思い出す。
確か隣の駅近くに……

「よし、あっちだ。行くぞ！」

「待ちなさい！」

走り出そうとする俺を、母ちゃんが鋭く呼んだ。急いでるってのに！

「なんだよ！？」

「お金を持って行きなさい。後、病院まではタクシーを利用するのよ」

母ちゃんは俺に近寄り、財布から三万円を出した

「あっ！　ありがとう、母ちゃん！！　ほら、行くぞ美月」

「う、うん！　ありがとう、雪のママ！！」

「気をつけるのよ～」

※

【犬猫病院ヤブ】

駅前で拾ったタクシーが連れて来てくれた病院の名前だ

過激な名前の病院だが、タクシーの運転手によると腕は良いらしく、建物も二階建てで立派だ

「だけどヤブって……」

「兄ちゃん……」

美月は不安げに俺を見上げる

「……入ろうか」

ヤブ医者だったら俺の必殺パンチを喰らわせてやるぜ！

「……うん」

美月は俺の裾を掴み、頷いた

「いらっしゃいませ～。ヤブにようこそ～」

病院に入ると、スカートの短いピンク色のナース服を着た色っぽいオネエサンが現れた。キャバクラ？

「……ほ、他の動物病院に行こうか」

「で、でもタロが……」

俺の腕の中で、元気なくヘバっているタロ。

……他の所へ行っている時間なんて無いか

「あ、あの……。コイツを見て欲しいんですけども」

恐る恐るオネエサンに近付くと、強い刺激臭がした。

これは香水などでは無く、アルコールの臭い？

「どれどれ」

色っぽいオネエサンの目が真剣になる。命を預かるプロの目だ

「……疲労が溜まっているのかな？　ちょっと待っててね、今先生を呼ぶから」

オネエサンは、建物の奥に入ってゆく

「お～い、ヤブ～」

やっぱりヤブか！？

俺は、いつでも必殺のアッパーが打てる様に構える

「先生って呼べって！」

そして奥からピンクナースと現れたのは、無精髭の中年オヤジ。厳つい顔に、くたびれた白衣が哀愁を感じさせる

「……駄目だこりゃ」

「おいコラガキ！　人のツラ見ていきなり駄目だって失礼過ぎるぞ！！」

「いや、でも、つーか……ねぇ」

ピンクナースに意見を求めると、ピンクナースは首を横に振った

「人間としては駄目な部類だけど、医者としては凄いよ～」

「悪かったな、駄目人間でよ！　たく……で、患畜は、そのわんこか？」

「わんこって……先生が言うと気持ち悪い」

「ぶっ飛ばすぞテメェ！　……ああ、疲労だなこりゃ。年齢が高くなると、疲労が中々抜けねぇんだよ。だから積もっちまって、こういう風にヘバっちまうんだ」

喧嘩しながらも、中年オヤジはタロを手早く診察し、奥に連れて来いと指示を出す

若干疑いつつ、言われた奥に行くとドアがあり、開けると手術室の様な作りになっている部屋へと出た

「少しマッサージしてやるから、台に寝かせろ。椿、温いミルクな」

「は～い」

「マッサージ？」

タロを台に乗せ、尋ねる

「犬も人間と同じ様に乳酸が溜まって、筋肉が凝るんだよ。だから解してやるんだ」

中年オヤジはタロの身体を、キュッキュッと揉みだす。

タロは苦しそうにしながらも、どこと無く気持ちよさそうだ

「とにかく何日間か、散歩しないでゆっくり家で休ませるんだな。後は栄養のあるもん食わせてやれ」

「じゃあ、タロは大丈夫なの？」

「ああ。大丈夫だ」

そう言って中年オヤジは始めて俺達に笑顔を見せた。厳ついけど、笑うと愛嬌があるな

「……良かった、タロ」

まだヘタッているタロの顔に近付き、鼻先を優しく撫でる美月。

タロは短く鳴き、美月の鼻を舐めた

「……良い関係を築いているな、タロは飼い主を信頼している。だからタロは簡単に身体を触らせてるんだぞ？」

「そうなの？」

「ああ。犬ってのは基本的に他人には身体を触らせ無いんだ。俺が触っている事も相当気に食わないだろうよ。

だが飼い主は触らせる事を許可してる。だからタロは大人しくしているんだ」

「……なるほど。しからば俺も頭を撫でて……」

「ウ～～～」

「なんで俺だけ……」

月のわんこ　5

病院に着いて二十分。寝むったタロをカゴに入れて、右手に持つ

「ありがとうございました」

「ありがとう、先生」

「ああ。また何かあれば来いよ」

「待ってるわぁ」

ピンクナースは、やはりキャバクラみたいだった

もう一度お礼を言い、病院から出る。

美月の家は此処から三十分程度の場所にあり、俺達は歩いて帰る事にした

「兄ちゃん達に、いっぱい迷惑掛けたよね……。ごめんなさい」

帰り道の途中、沈んでいた美月が、元気なく言う

「気にするなよ、友達だろ？」

「でも……」

「良いって、良いって。あ、お金の事も気にするんじゃないぞ？母ちゃんには俺が返しておくから」

「え！？　だ、駄目だよ兄ちゃん！」

「な～に、ほんのちょっと俺の莫大な預金を下ろすだけだ」

一万か……日払いのアルバイト探そ

「だからいつまでもしょげてないで、いつもの元気で可愛い美月に戻ってくれな？」

「兄ちゃん……。こんなに優しいのに、なんで嫌われてるんだろ」

「嫌われてる？」

「うん……兄ちゃん女の子にモテないんだよね。女の子の敵で、女の子みんなに嫌われてるって」

「……誰が言ってるか聞いても宜しいですか？」

予想はつくが

「うん？　花梨だよ」

「……あいつとは一度ゆっくり話し合う必要があるな」

四、五時間ぐらい正座で

「女の子に嫌われてても大丈夫だよ兄ちゃん。アタシ、兄ちゃんの事大好きだから」

屈託の無い笑顔で、美月は言った

「こ、こりゃどうも」

何か照れてしまうな

「これからも仲良くしてね？」

「……ふふ。ああ！」

「うん！　……手、繋いで良い？」

「おうよ」

「ありがとう！」

ギュっと俺の左手を握る美月を見て、タロがワンワンと吠えた

「だから何故吠える！」

「ご、ごめんね、兄ちゃん。……余り吠える子じゃ無いんだけど、おかしいなぁ」

なるほど、俺を目の敵にしている訳ですか……

ま、何にしても

「元気になって良かったなタロ！」

「ワン！」

今日の好感度(タロ)

月>>>>>>花>>>>>>>>>>椿>母>>>>>>>>>猫>髭>>俺

鼓ヶ浦

第67話：花の説教

「んじゃ、また明日な」

「ああ、じゃーな」

学校帰りの夕方。友人Aと別れた俺は、自転車で家路を急いでいた

今日の夕食は毛ガニ。大好物なのである

生で食うか、しゃぶしゃぶにするか……焼くのも良いな。

いや、待てよ。超贅沢にカニチャーハンなんかにしても……

もうすぐ迫る中間テストの範囲よりも遥かに頭を悩ませていると、前方に見知った後ろ姿のガキんちょが見えた。

ガキんちょは、スーパーの袋を両手に持ち、よろよろと歩いている。あの後ろ姿は……花梨！

俺は自転車を、花梨の数メートル前で止め、花梨を驚かせようと忍び足で近寄る

ジャリ、ジャリと鳴る砂利道。なるべく音を起てないよう、ゆっくりと進むが、花梨は更に遅いので直ぐに追い付く

「……くくく。モテなくて悪かったなぁ、花梨ちゃんよ！」

花梨の頭をぐしゃぐしゃに撫で回し……て？

スーパーの袋を落とし、ひっと、短い悲鳴を上げて振り返った花梨

は、いつもより幼い顔をしていて……って花梨じゃない！？

「あ、ご、ごめ」

「あ、う……お、お姉ちゃん……お姉ちゃん」

女の子はキョロキョロと辺りを見回すが、そのうちに目が潤み始め、泣き出してしまう

「ご、ごめん！　勘違いして……本当にごめんなさい！！」

必死に謝る俺。ひっく、ひっくと泣きつづける女の子

そんな二人を見た近所の人が、組織の犬を呼ぶのに、そう時間は掛からなかった

１０分後。

「いつかはやると思っていたが……やってくれたな貴様！」

「ち、違います！　他の子と勘違いしただけなんです！！」

「他の子だとぉ？　貴様は何人の女の子を毒牙にかけたんだ！！」

「かけてません、かけてません！」

交番に連れて行かれた俺と女の子。必死に説明するも、隣に泣き止まない女の子が居る今、組織の犬はなんの言い訳も聞いてくれそうにない

「俺はなぁ、貴様の様な変態から市民を守る為に警察官になったんだよ。……未成年だからと言って、容赦はせんぞ？」

組織の犬は、顔を険しくして凄む。ゴツイ身体もあって、中々怖い

「まぁ待ちたまえ、滝君」

「岡部巡査部長殿！？」

交番の奥から、お茶を片手に出てきた五十代半ばぐらいの犬２に対し、組織の犬は立ち上がって最敬礼をする

「ほっほ、余り責めてはいかんよ。見ればまだ子供ではないか」

「し、しかしこの男は極悪非道の限りを尽くし……」

「なるほど、確かに間違いを犯かしたのかも知れない。だが見たまえこの目を！　この年齢でこのような死んだ魚の様な目を……苦労したんだね、君。滝君、カツ丼を取ってあげなさい、私の奢りだ」

「巡査部長殿……」

「さぁ滝君。そば屋に電話を」

「すみません！　目から流れる汗で番号が見えません！！」

「……ほっほ。若さとは良いものだね」

「……」

良く分からない会話のお陰で俺は冷静さを取り戻す

「……変な事に巻き込んでごめんな。先に帰してもらうから」

「……うん」

「お話中すみません。この子をそろそろ帰してあげてくれません？俺が居れば良いんでしょ？」

「あ？　ああ、もうすぐお家の人が来てくれるみたいだから、それまで待っててね。……貴様は帰さんぞ」

「はいはい」

「はい、は一回だ！」

オカンかよアンタ……

「おっと、貴様の家の人にも来てもらわんとな。電話番号は？」

組織の犬は、思い出したかの様に尋ねてきた

「俺の家族？」

「ああ。きっちり話しておかんと……どうした？」

俺の家族……

『ア、アンタ遂に……いつかはやると思っていたけど……もう表を出歩けないわ！』

な、夏紀姉ちゃん！　俺は無実でって、そんな目で俺を見てたのかよ！？

『……最低だな兄貴は。いやもう兄貴じゃない、ただの変態だ！二度と顔を見せるな変態！！』

は、春菜……

『ゆ、雪葉よりちっちゃい子に……お、お兄ちゃんのロリコン！死んじゃえ！！』

ち、違うぞ雪葉！　俺はただの姉好きであって、ロリコンなんかじゃ無いんだ！　母ちゃんは信じてくれるよな！？

『死んじゃえ～』

か、母ちゃんまで……秋姉は！？　秋姉だけは俺の無実を信じて

『……無理』

「……ははははは」

「な、なんだ？　何を笑っている！？」

「……終わったのさ。何もかもがな」

「ど、どうしたんだ本当に？」

「ふふ、もう俺には何も無いんですよ。何もね」

「ほっほ。若いのに投げやりになってしまってはいけないよ。君には未来があるじゃないか」

未来？　博物館ですか？

「良いかね？　君が罪を犯した事は確かだが、それをきちんと償い、反省をし、日々真面目に生きてゆけば君には輝かしい未来が……」

「ふふ」

「……何がおかしいのかね？」

「過去も未来も今、この時さえも僕は捨てましたよ。さぁ、捕まえて下さい。僕は姉好きのロリコンで、死んじゃった方が良いただの

変態です」

「こ、この少年にある心の闇は……深い！」

「じ、巡査部長殿！　私はとんでもない怪物を捕まえてしまったのかも知れません！！」

「ふふふ」

この深い絶望で世界を飲み込んでやるぜ

「なづな～！！」

「ぐはぁ！？」

入口付近の椅子に座っていた俺は、突然横から体当たりを食らい、日向君の強引なドリブルを受けた石碕君並に吹っ飛んだ

「あ……お姉ちゃん……お姉ちゃん！」

「なづな！」

抱きしめ合う姉妹。なんと感動的なのだろう、天地が逆じゃなければ俺も号泣していた所だ

「もう大丈夫だからね」

「うん……うん！」

しかし良く似ている姉妹だ。若干カールが掛かった長い髪といい、

背格好といい……ん？　……げ

「……なづな。無事で良かったぁ……で、チカンは何処よ！」

唖然とする組織の犬達に噛み付きそうな勢いで尋ねる

「あ、は、はい。……先程貴女が吹っ飛ばした奴がそうです」

勢いに飲まれた組織の犬は、唖然としたまま俺を指差した

「絶対許さないか……ら？」

「やあ、こんにちは。色々言いたい事はあるだろうけど、先ずは僕のお話を聞いてみないかい？」

振り向いた花梨に、今年一番爽やかな顔を見せる

「な、な……」

ナオミ・キャンベル？

「何やってるのよアンタは～！！」

その声は一キロ先の公園まで響き、そこで遊んでいた花梨の弟が、いきなり謝ったと言う

花の説教　3

「全くアンタは、くどくどくどくど」

「す、すみません」

「本当にアンタは、くどくどくどくどくど」

「ほ、本当すみません」

「あの時もアンタは、くどくどくどくどくど」

「す、すみませんでしたぁ！！」

交番から解放されて２０分。帰り道を歩きながら俺は、延々と説教を受けていた

組織の犬どもは俺を逃がしたく無かった様だが、花梨の説得と、なづなちゃんの『チカンさん、優しかったから』と言う、フォローなのか追い詰めているのか判断に迷う証言のお陰で、俺は自由の身となれたのだ。……しかし

「全く、本当にアンタは迷惑を、くどくどくどくど。胸が小さいとかなんとか言って、くどくどくどくど」

小学生のマジ説教を長々と受け、俺のハートはブレイク寸前だ

「す、すみません、すみません……でした……ぐす」

「あ……ま、まぁ反省しているなら良いわよ。……ゆ、許してあげる！」

「いえ良いんです……。僕はクズでアホなバカなので……」

「ハァ……全くもう。　……コラ！　私となづなが許すって言ってるんだから、いつまでもウジウジしない！　男でしょ、アンタ！！」

「は、はい！」

「背筋を伸ばす！」

「サー・イエッサー！」

「よし。じゃあこの話はおしまいよ。公園でお水でも飲みましょう？」

ちょうど通り掛かった公園を指差し、花梨は言った

「あ、ありがとうございました……。あ、俺、ジュース買って来ましょうか？」

あれだけの説教だ、喉も渇いただろう

「あ……なづな、飲みたい？」

「ん～ん」

ニコッと笑い、横に首を振るなづなちゃん。
それを見た花梨は、少しだけ悲しそうな顔をした

「私も要らないわ」

「助けて貰った礼がしたかったんだけど……やっぱりジュースぐらいじゃ駄目か？」

「え？　……べ、べつに！」

「へ？」

「べつにジュースでも良いわよ！　ドバカ！！」

ドバカって……

「じゃ買って来るけど、何飲む？」

「ココア！」

ぱっと咲く花の様に明るい笑顔だ

「了解。花梨は？」

「ココ……コホン！　コーヒーよ。もちろんブラックで」

当たり前でしょ？　バカね、てな顔で花梨は言った

「ココア２つと」

「ち、ちょっと！」

「ブラックで飲むのはまだ少し早いぞ」

俺だって飲めないってんだ！

「っ！　こ、子供扱い」

「してないよ。花梨はしっかりしてるもんな」

……俺よりも

へこむ心を微笑みでごまかす

「な、なにを……う～～～！　アホ～！！」

顔を真っ赤にさせ、花梨は逃げる様に走って行った……って

「何処行くんだ花梨！」

「聞くなバカぁ！」

そう怒鳴りながら向かった先は……

「トイレですね……失礼しました……ん？　なんだい？」

なづなちゃが俺の袖を、クイクイと引っ張る

「凄いね、チカンさん」俺を見上げてニコッと笑う、なづなちゃん

「凄い？」

「うん。お姉ちゃんね、あんまり怒らないの。でもチカンさんには、いっぱい怒ってる」

……それは余り良く無いのでは？

「これからもお姉ちゃんを宜しくお願いします、チカンさん」

ペコッと頭を下げる、なづなちゃん

……ところで、君の中で俺はチカンとして定着してしまったのかい？

「……ま、良いか。オッケーだよ、あいつ面白いしな。それにしても、なづなちゃんはしっかりしているな。素敵な妹やん？」

「？」

なづなちゃんは小首を傾げる

「？」

なんだこの変な間は……

「い、いやほら、花梨に素敵な妹がいてビックリって言うか……」

「お姉ちゃんに妹居ないよ？」

「……え？」

今日の謎

なづな

続くの？

第６８話：母のアルバム

「夏紀姉ちゃんは母ちゃん似だよね」

「雪とあんたは父さん似かしら」

夕食の後、リビングでテレビを見ながら俺と夏紀姉ちゃんはそんな話しで盛り上がていた

「なぁ、私は？」

その話を聞き、春菜が話に混じって来る

「あんたは……母さんの方に似てるわね」

「だな」

脳天気な所なんてそっくりだ

「母ちゃん似かぁ。秋姉ちゃんはどっちだろ？」

「……」

何となく聞いていたのだろう、テーブルの椅子に座っていた秋姉の身体がピクンと跳ねる

「あ、秋姉は……」

助けて夏紀姉ちゃん～

「ア、アキは……」

アンタが答えなさいよ！

そんなアイコンタクトをしている俺達を、秋姉はじっと見ている

「……う」

「……う」

秋姉が何を聞きたがっているかは、直ぐに分かった。だが……

「……私は」

「そ、そう言えば今日あれ見た？」

夏紀姉ちゃんは、いきなり話を振って来る。ナイスだぜ！

「み、見た、見た！　スゲーよな～」

何が凄いのかさっぱり分からんが、俺達は話を変えようと必死だ

「……ん。お皿洗って来る」

そう言い、秋姉は寂しそうにリビングを出ていく

「……」

「……」

気まずさと、申し訳なさで俺達のテンションは、がた落ち。しかし……

「……どっちだと思う？」

「……さっぱり分からないわ」

ぶっちゃけ秋姉は、どちらにも似ていないのだ

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、お風呂空いたよ～」

姉弟で悩んでいると、寝巻き姿の雪葉が、髪をタオルでふきながら俺達にお知らせしてくれた

「お、サンキュー」

「うん！」

笑顔を見せながら、雪葉は自分の部屋へと戻る

ふ、可愛い奴め

「姉ちゃん先入れば？」

可愛くない姉に言ってみる

「そうね……覗いたら殺すわよ？」

「覗くか！」

この女の頭の中で俺は、どんな変態に思われているんだ？

「どうだか」

「じゃ俺が先に」

「アタシが入る。……本当に殺すわよ？」

「だから覗かないって言ってるだろ？　夏紀姉ちゃんの風呂なんて金貰っても……の、覗きたいで～す」

ゴキリと音が鳴る程強く拳を握った姉を前にしては、そう答えるしか無かった

「ふん、やっぱりね。春菜、このド変態を見張ってなさい」

「は～い」

春菜は適当に返事をしたが、夏紀姉ちゃんは満足したらしくドカドカとリビングを出て行った

「……はぁ」

最近、ため息が増えたな俺……

「大変だな、兄貴も」

「しみじみ言わないでくれません？」

悲しくなってしまう

母のアルバム　2

《なんやねん、なんやねんたらなんやねん》

《ほんまかなわんな～》

「……」

「う～ん、やっぱ母ちゃんかな？」

姉ちゃんが風呂に入ってから１０分。つまらない番組をぼーっと見ていると、春菜がボソッと呟いた

「どした？」

「秋姉だよ。秋姉は多分母ちゃん似だと思う」

「まだ考えてたのか……母ちゃん似ねぇ」

似て……ないよな

「秋は母さん似よ～」

ガチャっとドアが開き、母ちゃんがキッチンから秋姉と共に、リビングへと現れた

「そう？」

なんとも言えん

「母さんの若い頃にそっくり～」

「え～」

思わず不満の声が出てしまう

「ふっふっふ～」

不敵に笑い、母ちゃんはリビングを出て行った。なんなんだ一体？

「……母さん似？」

秋姉は前髪をかきあげておでこを晒す。小さな顔が可愛いぜ！

「どうかな？」

「うん、最高」

「え？」

「あ、い、いや……う、う～ん。似て……」

「……似てる？」

「うっ」

嘘をつくべきか、正直に言うべきか……どうする俺！？

「お待たせ～」

「待ってました！」

別に待って無かったが、此処で母の登場は助かる

「アルバムよ～」

そう言い、母ちゃんは黒いアルバムをリビングの長テーブルに置く

アルバムの表紙には、銀色の刺繍で校章が描かれており、高級感溢れている

「これがブッチャー学院のアルバムか」

話には聞いていたが、アルバムを見せてもらうのは始めてだ

日本で最高峰と言われるお嬢様学校、聖ブッチャー女学院。

母ちゃんは第5期の卒業生で、エルオールだかルミネールだかのへんてこな称号を貰っているらしい

「懐かしいわ～」

母ちゃんは懐かしそうに一ページ、一ページとめくる

「……むう」

流石お嬢様学校。どの生徒も品が良い

「これが母さんよ～」

「どれど……れ！？」

アルバムには、ユニフォーム姿の女生徒達が写っており、その中心にバスケットボールを抱えた秋姉に良く似た人が写っていた

ただ、秋姉と違う所も沢山ある。秋姉はセミロングだが、この人はショートだ。

そして致命的に違うのは、秋姉が、こんなにお気楽そうな満面の笑顔を見せる事は無い

……後、秋姉より胸が大分大きい。

俺は無意識にアルバムの女性と、秋姉の胸を見比べてしまう

「……」

ジト目で俺を見る秋姉

「に、似てるやん！」

関西弁（エセ）でごまかす俺

「ん」

秋姉は頷き、余程嬉しいのか、超レアなピースサインをした

「しかし……この人本当に母ちゃんなの？」

面影が無さすぎる

「本当よ～、ほら～」

母ちゃんは、細目を大きく開けた……怖っ！

「そ、そうだね、似てるかもね」

「ん」

今度は秋姉が目を細くする。その表情には潤いがあり、美しい

「確かに顔の形は似てるね」

後は年齢と生き様か

「それにしても懐かしいわ～」

母ちゃんは懐かしむ様にゆっくり、ゆっくりとページをめくる

「……ところで、母ちゃん？」

「なにかしら～」

「どの部活にも母ちゃんが真ん中で写っているのですが？」

「母さん、全部活動の部長だったから～」

「……そう」

相変わらずこの母は、謎だ

「学園長、まだ元気かしらね～」

母ちゃんは一度アルバムを表紙に戻して、再びページを開く。
そこには学園長の大きな写真が載っていて、そのを見ながらしみじみと言った

しかし俺はその前のページ、すなわち最初のページが気になりまくる

「……生徒会長は学園長より先に載るんですか？」

学園長より更に大きな写真で、写る笑顔の生徒会長、要するに母ちゃん

「ふふふ～。学園長に是非にと頼まれたのよ～、土下座で」

厳格そうなシブメン爺ちゃんなのに……

「さ～てと～。洗い物の続きよ～」

アルバムを閉じる母ちゃん

「ん……手伝う」

「ありがと～」

「もうちょいアルバム見てて良い？」

「良いわよ～」

キッチンへ向かう母ちゃんの了解を得て、俺は再び一ページ目を開

いた

「……うむ～、本当に似てるな～」

まだ信じられん

「だから言ったろ？　さーてと、宿題やろー」

「マジでか！？」

春菜が宿題だと！？

コイツ実は春菜じゃ無くて春菜に良く似た奴なのでは？

「……やらないとヤバイんだ、マジで……」

マジでヤバそうな表情で春菜は言った

「……分からない所あったら聞きにこいよ」

「ああ、サンキュ。んじゃ後で夜食頼むな！」

「お前ね……」

まぁ、それでやる気になるのなら良いか

「後で持ってくよ」

「サンキュー！」

笑顔でリビングを出て行く春菜を見送り、再びアルバムへ

「……むう、この人可愛いな」

いつも母ちゃんの横に居る人が、めちゃくちゃ可愛い。母ちゃんと同じだとすると四十……

ガチャ

「ふぅ、良いお湯だったわ。コーヒー牛乳取って来なさい」

「ごく自然に命令しますね、姉様は」

だが、急いで立ち上がる自分が悲しい

「あら？　アルバム？」

「ん、ああ。母ちゃんのアルバムなんだけど、中々衝撃的な事実があって……ほら」

俺は床に座り直し、母ちゃんが写った写真を指差す

「ふ～ん、どれど……きゃ！？」

アルバムを覗こうと前屈みになった夏紀姉ちゃんのタオルが外れて、相変わらず均整の取れたその身体を俺の目の前に晒した

「み、見るんじゃない！　ド変態！！」

夏紀姉ちゃんは慌ててタオルで身体を隠すが……

「誰も望んでないから、んなサービス。象の裸を見るのと同じぐら」

今日のぼこぼこ

俺

つ……づ……

第６９話：春の勉強

佐藤家で一番バカなのは誰か？　この問いに対してまことに遺憾ながら、約半数の人間が俺と答える。２位は僅差で佐藤　春菜さん

しかし、学校の成績で言えば俺は結構良い方であり、平均点を下回る事は先ず無い。春菜は……いや、何も言うまい

で、比較してみると大体こんな感じになる

夏＞＞＞＞秋＞＞俺＞雪＞＞＞春

そう、夏紀姉ちゃんは別格なのだ。性格の悪さは頭には関係無いと言う事だな……いてて

「……で、何処が分からないんだよ」

時刻は午後１０時、場所は相変わらず綺麗に片付いた春菜の部屋

往復ビンタと言う素敵な技をくらい、腫れた頬を氷枕で冷やしながら俺は尋ねた

「分からない所が分からない」

珍しく気弱に春菜は言う

「……基礎からやるか」

今日は徹夜になりそうだ

午後１１時

「う～分からない～」

「だからこれはこうで、こうなんだって。ほれ、やってみな」

「う～、……あ！　こうか！」

「ああ！　良く理解したな、偉いぞ春菜」

「へへ！」

午前１２時４５分

「……眠い」

「寝るな！　ほれ、この問題解け！！」

「う～眠い～」

「……たく、五分だけだからな」

「うん……すーすー」

午前２時

「ほら、鍋焼きうどんだぞ！　これ食ってもう一頑張りだ！！」

「待ってました！　う～うんま～。もう兄貴、大好き！！」

午前３時

「あ、兄貴なんて大嫌いだ！」

「喧しい！　嫌いで良いから早く解け！！　おらこんなもんも分からないのか！？」

「鬼！　悪魔！！」

「ああ！　鬼にも悪魔にもなってやるよ！　ほら解け！！」

「兄貴のバカ～」

午前４時５０分

「い、いちたすいちはさん？」

「さ、さんはよんのまえだぞはるな～」

「よん、よん……う～」

「ねるな～、ねたらしぬぞうぅ……う～」

「う～う～」

午前?時

「お、終わった……」

「う……よ、良くやった春……むにゃむにゃ」

「……サンキュ、兄貴」

「……むぅ、ぬくぬく……」

「おやすみ、兄貴。……私も、ちょっと寝るか」

今日の大遅刻

俺≦春

「し、宿題が無駄になった～」

「……後で俺が学校に連絡してやるよ」

もずく

第７０話：Ｋの悲劇（前書き）

７０話記念。全員集合予定です

第７０話：Ｋの悲劇

悲劇は水曜日に始まった

事の起こりは昨日。時刻は五時半

学校から真っ直ぐ帰宅した俺は、ソファーにねっころがりながら柿の種を片手にバラエティー番組を見ていた

そのバラエティー番組の目玉企画として、こんなコーナーがある

【街で見付けた美少女】

可愛い子に簡単なインタビューをすると言う、単純極まりない企画だが、生放送であるこの番組には独特の緊迫感があり、その緊迫感の中で可愛い子達ばかり見付けてくるので、中々好評だったりする

ぶっちゃけ俺も嫌いでは無い。秋姉より可愛くないじゃん？　むふふ、とか言いながら優越感に浸るのが好きなのだ

気持ち悪いって？　ほっといてくれたまえ、所詮俺は警察からロリコン扱いされる変態なのさ（根に持ってる）

だがこの番組、基本的には面白くない。暫くぼーっと見ている内に、いつの間にかうつらうつらとしていた

「ただの姉好き……むにゃむにゃ」

《それじゃ好きな男の子のタイプは？》

……ん？　始まったか。さて、今日の美少女は

《お兄ちゃん！》

「ぶっ！？」

雪葉！？

ソファーから転げ落ち、慌ててテレビを見ると、マイクを持った若手お笑い芸人が雪葉にインタビューを行っていた

《へ～成る程ね～。それじゃカッコイイと思う人は？》

《うん、お兄ちゃん！》

迷い無い一言だ

《なるほど～。じゃあ嫌いなタイプは？》

《ん～、お兄ちゃんと仲良く出来ない人かなぁ》

《本当にお兄ちゃんの事が好きなんだね～。もう聞かなくても良さそうだけど、じゃあ最後に結婚するなら誰？》

《お兄ちゃんっ！》

《お兄ちゃん好きの雪葉ちゃんでした～。ありがとね～》

「……」

何も言えず、しばし呆然としてしまう

俺は白昼夢を見ていたのだろうか？　雪葉がテレビに出るなんて……

《さ～て、次の美少女を捜しに……ん？　凄い美少女発見！！》

《ん～？　あ！　春菜お姉ちゃん！！》

《お、雪葉！　何やってんだ？》

《よく分からないけど、アンケートだって》

《ふ～ん。あ、デパートの食い放題行ってくるけど、雪葉も行くか？》

《もうすぐ夕ご飯だよ、春菜お姉ちゃん》

《ただのおやつだよ》

「……」

家でする様な、ごく普通の会話がテレビから流れている。こんなもんが全国のお茶の間に……

「此処は……駅前？」

背後の道路から、二人が居るのは恐らく駅前だと判断する。

もう間に合わないかも知れないが、俺も行ってみて……ん？

今、二人の後ろを通り過ぎた車はどこかで見た様な……

《あれ？　夏紀お姉ちゃん？》

やっぱり

雪葉の言葉にカメラは夏紀姉ちゃんの方を向き、またまた凄い美女が、なんだと興奮した様にアナウンスする

しかし車から降りてカメラへ近付く夏紀姉ちゃんの顔は、険しい

《春菜！》

《は、はい！》

《あいつは一緒！？》

《あ、兄貴の事？》

《そうよ！》

《い、一緒じゃ無いよ。も、もう家に帰ってるんじゃ……》

《家ね……待ってなさいよ》

夏紀姉ちゃんは底冷えする恐ろしい声で呟いた

「な、なんなんだ？」

身に覚えは全く無いが、明らかにキレている

《ど、どうしたんだ？　兄貴が何かしたの？》

《……これを見なさい》

そう言い、夏紀姉ちゃんは携帯を春菜に渡す

《ん？　日記かこれ？　ええと……6月4日火曜日、姉ちゃんの裸を見てやったぜ、ぐふふ。相変わらず良い乳してまんな～……なんだこれ？》

《インターネットで公開されている、匿名の日記よ。あたしも今日、友達に聞いて知ったんだけど……あいつよ、それ》

《え！？　……五月二日姉のパンツを盗んだぜ、被ってみたら頭にジャストフィット！　……ほ、本当に兄貴なのかこれ？》

《……信じたく無い気持ちは分かるけど……これを見れば分かるわ》

《四月二十日、親父が居なくなったぜ。これで俺の天下だ！　ぐふふふ。二人の妹達には興味無いが、一番上と二番目の姉ちゃん達は最高や！　目標は二人のパンツで枕と布団を作る事。それまで帰ってくるなよ親父～》

「何も分からねぇよ！」

分かるのはそいつが、変態だって事だけだ

《あ、兄貴……》

「なんでガッカリしてるんだお前は！？」

《……あたしが悪いのかもね。あいつがこんなになるまで気付けなかったのだから》

「俺じゃない、俺じゃないからそれ！！」

《お、お兄ちゃん、雪葉に興味無いって……》

「そこ泣く所じゃないだろ！？」

《な、泣くなよ雪。わ、私も泣きたくなるじゃないか……》

「だから何で無条件に信じるんだよ！？」

《……あんた達。あんた達はあたしが守るわ。そしていずれ罪を償い、帰って来るあのアホを暖かく迎えてあげましょう》

「綺麗にまとめるなよ！　てか、逮捕決定！？」

《……生放送中ですが、大変な事になってしまいました。今日は番組内容を変更し、変態を家族に持ってしまった美少女達の悲劇と、現代に生きる変態の心の闇を》

「大きなお世話だよ！　つか何なのこれ！？」

悪夢でも見ているのか俺は

Kの悲劇　2

《……さ、帰りましょう春菜、雪》

《ああ……》

《お兄ちゃん……う、ぐす……》

《雪……あたし達家族は無敵よ！　今回の事だって、いつかきっと笑い話になるわ》

二人をぎゅっと抱きしめる夏紀姉ちゃん。

感動的な音楽が鳴り始め、彼女達に応援のＦＡＸをとテロップが流れた

《な、なんと感動的な光景なのでしょうか。僕は今、感動を自覚しています！　日本もまだ捨てたもんじゃない！！》

「……」

俺は日本を捨てたいですよ

「……ん？」

竹刀を持ったポニーテールの人が、画面を素早く通り過ぎた。今のは……

《あ！　アキ！！》

画面の外に向かい、夏紀姉ちゃんが呼び止める

《……なに？》

カメラは声の先を追って秋姉を写した。凄くめんどくさそうな顔で夏紀姉ちゃんに近づいてゆく

《アキ、驚かないで聞きなさい。遂にあのバカが本性を……》

《あのバカ？》

《あのバカ、あたし達の下着を盗んで枕に……。でも責めては駄目よ。確かにあたし達の弟は道を踏み外した変態だわ。だけど、それでもあいつはあたし達の大切な家族。暖かく見守って》

《……何を馬鹿な事を言っているの、姉さん？》

《うっ》

「うっ」

あ、秋姉が怒ってる？

《あの子はそんな事しない》

単純明快な一言は、絶対的な信頼が含まれた一言だった

「あ、秋姉……」

テレビ画面がぼやけて見えないぜ！

《……そうだな！　兄貴はバカだけど変態じゃないもんな！》

「ふ、春菜よ」

バカは余計だぞ

《うん、そうだよね！　お兄ちゃんは雪葉に興味津々だよ！》

「ふふ、雪葉の奴」

その発言はヤバイぞ

《……そうね。あたしに夜ばいをかけようとしたり、下着を脱がそうとしたり、お風呂を覗こうとしたのは、あたしが魅力的過ぎるからであって、変態だからじゃ無いわよね》

「あっはは、夏紀姉ちゃんめ」

どこまで俺を追い込む気だこの女は！？

《ん。……私、下着盗られた事無いもの》

「……」

ま、まさかそれが信頼の理由なのですか姉様……

《素晴らしい！》

「うお！？」

突然テレビから野太いオッサンの声がした

《か、数々のアイドルを育て、プロデュースした番組全てに成功し、長者番付とかでも一位とかでつか居たの？　って感じだけど、とにかく凄い、そいつが動いた～！！》

グラサンをかけたとにかく凄い初老のそいつは、グラサンを外しながら夏紀姉ちゃんに近寄り、ポンっと両肩に手を掛けた

《君達を芸能界へスカウトしたいじゃん？　十億で》

高っ！？

《無理ね》

パンっと両肩の手を払い、両腕を組みながらプロデューサーを見下ろす夏紀姉ちゃん。払われたプロデューサーの目が潤んでいるのはきっと、太陽が眩しいからさ

《ど、どうして……君はどうだい？》

《……無理》

《君は？》

《あ～無理無理》

《君は！？》

《無理だよ！　だって》

プロデューサーをしっかりと見据える四人。そして俺の家族達は一斉に言った

《兄貴と遊ぶ》

《あのバカをいたぶる》

《お兄ちゃんと一緒の》

《……あの子の世話する時間が……》

《無くなるから！！！》

重なり合う三人の声。よく分からんが俺は、結構愛されているらしい……あれ？　三人？

《……無くなる》

あ、遅れたんだ……

Kの悲劇　3

「あら、今日は豪勢ね」

夕方六時、夕食の時間。リビングのテーブルには俺の手料理が所狭しと置かれていた

「そう？　普通だぜ？」

夏紀姉ちゃんの好物であるカルボナーラを皿に盛りながら言う

「ほら春菜。お前にはビフテキだ、食べなさい」

「うお～！！」

焼きたての分厚いステーキと、キャベツの千切りだぜ

「雪葉、今度の土曜日に公園でも行こうか？」

「え？　うん！」

笑顔で返事をする雪葉。

後は……

「……あ、秋姉」

「……？」

「……あ、明日秋姉のお弁当が食べたいなぁ」

「……ん、任せて」

力強く頷いて下さった

「あ、ありがと……」

財布は空になり、明日の命も不安になったが、皆を喜ばせる事に成功したらしい

「今日は夕ご飯を作らなくて楽だったわ～」

ついでに母ちゃんも喜ばせられたようだし、良い感じだぜ！　なんて思っていた水曜日

そして木曜……

ＡＭ０６：００

「兄貴～朝だ起きろ～。そしてマラソンだぁ！」

ＡＭ０７：３０

「おはよ、お兄ちゃん。雪葉ね、昨日お兄ちゃんの夢みたんだよ？」

ＰＭ：１２：４２

「ん……お弁当」

ＰＭ：１６：５０

「兄貴～夕方だぁ！　マラソン行くぞ～！！」

ＰＭ：１８：１０

「お兄ーちゃん。今日ね雪葉ね、学校でね、お兄ちゃんがね。エヘへ」

ＰＭ：１９：００

「ん……夕ご飯」

ＰＭ：２０：３０

「兄貴～夜だマラソンだぁ！！」

ＰＭ：２１：２０

「お兄ちゃん……今日、一緒に寝てい？」

ＰＭ：２２：５０

「ん……夜食」

ＡＭ：００：３０

「お姉様のお帰りだ～！　おらー、酒持ってこーい」

「もう寝かしてぇえええええ！！」

「ぅうん……お兄ーちゃん……大好き。むにゃむにゃ」

今日のへとへと

俺

突く

第７１話：雪の乙女

太陽が雲に隠れ、穏やかな気候となった夏の昼下がり
俺は水曜日の約束通り雪葉を連れて、中央公園へと来ていた

「良い天気だな」

雲は多いが基本は良い天気だ

「うん！」

水色のワンピースに麦藁帽子を深く被った雪葉は嬉しそうに頷く

「ふふ。今日はのんびりしよう」

そう言い、俺は母ちゃんが持たせてくれたバスケットから薄い本を二冊取り出し、一冊を雪葉に渡す

「読んだら交換な、感想を言い合おうぜ」

「うん！」

本を受け取り、一ページ目をめくった雪葉を何と無く横目で見てみる。
雪葉は一生懸命本を読んでいた

「……ふふ」

大人しい雪葉には本が良く似合う

三十分後

「……ふぅ」

雪葉は本を閉じ、感嘆の溜息を漏らした

「終わったか、雪葉」

「うん。面白かったぁ」

目を閉じ、本を胸で抱きしめる。よっぽど気に入ったんだな

「雪葉、兄ちゃんジュース買って来るけど何飲みたい？」

「あ、雪葉も行く」

「雪葉は荷物を見ててくれると助かるぜ」

読後の余韻に浸らせてあげたいしな

「うん、分かった！」

「サンキュー。で、何飲む？」

「サイダーが良いな」

「了解」

俺は振り返り、歩き出す
「いってらっしゃい、お兄ちゃん」

「あいよ～」

３００メートル先の自動販売機にいざ行かん

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

三分の冒険後、秘宝を持ってベンチへと帰って来た俺を雪葉が迎えた

「ああ、はい、秘宝四矢サイダー」

「ありがとう！」

俺はコーラだ、こら。なんちゃって

ベンチに座り、公園内を眺める。カップルが多いな

「カップルさん多いね、お兄ちゃん。雪葉達もそう見えるのかな？」

「どうかな、雪葉にはまだちょっと早いかな」

「も～、お兄ちゃんったら」

「ふふ」

頬を膨らませ、拗ねる雪葉。ふ、可愛い奴め

プシュっと蓋を開け、一気に……

「雪葉だってバージンなんだからね！」

バジンっ！？

口の中でコーラが爆発！

「ゴホ、ゴホゴホ！！」

「だ、大丈夫？　お兄ちゃん」

「あ、ああ大丈夫、大丈夫。最近兄ちゃん耳が悪くって……ええと、雪葉はなんだって？」

「え？　バージン？」

俺が聞くと、雪葉は不思議そうに言ったって

「コラ！！」

「ひぅ！？　お、お兄ちゃん？」

「女の子がそんな事を言うんじゃありません！」

「え？　で、でも……」

「雪葉！」

「は、はい。ごめんなさい、お兄ちゃん……」

雪葉の目が潤み、涙がこぼれる

「あっと……、べ、べつに怒ってる訳じゃないからな。ただちょっと女の子が人前で言って良い言葉じゃ無かったから注意しただけで……」

「……うん」

雪葉はガックリと肩を落としてしまった

「う……あ！　雪葉！　焼きトウモロコシ食おうぜ！！　うっまいぞ～。ほれ、ズンドコドン、ズンドコドンドン」

形容しがたい踊りを踊りながら屋台に近付く。屋台の兄ちゃんが泣きそうな顔で怯えていた

雪の乙女　2

「兄ちゃん、焼きトウモロコシ２つ」

「は、はい」

怯える店員から熱々の焼きトウモロコシを購入して、雪葉の元へ

「ほら雪葉、焼きトウモロコシだぞ」

「……うん」

テンションが超低い

「ま、まるかじり～」

「うん。……あむ」

一応食べてくれてはいるが、明らかに傷ついている。もっと優しく注意するべきだった……

しかし雪葉は、どこであんな言葉を覚えて来たんだ？

「ワオ！　ルーシー、君はヴァージンだね！！」

疑問に思っていると胡散臭い日本語を話す、やけに陽気な外国人カップルが現れた

「何を言ってるのよ、このド変態！！」

「おいおい、勘違いしないでくれよ。ヴァージンと言うのはラテン語では乙女と言う意味で」

謎の外国人カップルの会話と、雪葉が読んでいた本の表紙を見て、理解する

「聖母マリア様の乙女日記……好きなのか、マリア様」

「……うん」

「ごめんな、雪葉。兄ちゃん勘違いしていたよ。雪葉は紛れも無くバージンだ」

「本当？」

「あ、ああ……立派な乙女だぞ」

「雪葉、バージンで良いの？」

「う、う～ん……。まぁ良い……のかな？」

「雪葉、バージン？」

「あ、ああ、素敵なバージンさ」

「そっかぁ、雪葉、やっぱりバージンなんだ」

「ま、まぁそうだな。でも人前で言ったら駄目だからな？」

「うん！　お兄ちゃんだけにするね、バージン使うの」

「あいつです、お巡りさん！　あいつが女の子に卑猥な言葉を言わせて喜んでいた変態です！！」

いつの間にか屋台から離れていたトウモロコシ屋の兄ちゃん。組織の犬を引き連れて公園へ戻って来た

「……やっぱり来たか」

予想はしていたさ

「どこのどいつだこんな昼間っから……ん？　貴様か！？」

「こんにちは、さようなら」

逃げ出す俺

「ま、待て～」

追う組織の犬

「お、お兄ちゃん！？」

戸惑う雪葉

俺達は、いつもの様にトムとジェリーの如く公園内を走り回ったって

「あ～面倒臭いな！　雪葉、作戦2だ！！」

作戦2。それは禁断の技
「うん！　……あ、もしもし、お巡りさんですか？　今、お兄ちゃんが変な人に追われているの、助けて！」

10分後

「ち、違う！　私は無実だ！！」

「犯罪者は皆そう言うんだよ！　ほら、とっとと車に乗れ変態が！！」

「違うんだ～！！」

手錠を掛けられ、パトカーに乗せられる組織の犬……やり過ぎたかな？

「大丈夫だった？　お兄ちゃん」

「ああ、助かったよ。作戦2【警察を呼ぶ】成功だな、ありがとう雪葉」

「……えへ」

「さて、と。サンドイッチでも食べようか」

「うん！」

今日の始末書（2枚目）

犬

所得

第７２話：秋の幸せ

台風の上陸に伴い、休校となった六月十日。その日は、どんよりと曇った空と同じ様に、我が家も朝から雲行きがおかしかった

ＡＭ　０７：３５

「……ん？　おはよう夏紀姉ちゃん」

リビングへ行くと、夏紀姉ちゃんがテーブルの椅子に座っていた。珍しい

「ええ、おはよう」

「今日は大学は休み？」

「さぁ？　やってるんじゃないの？　あたしは行かないけど」

「……そう」

相変わらず適当な女だ。絶対嫁にはしたくないタイプだな

「……あんた今、ふざけた事を考え無かった？」

「い、いいえ、別に」

無駄に勘も良いし

刺す様な視線から目を逸らすと、テーブルに乗っているシャケが目

に入った

「き、今日の朝はシャケだ～。結構好きなんだよね～」

「まぁ良いわ、いただきます。……ブハっ！？」

夏紀姉ちゃんはシャケを食い、いきなり噴き出しやがった！

「な、なんだよ？　汚いな！」

「し、シャケを食べてみなさい」

「何を言ってるんだか。さてと、いただきま～す……ブハっ！？」

同じリアクションをしてしまう

「てか一体なんなんだ、このシャケは？　見た目は普通なのにゴムの味と食感がするぞ！？」

「……おはよう」

未知の食べ物に驚愕していると、キッチンへ続くドアが開き、そのドアから犬の足跡がプリントされたエプロンを付けた秋姉が、お皿を持って出て来た

「……ああ、そう」

夏紀姉ちゃんが遠くを見つめる

「お、おはよう秋姉。母ちゃんはどうしたの？」

「……隣町のデパート。特売があるって朝早くから」

「台風が来てるって言うのに……」

天すら母を止める事が出来ないのか！？

「じ、じゃあ、この朝ご飯は……」

「……ん」

秋姉はコクンと頷く

「……サラダ」

秋姉は手に持っている、お皿をテーブルに置く

「あ、ありがと……う」

サラダとは紫色をしている物だっただろうか？

「……もう一品」

そう言った秋姉は再びキッチンへと向かって行った

「……殺る気よ、あの子」

「……」

ＡＭ　１０：３０

何と無く喉が渇き、牛乳を取って来ようとリビングへ行くと、秋姉がメモを片手にクッキング番組を見ていた

「……ん」

メモを取り終え、よしっと頷いた姉を見て、俺は神を呪う

「あ……お昼はチャーハンに挑戦」

ドアの前で固まってしまった俺を見付け、秋姉は決意を表明した

ＡＭ　１１：２０

「……良い風だ」

台風が通り過ぎ、雲一つ無い快晴となった昼前。　俺は窓を開け、爽やかな空と風を楽しむ

コンコン

部屋のドアを叩く軽いノック音

「どうぞ、秋姉」

僅かな間の後、ドアはゆっくりと開く。よし、やっぱり秋姉だ

「どうしたの？」

「ん、休んでいる時にごめんね。……お洗濯、汚れた物ある？」

「ううん無いよ。手伝おうか？」

本当はあるが、秋姉に汚れた物は洗わせられないぜ！

「……ありがとう。でも大丈夫。ゆっくり休んでいて」

優しく微笑む秋姉。俺はこの微笑みだけで、三ヶ月間同じ服を着れる

「……それじゃ、何かお洗濯する物が出来たら言ってね。……遠慮は駄目だよ？」

「う、うん」

見透かされてるかな、こりゃ

秋の幸せ　2

ＰＭ　１２：４０

人は何処から生まれ、何処に行くの？

「だ、大丈夫か兄貴？」

水色のチャーハンを見て現実逃避していた俺を見て、春菜が心配そうに聞いてきた

「あ、ああ。……なんとか大丈夫」

なのか俺？

今は昼。まだ母ちゃんは帰って来なく、結局朝に続いて昼も秋姉プロデュースとなってしまった食事

しかし何故水色に……

「うっ！」

匂いを嗅いでみると、人工的な甘酸っぱい匂いがした

「ま、まさかブ、ブルーハワイ？」

恐る恐る尋ねる夏紀姉ちゃん

「ん。……南国気分」

微笑む秋姉。その微笑みは流石の俺でも悪魔に見える

「あ……あぅ」

その微笑みを見た雪葉の顔はブルーハワイよりも青ざめ、震え始めてしまった

「あ……お茶入れて来るね」

そんな震えに気付かず、秋姉は思い出したかの様に席を立ち、キッチンへと向かう

「行ったか……。雪葉、兄ちゃんに任せろ」

秋姉を目で見送った後、強い決意と共に俺は呟いた

「え!?　お、お兄……ちゃん?」

雪葉の皿を手に取り、チャーハン、いやむしろ宇宙物質Xを、俺の皿に移す

「お、おにぃ……」

涙ぐむ雪葉

「ふ……なにも言うな」

可愛い妹の為だ、兄は喜んで死を選ぼう

「あ、兄貴、私のも……駄目……だよね……」

「……のせなさい」

「あ、兄貴っ！　頼りになりすぎ！！」

春菜は椅子から立ち上がり、俺の首に抱き着いた

「あ、あのさ、あたしも……良い？」

「……貸しだからね」

「ありがとう！」

久しぶりに本気で感謝されてしまった

「……ごくり」

四人分の量が一つの皿だけにのり、山盛りになった宇宙物質Ｘ。早朝の富士山よりも高くて青い

「ブルーハワイか……」

氷と米。漢字は何と無く似ているが、相性は正反対だろう

「じゃあ……行ってきます！」

ビシッと敬礼

「……いってらっしゃい帰ってくるのよ」

死地へと向かう俺を、正露丸を用意した姉が哀しみを含む優しい眼差しで見送ってくれた

「では一口……うん？　あれ？　以外と……×▽×！？」

「お、お兄ちゃんの顔が顔文字に！？」

「あ、アニキ～！」

「で、でも凄いわ！　どんどん食べてる！！」

秋姉が来る前に！　あきねえがくるまえに！　アキネエガクルマエニ……

ガチャ

「……お茶。……あれ？」

アキネエハカラニナッタサラヲミテコクビヲカシゲタ

「……ウマイアキネエノチャーハンハサイコウダ」

サイゴノヒトクチヲタベオレハイウ

「……うれしい。食器洗ってくる」

アキネエハオチャヲオイタアトジョウキゲンデサラヲモチキッチンヘトイッタ

「……ガク」

「お、お兄ちゃん！？　や、やだ！　死んじゃやだ～！！」

「男だった……男だったわよ、あんた！！」

「そ、そんな……あ、兄貴！　兄貴～！！」

秋の幸せ　3

ＰＭ　２１：２５

ちゃぷん。ギュ、ギュ……

「う……むぅ」

額に冷たい感触。俺はまだ生きているのか？

「……ごめんね」

秋姉？

目をうっすらと開けると、秋姉が泣きそうな顔で俺を見詰めていた

「あき……ね」

またそんな顔をさせてしまったね

おぼろ気な意識の中で、俺は四年前にも見た事を思い出す

四年前、秋姉が中学生の頃。一度だけみんなの前で泣いた事がある。

それは家庭科の授業参観中に先生から怒られたからだ

ふざけているなら作らなくて良い、いつもいつも馬鹿にしているのか。それがその時に言われた罵声

授業参観で母ちゃんに食べてもらおうと前日から練習や用意をしていた秋姉。ふざけて作る訳が無い

その事を知っていた母ちゃんは、どうやってやったのか僅か数分で授業参観に来ていた親御さん達を味方にし、あの人嫌ねと～とか井戸端会議を開く。そして穏やかに、しかし確実に教師を追い詰めていった

実に陰険ではあるが、グッジョブ母上と言わせて頂こう

しかし、秋姉はその時に教師を庇う。そして、気丈にも後片付けをしっかり終わらせ、皆の前でごめんなさいとあやまった

秋姉が泣いたのはその夜の事。

『いつも酷い料理を食べさせていたんだね、ごめんね』

ぽろぽろと涙を流す姉を見て、俺はどんな料理でも食べる事を誓う

そして秋姉の努力は始まった

勉強と部活の練習時間は削れないから、睡眠時間を削って料理の修行

その甲斐あって、料理の技術はかなりのレベルへとなった。しかし！　しかし秋姉は工夫と言う恐ろしい技術に迄目覚めてしまったのだ！！

例えばだ、例えば牛丼を作るとしよう。醤油と砂糖、ミリン等を使ったタレに、玉ねぎをコトコト煮込み、柔らかくなったところで牛肉を煮る。なんとも単純な料理である

しかし秋姉は、そこに何故かケチャップとオレンジジュースを入れる。何故か？　俺が聞きたいわ！

だがそれでも昔よりは食べれる物が出てくる。昔は本当に酷かった……

とにかくそんなエピソードがある訳で、俺達家族は秋姉の料理をなるべく受け入れようと紳士協定を立てたのだ

そして少しずつ秋姉を誘導し、最終的には普通の料理を、と言う五年を見通ししたプロジェクトを作成。現在に至る

　因みになるべくの基準は俺が決めている訳なのだが……

「……あ、秋姉？」

段々と意識がはっきりし、今の状況に気付く。どうやら俺は自分の部屋のベッドで看病されているらしい

「……大丈夫？」

秋姉は心配そうに聞いた

「う、うん」

「……良かった」

ほっとした様に、だけど悲しそうに言う

「……ごめんね」

「え！？」

つ、遂にバレてしまったのか？　なら、今まで嘘を付いていた俺に落胆して……

「お肉……大きすぎたんだよね。喉に詰まったって……」

「へ？」

「ん、……姉さんから。……ごめんね、もっと小さく切るべきだったね」

秋姉は俺の額に乗る濡れタオルを変える

「あ、ありがとう」

ふ、借りは返したわよ？　なんて言ってそうな姉の姿が浮かぶぜ

「美味しくてさ、慌てて食べた俺が悪いんだよ。……いつもありがとう、秋姉」

「……私」

「え？」

「お礼を言うのは私の方。みんなが私の作るご飯を食べてくれる、貴方が美味しいと言ってくれる……すごく幸せ」

秋姉は本当に幸せそうに微笑んだ。泣きたくなるぐらい優しい顔で

今日の幸せ

母＞＞秋＞＞俺≧雪≧夏≧春

「で、でも秋姉。ブルーハワイはちょっと違うと思うなぁ」

「ん、次はココアパウダー。……アクセントにこんにゃく。秘密だよ？」

「……」

続かそう

第７３話：夏の白雪姫

「大変よ～」

日曜日の昼過ぎ。いつものように何処にも出掛けず、あれ引きこもりですか？　って感じの俺の耳に慌てた母ちゃんの声が響く

「……なんだ？」

気にはなるが、見に行くのも面倒臭い。此処は一つ様子見だ

「どうしたの？　お母さん」

お、雪葉が行った。流石雪葉、いい子やな～

「今日の夕方、公民館で子供達のお遊戯会があるのよね～。その催し物の一つで劇団員による演劇があるのだけど～、急な予定が入ってしまったらしくてキャンセルになってしまったの～。も～母さん焦っちゃう」

焦っている割りにはなんともノンビリした説明口調だ。

そしてどうやら俺とは何ら関係なさそうだな、さてゲームでもやるか

「と、言う訳で～。代役お願いね、恭介～」

あれ、関係あったよ！？

呼ばれてしまっては仕方無い。俺は渋々と部屋を出る

すると、待ってましたと言わんばかりの笑顔な母ちゃんが、雪葉と一緒に廊下で待機していた

「うっふっふ～」

俺の顔を見て、嫌な笑い方をする母ちゃん

「……なにさ」

「王子様役、宜しくね～」

「王子様！？」

一体何をやらせる気だ、この母！

「白雪姫よ～」

俺の心を呼んだのか母ちゃんは言った

「白雪姫ぇ？」

リンゴ食って寝た、アホなねーちゃんの話か

「すっご～い！　お兄ちゃんが王子様なんだぁ」

雪葉は目をキラキラさせ、俺を見上げる

「良いなぁ雪葉お姫様やりたいなぁ」

雪葉はチラチラと母ちゃんを見るが、その母ちゃんはちょっと困った顔をする

「ごめんなさいね～雪葉じゃ少し背が低いのよ～。だからお姫様は～」

秋姉か！？　てか、お姫様役なんて、秋姉以外あり得ないだろ！やったぜ！！

「夏紀にお願いするわ～」

「それじゃ僕は宿題がありますので、夜中まで図書館に行ってきます」

俺は早足で玄関へ

「無事終わったら、みんなでお寿司食べに行きましょ～。マグロの握り一貫２０００円するのよね～」

「姫を迎えに行って来ます」

「お願いね～」

母ちゃんの声に頷き、俺は白雪姫が眠る二階へと向かった

夏の白雪姫　2

「くかーくかー」

「……」

黒い下着の白雪姫はベッドの上で大口を開け、大の字で寝ていらした

「……はぁ」

姫の脱ぎ散らかした服を畳んでため息

こんなのを姫にしたら、子供達は泣くんじゃないか

「うう……ううん」

呆れながら見ていると、夏紀姉ちゃんは急にうなされ始めた

「だ、大丈夫？　姉ちゃん」

夏紀姉ちゃんの側により、声をかける

「あたしの弟をいじめるなぁ……むにゃむにゃ」

「っ！？　……姉ちゃん」

『恭ちゃんをいじめるな～』

小学校低学年の頃、いじめれっ子だった俺をいつも助けてくれたのは夏紀姉ちゃんだった。　どんな時でも助けを呼べば来てくれる俺のヒーロー

自分は部活や勉強で忙しいってのに、嫌な顔をせず俺や秋姉の面倒も見てくれたな。強くて優しくて頼りになって……、最高の姉だ

「……なんだ、案外姫役似合うかも知れないじゃないか」

強すぎる気もするけど、そんな姫が居ても良い

「……たく、腹が冷えるぞ姫様」

俺は苦笑いをし、ベッドの上でグシャグシャになっているタオルケットを……

「うわ！　……ほらね」

こうなると思った

「……何をやっているのかしらアンタ？」

声が怒りで震えている

「お、お姉様から、ずり落ちたタオルケットを取ろうとしただけです！」

「なるほど、右腕を伸ばしてあたしの脇にあるタオルケットを取ろうとしたところ、身体を支えていた左手が滑って、慌てたアンタは右手であたしの胸をわしづかみ、と」

「凄いっ！　流石姉様！！　まるで見ていたかの様な、完璧な推理！　美しい！」

俺は夏紀姉ちゃんから離れ、揉み手をして機嫌を取ってみた

「パーとグー、どっちが良い？」

しかし通じない

「……二つしかありませんか？」

「チョキでも良いけどオススメしないわよ？」

ゆらりと起き上がる夏紀姉様。目が据わっている

「……あたしは嘘を付く奴が嫌い。正直に言えば許してあげるわ。あたしの胸が触りたかったんでしょ？」

女神の様な穏やかな表情で夏紀姉ちゃんは言う。……もしかしたら助かる？

「はい、そうです！　揉みたくて揉みました！！」

「このシスコンが！」

心地よい夏の風が吹く昼下がり。バチーンと相撲取りの張り手の様な音が、近所中に響きましたとさ

夏の白雪姫　3

「ひ、姫を連れて参りました……」

ヘッドロックを喰らいながら、夏紀姉ちゃんに事情を説明する事、五分。ようやく母ちゃんが待つリビングへ連れて行く事に成功した

「ご苦労様、冷蔵庫にアイスがあるわよ～。それと夏紀、家の中とはいえ流石にその格好は母さん、どうかと思うわ～」

「だって暑いんだもん」

母ちゃんの呆れ声に、甘えた声で答える姉ちゃん。

そう、夏紀姉ちゃんは未だに下着姿なのです。いや～、バカですね～

「ん？　ひぃ！？」

獲物を狙う鷹の様な鋭い双眼が、俺を捉えていた

「名、何でしょうか？　お姉……様」

段々と小声になってしまう

「ん？　あれ？　今、馬鹿にされた様な気がしたんだけど……気のせいかしら」

もう野生の動物より凄いですね、姉様は

「風邪引いても母さんしらないわよ～」

あ、心配しているのはそっちなのね

「ところで、恭介から話は聞いたかしら～」

「聞いたけど、白雪姫でしょ？　あたしの柄じゃないって言うかなんて言うか……」

珍しく言い淀む姉ちゃん。今だ！

「そんな事無いって！　姉ちゃんは美人だし、カッコいいし頼りになるし、優しい？
し、白雪姫にピッタリさ！」

姉の機嫌を取るのに必死な俺

「……ふん、調子の良いこと言って！　そんな見え透いたおべっかいで、あたしの機嫌をとろうとしても無駄よ！！」

夏紀姉ちゃんはプイッとそっぽを向いてしまう。しまった、怒らせた？

「顔がにやけているわよ～」

「に、にやけてないわ！　と、とにかくあたしには無理よ母さん。アキにでもやらせれば？」

ナイス姉ちゃん！

「う〜ん、台詞多いいから、ちょっと大変だと思うわ〜」

確かに秋姉は口下手だからなぁ

「白雪姫ねぇ……」

めっちゃ面倒臭そう

「そういえば、叔父様から百年の孤独ってお酒を今度頂くのよね〜。でも母さんお酒飲まないし、どうしょうかしら〜」

「あたしが白雪姫よ！　おっほっほ」

腰に左手を当て、右手は甲を顎の側に添えて、高々と笑う白雪姫。

世の中に光と闇があるならば、この白雪姫は間違いなく闇に属するだろう

「それじゃあ決定〜。母さん安心したわ〜」

何で母ちゃんが安心するのか分らないが、取りあえずキッチンの冷蔵庫へと向かう

「お、ガチガチ君の……ス、スパイシービーフカレー味」

秋姉が好きなんだよなこれ……。

えっと、他には……

「雪葉も手伝ってくれるんだろ？」

リビングに戻り、しょげてソファーに座っている雪葉にラムネ味のガチガチ君を渡す。俺はコーラだこら（流行らせたい）

「うん。もちろんだよ、お兄ちゃん」

目に見えてガッカリしていると言うのに、雪葉は笑顔で頷いた。ふ、すっかり大人になりおって

「アンタよりずっと大人よね」

「……最近の姉様って僕の心を読んでいませんか？」

的確に嫌味を言ってきやがる

「アンタの心なんて読んでも何も得しないわよ。ええと、雪葉の役は原住民？」

「……何を言っているのですか姉様は」

原住民って何の芝居だよ

「ほら、出てくるじゃない。オッサン顔のちっこい奴らが」

「……もしかして七人の小人の事を言ってる？」

「あ～小人だっけ、老け顔の小人が斧とかマサカリで襲ってくるのよね、白雪姫は渡さんぞ～って」

「何その怖い話！？」

トラウマになるわ！

「夏紀には後で絵本を見せる必要があるわね～。雪葉、森の小人さんやってくれる？」

「うん」

「ありがと～。それじゃ後はナレーターに王妃様、魔法の鏡だけど～」

母ちゃんは紙とペンを用意し、サラサラと書いてゆく

「できたわ～」

そして、その紙を俺たちに見せた

〔白雪姫〕

・白雪姫、夏紀

・王子様、恭介

・小人さん、雪葉

・王妃様、秋または春菜

・魔法の鏡、恭介

・ナレーター、母さん

・他、暇そうな人

「……俺の名前が二つありますね？」

「鏡は男の子の声じゃないと～」

「暇そうな人とは？」

「町内会の人たちよ～。兵士とか木とかゴキブリの役～」

「王妃様は秋姉か春菜？」

「先に帰ったほうが王妃様～。二人ともいつ帰ってくるか分らないけど、王妃様は台詞が少ないから大丈夫よ～」

「……」

色々言いたいことはあるが……

「それじゃ台本読みましょう。そして練習よ～」

練習が始まって一時間が経った頃には、部活から帰った秋姉も加わり、俺達家族はお遊戯会が始まる午後六時まで特訓を重ねる。

その甲斐あって、ある程度見られるぐらいになった所で時間切れ

「さ～行くわよ～」

「お～」

「お～」

「お～」

「……お～」

俺たちの戦いが今、始まる！

夏の白雪姫　4

《むかしむかし、それはもう若くて美しい素敵なお姫様がいました～》

午後六時過ぎ、遂に始まった白雪姫

会場である公民館二階の大広間には、五十人を超える子供たちと、その親御さん。町内会の人達が、所狭しと床に座り、ジッと前を見ている。

前とは即ち舞台なのだが、普通の多目的ホールに紙やダンボール、発泡スチロールで作られた背景と、黒いカーテンで仕切られた舞台裏を用意しただけの簡易的なものだ。だが、やはり舞台は舞台。上がると緊張してしまう

その舞台の裏で母ちゃんはピンマイクを付け、ナレーションをしている。

因みに俺はと言うと、暫く出番がないので、母ちゃんの横でコッソリ舞台を覗き見ている訳だ

しかしあれだね、中々ナレーション上手いね

《そのお姫様は、肌が雪の様に白い事から白雪姫なんて呼ばれて調子に乗っていましたが～》

うんうん……あれ？

「か、母ちゃん？」

今、微妙なニュアンスがあった様な……

《白ければ良いってものではないし、若ければ良いってものでもないと思うの～》

《それ、母ちゃんの個人的な意見でしょ！》

マイクに声が入ってしまい、見ていた親御さん達の爆笑がホールに響く。……恥ずかしいな

《とにかく～、余りにも美しかった白雪姫は、自分より美しくなることを恐れた王妃様の怒りを買い、恐ろしい原住民が住まう深い森の中に捨てられました～》

「だから原住民じゃないって……」

《いつまでも若く美しくありたい。女としては分からなくもないけど、人として、母親としては最悪よね～》

《だから一々感想入れないでくれって！》

再び爆笑。恥ずかしい……

《それはともかく、三年の月日が経ちました～》

一度照明が消え、黒子達が素早くセットを変える。そろそろ俺の出番だ

俺はこそこそと舞台に上がり、小道具である鏡台の裏に隠れる。後は出番を待つだけ

《此処は王妃様が住まう不夜城。ネオン煌めく城下とは対照的な暗い部屋で、王妃様はいつもの様に魔法の鏡に問いかけます》

ネオンは煌めかないけどね

《……魔法の鏡、答えて》

黒いドレスを着て、少し濃い目の化粧をした秋姉が、甘い声で囁く

な、なんて魅惑的な王妃様なのだ……

《……この世で一番美しいのは誰？》

《それは貴女様です》

間違いなく

《ん……他には？》

《貴女様が一番です》

どう考えても

《で、でも……》

《天下無双にてござりまする》

天下統一や！

ひゅーん、ぱこ

「いて」

秋姉に見とれていると、側頭部に何かが当たった

「テッシュ箱？」

飛んできた方向を見てみると、舞台の陰から……

「ひっ！？」

合わせただけで寿命が縮んでしまいそうな目が、俺を睨んでいた

ま・じ・め・に・や・れ！

夏紀姉ちゃんは、口パクでそう言う

《で、ですが最近、白雪姫という女性がヤバいぐらい美しくなっているとか……》

《ん。……私より綺麗な人……許せない》

《でも王妃様と比べると、大した事無いですよあんなの》

ひゅーん、ぱこ

「またテッシュ……」

飛んできた方向を恐る恐る見ると……

コ・ロ・ス！！

《し、白雪姫が一番や！》

《ん。……白雪姫、許せない》

《魔法の鏡によって自分より美しい者、白雪姫が生きていることを知ってしまった王妃様。今、美に全てを懸けた女の戦いが始まろうとしていました～》

何だかエステのコマーシャルみたいだね

夏の白雪姫　5

《さてさてそのころ白雪姫は》

照明が切れ、穏やかな音楽が鳴り響く。その間に舞台は城から森へと変わった

「お、雪葉の出番か」

森の小人役。ふ、さぞ可愛い事だろう

《ハイホーハイホー、今日はいい天気だなぁ》

雪葉は明るく、かわいらしい口調で舞台上に出てきた。
　緑色のシャツに短パンをはき、紙や発泡スチロールで作られた髪飾りに弓を持つ姿は、顔に被っているオカメの面と良くあってって

「可愛くねぇ！！」

何でオカメやねん！

「老け顔のお面、あれしか無かったのよ～」

「だから老け顔にする必要無いでしょう！」

「あら～でも気に入ってくれたわよ～」

《ハイホ～♪》

あれ、本当だ

機嫌良さげな雪葉は、腰袋からダンボールで作られたナタと、目がバッテンになっている森の動物さんを取り出し、不気味に呟く

《ふふふ、もうすぐ我が家。白雪姫にこの血が滴る生肉をプレゼントしょう》

「だから小人の設定おかしいよ！」

「あら～でも気に入ってくれたわよ～」

《なっまにく、なっまにっく～♪》

「ゆ、雪葉、お前……」

ストレスが溜まっているのだろうか？

《やっと家に着いた～、白雪姫～》

《何よ、うるさいわね》

舞台袖から気だるそうな口調とともに現れる白雪姫

白いシルクのドレスは、こぼれてしまいそうなぐらい胸元を大胆に開けたデザイン。スカートは膝上１５センチのミニスカートに足には黒いガーターベルト着け、髪をまとめてアップにしている

こんなにエロイ白雪姫を俺は知らない

うお〜

唖然としながら見ていると、この日一番の大歓声がオッサン達から沸く

「夏紀様、最高！」

「こっち向いてくだされ夏紀姫〜」

舞台を一瞬にしてストリップ会場のノリにして下さりやがりました夏紀姉ちゃんは、面倒臭そうに手を振った

「いや〜やっぱり夏紀ちゃんは色っぽいな」

「わしも後、五十年若ければ……」

オッサン共は口々に夏紀姉ちゃんを褒めるが、貴方達の横で睨んでいらっしゃる奥様方に気付いた方が良いと思いますよ

《こんにちは、白雪姫。お昼に生肉を捕ってきたよ》

《あたしは生じゃ食べないわよ、ミディアムにしなさい。塩と胡椒で味付けして、薄切りのガーリックとポテト、甘いニンジンを付けるのよ》

注文が多いな

《スープは鮭を主役とし、チーズと玉ねぎを加えたホワイトソースの物で宜しいですか？》

《良いわ、それで。ワインは白を食前に。ミアーニはあるかしら？》

《ウィ、マダム。ソーヴィニョンの２００６年があります》

《ならそれで》

《承りました》

……此処、どこのレストラン？

夏の白雪姫　6

《食事はつつがなく終わり、白雪姫と小人さんは食後のアンニュイなダルさを楽しみま～す》

《あ～食べた、食べた。後はデザートが欲しいわね、リンゴとか》

《うん、そうだね白雪姫。なんだか不自然なぐらいにリンゴが食べたいね》

こんこん。効果音と共に、舞台の隅から黒づくめの魔女が現れた

《おや、誰だろうこんな森深くに》

《リンゴ……出張販売中》

黒いフードを深く被り、猫背になった秋姉。顔が見れないというのに、何故か美しい

《あら、丁度良いわね不自然なぐらい》

《そうだね白雪姫。不自然過ぎて逆に自然となってしまうぐらい不自然なタイミングだね》

《怪しいけどリンゴが食べたいわ、どうしょうもなく》

《そうだね、怪しいけど食べたいね。今出るよ》

ギギギギー。立て付けの悪い、木のドアを開けた時に出るような、

効果音

《こんにちわ、リンゴ売りさん。全身真っ黒でとっても怪しいね》

《本当ね。まるで暗殺者みたい》

《……ん、リンゴ》

魔女は持っていたバスケットからリンゴを取り出した

《美味しい毒リンゴ……。たんとお食べ》

もう秋姉ったら正直すぎ！

《あら、毒々しい紫色のリンゴ。まるで毒でも入ってるみたい》

《本当だね、白雪姫。これに毒が入ってなかったら、何に入れるんだって感じだね》

《……早く食べないと賞味期限が過ぎる》

《あら、そうね。では食べましょう》

《うん。あ～ん》

二人は同時にリンゴをまるかじり

《あら、美味し……うぅ！？》

《あ……うぇえ》

小人と白雪姫は、苦悶の表情を浮かべ、バッタリと倒れた

《……にやり》

魔女が黒いフードを脱ぐと、あら不思議超絶美人の王妃様！

《お、お前は王妃……よ、よくも白雪姫に毒を》

《食べる方が馬鹿。馬鹿は死ななきゃ治らない》

魔女は汚物を見るような目で、白雪姫を見下ろす。久しぶりに見るブラック秋姉だ！

《ち、ちょっと。その目、本当に傷付くんだけど……》

《……》

《し、芝居よね？》

《……にやり》

魔女は意味深な笑みを浮かべながら舞台から退場。舞台に残されたのは、瀕死の白雪姫と小人さん

《肯定してよ……ガク》

意識を失う白雪姫。その白雪姫を見て、小人さんは最後の力で呪言を吐く

《……お、おのれ王妃め。この怨み、晴らさずおくべきか》

ポポン、ポポポンという和鼓の音と共に、オカメのお面が外れ、恐ろしい形相の般若へと変わり……

「って、だから設定がおかしい事に誰か気付こうよ！」

《……ガク》

小人さんと白雪姫は完全に動かなくなってしまい、同時に照明が消え、舞台が変わる。いよいよ俺の出番だ！

夏の白雪姫　7

《一方その頃の王子様～》

き、来た！　行くぞ～

《ヤ、ヤア、森ノ中ニ獲物ヲ狩ニキタゾウ》

声が上擦り、足がガクガクしてしまう。や、やばい

《中国に留学していた王子様～。昨日飛行機で帰って来たばかりで時差ボケが酷いみたい～》

ナイスフォロー！　……なのか？

《カサカサ、カサカサ》

一匹のゴキブリが現れた！

《って町内会長！？》

なんて哀れな姿に……

《こ、此処を通りたければ私を倒して行きなさい。うぅ》

涙ぐむ町内会長を見て、俺の迷いは晴れた

《グェ！》

這いずる町内会長、もといゴキブリを踏み潰し、俺は先へと進む

《ありがとう、貴方の勇気と犠牲は忘れない》

《グッドラック、王子様》

ゴキブリはサムズアップをし、うつ伏せに倒れた

「……あんな役よりは、王子様の方が千倍マシだな」

良かった、王子様で

《澄んだ空気に木々の香り。私は今、生きている～。さぁ獲物は何処だ、ララララのラー》

《……王子様》

《え？》

《……王子様》

《あ、秋姉？》

声はするけど姿は見えず

《い、いったい何処に？》

《……こっち》

《こっちって木のセットしか……ぶっ！》

木の被り物をした秋姉が、木々に混じって立っていた

《な、なんてシュールな……》

流石にこれはちょっと無いぜ

《私の後ろに……来て？　王子様》

《はーい！》

いや、やはり例え木でも美しい……

秋姉の指示でセットの裏に廻ると、棺が二つ

《これは？》

疑問に思って振り返ると、秋姉がてきぱきとセットを片付けており、舞台が見える様にしていた

なんて働き者の木なのだ……

《それじゃ》

木は素早く舞台裏に消える

《ありがとう、木の女神～。……しかしこれは？》

打ち合わせでは棺は一つだった筈なんだけどな

疑問に思いながら二つの棺に近付き、覗き込むと、中には夏紀姉ちゃんと般若さん

「な、なんで小人さんまで？」

《さぁ王子様がキスするのはどちらの唇だ～！　シンキングタ～イム》

《うわ！？　ビ、ビックリした……》

やっぱりノリが昭和だね、母ちゃん

しかし成る程、夏紀姉ちゃんか雪葉のどっちかを選ばせるつもりか

《どちらだって？　そんなの決まっている》

俺は姫が眠る棺へと近付き……

「そうだろ、雪姫」

夏紀姉ちゃんにキスなんかしたら殺され兼ねない

「えっ！？　お、お兄ちゃ……ん」

般若の面に、そっとキスをした

《その瞬間！　呪われし般若の面が真っ二つに割れ、可愛いらしい姫の姿が～》

《ありがとう、王子様！　やっと呪いが解けました！！》

《そうです、この小人こそが真の白雪姫なのでした～》

《さぁ踊ろう、我が姫、白雪よ！　愛と希望の歌を音楽に！！》

《はい！　おに……王子様！！　白雪は、ずっと王子様についてゆきます！！》

ララララー、ララララー

《……何この芝居》

大歓声の中、眠ったままの夏紀姉ちゃんの一言を最後に、このアドリブだらけの白雪姫は無事幕を閉じたのだった

今日の姫様

雪＞＞＞秋＞夏

続けそう

第７４話：院のため息

ざわ……ざわざわ

公民館二階。大成功に終わった演劇の熱は未だに冷めず、ホールはざわざわと賑わっていた

「いや～本当に助かりました、ありがとうございます佐藤さん」

「いいえ～」

「今回のお礼として……例の物、後でお渡しします」

「うふふ～」

こそこそと怪しげに話している町内会長と母ちゃん。なるべく関わらないようにしよう

二人から離れ、一階のホールへ行くと、切れ長の目を持つジャージ美女と目が合ってしまう

「佐藤君」

美女は俺に笑顔を見せる

「あ、貴女は先週いつの間にかやっていた剣道インターハイ個人予選の準決勝で秋姉にアッサリ破れた綾さんではないですか！」

「はい、こんにちは。殴って良いですか？」

ニッコリ笑顔のまま綾さんは言う

「まぁまぁ、事実なのですから」

その綾さんの後ろから聞き覚えのある声が掛かった

「あ、貴方は偉そうな事を言っといて、ろくなアドバイスも出来ず、アッサリ秋姉に負けたスペシャルアドバイザー（笑）宗院さんではないですか！」

「はい、許可します。どうぞ殴って下さい」

「ラジャー」

綾さんは振りかぶって、俺の頭にゲンコツを落と……す前に、腕を横から掴まれた！

「大丈夫か兄貴」

「は、春菜!?　来ていたのか？」

全く気付かなかったな。子供達の中に紛れていたからか？

「ああ。置き手紙があったから来てみれば……私の兄貴に何をするんだ？」

春菜は腕を離し、綾さんを強く睨んだ。かっこ良すぎる

「何って……」

綾さんは自分の握りこぶしを見つめ、

「フ○スト○ァック？」

ぱこん

「あいた！」

「ぶっ飛ばしますよ、いい加減」

宗院さんのこめかみがピクピクしている

「……えっと、お二人は何故此処に？」

「アルバイトです」

「愛人です」

そう言って綾さんは宗院さんの腕を取った

ぱこん

「あいた！」

「ぶっ飛ばしましたよ、いい加減」

「……フ○スト○ァックってなんだ？」

「キツネの名前じゃなかったか？」

良く分からんが

「フ○スト○ァックと言うのはですね、こぶしを固めて穴に」

ばこん！

「あいた！！」

「本当いい加減にしてください！　お願いしますから！！」

「そんなに叩かないで下さいよ。変な性癖に目覚めたら責任取ってもらいますよ？」

「お断りします。……すみませんね、変な子で」

「変から変わる恋もある」

「ねえよ！」

「ねえよ！」

宗院さんと声がハモッてしまった

「おや、声がハモッてしまいましたね。……敵から始まる恋も」

「無いですよ！」

「無いですよ」今度は綾さんと声が重なってしまった

「あ、声が重なってしまいましたね。いっそ身体も重ねて」

「だから無いって！」

誰かなんとかしてくれ！

「うふふ、可愛い。秋さんの気持ち、ちょっと分かっちゃう……ん？　あ、噂をすればの秋さん発見です。ちょっと話して来ます」

「どうぞ、ず～っと行ってらっしゃい」

「どうぞ、ず～っと行ってらっしゃい」

またハモッてしまった……

「変な奴。ま、特に何も無さそうだし、もう帰るよ。芝居、面白かったぜ兄貴」

「ありがとよ、帰りアイスでも食べな」

財布から二百円を取りだし、春菜に渡す

「サンキュー！」

めっちゃ笑顔だ

しみじみ

「春菜は良い子だなぁ」

「？」

「気を付けて帰れよ」

「ああ！　じゃあ後でな」

春菜は手を振り、元気良く去っていった

残されたのは俺と宗院さん

「いや～良い子ですね～。……あれと違って」

宗院さんは溜め息混じりに言う

「でも二人は仲良いですね、バイト迄一緒なんて」

「ははは、そんな事無いですよ。勘弁してください」

「またまた～、実は満更でも無いんでしょ？」

「本当……本当に勘弁して下さい……」

めちゃくちゃ嫌そう

「彼女は私をからかって遊んでいるだけです。それに私も年下の女性には興味無いですから」

「なるほど、年上好きですか」

そう言えば母ちゃんに抱きつこうとした時もあったな

「ははは、年下の『女性』には興味ありません」

「……」

なんだこの寒気は

院のため息　2

「いやはや、とにかくそういった訳で彼女と私の間に浮ついた感情など一片もありません。だからそんな疑惑に満ちた目をしないで下さい」

宗院さんは弱わったな、といった感じで言った。

どうやら俺が別の疑惑で見ている事に気付いてないらしい

「ふむ、もっとゆっくり話して疑惑を解きたい所ですが、そろそろ休憩時間が終わります。では佐藤君、今度食事でもしながらお話しましょう」

宗院さんは腕時計を見てそう言った

「徳永が戻って来ましたら、もう帰る様に言っておいて下さい。バイト代は私が預かっておきますからと」

「はい、分かりました。バイト頑張って下さい」

「ありがとう」

宗院さんは爽やかに微笑み、ジャージの尻ポケットから軍手を取り出し、はめて振り返る。良く似合っている後ろ姿が何故か物悲しい

しかし帰って来たらって俺はいつまで待てば良いんだ？

秋姉達の姿は無く、ちらほらと帰る人達も出ている

「……ふぅ」

「ただいまっ！」

「うわっ！？」

ため息をしていると、背後から急に首を抱き着かれた。俺の心臓に７０のダメージ

「あ、綾さん？」

「はい、綾さんです。佐藤君、細く見えて意外とガッチリしてますね～」

そう言いながら、綾さんは俺の胸や背中を触りまくる

「や、やめ、あ、あひゃひゃ！　く、くすぐったいから！！」

「感度は上々ですね、よしよし。では次に性感帯をば……」

そう言い腕を伸ばして来た所は！

「ち、ちょっ！？　や、た、助けて～！！」

「助けてって……佐藤君って草食の人ですか？」

綾さんは若干呆れた様に言い俺から離れるが、もう遅い。てゆーか俺もびっくりだ

「……ふふ、流石俺の姉だぜ」

「え？　ひっ！？」

俺の視線の先には、いつの間に居たのかジュースを三本手に持った秋姉の姿

「……」

「ち、ちがいますよ？　虐めてませんよ？　ちょっとからかっただけですよ？」

「？　……はい」

秋姉はキョトンとし、首を傾げながら綾さんにジュースを渡した

「はい？」

「……お仕事、お疲れ様」

微笑む秋姉、いや天使

「あ、ありがとうございます……あ、これ、私の好きなドリンクです」

「……よかった」

微笑む天使、いや女神

「うぅ……負けた。何だか良く分かりませんが、とにかく負けたぜ

力石です」

「母ちゃんと気が合いそうですね」

ネタが分かる俺もどうかと思うが

「スーパー〇ァミコンで出た一作目の力石って、凄く強くないですか？」

「アッパーをかい潜ってボディか、スウェーでかわしてフックでも打ってれば倒せるんじゃないですか？　……いや、知りませんけどね」

「てゆーかハリマオ強すぎません？　必殺技当たらないし……」

「基本的に上パンチで適当に打ってれば倒せますよ。……いや知りませんけどね」

「私、どちらかと言うとマゾなのですが、佐藤君ならどう責めてくれます？」

「そうですね、先ずは目隠しをって何を言わせるんですか！？」

「なんでも答えてくれるからつい……」

顔を赤らめて恥ずかしげに言うが、全く初々しさが無い

「……」

「あ、ごめんよ秋姉。ジュース持たせたままにしてしまって」

慌てて秋姉からジュースを受け取る

「……ん、仲良し」

秋姉は俺にジュースを渡し、嬉しそうに微笑んだ

この微笑みだけで俺は力石と戦える

「ふ、罪作りな女神様だぜ」

俺のハートをノックアウトだ

カシュッとプルドックを開けて、おもいっきり

「ブフッ!?」

噴き出した!

「ゴホ! ゴホゴホ!」

な、なんだこの臭い飲み物は!?

「だ、大丈夫?」

背中をさすりながら、ハンカチで俺の顔を拭く秋姉

「う、うん大丈夫。ちょっと器官に……ゴホ、ゴホ」

咳込みながらジュースを見てみると

「け、健康野郎ドクダミ茶（炭酸入り）だと……」

な、何故炭酸を？

「うん、やっぱりキレがあって美味しい。中々売ってないんですよね、これ」

こんなに美味しいのにと綾さんは残念そうに言い、一気に飲んだ。

……化け物め

「ご馳走様でした。私、雑巾取って来ます」

そう言うと綾さんは素早く何処かへ、すっ飛んで行った

「……私もハンカチを洗ってくる」

「ご、ごめんよ秋姉。また迷惑掛けて」

「……平気」

秋姉はニコッと笑い、早足で化粧室へと向かっていった。

そんな秋姉を濡れた服で濡れた床に立ちながら見送る俺

「うぅ……」

情けないぜ

院のため息　3

「はい、お待たせの雑巾ですよ」

待つこと一分。綾さんが雑巾を持って戻って来た

「よいしょっと」

「い、いや俺が拭きますよ！」

しゃがみ込み、床を拭き始めた綾さんを慌てて止める

「たいした事じゃないですから」

きゅっきゅっと素早く床を拭き、「ほらね」っと綾さんは笑った。

変な人だと思ってたけど、意外といい人やな～

「ありがとうございます、綾さん」

「お礼は身体で良いですよ」

「随分割が合わないですね！？」

「あはは。やっぱり佐藤君は可愛いですね、うんうん」

「むう」

からかわれているぜ

「さーってと、そろそろお仕事に戻ろうかな」

「あ、言うのを忘れていましたが、宗院さんがもう帰っても良いと言ってましたよ。バイト代は預かっておくって」

「そうですか、たまには眼鏡も気が利きますね。それじゃお仕事は眼鏡に任せて、途中まで一緒に帰っちゃいましょうか」

「良いですよ。秋姉もそろそろ……あ、来た」

小走りでこちらへ向かってくる秋姉。可憐だ……

「……恭介」

「え？　あ……」

秋姉は俺に近寄り、濡れたハンカチで服を拭いてくれた

「あ、ありがとう」

「ん。……染みにはならないと思う」

「う、うん」

流石に少し恥ずかしい

「お二人は仲が良いですね。私にも兄弟が居たりしますが、余り話したりしませんので、ちょっと羨ましいです」

「普通はそんなもんかもしれませんね。うちは親父や母ちゃんの影

響を受けたのか、家族を大切にって言う想いが人より強いのかも」

断じてシスコンでは無い！

「ん……大切」

にこっ

「グハァ！」

膝をつく俺。ノックアウト寸前だ

「だ、大丈夫？」

「へ、平気……」

後少しでＫＯだったけど

「……ん」

「あ、ありがとう」

秋姉が差し出してくれた手を掴み、ふらふらと立ち上がる

「……くすくす」

そんな俺を見て、綾さんはニコニコしていた

「私、お二人の事、何だか凄く好きになりそうです」

「え？　そ、そう？」

何か良いところ有ったか？　特に無いような……

「はい！　私とお友達になってほしいです」

「あ……。ふふ」

見ると心が暖かくなるような素敵な笑顔を向けられてしまったら、俺達の返事は一つしか無い

「ええ、喜んで！」

今日の腰痛

院＞＞夏＞＞＞＞俺＞＞＞＞徳＞＞＞秋

つづかみ

第７５話：家の裁判

さらさらと降る六月の雨

その雨から避難して来たのか、部屋の窓枠に止まった二羽の小鳥達。

ピーピーと仲睦まく鳴き合うその声で目が覚める

「……しょんべん」

部屋を出て、まだ寝ぼける頭でふらふらと廊下奥のおトイレへ

ガチャ

「……え？」

「おっと……お～雪葉。お前もしょんべんかー、連れしょんだ～」

俺はズボンとパンツに手をかけ……

「お、おに……おに」

「おに？　っ！！　ゆ、雪葉！？」

何で此処にって、何やってんだ俺！

「お、お兄ちゃ……っ～～～！　お兄ちゃんのばかぁ～！！」

十分後。リビング

第七回、佐藤家緊急裁判

「裁判長！　即刻（リンチ）私刑にするべきだと思います！！」

眼鏡を掛けた検事はソファーから立ち上がり、のんびり裁判長にいきなりそう言いやがった

「……無罪」

華麗なる若き弁護士は、美しい声でそうおっしゃってくれました

「有罪よ、有罪！　妹の前でポロリ!?　どんだけ変態なのよ!!」

「……事故。いつも下着姿で歩く検事の方が変態」

「う……異議あり！　その件につきましては、今は関係無いと思います！」

「異議を認めるわ～でも裁判官の心証は悪くなったわよ～」

「う……で、では次に状況証拠ですが……証人を連れて来ています」

「は～い。証人さんいらっしゃ～い」

朝ごはんを食べ終え、のんびりテレビを見ていたショートカットの証人が、面倒臭そうに証人席に現れた

「えっと……何すれば良いんだ?」

「朝、貴女が見た事をお話下さい」

「朝ねぇ……朝は」

証人Hの証言

「私は見たんだ。朝、怪しげな動きをする兄貴を……」

六月十ニ日火曜日、晴れ

『う〜』

あの日、いつもの様に六時半に鳴った目覚ましのベルで私は起きた

『……顔洗お』

寝ぼけた頭で襖をあけると、兄貴がフラフラしながら廊下を歩いていたんだ

『お、兄貴おはよー』

『んあ？　春にゃおふぁーあ』

兄貴は目を擦り、欠伸混じりに返事を返した

「ありがとうございます春菜さん、また後でお話を聞かせて下さい。いかがですか皆さん！」

「？」

「？」

「？」

「？」

裁判長と弁護士、俺と証人は顔にハテナマークを浮かべる

「挨拶をしたと言う事は、意識がハッキリしていたと言う事。誰かが入っているトイレに間違えて入る事などあり得ません！」

「……異議あり。寝ぼけていても挨拶は出来る」

「……ふふ、ようやくその言葉が聞けたわ。被告人、前へ来なさい」

「……はい」

俺は、とぼとぼと前に出る

「貴方は朝、被害者である雪葉さんがトイレに入っているのを知っていましたね？」

「……異議あり。それは誘導尋問」

「異議を認めるわ～」

「ふふ、では聞き方を変えましょう。貴方は朝、トイレをノックしましたか？」

「え？　いや、記憶に無いけど……」

「証言によると、ノックは無かったそうです」

「そ、そう？　寝ぼけたからかな」

「それはおかしいですね。貴方はトイレに入る時は必ずノックをしていたじゃありませんか？　何故その日だけノックをしなかったのです？」

「だ、だから寝ぼけていたから……」

「挨拶は出来たのに？　挨拶は出来たけど、毎日の習性であるノックは出来なかったと？」

「だ、だって寝ぼけてたから……」

「貴方は知っていた、雪がトイレに入っているのを！　だからアンタは敢えてノックをせず、雪にポロリを見せようとドアを黙って開けたのよ！！」

な、なにを言ってるんだこの姉は。なんだか泣きたくなってきた……

「……異議あり。それは只の中傷。話にもならない……と言うよりそんな発想しか出来ない検事が変態」

「し、しかしですね！」

「で、でも！」

「でも……なに？」

「うっ！？」

「うっ！？」

「……もう一度落ち着いて考えて」

あ、秋姉が本気で怒っている!?

「そ、そ、そ、そうね。ち、ちょっと軽率的だったかもね、ほほほ」

夏紀姉ちゃんは視線をそらし、わざとらしく笑った

「と、とにかく！　そいつがポロリを見せたのは紛れも無い事実！！　わざとだろうが、そうじゃなかろうが、有罪は決定よ!!」

ビシッと俺に指を指して言い放つ姉。しゃくだがちょっとカッコイイ

「……ん」

秋姉の言葉が詰まる

そう、事実俺はポロリを雪葉に見せてしまったのだ。雪葉の気持ちを考えると言い訳は出来ない

「……ふふ。どうやら反論出来ないようね！」

「……」

勝ち誇る夏紀姉ちゃんとは対象的に、秋姉は沈んでしまった

「さ～て、それじゃあコイツの私刑はアタシに任せて貰いましょうか？」

俺を見ながら唇を軽く舐め、笑う姉。奴はもはやゴルゴン化している

「……鍵」

全てに絶望していると、秋姉がポツリと呟いた

「鍵は掛かっていなかった。……どうして？」

独り言の様に言い、目を閉じる秋姉。その姿はメデューサに挑んだペルセウスよう

「……あ」

秋姉の瞳が開かれる。そして美しい声で言った

「ポロリして無い」

「……はぁ？」

呆れ顔の夏紀姉ちゃん。変顔だ

「……し、してない」

顔を真っ赤にし、俯く秋姉。可愛すぎ！

「ポロリして無いって、何言ってんのよ？」

「……鍵、掛かって無かった。雪が鍵を掛け忘れる可能性は、この子が寝ぼけてトイレを開ける確率より低い」

「ま、まぁ確かに雪はしっかりしているから……でも事実ポロリを！」

「……鍵が開いていたのは、多分、雪がトイレから出る所だったから。丁度その時に鉢合わせ」

……言われてみればそうだった気もする

「……だから状況的にポロ……ハプニングは有り得ない。何故なら二人とも立った状態で向かい合っているから」

寝ぼけていたとしても、目の前に便器が無ければ流石にポロリはしないだろう

「……思い出してきた。確かに俺はションベンをしようとトイレを開けたが、その時、雪葉は俺にもたれ掛かって来たんだった」

雪葉もドアを開けようとしていたのだろうが、先に俺が開けてしまったものだから、ビックリしてよろけてしまったのだ

「……流石だぜ、秋姉」

ゴクリと唾を飲む

「だ、だけど……じ、じゃあ何で雪は悲鳴を上げたのよ！」

「うっ！」

た、確かにそうだ。ポロリしてないなら、あんなに怒った理由が分からない

「それは……」

「それは!?」

「それは!?」

「た、多分……」

「多分!?」

「多分!?」

「……ん」

秋姉は困り顔で俺の股間をちら見し、言いづらそうに呟いた

「……朝だから」

「……あ”」

今日の私刑

俺

ごめんなさい

第７６話：春の疑問

かつてブロッケンマンがラーメンマンに真っ二つにされた技、キャメルクラッチを食らいフラフラになりながら歩む通学路。
朝練が無いから一緒に行こうと言う春菜の提案を受け、学校に向かっている訳だが……

「もう少しゆっくり歩いてくれ～」

歩くの早いんだよなコイツ

「ん？　早かったか？　悪い」

春菜は速度を緩め、俺の右横に立つ

「ありがとよ。あ～今日も暑い！」

「そうだな。でも暑いと気持ち良くないか？」

「お前は夏好きだからな。嫌いなのは春だろ？」

春菜の癖に

「花粉症が辛いから」

因みに秋姉は冬、雪葉は春、夏紀姉ちゃんは秋が好きである

「ところで朝は何であんなに騒がしかったんだ？　雪は怒ってさっさと学校行っちゃうし」

「何でってお前……」

分かってないのか？

「トイレで鉢合わせたからとか言ってたけど、良くある事だろ？」

「お前とはな」

鍵を閉めない俺も悪いが

「てか、それが理由じゃないよ」

真の理由はもっと悲惨だ

「そうなのか？　じゃあなんで？」

すんげー聞きたそうな顔で、俺を覗き込む春菜

「……男の生理現象ってのがな」

なんで朝っぱらから妹にこんな事を言わなきゃあかんのだ……

「え！　男にも生理あるのか！？」

「……え？」

「知らなかった……。ナプキンあるか？　夜用、一個やるよ」

そう言い春菜はバックからナプキンケースを取り出し、俺に手渡した

「お、お前……マジか？」

「ん？　ああ、遠慮してるのか？　気にするなよ！」

あははと笑う春菜

や、やばい！　この子、天真爛漫すぎっ！

「は、春菜さんって保健の授業とかきちんと受けてます？」

「うん？　つまんねーから寝てる」

「……だろうね」

今度夏紀姉ちゃんに教えさそう

今日の純真

春＞＞＞＞＞秋≧雪＞＞＞＞俺＞＞＞＞夏

つづませり

第７７話：直の苦悩

「時間は夢を裏切らないんだよ」

「なるほどな。ならきっと今は自由に空も飛べる筈」

そんな適当な話をしつつ学校を目指していると、十字路の所で爽やかな少年とバッタリ会った

「お、直也君か」

「あっ！　お兄さんに春菜……お、おはようございます」

直也君は姿勢を正し、腕を後ろに組んで深く頭を下げる。いつもより元気が無いな

「ああ、おはよう」

「……兄貴、私、先行くよ」

「春菜？」

「じゃーな」

春菜は直也君へ露骨に嫌悪感を現し、早足で去っていった

「……まだ仲直りしてないのか？」

春菜が誰かにあんな冷たい態度を取る所を始めて見た

「……はい。実は真剣に謝った後、一度は許してもらえたのですが……」

直也君は、うなだれてしまう

「言ってみな？」

「……はい。許してもらえた日、体育の授業があって、女子は保体だったのですが、早く終わったらしく見学に来たんです。授業は得意のサッカーで、俺、春菜に良いとこ見せようと張り切りました」

「ふむ、中々青春しているな」

「……はい。それで結構活躍出来て、試合も圧倒していたら途中で春菜が相手チームへ飛び入り参加したんです。制服で」

「……なにやってんだアイツは」

「春菜は人気あるし、スカートだったのもあってみんな最初は遠慮していたのですが、春菜がめちゃくちゃ良い動きして、あっという間に点数追い付かれてしまい、俺も何だかワクワクしてきて……」

直也君は言葉に詰まってしまう

「なるほどな。本気を出して春菜を圧倒してしまい、アイツは拗ねてしまったと。ふ、あいつもまだまだ子供だな」

「いえ、圧倒されたのは俺達です。俺、シニアで何度か全国行っていますが、あんな凄いシュートやドリブル出来る奴、見た事無いで

す」

悔しさよりも、尊敬の方が強い言い方を直也君はした

「……相変わらずなんだなアイツ」

アイツは中二の頃、５０メートルを６秒前半で走ると言う、訳の分からない怪物ぶりを見せている

「しかし分からないな。ならどうしてアイツは怒って？」

「そ、それは……」

「……それは？」

「すみませんっした！」

直也君は鞄をほうり投げ、土下座する

「ち、ちょ！？　こ、こら、止めろって！」

「俺、試合に熱中して春菜からボールを奪おうと当たった時、俺、コケてその時、咄嗟に春菜のスカートを掴んでしまって！」

ま、まさか

「ぬ、脱がした？」

「すいませんでした！　すみませんでした！！」

直也君はアスファルトの地面に何度もヘディングをする

「あ～～分かった、分かった。もう良いから面をあげぃ！」

「へ、へへぇー」

直也君じゃなかったら殴っているけどな

直の苦悩　2

「しかし成る程。流石の春菜でも公衆の面前でスカートを脱がされれば怒るわな」

なんだか兄ちゃんホッとしたぜ

「あ、いえ。それもそうなのですが、一番の原因は春菜のポケットに入っていた焼きそばパンが潰れてしまった事なんです」

「……」

「……お兄さん？」

「……いや、良いんだ。素直に育ってくれた、それだけで兄ちゃんは嬉しい」

目からこぼれ落ちる液体は、ただの汗さ

「原因は分かったよ。今度焼きそばパンにメロンパンを付けて謝りに行きなさい」

きっと許してくれるさ

「は、はい……」

直也君は自信なげに頷いた

「……しょうがないな」

春菜を想ってくれる素直な少年の為、ちょっと気合いを入れてやるか

「直也君、いや、直也！」

「は、はいっ！」

「いつまでも、うじうじするんじゃない！！」

「す、すみません！」

「お前は男だろ？　チ○ポ付いているんだろ！」

「は、はい！　付いています！！」

「デカイのか！？」

「……はい？」

「お前の漢はデカイのか！」

「あっ！　わ、分かりません！！　ですがお兄さんみたいなデカイ漢になりたいと思ってます！」

「俺はデカイか！」

「はい！　デカイです！」

「本当にデカイか！」

「はいっ！　本当に、本当にデカイです！！」

「俺のようにデカクなりたいだと？　……なら見せてみろ」

……ごくり

直也君が唾を飲む

「お前の漢を俺に見せてみろ～！！」

「はい！！」

「裸になれ！　真っ裸になって本当のお前を見せてみろ！！」

「お兄さん……いや、兄貴！　俺、俺っ！！」

「……言葉なんかいらねぇ。さぁ、突っ込んで来い！　砕けて来い！！」

今すぐ春菜の元へ行き、本気のお前で謝るんだ！

「はい、兄貴！　行きます、行ってきます！！」

直也君はワイシャツを脱ぎ、シャツ一枚の身軽な格好となって春菜を走り追う……前に

「その前にちょーっと来てくれるかなぁ？」

肩を掴まれました。終わり

今日の補導

俺≦直

「……ふふ。このカツ丼しょっぱいなぁ、直也」

「……はい、涙の味かします」

慎む

番外編！

悲劇。それはテレビの何気ない一言から始まった

《家族の仲で一番好きなのは誰ですか？》

「何よ、この質問。誰と答えても角が立つじゃない」

下らないと言いながら、ビールを飲む夏紀姉ちゃん。夕食を食べた後のビールは欠かせないらしい

「ほんとよね～。因みにお母さんはお父さん～」

母ちゃんは飾ってある親父の写真立てに向かい、投げキッスをする

「そういえば、うちには父親が居たのよね」

「きっと、何処かで私達を見守ってるわ～」

なんだか故人みたいだな親父……

「私も父ちゃんかな。勿論みんな好きだけどな！　夏姉は？」

「アタシは恭……は、無いわね。アタシは皆、同じぐらい好きよ。一匹除いて」

一匹は僕ですか？

「……私も好き。みんな大好き」

優しく微笑む秋姉。オラも大好きや！！

「で、アンタは？」

「え？　俺？　俺は」

誰と言われても困るけど……。一番は、やっぱり秋姉かな！

（ま、アキでしょうけど）

（やっぱり秋姉だろうなぁ）

（秋お姉ちゃんだよね、きっと……）

（秋よね～。とっても仲良いもの～）

（……母さん？）

「う！？」

五人の家族にジッと見つめられ、俺は脂汗を流す。

確かに、どう答えても角が立ちそうだ……

「お、俺は……」

「俺は……何よ？」

「何、お兄ちゃん！？」

「ま、私じゃないのは確実だけどな！」

「あらあら～」

「……母さんかな？」

（でも昔、一番仲良かったのはアタシなのよね。なんだかんだ言っても……アタシ？）

（あ、だけど最近、兄貴とよく遊んでるし……私かも）

（雪葉は、みんなの事大好きだけど、やっぱり一番はお兄ちゃん。もしかしてお兄ちゃんも……）

（でも～、大穴で母さんだったり～）

（……父さん？）

「お、俺は……」

「俺は！？」

「俺は！？」

「俺は！？」

「誰かしら～」

「……父さんかな？」

「そ、そう！　親父が一番好きっ！」

「……逃げたわね？」

「お兄ちゃん！」

「兄貴！！」

「あらあら～」

「ん、当たり」

ピースサインを出す秋姉と、迫り来る三人の姉妹

「だ、だって皆、大好きなんだ！　一番なんて決められないって！！」

そうさ、僕はこの女系家族が大好きなんだ！

「……詭弁ね」

「軟弱だな」

「優柔不断だよ！」

「馬鹿ね～」

「？？」

その日から暫くの間、大好きな家族達の目は、一人の姉を除いて冷たかった……

第７８話：雪の反乱

我が佐藤家の力関係は？　と、問われたらジャンケンの様な物だと俺は答える

例えば俺と春菜がグーだとすると、夏紀姉ちゃんはパー……ぷぷ。
おっと失礼。夏紀姉ちゃんはパーであり、秋姉と雪葉はチョキである

母ちゃんはジャンケンにおけるジョーカーで、大体において最強を誇る

では母ちゃんが最強か？　いや、そうとも言い切れない。何故ならば、極たまに発動する最強モード、ブラック秋姉の存在もあるし、雪葉の底力も忘れてはいけない

そう雪葉。日本最後の甘えん坊将軍と言う異名を持つ佐藤家四女。
その名に恥じない甘えっ子ぶりを発揮しているが、ごく稀に機嫌が悪くなる時がある。
普段は優し過ぎるぐらい優しくて、良い子な雪葉でも、その時ばかりは恐怖の大王と化す

そんな時の事を俺達は畏怖をもってこう呼んでいる

雪の反乱と

「ただい……ま？」

学校が終わり家へと帰って来た俺は、ふと奇妙な感覚に捕われた

言うならば、他人の家へ来た時に感じる居心地の悪さ

「……ま、まさか」

俺は過去に二度この感覚を味わった事がある。この張り詰めた風船のような空気は……

「おかえり、お兄ちゃん」

奥で掃除をしていたのか、廊下の角から雑巾で床を拭きながら雪葉は俺を向かえた

なんだ、普通じゃないか

「ただいま雪葉。掃除ご苦労様」

「うん、お帰りなさい。あ、お掃除の邪魔だから雪葉の視界から消えて欲しいな♪」

にっこり笑顔

「うぐっ！？」

俺の精神に７００００のダメージ！

「そ、そうだ、ちょっと一休みしてソフトクリームでも食べないか？　兄ちゃん買って来るよ」

「ありがとう、お兄ちゃん。でも今はお掃除中だから話し掛けないでね」

超にっこり笑顔！

「……は、はい」

来た……

来た！！

雪の反乱が！！

「あ、そ、そうだー。僕、秋姉の部屋へ行って来よー」

ぎくしゃくする手足を無理矢理動かし、俺は玄関から近い秋姉に部屋の前へと立って……

「また勝手に開けるんだね、お兄ちゃんは♪」

グサッ！

心にナイフが突き刺さる

「あ、ああ、そうだね。は、春菜さん入っても宜しいでしょうか？」

しーん、と静まり返る廊下

「春菜さん？」

「春お姉ちゃんならまだ帰って来てないよ、お兄ちゃん」

にっこり

「……そ、そう。じゃあ僕、お部屋に戻ろうかな」

「うん！　もうずーっと出て来ないでね、お兄ちゃん♪」

素晴らしい笑顔で雪葉は言い、洗面所へと入って行った

「……グス」

泣いてなんか、いないやい。これは只の花粉症だい

雪の反乱　2

「ごはんですよ～」

雪葉の言葉通りに部屋で引きこもる事、三時間。　桃屋の商品名みたいに母ちゃんが夕食の時間を知らせてくれた

「よっこらせ」

立ち上がるのに掛け声が必要になって来た身体が悲しい

雪葉の機嫌は直っているだろうか？

俺は部屋を出て、リビングへと続くドアを開ける

「うっ！」

ピリ……ピリピリ！

肌を刺すような緊迫感

テーブルの椅子に、三人の姉妹達は無言で座っていた

「……」

「……」

「……」

食事中は話し掛けない限り喋らない秋姉はともかく、やたら賑やかな春菜すら怯えるような表情で俯いていた

「……き、今日は天丼とうどんですか」

同じ側の手足を同時に出しながら歩き、席へと付く

「うわぁ、美味しそうだな。あはは」

しーん

「い、いただきまーす」

「ん、……お茶」

秋姉は立ち上がり、キッチンへ向かっていった

「……」

「……」

「……」

残された俺と春菜と雪葉

静まり返る食卓で、さくさくの天ぷらを食べる音だけが響く

「……は、春菜。今日は学校楽しかったかい？」

沈黙に耐え切れず、春菜に話し掛けると、春菜は止めてくれ～っと

いった風な困り顔をした

「ゆ、雪葉は学校どうだった？」

「うん。トイレが男の子と女の子、別になってるから安心して入れたよ♪」

「そ、そう……」

しーん

ガチャ

気まずい雰囲気の中、秋姉が四人分のコップと麦茶の入ったボトルを持って戻って来た

「……はい」

「あ、ありがとう」

秋姉から麦茶を受け取り、カラカラに渇いた喉に注ぎ込む

「……ふぅ」

一息で飲み干し、改めて姉と妹達を分析

秋姉は一見いつも通りに見える。だが、時折雪葉と俺を心配そうに見ている

春菜は怯えている。実は我が家で一番気が弱い春菜さん。この空気

に耐えられないらしい

雪葉は、にこにこしているが、間違いなく怒っている。正直とても怖い、泣きそうだ

「……」

「……」

「……」

「……」

無言の食事はつつがなく進み、皆、食べ終えてしまう。最後にお茶を飲み干せば、各自部屋に戻ってしまうだろう

その前に何とかしなくては！

「あ、秋姉？」

「……なに？」

「今度の日曜日、プールに行こうか」

ぴく。雪葉の髪が揺れる

「ん……日曜日」

秋姉は考え込む

乗って来てくれ、乗って来てくれー！！

「……いいよ」

やった！

「春菜も行くだろ！」

「あ、ああ……良いぜ」

ちらっと雪葉を見ながら気まずそうに頷く

「ゆ、雪葉は……」

「行かないもん！」

ぷくーっと膨れる雪葉さん

「お、俺、雪葉と行きたいなぁ」

「お姉ちゃん達と行けば良いよ！」

「雪葉が来ないなら行かないさ」

「……行こう？」

「た、たっのしいぞ～！　夏姉も誘ってさ」

「ぜったい行かないもん！」

膨れっ面のまま、ぷいっと横を向いてしまう雪葉。
小細工が悪かったのか、益々怒ってしまったようだ

こうなったら最後の手段しかないか……

「雪葉……今朝はごめん。兄ちゃんの事、許してほしい」

素直に謝る。これが最終手段だ

「……はい、お兄ちゃん」

雪葉は元気無く頷いた

雪葉はどれだけ納得いかない事でも、俺が真剣に謝ると許してしまうのだ

出来れば、機嫌を良くしてから謝りたかったんだが……

「……プール、一緒に行ってくれるか？　機嫌取りたかったってのもあるけど、本当に雪葉と行きたかったんだ」

「……行く」

こくんと頷く

「母さんも行くわ～」

良すぎるタイミングで、キッチンから出て来る母ちゃん。手にはトレイを持っている

「イチゴのアイスよ～」

デザートらしい。ちなみにイチゴは雪葉の大好物だ

「あ、イチゴのアイス」

雪葉は嬉しそうに笑った。やっと見れた本当の笑顔

「流石母ちゃん……」

やはり最強は母ちゃんか？

「美味し～」

一口食べて、にっこり

「……ふふ」

やっぱ怒っている時の笑顔より、今の方がずっと可愛いぜ雪葉！

今日の過保護

俺

「雪葉、あ～ん」

「は、恥ずかしいよ、お兄ちゃん～」

綴喜郡

第７９話：秋の水泳教室

「うわ！　なんだあのエロいお姉様は！？」

「うぉう！　こっちは美女だ！！　締まった身体が美しいクール美女だぁああ！！」

「美少女がいるぞ！　あっちに健康的な美少女がいるぞー！！」

「か、可愛い……。可愛いすぎよ、あの女の子……」

「オーウ、ナイスなボディの美しいオバハンが居ますねー。でもちょっと年増えん！？」

此処は、ちょっとお高いホテルの屋上で、温水プール場

その広いプールに、ぷかーっと浮かぶ屈強な黒人男性。

彼に、さっき母ちゃんが椅子を投げつけた気がするが、きっと気のせいだ

「ふぅ。まだ六月だと言うのに暑いわね」

夏紀姉ちゃんは天井を見上げた後、ビーチパラソルへ向かって行った。どうやらあの女は泳がずに眠るらしい

「しかし確かに暑いな」

天井は紫外線をカットするガラスになっていて、日焼けを殆ど気にせず太陽の光を体全体に浴びられるのだが、ギンギラギンに輝く太

陽が真上にあるのだ、暑くない訳が無い

「し、しかし、なんなんだこの人達は……モデルか何か？」

「うぉー！　レベルが違いすぎて目がいてー！　同じ空気も吸えねー！！」

さて、この騒ぎは何なのか？　それは俺達のせいである。水着姿の姉妹達は目立つのだ

「そ、そしてその中にただ一人男が……」

ふ、俺の事かい？

「な、何者なんだあの、目が死んでいる男は……」

「死んでねぇよ！！」

元気です！

「こら、そこの死人」

ビーチチェアに寝そべる夏紀姉ちゃんが俺を手招きする

「死んでないって！」

だが素直に行く俺が可愛い

「サンオイル塗りなさい」

「春菜さ～ん。出番ですよ～」

「オッシャー！　プール最高！！」

春菜は準備体操もそこそこにプールへと飛び込んでいった

「早く塗れ」

俯せになってビキニの上を外す姉。

自分で塗りやがれ、この馬鹿姉！　と、一喝してやりたいが、言った瞬間、俺の口にサンオイルと言う名の琥珀色な液体が注ぎ込まれるだろう

「はい、お姉様」

長いものには巻かれる。それってとっても素敵な生き方やん？

ともすればこぼれ落ちそうになる涙を堪え、俺は夏紀姉ちゃんの背中にサンオイルを塗る

「満遍なく塗りなさいよ。もし僅かでも日焼け後が見つかったら……」

「み、見つかったら？」

「……いなばの白兎」

夏紀姉ちゃんは謎の言葉を残し、目を閉じる

何だか良く分からないが、失敗は許されない。俺の本能がそう告げ

た

米に文字を描くような繊細さで姉の身体にオイルを塗る事に成功した俺

夏紀姉ちゃんは途中で寝てしまったので、後は放置しておこう

「さてと……」

つっこむべきか、どうするか……

先程からプール端で体育座りをしているもう一人の姉を見て、俺は悩む

「……よし」

一応言っておいた方が良いだろう。もしこの先、秋姉が誰かにプールへ誘われた時、恥をかいてしまうかもしれない

「あ、秋姉？」

近づき声をかけると、秋姉は顔を少し上げて俺を見つめ、どうしたの？　と、微笑んだ

「……死ねる」

「え？」

「あ、いや！　そうじゃなくて……あ、秋姉？」

「なに？」

「な、なんでスクール水着なの？」

「ん、学校指定。変……かな？」

自分の胸元を見て、少し困ったように言う秋姉

「へ、変じゃないよ！　や、やっは時代は学校指定だよね～」

ええじゃないかスクール水着！　文句があるなら文部省に言えや！！

「……よかった。私、プールに来たこと無いから、変なのかもって思った」

そう、秋姉は俺が知っている限りプールや海に行った事が無い。もっとも俺も余り無いけど

「良く似合ってるよ、秋姉」

何となくエロく見えるのは、俺の邪念のせいだ

「……ありがとう、恭介」

にこっ

「グワアアア！」

太陽の下で見る秋姉の微笑みは、吸血鬼すら溶かす

「き、恭介！？」

「だ、大丈夫、大丈夫」

危うく灰になる所だったが……

「……本当に大丈夫？」

「う、うん。げ、元気一杯さ！」

吃る俺を、秋姉は上目使いで心配そうに見て……

「貴方に何かあったら……やだよ？」

「逝ってきまーす！」

灰になる前にプールへ飛び込みました

秋の水泳教室　3

さて、プール。十人前後がノンビリ泳いでいる中、春菜がサメのような勢いで泳いでいた

「ウォォォォー！」

「……はぁ」

いつまで経っても子供だな

俺は前に回り込み、突っ込んで来る春菜を止める

「うわ！？　何すんだよ兄貴！！」

「少し落ち着け！　他の人迷惑になるべさ！！」

もっとも遠巻きに眺める客達は、春菜の豪快な泳ぎに見入っていたようだが

「別に迷惑掛けて無いだろ？　泳いでるだけだし。それより離せよ！」

暴れるサメ、もとい春菜

「まったく。仕方ない奴だな」

久しぶりにあの技をやるか

「くくく」

「あ？」

奴は今、セパレート水着な為、自分の急所が丸見えなのが分かっていない

俺は暴れるサメ、もとい春菜の急所（へそ）に指を入れる

「ひゃん！？」

「くくく、どうだ」

「や、止めろよ！！」

「ほう、まだ逆らうか」

「あ、やあ……んあ！　……も、やめ……て……あ、謝るからぁ」

力を抜かし、くたっと俺にもたれ掛かる春菜

そして何故か前屈みになったギャラリー達

「ふ、正義は勝つ」

春菜を解放した瞬間、蹴りが飛んで来ました

「グハッ！？」

俺のテンプルに９５のダメージ

「ひ、人前でやるなよ馬鹿兄貴！　二人だけの秘密だろ！？」

（訳：弱点が姉ちゃんとかにバレるじゃないか。隠してんだぞ！）

「大丈夫だって。今更隠しても仕方ないだろ？　お前に入れるのは俺だけだ」

（訳：こんなくだらねー事する奴、俺しかいないべさ）

「もうやらせないから！」

（訳：もう不覚はとらないぞ！）

「くく。今、すぐにやってやるよ」

（訳：この兄に勝てるかな？）

「くっ……や、やれるもんならやってみろよ！　あ……で、でもやっぱり家でしようよ……ね、兄貴？」

（訳：こんな場所でこんな格好じゃ不利すぎる。家なら絶対に負けないからな！）

「くく、良い度胸ウガンダ！？」

突然プールサイドから中身の入ったペットボトルが飛んで来た。俺の顔面に１６０のダメージ！

「こ、このゲダモノが……」

顔を押さえながら見上げると、プールサイドから俺を見下ろす哀しみを含んだ鬼の目と合う

「え？　な、なに？　なんなの？」

「……良い。何も言わなくても良い。二人はもう大人、アタシは全て受け入れるわ」

「な、夏紀姉ちゃん？」

「だから死ね！」

夏紀姉ちゃんは片手で自分の身長近くあるビーチチェアを軽々と持ち上げ、それを俺に向かって！？

「……落ち着いて」

いつの間にかの秋姉が、夏紀姉ちゃんの後ろから椅子を押さえて止めてくれた！

「離しなさいアキ！　妹に手を出すあんな変態、もうアタシ達の弟じゃない！！」

「……落ち着いて」

「アタシのパンツを被って、部屋で小躍りするぐらいならまだ可愛いげがあったのに……」

した事ないって！

「……落ち着いて」

ぎりぎりぎりと、万力を閉めるような音がする

秋姉が持つ椅子のスチール部分が飴みたいに曲がっているが、きっと気のせいだ

「……いつかはこうなると思っていたわ。でも妹に手を出すなんて……。もうアイツを殺してアタシも死ぬしか……」

「……おちついて？」

「ひっ！？」
「ひっ！？」
「ひっ！？」

口調や表情は変わらないが、秋姉の雰囲気は今、確かに変わった！

「……誤解だから」

夏紀姉ちゃんから椅子を奪い、優しく諭す秋姉

俺達三人が震えているのは、きっとまだ六月だからさ

んでもって数分後

「……落ち着いた？」

「はいっ！」

「はいっ！」
「はいっ！」

直立不動で整列する俺ら。一糸乱れぬ動きだ

「……もう暴れたら駄目だよ？」

「はいっ！」
「はいっ！」
「はいっ！」

「ん。じゃあ解散」

「ありがとうございました！」
「ありがとうございました！」
「ありがとうございました！」

秋姉は振り返り、もと居た場所へと帰っていった

「恐かった……恐かったぞ兄貴！」

「……よしよし」

震える春菜の頭を撫でる

「いや、震えているのは俺の手か……」

やはり秋姉が一番強く、鬼の血を継いでいる

「で、その鬼……い、いや、母ちゃんは？」

「あっち」

春菜が指差す方を見ると、母ちゃんはひざまずく黒人達に囲まれ、優雅に紅茶を飲んでいた

「……」

見なかった事にしよう

「それじゃ雪葉とも遊んで来るかな」

「……弄ぶだ？」

「なにその変換！？」

秋の水泳教室　4

睨む姉を無視し、俺はプールの隅っこで足をちゃぷちゃぷさせている雪葉の元へと行く

「雪葉」

「あ、お兄ちゃん」

雪葉はホッとした様に言う

「どうした雪……葉？」

声を掛けるまで気づかなかったが、雪葉の半径５メートル内に数人の監視者がいる

「ううん、分からない。……少し怖い」

雪葉は怯えた声を出し、ギュッと俺の足に抱いた

「何だか良く分からないが……大丈夫だ。何があっても、兄ちゃんが守るからな」

「お兄ちゃん……」

「いや、兄は俺だ！」

「いやいや、僕も兄だ！！」

「いやいやいや、私こそが兄だ！！！」

兄妹の感動的なシーンの最中、遠巻きだった周りは突然俺達に向かって集まり出す。目は血走り、声も上擦っている

少しと言うか、かなり怖い

「……ず、随分兄弟が増えたな、雪葉」

「ゆ、雪葉の知らない人達だよ？」

「妹～妹～」

「うふふ～妹だ～僕の妹だ～」

「お兄ちゃんと呼んでおくれ～お兄ちゃんだよ雪葉ちゃ～ん」

「お、お兄ちゃ……」

怯える雪葉。此処は俺が守らなくては！

「ゆ、ゆ、ゆ、雪葉にち、ち、ち、近寄、よ、よよ」

「い～も～う～と～」

「あ～あ～あ～」

「あ～お～あ～お～」

水中からゾンビの様に手を伸ばす変人ども

恐すぎる！！

「待ちたまえ！」

その時、プール内にヒーローの声が響いた！

「誰だ！」

「何処に居る！？」

「あ！　あそこだ～！」

変人どもの指差す方を見ると、入口からブーメランビキニの紳士が現れた。股間様がはみ出ている

「な、何者だ、あの紳士は！？」

「あ、あれはＳＩＳＴＥＲ愛好会一番隊隊長、山口　真さん！？」

「此処は私が仕切ろう」

颯爽と歩む股間様。変態だ

「つ、遂にＮＩＧＨＴが現れおった……現れおったぞ～」

「我等を導いて下され～」

盛り上がる彼ら

「……」

「……」

無言の僕ら

「……行こうか雪葉」

「……うん、お兄ちゃん」

とりあえず警察に連絡しておこう

「我等は自由の騎士だ！　例えば身体は縛られても心は縛られん！」

「はいはい、いい子でちゅね～。臭いメシ食って早く社会復帰するのでちゅよ～」

１０分後、寝そべっている夏紀姉ちゃんの側でトロピカルジュースとアイスを食べながら拘束される騎士達を見送る

「平和だね～」

「お兄ちゃん、あ～ん」

「こ、こら恥ずかしいじゃないか！」

「この間の仕返し♪」

「……ふふ、参ったな」

照れながら口を開けて、雪葉のスプーンからアイスを食べると……

「……アンタらってつくづく大物よね」

姉が呆れていました

秋の水泳教室　5

「お、一昨日、雪から誘われたプール場に着たわ！　来たのはあくまでも雪に誘われたからで他に理由は無いけどっ！」

雪葉と食べ合いっこしていると、入口から棒読みすぎる声がした

「ん？　あれは……」

入口を見ると、何処で見た事がある白いローライズビキニ姿の小学生ってか花梨

「あ、あら奇遇ね。最近会わなかったから、死んでるのかと思ったわ！」

花梨は俺達に近付き、早速イヤミを言ってきやがりました

「お前ね……ってお前、ビキニは早……？」

あれ？

「……な、なによ？」

「い、いや、なんか違和感が……」

腕を前に組み、何故か恥ずかしそうに視線を逸らす花梨さん。その胸には谷間が……

「……お前その歳で胸パットン！？」

腹部に強打！？

「使ってない！」

「い、いや、だって雪葉より……」

「雪葉より何？　……おにぃちゃん？」

雪葉の目がギラリの光り、口許には三日月のような笑みを！？

「な、なんでも無い……です」

「だよね♪　こんにちは、花梨ちゃん！　来てくれたんだ！！」

「ええ。誘われた時に返事出来なくてごめんなさいね」

「ううん、来てくれてありがとう！　あ、でも美月ちゃん達はやっぱり来れなかったんだ」

「いいえ、一緒に来てるわ」

花梨が入口を見るのと同時に、元気一杯な声がプール内に響いた

「兄ちゃん～！！」

「お！　美月！！」

青と黒の線を使った、涼しげな柄のタンクトップビキニ、俗に言う

タンキニを着た美月が、手をぶんぶん振りながら小走りてこちらに向かって来る

「こらこら、危ないぞ。しかし美月もビキニか」

小学生がビキニ……。兄ちゃんカルチャーショックだぜ

「……っ！？」

美月をぼーっと見ていると、凄まじい殺気が直ぐ傍からした

「美月ちゃん、おっきいでしょ～。ねぇ……お兄ちゃん？」

「嬉しそうに胸ばかり見て……通報するわよ？」

「いやいや！？　見てねーよ？　美月なんか見てねーよ！！」

どんな誤解やねん！

「……兄ちゃん、わたしの事見てくれないの？」

俺の傍まで来た美月は足を止め、大きな目で不安そうに俺を見つめる

「い、いや、美月最高！　もっとお前を見せてくれ！！　俺はお前の胸が大好きだ！　（混乱中）」

「変態が！！」

「アクエリアスっ！？」

再び中身の入ったペットボトルが俺の後頭部にヒット。１０７のダメージ

「あ！　なっちゃん！」

「久しぶりね美月。後、花梨ちゃんだっけ？　この変態はほっといて少し泳ぎましょ？」

「うん、いいよ！」

夏紀姉ちゃんは起き上がり、俺に素晴らしく冷たい目を向けた後、美月を連れてプールへと入っていった

「あ、あの超ズボラな夏紀姉ちゃんを動かすとは……流石美月」

「……」

「……」

「……え？　何、この冷たい視線？」

「あたし達も行きましょう、雪」

「うん。お兄ちゃんなんかと遊ぶより、夏お姉ちゃん達と遊んだ方が楽しそうだもん」

「な、なんか……」

花梨と雪葉は、戸惑う俺を置いて夏紀姉ちゃん達の方へ行ってしまった

秋の水泳教室　6

「……所詮男は孤独な旅人か」

花梨達に取り残され、一人佇んでいると、風が吹いた

その風は爽やかな夏の気配感じる、一陣の風

「……風子か」

俺は振り返らず、風の名を呼ぶ

「相変わらずだね、お兄さん」

「秋姉の試合以来か？」

「そうだね。会いたいと思っていたけれど、偶然を頼っても中々会えないものだね」

「今日も偶然だろ？」

俺はゆっくり振り返る

「必然さ」

風になびくストレートロングの髪を軽く押さえ、微笑む風子

「会いに来たよ、お兄さん」

「お前はスクール水着か」
兄ちゃん少しホッとしたよ
「僕は美月ほど身体に自信が無いからね」
「……お前ら小学生だべさ」
そこまでの差は無い
「しかし風が強いな」
建物の中なのに
「空調だね。換気をしているのだと思うよ」
「……」
夏の気配とか言っちゃたんですけど
「ま、取り敢えず雪葉達に混ざって少し泳ごうぜ。上がったら何か奢ってやる」
「ありがとう。でも僕は遠慮しておくよ」
「そうか？」
「僕は泳げないんだ。あそこで座っている秋さんと同じで」
一人ぽつんと体育座りしている秋姉を見ながら、風子は言う

「良く分かったな」

そう、秋姉は泳げない

「同病相哀れむ。そんな言葉があるね」

「……な、なるほどな。そういう事か」

意味は分からんが、取り敢えず頷いておこう

「どのレベルで泳げないんだ？」

ちなみに秋姉は浮かばない

「水に顔を付けられないぐらいかな」

「なるほどな」

なら顔さえ付けられるようになれば、意外と早く泳げるようになるかも知れない

「……少し練習してみるか？」

「お兄さんが教えてくれるのかい？」

「ああ。よかったら、だけどな」

「ふふ、良いも悪いも無いよ。お兄さんに言われてしまったら僕の答えは一つさ」

風子は言葉を区切り、

「お願いします、お兄さん」

子供っぽく、ぺこりと頭を下げた

んで、始まる水泳教室

この際、秋姉や雪葉達も巻き込んで、まとめて教え込もう

「……う～む」

泳ぐ雪葉達を見て、俺は脳内で表を作る

能力表（ランクはAに近い程、泳げる可能性が高い）

・夏紀姉ちゃん

泳げない。泳ぐ気が無い、むしろ泳ぎたく無い？　邪魔にならないようにどっかで寝てて欲しい。ランク外

・秋姉

泳げない。何故か水に浮かばない。やる気はあるし、運動神経も良いので基本を教えれば、きっと泳げる。ランクC

・花梨

泳げる。多分俺より泳げるが、微妙にフォームがおかしい。なんか田舎の川で、魚とか採って暮らせそうな泳ぎ方をする。ランクＡ＋

・雪葉

ごく普通に泳げる。これだけ泳げるなら全く問題無い。背泳ぎが出来ないようなので、それだけ少し教えよう。ランクＡ

・美月

花梨程じゃないが、泳げる。クロールのフォームは花梨より美月の方が遥かに良い。てか花梨は何であれであんなに早く泳げるんだ？

ランクＡ

・風子

カナヅチ。全く泳げないし、泳げそうも無いらしい。水が嫌い？とりあえず顔を水に付ける練習から始めよう。ランクＤ

・春菜

もはや人じゃない。コメントしようが無い。理屈じゃなく、感覚で泳いでいる感じなので人に教えるのは無理だろう。ランク付け不可

・母ちゃん

不明。泳げても、泳げなくても不思議じゃない。例え水の上を歩いても、俺は納得してしまうだろう。ランク付け不可

「うむ」

俺が風子と秋姉、美月には雪葉と夏紀姉ちゃんを任そう

夏紀姉ちゃんも美月には逆らえまい

「さて、やるぞ風子！」

「ふふ。熱血なお兄さんも好きだよ」

俺は風子の手を取り、プールへと入った

秋の水泳教室　7

「では水に慣れる所から始めましょう」

美月と相談し、始まった水泳教室。美月達はプールの右端、俺達は左端のスペースを使い、訓練開始

「先ず、水に顔をつけてみよう」

「……」

「ん」

俺の担当する生徒は秋姉と風子の二人。秋姉はあっさり水に顔を付けたが、風子は水を見たまま動かない

「大丈夫か、風子？」

「……全ての生命は海と言う水から生まれたと言うね。僕もまた、羊水と言う水から生まれた。なら水は僕らの故郷であり、母。……でもね、人は本能的に水を恐れる。それは自分の存在、自己足るファクターが……」

「早い話し、水が怖いのか？」

「……うん」

「風呂とか入る時、顔を水に付けられるか？」

「……うん」

「なら水そのものが苦手な訳じゃないんだな。よし、それじゃ俺の手を握ってみな」

「うん」

「一、二の三で、ゆっくり潜るぞ。俺も一緒だから」

「……一緒」

「ん？」

「……やってみるよ」

「ああ！」

まだ水に恐れを感じている雰囲気だが、風子はしっかりと頷いた

「……よし。一、二の……」

ギュッ

目を閉じ、俺の手を強く握る風子

「三！」

さて、どうかな？

水中で目を開けると、風子もまた水の中にいた。よし、大丈夫そうだ

風子の手を、ちょっと強く握る

「……」

その刺激を受け、恐る恐ると言った感じだが風子は目を開けた

「……」

「……」

俺が頷くと風子もまた頷き、ぎこちないながらも笑み浮かべた

「……ぷは」

「ふぅ。……良く頑張ったな風子」

水中から顔を上げ、俺もニッコリ

「……簡単だった」

「だろ？」

「あれだけ水が苦手だったのに、お兄さんと一緒だと簡単だった……。お兄さん。やっぱり僕は、お兄さんが好きみたいだよ」

「ありがとよ。俺も好きだぜ」

花梨も美月も……と、鳥里さんも良い子ばかりだ

「……ふふ。やっぱり僕はまだ子供なんだね」

「そうか？」

俺が小学四年生の頃は、もっと絶望的にガキだった気がするが……

ノスタルジックに浸っていると、風子は妙に大人っぽい表情を浮かべ、

「三年後。きっと僕は同じ言葉を言うよ。その時は覚悟していて欲しいね、お兄さん」

と笑った

「良く分からないが……オッケーだ。よし、じゃあ次はバタ足の練習でもするか」

「そうだね……今日は此処までにしてもらっても良いかい？　一度に色々覚えてしまうと、身体が驚いてしまうよ」

「そうか」

「ふふ。お兄さんのお陰で心拍数も高い。……それじゃ僕は雪達の様子を見てくるよ。お兄さんは秋さんと二人で頑張って」

そう言い、風子は雪葉達の方へと向かって行った

「って、凄いな秋姉は！？」

まだ潜ってるぜ！

「……ふぅ」

驚愕と尊敬の眼差しで見ていると水が揺れ、秋姉が顔を出した

水に濡れたくせ毛一つ無い漆黒のセミロングヘアーが、太陽の光を浴びてキラキラと輝く

「……美しい」

「？」

「あ、えっと……す、凄いね秋姉！　二分以上水に潜ってなかった？」

凄い肺活量だ！

「……ちょっと苦しかった」

照れた様に微笑む秋姉

「……最高」

プール最高！

秋の水泳教室　8

「そ、それじゃ練習しようか」

喜びに浸るのは止め、今から俺は鬼教官だ！

「そうだね……。両手を支えるから、秋姉は顔を水に付けてバタ足してくれるかい？」

「……うん」

「よし。じゃあやろう」

両手を差し出すと、秋姉はそっと握った

「……プール最高」

「え？」

「い、いや！　それじゃ顔を付けて！」

「ん、……」

水に潜った秋姉の両手を支え、引率する。始めは戸惑っていたが、次第に足は、バタ足っぽくなっていった

「うん、上手いよ秋姉」

長い足が、水と優雅に舞う。流石秋姉、僅か数十秒でパーフェクト

でビューティフルなバタ足だ

「この分なら直ぐに泳げる様になるね。……秋姉？」

秋姉は休まずバタ足を続ける

「秋姉？　息継ぎしなくて大丈夫？」

バタバタ、バタバタ……バタ……

バタ足が止まった

「あ、秋姉？」

「……ぶくぶく」

「秋姉！？」

溺れてる！？

「こほ、こほ」

慌てて抱き起こすと、秋姉は苦しそうに咳込んだ

「だ、大丈夫！？」

「こほ、……ん」

背中をさすりながら尋ねる俺に、秋姉はコクンと頷く

「良かった……。あまりに綺麗なバタ足だったから溺れてるとは思わなかったよ」

「……ごめんね」

シュンとする秋姉

「わ、悪いのは教え方が悪い俺だよ！　ええい、俺め！　ちょっと泳げるからって調子に乗りやがって！！」

秘技、一人喧嘩！

「……恭介の教え方は分かりやすいよ？」

秋姉は俺の手を掴み、再び水に顔を付ける。そして華麗なるバタ足

「……ね？」

バタ足を止め、顔を上げた秋姉は優しく微笑んだ

この微笑みだけで俺は、ドーバー海峡を三往復できる

「あ、ありがとう」

礼を言いつつ確認。

俺の姉は世界一だ！

「ビ、ビール……ビールを……」

世界七億六千二十七位ぐらいの姉がフラフラとこちらへ近寄って来る

「なっちゃん、プールでのお酒は危ないよ。麦茶のも？」

その後を美月が追い、夏紀姉ちゃんの手を取った

「うぅ、的確なアドバイス……」

ガックリと肩を落とし、とぼとぼと歩く夏紀姉ちゃん。背中に哀愁が見えるぜ

「お疲れ美月。今日はこの辺にして、後は適当に遊ぼう」

夏紀姉ちゃんも限界だろうし

「え？　う～ん……うん！　なっちゃん、良く頑張ったね！　もう少しすればきっと泳げるよ！」

「あ、ありがとうございました教官……」

ニッコリと笑う教官に、駄目生徒は弱々しく笑いフラフラとプールサイドへと向かっていった

「雪葉達も一度上がれ～休憩だ～」

「は～い！」

泳げるようになったらしい背泳ぎを中断させ、元気良く返事をする雪葉

どうやら機嫌は直ったようだな。ふ、可愛い奴め

「よし、みんな上がったな！　タオルで身体をふけ～」

みんなが上がった所で、仕切だす俺。今日は俺がリーダーだ！

「坊ちゃま、タオルでございます」

「へ？　ど、どうも……」

黒人さんが慇懃に頭を下げ、タオルを下さいました。周りを見ると、他の黒人さん達が雪葉達にも配っている

「ご苦労様、ブレック～」

ヒラヒラと手を振る母ちゃん

「は！　マダムバタフライ」

黒人さんはひざまづき、胸に右手を当てて母ちゃんに忠誠の敬礼

「……この人達に何をしたの母ちゃん？」

まさかマインドコントロール……

「にーちゃん！」

「おに～ちゃん」

完全に黒人達を掌握している母に怯える俺の両腕に、雪葉と美月が

抱き着いた

「こらこら歩き難いべさ」

「ジュース買いに行こうよ～」

お、甘えっ子モードだ

「おうよ。じゃ行くぞ～」

「うん！」

「僕も良いかい？」

「おう、ついて来いや風子！」

まとめて奢ってやらぁ！　……ジュースを

「ふふ。……僕がお兄さんに抱き着けそうなスペースは無いね。残念」

「ん？　おんぶしてほしいのか？　良いぜ」

何か教育番組に出てくるお兄さんみたいで、良いかもしれん

「……やっぱりお兄さんは少し女の子の勉強した方が良いね」

「ん？」

良く分からんが、おんぶは要らないらしい

若干残念に思いつつ、三人を連れてプール外にある自動販売機に向かうと、途中でちょんと引っ張られた

「……君は何故、私の海パンを引っ張るのだね？」

振り向くと、花梨さん

「っ！？　べ、べつに意味なんて無いわよ！！」

プイっとソッポを向く花梨さん

「って、なんで逆ギレ！？」

イジメ！？

「……まぁ良い。花梨もついて来な」

「え、偉そうに言わないでよ！」

と言いつつ、ついて来る所は夏紀姉ちゃんに良く似ている

「おら、早くビールを注ぎなさい！」

向こうで黒人に命令している夏紀姉ちゃん

「あ、あんなのに似ていて良いのだろうか……」

将来が心配だ

「兄貴～。私は、かき氷食べたいぞ！」

ジュースを買ってプール場に戻ると、妹がたかって来ました

「お前ね……」

「ふぁ～美味しかった～ありがとうお兄ちゃん！」

「ふふ。ありがとう」

「ありがとうな、兄ちゃん！」

「の、飲んであげたわ！　感謝しなさい！！」

「あ、ああ。ありがとう？」

一人おかしい奴が居るが、こんなジュース一つで感謝されると照れてしまうな

「じゃ遊んで来な。後、一時間ぐらいで帰るから」

「はーい！」

缶をゴミ箱に棄て、元気良く子供プールへ向かう子供達

「若さ……か」

なにもかも懐かしい

「ソフトクリームでも良いし」

「お前ね……」

「ああん!?　これ発泡酒じゃない！　ああ、もう使えないわね！　恭介、ビール持って来なさい！！　エビスを五秒以内で！」

「……」

姉が無茶を言っています

「アイスでも良いんだ、兄貴」

「……」

「遅い！　二秒経ったわよ！　後三秒！！」

「……ジュースでも良いよ?」

「……」

誰か助けて……

「さっきからなんなんだよ、あの死んだような目をした男は。美少女や美女達に囲まれて……ハーレムか！?」

「う、羨まし過ぎる」

「……羨ましいだと?」

代わりたいなら代わってやるよ！　地獄だぞ！！

「後二秒よ！」

「は、はぃい！　春菜、五百円やるからアイス買って来なさい！！」

「サンキュー！」

「釣りは返せよ～」

春菜に金を渡し、走り出す俺

「後一秒！」

北斗神拳並に怖いカウントダウン。もう間に合わない、俺は死んだ……

「はい、姉さん」

「ひぃ！？」

いつの間に用意したのか、生ビールをオボンに乗せた秋姉が夏紀姉ちゃんに差し出した

「あ、ありが……と」

段々と小声になって行く姉

「……余り無茶を言ったら駄目だよ？」

「すみません！！」

直立不動のイエッサー！

「た、助かった……」

冷や汗でびっしょりになった顔を腕で拭きつつ、秋姉にお礼を言うべく近寄る

「ありがとう、秋姉」

「ん。……はい」

秋姉は、まだ使っていない自分のタオルを手に取り、俺に差し出した

「え？　な、なに？」

「汗……冷えちゃうよ？」

秋姉は優しく俺の顔を拭く

「あ、ありがとう」

「兄貴～、二つ買って来たから一緒に食べようぜ！」

アイスを掲げ、戻って来た春菜

「ありがとよ」

ホームランバーか

「お兄ちゃん、遊ぼ～」

ビーチボールで遊んでいる雪葉達

「……む、無理言って悪かったわね」

ちょっと反省中の夏紀姉ちゃん

「恭介～母さん腰いたい～」

腰痛発生の母ちゃん

「全く……」

俺はみんなのパシリかって

「……やっぱ代わってやれないな、こりゃ」

俺じゃないと、この人達はまとめられないぜ！

今日の筋肉痛

夏＞＞＞＞＞俺＞風＞母＞＞雪＞月＞花＝秋＝春

津軽

第８０話：父の勇者（前書き）

久しぶりな父。家族ほっといて何やってんですかね、この人……

第８０話：父の勇者

前回のあらすじ

数々の苦難や友の犠牲の末、遂にオルテガを滅ぼした黄金の勇者佐藤

オルテガの家の地下で捕まっていたアルテルや女達を救い出し、村へと帰る

喜ぶ男、泣く女達

ようやく村に平和が訪れた。誰もがそう思っていた

その時、誰かが悲鳴を上げた

「な、なんじゃ、あの全てを飲み込まんばかりの暗黒なる雲は！」

おののく村長

「お、おか～ちゃ～ン」

泣き叫ぶ子供

「いや～今日はパチンコフィーバーしただ～」

空気を読んでないオッサン

村人達は空に異様な勢いで広がってゆく、闇よりも暗き雲に本能的な恐怖を覚えた

その雲の形が変わってゆく

男の顔に

女の顔に

二つの顔を作り出す

「未来」

深い声の男

「過去」

甘い声の女

「そして今」
「そして今」

重なり合う声

「生きる者」

「死した者」

「生死を超越した者」
「生死を超越した者」

歌う様に、唸る様に、恫喝するかの様に
「私はオルテガ。女であり」
「私はオルテガ。男である者」
二つの顔は尚も歌う
「神を滅ぼし」
甘く
「人を滅ぼし」
厳かに
「そして――」
この者はオルテガ
世界の敵、星の脅威、宇宙の暗黒
そして
「全てを滅ぼそう」
「全てを滅ぼそう」
全てを滅ぼす者

「なら僕は……全てを、家族を守ろう」

今、世界を……いや、星の運命を賭けた最後の戦いが始ま……

って良いのか？　めんどくさいぞ

世界が……って言うか村はオルテガの悪意とかそんな感じのなんか

超すげー力で黒く染まり、一寸先も見回せなくなる。その闇の中、

佐藤の持つ剣が光り輝いた

それは闇を切り裂き、照らす。そう、命の輝き

「ヌウウウウ！　それはエクスカリパー！！」

闇の顔の一部を光によって奪われた男は、剣の輝きに恐怖の声を上

げた

「佐藤……。黄金の勇者佐藤。貴方こそが私の最後の障害」

女は静かに呟き、

「そして最後の友よ」

と男が言葉を結ぶ

「……オルテガ、君を止める」

「止めてみせよ」

「消してみせよ」

「救ってみせよ星を！」「救ってみせよ星を！」

二つの顔は混じり合い、一つの怪物を作り出す

それは空の海を泳ぐ、オカマ。不浄なる暗黒世界の支配者

「さぁ、始めよう佐藤よ。人と岡魔、最後の戦いを」

「……みんな」

ごめんね、みんな。どうやら僕は帰れそうに無い

『お父さん、お仕事頑張ってね！』

雪葉。

『な、肩揉んでやるよ、親父！』

春菜。

『……ん、お弁当。食べて』

あ、ありがとう秋

『酒よ～朝まで飲むわよ父さん』

ほ、程々にね夏紀

『あなた～卵買って来てくれる～？』

はい、母さん

浮かんで来るのは愛する娘と妻。そして

『後の事は任せろよ、親父！』

「……恭介」

頼もしい息子

「……うん。任せたよ！」

剣を構え直す佐藤の顔に、恐怖も後悔も無い。それどころか、その表情は微笑んでいるように見える

「僕は佐藤！　家族を愛する専業主夫だ！！」

そして世界は光に包まれる

その頃、佐藤家は！！

「……はっ！？」

母の手がわなわなと震える

「卵安いわ～。後で買いに行きましょう～」

平和だった！

今日の勇者

父

続かないかも！

第８１話：夏の思い出

この季節になると思い出す

それは梅雨ジメジメとした、いやらしい暑さが薄れ、これから本格的な猛暑が始まりそうな六月中旬頃の事

忘れられない思い出

十二の頃、あたしは六歳年下の弟を連れ家を出た

理由は良く覚えていない。多分くだらない事

くだらない理由でした家出は、目的も目標も、お金すら無い家出

ただ、家に居たく無いから出て来ただけ。しかも関係無い弟を連れて

『お姉たん、どこに行くの？』

『……』

『お姉たん？』

『お姉ちゃんに任せておきなさい』

『うん。おねーたん』

弟は、ギュッとあたしの手をちっちゃい手で握る

あたしを信じ、あたしから離れないように一生懸命の力で

『……はぁ』

可愛い……

何でこんなに可愛いのかしら？　てゆーか流石あたしの弟！

『何があっても、あなただけは守るからね』

水商売でも始めようかしら？

そんな事をボンヤリ考えている内に黄昏れ時。夕日が落ちて、空は暗くなる

夏の夜は訪れるのが遅い。しかしその分、太陽が消える寂しさは一塩だ

家を離れ、三時間。あたしの胸にも心細さが訪れた頃、ふと辺りを見回すと寂しい小道。

背の高い青々とした葉の木立が、道の両側にどこまでも続いている

『……』

これからどうしよう

心細さは不安に、不安は後悔に変わる

『……おねーたん』

『え？』

『大丈夫だよ！』

弟は、あたしを元気づけようとニッパリ笑った

……あたしより心細い癖に

『……帰ろっか？』

軽い提案

『うん！』

『……うん』

可愛くて優しい弟。心細いのに、あたしを気遣かってくれる強い子

下らない理由で家出したあたしは弱すぎ。こんなんじゃ姉失格よね

『……うん、帰ろ』

怒られるだろうなぁ

長い道程、弟と一緒に来た道をゆっくり戻る

空には上弦の月。風は肌寒い

繋いだ手だけが、あったかい

『疲れたら姉ちゃん、おんぶするからね』

『大丈夫だよ、おねーたん』

『そ、そう？』

……ヤバ、この子可愛いすぎ。あれかしら、天使かしら。何でスカウト来ないのかしら

なんてポーッと見ていたあたしが悪かった。いや、あのオッサンが悪い！！

車が走っている音は聞こえていたし、ライトが近付いて来た事も知っていた。だけど警戒はしなかった

夏の思い出　2

車は、あたし達の直ぐ後ろに止まり、中から四十代半ばのオッサンが下りてきた

『こんな夜になにやってんだ？』

黄色いＴシャツに薄汚れたジーンズ。でっぷりとした腹が目立つ典型的な中年オヤジ

あたしは軽く会釈をし、返事をせずに歩く

『どっか行くなら送っていってやるよ』

『いいえ。直ぐ近くですから結構です』

『送ってやるって』

オッサンは、あたしの空いている方の腕、左腕を掴み、引っ張った

『止めて下さい！』

オッサンの腕を振り払おうとしたけど、オッサンの力は強く、払いのけられない

『大丈夫だって。後でちゃんと送るから』

ニヤつくオッサン。嫌な笑みだ

『や、やめてよ！』

グイッ

強い力で引っ張られた

それは、あたしを車に連れ込もうとしているオッサンの力じゃなく、オッサンよりも、あたしよりも小さな弟の力

『お姉たんを離せ！』

『あ？　敬語使えよ！』

ゴツン。オッサンのゲンコツが弟の頭に落ちた

『な、なにをするのよ！』

パシン！

一瞬何が起きたのか分からなかった。ただ、頬がヒリヒリ痛くて、オッサンの声が耳障りで……

『お姉たんに何するんだ！』

『あ！　いって！？　このガキ噛み付きやがって！！』

ゴツン、ゴツン、ゴキ、バギ

めちゃくちゃに殴られ、弟の顔は真っ赤になった

『離せ、離せ！』

でも、弟はあたしの手を離さない

『いい加減にしろよ！！』

オッサンはポケットから何かを取り出した。チキチキチキと、図工の時間に聞いた音がする

そして……

『あうっ！？』

弟の腕から、血が噴き出た

『あ……あぁ』

恐怖で震えるあたしは、何も出来ず、ただ、呆然と立ち尽くす

『離せ、離せ、離せ！！』

いつも直ぐ泣く弟。ちょっと転んだだけでも泣いてしまう弟

『お姉たんを離せ～！』

泣いてない。必死の形相であたしを守ってる

『い、いい加減にしろ、このガキ！！』

オッサンは再び腕を振り上げた

『っ！？　こ、この』

それを見て、あたしの頭の中で何かが切れた。そして身体は勝手に動いていた

『この変態が！！』

生涯に一度出るか出ないかの完璧な前蹴り。

もし神様がいるなら、あたしはこの蹴りが出せた事を一生感謝する。てゆーか、ありがとう蝶野

あたしの蹴りはオッサンの股間に吸い込まれる様に入り、オッサンはギャっとニワトリの首を絞めたような声を出して、泡をふいて倒れる

それを見てあたし達は、すかさず逃亡。勿論車のナンバーは覚えて、警察へ連絡

離れた所に隠れて、弟の治療をしている内に、警察は直ぐに来た

そこであたしも警察の前に出て状況説明。オッサンは連行、あたし達は警察暑で事情聴取

『事情は分かりました。ありがとう……よく頑張ったね』

一番の英雄である弟の頭を婦警さんが優しく撫で、あたし達にチョコレートをくれた

それを嬉しそうに食べる弟を見て、あたしは急に怒りを覚える

『……バカ』

『ん？　なーに、お姉たん』

『バカ！　何で逃げなかったのよ！！　あんた、下手したら殺される所だったのよ！？』

理不尽な怒り。婦警さんもびっくりして、あたしを止めようとしたが、あたしの怒りは治まらない

『あんたが死んだらあたしの責任じゃない！　あたしそんなの償えない！　そうじゃない！　あんたが死んじゃったら嫌！！』

『お、お姉たん……』

『ばか！　ばか！　ばか！！　ばかぁ！！』

本当に馬鹿なのはあたしだ

勝手に連れ出して、危険な目に合わせ、それでもあたしを守ってくれた弟に、お礼すら言えない駄目駄目な姉ちゃん……

『ご、ごめんなさい、お姉たん。……泣かないで』

『……あ』

いつの間にか、あたしはぽろぽろと涙を流していた。記憶している限り、始めての涙

『泣かないで、お姉たん』

弟も涙で顔が、ぐしゃぐしゃ

『ご、ごめん。謝るのはあたしの方、本当にごめんなさい……』

『姉たんが無事なら良いよ！』

真っ直ぐな笑顔。何よりも真っ直ぐに届く言葉

『っ！　んぅ～～～もぉ～～！！』

『ぐえ！？』

あたしは力いっぱい弟を抱きしめた

沢山の感謝と、沢山愛を込めて

『大好き！』

大好きよ、みっちゃん！！

水曜ドラマ太郎

【あたしとみっちゃん】

完

「う～ん」

夕食後、部屋に戻らずドラマを見ていた俺と夏紀姉ちゃん。余り面白くなかったが、なんやかんやと最後まで見てしまった

「十一時か……」

そろそろ寝るかな

「……ぐす」

鼻を啜る音が聞こえ横を見ると、夏紀姉ちゃんが涙ぐんでいた。もしかして感動したのか？

「鬼の目にも涙……か」

「誰が鬼だ！」

「耳、良過ぎ！？」

「たく！　……あ～ゴホン、ゴホン！」

「風邪？」

「あ～その～ま～その～」

「田中角栄？」

「……」

「？？」

「あ、あの時は……あ、ありが……と」

「……は？　何言ってんのさ、いきなり」

「ぐっ！　何でもないわよ、ボケが！！」

「ボ、ボケ……」

夏紀姉ちゃんは怒り、どかどかとキッチンへ行ってしまった

「……はぁ、全く」

ドラマに感化されたのかな

「礼なんか要らないって、姉ちゃん」

腕に今だ白く残る傷跡を見ながら俺は、あの日大切な姉を守れた事を誇りに思うのだった

「あ～イライラする！　酒飲むわよ、酒！！　付き合いなさい！！」

「……」

今日の照れ隠し

夏＞＞＞＞＞＞＞＞俺

「酒だ、浴びるように飲むのが酒だぁああ！！」

「ね、姉ちゃん。もう少し可愛いげがある照れ隠しを……」

「う、うっさい！！」

つづきくけ

第８２話：雪の教えて

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

学校と言う名の戦場から帰還した俺に、愛しき妹が出迎えた

ああ、俺は帰って来れたのだ……

「ただいま雪葉」

雪葉の頭にポンと軽く手を置きつつ、靴を脱ぐ

「ん？　どした？」

俺が靴を脱ぐのを、ずっと待っている

「あの……」

「ん？　どうしたんだ？　何かあるなら遠慮無く言ってくれな？」

「……うん、あのね？」

「うむ」

「雪葉に、お勉強教えてほしいな」

「ん？　構わないけど俺で良いのか？」

夏紀姉ちゃんの方が教え方が上手い。……悔しいが

「お兄ちゃんじゃなきゃ駄目。お兄ちゃんに教えてほしいの……」

雪葉は潤んだ目で俺を見つめる

「まさか……雪葉」

「うん……お兄ちゃん」

「今、俺しか居ないのか？」

「うん」

「やっぱりな」

非常に遺憾だが、雪葉が勉強を教えて欲しい時はまず夏紀姉ちゃんの所へ行く。次に秋姉、そして俺だ

成績順を考えれば至極当然の事だが、少々寂しい

「ごめんなさい、お兄ちゃん。お兄ちゃんもお勉強、忙しいのに……」

いつもゲームをやっているだけなのだが、兄の面目を保つ為、勉強していると言っている。……いや、ある意味ゲームも人生と言う名の勉強だ。きっとそうだ

「……遠慮なんかするな。お前の為なら兄ちゃんいくらでも時間を開けるさ」

「お兄ちゃん……」

見つめ合う俺ら。兄妹愛とは、かくも美しいものなりけり

「で、何を教えて欲しいんだ?」

「うん、ドイツ語」

「お前もか!?」

そして愛は国境によって引き裂かれたのだった

今日の先生

秋＞＞＞＞＞俺

Ｆｏｒｔｓｅｔｚｅｎ

第８３話：春の変化

親父がいなくなり、早二月。最近、どうも春菜の様子がおかしい

「兄貴、一緒に学校行こうぜ～」

「……ああ」

部活の朝練が無い日は、良く登校を誘う様になった春菜。以前は誘っても断っていた癖に……

「今日も暑いな！」

「そうだな」

まだ八時前だと言うのに、空に爛々と輝く太陽。今日も快晴だ

「兄貴は今日、何時帰るんだ？」

そう聞きつつ、春菜は俺の左腕を取り、組む

「お前ね……四時過ぎぐらいだな」

「私は六時過ぎだけど、待っててても良いんだ」

「いや、待たんから。先に帰るから」

「そっか！」

「ま、夏だし六時ならまだ明るいから大丈夫だと思うが、気をつけて帰れよ」

「ああ！　と、夏と言えばこの間のプール楽しかったな！」

「ああ、まぁ」

俺は忙しかったけど

「また行こうぜ！」

「ああってかテンション高いな、お前」

「今度の日曜日でも良いぞ」

「早くね！？」

「遊園地でも良いし」

「どっか行くのは決定なのか！？」

「家でゲームする？」

「いや、何でも良いけどよ……」

「じゃあ遊園地な！　やった！！」

「……いや、まぁ良いけどよ」

金、あまり無いんだよな

「ほら兄貴、あ～ん」

「はぁ！？」

「お礼に飴やるよ」

「あ、ああ、ありがとよ」

飴を受け取ろうと手を出すと、

「口に入れてやるって。ほら」

拒否されました

「あ、ああ」

「へへ！　ん？　兄貴、目やに付いてるぞ。だらしねーなー」

「お、そうか」

「違う、違う右じゃなくて左。たく、しょーがねーな」

春菜は苦笑いをし、俺の目元に指を伸ばした

「って、良いって！　自分で取れるって！！」

慌てて左目を擦る

「……取れたか？」

「どれどれ……」

そう聞くと、春菜は俺の顔を見上げ、ジーっと見る

「……」

「……な、なにさ？」

「うん、カッコイイぜ兄貴！」

「はぁ！？」

「私はどうだ？　可愛いか？」

「だ、大丈夫かお前」

「ん？　何が？」

「あ、いや……か、可愛いぜ春菜」

「サンキュ！」

超にっこりだ

ここ最近、微妙におかしいと思っていたが、今日は特におかしい…

…悪い物でも食ったか？

「……春菜」

「なんだ、兄貴」

声を掛けると、嬉しそうに俺を見つめる春菜君

……まてよ、この感じはもしかして

「親父か！」

「ん？　なんだ、兄貴？」

「い、いや、何でもない……」

そうだ。これは春菜が親父に接する時の甘え方だ。……寂しいのか？

「……よしよし」

空いた手で、春菜の頭を撫でてやる。このぐらいしか出来ないけど、

俺は傍に居るからな

「ん？　へへ！」

春菜は組んだ腕にギュッと身体を寄せて、

「最近、父ちゃんの匂いに似てきたな、兄貴！」

今日のショック

俺

「あんた、アタシのシャンプー使ったわね！？」

「だ、だって仕方ないじゃないか！　姉ちゃんと同じ匂いになりたかったんだ！！」

「こ、この変態が！！」

甘楽

第８４話：秋の不思議

学校が終わり、相も変わらず即帰宅。素早く靴を脱いでリビングへ

「ただいま～」

「……おか」

まだ誰も帰っていないのか、家の中は静まり返えっていた

「ただいまっと」

「……ふむ」

ゲームでもやるか！

「あ……おかえ」

「ゲームだゲームだ！」

部屋に戻り、ゲーム機を取って再びリビング。

テレビにゲーム機を繋げ、ソファーに座って、買ったばかりのゲームをさぁプレイだ！

【あちゃーおちゃー玄米茶！】

【くるくるぱー！！】

十代には分かりそうも無いネタの格ゲー。やはり５０インチのテレ

ビでやると迫力が違う

「……ふぅ」

喉が渇いたな。お茶でも飲むか

「……お茶」

良く冷えたお茶がテーブルに差し出された

「お、ありがっ！？」

差し出された方を見ると、制服姿の秋姉

「い、いつ帰ったの？」

「……さっき」

そう言って何故か秋姉はジト目で俺を見る

「そ、そっか。気付かなかった、ごめんよ」

「ん」

秋姉は軽く頷き、

「……見てて良い？」

と尋ねた

「う、うん……」

「横に座るね」

そう言い秋姉が座ると、爽やかで、甘い香りがふわっと広がった

香水なんて付けていないのに何故だ！

「……」

「……」

「……」

「……しないの？」

「あ、っと……秋姉もやる？」

「ううん。……見せて？」

「アイアイサー！！」

緊張するぜ

十五分後

「……ふぅ」

ちょっと小腹が空いたな

「……お菓子」

さっとテーブルに差し出されるお煎餅

「うわぉっ！？　……あ、ありがと……」

いつの間に！？

更に二十分

肩凝ったな……

腕を軽く回して……

「あふぁ……って秋姉！？」

「……かたもみ」

いつの間に秋姉が、俺の後ろに立ち、肩を揉んでくれていた

「い、いいよ、そんなことしなくても」

「……ん」

秋姉は再び俺の隣に座る

そして更に更に三十分

「……ふわ～」

なんか眠くなってきた

「そろそろ止めようかな」

「……うん。お疲れ様」

秋姉は、いつの間にか持っていた濡れタオルを俺に渡す

「あ、ありがとう」

本当、いつ動いているんだろ？　不思議だ

冷たく冷えた濡れタオルで、気持ち良く顔を拭きながら姉の謎を考える

「……恭介」

「うん？」

「面白かったよ。ありがとう」

そう言って、優しく微笑む秋姉

「……どうでもいいや」

「え？」

秋姉は最高！　それだけだぜ

今日の目薬

秋＞＞＞＞俺

続きむら

第85話：夏の惨劇

「……ふ、宿星か……」

「おにぃちゃん！」

「っ！？」

部屋のベッドに座り、窓から星を眺めていると、いきなりドアが開き雪葉が乗り込んで来た

「ど、どうした雪葉？」

「雪葉は怒ってるの！」

怒りからか、雪葉の顔は真っ赤になっている

「え、えっと……俺、何かしたか？」

身に覚えは無いが、これほどの怒りだ。もしかしてとんでもない事を……

「お兄ちゃん、最近雪葉のおでこにキスしてくれない！！」

「……え？」

「どういう事なの！」

「えっと……え？」

「嫌いなの！」

「え？」

「雪葉の事が嫌いなの！？」

「い、いやそんな事無いって！　す、好きだぞ」

「好きならキスを要求します！」

「はい？」

「おでこにチューは雪葉の権利なのです！」

「ど、どうしたんだ、雪葉？」

いくらなんでも様子がおかし過ぎる

「……にやー！」

「うわっ！？」

雪葉は俺に飛び掛かり、身体を擦り寄せる

「頭を撫でると良いのです！」

「あ、ああ」

なでり、なでり

「ふに……。うん、八十点です！　良く出来ました！！」

「あ、ありがとうございますって、お前酒臭いな！？」

「さけ？　……えへ」

にへら～と笑う雪葉さん

「……あの女か」

いたいけな雪葉に酒を飲ます奴は一人しかいない

「兄ちゃん、ちょ～っと夏紀姉ちゃんの所に行って来るよ。離してくれるか？」

雪葉は俺をガッチリ抱いていて、離れない

「離れません！」

ギューっ

「離したまえ雪葉君！」

「離しません！」

ギュ、ギューっ！

「これだけ言っても離さない……か」

仕方ない。あれを使うしか無いようだな

「……覚悟しろよ、雪葉」

対、雪葉用最終奥義

「……こほん。ね～むれ～ね～むれ～あ～に～のむね～に♪」

「……ふぁ」

幼い頃から聞かせて来た兄の子守唄。雪葉限定だが、ローレライの人魚並の睡眠効果がある

「に……い……」

カップラーメンを煮る時間で、寝息を立てはじめた雪葉

「……ふふ」

良い夢見ろよ

夏の惨劇　2

「いやね、嫌な予感はしたんですよ。雪葉があんなに酔っ払っていたんですから、本人はエライ事になっているんじゃないかって」

――リビング――

そこは死屍累々の風景でした

折り重なり、倒れる姉と妹達。母は苦悶の表情を浮かべながら、ソファーからずり落ちています

一体何があったのか

私がリビングを離れた三時間の間になにがあったのか

「あ、秋姉！　春菜！！」

私は仰向けに倒れる二人に駆け寄ります

「……きょう……すけ」

姉は弱々しい声で私を呼び、私の頬を撫で、意識を失いました

「あ、秋姉！？　秋姉～！！」

「……あ、兄貴」

「春菜！　無事だったのか！？」

妹は、震えながら手を私に伸ばしました

「一体何があったんだ！！」

その手を握り、妹に尋ねます

ガタン

リビング奥のキッチンから物音がしました

「っ！？　に、にげて……にげて兄……貴」

最後の力だったのでしょう。私にそう伝えた後、妹の手から力が消え、妹もまた意識を失いました

「は、春菜？　あ、ああ……」

どうしてこんな事に……

「何故だ～！！」

慟哭。私は最愛の姉と妹を失った悲しみに打ちのめされ、この理不尽な世界を呪うように吠えました

「……うふふ」

「ひっ！？」

リビングとキッチンを結ぶドア。そのドアが僅かに開き、出来た隙間から片目だけが、こちらを覗き込む様に浮かび上がります

「うふ……うふふふふ」

ドアがゆっくり開きました

キャミソール姿の姉は、右手に鈍器のような物を持ちながら、酔っているのでしょう、ふらふらとこちらへ近付いて来ます

「な、夏紀姉……」

この惨状は貴女が？

「ほら見て！　伝説の焼酎、百年の孤独よ！！」

姉は右手に持つ鈍器を掲げ、意味の分からない言葉を私にはきかけます

チーン

「お、焼けたかしら。アジのひっらき～」

今にも小躍りしそうなぐらい上機嫌な姉は、鼻歌なんかを歌いながらキッチンへと戻って行きました

……逃げよう

今ならば逃げられる

その時の私は、恥ずかしながら倒れた母や姉、妹の事を忘れ、ただただこの場から逃げる事ばかりを考えていました

「あ、恭介」

いなくなったと思った姉が、ひょっこり顔を出しました

「な、なに？」

「アンタは何飲む？」

アンタハナニノム

南アジアの方面に伝わる呪詛なのでしょう。その言葉は、私の身体を停止させます

「お、お茶で」

「お茶割りね。ふふ、中々渋いじゃない」

「い、いえ。ただのお茶で……」

「ただの茶なら要らねぇ、俺はストレートで飲むぜ？　……中々言うわね」

「何も言ってませんけど……」

どういう耳をしているんだ？

「よし、ならとことん飲みましょう！　アンタとアタシ、どちらが上か。負けた方は一日奴隷よ！」

こうして奴隷と王を決める戦いは幕を開けたのでした

夏の惨劇　3

「ああん、美味しい！　好き、好き～」

「……」

「ほら、もっと飲みなさい。姉ちゃん、お酌してあげる」

「……」

「はふぅ……うふ。もう一杯♪」

「……」

戦いが始まってから早一時間。超ハイテンションな夏紀姉ちゃんは、魚やスルメをつまみにグヒグビ飲んでいる。

俺はあくまでもマイペースで飲んでいるが、もう瓶にして約二本分の差がついている

「あ～幸せ！　お酒ってほんと美味しいね！」

「……」

さっきから全くペースが変わらないのだが、この姉は化け物か？

「よっし！　佐藤　夏紀、此処で一気飲みします！！」

そう言い、夏紀姉ちゃんは新しい瓶を開けて立ち上がる

「ね、姉ちゃん、無茶しないほうが……」

それに沢山あるとは言え、その焼酎は高級なんじゃ？

「無茶を越えてこそ真の酒飲みなのよ……ほら、音頭とりなさい」

目がマジだ……

多少心配だが、夏紀姉ちゃんなら平気だろう。ならいっそ一気飲みさせて早めに潰してしまうか

「はい、はい、はいはいはい！　素敵な素敵なお姉さん。素敵な一芸一気飲み！　新宿二丁目制覇した、貴女の実力見せてくれ～」

ｂｙ．ヨド〇シカメラ

「行きま～す」

覚えている。俺は覚えている

瞬きを二回だ。確かに二回だ

ゆっくりした訳でも無い。ごく普通の瞬き

それで７５０ｍｇの瓶は空になっていた

「プハァ～！　うまい、もう一杯！！」

そして姉ちゃんは新しい瓶を開ける

……心が折れた

俺はこの人に一生勝てない

肝臓のポテンシャルが違い過ぎるのだ。勝てる訳が……

頑張れ、兄貴！

……春菜？

戦いなさい　、恭介

母ちゃん……

……勝って

秋姉！

夢か幻か。今だ倒れている家族達の声は確かに届いた

「……俺も一気飲みするぜ」

「あ、なら一緒に一気しましょう♪」

再び空になった瓶を置き、更に一本手に取る夏紀姉ちゃん

「行くぜ姉ちゃん！」

「よし来た勝負よ！」

俺は覚悟を決め、焼酎を一息に……

「あ～うまい！　もう一本！」

「無理です」

勝てません

薄れゆく意識の中、最後に聞こえたのは優しい姉の声

「……お酒は二十歳になってから……」

今日の酒量

夏＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞俺＞＞＞＞＞＞母＞＞＞＞秋＞＞＞春＞＞＞＞雪

続木

第８６話：俺のおやすみ

「へっくしょい！！　……うん？」

自分のくしゃみで目を覚まし、顔を上げると、そこはいつもの見慣れた俺の部屋では無くリビングのテーブルだった

「ぬぅ……痛っ」

何故か頭が割れる様に痛い

「一体何が……」

「うぃー、もっと飲むにゃ～、むにゃむにゃ」

「……」

正面の席で顔を伏せって寝ている姉を見て思い出す

机には空になった八本の瓶。流石に少し引いてしまう

「ハァ」

溜息をつきながら壁時計を見ると、午前三時。秋姉達も倒れたままだ

「よっこいしょっと」

恥ずかしながら掛け声をかけ、立ち上がる

「秋姉、春菜、大丈夫？」

「……ん」

「う～」

ソファー近辺で倒れている二人に声をかけてみるが、二人とも苦しそうに眠ったままだ

「母ちゃんは……」

「夏紀は一月トイレそうじ～」

「……」

姉ちゃんが聞いたら泣きそうな寝言を言いながら、すやすやと寝ている

「……よし」

ミッション１

【秋姉を部屋へ運べ！】

「秋姉、ちょっとごめんね」

秋姉を抱き抱え、立ち上がる。細身なのに柔らかく、軽やかだ

秋姉の部屋はリビングを出て直ぐだから、何とか運べるだろう

「……ん」

秋姉の瞼が微かに震える

「ごめんね」

お姫様抱っこなんかしちゃってさ！

リビングを出て、秋姉の部屋の前。桔梗の花を遇った襖の前でしばし硬直

勝手に入ってしまって良いのだろうか……。いや、良い！　良いはずだ！　俺は弟なのだ、何が悪い！！　躊躇するな、躊躇は迷い、迷いは未来を閉ざす！　さぁ、行け恭介よ、襖を開ければそこは桃源郷だ！！

覚悟を決め、俺は襖に手をかけ

「……恭介？」

なくて良かったぞ、こんちくしょい！

「め、目が覚めたんだ秋姉」

「ん。……私、あのまま寝ちゃったんだね、ごめんなさい」

「あ、あやまるごたね！　悪いのはあの女だぁ」

何故か訛ってしまう

「もう大丈夫」

下ろしてと、秋姉は目で言う

「そ、そう」

ゆっくり下ろすと、秋姉は何事も無い様に平然と立った

「……ありがとう恭介」

微笑む秋姉。取り敢えずミッション完了！

「おやすみ、秋姉」

「ん……。おやすみ、恭介」

人物紹介（前書き）

人物紹介が見たいと言うめんど……素敵な意見を頂きましたので、期間限定簡易人物紹介です。そのうち消します

人物紹介

女系家族、人物紹介

俺

目が死んでる平凡な人。頭脳も平凡、運動神経も平凡、とにかく平凡。ただし、家族が困っていたら必ず何とかしてしまう人

子供にやたらモテるのは、本人も子供だから？

佐藤　夏紀

アッシュブラウンに染めたボブに軽くパーマを当てたまぁ、とにかくそんな感じの髪型の美女。スタイルは細身だが胸は結構大きく、何かエロい

頭脳明晰で、国立の大学に通う彼女は常にトップクラスの成績を誇る。高校の頃と大学初期には彼氏が居た様だが、男と付き合うのがめんどくさくなったらしい。今は酒が恋人

本来は極度のブラコンだが、今は封印している。ちなみにドＳ

佐藤　秋

物静かで、穏やかな努力の人。余り喋らないので一見では、クール

な美女だと思うが、傍に居ると何とも言えない穏やかな雰囲気が流れる。スタイルは細身で胸も控えめ

秋は努力をして来た自分を信じており、気持ちは揺るがない。例えその努力の結果が悪かったとしても、納得し、後悔をせず次を頑張れる強い人。何故か存在感は薄い（父親の影響かも）

佐藤家姉妹の中で一番優しいが、間違った事をした人にはきちんと怒る。そんな性格だから、夏紀の様に間違った事をしまくる人を見ると、たまにブラック化する

髪型はセミロング。櫛を入れるぐらいで、対した手入れはしていないが、とても綺麗なウェーブが出ていて、透明感がある髪になっている

ブラコンでは無いが、弟をってか家族を愛している。昔、弟とした約束を今も律儀に守っていたりもする

佐藤　春菜

天才。やろうと思えば何でも出来る人。しかも佐藤家で一番美女になるだろうとも言われる程、容姿に優れている。ただし、自覚は無く、オマケにちょっとバカ

男っぽいと言われるが、それは間違いで、ただ単に女としての自覚が無いだけ。いつも明るく、ガサツなので中々気付き難いが、実はファザコンで気が弱く、甘えっ子のさみしがり屋

髪型は、長めのショート。何気に結構手入れしていて、枝毛一つ無い。体型は普通で、スタイルはかなり良い

佐藤　雪葉

兄限定の甘えっ子。普段は、かなりしっかりした子

成績は普通だが、頭は良い。兄を本当に尊敬し、慕っている雪葉は、兄の事になると結構無茶をする。思春期に入り、少し兄の事を避けようとしていたが、結局、兄好きは変えられず甘え続けている

酒が非常に弱く、一口でも飲むと酔っ払い暴走してしまう。暴走中の事は覚えていないが、無意識に日頃の不満（兄限定）を言っているような気がする

髪型は背中まで伸びたストレートロング。スタイルは普通の小学四年生

俺のおやすみ　2

ミッション2

【夏紀姉ちゃんを……】

「酒のせい。全部お酒が悪いのよ……むにゃむにゃ」

放置で良いや

それでは改めてまして、ミッション2！

【母ちゃんを起こせ！】

「起きて、母ちゃん」

「うぅ～ん」

「起きなせい、おっかさん！」

ユサユサと揺さぶってみる

「無理～」

「風邪引くって！」

「今起きたら母さん、いけない物を吐き出しそ～」

「え！？　そ、それはもしかしてゲのつくアレですか？」

「そうだゲロ～」

「わ、分かりました。肌掛けを用意致しますので、どうか安らかに……」

「ゲロゲ～ロ」

ミッション、失敗！

タオルケットをかけてやろう。ついでに姉ちゃんにも……

んで、廊下にある押し入れからタオルケットを取って来て、二人にそっとかける

「よしっと。おやすみ、母ちゃんに夏紀姉ちゃん」

「うぃ～」

「おやすみなさ～い」

んじゃ、ミッション４！

【春菜を何とかしろ！】

残った一人は完全に酔い潰れている

「春菜、大丈夫か？」

「う～」

「春菜？」

「う～う～」

肩に手をかけると、春菜は苦しそうに唸った

「……可哀相に」

これもあの悪魔が悪いのだ

このまま寝かせてあげたいが、春菜には学校がある。部屋の布団で休ませたい

「春菜、肩貸してやるから部屋に行こうな」

「う～」

「ほら、春菜」

春菜の身体を支えると、春菜は両腕を俺の首に回し、

「う～。だっこしろ～」

「嫌だよ！」

春菜の部屋は二階。階段を上がらなくてはならない。色男である俺は金と力はなかりけりなのだ

「じゃあ起きない」

「起きてるやん！」

「運んでくれなきゃ、動かないぞ」

「動かないぞ、じゃないぞ全く」

「秋姉には抱っこしてたじゃないか～」

グタグダな春菜さん

「起きてたのかよ……。秋姉の部屋は近いけど、お前の部屋は二階だろ。運べんわ」

「兄貴の部屋で良いし」

「……またかよ」

今日は母ちゃんが寝てるから、ソファーで寝る訳にもいかないし……

「しゃーない。ベット貸してやるから雪葉と一緒に寝ろ。俺は床で寝るよ」

「私の部屋使え～」

「あのなぁ……まぁ良い。取り敢えず部屋行くぞ」

「お～」

お～じゃないよ全く

人物紹介2

流れをぶった切る中途半端な所で人物紹介2！

母

最強の鬼。知力、腕力、財力、美貌と全てにおいて完璧で隙が無い。実家は相当な権力者ですら一月より前に予約しないと入れ無い、超高級料亭をやっていて金持ち。だが、半ば勘当されている

父が居なくなってからは株で結構稼いでる。政治や時勢、世論を完璧に読み、次に何が起きるのかを大体予測出来るが、基本的にのんきなので、あんまり活用してない

家族を愛し、父を本当に愛しているが、居なくなっても全く慌る様子がないのは信用しているからなのだろうか……

父

人が良すぎて、中々出世出来ない万年係長の父

とんでもない失敗をした部下を庇ってリストラされたのだが、部下からのお礼一言すら無く、逆にその部下は係長に昇進した。だが、部下が助かって良かったと喜んでいる辺り、かなり駄目人間と言える

責任感は強く、職を失った後どうするか悩んでいた所に財宝の話を聞き、即行動。意外と生命力に溢れ、持ち前の優しさと勇気を武器

に元係長から勇者へクラスチェンジ。これから先、彼は一体何処へ向かってしまうのか書いてる人にも分からない

霧島　花梨

超貧乏な小学四年生。父は蒸発。病気の母と、まだ幼い四人の弟を抱え、生活保護を受けながら安売りのスーパーや内職で食いつないでいる

気は強いが、世話好きで優しく、せっかくの魔法を覚えても自分の為には殆ど使っていない。
ちなみに本編中で使ったのは、雨の日と交番へなづなを迎えに行った時。それとプールの時、胸を少し大きくした

初対面の時、変態だと思った主人公が、意外に優しく、年上の癖に世話が焼ける所が何だか妙に気になっているが、自分が好きなのかどうかはイマイチ分かっていない。
ただ、主人公が他の子と仲良くしてたり、余り会わなかったりすると何だか寂しくなる。会えば会えで腹が立つ妙な気持ちらしい

西洋人形のような美少女で、雪葉を含めた小学生の中で一番容姿に優れているが、全く気取っていない。てか、むしろ容姿なんかどうでも良いから胸をくれと思っている。そのぐらい胸が無い。まっ平ら？　ってぐらい無い。あれ、男の子ってぐらい無い。とにかく無い。主人公がなづなと花梨を勘違いしたのも仕方ないんじゃないの？　ってぐらい無い

夢は借金返済とお嫁さん。弟達に大変好かれているが、なづなが道を踏み外そうとしているのを気付いていない

坂上　美月

人懐っこい子犬のような子。身体を動かす事が好きで、落ち着きは余り無い。
春菜に近い天才型で、集中さえすれば大体の事はこなせる。

好きなタイプは美味しい物を食べさせてくれて、一緒に遊んでくれる、優しい人。そんなんだから主人公の事が大好き。
最近は、子供が大人を思う尊敬に近い好きでは無く、本当の初恋になりかけているが、それはやっぱり主人公が子供だからだろうか？

ショートカットの髪に、健康的に焼けた肌。くりくりとした大きな目が特徴

風見　風子

何か色々悟ってる子。転校が多い為、何処か醒めていて大人っぽい

周囲をハードボイルドの世界に巻き込む特技を持っていて、何故か主人公と共鳴。自分に近い感性を持っていると思っている

自分の事を第三者の視点で見つめる事が出来、花梨と美月が仲良くしているのに軽いヤキモチを焼いている自分に気付く。それ以来、自分の気持ちに正直になろうと、主人公に対してだけは素直になっているが、分かりにくい言い回しをするので伝わり難い。つかきちんと理解する主人公って凄いと思います

男の子の様な格好を好み、髪を隠していると爽やかな少年に見えるが、髪を下ろしてスカートなんか履くと、かなりの美少女。最近、主人公の為にスカートを購入したらしい。五人の中で一番背が高い（１５２）

鳥里　宮

誰？

プールの時に書き忘れたぐらい存在感が無い子

直也君の従姉妹で、若干潔癖症の妄想癖あり。あと近視

直也君に憧れているが、最近直也君に対し、ある疑惑を感じている。主人公の事が嫌い。多分カマキリより嫌い

五人の中では主にオロオロする役。因みにリーダーは花梨。ムードメーカーに美月。まとめ役が雪葉で参謀が風子だったりする

俺のおやすみ　3

「よっこら……し、しょっと」

秋姉と同じ様に春菜を抱き抱えると、妙に重い

「……お前、体重いくつだ？」

「ん？　４８だったと思うぞ」

「軽っ！？」

飯、ちゃんと食ってるのか？　……食ってるわな

「やはり秋姉は天上の女神なのか？」

女神には体重なんて無いのさ

「……兄貴って馬鹿だよな」

「はっきり言わないでくれません？　ほれ、ドアを開けなせい」

「うん」

春菜にドアを開けて貰って廊下へ

「しかし大きくなったな春菜」

昔は良くケガをした春菜を迎えに行き、おぶって帰ったものだ

「へへ。兄貴も結構逞しくなったぞ」

春菜は俺の首から腕を離し、胸を触ってきやがった

「くすぐったっての」

「胸板、結構厚いじゃん。……もう兄貴に腕相撲とか敵わないかもな」

いや、余裕で勝てるだろ

「私なんか、ぷにぷにだぜ？　触ってみろよ」

自分の胸を下から持ち上げ、そう言う春菜

「君は馬鹿か」

兄ちゃん、お前の将来が心配だよ

「あ～馬鹿にしたな～。このやろ～」

俺の腕の中で春菜は暴れ、俺の弱点である脇をくすぐってきた

「ば、馬鹿、止めろ！　くすぐったいっつ、危ないって！！　うわっ！？」

体勢を崩し、俺と春菜は縺れ合うように倒れ込む

俺は春菜を潰さない様に咄嗟に手を廊下の板につく。手の平に痺れ

るような痛みが走った

「だ、大丈夫か春菜！」

触れそうな程近くにある春菜の顔。その瞳は軽く潤んでいる

「……うん。大丈夫だよ、兄貴」

「そうか、良かっ！？」

身体を起こそうとした俺の身体を、春菜はギュッと抱きしめた

「兄貴……。兄貴はどうして私の兄貴なんだ？」

「……春菜、お前」

「兄貴が父ちゃんなら父ちゃん二人になるのに」

「言うと思ったぞ、このやろう！」

酔っ払いやがって！

「おにぃちゃん！」

「うわ！？」

突然俺の部屋のドアが開き、雪葉が怒りの表情で出て来た

「ま、まだ酔ってるのか？」

「その女は誰なのです！　雪葉というものがありながら、浮気なのですか！？」

「また変なドラマ見たな！？」

「雪葉は思うのです、浮気も男の甲斐と。ですが、まだ雪葉達は新婚なのですよ！　成田離婚ですか！？」

「良いからもう寝なさい」

見たドラマが分かったし

「と～ちゃん」

「俺はお前の父ちゃんじゃねぇよ！　ってかいい加減離せよ！」

「お兄ちゃん！」

「俺は雪葉の兄ちゃんじゃ無いぞ！　……いや、良いのか」

「もう寝る」

「此処で寝るなよ！」

「……ベットに運んで？」

「一人で行けよ！」

「お兄ちゃん！」

「なにさ！？」

「雪葉トイレ」

「一人で行きなよ！」

「兄貴！」

「なんだよもう！？」

「腹減ったぞ」

「気持ち悪いんじゃないのか！？」

「お兄ちゃん」

「な、なんだい、雪葉」

「おしっこ」

「年齢退行してないか、お前！？」

「……うっ」

「ど、どうした？」

「……吐きそう」

「え゛！？」

「……雪葉も」

「えぇ！？」

ふらふらと俺に近付いてくる雪葉さん

「に、逃げ……うげっ」

逃げ出そうとする俺を、春菜がガッシリキャッチ

そして……

「ギャー！！！」

今日の悪魔

夏＞＝春＞＝雪＞＞＞＞＞＞＞＞＞母＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞秋

「ご、ごめん兄貴」

「ご、ごめんなさい、お兄ちゃん」

「良いさ。所詮俺は汚れ役なのさ……ぐす」

鼓滝

第87話：雪の秘密

土曜日。母ちゃんは買い物に行き、夏紀姉ちゃんは珍しく図書館へ。
秋姉は部活と、俺と春菜と雪葉しかいないそんな昼下がり

昼飯を作ろうと思い、リビングでテレビを見ている春菜へ何が食いたいかと聞くと、春菜はチャーハンと答えた

「オッケー、チャーハンね。雪葉にも聞いてみるよ」

「雪葉なら灘中のボーイフレンドとさっきどっか行ったみたいだぞ。嬉しそうに」

「ふーん。雪葉もそんなお年頃……ちょっと待て、今何て言った？」

「は？　だから、灘中の奴と出掛けて……」

「……中学生？」

「え？　えっと……それがどうかしたのか？」

「あぁ！？」

「わ！？　び、びっくりした……」

中学生が小学生とデートだと？

「ロ、ロリコン野郎がぁ！」

今でも昨日の事の様に思い出す。十年前の二月二日の事を

二月二日。それは特別な日

その日は朝から雪が降っていて、凍えるように寒い病院の廊下で俺達は新たな家族の誕生を待ち望んでいた

『まだかな、まだかな～』

『落ち着きなさい春菜。もうすぐ生まれるわよ』

『……姉さん、新聞、逆』

『う……、あ、あんただってさっきから何回トイレ行ってるのよ』

『……姉さんは変態だと思う』

『べ、べつに数えてた訳じゃないわよ！』

『ケンカは止めてよ二人とも～』

『あ、ごめん……』

『……ごめんなさい』

『うん……。ママ頑張って』

期待と不安。恐怖と苛立ち

それが限界に近付いた頃、親父が分娩室から飛び出して来た

『みんな！　無事に……無事に産まれたよ！！』

『や、やった～！』

二月二日、午前十時。雪が降る日に産まれた雪葉

雪の葉は例え厳しい冬が訪れても、枯れる事なく耐え忍ぶ。そして耐えた葉は、春にみずみずしく力強い葉を見せてくれるのだ。そんな想いを込めて付けた名前らしい

『雪葉～、雪葉～』

『う～あ～？』

『かーいな雪葉は～』

『あらあら～恭介は雪葉にべったりねぇ』

『だって可愛いんだもん』

ほんと四六時中、雪葉にべったりだった

『にーにだよ、雪葉～』

『う～？　に～？』

『うふふ、この分じゃ初めての言葉は、にーにになりそうね～』

『えへへ～、だったら良いな～。ほら～にーにだよ～』

『に～？　んに～？　に～に？』

『っ！？　ゆ、雪葉が、雪葉が喋った～！！』

『えへ～』

その日、俺はある決心をする。雪葉の面倒は俺が見ると

思い立ったら吉日。その事を母ちゃん達に話すと、母ちゃん達は自立心がどうたらこうたら言い、雪葉を俺に任せる事にしてくれた

幼い雪葉の世話、それは本当に大変な毎日だった

オムツに始まり、夜泣きやご飯の世話。勿論母ちゃん達はフォローしてくれたが、俺が大変だからもう止めたい言う迄は、俺に雪葉の事を任せると言ってくれた

俺は母ちゃんの信頼を裏切りたく無かったし、何より雪葉を激愛していたので、雪葉が幼稚園を卒業し、あれ？　もしかして俺よりしっかりしてない？　と思い知らされるまで、朝夕問わず、ずっと面倒を見てきたのだ

そんなんだから歳の近い春菜とは余り遊んでやれなかったが、春菜の事だって勿論大好きだ。あいつに何かあれば俺は命を掛けて守る。

……言わないけど

まぁとにかくそんな訳だから、ある意味、俺は雪葉の親代わりだと言っても良い。ならば男らしくボーイフレンドとの仲を認め……

「られるか～！！」

「うわぁ！？　……あ、兄貴？」

「……何処へ」

「へ？」

「何処へ行くと行っていた！！」

春菜の肩を掴み揺さぶる

「え、えっと駅前のデパートがどうたらこうたらって……」

「で、デパート……」

デパートで何する気だ、ロリコンが！

「あ、あの……兄貴」

「なんだ！」

「う……な、なんでもないです」

「春菜！」

「は、はい！」

「カニチャーハンで良いか！！」

「あ、ああ！！」

雪の秘密　2

春菜にカニチャーハンを作り、俺は家を飛び出し走り出す

行き先は勿論、駅前のデパートだ

駅前のデパートは、この駅近辺で一番大きな場所で、ゲーセンやバッティングセンター、更には映画館まである

例えばゲーセン。そんな魅惑的で怪しげな場所で二人……

『雪葉ちゃん、ゲーセン行こうよ！』

『え？　で、でも、ちょっと怖い……』

『大丈夫だって。僕、欲しい物があるんだ～』

なんて言って、無邪気さをアピールして……

『これこれ！　これが欲しかったんだ。よ～し、やるぞ～。えい！　えい！　あれぇ、失敗しちゃったよ～』

なんてわざとらしい小芝居をしつつ……

『残念……。でも、本当に欲しい物だけは失敗したくないな』

『本当に欲しい物？』

『雪葉ちゃんのハート』

『あ……。雪葉のハートは、もうきっちり掴んでるよ！』

「……ざけやがって」

見え透いた手で純心な雪葉のハートをキャッチだぁ？　待ってろよ糞ヤロウ！　今すぐ貴様の首をキャッチして引き抜いてやるわ！！

「……まてよ」

映画館かもしれない

『雪、映画を見に行こうか』

『うん。……ホラー？』

『怖いのかい、雪』

『……うん、ちょっと』

『なら手を繋いであげよう』

『あ、……うん』

『ほら始まったよ、雪』

『キャー、怖いよ～』

『ふふ。もっと抱き着いてきたまえ、もっとだ、もっと！』

「……殴ろう」

奴の面をホラーにしてやる

「……はっ！？」

ま、まさかバッティングセンター！？

『雪葉君、僕がバッティングを教えてあげよう』

『はい、先生！』

『よし、先ずは振ってみるんだ！』

『はい！　えい！』

『駄目だ、駄目だ！　腰がなっとらん！！　……どれ、先生が腰を支えてやろう』

『あん、そこは胸です。先生のエッチ♪』

「うん、殺ろう」

きっと神様も許してくれるさ

罪を犯す覚悟を決めている内にデパートの前へとたどり着く

土曜日の昼だからか、デパートには親子連れやカップル達が多く、一人で居る人は少ない。目立ってしまうな……

目立つ→先に見付かる→逃げられる→逃げた先はホテル街→→→→
→朝帰り

「な、なんてこった……」

お、俺はどうしたら良いんだ！

「……さっきからなにしてんのよ、あんた」

デパートの脇で苦悩していると、背後から聞き覚えのある声で呼ばれた

「ん？　あ、ああ」

振り向くと、腕を腰に当てて偉そうに俺を見上げる花梨さん

「ちょっと、悩んでて……。花梨は何をしてるんだ？」

「私は暑いから涼みに……って、あんたには関係無いでしょ！！」

「す、すみません……」

「ふん！」

何故怒られなきゃならないのだろう？

「……でも、本当に暑いな」

こんだけ暑ければ、涼みに来るのも分か……そうだ！

「花梨！」

「きゃ！？　な、なによ！」

「付き合って下さい！」

「……え？」

「俺に付き合って下さい！」

「えぇ～！？」

「お願いします！」

「そ、そんな事、き、急に言われても……」

「花梨じゃないと駄目なんだ！」

「っ！？　な、な、な、なに言って！！」

「お願いだ花梨。花梨しかいないんだ……」

「あ……ぅ……で、でも、あたしまだ……」

「お願いだ、花梨」

「……と、とりあえず考えておくから……」

「今直ぐじゃないと駄目なんだ！」

「す、直ぐ……」

「……駄目か？」

「……」

「嫌か？」

「……ゃじゃ……ない」

「え？」

「……」

「……花梨？」

「……」

「……」

「……ん」

「ん？」

「……んっ！」

「は？」

「っ～～！　だ、だから付き合っても良いって言ってるのよ、ド馬鹿！！」

「あ、ありがとうございます！」

「バカ、バカ、バカ、バカ、バカァ！！」

「す、すみません！　あざ～っす！！」

「う～～」

「すんません、無茶言ってほんとすんません！」

「う～～～～」

「いや、すんません！　ほんとすんません！！」

で、三分後

「……」

「……」

急に重苦しい雰囲気になった俺ら。花梨は一言も発せず、ずっと俯いている

「……か、花梨さん？」

「っ！？」

声をかけると猫の様にビクッと反応し、俺から距離をとった

「……な、なによ」「あ、いえ……」

「……」

「……」

何なんだ、この雰囲気

「……あ！」

「な、なに！？」

こうしている間にも雪葉が毒牙に！

「こんなことしている場合じゃない！　行くぞ花梨！！」

「きゃ！？」

俺は花梨の腕を取って、デパート内へと侵入した

「ち、ちょっと、離してよ！」

デパートへ侵入し、エスカレーターに向かう途中、花梨は抗議の声を上げた

「あ、ああ、ごめん。痛かったか？」

「痛くは無いけど……」

花梨は顔を赤くし、腕をさすっている。……怒らせた？

「本当、ごめん。俺、焦っちゃって……」

「……いいわよ、もう」

「ごめんな」

「……うん」

「……」

「……」

「……」

「……」

な、なんだこの気まずさは？

「あ、と、とりあえず、ゲーセンに行こうぜ！」

「ゲーセン？」

「ああ。先ずはそこから行こう」

「え、えっと……」

「金は全部俺が出すよ」

「そ、そうじゃなくて！　……今日行くの？」

「え？　時間無いか？」

「あ、あるけど、私、こんな格好だし……」

青のワンピース。白い風鈴のガラが涼しげだ

「ん？　良く似合ってるぜ、可愛いぞ」

「か、かわっ！？　……う～～」

花梨は顔を伏せ、益々赤くなっていく

か、完璧に怒らせてしまったようだ。機嫌を取らなくては……

【五階子供フロア】

子供フロアの一角にあるゲーセン。花梨の機嫌を気にしつつ、雪葉を捜す

「……此処には居ないか」

と、なると次は映画？

「どうやら大丈夫のようだな。じゃ、次に行こうか」

そう花梨に声を掛けると、花梨はＵＦＯキャッチャーの中をジッと見ていた

花梨の視線を追うと、リラックスしているクマのぬいぐるみ

「それ欲しいのか？」

「え？　み、見てただけよ」

「ふーん。どれどれ？　お、いけるな。ちょっと待ってろ」

「え？　い、いいわよ！　ち、ちょっと可愛いなって思っただけで、そんなに欲しい訳じゃないんだから！」

「俺が花梨にあげたいんだよ」

機嫌を取るために

「っ！？　う、う～～～～～」

スカートの両端をギュッと掴みながら、更に更に顔を真っ赤にして唸る花梨

あ、あれ？　益々機嫌が悪く？

「と、とにかく任せろ！」

財布から１００円を取り出し、レッツプレイ

ちゃらら～、ぱらら～

「よし、此処だ」

人形の中心点にアームを下ろし、掴む。そして

ぱらぱらぴ～

「ふ、一撃だぜ」

「あ……え、えと……た、たまにはあんたもやるじゃない！」

「はぁ、どうも。ほれ」

「う、うん。……あ、ありがと」

花梨は受け取ったぬいぐるみで口許を隠し、上目使いで呟く様に言う

まだほのかに赤いが、機嫌は直ってきているみたいだ

「どういたしまして。じゃ、映画見に行くか」

「……ん」

コクンと頷く花梨に安心しつつ、次は映画館に乗り込むぜ！

雪の秘密　4

【八階映画館】

「……よし、行くか」

上演中だが、開始から３０分経っていない。まだ間に合う筈だ

「……こ、これに入る気？」

「ああ。これが見たかったんだ」

【怪奇！　死霊だらけの大運動会】

「も、もう上演してるみたいだし、次のじゃ駄目なの？　コメディーみたいだけど……」

【ほのぼのコメディー。死神さんと３６５日】

わー。超面白そー

「だけど……、これしか無い。これしかないんだ！」

「そ、そんなに見たいの？」

花梨は、不気味なポスターを見たまま固まっている

「……もしかして、怖いのか」

「っ！　こ、怖く無いわ！　い、いくわよ！！」

ずんずんと、先を歩いてゆく花梨さん

「ま、違ったら直ぐ出るから。えっと……学生一枚に子供一枚」

販売員からチケットを買い、いざ中へ！

そんな感じで入った映画館は、空いていた。百席はあるってのに俺達を含め、１０人前後しかいない

さて、雪葉達は居るかな……

「……あ！」

右端の前から三段目に座っている二人組

一人は子供なのか背が低い。そして被っているのは……雪葉がお気に入りの帽子！

「やはり此処か……」

ホラー映画を見ながらさりげなく密着。スケコマシ糞野郎がやりそうな手だ！

「花梨、あそこに座るぞ！」

雪葉達より一段後ろ

「え？　……こんなに空いてるなら、わざわざ人の後ろに座らなくても良いじゃない」

「あそこが一番良く見えるんだ。あそこ以外無い！」

いざとなれば攻撃も可能です！

「別に良いけど……」

花梨は微妙に納得してなさそうだが、とにかく俺達は二人組の後ろへと座る

「……さてと」

ジッと前二人の後頭部を見て、警戒。何か怪しい動きがあったら即、パンチ。それは兄である俺に神から与えられた権利だ（錯乱中）

十分後

「……」

「……あっ！　……」

更に十分後

「……」

「いっ！？　……」

更に更に十分

「……」

「ぅう……」

ひたすら二人の後頭部を見ている俺の横で、ガタガタ震える花梨さん

「……もしかしてホラー苦手なのか？」

「っ！？」

話し掛けると花梨はビクッとし、腕で身体を抱きながらホッとしたようにこっちを向いた

「べ、別に。霊なんて信じてないもの」

「ふ～ん……あ、花梨の後ろ」

「きゃー！？」

慌てて俺の左腕に抱き着く花梨さん。やっぱ苦手なようだ

「何も無いから心配するなよ」

「ふ、ふざけっ……う～～～」

あれ？　……ヤバ！？　目が潤んでる！

「ご、ごめん、ごめん……ほら、もっとしっかり抱き着いてな。少しは怖さも紛れるだろ？」

「こ、怖くない！」

そう言いつつ、花梨は俺の左腕を両腕でギュッと強く抱いた

「……」

「な、少し気が紛れるだ……お前、大丈夫か？」

暗い映画館の中ですら分かるぐらい、顔が茹でダコの様に赤くなっている

「う、うるさい！！」

いや、うるさいのは君の方でしょ

花梨の声に驚いて振り向いた前の二人は……

「……別人やんけ！！」

「うわ！？」

「きゃあ！？」

「う、うわぁああん」

前の二人は普通の親子でした。

雪の秘密　5

「ほんとすみませんでした！」

「びっくりしたよ。気をつけてくれよな」

「はい……。ごめんね」

「もういいよ、お兄ちゃん。ちょっと楽しかったし」

「あ、ありがとう。……それじゃあ、行こうか花梨」

「ええ。……私の兄が大変失礼しました。もうこんな事しない様に、きっちり怒ります。ほら、お兄ちゃん、キビキビ歩く！」

「は、はい。で、では……」

親子にもう一度頭を下げて、俺は花梨に連れられ歩く

「はぁ……助かったよ、ありがとう花梨」

花梨が兄妹設定にしてくれなければ、不審そうに俺を見ていた父親に色々追求されたかもしれない

「別に良いわよ。あんたが世話焼ける人だって言うのは、もう知ってるから」

「……そうですか」

なんだこの切なさは……

「あの……それで、もう一つ行って欲しい所があるのですが……」

【屋上バッティングセンター】

「初デートにバッティングセンターって……」

「ん？　なんか言ったか？」

「何も言ってないわよ！」

「そ、そう？」

なんかすげぇ機嫌悪いけど……

「ほら打つわよ！　打てば良いんでしょ、打てば！　ええ、打ってあげるわよ！！」

「いや、あ……はい、お願いします」

怖いから逆らうのは止めておこう

「じ、じゃあカラーボールのやつにしようぜ！」

左端にある、子供用のゾーン。バットも球もプラスチックの軽い物だ

「とは言え時速６０キロ。結構速いから気をつけるんだぞ」

花梨にヘルメットを被せ、金網の中へ入る

「見てなさい。簡単に打ってあげるから！」

そう言い構えた花梨さん

「……グリップを持つ手は、離さないでくっつけた方が良いぞ」

釣りじゃないんだから

「ぐりっぷ？」

「今、持ってる所だよ」

「そうなの？　……こう？」

「う～ん。悪くは無いんだが……傘をさす感じで持ってみな」

「こう？」

よし、自然体で良い感じだ

「じゃあグリップを雑巾だと思って軽く絞って」

「……こう？」

「以外と良いな」

「そ、そう？」

「ああ。じゃ、ベースの左側に立って……前を見据えて……よし、振ってくれ！」

「えい！」

掛け声と共に、花梨は思い切り振ったが、どうにも身体が泳いでいる

「腰で振ってないから駄目なんだよ。どれ、ちょっと腰を支えてやる」

腰とスムーズな体重移動こそが、バッティングの基本だからな

俺は花梨の背後に周り、腰を……

「お兄～ちゃん」

「っ！」

ゆ、雪葉！？

「打ったよ、お兄ちゃん」

「うん、凄いよ瑠美」

声の方を見ると、向かいのバッティング場で小学５、６年生に見える男の子が、雪葉ぐらいの歳の子の頭を撫でていた

「……なんだ、違う子か」

兄妹でバッティングセンターか

「微笑ましいな」

なんて人を眺めつつ、花梨の腰を……

「ひぅっ!?　ち、ちょっと、そこ胸っ!!」

「え?　あっ!　わ、悪い!!　あまりにも平らだ金本!?」

腹部にフルスイング!!

「ナ、ナイススイング……」

「最っっっ低!!」

「ご、ごめん……」

雪の秘密　6

「ほんと、ごめん！」

「……」

結局バッティングセンターにも雪葉達は居なく、口を聞いてくれない花梨と共に、階段を降りる

「ほんと、ほんとーに、ごめんよ」

何だかさっきから謝ってばかりだ……

「……ハァ。もう良いわよ、許してあげる。……勿体ないし」

「勿体ない？」

「な、何でもない！　そ、それより次は何処に行くのよ？」

「そ、そうだな……」

今は午後三時。おやつを食っている頃かもしれん

「下でタコ焼きか何か食べようぜ」

【地下一階食品市場】

「何でも食べたい物、言ってくれな」

食品市場には、鯛焼きやタコ焼き、アイスクリームやハンバーガー屋がある

「……」

「どうした？」

「私、要らない。あんた食べなさい」

「ん　腹減って無いのか？」

「ええ」

ぐ～

頷くのとほぼ同時に、健康的な音が花梨の腹から響いた

「はは。花梨のお腹が、腹減った～って言ってるぞ」

「ち、ちがっ！　今のは」

「奢りってのが気に入らないんだろうけどな、今日ぐらいは俺に甘えとけ」

頭を軽く撫でると、花梨はクマのぬいぐるみを胸でギュッと抱いて、コクんと頷く

「よし」

こうして素直だと可愛い子だ

「じゃ、何食う？」

「……ん」

頷いたまま、顔を上げない花梨さん。指差したのはタコ焼きだ

「ふむ、たまには良いな。では買いましょう」

なんて財布を取り出して、オヤジからタコ焼きを買っている間にも雪葉達を捜す

「……此処にも居ない」

もう大分時間が過ぎている。もう居ないんじゃ……

「はい、おまちどう」

「あ、どうも」

とりあえずタコ焼きでも食うか

「ほれ」

「あ、ありがとう」

店の横にあるベンチに腰を掛け、タコ焼きの蓋を開ける

中にはピンポン球の様なタコ焼きが八個。これで３５０円は安い

「後はタコの大きさか」

爪楊枝でタコ焼きを刺して、一口

「……ふむ。中々デカイ」

そしてかなり美味い。やるなオヤジ！

「い、いただきます……あ、美味しい！」

「お、ようやく笑顔になったか。そうやって笑ってる方が可愛いぞ」

「はぐっ！？　痛っ！」

「ど、どした？」

「ひ、ひたはんだ……」

「大丈夫かよ。ほれ、見せてみろ」

「ら、らいひょうぶらから」

「良いから舌出せって」

酷い様なら軟膏を買って付けてやろう。……雪葉も昔は良く噛んだものだ

「……ん」

花梨は目を閉じ、小さな舌を俺に向けて出す。なんか猫みたいだ

「……大丈夫だな。タコ焼き食べれそうか？」

「……ん」

コクンと頷く花梨さん。やけに素直だが、悪い物でも食ったか？

……タコ焼き？

雪の秘密　7

【エスカレーター】

「え、えっとね、それが学校で流行ってるんだけどね」

「へぇ。そうなのか」

タコ焼きを食べ終わり、エスカレーターで五階のオモチャ売場に向かう途中。

花梨は何故か一緒懸命話し掛けてくる

「えと……昨日サッカー見た？」

「いや、寝てた」

「そ、そう」

「さっきからどうしたんだ、花梨。落ち着き無いぞ」

「だって……」

いつもの凶暴さがまるで無い。これはこれで大人しくて良いのだが……

「調子が悪いなら引き上げようか？」

雪葉達も見付からないし

「ううん、大丈夫よ。……心配してくれてありがとう」

そう言い花梨は笑顔を見せた

やっぱり体調が悪いのか少し変だ。だが

「そんな状態でも俺に協力を……」

「え？」

凶暴な子供だと思っていたが、こんなにいい子だったとは

「よし、花梨！　二人で頑張ろう！！」

「う、うん！」

花梨と言う素晴らしき友を得て、いざオモチャ売場へ！

これで居なかったら仕方ない。一度雪葉の携帯にメールを送ってみるか

なんて事を考えつつ、警備員の如くフロアを巡回

しかし

「……デートにオモチャ売場は無いかな」

「大丈夫よ。私、今凄く楽しいから」

花梨は俺を見上げニッコリと笑う

「そうか？」

ふ、やはり子供にはオモチャか。俺の様に大人になってしまったピーターンには分からない魅力があるのだろう

今日のお礼だ、何か花梨に……

「あっ！？」

花梨に何かを買ってやろうと周りを見渡した俺の目に、中睦ましく買い物をしている雪葉＆野郎の姿が！

「Ｏｎ　Ｓｈｉｔ！　あの糞野郎は何者だい！？」

余りのショックに欧米化が進む

「え？　あ、お兄ちゃん！？」

「あら雪？　それと広野さん」

「あ、花梨ちゃん、久しぶりだね～。それと恭介さんもこんにちわ」

「……貴様、壬也か」

それは運命（さだめ）に縛られた四人の男女が、宿星の導きにより出会ってしまった瞬間だった

雪の秘密　8

世界の名言集

・事実に目をつぶったからと言って、事実が無くなる訳じゃない。事実を消すには事実を知っている者全てを殺るしか無いのだ

・この道を行けばどうなるものか。危ぶむなかれ、危ぶれば道は無し。この道を踏み出せば、その一歩が道となり、その一足が道となる。迷わず殺れよ、殺れば分かるさ

・仏に逢うてば仏を殺し、祖に逢うてば祖を殺し、羅漢に逢うてば羅漢を殺し、妹の彼氏に逢うてば妹の彼氏を殺して始めて解脱を得ん

・殺って殺れない事は無い

・殺らずに後悔するより、殺って後悔しよう

・そうだ、殺ろう

・ああ殺ろう、殺ろう

「き、恭介さん？　僕を見る目がヤバいんですけど……」

「気にするな、ただの殺意だ」

「超気になる！？」

壬也は怯えた顔で俺を見る

「まさか壬也、お前が犯人だったとはな……」

壬也は去年まで、雪葉他何人かを学校へ集団登校させるリーダーだった男だ

とても世話好きで、雪葉も大変懐いていたが、まさか休日の昼にデートをするまで仲が進んでいたとは……

「さて、取り敢えず遺言書を用意してもらおうか」

「ハードル高すぎ！」

「なら辞世の句でも読み上げろ」

「とがなくてします！？」

「大丈夫、痛いのは最初だけで後は気持ち良くなるさ」

「安いＡＶみたいな台詞だ！？」

「いいからトイレ行こうぜ。仲良く連れションだ～」

「い、いやだ～。連れションとか言って一人だけで帰って来るつもりなんだ～」

「お兄ちゃん、壬也さんをイジメちゃ駄目！」

壬也に迫る俺の前に、雪葉は立ち塞がる

「ゆ、雪葉、お前……」

そこまで壬也の事を？

「壬也さん、雪葉に協力してくれたんだよ？　それなのにどうして？」

雪葉は泣きそうな顔で俺を見上げる。こ、これは恋する乙女の顔！

「ゆ、雪葉……。そ、そうか、そうだよな、もう雪葉は立派な女の子だもんな」

恋を知る年頃……か

「すまない、壬也。少しだけ興奮してしまった」

「あれで少し……」

「雪葉を……雪葉を頼んだぞ！」

ともすれば血の涙を流しそうになるが、壬也の肩に手を置き、想いを託す

「は、はい。あ、でも、もう終わりましたから」

「……終わっただと？」

ひと夏の恋で終わらせる気か！

「ちょっぴり大胆な季節ってかこの野郎！！」

「いたっ！？　何を言っててってか肩痛っ！　潰れる、潰れる～！？」

「や、止めてよ、お兄ちゃん」

「だ、だけど雪葉！」

「止めて！」

「はいっ！」

直立不動！！

「ごめんなさい、壬也さん。せっかく協力してもらったのに……」

「い、いや、良いよ。大丈夫、大丈夫。そ、それより恭介さんは一体……」

「あぁ？」

「す、すみません！」

「お兄ちゃん！」

「……すみません」

おのれ壬也め、雪葉を味方につけやがって！

「ひぃ！？　……よ、良く分からないけど僕、もう帰るよ」

「月の無い夜は気をつけろよ？」

「お兄ちゃん！　……壬也さん、今日は本当にありがとうございました。それなのにお兄ちゃんがごめんなさい」

「気にしないで、雪葉ちゃん。また何かあったら相談してね」

頭を下げる雪葉へ壬也は優しげに微笑み、

「そ、それでは恭介さん失礼します」

俺を見て怯えながら去っていった

「……雪葉達も行こ？」

雪葉は俺と花梨を見て、ため息混じりに言った

気のせいかも知れないが、兄の信頼が下がりまくったような……

「……ハァ」

俺を見上げ、静かだった花梨も溜息をつく

「ど、どうしたんだ？」

「別に。何と無くオチが分かったから」

「オチ？」

「あんたがバカだって事！」

【デパート、外】

「買い物？」

「うん。雪葉には分からない買い物だったから、壬也さんにお願いして一緒に探してもらったの」

「そ、そうなのか？」

俺のはやとちり？

「それよりお兄ちゃんはどうして花梨ちゃんと？」

「え！？　い、いや、たまたまデパート入ろうとした時に会ったから付き合ってもらったんだ」

本当は雪葉達を捜す為だったが、それを言うと兄の権威が落ちてしまうだろう

ふ、こうして嘘は嘘を呼んでしまうのだな

「……やっぱり。話の流れから薄々気付いてたけど……」

黄昏れていると、花梨は寂しそうにぬいぐるみと俺を見比べた

「ど、どした？」

「ほんと最低ね、あんた」

「え？」

「……帰る」

「な！？　ち、ちょっと待てって」

振り返り、俺達と逆方向に歩く花梨の手を掴む

「離して」

「今日は本当にありがとう、凄く感謝してる。だから……怒らせたまま帰したく無い」

「……」

「俺に出来る事があるなら何でもするから……機嫌直してくれよ」

「……なんでも？」

「ああ」

「なら……」

「お、お兄ちゃん、花梨ちゃん？」

雪葉は俺と花梨を見比べて、オロオロとする

「……大丈夫よ、雪。それよりお兄ちゃんに渡す物あるんでしょ？」

「え!?　う、うん」

「わ、渡す物？」

まさか絶縁状!?

「ハァ……。そこまでいくと、鈍いを通り越してバカね」

「ば、馬鹿って……」

傷付いていると、雪葉は肩に掛けてるポシェットから、リボンの付いたチェック柄の包みを取り出す

「はい、お兄ちゃん」

「え？」

「ゲームソフト。今日発売した人気作だって」

「今日発売……ブ、ブッチャークエストΩか!?」

累計一億本を売り上げた伝説的ゲーム！

「うん、そんな名前」

「な、何故俺にこれを？」

「父の日に……変かも知れないけど、今はお父さん居ないし、いつも雪葉を大切にしてくれるお兄ちゃんへ何かをプレゼントしたかったから」

「ゆ、雪葉……」

兄ちゃん、泣きそうだ

「……本当仕方ない人よね、あんたって」

泣きそうな俺を、花梨は呆れた顔で見て苦笑いをする

「もう良いわ。正直まだ少し早いって思ってたし」

「……なるほど」

何を言っているのかさっぱり分からん

「むっ、やっぱりちょっと腹立つわね……そうだ！」

花梨は何かを思い付いた様に頷き、そして悪魔の笑みを見せる

「か、花梨さん？」

「しゃがみなさい」

「へ？」

「何でもするんでしょ？」

「あ、ああ……はい」

迫力に負けてしゃがむと花梨は、よしっと頷き……

「……ん」

「なっ！？」

「えっ！？」

俺の頬にキスをした！

「ふぅ。……今日一日、弄んでくれたお返しよ」

花梨はそう言って俺に舌を出し、無邪気な顔で笑った

「それじゃまたね、雪。ついでにあんたも！」

そして、あっさり去ってゆく花梨

「……」

「……」

残されたのは沈黙し、ア然とする俺ら

「……お兄ちゃん」

その沈黙を雪葉が破る

「お兄ちゃん。雪葉はお兄ちゃんに、ちょっとお話があるのですが？」

「ゆ、雪葉君。君の声と表情に全く感情が感じられないのですが……」

「そうかなぁ？　ならこれならどう！！」

能面の様だった雪葉の表情が般若へと変化！？

「ひ、ひぃい！！」

今日の自業自得

俺

「お兄ちゃんのバカ！　もう知らない！！」

「お、俺は何もしてないよ」

「いーだ！」

つづけ球

第８８話：春のありがとう

「夏だ、海だ、遊園地だぁああ！」

「……めっちゃ混んでるやん」

日曜日。約束通り春菜と遊園地に来た俺

どうせ行くならネズミが居るあそこにって事で、大枚叩いて東京ブッチャーランドへと遥々電車を乗り継いで来た訳で……いやまぁネズミのアレって版権問題とか厳しいらしいやん？　ならブッチャーでええやん？

「兄貴、兄貴～」

このクソ暑いのに、俺の妹は腕を組んできやがった

「離れたまえ。暑いでは無いか」

「じゃ、手繋ぐ～」

ギュっと握る春菜さん。その握力はリンゴすら潰す

「何乗る、何処行く？」

目がキラキラと輝いてやがる。逆らうと怖いから適当にあしらっておこう

「……あれかな」

比較的人が少ない場所を指差す

「ん？　お！　パイレーツ・オブ・カリブ&地中海・イン・アフリカじゃん！」

「結局、何処なんだ」

アフリカなのか地中海なのか？

「人気あるんだぜ～」

「その割には人少ないな」

５０人ぐらいしか並んでない

「人気のアトラクションは人数が一度に多く入れるようにしている所が多いから、中途半端に人気ある所より回転が良いんだぜ！」

「とても素晴らしい説明ありがとう。……じゃ行くか」

何か気が乗らねー

一時間後

「アフリカすげぇ！　半端ねー！！」

「凄かったな、兄貴！　私、コイサンマン三十匹退治したぜ！！」

「俺なんかインド象、百頭ひっくり返したぜ！」

「すげーな兄貴は！」

「お前もすげーじゃん！　何はともあれ」

「アフリカ最高！！」

「アフリカ最高！！」

二人でガッツポーズ

「次は何処？　次は何処行く兄貴～」

「あれだ！　俺について来い妹よ！！」

「ああ！　何処までもついて行くぜ、兄貴！！」

こうして俺と春菜の遊園地紀行が始まったのでした

春のありがとう　2

「春菜、次はあれだ！」

「ああ！」

二十分後

「よし、次はあれだべ」

「うん！」

十七分後

「兄貴、次はあれ行こ～」

「あいよ！」

二十二分後

「兄貴、次はあれ乗りたいぞ！」

「おうよ」

四十七分後

「次あれ、次あれ～！」

「あ、ああ」

二十一分後

「よし、次！」

「わ、分かった、分かった」

二十五分後

「んじゃ、次はあれだな！」

「ハァハァ……、り、了解」

三十三後

「お、あれは行っとかないと！」

「は、春菜さん？」

「ん？　どうしたんだ兄貴？」

「す、少し、休ませて……」

三分後、ベンチ

「はぁ……ふぅ……」

「大丈夫か、兄貴？」

ベンチに座ると、春菜が俺の顔を覗き込み、心配そうに聞いて来た。

以前なら軟弱だ！　っとか言ってたのにな

「……ごめんな、兄貴。私、調子に乗ってた」

「何、しおらしい事言ってんだよ。気にするなって、少し休んだら次はあれだ！」

次は絶叫系じゃなさそうな奴にしようと思い指差した所は……

「……バ、バイトＤＥハザード？」

【バイトＤＥハザード】

ある派遣に登録するアルバイターが、深夜の病院へアルバイトに行く。

しかしそのアルバイターを待っていたのは、仕事では無く新薬によってゾンビ化した看護士達だった！

唯一の生存者であるアルバイター（君）は、たまたま落ちていた機関銃を手に取り、群がるゾンビ達を蹴散らしてゆく。果たして君は、院長の野望を阻止出来るか！　と、わざわざ説明する必要があったのかってなアクションホラーハウスだぜ

「やっぱ別のにするか」

ホラー系は全面的に駄目だからなコイツ

「だ、大丈夫！　所詮作り物だしな！！」

「いや別に他ので良いんだぜ？　俺も特別行きたい訳じゃないし」

そんな楽しい所でも無さそうだ

「行く！」

「そ、そうか？」

「ああ！　あ、その前にションベン」

「……せめてトイレと言っておくれ」

「じゃ、トイレ行ってくるぜ」

そして待つこと五分間

「ふぅ、すっきりだ！」

手をプラプラさせながら、春菜は戻って来た

「すっきりとか言わないで下さいね」

「んじゃ何て言うんだ？　ばっちり？　もっこり？」

「泣くぞ俺」

「ん～、良く分かんねーけど、きっちりした所で行くぞ～！！」

「きっちりでも無いからな。まぁそれは後で教えるとして……行くか！」

「お～！」

んで、バイトＤＥハザード

最大、五十人を収容可能なこのアトラクションは、余り人が並んでおらず二十分待ちで入れるとの事だ

五分ずつインターバルを置いて、一組一組入ってゆく。そしていよいよ俺達が入る番となった

「行くぞ、春菜」

「……」

春菜は俺の腕を軽く掴み、頷く。俺もホラーは苦手な方だが、此処は兄貴の偉大さをアピール出来る絶好の機会だ

「俺の側から離れるなよ？」

「……うん」

ふ、可愛い奴め

なんて余裕を持ちつつ、俺達は、不気味な外観の建物へ入って行った

春のありがとう　3

建物の中は薄暗く、病院のロビーに似た作りとなっていた

チカチカと付いたり消えたりする、非常口の緑光

耳を済ますと、微かに聞こえるうめき声と悲鳴

「……」

「……」

あれ、怖くね？

ガラガラガラ

「ひっ！？」

「ひっ！？」

車輪が回る様な音がした

「な、なんだ？」

「び、びびるよ兄貴！　ただキャスター付きの台が動いただけだよ！」

「あ、ああ……そう」

腰の辺りまで高さがある台が、俺達の方へゆっくりと向かってくる

「……」

「……」

俺達は無言でその台を見続けた

「……機関銃？」

台の上に、機関銃っぽい物が二丁置いてある。それと

「セーラー服？」

「私が着れば良いのか？」

「……いや、ギャグだろ多分」

十代には分からないだろうけどな

「……こうしていても仕方が無い。行こうぜ春菜」

「あ、ああ」

二人で機関銃を構え、通路を奥へと進む

「……」

「……」

部屋は幾つかあるが、基本に一本道だ。最終的には院長の部屋へ行

き、院長を倒して病院を脱出すればクリアーだ。……しかし

「……入ってみるか？」

プレートに手術室と書かれた部屋を指差す

「ヤダ」

即答。そして目が虚ろ！

「だ、大丈夫なのかお前」

「無理だし」

「へ？」

「怖いし」

「は、春菜？　うわっ！」

「っ！？」

ヒャーっと妙な冷気が、纏わり付くように吹いた

「な、なんだ今の……」

バタン！

通り越して来たドアが一斉に開き、そこから出て来たのは顔の崩れたゾンビ達！

「ぬお！？　で、出やがった～」

ゾンビ達はア～ア～言いながら迫って来る。超こえ～

「機関銃で追い払うぞ、春菜！　……春菜？」

「無理……無理ぃ！」

腰を抜かし、座り込む春菜さん。おまけにマジ泣き

「……リ、リタイアします」

ゾンビ達はコクンと頷き、部屋へと戻って行った

「ドアまで閉めて……」

礼儀正しいゾンビ達だ

「……じゃ出ようぜ」

グズッてる春菜の頭を撫でながら、手を取る

「ん……抱っこ」

「い、嫌だよ！？」

恥ずかし過ぎる！

「抱っこしろ～！」

「……あ～分かった、分かった」

何気に甘えっ子な所は昔と全然変わってない

「でも、ま」

頼られてちょっと嬉しかったりする俺も、昔と全然変わってないかもな

春のありがとう　4

「大丈夫か、春菜」

再びベンチ。グッタリしている春菜に買って来たコーラを渡す

「……ごめんな、兄貴。取り乱した」

「それは別に良いけどよ……ソフトクリーム食べるか？」

「いいの？」

「おいおい、遠慮なんてお前らしくないぞ。アイス食って元気だせ！」

「あ、ああ！」

元気良く頷いた所で目の前の屋台でソフトクリームを購入。ストロベリーとノーマルだ

「中々多いな……はいよ」

持つのに苦労しながら春菜にノーマルの方を渡し、俺はストロベリー

「サンキュ兄貴！」

「おうよ」

ベンチに座り一口食べる。結構粘り気があるのに舌でサラサラと溶

ける。甘味は控えめなのだが、ミルクとストロベリーの味はしっかりとして美味い

「むぅ……流石ブッチャーランド」

ソフトクリームにも手を抜かないぜ！

「……いただき！」

「おっとどっこいカウンター」

横から俺のソフトクリームを食らおうとした春菜をかわし、逆に食う

「あ～」

「ふっふ、甘いな春菜」

「うぅ……」

マジしょんぼりだ！？

「……たく、一口だぞ」

「うん！」

ソフトクリームを食べた後もあちこち遊び、気付いたらもう帰らなくてはいけない時間になった

「ふぅ……いっぱい遊んだな。帰りに軽くラーメン食って行こうか」

昼食って無いからペコペコだ

「ああ！　……えっと、今日は楽しかったぜ兄貴！」

「ん？　そりゃ良かった」

「うん……私は雪みたいに可愛いくないけどさ、またちょくちょく遊んで欲しいぞ！」

「バカ言ってんなよ」

「そ、そうだよな～。何言ってんだろ～、あはははは」

「雪葉もお前も俺にとって最高に可愛い妹だってんだ。言われなくても時間がある時はいつでも遊んでやるって」

「……ほんとか？」

「当たり前だろ！」

「あ、兄貴……」

「ん？」

「ありがとう！」

真夏の向日葵の様に元気な笑顔。やっぱ笑顔が一番お前に似合ってるぜ、春菜

そんな素敵な笑顔を見せる妹を見て、なんだか俺は誇らしい気持ち

になる

「兄貴、兄貴～」

その誇らしい妹が俺の右腕を取った

「あ、ああ」

「兄貴、兄貴、兄貴～」

誇らしい妹は両手で俺の腕をぶらぶら振りやがる

「お、おいおい」

「あ～に～き！」

「だ～うるせー！　抱き着いてくんなー」

「へへっ！」

今日のテンション

春＞＞＞＞＞俺＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞雪

で、オチ

「いえ、別に雪葉は怒っている訳では無いですよ。ただ、昨日あれだけ雪葉に怒られて翌日には遊園地ですか、そうですか。それはさぞ楽しかったでしょうね。いえ、別に連れて行って貰えなかったか

ら拗ねている訳では無いですよ。ただ、そういう非人道的行為は如何なものかと思いまして、ええ。そこの所はどうお考えですか、お兄ちゃん」

「ゆ、雪葉。ら、来週、俺と動物園へ……行きません？」

「……いく」

つづけりお

第89話：俺の元カノ

「月曜日は怠いな」

「……俺、来週結婚するんだ」

「誰とだよ」

「秋さんと」

「死ね」

そんなグダグタな会話をしながら友人のBと歩く放課後

今日も今日とて普通の日だった。だが、人が不幸に遭うときと言うのは、大体こんな普通の日だったりするもので……なんてな

「そうそう不幸に遭ってたまるかってんだ、なぁB。……B？」

「お前が何故、俺を記号で呼ぶのか分からないけど、今はそれどころじゃない」

目前にある急な坂。Bの視線は坂の上に向いている

「ん？」

夕日が眩しくて良く見えんが、どうやら人が坂を下っているようだ

「あの人ってひょっとすると、鳴神の……」

鳴神大学高等学校。隣町にある私立鳴神大学の付属高で、県一番の名門校だ。
だが、うちの高校も中々の進学校である。故に名門校だからと言ってビビらないのだ！

「な、鳴神様にお知り合いでも？」

「鳴神なら何度か合コンを……じゃなくてよ！　あれって今年、鳴神の生徒会長になった人じゃない？　超有名な」

「超有名だか何だか知らないが、俺は知らんぞ」

「一度見れば覚えるよ。……やっぱりそうだ」

軽い驚きと憧れが混ざったような声に釣られ、見てみると、坂を下りて来たのは

「久しぶりだな、君」

「げっ！　つ、燕！？」

「うむ。元気そうで何より、嬉しく思うぞ」

「え？　し、知り合い？」

「あ、ま、まぁ……」

「元恋人だ。君、彼を借りても良いかな」

「え？　あ、ど、どう……ぞ？」

「ありがとう。では行こう」

燕は有無も言わさず、唖然とするBを置いて俺を連行していった

「……ところで何処に行けば良い？　この辺の道は知らないんだ」

「……駄菓子屋でも行くか？」

で、約２００メートル程歩いてベンチのある駄菓子屋へ

「ほぅ！　中々良い店だ」

戦前からあるんじゃないかってぐらい古い木造一戸建て。
店内はお菓子とプラモで一杯で、奥の婆さんなんかもプラモじゃないかってぐらい動かないし昔から変わらない

「私はうまい棒の三種類でいこう。君はどうする？」

「俺はよっちゃんでって、お前なぁ」

「お前は止してくれ。高圧的だ」

「ハァ……すみませんね、燕さん」

この偉そうな物言いをする人は菊水　燕。元カノって奴だ

シルクの様な長く美しい髪に、ふっくら艶やかな唇。すらっとした

身体とそれに似合う意志の強そうな眼光。
近寄り難い程の美貌と圧倒的な知力を兼ね備えた、何処を切っても隙の無い金太郎飴みたいな女性だ
そして俺が唯一、秋姉より綺麗かもしれないと愚かにも思ってしまった人である

「随分他人行儀だな。少なくとも一度は好き合った者同士だ、遠慮無く呼び捨ててくれ」

うまい棒を口にくわえながらマジ顔されても……

「……死兆星はもう良いのか、燕」

「うむ、心配かけたな」

「そりゃ良かったな！　で、何の用だよ！！」

「回りくどい物言いは苦手なのでな、単刀直入に聞こう。もう一度私と付き合ってはくれないか？」

「断る！」

「少しぐらい考えてくれても言いと思うぞ、傷付くではないか」

「俺の方がよっぽど傷付いたっての！　ええい帰った、帰った！！」

塩、撒いたるで！

「帰ったと言われてもな……。しかし、今日の所は引き上げた方が

良さそうだな。だが諦めんぞ、いずれ第二第三の菊水　燕が現れ」

「ゴジラか！？」

「ショッカーだ」

何の会話だこれ

「とにかくだ、私はもう一度君とやり直したい。また一緒にゲーセン行ったりゲーセン行ったりゲーセン行ったりしよう」

「想い出はゲーセンだけですか！？」

他にも行ったやん！　……ボーリングとか

「君が教えてくれた脱衣麻雀。今ではワンコインで全て脱がせられるぞ」

「ろくな奴じゃないな俺って！」

あの頃は家族以外の女の子と付き合った事なんて無かったから、俺が良く行く所にばかり連れていったんだが……

「何処へ行くのも楽しかった。いや、ゲーセンばかりだったがね」

「すみませんね！」

「いや、本当に楽しかった。例えゲーセンでもな」

「実は根に持ってる！？」

「……ふふ」

「な、なんだよ？」

「やはり君は良い。会いに来た甲斐があった」

「いきなり振りやがったくせに何、素っ頓狂な事言ってやがる」

「……すまない。だが、君の事を嫌いになったから振った訳じゃないんだ」

燕は表情を暗くし、言いづらそうにそう言った

「……今更だぜ、燕。俺はもう吹っ切れてんだ、今また付き合うとか無理だよ」

「そうか……好きな人出来たか？」

「……ふ」

「ならまだ私にもチャンスがあるな」

「俺、まだ何も言ってませんよね！」

反論していると燕は急に立ち上がり、俺を見下ろしながら

「君が好きだ」

「いきなり告白！？」

「先ずは此処から始めたい。そして君が他の誰かの物にならない限り、私は諦めない」

「なんて男らしい……」

宝塚？

「……また会いに来る。身勝手だがそれを許してくれるだろうか？」

男らしく冷静だった燕の表情は一辺し、瞼を震わせ、小声て不安げにそう言った。……相変わらず狡い奴だ

「ハァ……良いよ。またゲーセン行こうぜ」

強気っぽい喋り方と容姿な癖して、本当は打たれ弱く、さみしがりや。秋姉とは正反対だ

「う、うむ！」

そして卑怯なぐらい無垢で無邪気。それと……

「嬉しいぞ、恭介。これほど嬉しい事は久しくなかった！」

「そりゃよかったな」

「うむ！　さて、この幸福を胸に持ったまま帰るとしよう。主人！　この棚にある駄菓子、全て購入したい。カードは使えるかね？」

「お、お前……」

それと、超世間知らず！

今日の買い占め

燕＞＞＞

第９０話：燕の元カレ

「ただいま～」

駅前で燕と別れ、家へ帰宅。久しぶりに燕と会い、やはり綺麗な奴だと思ったが、以前より俺の心はときめかない。何故ならば……

「……おかえり」

家にも女神が居るから！

「ただいま、秋姉」

わざわざ部屋を出て、玄関で迎えてくれる秋姉に感謝

「ん……お疲れ様」

最近、益々美しくなってしまった秋姉。このままでは歩いただけで男をショック死させてしまうのではないか？

「……？」

そんな心配をしていると、秋姉は俺の顔をジっと見て小首を傾げた

「どうしたの？」

「燕に会った？」

「えっ！　何故それを！？」

女神には隠し事は出来ないと言うのか！？

「……ん」

秋姉は俺の袖を指差す

「え？　……あ、香水か」

微かに残る香水の匂い。凄く薄いのに、流石女神

「……貴方と逢う時だけ燕はスズランの香水を付ける。スズランの花言葉は幸福の訪れ」

ニコッと微笑む秋姉。その笑顔こそが俺の幸福さ

「って、そうだったのか」

半年付き合っていたのに気が付かなかったぜ

「でも……よかった」

秋姉はホッとした様に言う

「秋姉……」

……ごめん

燕は秋姉の親友だったのに、俺のせいで気まずくさせてしまったのだ

「燕とはもう仲直り？　したから大丈夫だよ」

「……ん。……お茶」

「飲む！」

んで、リビング

「……はい」

「ありがとう」

クーラーをかけて、秋姉の容れてくれた熱い緑茶を飲む

「……ふぅ」

至福の時だ

「……はい」

「ありがとう」

お皿に二つ。近所の和菓子、花月のドラ焼きだ

秋姉は自分が三時前に帰ると、必ず俺と春菜と雪葉のおやつを自分のお小遣で用意してくれる。

　一度、嬉しいけど気を使わないで欲しいと言った所、悲しげな顔をさせてしまったので、今は素直に頂いているのだ

秋姉の選ぶお菓子は、どれも美味しく、何気に俺達の間で毎日の楽

しみになっているが、たまにジョーカ（手作り）があったりする

……そういえば燕と始めて会った時のおやつもドラ焼きだったな

お茶とドラ焼きを楽しみながら、俺はあの日の事をぼんやりと思い出す

燕の元カレ　2

燕と出会ったのは中二の冬。秋姉の部屋に燕が遊びに来たのが、きっかけだった

その日学校から帰った俺は、誰か居るかなと、先ずリビングへ行った。

　すると、リビング奥のキッチンに人の気配

『ん？　秋姉？』

何と無く秋姉のような気がして、呼び掛けながらキッチンへと入ると、冷蔵庫の前で腰に手を当てて麦茶を飲んでいる髪の長い女性と目があう

それは真冬に咲く花の様に凛とした雰囲気を持つ女性だった

隙無く整った容姿と、スマートでしなやかな身体。そして何より目立つのは、強い意志を感じる真っ直ぐな瞳だ

何この方、女神様かしら？　（この頃、俺の脳内では秋姉は天女）

そう思ってしまうのも無理のない美しさを、俺とそう歳が離れていなさそうな女性は既に持っていた

『君は秋の弟かな？』

口を開く女性。その声は高すぎず低すぎず、耳に小気味よく響く

『え、ええ、そうです……貴女は？』

『私は秋の友人で菊水　燕。宜しく』

『よ、宜しくお願いします』

俺の目を真っ直ぐ見て、ハキハキと答える女性に俺は圧倒される。
夏紀姉ちゃんとは違った威圧感だ

『君の名前を聞いても良いかな？　秋からは、あの子とだけしか聞いていないんだ』

菊水さんは苦笑いをし、軽い口調で俺に名前を尋ねた

『恭介と言います』

『恭介君か、良い名前だと思うよ。響きが綺麗だ』

そう言い、菊水さんは麦茶を一口飲む

『燕も可愛いと思いますよ』

『ぶふぅ！？』

『うわ！？　汚ねぇ！』

『ごほ、ごほごほ！』

『だ、大丈夫ですか？』

『君！』

『は、はい！』

『君は会って間もない女に平気でそう言うことを言える男なのか！？』

『そう言う事？』

『か、可愛いだとか！』

『え？　い、いや、名前がですよ？』

『わ、分かってる！　しかし、突然呼び捨てで、か、可愛い等言われては動揺するじゃないか！』

『す、すみません……。あ、菊水さん、鼻から麦茶が……』

『っ！　け、化粧室をお借りする！！』

そう言い菊水さんは顔を真っ赤にさせ、早足でトイレに向かって行った

「……」

酷い出会い方だな。ロマンのかけらも無い

「……燕の事、考えてる？」

「何故それを！？」

女神は思考さえも読むと言うのか！

「……呆れたような苦笑い。でも表情は柔らかくて嬉しそう」

「そ、そうかな？」

なんだか照れ臭いな

「燕も貴方を考えてる時や、貴方の話している時そういう顔になるよ？　……最近、見れなかったから見れて嬉しい」

優しく微笑む秋姉。その優しさが俺のアミノ酸！

「……まぁ、俺と燕は似てるらしいからね。前に燕の友達が言ったよ」

不器用な所とか何気に不運な所とか、ツッコミ気質な所とか……あれ？　良いとこ無くね？

「……似てる？」

秋姉の顔にハテナマークが浮かぶ

「あ、顔の事じゃ無いよ」

「似た者どうし？」

「そう、それ」

「……うん。二人とも優しいね」

「ありがとう」

秋姉には敵わないけどね

「そうそう、燕って言えばさ」

燕の元カレ　3

燕と言えば金持ちだ。家は日本舞踊の家元で、菊水流と言う、そのまんまやんけってな所らしい。良くは知らん

『家と私は関係無い、とは言えないが、それを含めて私を知って欲しい』

付き合い始めた頃、そんな事を言っていたな

「燕と言えば……男前だよね」

「……男前？」

「うん。なんか男らしいって感じしない？」

俺よりも……

「？　……燕は女の子らしいと思うよ？」

「う～ん。あ、でも菓子作り上手いしな」

確か最初に作ってもらったのは

『君は甘い物が苦手とかカカオアレルギーは有ったりするだろか？　あ、い、いや別に聞いてみただけだぞ？　意味なんてないんだ。いや、今日は何か変なイベントがあるらしいが、なんと言ったかな、バ、バレとかなんとか……。いや私はそのバ、バレンタイン？　とかに興味無いんだ。本当だぞ？　……と、ところでたまたまだが昨

日チョコレートを作ってみたりしたんだ。いや、たまたまなんだ。
……本当だぞ？』

「回りくどっ！？」

「？」

「あ、ご、ごめん。確かに女らしい所もあったかも」

『君、ズボンが破れているぞ。どれ、私が縫ってやろう。……
ど、どうやって縫うのか手本を見せてもらっても良いだろうか？』

「……」

「……恭介？」

「あ、いや……。お、女らしいね燕は」

「……うん。私も見習いたい」

「見習わないで～」

「？？」

首を傾げる女神に懇願しつつ、俺はお茶を一息に飲み干した

今日の回想

俺

『呆れただろう、私は何も出来ないのだ。……以前私を知って欲しいと言ったが、菊水以外の私などあるのだろうか』

『……燕が何を言っているのか分からないけど、燕は燕だろ？　不器用だけど純粋で可愛い俺の燕だ』

『っ！？　き、君はいつもそうやって私を～』

『な、何故怒る！？』

『知らない！』

津軽弁

第９１話：秋の見学会

「お兄ちゃん、お願いがあるの」

水曜日早朝。家族（二日酔いな人除く）で朝食を食べている時、雪葉が俺にそう言った

「ん？　なんでも言ってみな」

「あのね、来週の木曜日なんだけど……父兄参観日に来てほしいの」

「父兄参観日？」

「うん……。お兄ちゃんも学校あるから駄目だと思うんだけど……」

遠慮がちに雪葉は言う

「良いぜ。学校には少し遅れて行くから」

「本当！？」

「ああ。良いかな、母ちゃん？」

「貴方が決めた事なら母さん反対しないわ～」

「サンキュー。と、言う訳だ」

「ありがとう、お母さん、お兄ちゃん！」

不安げだった雪葉は、満面の笑みを浮かべた

ふ、可愛い奴め

「いいな～。兄貴～、私の参観日にも来てくれない？」

「良いけどいつだよ」

「……いつだろ？」

「……思い付きで喋るなよ」

全く……ん？

「そういえば俺にも今週何かあったな」

保護者見学会だっけ？　一日使って授業風景や昼飯時を保護者に見せるって奴だ。早い話、授業参観の強化版だな

「母ちゃん、金曜日暇？」

「金曜日は忙しいわ～。でも何かあるなら空けるわよ～」

「いや、いいよ」

別に来なくても良いし

ずずずと味噌汁を飲み干し、今日も美味しかった朝飯をごちそうさまだ

「ごちそうさま」

「チョロ松〜」

「……」

もはや何も言うまい

それから雪葉達も食べ終え、母ちゃんと秋姉が食器を片付け始める

「手伝うよ秋姉」

「……大丈夫。ゆっくりしていて？」

優しく微笑む秋姉。この微笑みで俺は三年戦える

「……あ、恭介」

「え？　何？」

秋姉はお皿を持ったまま俺をジっと見つめる

「……恭介」

「な、なに？」

「……私」

「え？」

「私が行く」

「……へ？」

「見学会。私が行くね」

「えええぇ！？」

秋の見学会　2

金曜日

ＡＭ　０８：３０

「おはよ、みんな。今日は見学会だけど、親御さんに格好悪いとこ見せるなよ～」

いつもはすっぴんだが、今日は軽いメイクをした担任の佐山先生が、私達にそうおっしゃいました

「さ～て、出席を……」

深海先生は教室を一望した後、何故か私の所で固まってしまいます

「……あ、あのぅ、父兄の方は授業が始まってから入室をお願いしたいのですが……」

「あはは、面白いな深海先生は。制服を着た父兄など居るわけが無いではありませんか」

「……」

「……先生、コイツ佐藤です。信じられないかも知れませんけど」

「さ、佐藤君！？　な、なにその……」

深海先生は目を丸くして

「七三眼鏡は！？」

と、おっしゃいました

ＡＭ　０９：３５

【数学】

「ではこの図形の計量をもとめて欲しいのですが……さ、佐藤君？」

一時間目は数学の授業です。数学担当の山岡先生は、何故か戸惑った顔をしながら私を指します

「はい、山岡教諭殿！　その答えはうんたらこんたらであり、なんたらこんたらであります！！」

「……は、はい、完璧ですね。ありがとう」

「はっ！　佐藤　恭介、着席致します！！」

授業が始まり、３０分

後ろを見ると、父兄の数もちらほらと現れ始めたが、今だ秋姉は来ていない。

しかし！　だがしかし俺は秋姉に恥をかかせる訳にはいかないのだ！！　いつ秋姉が来ても良いように完璧な俺でいてみせる！

ＰＭ　１０：０５

【英語】

「で～は～ミスター佐藤、お答えプリーズ」

「イエス！　サー田中！！　ペラペラでペラペーラのペラペーラ」

「オゥ、サンキュー。パーフェクト～。ベリーでキュートなナイス発音ね！」

ＡＭ　１１：４７

【音楽】

「ららら～るるる～」

「ああ！　なんて美しい声なの！？」

「涙が、涙が止まらないわ！！」

「も……あたし……ダメ」

「し、失神したぞ～。救急車だ救急車を呼べ～」

ＰＭ　１２：１０

【体育】

「うぉおりゃあああ！」

「砲丸を１６メートル！？　ば、馬鹿な！！」

「どりゃあああああ！」

「１００メートル１１秒ジャストだって！？　何でそんなに早いんだよあいつ！」

「おんどりゃあああああ！！」

「走り幅跳びで7メートルですって！？　な、何なの？　今日は佐藤君輝いて見える！　これが……恋？」

体育の授業は記録測定。俺は俺の限界を遥かに越え、クラスで一番の記録をとり続けた

明日は間違いなく動けなくなるだろう。だが、俺は今この時この一瞬の為に全てを賭ける！

「世界の果てまで飛んできやがれぇえええ～！！」

「遠投で１１０メートル出たぞ～！　野球部に来てくれ佐藤ぅう！！」

来ていた父兄は誰一人帰らず、いつしか皆が俺を見ていた

「だ、誰？　あの素晴らしい少年は一体誰なのかしら！？」

「あ、あれは佐藤君だ。あの有名な四姉妹唯一の男子、佐藤　恭介君だ！」

「……遂に眠れる獅子が目覚めおったか」

さぁ準備は整った。いつでも来てくれ秋姉！！

秋の見学会　3

体育の時間も終わってしまい、昼食の時間。秋姉はまだ来てない
約束は必ず守る秋姉だけに、何かあったのではと心配になってくる
「佐藤、弁当食わないんなら俺が食おうか？」
「……どうぞ」
「なっ！？　大丈夫か佐藤！！」
「どうしたH男！」
「佐藤が弁当要らないと言っているんだぁあ！」
「なんやて～！？　何があったんや、さとうぅぅう！」
……こんなテンション高いクラスだったっけ？
呆れながら見ていると、俺達の騒乱とは別の騒ぎが、教室内で出始めた
「……若いわ。誰のご家族かしら」
「……いや、なんて言うか凄い美人だな」
そんな声があちこちから聞こえる

「……ふ、来たか」

美人＝秋姉

それ以外の方程式は成り立たない

俺は敢えて慌てず、ざわめきに耳を貸す

「ん？　……あ、あれはまさか！」

親達の異変に気付いたクラスメート達は、廊下を見て驚愕する

「や、やっぱりそうだ。あの人は佐藤家のビーナス！」

「……そうだ」

お前らが今、見ているお方こそ現世に舞い降りたビーナス

「教室に入って来たぞ！　あ、あの方は、あの方こそは～」

「そうだ！　そのお方こそ美しき俺の女神！！」

勢い良く振り向き、俺は高々に宣言を

「佐藤　夏紀様だぁあああ！！」

ドンガラガッシャン！

「ぐぉおお～！」

「だ、大丈夫？　佐藤君」

椅子ごとぶっ倒れて身体を強く打った俺を、隣の席の加藤が心配してくれた

「……な、なんとか大丈夫」

起き上がり、恐る恐る顔を上げてみると……

「アタシが来たからって舞い上がりすぎよ」

両腕を胸の前で組んで超偉そうに立つ、スーツ姿の夏紀姉ちゃんが目の前に居た

「な、夏紀姉ちゃん？」

「あん？」

「何で此処に居るの？」

「……授業をわざわざ見学しに来てやった姉に対して、随分舐めた事ぬかしやがるわね？」

「え！？　い、いやだって確か秋姉が来るって」

「アキは午前の授業が終わったら直ぐに行くって言ってたわよ。アタシは自分の代わりに午前行って欲しいって頼まれたから来てやったのよ」

「午前って、もう午後……」

「アタシは朝一から居た。……分かるわよねぇ？」

「ね、姉ちゃんは一時間目から居ました！」

「そう。風邪気味で頭が痛い所を、弟の為に無理して来ちゃった素敵なお姉ちゃん。アキにはそう言いなさい」

「……はい」

「宜しい。じゃ、学食行きましょう」

「はい？」

「学食。結構美味しいらしいじゃない、此処の」

「ぼく、弁当あります」

「だから？」

「……H君。弁当食べて下さいね」

「あ、ああ」

ポカンとするHってか英雄に弁当を渡し、俺は夏紀姉ちゃんと共に学食へ向かった

秋の見学会　4

「混んでいるわね」

学校の食堂。珍しいのだろうか、結構親御さんが来ている

「端っこのテーブルが空いてるね。あそこで良い？」

「いやよ。日差しが強いじゃない」

「そ、そう？　でも他に空いてる所なんて……」

そんな会話をしていたら、入口近くのテーブルに座っている四人の先輩達が、食事中だと言うのに一斉に立ち上がった

「どうぞ、夏紀様」

その中の一人が、女王に対するしもべの如くひざまづくと、他の三人もまたひざをつく

「あら、ありがとう」

夏紀姉ちゃんは彼等に軽く微笑み、すっと後ろに引かれた椅子へ座った

「では夏紀様。私達はこれで」

「ええ」

頭を下げ、食事を持って窓際の席へ行く先輩達

「し、知り合い？」

「違うわよ」

「え！？　知らないのに何、今の！？」

「さあ？　そんな事よりさっさと注文して来なさい。アタシはレバニラ炒め」

さも当たり前の様に言う姉。この姉にとって周りの人間はしもべか何かと同じなのだろうか？

「……」

「早く行け！」

「はい、夏紀様！」

逆らえん……

迫力に負けた俺は、とぼとぼとカウンターへ行く

「おばちゃん、レバニラ炒めと茄子味噌炒め定食お願いします」

「あいよ！　今日は夏紀ちゃんが来たんだね～、美人になったもんだ！　あれじゃあ男共がほっとかないやね」

食堂で働くおばちゃんは、近所のおばちゃんだったりする。地元の

高校ならではだな

「……顔だけじゃ中身って分からないですもんね」

中身を知ればあれが魔王の一種だと気付くだろう

「そんな事無いよ。確かに写真か何かで顔だけを見たら少しキツく見えるかもしれないが、実際を見ると全然キツく無いだろ？　それは中身が良いからさ。恭ちゃんだって写真だと只の屍に見えるかもしれないけど、会うと優しくて可愛い顔してるじゃないか」

「……ありがとうございます。てゆーか俺ってそんなに死んでます？」

「……辛い世の中だけど、負けたら駄目だよ」

「慰められた！？」

「はい、出来たよ。温泉卵オマケしておいたから、栄養つけるんだよ」

「優しくされた！？」

何だか言いようの無いショックをうけつつ、両手にオボンを持って夏紀姉ちゃんの所へ

「……お待たせ」

「ご苦労」

ありがとうって言葉を知らんのかこの女

呆れながら夏紀姉ちゃんの向かいに座る

「それじゃ、いただきます……あら美味しい。生意気な」

「何故に生意気？」

「美味しい学食にクーラーまで付けてれば十分生意気でしょうに。アタシも此処入れば良かったかな」

「そんな理由で……」

「ま、あんまり高校に良い思い出が無いからね」

高校の頃、姉ちゃんには嫌な事があった。それは俺も知っている

「……後悔してる？」

「してないわよ」

夏紀姉ちゃんは、迷い無くあっさりと言う。多分それは今ある自分を信じているからだ

「……やっぱり姉ちゃんは強いな」

敵わない訳だ

「え？　……はぁ」

姉ちゃんは、いぶかしげな顔をした後、切ないため息を漏らす

「どしたの？」

「ビールが無いと寂しい……。失敗したわ、レバニラ」

「姉ちゃんってつまらない事では良く後悔するよね……」

なんて呆れながら言っていると、廊下がざわめく

ざわめきは次第に大きくなってゆき、食堂にまで届いた

「な、なあ見たか！」

「あ、ああ見た！」

「スーツ！」

「スーツ！」

スーツ？　はん……何、興奮してるんだか

「秋先輩、スーツ着ていたな！　超、かっけ～」

「……なんだって」

秋姉がスーツだと？　下らない

「誰かを探していたみたいだったな」

「……本当なのか」

もし本当なら……

「あ……秋姉がスーツ？」

「あん？　ああ、制服姿だとアンタに恥をかかせると思ったんでしょ。アキはそういうのこだわるからね」

「う……ウォオオオオオオオオ！！」

秋姉のスーツ姿ぁあああああああ！！

「やかましい！」

ナツキのこうげき

ナツキは俺のベンケイを蹴っ飛ばした。俺は１００のダメージ

「い、痛いよ姉ちゃん」

「スーツなんか珍しく無いでしょうが。アタシも着ているし」

「……そうだね」

全く興味無いけど

「しかしスーツかぁって探してるんだったな！」

早く食べて教室に戻ろう！

秋の見学会　5

「ごちそうさま！」

普段の倍近い速度で食べ、ごちそうさまをする。早く秋姉を探さなければ！

「早食いは胃に悪いわよ。……ごちそうさま」

「姉ちゃんも十分早いって」

「ま、とにかくこれでアタシの役目も終わりね。暑い中来てやったんだから感謝しなさいよ？」

「……ありがとう」

何しに来たんだろこの人

「さて、帰るわ」

「え～？　本当に帰っちゃうの～？　夏紀姉ちゃんにも見て欲しかったのに残念だな～」

帰れ帰れ！

「ん？　……ふん、いつまで経っても甘え癖が抜けない奴ね。しょうがない、残り二教科だっけ？　一教科だけ見てあげるわよ」

本当世話が焼けるわと、姉ちゃんはため息をつく

「え!?　い、いいよ!　忙しいんだろ?　姉ちゃんにそんな迷惑を掛ける訳にはいかないって!」

「あらそう?　なら貸しにしてあげる。今度返しなさい」

ヤブヘビ!?

「じゃ、教室に戻るわよ」

「う、うん」

大失敗だ……

ずんずんと、我が物顔で廊下を歩く姉ちゃんの後を、後悔と絶望を背負いついてゆく

途中、すれ違う人達が夏紀姉ちゃんをチラチラ見たり、好意的な声を上げたりしているが当の本人は気にも止めていない

「……図太いな」

「あ?　何か言った?」

「いいえ」

キョウスケは無表情を覚えた!

スキルアップしながら教室の前へ辿り着く

「秋姉は居るかな？」

俺は夏紀姉ちゃんと並んで教室へ……

「……姉さん。僕は一体なにを見ているのでしょう」

「は？」

「僕は今、奇跡を見ている」

「はぁ？」

「神様は本当に居たんだよ姉さん……ああ、ハレルヤ」

気付けば俺は涙を流していた。それは限りなく透明に近いブルー的な……

「……アンタ頭、大丈夫？」

姉がマジで引いてるが、そんな些細な事はどうでもいい

教室の中で凛と佇む花一輪。それは

「秋姉！」

「あ……恭介」

優しく微笑む秋姉だ！！

今日のハッスル

俺＞＞＞＞＞＞＞秋＞＞＞＞＞夏

ツヅーク

第９２話：会の賢人達

某日、某時、某所

空はまだ明るいが、夕焼けが冴える黄昏れ時

貸し切った会議室の中、俺と六人の賢人達が席に着いていた

「本日も暑い中、お集まり頂きありがとうございます。本日は【佐藤　秋様は何故あれほど美しいのか】を議題に討論を開始したいと思います」

「それは良い。しかし秋様の美しさを討論で証明出来るかどうか……」

議長である岡部が最初にテーマを言い、次にこの会議室を提供しているこの学校の生徒会長、遠藤が発言をする。いつもの事だ

そして遠藤はそのまま次へ繋ぐ

「私達の指導者、キングブラザーはいかが思われます？」

「……ゼウスの真の姿を見れば、人は焼け死ぬと言う。凡庸たる我らが秋姉の美を語れば舌が裂けるであろう」

「やはり！　……やはり人の身では秋様の美しさは語れぬかぁ！」

男子剣道部主将、赤田が吠えた

赤田は秋姉の素晴らしさを朝まで語る会の四天王の一人であり、健

康的に焼けた肌と、猫科の動物を思わせる柔軟性に富んだ肉体から、東海道の黒豹と呼ばれている猛者だ

「まて赤田、結論を付けるのは早い。……見ろ、マスターの目が閉じられている」

遠藤は熱くなる赤田を諭す様にそっと言った

「マ、マスターが思案なされておられる！　なれば我は只待つのみ」

流石赤田。熱くなっていても、直ぐに冷静を取り戻す

「ぼ、ぼく、マスタのこんな緊迫した姿、初めて見たよ！」

我がメンバーの中で唯一の一年、リオンが驚きと戸惑いの声を上げた

「リオンはこの幹部会に出席出来る様になってまだ日が浅いからね。よく見ておくんだよ、次にマスターの目が開いた時……星の運命は変わる」

いや、変わらないから。思わずツッコミを入れたくなる事を言う男は新谷

新谷とリオンは吹奏楽部のエースで、リオンはイギリスから来た交換留学生。

その細く長い指から放たれるピアノの旋律は美しく、天上のピアニストとまで呼ばれている

新谷は音の魔術師だ。殆どの楽器をいとも簡単に操る様は、悪魔の様に美しい

「……彼、目覚めるわ」

そして四天王最後の一人。紅一点にして希代の預言者、鈴花が呟く

「……ふぅ」

鈴花の声の通り、俺はゆっくりと目を開いた。上座に座る俺を、皆が音も出さずジッと見つめている

ゴクリ

唾を飲む音が、静かな会議室に響く

「……諸君」

「はい」

「うん？」

「はっ！」

「はい、マスタ！」

「なんでしょう？」

「……なに？　マスター」

「秋姉のスーツ姿を見たか？」

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……どうやら見た様だな。どうだ？　最高だっただろう？」
「はい！」
「確かに最高でしたな。否定しようが無い」
「あれが……女神か」
「格好良かったよ～」
「うん、良く似合っていたね」
「……わたし、見てない」
鈴花はいつも余り感情を出さないが、よほどショックだったのだろう珍しく悲しげに呟いた
「そ、それはまた……」
「そ、そんなにショックうけないで鈴花～。ぼく後でどれだけ似合っていたか説明するから～」
「……無常」

「また見れるよ、鈴花」

「いやいや、そうは見れまい。同じ学年で同じクラスの私ですら初めて見れたぐらいだ。運が無かったな鈴花。いや、しかしあれだけ大騒ぎになったと言うのに見れなかったとのは、もはやバカと言っても過言では無いな、はっはっは」

「……お前、今日三回サイフ落とす。メガバカ」

「ふ、私のサイフはチェーン付きだ。落とす訳……無い！？」

「デラバカ」

今日の不運

遠＞鈴＞＞＞＞＞＞＞岡≧赤≧リ≧新＞＞＞＞＞＞＞＞俺

なんだこりゃ

第９３話：夏の奴隷

「扇ぎなさい」

「……はい、お姉様」

午後七時。夏紀姉ちゃんの部屋

ベッドに腰を掛ける姉の前にひざまずき、団扇を扇ぐ俺。

先程までキングだった俺が、何故こんな暴君に仕えなくてはならないのだろう

「全く、アンタのせいで足が棒になったわよ。ほら揉みなさい」

「……はい、お姉様」

俺は機械の様に頷き、スーッと伸ばされた長く細い姉の左足を、やはり機械の様に揉み始める

「それにしても……ふふん。中々やるじゃない、アンタ」

夏紀姉ちゃん機嫌よさ気に言った。

この姉は結局二教科を見ていったのだが、スーツ秋姉と言うドーピングを打った俺に隙は無く、完璧な少年として絶賛されながら見学会は終了したのだった

「アキも喜んでいたわよ。いつになくはしゃいじゃって」

『恭介、凄いね！　凄いよね、姉さん！！』

五時間目の物理で、先生が遊びで出した有名大学の受験問題を解いた俺に、皆の大歓声が上がった

その中でもハッキリ聞こえた秋姉の声。

あの声を聞きたくて、俺は頑張ったのだ！　俺の脳内へエターナルメモリー！！

『まぁ、アイツにしては頑張ってるわね。簡単な問題だけど』

この声はどうでもいいや。消却っと

「んっ……痛っ！　もっと優しく揉みなさい！」

夏紀姉ちゃんは俺の頬にぐりぐりと足の裏を押し付ける。この屈辱はいつか王を倒す剣となるだろう

「……ふくらはぎカチカチだね。運動不足じゃない？」

「うっさい」

今度は右足が俺の頭を踏んだ。短いスカートで股を開く形になっているので、パンツがまる見えなのだが、この女に羞恥心は無いのだろうか？

「ん？　あっ！　アンタ、今アタシの下着見てたわね！」

姉ちゃんは慌てて足を閉じ、俺を睨む。てか

「……んなもん見たく無いっての」

「……あ？」

しまった！？　つい本音が！

「ご、ごめ」

「……あ～いいわ別に。暑いし」

姉ちゃんは、ぐたーっとベッドの横になった

「次、腰」

「……はい、お姉様」

「扇ぎながら」

「……はい、お姉様」

「子守唄も」

「ね～むれ～ね～むれ～お～ねぇさ～ま～」

「下手ね」

「ぐっ！　す、すみませんね、お姉様っ！」

「お茶。一分以内」

「……はい、お姉様」

「お茶菓子も」

「はい、はい！　分かりましたよ、もう！！」

今日のキング

夏＞＞＞

第９４話：雪のお仕事

起きた瞬間、俺は悟った

これはヤバイと

「う……ぎ」

呼吸をする事すら苦痛に感じる全身の軋み。そう、これは

「き、きんにく……つう」

地獄の土曜日が始まったのだ

「だ……だれか……」

助けを呼ぼうにも声が出ない。携帯を取ろうにも、そこまで身体を動かせそうもない

「だめ……か」

俺は、ともすれば潤みそうになる瞳で白い天井を眺める

ああ、俺は此処で天井を見ながら一人寂しく朽ちて逝くのか……

バタンっ

ドアが強く開かれた！

「兄貴～、遊ぼっ！」

現れたのは、白いＴシャツと短パンが涼しげな春菜さんだった

「よ、よく来てくれた、よく来てくれたねぇ……」

感涙を流す俺を、春菜は戸惑った表情で見る

「ど、どうしたの？　兄貴」

「じ、実は……」

三分後

「なるほどな、運動不足なのに無理をするからだぞ」

春菜は、メッと顔をしかめながら小さい子供を諭す様に言った後、ニッコリ笑顔を見せて

「私に任せな！」

「ま、まかせた」

今は只、妹に身を任そう

「よし。それじゃマッサージだ！」

春菜は俺に背を向けてベッドへ乗り、俺の腹を跨ぐ

俺へ体重を余り掛けない様に、軽く腰を浮かしたその気遣いは素晴

らしいが、偉大なる兄をケツに敷くのは如何なものか

「んじゃ足から行くぞ～」

「お、お手柔らかに」

「よしきた、よっと！」

春菜は俺の右足を両腕で掴み、胸に抱えて思い切り反ら……

ゴキン

「……」

「あはっ。良い音鳴ったな、兄貴！」

「……ぎっ、ぎゃあああああああ！！」

家中に響く俺の悲鳴は、子供の頃ニワトリの首を絞めた事がある母のトラウマを呼び戻しつつ、蒼天の空に吸い込まれて行ったそうな……

雪のお仕事　2

「どうしたの、お兄ちゃん！」

春菜の関節技によって、瀕死の重傷を負った俺を心配し、真っ先に来たのは雪葉だった

「ゆ……き……」

「お、お兄ちゃん！？　どうしてこんなにボロボロに……」

「大袈裟だって兄貴は。ちょっと足の関節を伸ばしただけじゃんか」

春菜はよいしょっとベッドから下り、雪葉の頭を撫でる

「お前のちょっとは中国雑技団レベルか……」

「お兄ちゃん……。春お姉ちゃん！　お兄ちゃんをいじめちゃ駄目だよ！」

「いじめてなんか無いって。私はただ、兄貴の世話を……」

「お兄ちゃんのお世話は雪葉のお仕事！」

「む！　別に私が世話しても良いだろ。私も妹なんだし」

「雪葉の方がお兄ちゃんのお世話出来るもん」

「マッサージだぜ？　雪葉は力が無いから駄目だって。此処は私に

任せてゆっくりテレビでも見てな」

「お姉ちゃんこそ、外で走ってくれば！」

「む！」

「む～」

バチバチッ！

夢か幻か、二人の間に青い火花が見える

「ゆ、雪葉さん、春菜さん。ケンカは良くないかと……」

「ならどっちが兄貴を上手く世話出来るか勝負するか？」

「良いよ！　勝負だよ春お姉ちゃん！！」

「望む所だ～！」

かくして血を分けた二人の姉妹の、儚くも美しい戦いは幕を開けたのでしたって、俺の意志は無視ですか……

一試合目

【マッサージ対決】

「制限時間は１５分。雪が右足、私が左足をマッサージするから、どっちが上手かったか兄貴は審査してくれ」

「あ、ああ」

「それじゃ最初は雪葉がマッサージするね」

「ああ」

雪葉はちょこんとベッドに乗り、俺の足を揉みはじめる

「……ん、ほほう、気持ちが良いぞ雪葉君」

「本当？　じゃ、も～っと気持ち良くさせてあげるね！」

ギュ、ギュと一生懸命の力で雪葉は俺の太ももを揉む。軽い痛みと、しっとりとした手の平の感覚が心地よく、うっかりすると眠ってしまいそうになる

「ふぅ……極楽じゃ～」

日頃の疲れもぶっ飛ぶぜ

ピピピピピ

夢心地だった俺を、無粋な電子音が呼び覚ました

「せっかく良い気持ちだったのに……」

「また後で揉んであげるね、お兄ちゃん」

「ああ、ありがとう」

ふ、可愛い奴だ

「さて次は私だな」

ゴキン、ゴキンと指を鳴らしながら俺に春菜は迫る

「ち、ちょっと待て。するのはマッサージだよな？」

「ああ。任せとけって！」

「任せたくねぇええ！」

十五分後

「か、軽い！？　軽いぞぉおおお！！」

まるで足に羽根が生えたような心地良さ。まさか日本にこれだけの技術者がおったとは……

「ストレッチとかマッサージは部活で毎日やってるからな」

「う〜〜」

悔しそうに春菜を見る雪葉さん。そう、この勝負は……

「勝負一回目。勝者は……春菜」

「おっしゃー！」

「次は負けないからね！」

雪のお仕事　3

第二試合

【料理対決】

「お母さん助かっちゃう～」

そんな母ちゃんの喜びの声で始まった第二試合。雪葉と春菜の二人が料理を作り、どちらの方が美味しいかを競う

「材料は好きに使ってね～。それじゃ～行って来ま～す」

俺達の昼飯を作る必要が無くなり、母ちゃんは上機嫌でスーパーへ買い物に向かった

「さて、腹ぺこな俺に料理を、との事だが……良いのか？」

俺は春菜に問い掛ける

俺が知っている限り、春菜が料理を作った事は無い。この勝負、圧倒的に春菜が不利だ

「大丈夫だって。実は最近料理の練習してたんだ」

春菜は自信有りげに言った

「そうなのか？　でも何で料理の練習を？」

食う以外の事に興味無いはずなのだが

「ん？　ん～、まぁ兄貴に何か食わそうとかなって」

「俺に？」

「ああ。兄貴はいつも私に美味いもん食わせてくれてるからな。だから……」

「……だから？」

「あ、な、なんでも無いから！　じゃ、先に私が作るぜ！！」

春菜は何故か慌ててキッチンへ

「……手強いかも」

「ん？　どうした、雪葉」

「うん……うん！　雪葉も頑張るからね、お兄ちゃん！！」

「あ、ああ、頑張れ」

何だか良く分からんが、雪葉は燃えている

「うおおおー！」

キッチンから獣の様な雄叫びが聞こえた

「……料理作ってるんだよな、アイツ」

「う、うん」

「……」

不安だ

「ちょっと覗いてみるよ」

雪葉をリビングに残し、俺はキッチンの中へと入る

「うおおー！　燃えろ、燃えろ～！！　料理は炎。炎を極めるのが料理だぁああ」

「な、なんと!?　春菜が操るフライパンに炎が噛み付いている！　これはまるで空を駆けし龍が月を食わんとする姿ではないかぁあああ!!」

「まだまだ～！」

「こ、米がフライパンの上でワルツを踊っているぜ！　そこにタマゴ婦人がやって来て、アンサンブルを奏でおるわ！　なんときらびやかな社交界！　こ、これはチャーハン!?」

「次はこれだ～！」

「な、なにぃ！　チャーハンに塩と豆板醤を加え、輪切りした赤唐辛子を入れて、更にババネロソースを混ぜるだとぅ!?」

一体どんなチャーハンが出来ると言うのだぁあ!!

「出来た！　これが私の灼熱チャーハン！！　さぁ兄貴、熱い内に味見をしてくれ！！」

春菜はレンゲで真っ赤なチャーハンを一口分すくい、俺の口元に運ぶ

「む、むぅ……見ているだけで汗がダラダラと出てしまう凄まじき料理よ。貴様の情熱、我が肉体に何処まで届くか試してやろう」

「はい、兄貴。あ～ん」

「あ～ん」

俺はチャーハンを一口食べた

……ピキーン！

「ぬうっ！　辛い中にも辛さがあり、その奥には更なる辛さが広かって、辛いながらも辛いってか辛～～！！！」

口が、口が焼ける！！

「みふ、みふぅう！」

「な、なんだ？　何が欲しいんだ？」

「ひふ、ひふ～！」

「ど、どうしたの？　あ、お兄ちゃん！？　ち、ちょっと待ってて！」

慌ててキッチンへ飛び込んで来た雪葉は、直ぐに状況を察したのか
冷凍庫からアイスクリームを取り出し、俺に差し出した

「あ、あひはと」

急いでカップを開け、一口

……ああ、舌が癒される

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「あ、ああ、大丈夫、ありがとな。春菜、もう少し辛さを抑えた方
が美味しいぞ、６０点って所だな」

心配そうな雪葉の頭を撫でつつ、肩を落としている春菜をフォロー

「……ごめんな兄貴。やっぱり私に料理は似合わないな」

「んな事ないっての。めちゃくちゃ辛いけど、美味いっての」

チャーハンをフライパンから皿に移して水を片手に一口、二口

「ぎっ！？　……ほ、ほら、うみゃいやんか！」

しかし辛っ！？　いや、美味ってか辛っ！！

「兄貴……」

「ひぃ、ふぅ、ひぃ……ふ、美味かったぞ春菜、サンキューな。

よし、次は雪葉の番だぜ！」

舌のダメージは深刻だが、どうやら俺は春菜の手料理が嬉しくて、テンションが上がっているらしい

「……ううん。雪葉の負けだよ、お兄ちゃん」

俺のテンションとは逆に、雪葉は若干沈んだ口調でそう言った

「雪葉？」

「春お姉ちゃんの初めての手料理に勝てるもの、作れないもん」

そう言い、雪葉はニコっと笑う

「雪……この勝負、無効だな！　でも次に料理する時は負けないからな！！」

「お姉ちゃん……うん！　雪葉も負けないよ！」

互いを認め、微笑み合う二人の姉妹。なんと美しき事よ

「まぁこれで雪葉の勝ちは無くなったけど、次もやるのか？」

最後は雪葉が勝ち、仲良く引き分けで天下太平、万々歳となれば理想だが

「引き分けは無いよ、お兄ちゃん」

そんな俺の考えを読んだのか、雪葉は大人びた微笑みでそう言い……

「最後の勝負は2ポイントだもんね！」

ニッコリと笑った！

「え〝！？」

「え〝！？」

勝負はまだまだ続くらしい

雪のお仕事　4

最終試合

【おもてなし対決】

「いや、おもてなしって言われてもね」

兄をもてなして、どうするのでしょうか？

「どっちがよりお兄ちゃんをおもてなし出来るか勝負だよ、お姉ちゃん！」

「よっしゃ～！　じゃさっそく……おもてなしって何？　……裏？」

「先ずは辞書を引いてみよう」

説明するのも面倒臭い

「おもてなしって言うのは、大切なお客さんを歓迎してお世話する事だよ。じゃあお兄ちゃん、お部屋で準備してくるから、お兄ちゃんはリビングのソファーで待っててね」

「はぁ、分かりました」

良く分からんが、適当に頷いておく。それは素敵な処世術

先にキッチンを出た雪葉を見送って、俺もまた春菜と共にリビング

へと行く

「おもてなし……う～ん」

「……まぁ、そんなに考える事は無いぞ。適当にやれ、適当に」

「適当か～、う～ん」

「……」

不安だ

チクタク、チクタク、チクタク、チクタク、チクタク

不安な気持ちを抱えつつ、お爺さんになってしまいそうな時計の音を聴きながら、ソファーで待つ事5分

「お待たせ、お兄ちゃん！」

リビングへ元気良く入って来たのは、体操着姿の雪葉さん

「……ちょっと待っててね、兄ちゃん頭痛くなって来たから」

「え！？　大変！　横になってお兄ちゃん！」

「ああ、そうさせてもらうよ……」

ソファーの上で横になる。このまま眠ってうやむやにした方が良さそうだ

「お兄ちゃん」

そんな俺の側に雪葉は来て、ソファーに座る。そして……

「……ひざ枕かよ」

ぱたぱたぱた

「団扇まで……」

涼しいけどさ

「耳かきと爪切りもあるよ」

雪葉は短パンのポケットから、耳かきと爪切りを取り出した

「あのなぁ……」

「はい、お兄ちゃん。飴だよ」

いちごミルクだ

「は、はぁ……どうも」

「あ～ん」

「お前ね……」

いや、まぁ良いけどさ

「なるほど、あれがおもてなし……」

「ち、ちが」

「よし、分かった！」

そう言い、リビングを飛び出す妹

「ち、違うぞ春菜～、これはおもてなしじゃないぞ～」

しかし私の声は届かなかったのでした……

雪のお仕事　5

「お兄ちゃん、耳のお掃除をしますので、横向になって下さいな」

「い、いや、いいから。それよりそろそろひざ枕を止めてくれないか？」

「駄目です♪」

「駄目って……」

まいったな

「兄貴、お待たせ！」

「お！　来……」

「……」

良いタイミングで飛び出して来た春菜を見て、俺と雪葉は口を開けたままポカンと固まってしまう

「ん？　どうしたんだ二人とも」

「どうしたんだってお前……」

お前がどうしたのって感じなのだが

「お、お姉ちゃん？」

「なんだ？」

「ど、どうしたの、その格好？」

「へ？　……ああ、これか。兄貴の背中でも流そうかと思ってさ」

「……で、水着か」

「夏らしくて良いだろ？」

黄色いビキニ。確かに夏らしいが

「君は馬鹿か？」

何処の世界に兄を水着でもてなす妹が居るんだっての

「さ～て、おもてなしするぞ～！　雪葉が枕なら私は布団だ～！！」

そう言い春菜は、いそいそとソファーへ近付き、寝ている俺の上にのしかかった

「ぐえ！？」

「あったかいだろ、兄貴」

「お、お前……」

もはやコメントすら浮かばない

「む～、お兄ちゃん！　横向いて下さい！！」

ボキ

「ふげっ！？」

雪葉に無理矢理両手で首を横向きにされると、首から心地良い破滅音が聞こえた

「しかし兄貴の胸は硬いよな～。私なんかこれだぜ？　羨ましいぜ！」

春菜は自分の胸を持ち上げた後、再び俺にペターっと覆いかぶさる

「へへ、硬い、硬い」

「お、お前なぁ……」

「お兄ちゃん！　次は右だよ！！」

ゴキ

「ほげっ！？」

再び首から破滅音がし、そして私の意識は薄れて行きました……

雪のお仕事　6

「ぐふぅ……お、御喪手南……死……」

「お、お兄ちゃんが不良さんみたいな言葉を言いながら泡を噴いて！？」

……あれ？　いつの間に俺は外に出たんだ？　此処は何処なんだろうか？　……わ～、あっちに素敵なお花畑に囲まれた綺麗な川がある～、行ってみよ～

「お、お兄ちゃんが白目でニコニコしながら痙攣を！？　し、死んじゃ駄目！　死んじゃだめ～！！」

あ、川の向こうで手を振ってるのは親父だ～。えへへ～、俺も今そっちに行くぞ～

「そ、そんな……う、うそだろ？　あ、兄……貴……い、嫌だ……嫌だ、嫌だ！　死なないで、死なないでくれ兄貴～！！」

「う……う？」

川に向かう途中、背後から二つの光が俺を呼んだ。……なんて暖かい

俺は振り返り、その光へ向かって歩き出す

そして俺は、その光に向かって手を延ばした

「兄貴！」

「お兄ちゃん！」

「……お、お前……た……ち」

俺の両手は涙を流す二人の妹達に、しっかりと握られていた

「此処は……家？」

さっき三途とか、そういう名前が付きそうな不思議空間へ行ったような気もするが、まぁ良い

「よ、良かった……」

雪葉は、力が抜けたようにヘタっと床へ座り込んだ

「……俺は一体？」

何が起きたんだ？

「……ごめんなさい、お兄ちゃん。雪葉がお兄ちゃんの首を……」

ああ、そうだ。頚椎を破壊する必殺技を喰らったんだったな

「だが生きている」

カサンドラに捕まってそうなセリフを言いつつ、身体を起こす。

首は痛いが、我慢出来ない程では無い

「だからもう泣き止めよ、雪葉。おもてなししてくれるんだろ？」

「……ううん、今度こそ雪葉の負け。そもそもお兄ちゃんを巻き込んでお世話勝負をする事自体、おかしいよね」

弱々しく微笑む雪葉。その雪葉の頭へ、俺は自然と手を延ばしていた

「楽しかったぜ、ありがとう雪葉」

「あ……えへ」

「……いいなぁ」

そう呟く春菜の頭も撫でて、

「春菜もな、ありがとう」

「……へへ！」

俺は良い妹達に恵まれているな……首痛いけど

「あ、首大丈夫か？　ちょっとほぐしてやるよ」

春菜は俺の後ろに回り、弱い力で首を刺激する

「むぅ……痛気持ちい」

「雪葉、ジュース持ってくるね」

雪葉いそいそと台所へ行き、トレイに三人分のジュースを乗せて戻って来た

「はい、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

テーブルにジュースを乗せ、俺の傍らに座り、団扇を扇ぎ始める

「うむ、涼しいぞ」

極楽だ～

なんて極楽気分を味わっていると、ガチャっとリビングの扉が開いて……

「……ただいま」

秋姉が帰って来た!?

「あ、秋姉！　おかえりなさい！！」

「ん……？」

秋姉は俺達を見て、目を丸くする

「あ、こ、これは！」

体操着と水着姿の妹に、首を揉ませ、団扇で扇いでもらっているこの姿は……

「……酒池肉林？」

今日のハーレム

俺＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞春≡雪＞＞秋

ツタヤ

第９５話：母のお小遣

「違う、違うよ、違うんだよ！！」

必ず死ぬと書いて、必死。そう、俺は必死だった

「……違う？」

ソファーから飛び起き、必死の弁明をする俺を、秋姉は不思議そうに見ている。あれ？　余り気にしてない？

「おかえりなさい、秋お姉ちゃん」

「おかえり、秋姉」

「ん。……涼しげ」

秋姉は春菜へニコっと微笑み、次に雪葉を見て

「……体操着？」

首を傾げた

どうやら秋姉の理解は、

夏→暑い→水着→涼しい

夏→暑い→体操着→？

と、なっているらしい。というか、水着をスルーしてくれた奇跡を俺は神に感謝したい。

多分水着だったのが、腕白な春菜だったからだろう。ありがとう春菜さん

「ん？　なんだ、兄貴？」

「いや、なんでも……そ、それで、体操着なんだけど……そ、掃除してたんだ～俺達！」

話を合わせてくれと、血走っているだろう目で二人に訴える

二人は目を白黒させながらも、頷いてくれた

「ん……ご苦労様。……着替えたら私も手伝うね」

そう言い、秋姉はリビングを出て行った

「……セーフ」

ホッと息を吐く。寿命が３３時間縮んだぜ

「……変な兄貴」

「大きなお世話だよ、こんちくしょう」

元はと言えば誰のせいだと思ってんだ

「それより早く着替えて来いよ」

「暑いし、このままでも良」

「良くないっての。さっさと着替えて来なさい」

「……は～い」

春菜は渋々と言った感じで返事をし、部屋へ向かって行った

「さて雪葉君」

「はい、お兄ちゃん」

雪葉は、じーっと俺を見つめ、言葉を待つ

「……ま、いいか」

掃除に体操着なら有りだろう

「しかし……ごめんな、急に掃除する事になって」

「ううん、お掃除好きだから。それよりお兄ちゃんは大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」

心配そうな雪葉の頭に手を乗せ……た時、リビングのドアが開いた。

そして現れたのは

「……お待たせ」

割烹着姿の秋姉だ！！

「な、なんて家庭的な姉なんだ……」

流石嫁にしたい姉、Ｎｏ．１。この座は当分安泰だろう

「お掃除……頑張ろ？」

「はい！　粉骨砕身、死ぬ気構えで頑張ります！！」

背筋を伸ばして最敬礼！

「……お兄ちゃんって」

「……なにさ」

「……ううん、良いの。お兄ちゃんが幸せならそれでいいの」

何かを諦めたような妹の微笑みは、慈愛に満ちていた

「……と、とにかく掃除だ～！！」

「……お～」

母のお小遣　2

雪葉と俺。秋姉と春菜それぞれパートナーを組み、掃除は始まった

俺と雪葉はリビングと台所。秋姉と春菜は、玄関とトイレそして浴室を担当

秋姉のように高貴な生まれの方にはトイレ掃除など似合わない。
　そのような仕事は、えた、ひにんであるこの俺が！　…とは流石に言えなかった。空気を読む弟、それが俺である

「秋姉～、この混ぜるな危険っての混ぜてみて良いか？　どうなるのか、すげ～気になる」

「……だめ」

「おっ、洗濯カゴに秋姉のパンツ発見！　……う～ん、こんな生地少ないの良く掃けるな～動き難くない？」

「ひ、広げないで……」

「ぬわ！？　蛇口捻ったらシャワーが出て来た！　びしょ濡れだ～あははは！！」

「あ……タ、タオル」

……頑張って、秋姉

「さて、俺達は……」

「窓のサッシにある埃をハケで掃いて欲しいな、お兄ちゃん。それが終わったら掃除機で細かい砂とかを吸って。その間に雪葉は床を拭いておくから。

あ、お兄ちゃん。ガラスを拭く時は先に表から拭いてね。最初は濡れ雑巾を軽く搾った物でさっと拭いて、次は強く搾った物で拭き、仕上げにから拭きお願い。それが終わったらの次のお願いをするね」

「……はい」

なんて的確な指示なのだ。我が妹ながら末恐ろしい

「うわー洗濯機から大量の泡が～助けてくれ、秋姉～」

「お兄ちゃん、畳の黄身はお酢で落として下さい。あ、駄目です、それじゃかえって染みになってしまいます！」

「……」

「……」

キツイかも……

母のお小遣　3

掃除から三時間経過

「お、終わった……」

この暑い中、年末の大掃除並の掃除をした結果、部屋はとてつもなく綺麗になってしまった

「ご苦労様、お兄ちゃん。今、お茶を容れるね。お姉ちゃ～ん、ある程度めどがついたら終わって良いよ～。残りは雪葉がやるから」

昔から思っていたが、我が家で一番しっかりているのは間違いなく雪葉だな

そしてお茶会

「あ～疲れた～」

春菜はソファーに、ぐてーと座り込み茶をがぶ飲み

「ん……お疲れ様」

秋姉は春菜に微笑みかけるが、お疲れなのは間違いなく秋姉の方だろう

「はい、お兄ちゃん。お茶のおかわりですよ」

「ああ、ありがとう。……雪葉は良いお嫁さんになるだろうな」

簡単にはやらんけど

「……えへ」

「ふー、しかし暑いなぁ」

「……クーラー付ける？」

「ううん、いいよ。秋姉は大丈夫？」

「……うん」

汗一つかいていない。やはり女神

「お前達は？　暑ければつけるぜ」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

「余裕、余裕！」

「そう……」

暑がってるの俺だけ？

「ただいま～。……あら～」

玄関からのんきな声が聞こえた。どうやら帰って来たらしい

「あらあら～」

母ちゃんは、あらあら言いながら洗面所や風呂場の方へ行き、最後にリビングへとやって来た

「おかえりなさい、お母さん」

「おかえり～」

「……おかえりなさい」

「おかえり」

「ただいま～。間違えて新築の家に来ちゃったと思ったわ～」

「んな大袈裟な」

「お掃除ありがと～。かき氷買って来たから、氷食べましょう～」

「よっしゃ、かき氷！　むしろメロン！！」

「雪葉、イチゴミルクがいいな」

「……レモン」

「練乳、貰った！」

「お母さんは小豆～」

かき氷と木のスプーンを受け取り、フタを開けて凍りに刺すと、シャリっと心地良い音がなった

んで一口

「……うむぅ」

暑い中で食うかき氷は最高だぜ！

「ぐわ～頭が～、助けてくれ～兄貴～」

隣に座る春菜が頭を押さえながら、俺の膝元に寝そべってきやがった

「どう助けろってんだ」

「なでろ～」

「……お前ね」

「……お兄ちゃん！　雪葉も頭が痛いのです！」

「はい、はい。撫でてやるから、ちこう寄りなさい」

「はい、お殿様♪」

「うふふ」

妹達の頭を撫でる俺を、母ちゃんは細い目で見守り……

カッ！

「うわぁ！？」

母ちゃんの目が、いきなり見開かれた！

「驚いた～？」

「そりゃ驚くわ！」

下手すりゃ心肺停止もんだぜ！

「うふふ～」

母ちゃんは嬉しそうに微笑みながら、ショルダーバックから財布を取り出した

「うん？」

「お小遣い～」

母ちゃんは、青い猫型未来ロボットの様な口調でそう言い、俺達一人一人に五百円玉を渡す

「うお！？　やった～」

「サンキュー母ちゃん」

「ありがとう、お母さん！」

「……ありがとう」

「どういたしまして～」

それから数十分、ノンビリと会話して

「それじゃ母さんは夕ご飯の準備するわね～」

「雪葉も手伝うね、お母さん」

「ありがと～。さて、よっこいしょういち恥ずかしながら帰還っと」

「その掛け声、かえって立ち上がり難くない？」

ツッコミつつ、俺も立ち上がる

「七時になったらご飯よ～」

「はいよ」

「……少し走ってくる」

「お、私も付き合うぜ～」

「ん」

母ちゃんと雪葉に続き、秋姉と春菜が消え、そして誰も居なくなったリビング

「これが孤独……か」

ゲームやろ～っと

ピコピコピコリ、ピコピコリー

こんこん

「ん？　開いてるよ」

ゲームをする事、３０分。電子音に混じってドアをノックする音が聞こえた

「入るわね～」

「ん？　母ちゃんか。どうしたの？」

立ち上がり母ちゃんを迎えると、母ちゃんは一枚の封筒を差し出す

「なに？」

「お小遣、パート２～」

「はい？」

訝しながら封筒を受け取り、開けてみる

「ん？　さ、さんみゃん円！？」

お久しぶりな諭吉トリオに、俺の鼓動はドキドキもん

「な、なんでこんなに……」

「明日、雪葉を連れて動物園に行ってくれるんでしょ？　だからお

小遣。

本当なら母さんが連れて行ってあげるべきなのだけど……ありがとう恭介。母さん、恭介に頼りっぱなしね」

「……俺は好きでやってんだよ、気にしないで」

家族だってのに水臭いぜ

「貴方は本当にいい子ね～」

「ぬわ！？　止めろ、撫でるな～」

「それじゃ母さんは、ご飯支度の続きしょ～。またね～」

「あいよ」

母ちゃんはヒラヒラと手を振りながら、リビングの方へ向かう

さて、俺は……

「……ムフ」

三万円！

雪葉でも誘って、明日のおやつでも買いに行くか！

今日のお小遣

俺＞＞＞＞＞＞＞＞雪≧春≧秋＞夏

つづからく

第９６話：燕の逃亡

お小遣を貰い、雪葉とおやつを買いに行った帰り道。
もうじき我が家へと着くと言う時に、俺は不審過な人物を目撃してしまう

「……何をやってるんだアレ」

「う～ん。なんだろ？」

一歩進んで二歩下がり、三歩進んでは二歩下がる

その不審過ぎる行動を取る人物の他に、もう一人誰かがいる。
どうやらその人は女性の様であり、不審人物者を見守っている様に見える

「うむ～」

謎だ

謎ではあるが、此処を通らんと家に帰れん

「お兄ちゃん？」

「ん？　ああ、何でも無いよ」

別に心配する必要は無いんだろうが、いざとなっても雪葉一人守る事ぐらいは出来る

「さ、帰ろうぜ」

「うん！」

雪葉の手をしっかり握って、俺達は不審な連中の方へと歩く

「……のあ……だ……ら」

「でも……でしょう？」

「うん？　何処かで聞いた事があるような……あ」

近付くにつれ声と姿がはっきりとして来て、あの不審人物者達は、俺が知っている人間だと言う事が分かった

「しかし、のこのこと家に行き、なにしに来たんだよ？　などと言われたら……」

「そんな事を彼は言うの？」

「……言わない」

「だったら」

「でもそれは彼が優しいから……」

「とにかく会ってきちんと話をしなさい。彼だってどうして突然別れを告げられたのか知りたいでしょう」

「で、でもぉ……」

「……ふふ」

「な、なんで笑う！？」

「ごめんなさい。ただ、鬼の生徒会長がこんなに可愛い女の子だってみんなが知ったら、驚くだろうなと思って」

「む……可愛いなどと言わないで欲しい。私には一番似合わない呼び名だ」

「そう？」

「私を可愛いなどと言う馬鹿者は……。一人だけでいい」

「うふふ。やっぱり可愛いわ、燕」

「可愛いと言うな～」

「……」

「どうしたの？　お兄ちゃん」

「……いや、ちょっとな」

物凄く出て行き難い

「だけど、いつまでも此処に居たって仕方ないでしょう。どうしても足が進まないなら今日はもう引き上げましょ？」

「……確かに足が震えて前に進まない。しかし、しかし逢いたいのだ！　だから私は行く！　止めるな、ゆかな！！」

「止めてませんよ。それじゃ、私は帰りますね」

「え！？　あ、ち、ちょっと待ってくれ。彼の家のインターホン押すまで傍に……何を見ているのだ、ゆかな？」

ゆかなが、俺に向かって頭を下げる。……気付いてやがったか

仕方なく俺は二人に近寄る

「何を……うわ！」

うわって……

「な、なんでっ、ぐ、ゴホ、ゴホ！」

「だ、大丈夫か？」

「う、うむ。……な、なんで君が此処に？」

「俺ん家ですよ、そこ」

「そ、そうだったな。そうだ、そうだ」

……変な奴

「お兄ちゃんのお友達？」「まあな。……久しぶりだな、ゆかな」

「そうですね、恭介君。お元気でしたか？」

「ああ……で、そっちの小さくなってる奴」

「う……」

「時間あるなら茶でも飲んでけよ、二人とも」

「はい、一服頂きます」

「燕」

「……う、うむ」

「よし、行くぞ野郎ども～」

「お～！」

「はい」

「……」

「お、ノリが良いな雪葉」

「えへへ」

「ふ、可愛い奴め」

「あ……お、お～」

「……へ？」

「……恭介君、フォローしてあげて下さい」

ゆかなは、小声で俺に耳打ちするが……

「な、何をフォローすれば良いんだ？」

「鈍感ですね」

ゆかなはニコニコ笑顔で言うが、明らかに少し怒ってる

「はぁ、分かったよ。……可愛いぞ燕」

「ひぅっ！？　う……ぅぐ……か、帰る！　私もう帰る！！」

そして燕は逃げる様に走り去って行った

「……」

「……」

「……ごめんなさい恭介君。燕には後できっちりと怒っておきますから」

「……お手柔らかにな」

「はい。それでは失礼します」

「ああ、気をつけて」

燕を追うゆかなを見送り、唖然としている雪葉に声をかける

「雪葉」

「あ、うん……。お兄ちゃんのお友達って……何だか元気な人だね」

変な人と言いたいんだろうな

「まーな。……さ、もう日が落ちる。家に入ろう」

「うん」

しかし何しに来たんだ？

今日の不審者

燕

つづからせ

第97話：院の動物園

「……」

「アミバ動物園へようこそ」

「ようこそ～」

日曜日。電車に乗って三駅の場所にある動物園へ来た俺達を、何処かで見たことがある従業員達が出迎えた。が、関わるのはよそう

「……さ、先ずは象でも見に行こうか雪葉」

「うん！」

「ピロリロリン。放置プレイで私の好感度アップ。イベントでラブ的なホテルへ誘えるようになりました！」

「今、横に妹が居るんですけどねぇ！」

「こんにちは。今日は動物園、楽しみにしていました。宜しくお願いします！」

「うっ、真っ直ぐな瞳。流石に妹さんとは……秋さんとなら魅惑の3」

パコン！

「あいた！？」

「いい加減にしなさい！　……すみませんね、佐藤君。今日はお暑い中、よく来て下さいました。冷たいラムネをサービスしていますので、どうぞお持ち下さい」

そう言い、宗院さんは足元のクーラーボックスからラムネを取り出す

「お、ありがとうございます。お～、めちゃくちゃ冷えてますね」

「はい、お嬢さんも」

「はい、ありがとうございます！」

雪葉はぺこりと宗院さん達に頭を下げ、嬉しそうにラムネを受け取る

「うわ、可愛い。お姉さんは秋さんですし……とんだ勝ち組野郎ですね」

「ふ、否定はしませんよ。さ、行こうか雪葉」

「うん！　あ、さよならお姉さん、おじ……お兄さん」

「またね～」

「行ってらっしゃい」

院の動物園　2

客が殆ど居ない動物園。経営が心配になりつつ、象がいるフロアにやって来た俺達

象は始め、建物の影でしゃがんで休んでいたが、俺達の姿を確認すると怠そうに立ち上がり、柵の近くへと来て鼻を左右にぶらつかせた。サービス誠心が旺盛な象だ

「しかし大きいな」

「お兄ちゃんの象さんとどっちが大きい？」

「そりゃ俺ってうぉおいい！？」

雪葉を真似たらしい声に振り返ると、後ろにはいつ来たのか青い作業着姿の綾さんが居た

「お兄ちゃんの見えっ張りっ♪」

綾さんは舌を軽く出し、ウィンクをする

「お兄ちゃんの……象さん？」

「なんでもない、なんでもない！」

「……長いな」

「長いね～」

「その立派な象さんを想像し、私は夜な夜な」

ガシッ！

綾さんの頬をアイアンクロー！

「いい加減に～！　し・て・く・だ・さ・い！！」

「あう～あうあ～」

「分かりましたか！？」

「ひうひう」

コクコク頷く綾さんを解放

「ひぅ～」

「全く！」

「象さんで……夜な夜な？」

「なんでもない、なんでもないぞ～！」

首を傾げる雪葉に、必死のごまかし

「は～痛かった。ではリンゴどうぞ」

「唐突過ぎません！？」

「象さんにあげてみて下さい。喜びますよ～」

そう言って綾さんは、俺と雪葉にリンゴを一個づつ手渡す

「あ、成る程。ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

「いえいえ。ではまたお会いしましょう」

綾さんはヒラヒラと手を振って、いずこかへ去っていった

「……素直にリンゴだけを渡してくれれば、普通に良い人なんだけどな」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！　象さんにリンゴをあげてみて良い？」

「ああ、勿論……と、言いたい所だが危なくないのかな？」

普通、従業員か何かが側にいるのでは？

「はい、はい、リンゴですね。ちょっとお待ち下さい」

奥にある建物から、やっぱり青い作業着姿の宗院さんが、デッキブラシを持って現れた

「はい、花子さん。リンゴの時間ですよ」

ぱおっと短く鳴き、宗院さんの誘導の元、柵の外側に居る俺達へ鼻

を伸ばす花子さん

「ぞ、象さん。リンゴだよ～」

雪葉が恐る恐るリンゴを差し出すと、花子さんはひょいとリンゴを鼻で掴み、器用に口へ運んだ

「うわぁ、うわぁ～！」

雪葉は大はしゃぎ

「花子さん、凄～い！」

「ふふ。ほら、兄ちゃんのリンゴもあげてみな」

「良いの！？」

「ああ、どうぞ」

「ありがとう！」

ふ。この笑顔が明日への活力さって随分と親父臭くないか俺？

院の動物園　3

「……長いな」

「長いね～」

象の次に見に来たキリン。見ている客は俺達二人だけだ

と言うか先程からマジで客が見当たらない。

明らかに人間より動物の方が多そうなのだが、本当に経営は大丈夫なのだろうか

「キリンさんはどうしてあんなに首が長いんだろ？」

キリンを見上げたまま、雪葉はポツリと呟く

「ん？　う～ん、なんでもキリンの祖先は他の動物に較べて餌を採るのが下手だったらしくて、生存率が低かったそうなんだ。

そこでキリンは、他の動物が食べようとしない高い所にある葉っぱを狙う様になり、何代も世代を重ねて少しずつ長くなったそうだ。ま、絵本の受け売りだけどな」

「へぇ～。キリンさんは凄く努力したんだね！」

「ダーウィンの進化論って奴だな」

「ダーウィンの進化論？」

「うん。首の長いキリンは、首の短いキリンよりも有利だ。それは

餌取りの事だけでは無く、天敵に対して身を守り易くなるからだ。
　首の短いキリンは身体も大きくなれず、天敵に食べられたり、餌が取れなかったりで絶滅し、長い種類のキリンだけが生き残これた。
　そして生き残った首の長いキリンは、少しずつより首を長くしてゆき、今のキリンが産まれていった……そんな感じかな」

「ええ、そんな感じです。ただし、その説を立証するには首の短いキリンと長いキリン、その中間、進化している最中のキリンの化石か骨が見付からなくてはなりません」

「その言い方だとまだ化石は見付かっていないのですね、と言うか、いつ俺の横に来たんです？」

いつの間に現れたのか、バケツを持った宗院さんが俺の右横に立ってキリンを見上げていた

「はい、進化途中と見られる化石はまだ見付かっておりません。ちなみに『何代も世代を重ねて』の辺りから居ました」

「成る程。ではキリンの進化は一斉に突然起きた、と考えた方が自然なのですかね？　しかし作業着似合ってますね。バイトですか？」

「シンクロニシティ。ある日、今まで無かった事柄が、一斉にあちこちで起こる奇跡。
　そのような奇跡がキリン達に有った。そう思う事はロマンチシズム過ぎますかね。それとバイトには先週から来ています。徳永は今日だけのアルバイトですが、給料は何故か私の方がかなり低いです。何故でしょう？」

「ロマンを無くした人生は寂しいですよ。俺はそう言うの、嫌いじ

ゃありません。給料の件は、園長さんに相談して下さい」

オッサンと美女では差が出るのも仕方ないとは思うけど

「ロマンも良いですが、今はマロンが欲しいですねぇ」

ぐ～、と宗院さんの腹が鳴り、宗院はバケツに入っている果物を見た

「……腹壊しますよ」

「いや、食べませんよ？　はははは」

目が泳いでいるが指摘しないであげよう

「では私はキリンに餌をあげてきます。またお会いしましょう」

「いや、そう何度も会わなくても……」

「それでは」

そして宗院さんは颯爽と去っていった

「……他に従業員居ないのかな？」

「……」

雪葉は何かを言いたそうな顔で、俺を見上げている

「ん？　……そろそろ昼だな、何か食べようか」

「あ……うん！」

院の動物園　4

「いらっしゃいませ～。飯処、食い倒れにようこそ～」

「……」

この先３００メートル、ランチあります。との看板に導かれ、着いた所は海の家のような簡易な骨組みの木造建物だった

そこでは、俺達を鹿の角を付けたメイドが出迎えて……って

「奈良か！？　い、いや、違うな……メイドか！」

これも何か違う気がするけど……

「いらっしゃいだシカ、ご注文は何だシカ？」

「その語尾、凄い安っぽいですね」

「シカ、シカ！」

鹿が角で攻撃してきやがった！

「え～いウザったい！」

鹿の角を払うと、角は取れ、床に転がった

「ぐ……私の弱点を見破るとは……流石です」

鹿はってか綾さんはヨロヨロと、キッチンらしき方に去っていく

「……さて、取り敢えず座ろうか、雪葉」

「うん！」

兄ちゃん、なんだか疲れたよ

「お待たせだネコ～」

よっこいしょと四人用テーブル席に座ると、鹿の次は何故か尻尾が二つあるネコ耳のメイドが現れてしまった

帰りたい。俺は今、とても帰りたい

「はい、メニューで～す。どうぞ」

「……どうも」

ネコからメニューを受け取って広げると、動物と食べ物が合わさった名前が書かれていた

「雪葉は何食べたい？」

「カバさんラーメン！」

「即答！？」

しかもカバっ！

「カ、カバさんな。それじゃ俺は……よし、決めた！　ネコさん、俺は」

「ネコじゃ無いネコ。ネコマタだネコ。そして気になる弱点は、その名の通り、おま」

「き～さ～ま～！！」

綾さんの頬にアイアンクロー！

「ひう、ひう～～」

「俺はワンパク熊さんカレー、雪葉はカバさんラーメン！　分かりましたか！？」

「ひう～」

「よし」

ネコを解放

「はぅう……クセになったら責任取って下さいね？」

「絶対に嫌です」

「ツンデレきた？」

「何も来てませんから、とっとと行って来なさい！」

「は、は～い」

綾さんは逃げる様にキッチンへと入って行った

「全く！　……う！？」

雪葉がジっと俺を見ている

「あ……あの……、雪？」

「可愛いかったね、ネコマタさん！　お兄ちゃんのお友達？」

「あ、うん……。一応……多分？」

「はい、お友達です！」

両手にカレーとラーメンを持ち、綾さんが飛び出して来た

「早っ！？」

「早い、エロい、ちょっとエロいが、お店のモットーですから」

「ろくでもないモットーですね」

「しかしその言葉とは裏腹に、俺の象は雄叫びをあげてしまうのだった」

「取り敢えずラーメンとカレー置いて下さいね。叩けないから」

「……すみませんでした。はい雪葉さん、カバさんラーメンです」

「ありがとうございます！」

「お兄さんには熊さんカレー」

「どうも……う！」

カレーは野獣の香りがした

「先日、この動物園で熊が亡くなったそうです」

「ちょっと待てぃ！　何ですかその唐突過ぎる情報は！？」

まさかこのカレーに入っている肉は！

「このナルトさんとか、お肉、カバさんの形してる～」

嬉しそうにナルトを食べる雪葉。メルヘンチックで素晴らしい

「さ、お兄さんも冷めない内に召し上がれ……だネコ」

「中途半端なキャラ設定は要らないですよ！　ちくしょ～」

出された物は、きちんとと食べる。そう教育された自分が恨めしい

俺は覚悟を決めて、カレーを一口……

「……う、うま～い！！」

口に含んだ瞬間、無限に広がるスパイス。

マッタリと舌に絡み付きながらも喉をすんなり通り、胃袋の中ま

でうま味が満ちてくる

「その中でも際立つのはこの肉だ。始めは生臭い肉だと思ったが、一口、また一口と噛む毎に味を変えてゆきおる。今では何故か、完熟したメロンの味にまで変わりおったわ！」

「……それって絶対カレーに合わないと思う」

「ううむ～、こんなカレーを作る職人がまだ日本におったとは……。シェフだ、シェフを呼べぃ！　おなごだったら嫁にしてやるわ！！」

「はい」

綾さんが軽く手を挙げた

「？　……えぇいシェフを呼べぃ！」

「はい」

綾さんが軽く手を挙げた

「……」

「……」

「……チ、チェンジで」

「不可です」

「……」

「……」

今日の見つめ合い

俺≦徳

つづたいら

第９８話：徳のクッキー

「私、徳永　綾音。女子高生で花の１７歳！
知り合いの冴えないオッサンが此処で働いていると言うから、からかい半分で来てみたらなんと私も働く事に！？　びっくり！
そこでは意地悪な先輩のイジメや上司のセクハラ、そして望まぬコスプレを強要され、私の心はもうズタズタ。もう辞めたいな、田舎に帰ってばっちゃんと畑でもやりたいな……。
そうだ、今日働いたら辞表を出そう。そしてパワハラで訴えて慰謝料を勝ち取ろう。そう自分を慰めて、最後の仕事に出る私。ああ、今日も私はお客様に卑猥な言葉を言わされてしまうのだわ。恥辱と微かな興奮、昏く疼く肉の喜びに身を震わせながら私は、最後のお客になるだろう兄妹へ食事を届けたのでした……。
そしたらなんと、なんとなんと！　お客様に嫁に来いなんてプロポーズされちゃったの！？　これからどうなるの私の運命！」

「食べ終わったか、雪葉？」

「うん！　ご馳走様でした」

「ああ、ご馳走様。店員さん、お会計お願いします」

俺は、俺に出来うる最上級の爽やかな笑顔で、綾さんにそう言った

「……。流石に私も恥ずかしんですよ？　９８０円です」

「なら、やらなければ良いのに……はい１０００円。お釣りは、うまか棒でもお食べ下さい」

ガックリと肩を落とす綾さんに千円札を渡し、俺と雪葉は店を出るのであった

「お兄ちゃんのお友達って……元気な人だね」

店を出て少し歩いた頃、雪葉は俺を見上げてそう呟く

「……雪葉は本当にいい子だなぁ」

思わず頭を撫でてしまう

「……えへ」

「ふふ。さ、次は何を見に行こうか？」

「カバさん！」

あれ？　この子、カバ好き？

「カ、カバね。カバは……お、あそこに掃除をしている人が居る。聴いてみよう」

俺達は黄色い作業着を着て、鼻唄を歌いながら道を掃き掃除している男性に近寄り、声をかける

「すみません」

「はい、なんでしょう」

振り返ったその人は

「宗院さん！？」

「おや、またお会いしましたね。奇遇だ」

「奇遇っていうか……」

この動物園、他に人居ないのだろうか？

「それで、どうかしましたか？」

「あ、えっと……カバってどちらにいます？」

「カバですか。カバはあちらにありますライオンの檻の前を右に曲がると見える、フラミンゴ園の先にいらっしゃいます」

「あ、そうですか、ありがとうございます」

「いえいえ。ではまた」

そう言って宗院さんは、掃除を再開する。その後ろ姿と鼻唄に哀愁を感じてしまう

「……頑張れ、スペシャルアドバイザー」

徳のクッキー　2

その後カバさんを見て、ウサギ共と戯れ、猫に小判煎餅をあげていると、空は赤みが射して来た

「……五時か。そろそろ帰らないとな」

「もうそんな時間なんだ、早いなぁ……」

「本当だよな、まだ半分ぐらいしか見てないのによ。ま、夏休みに入ったらまた来れば良いさ」

「うん！」

「じゃ、帰ろう」

雪葉の手を握り、俺達は出入口に向かう。夕陽で伸びた影が、動物園を離れる事の微かな寂しさを感じさせた

「良い動物園……なのかもな」

人は少ないが、きちんと整備清掃されていて、何処か暖かい

また来よう。今度は雪葉の友達の、花梨や美月も連れて

「ありがとうございました～」

「ありがとうございました」

出入口に着くと、灰色のサファリールックを着た宗院さんと綾さんが俺達を見送りに来ていた

「……此処の動物園って他に人、居ないんですか？」

「居ますけど、皆さんこの動物園で一番人気の、おっ起つレッサーパンダさんの方に行ってらっしゃってます」

「嫌な言い方しないで下さいよ……。しかし成る程」

動物園の奥の方では、歓声みたいな物が上がっていると思ったら、そういう事か

「広いですからね、この動物園。今日は楽しめましたか、雪葉さん」

綾さんはしゃがんで、雪葉の視線に合わせる

「はい、凄く楽しかったです！」

「良かった。ちょっと待ってて下さいね」

雪葉の言葉に微笑み、綾さんは腰に付けているポシェットから手の平サイズの小袋を取り出した

「はい、どうぞ。２３種類の動物さんクッキーです。レアは口をあけたカバさん、探してみて下さい」

「うわぁ、ありがとう、お姉さん！」

「いえいえ～」

「……ありがとう綾さん。手作りなんでしょ？」

じゃなかったらカバなんかをレアにはしないだろう

「時間が少し空いていましたし、クッキーの型も有りましたからね。はい、お兄さんにも」

「お、ありがとう」

「レアは水玉パンツ姿の綾ちゃんクッキー」

「型、無いでしょ！？」

今日の疲労

院＞＞＞＞＞俺＞＞＞雪＞＞徳

「カバさん見っけ！　かわい～」

「良かったな雪葉～、あはははははぁ……」

……無いじゃんか、レア

つづたまら

第９９話：俺の夢

「お兄ちゃん！」

リビングでお茶を飲んでいると、雪葉が怒りの表情を浮かべて俺の前へと来た

「ど、どうした雪葉？」

「私は雪葉では無い！」

「は？」

「見破れるかな？」

不敵に笑うと、雪葉の身体が三重にブレ出す。乱視か？

「ふふふ」

「ふふふ」

「ふふふ」

「な、なに！？　雪葉が三人に！」

「さぁ、お兄ちゃん」

「本物の雪葉は誰か」

「当ててみて」

「う、うむ～」

姿形は勿論、声も雰囲気も同じに見える

「お兄ちゃん大好き！」

右の雪葉が俺の左腕に飛び付き、ギュっと抱きしめてきた

「雪葉も好き～」

左の雪葉は俺の右腕に

「……」

真ん中の雪葉だけ、遠慮がちに俺を見つめて寄って来ない

「俺の大切な妹は真ん中の雪葉だ！！」

そう叫んだ瞬間、左右の雪葉は消えた

「あ……お、お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

ひしっと抱き合う兄と妹。何と美しき光景よ

「お兄ちゃん♪」

「なんだい、雪葉」

「引っ掛かったな」

「え？　なっ！？」

消えた筈のニセ雪葉が甦る

「私達の中に本物なんていなかったのさ！」

「な、なんだって～！」

「本物は……」

がちゃり。リビングのドアが開く

「ただいま～。……え？　お、お兄ちゃん、その妹達は誰！？」

「ゆ、ゆき」

「おに～ちゃん」

「えへ～」

「ちゅっ。大好き～」

「あ……う……お、お兄ちゃんのばかぁ！　ウルトラシスコン！！」

雪葉は泣きながら、リビングを飛び出した

ま、まって、ゆ

「雪葉～！！　……？」

気付くとそこはリビングではなく、俺の部屋だった

辺りはまだ暗く、当然、三人の雪葉は居ない。時計の針は午前二時を指す

「……夢？」

夢か……

「ふぅ」

恐ろしい夢だった

コンコン

パジャマの袖で額の汗を拭っていると、ノックの音が部屋に響く

「ん？　誰？」

「……私」

「秋姉！　ちょっと待ってて！！」

「……うん」

俺は慌ててベットから飛び起きた

俺の夢　2

「い、いま開けるからね」

途中、あっちこちにぶつかりながら、なんとかドアの前にたどり着き、開ける

「お待た……なっ！？」

開けた先には、髪を後ろに縛った秋姉が大きめのワイシャツを一枚着ただけの姿で立っていた！

「な、な、な！？」

なんやて！

なんやて！！

な～ん～や～て～！！！

「……サービスシーン」

「ナイスサービス！！」

読者も大満足や！

「……大丈夫？」

「え？　な、なにが？」

「ん、さっき……大きな声」

「あ！　ご、ごめん。ちょっと怖い夢見て」

「夢？」

「う、うん。ちょっと悪夢を……」

「……部屋、入ってもいい？」

「え！？　あ、ああ、もちのろん！」

「ん……おじゃまします」

秋姉が俺の部屋に入った瞬間、部屋は浄化され、清純な空間となる。
空気清浄機の約５０倍は効果あるだろう

「お、お茶持って来ようか？」

部屋に散らばる本を整理しながら尋ねと、秋姉はううん、と応え

「……ねぇ、恭介」

俺を呼ぶ

「え？　あ……」

呼ばれて振り返ると、秋姉はいつの間にか俺のベットで正座をしていた

「ど、どうしたの？」

「……貴方が眠るまで、ひざ枕してあげる」

「ええ！？」

「いらない？」

「是非！」

夢なら覚めないで！

「ん……おいで？」

「は、はい！」

音速を超えるマッハでベットへと行く。ソニックブームですら今の俺は止められない

「で、では……」

ベットに寝転び、頭を秋姉の側に寄らせる

「……うん」

そして俺は、恐る恐ると秋姉の太ももへ頭を乗せた

「……ああ」

柔らかく、良い匂いで、暖かい

「此処が俺の……ラストパラダイス（巻き舌）」

生きてるって素晴らしい

「……恭介」

俺の頬に触れ、優しい声で囁く秋姉

「な、なに？　秋姉」

「……実は私」

秋姉は潤んだ瞳で俺を見つめ……

「男なんだ」

「うほ！？」

「……今まで隠していてごめん」

「う、嘘でしょ？」

「……ん」

秋姉がワイシャツのボタンを外すと、そこには立派な胸板が！

「ひ、ひぃい！」

「……ごめんね」

「こ、これからもずっと隠していて！　忘れるから～」

「……秋兄誕生」

「い、嫌だぁあああ！」

そんな新キャラ、嫌らねぇえええええ

「ええ……え？」

気付くとそこは俺の部屋ではなく、見知らぬ部屋だった

辺りはまだ暗く、当然、秋兄は居ない。壁に掛けてあった時計の針は午前三時を指す

「……夢？」

夢か……

「ふぅ」

恐ろしすぎる夢だった。トラウマに成り兼ねん

「しかし……」

あまり物を置いていない、このすっきりとした部屋は……

「ううん」

「え！？」

俺の右横で、誰かがもぞりと寝返りを打つ

「……って春菜か」

俺、こいつの部屋で寝たんだっけか？

一緒の布団で寝ているってのは不可解だが、たまに有る事だし……

ん？

「いっ！？」

起き上がると、何故か俺は裸で……

「む、胸！？」

デカイ乳が付いていた！

俺の夢　3

「う……あ、お姉様おはよぉ」

「お姉様！？」

「どうしたの？」

「ど、どうしたのって……え？　なにこれ」

何でこんなセクシーな乳が？　い、いやそうじゃなくて、俺が女って……

「あら？　お姉様、まだ起きるには早いみたい。太陽さんが、まだおねむよ」

「お前、キャラ違くね！？」

「……本当に大丈夫？」

春菜は布団から起き上がる。春菜もまた、何も身につけていない裸体だった

「つか、寝巻きぐらい着て寝ろよ！」

「何を言っているの？　私達の寝巻きはシャネルの五番でしょう？」

「マリリン！？」

「恐い夢を見たのね、姉様。……可哀相なお姉様」

春菜は、そっと俺の腕を手に取り、胸で抱きしめる

「ゆ、夢？　い、いや、俺は確か男で……」

「何を言っているの？　うちは六人家族で五姉妹の女系家族じゃない」

女系家族！！

その単語を聞いた瞬間、俺の身体に電流が走った

「そ、そう。今までの事は全て夢だったのね……」

どうりで私だけモテない筈だわ。女が女にモテる訳無いものね！

「……長い夢だったわ」

今となっては、なにもかもが懐かしい

「春菜、確かに朝はまだまだ先のようね。もう一眠りしましょうか？」

「はい、恭子姉様」

春菜を胸に抱き、その温もりを感じつつアタシは寝るのでした。もう、変な夢を見ないように祈りながら……

［女系家族］

出演者

長女、佐藤　夏紀

次女、佐藤　秋

三女、佐藤　恭子

四女、佐藤　春菜

末っ子、佐藤　雪葉

母、母

【完】

「って、違うだろ！！」

「うあ？　うぁ……スピースピー」

「あれ？　此処は……」

気付くとそこは、春菜の部屋ではなく、リビングだった

辺りはまだ暗く、当然、俺に胸はない。時計を見てみると、針は午前四時を指す

「……いたたた」

テーブルに突っ伏して寝ていたらしく、身体の節々が痛い

「ふぅ……ん？」

目の前にはビールの缶に埋もれて眠る夏紀姉ちゃん。どうやら酒を飲んでる途中で眠ってしまったらしい

「たく、風邪引くっての」

俺はため息を付いて、夏紀姉ちゃんを起こすべく立ち上がった

俺の夢　４（前書き）

次でいよいよ百話！　読んで下さった皆様、ありがとうございました！！

俺の夢　4

「姉ちゃん、起きな」

「うぃ～」

夏紀姉ちゃんの肩をゆさゆさを揺さぶるが、起きやしない

「起きなよ、風邪引くって」

「う～うるさい～。むにゃむにゃ……くしゅん！」

「……たく」

俺は姉ちゃんの腋の下に手を回し、軽く持ち上げる

「ほら、部屋に行くよ」

「うひゃひゃひゃ！」

「早く立て～」

「う～、……ひっく」

渋々と起き上がる姉ちゃん

「はい、良く起きました。じゃあ部屋に行こう」

「うぃ～」

ハルク・ホーガンの様な雄叫びとポーズをする姉の肩に手を回し、よたよた歩きの姉と共に俺はリビングを後にする

「アタシは酔ってないわよ～」

「ね、姉ちゃん、みんな寝てるから……」

「酔っても無いのに酔っぱらい。これいかに。イカ煮。蟹。……蟹、食べたい」

「……」

嫌だねぇ、酔っぱらいは

「あ、今、酒臭くて乱暴な馬鹿姉だって思ったわね～！」

「うん。あ、い、いや、そんな事無いって！　いつも尊敬してるって！」

「嘘つけ～」

「ほ、本当だよ本当！　最高の姉で最高！！」

「最高ですか！」

「お、お～」

「最高！」

「い、イエス！」

「……嘘つき」

「へ？」

「嘘つき、嘘つき、嘘つき～」

「ち、ちょ、階段で暴れないで！　危ないから！」

それから幾度のデットオアライブを繰り返し、何とか連れて来た姉ちゃんの部屋。

姉ちゃんをベットに転がし、俺は力尽きる

「ハァハァハァ……疲れた」

「偉大な姉を運んで疲れただぁ？　そんな軟弱な弟をアタシは持った覚えないわよ！」

むかりんこ！

「す、すみませんねぇ！　どうせ俺は馬鹿で軟弱で弟失格なアホでございますよ！」

もう知らん！　風邪でもひけってんだ！！

俺は部屋を出ようと、ドアに向かう

「な、何よ～、そんなに怒る事ないじゃない」

急にテンションが低くなった。酔いどれレベル3ぐらいか？

「ちょっと喝を入れただけなのに……」

ちょっと？　喝？　どういう感覚してるんだこの姉

呆れた顔で見ていると、夏紀姉ちゃんは弱気な表情をし、

「……謝れば許してくれる？」

と言った！？

「え？　ええ！？　えええええ～！！！」

傍若無人で、魔王の一人で、地獄の酒飲みの異名を持ち、悪魔的ドSの称号をもった、天上天下唯我独尊の夏紀姉ちゃんが俺に謝るぅううう！？

「……ごめんなさい」

「イャアアア！　何かとり憑いてるぅう！！」

おんきりきり、おんきりきり

「謝ったって事で、遠慮なく命令」

「んじゃ、俺、もう寝るから」

やっぱ何も、とり憑いてないや。普通の夏紀姉ちゃんだぜ

「アタシが寝るまで側に居なさい」

「……は？」

なんじゃそりゃ

「返事は？」

「……はい」

パブロフの犬の様に、条件反射で頷いてしまう

「じゃ、電気を消しなさい」

「……はい」

俺は電気を消し、ベットの横にある一人掛け用ソファーに腰を下ろす

「……はぁ」

真っ暗な部屋。ため息を付くと、悲しくなる

カチコチ、カチコチ。カチコチ、カチコチ

時計の針音が、切なく響く

カチコチ、カチコチ。カチコチ、カチコチ

で、三十分

そろそろ寝たかな～

「……ねぇ」

まだ起きてたのかよ！

「な、なに？」

「こうやって一緒に時計の音を聞くのは久しぶりね」

「ん？　……ああ、あの時か」

夏紀姉ちゃんが高校生の頃、とても辛い事があった。
その時の俺は何も出来ず、夏紀姉ちゃんの側で一晩中、一緒に時計の音を聞く事しか出来なかった

「……そんな事もあったな」

夏紀姉ちゃんは結局、泣かなかった。きっと自分の弱さを認めたくなかったから、認めたら強い姉で居られないと思ったからだ

あの時程、俺は自分が情けないと思った事はない

「……」

「……恭介。アンタが生まれた時、正直言うとアタシは嫌だなって思ってた。アタシには可愛くてしっかり者の、ちょっと恐い妹がいたし、弟なんて欲しく無かったし」

凹んでるってのに、いきなり酷い事実を言いやがるな、この姉

「でも、アンタは凄く優しくて、凄く強くて、凄く素敵な男の子だった。誤算だったわ、この夏紀様が一人の男に落とされるなんてね」

落とすって……

「アタシはアンタを守って来た、面倒見てきた」

「……ああ、そうだね。感謝してるよ」

本当に感謝している

「……ううん。実際は逆よ。アタシに辛い時が有った時も、変態ロリコン糞野郎に襲われた時も、悲しい時もアンタはいつもアタシの側に居て、アタシを守ってくれた。……うん、分かってる」

「姉ちゃん……」

違うよ。俺はただ、姉ちゃんの側に居たかっただけなんだ。
ずっと姉ちゃんに憧れてたから、姉ちゃんの笑顔が大好きだったから……

「今なら言えるよ、恭介」

夏紀姉ちゃんはベットから手を伸ばし、俺の手をギュっと握る

昔、俺が誰よりも憧れていた人。誰よりも強くて優しかった、俺のヒーロー

「生まれてきてくれて、ありがとう。ずっとアタシを守ってくれて、

ありがとう。……大好きよ、恭ちゃん」

「……姉ちゃん」

ありがとう、姉ちゃん

「ところで……」

「ん？」

「……ぎもぢわるい」

「え！？」

「うぅぐ……うぃ～」

「や、止め」

「も、う駄……ゲ」

ギャアアアア

「アアアア……あ？」

気付くと、そこは夏紀姉ちゃんの部屋では無く、俺の部屋だった

「……ゆ、夢？」

壁時計を見ると、針は午前六時を指す

「……」

なんだか色々な夢を見ていたような……。とにかく、なんか凄く疲れた

「……顔洗お」

ベットから起き上がり、俺はドアを開ける

「あ！」

「いっ！」

「う！？」

「え？」

「……おはよう」

廊下では、ちょうど鉢合わせになったのか姉妹達全員が揃っていて、廊下で洗面所の順番待ちをしていた

「お兄ちゃん！」

二番目に並んでいた雪葉が、俺の目の前に来る

「ど、どした？」

「お兄ちゃんの雪葉は雪葉だけだよね！」

「へ？」

「姉……あ、兄貴！」

春菜も並ぶのを止めて俺に近付き、突然俺の胸をぺたぺた触ってきた。てか姉？

「な、なんだよ？」

「胸は……無いよな。はぁ、良かったぁ」

「はぁ？」

「……」

秋姉は俺をジっと見ている

「あ、秋姉？」

「秋兄……にやり」

「ひぃ！？」

良く分からんが、目茶苦茶嫌だ！！

「あれは夢、あれは夢、あれは夢、あれは夢」

夏紀姉ちゃんは虚ろな目でブツブツと独り言を言っている。なんか恐い

「ど、どうしたのさ、みんな」

「な、何でもないよ、お兄ちゃん！」

「そ、そう、何でもないって、兄貴！」

「シスコンが！」

「シ、シスコンって……」

なんでいきなり罵倒を……てか、本当にどうしたんだ？

「……恭介」

「秋姉？」

疑問に思っていると、秋姉は任せてっと言った風に頷いて

「……ちゃんちゃん」

オチを付けて下さいました

今日の悪夢

夏＞＞＞俺＞＞雪＞春＞＞＞＞＞＞秋

「でも秋兄……ちょっとあり？」

「無い無い、ぜっったいに無いよ～！！」

つづたまれ

第１００話：手紙

拝啓父上どの。貴方が居なくなり、早二ヶ月が経ちました

貴方が居なくなってしまってから、我が家は完全に女系家族となってしまい、姉（乱暴な方）に使役される毎日を送っております

「お腹すいた」

「はい？」

「お腹すいた」

「……何か食べれば？」

「作れ」

「……」

こんな会話、日常茶飯事です

しかし、そんな暗黒時代のような毎日の中でも、救いはありまして

「……私が作る」

「うっ！　い、いつの間に！？」

「……チャーハンでいいの？　それとも……カツ丼？　揚げ物……チャレンジ」

「いっ！？　あ、あはははは～。や、やっぱりコンビニで何か買ってくるわ～。あはははは」

「……残念」

「あ、ありがとう秋姉、助かったよ」

「？」

姉（女神の方）に救われた事は、数え切れない程あります。
いつか恩を返さなければと思いますが、恩は募るばかりです

「おやつよ～」

まだ二時前だと言うのに、母がおやつを呼んでいます。多分自分が食べたいからでしょう

あれほど仲が良かったお二人です。貴方は母の事を一番気掛かりにしているかと思いますが、母は元気です。
もちろん、無理をしている時もあるでしょうが、母は僕や姉、そして妹達が守ってみせます

「お母さん、運ぶの手伝うね」

「ありがと～。雪葉には一番大きいホットケーキプレゼント～」

「うわぁ、ほんとに大きい！　はい、お兄ちゃん。大きいのどうぞ」

「あら～」

一番年下の雪葉は、いつも僕を気遣ってくれています。
兄を気遣い、尊敬し、甘やかす妹。一家に一人こんな妹が居れば戦争なんて起きないのでは無いでしょうか？

「ホットケーキの匂いだぁ！」

もう一人の妹は相変わらず元気いっぱいです

「やっぱりホットケーキ！　これが私の？　食べて良い？」

「どうぞ～」

「よ～し、食うぞ～。はぐっ、いたっ！　あ～肉噛んだ～。いて～、でも美味い～」

「……」

元気過ぎて、どうしたら良いのか分からなくなる時があります

「ただいまー。……あらホットケーキ？　ほか弁買って来ちゃったわよ」

「随分遅い、お昼ご飯ね～。一体何時まで寝ていたのかしら、お寝坊さん」

「う……ご、ごめんなさい」

母の穏やかながら威圧感のある口調に、姉（酒臭い方）はシオシオとテンションを下げます。ざまーみろです

「兄貴、みて？　どうなってる傷？」

「ん、ああ、ちょっと切れてるな。また噛まないように気をつけなさい」

「うん」

春菜は素直な妹です

「噛まないように、小さく切って食べさせて～」

「……」

「……駄目？」

「ちょっと待ってろ」

「ああ！」

素直過ぎて、どうしたら良いか分からなくなる時があります

「ほれ、春菜、切ったぞ」

「サンキュー！」

「……仲良し。いただきます」

姉（穏やかで優しく、愛と誠に満ちた眼差しをした美しい方）が、ホットケーキを小さく切って、上品に口に運びます

「ただのシスコンでしょ？　いただきます」

姉（目付き悪い方）が大きくホットケーキを切り、口へ適当にほう
り込みます。その口の大きさたるや、カバも真っ青！

「ん？　なによ？」

「え！？」

「なに人の顔見てニヤニヤしてるのよ？　てゆーかさっきから何書
いてんのよアンタ」

「あ、い、いや、え、えっと……ね、姉ちゃんは相変わらず可愛く
物を食べるな～って」

「は？」

「び、美人なのに可愛い素敵な姉ちゃん持って、俺は最高！」

「……ハァ。いつまで経ってもシスコンが治らない奴ね。アタシの
責任でもあるけどさ」

「……嬉しそう」

「う、嬉しくなんかないわよ！」

「でも……本当にさっきから何を書いてるの？　お兄ちゃん」

「ん？　手紙をちょっとな。まあ、届かないけどよ」

「んん？」

「ま、気分的なもんだ。……ところで雪葉、ホットケーキ食べ終わったら将棋の勝負しないか？」

「うん、良いよ」

「よし、勝負だ！」

「お～！」

こんな感じで、うちの家族は元気です。だから安心して下さいだけどな

早く帰って来い、バカ親父！！

みんな親父を待ってるんだからさ

今日のホットケーキ

俺＞春＞＞母≧雪≧秋≧夏

「……参りました」

「お兄ちゃん、この一打が甘かったよ。それと角の使い所が悪いと思うの」

「は、はい。指導ありがとうございます、先生」

P．S

雪葉は僕より将棋が強くなりました……

もうちょっとだけ続く！

第１０１話：父の旅立ち

光と闇の戦いは、一瞬で決着が付いた

しかしその一瞬は星の運命を決する一瞬であり、人間が築き上げて来た歴史に等しい価値を持つ

「……ふふふ、あはは、あーっはっはっは！」

光は潰え、村は完全なる闇に染まる。響くのは高々と笑う岡魔の声のみ

決着は付いたのだ

「終わったか……」

ウリガドは諦めの吐息と共に呟いた

もう、闇を、岡魔を止められる者は居ない。世界は暗黒に包まれるだろう

「……すまぬのう、サトウよ。関係の無いお主に全てを押し付け、お主を死なせてしもうた……。ワシこそが死ぬべき者じゃったのに」

何故ワシに聖剣は応えてくれなかった。何故ワシはオルテガを……弟を止められなかった

力無くひざまづくウリガド。その表情に希望は無く、酷く老け込んで見える

「……おじいちゃん」

「エ、エルテル！？」

さらわれた時のショックで、意識がなかったエルテルが、今になって目覚めてしまう。

これから世界は滅びの道を行くと言うのに……

なんと不憫な子だろう

ウリガドはヨロヨロと立ち上がり、エルテルの身体を抱きしめる。

せめて一人では死なさぬ様に

「……きれい」

そんな時、エルテルが呟いた。純粋に、ただただ純粋に

「きれいだね、おじいちゃん」

「ど、どうしたと言うのじゃエルテル？　何が綺麗だと……雪？」

ウリガドが若き頃、北へ旅をした時に一度だけ雪を見た事がある。

夕日に反射して美しく光る黄金色の雪を

その雪が、闇の中ふわふわと舞い落ちた

「こ、これは……」

違う、雪ではない。雪は完全なる闇の中では光を失ってしまう
そして何よりも違う事がある。この雪は……

「……暖かい」

これはいったい？

「光……。これはサトウの想い。心の光だよ」

「サトウの……心」

ああ、そうだ。優しく、純粋で、しかし力強い
これはあの男の、サトウの光！

「あはははははははは！！」

「っ！　オルテガ！！」

しかし、しかし生き残っているのは高笑いをするオルテガ。
ではこれは、サトウと聖剣が砕けた事を示す最後の輝きか

「く……サトウよ。お主の意志、ワシが受け取った」

足掻こう。この光に、サトウの想いに応える為に最後の瞬間まで足掻こう

ウリガドは覚悟を決め、闇を睨む。
だがその時、闇は高笑いを止め、静かに呟いた

「……見事だ、サトウよ」

ピシ

水に張った氷が割れた様な音。その音は次第に大きくなってゆく

「こ、これは！？」

そしてウリガドは見た。全てを包む闇、それがゆっくりと裂けてゆくのを

「お帰りなさい……サトウ」

そして男は伝説となる

エピローグ

「どうしても行っちゃうの？」

少女は尋ねる。優しく、強い男を見上げながら

「うん。家族を待たせてあるからね」

男は少女を見つめる。父親のような優しい眼差で

「残念じゃのう。お主なら村長の座を今すぐにでも譲るのに」

老人は思う。この男、逞しく、そして偉大な男になったと

「この村に一番相応しい村長は貴方ですよ、ウリガドさん」

「ふぉ、ふぉ。まだこの年寄りに働かせるか」

「貴方は、まだまだお若いですよ」

笑い合う二人。二人の間には年齢、人種を越えた友情が芽生えていた

「……ありがとう。ワシにはその陳腐な言葉しか言えぬ」

「その言葉は、僕にとって最高の宝物です。
……来て良かった。アマゾンに来て、本当に良かった」

ガシッと、互いの手を握り合う。この握手こそが二人の、二人だけの財宝なのだ

「……」

握手を終え、男は村の先を見る

「……行くのか？」

「はい。……エルテル、色々とありがとう。君が助けてくれなければ、僕は死んでいた」

「ううん……ううん！」

エルテルと呼ばれた少女は、サファイアのような瞳に、涙をいっぱい溜めて首を振る。

そして勇者を見送る為、最上の微笑みを浮かべて言った

「カラムーチョ、スッパムーチョ、マカダミアカルビー（ありがとう、勇者様。貴方に幸せが訪れる事を、ずっと、ずっと願っています）」

第一章

【アマゾンの秘宝】

完

～時は流れて～

百三十年後のアマゾン。そこには全ての村を統一し、発展させた偉大なる女性大長老が存在した

その大長老は、多くの者に感謝され、多くの尊敬、羨望を集めていた。

しかし、老婆は言うのだ。村があるのも、私が生きているのも全て勇者様のお陰だと

そして老婆は目を閉じ、祈る。百三十年間、一日も欠かさなかった祈りを

「……今は幸せですか？　幸せでしたか、勇者様」

今でも明確に浮かび上がる、男の姿。譲り受けた聖剣を背に、力強

く歩む男の姿

その男の名はサトウ。黄金の勇者、サトウである

今日の長生き

エ＞＞＞＞＞＞父

つづ……いて良いのだろうか？

第１０２話：母の安心

「じゃんけんぽい」

「ぽい」

「あ～また負けちゃったえへへ」

「ふふ。俺には未来が見えるのだよ」

火曜日の夕方。夕飯まで暇なので、雪葉とじゃんけんをやっていたのだが、七戦全勝と言う怪記録を出してしまった

「次は負けないからね！」

「よし来い！」

次はグーか、はたまたチョキか

「……仲良いわね、アンタ達」

ソファーに座り、団扇を扇ぎながら呆れた声で呟く夏紀姉ちゃん

「そう？　普通だと思うけどっと不意打ちじゃんけんぽい！」

「え！？　ぽ、ぽい！」

俺がパーで雪葉がグーだ

「ふ、また俺の勝ちだな」

後だしで負けるとは……プレッシャーに弱いな雪葉君

「ずるいよ～」

「ふっふ。これが大人の戦略って奴だよ」

「……随分しょぼい大人ね」

ピンポーン

夏紀姉ちゃんの呟きと共に、インターホンが鳴った

「ん？　客かな。ちょっと見て来るよ」

「いってらっしゃい、お兄ちゃん」

笑顔の妹に見送られ、いざ玄関へ

ピンポーン

「はいはい、今開けますよ」

鍵を外し、ドアを開けると疲れた顔をしたインテリ中年の姿

「って宗院さんじゃないですか！　どうしたんです、その姿」

真っ白な作業着に同じく真っ白な帽子。これは宅配便、シロネコ太郎の従業員が着る格好だ

「おや、佐藤君。此処は君のお宅でしたか、偶然ですね」

「偶然なんですか？」

「ええ。お荷物をお届けに来たのですが……トラックから下ろして来ますので、少々お待ち下さい」

そう言い、宗院さんは家の前に止めてあるトラックへ走り向かう

「……」

ハンコ用意しておくか

ハンコを用意し、玄関に戻ると自分より大きな荷物をヨロヨロと持って来る宗院さんの姿があった

「だ、大丈夫ですか？　手伝いますよ」

「あ、ありがとう。君は間違いなく出世する、私が保証するよ」

また宗院さんに保証されてしまった……

へこみながら、宗院さんの元に駆け寄り荷物を持つ

「それにしてもデカイ荷物ですね。なに入ってるんだろ？」

少しワクワクしてしまう

「割れ物注意とありますから、食べ物ではなさそうですね」

宗院さんは、何故か残念そうに言った

「この大きさですと、鉢植えとかだったりするかも知れませんね」

まぁ、開けてみれば分かるか

「あ、もう此処で良いですよ宗院さん。ハンコ押しますね」

玄関先に荷物を置いて、ズボンのポケットからハンコを取り出す

「はい、ではこちらに拇印を……はい、ありがとうございます」

「ご苦労様でした」

「ではまたお会いしましょう」

爽やかに微笑み、帽子を被り直して去ってゆく宗院さん。働く男の背中だ

「……頑張れ～」

きっと色々大変なのだろう、小声で応援しておこう

「さて」

贈り主は……

「お、親父!?」

それは親父からの国際便だった

母の安心　2

某日某時刻某リビング

「お父さんから!?」

重い荷物をヨロヨロとリビングへ運び入れ、寄ってきた雪葉へ贈り主を教えると、雪葉は目を丸くしながら驚きの声をあげた

「父さんから？　どれどれ」

夏紀姉ちゃんは起き上がり、めちゃくちゃ怠そうにしながらこちらへ近寄って来る

しかし毎日たいしたこととしてなさそうなのに、どうしていつも怠そうなんだこの人？

「歳……か」

「ん？　今、なんか言った？」

「いいえ、なにも。母ちゃ～ん、親父から荷物が届いてるよ～」

台所へ向かって声を掛けると、母ちゃんはエプロンを外し、あらあら言いながらリビングへと来た

「あらあら～」

「開けて良い？」

「もちのろんよ～」

相変わらず微妙なギャグを飛ばす母だ

「じゃ、開けてみますか」

縦に長く、ガムテープでしっかり補強された段ボール

その段ボールを、強引に剥いて行くと、くしゃくしゃになった新聞や、発泡スチロールが大量に入っていた

「凄い厳重だな……ん？」

新聞を避けると、箱の下にエアマットで何重にも巻かれた固く、大きい物がある

それを両手で持ち上げ、箱から出すと、ずしりと鉄の重みを感じた

「……いや、まさかね」

その荷物は、ロープレとかで出てきそうな大剣に見える気がするが、きっと気のせい……じゃないなこりゃ

「こんなもんよく税関通過出来たな……」

ってか何でこんなもん送ってきやがったんだ、あの親父

「剣……よね。クレイモアって奴かしら」

エアマットを慎重に外すと、刃身1メートル程ある両手持ち大剣が現れる

刃は白銀の様に美しく、傷一つ無い。そしてその刃に向かって傾斜し、金色に輝く鍔は、何の装飾もないが、それがかえってきらびやかに見える。見えるが……

「……」

いや、何を言えば良いのか分からない。こんなもん送られてどうしろってんだ

「あ、お手紙入ってるよお兄ちゃん！」

「なに！　手紙だとぅ～気付かなかったぜ、流石だな雪葉！！」

「ふふふ。初歩的な事だよ、お兄ちゃん」

この洞察力、判断力、そして推理力……まさか！

「ま、まさか貴女はあの名探偵の……」

「……遂にバレちゃったね、お兄ちゃん。そう、雪葉の本当の正体は……」

「し、正体は……」

ゴクリ。鳴ったのは俺の喉か、はたまた雪葉か

「お兄ちゃんの妹♪」

「おっと、こいつは兄ちゃん一本取られたなっと」

全くお茶目な妹だぜ

「……はいはい、仲が良いのは分かったから、さっさと手紙開けなさい」

「はいよっと」

雪葉から受け取った封筒を、俺はゆっくりと開けた

母の安心　3

チチゲンキジキモドル

「……」

「……」

「……」

「あらあら～」

封筒の中には、茶色く薄汚れた紙が入っていて、その紙にはカタカナで短い文章が書かれているだけだった

第二章

【奴隷達の宴】

「……」

な、なんだ、この不安を煽る不吉な手紙は？

「お、お父さん……」

「だ、大丈夫よ、雪。ああ見えて父さん結構丈夫だし」

「……うん」

雪葉を元気付けようと、そう夏紀姉ちゃんは言ったが、雪葉の表情は晴れない

「……俺もそう思うぞ雪葉。親父なら大丈夫さ」

「お兄ちゃん……」

とは言ったものの、流石に心配になってくる。その不安はそんな時、母ちゃんがホッとしたような息を吐いた

「良かったわ～」

「母ちゃん？」

「あの人が無事と言うなら、絶対に無事よ～」

強がり……って訳ではなさそうだ

「さ～て、夜ご飯の準備しましょ～」

鼻唄を歌いながらキッチンへと向かう母ちゃん。その足取りは軽い

母ちゃんは親父を絶対的に信頼している

だから心配そうなそぶりをした事はなかったのだが、何も連絡が無かった事は、やはり不安だったのかもしれない

「……そうね、アタシ達が心配してても仕方ないわ。父さんを信じて待ちましょう」

「……だな。雪葉、夕飯まで兄ちゃんとゲームやろうぜ」

「……うん」

信じる、か。母ちゃん程の強さが無い俺や雪葉には、結構難しい事だと思う

だけど、ま

「信じてるぜ、親父」

今日の心配

雪≦春＞俺＞秋＞＞夏＞＞＞母

「あ、恭介～。その荷物は貴方にあげるわね～。そういうの好きでしょ～」

「……え゛」

つつさしめ

第１０３話：俺の父兄参観

さて問題です。私は今、何処に居るでしょう？

答えは……

「な、なんであんたが此処に居るのよ！？」

前の授業は体育だったらしく、数人の父兄以外居ない教室内。やっと子供達が校庭から戻って来たと思ったら、体操着姿のお子さんがいきなり俺に噛み付いてきやがりました

「相変わらず元気そうだな花梨。今日は雪葉の父兄として来たんだよ」

生意気な子供にも優しく説明してやる。これが大人ってもんだ

「ふ、ふん！　に、似合わないスーツなんて着て……馬鹿じゃないの！！」

「ぬっ！　……か、花梨は体操着、似合ってて可愛いぞ～」

大人の余裕、大人の余裕

「み、見ないでよ変態！　馬鹿！！」

「ぐっ！？　ひ、人が下手に出てればいい気になりやがって～」

「ふん！」

相変わらず可愛くね～

「あ、お兄ちゃん！」

花梨と睨あっていると、弾んだ声が教室へ入って来た

「よう、雪葉。来たぜ～」

「うん！　ありがとう、お兄ちゃん！！」

満面の笑みで、喜びを表す我が妹

ふ、可愛い奴め

「え！？　兄ちゃん！？　あ、兄ちゃん！」

「お、美月！」

「どうしたの、兄ちゃん。遊びに来たの？」

正面に立った美月は、俺の右手を両手にとり、軽く振りながら尋ねる

「父兄参観だよ。今日はお前らの授業、見学させてもらうぜ～」

「そうなんだ。う～緊張するなぁ」

「普通通りで良いと思うぞ」

空いた手で、美月の頭を撫でて……

「あ、花梨の恋人さんだぁ。美月ちゃんにも手を出してるの？」

ピシっ！

そんな呑気な声で、教室の空気は凍り付いた

「……」

「……」

「……」

「……」

「あれぇ？　みんなどうしたの？」

教室に居た誰もが、一言も喋れず凍り付く中、恐ろしい発言をした本人が、首を傾げながら不思議そうに言う

「ま、麻奈美、ア、アンタは～」

花梨は発言者に詰め寄るが、そっちより今はこっちを何とかして欲しい

「……小学生に手を出したらしいわよ」

「それも二人なんて……あんな変態、野放しにしていても良いのかしら」

「……」

いや、確かに奥様達のヒソヒソ話や、汚れた物を見るような視線も胸に痛いのだが……

「どうしたの、お兄ちゃん？　冷汗なんてかいちゃって。暑いのかなぁ？　うふふふふふ」

こっちをなんとかしてくれ～！！

「あ、あのな、ゆ」

「なぁに？　おにーちゃん。雪葉、言い訳なんて聞きたくないな～」

妹は笑顔だった。しかしその目は笑っておらず、声には、怒りを通り越して殺意すら感じる

「い、いや、違くてご、誤解……か、花梨～」

妹の迫力に負け、自分でも情けないと思ってしまう声で花梨を呼ぶ

「え？　あ、ゆ、雪？　……え、えと、その」

俺と雪葉を見比べ、困り顔をする花梨

「ど、どうした、早く誤解を……あ！」

一瞬、ちらっと横を見た花梨の視線を追うと、教室の窓際で、女の子達に囲まれながらジっとこちらを見ている美少年が居る。あれは坂田少年だ

なるほど。坂田少年が居るから迂闊な事を言えないのかって、なんだかあの少年、おもいっきり俺を睨んでる気が……

「何処を向いてるのかなぁ、おにいちゃん？　まさかクラスの女の子達を見ているのかなぁ」

雪葉の口許が裂け、三日月の様な笑みを浮かべた

殺される

俺は今日、妹に殺される

季節は夏真っ盛り。気温は高いと言うのに、身体の震えが止まらない

「ま、待って！　ち、違うの、コイツとはそんな関係じゃなくて……」

「胸を触らせる関係だもんねぇ。凄いよねぇ花梨は」

「……」

「……」

「……」

「……」

奥様が無言で携帯を取り出した。ピッポッパ、三桁の数字だ。天気予報でも聞くのかな～

「あ、もしもし、警察ですか？　娘が通う小学校に危険な変態が」

「い、生き別れた血の繋がらない兄なのよ～！！」

「ええ！？」
「ええ！？」

衝撃的な告白に、雪葉と俺の声が重なった

「お、俺が花梨の生き別れの兄？」

し、知らなかった。どうりでいつも突っ掛かって来た訳だ……って

「流石に無理あるだろ！」

昼ドラじゃないんだから

「う……せ、正確に言えば……い、従兄弟？」

花梨は眼を泳がせながら言う

「血が繋がらない従兄弟って、殆ど他人じゃないのぉ？　それにこの間は付き合ってるって言ってたのに変だよぉ～」

のんびりした口調で冷静なツッコミ。この麻奈美って子、侮れん

「そ、それは……」

花梨は一瞬怯えた様な顔をした後、覚悟を決めたのか無い胸を張った

「……あれは、う」

「俺と花梨は許婚みたいなもんだよ。まぁ、花梨は嫌かも知れないけどな」

「っ！？」

花梨はビックリした顔で俺を見る

「い、いいの？」

「いいよ」

後でしっかり雪葉へ説明してもらうけど……

「……あ、あの……えと……あ、ありが」

「婚約者さんだったんたぁ、やっぱり凄いなぁ花梨は」

「歳の差……それもロマンスね」

花梨が何かモゴモゴ言っていると、麻奈美ちゃんや、奥様連中がウットリしたように呟いた。どうやら通報の危機は去ったらしい

「……」

ただ、余りの展開に呆然としている雪葉が、我に返った時が恐ろしい

「はぁ。……ん？」

ため息をつき、ふと美月を見ると、美月は泣きそうな顔で俺を見上げていた

「美月？」

「……兄ちゃん、花梨と結婚するんだ……。お、おめでとっ！」

「は？」

「わ、わたし着替えてくる！」

「あ、ああ、行ってらっしゃい」

とぼとぼと教室を出てゆく美月を見送り、花梨の方へ向き直る

「花梨達も着替えて来いよ、授業始まっちゃうぞ」

「う、うん。……行きましょ、雪」

まだ呆然とする雪葉を連れ、花梨もまた教室を出て行った

俺の父兄参観　4

雪葉達がどっかへ着替えに行き、他に知り合いも居ない教室内

変質者扱いを免れたとは言え、変に注目を浴びてしまった今、非常に居づらい。だが愛する妹の為だ、俺は堪えてみせる！

ヒソヒソ

「……」

た、堪えてみせるぞ！

ヒソヒソ、ヒソヒソ

「……」

た、耐えて……

「ふふ」

俺に対する奥様方のヒソヒソ話に、心くじけそうになった時、一陣の風が吹いた

その風は強く、しかしどこか切なく甘い夏の風。この風は

「やあ、お兄さん。父兄参観に来たのかな？」

「風子！」

風子は既に着替え終わっていて、その格好はジーパンと無地のシャツに帽子と言う、何とも男の子っぽい格好だった

「もう着替えたのか？　速いな～」

見知った顔の登場に、ホッとしながら聞くと、風子は僅かに躊躇した後

「今日はちょっと体調が悪くてね。二人で保健室に行っていたんだ」

と、言った

「体調が？　大丈夫なのか？」

「うん、心配はいらないよ」

「そうか……大事にしろよ」

風子は、心配要らないと言ったが、少し顔色が悪い

「優しいね、お兄さん。今日のように体調が悪い日に、そうやって優しくされたら僕、甘えてしまうよ？」

「おう、甘えろ、甘えろガキんちょは素直に甘えてるのが一番だ」

「……お兄さんは優しいし素敵だど思うけど、やっぱりもう少し勉強した方が良いね」

「へ？」

「ふふ。でも、それがお兄さんだね」

風子は、子をあやす母親のように穏やかな眼差しで、俺を見つめる

「……俺って風子より年上だよな？」

何か明らかに俺の方がガキっぽいような……

「とても残念だけどね。ところで……早く教室に入っておいで、宮」

「ひっ！？」

風子が廊下の方へ声を掛けると、短い悲鳴が聞こえた。この声は……

「……鳥里さん？」

「ぁ……ぅ……」

名前を呼ぶと、鳥里さんは諦めたようにオドオドと教室へ入って来た。どうやら相変わらず嫌われているらしい

「こんにちは、鳥里さん」

「は、はぃ……こんにち……は」

鳥里さんは蚊が鳴くような小声で返事をした後、鳥里さんのだと思われる席へ、そそくさと行ってしまった

「ごめんね、お兄さん。どうしてか宮は少しだけお兄さんの事が苦

手らしいんだ」

「誰にでも苦手な奴はいるし、気にしてないぞ」

夏紀姉ちゃんとか夏紀姉ちゃんとか夏紀姉ちゃんとか

「ありがとう、お兄さん」

「礼を言われる事じゃないよ。ん？」

廊下が騒がしくなって来た。雪葉達が着替えて来たのだろう

「無理しなくて良かったのにママ」

「花梨ちゃんの授業参観だもん。ママ、絶対行きたかったんだもん！」

「……」

な、なんだこのエロさと子供っぽさを兼ね備えた声は

「お母さんも忙しかったんでしょ？　それなのに……」

「子供の授業参観だもの～、少しぐらい忙しくても行くわよ～。もっとも、教えてくれなければ行けないけど～。……ねぇ、恭介？」

廊下から姿を現わしたノンビリ口調の奥様は、ギラギラ光る目で俺を睨みつけて下さいました

「か、母ちゃん……」

「この間、貴方の学校で授業見学会があったそうね～。さっきお友達に聞いて、母さん驚いちゃったわ～」

ゆらり、ゆらりと俺の元へ向かって来る母ちゃん。妖怪より恐ろしい

「あ、い、いや、い、忙しいかなって……あ、あはははは」

「忙しくても子供の学校行事ぐらいは行くわよ～」

口調は相変わらずノンビリだが、母ちゃんの目は見開いたままだ！

「ご、ごめ……おっ！　か、母ちゃん、そのグレーのスーツ似合ってるね～。キ、キャリアウーマンみたいだぜ！」

「恭介～」

「ひ、ひぇ～ご、ごめんよ～」

梅干しを覚悟して目を閉じると、母ちゃんの手はコメカミではなく、俺の頬に触れた

「……母ちゃん？」

「貴方は母さんに気を使い過ぎよ。子供に気を使われるのは、嬉しいけれど、少し悲しいわ」

母ちゃんは寂しげに微笑みながら、そう言った

「……」

「もっと我が儘を言って、もっと母さんを困らせなさい。そうじゃないと貴方が独り立ちして家を出た後、何もしてあげられなかったなって、後悔しちゃうもの」

「母ちゃん……」

そんな事無いよ、母ちゃん。母ちゃんはいつも優しく俺を見守っ……

「か、母ちゃん？」

その強く固めた両拳は何ですか？

「それはともかく～」

「あ、あの」

「悪い子には～」

「ち、ちょ、み、みんなが見て」

「おしおき～」

「や、やめ……ぎ、ぎゃあああああああ！！」

「反省したかしら～」

「う、海よりも深く」

「じゃあ解放～」

「あ、ありがとうございました……ぐう」

こめかみが、しくしく痛む

「あ、あれがあの佐藤家の王、佐藤　舞衣華様」

「な、なんて気なの！？　圧倒される！！」

奥様方の口から唐突かつ大袈裟に語られた母ちゃんの本名。また一つ佐藤家の秘密が暴かれてしまったか……ってどうでもいいけどさ

「こめかみいて～」

人前だってのに本気でやるんだもんな、おとなげないんだよ

「何か言いたそうね～」

「い、いえ、何一つ問題ありません！　ちょっと水を飲んで来ます！！」

母の奥義を喰らい、瀕死の重傷を負った俺は、俯きながら教室の外

を目指し、フラフラと歩く。すると

とん。

扉の前で、何か柔らかい物とぶつかってしまった

「ん？　……あ！」

顔をあげると、目の前には立派過ぎる乳

「す、すみません！」

ぶつかってしまった女性から、慌てて飛び引く

「大丈夫？　恭介クン」

飛び引いた俺に女性は近寄り、心配そうに聞いてきた

まだ幼さが残る顔に、着ている黒スーツでは隠しきれない、不二子ちゃん並にエロい身体。このお姉様は一体……

「だ、大丈夫……です」

喉がやけに渇く。とんだエロテロリストだぜ……

「と、どうして俺の名前を？　以前お会いした事ありましたっけ？」

一度会えば忘れられそうに無いのだが

「え？　あ、まだ会った事、無かったんだね。いつも花梨ちゃんか

らお話聞いているから勘違いしちゃった。はじめまして恭介クン、私は花梨ちゃんのママで霧島　香苗です。ママって呼んでくれて良いよ」

「ま、まま？」

って言うか花梨の母ちゃん！？　若すぎやしないか！

「うんうん。将来のお婿さんだもんね、やっぱり今のうちから馴れておかないとね」

「なっ！？　な、何言ってるのよ、ママ！！」

「え？　だって結婚後にいきなりお母さん、って呼ばれたらママ、ビックリしちゃうもん。だから今のうちに」

「そ、そうじゃなくて！　そうじゃなくて、そいつとはそんなんじゃなくて……う～～」

「何故俺を睨む！？」

「あら～、花梨ちゃんが未来のお嫁さんなのね～香苗ちゃん、息子をお願いね～」

「はい、舞衣華様。大切な御子息、命を掛けてお預かりします」

香苗さんはピンと背筋を伸ばし、最敬礼をした……ってゆーか、うちの母親は何者なんだ？

「おにーちゃん」

「げっ！？　ゆ、雪葉、こ、これはな」

「さっき花梨ちゃんに聞いたよ。……お兄ちゃんを信用しなくてごめんなさい」

雪葉は申し訳なさそうに頭を下げる

「……ふ、お前の誤解が解けたならもう俺に怖いものは無いさ」

なんだか色々と泥沼化している気もするが、ほっとこう

キーンコーンカーンコーン

「ん？　チャイムだな。席に戻りな、雪葉。兄ちゃん応援しているからな」

「うん！」

元気良く返事をし、雪葉は席に戻る

「……さて」

「う～～」

「兄ちゃん……」

「やっぱり凄いなぁ恋人さん。今度私も遊んでもらおーかな」

「あら～、モテモテね恭介～」

「……ふふ」

「僕の花梨を……き、鬼畜め！」

「こ、こわいよ……助けて直兄さん……」

「恭介クン、お近づきのしるしに今度みんなで一緒にお風呂入ろっか」

「ヒソヒソ、ヒソヒソ」

……頑張れ、俺

俺の父兄参観　6

「それでは二時間目の授業を始めます」

教室内の騒ぎは、先生の出現によって取り敢えずは収まった

二時間は国語。教えるのは雪葉の担任で、青山　智史先生だ

雪葉の保護者として、過去に何度か話をした事があるが、細く、優しそうな風貌と、その見た目からは想像出来無い程の熱き教師魂を持った好青年である

「では先ず、前回のおさらいをしようか」

青山先生は穏やかにそう言い、授業を始めた

「猟師の田吾作どんは、ある日いつもの様に家の近くにある山へ、狩りに行きました。しかし、山の持ち主であった兄である村長が破綻し、ローンの担保としてあった山は、別の持ち主へと渡っていたのです。そうとは知らない田吾作どんは、獲物じゃ、獲物じゃと銃を片手に山を走り回りました。そこへ山の持ち主である華族、金田　金太郎氏が、様子を見に来たのです。そうとは知らない田吾作どん。金田氏を獲物と勘違いし、木の狙いを定めます。『半径一キロ内はおらぁの射程距離だべ』そう不敵に言い放つ田吾作どん。さて、この時、田吾作どんは何を考えてたか、分かる人」

「はい！」

教室にいるほぼ全員の子供達が手を挙げる。窓側から二列目の前か

ら三番目にいる雪葉もまた、手を挙げていた

「今日はみんな張り切ってるね。う～ん、誰に答えて貰おうかな」

雪葉にしろ～、雪葉にしろ～

「よし、じゃあ霧島！」

「はい」

花梨か。ま、応援してやろう

「花梨ちゃ～ん、頑張って～！」

俺がするまでも無く、香苗さんは運動会を見に来た母親の様に、大声で応援した。

その応援に花梨はビクッと身体を震わせたが、振り返らない。どうやら無視する方向らしい

「恭介クン、花梨ちゃん凛々しくてカッコイイでしょ？　花梨ちゃんにはずっと苦労させてばかりだったから、幸せになって欲しいんだ。お願いね恭介クン」

「ち、ちょっママ！！」

無視失敗

「き、霧島のお母さん、もう少し抑えて見学して頂けると、僕、助かってしまうな～なんて……」

「あ、そうだね、ごめんなさい。花梨ちゃん、ママ、陰ながら応援するからね！」

「はぁ……田吾作どんが考えていた事は――」

それから授業は、つつがなく進み、休み時間となる

授業の内容は、分かりやすいのは勿論、時折冗談なんかも交えたりして、退屈さを感じさせないものだった

「ふ、暫く見ない内に、あの新米教師、立派になりおったわ」

「私達主婦の間でも評価高いわよ～」

「うん。顔も良いし、一度デートしてみたい相手かも。あ、恭介クンともしたいな。再来週の日曜日、時間あるかな？」

香苗さんは、ニコッと笑いかけながら、俺を覗き込む様に言った。胸元がきついのか、幾つかシャツのボタンを外してあるため、少し谷間が見えてしまう

「う！　あ、い、いや、それはその……コホン！」

俺は視線を逸らし、毅然とした態度で言う

「ぼ、僕達はまだ、知り合いになられたばかりでござりまするし、そ、そう言う事はもっとお互いを知ってからなんて思うのです！」

俺の男らしい言葉に、香苗さんは呆気に取られた顔をし、怒らせてしまったのか、プルプルと震えた

「……あ、あの、決して嫌とかそういう事じゃなくて」

「……いい」

「え？」

「かわい～！！」

「ふげっ！？」

抱きしめられた！？

「花梨ちゃんが選んだ男の子だから、いい子だって言うのは分かっていたけど、想像以上に可愛いんだもん。ママ、嬉しーな」

ぎゅ、ぎゅーっと顔に押し付けられる乳！　柔らかく、ほのかに甘い香りがする

「む……むぐぐう」

こ、これはマズイ、このままでは俺の内なる獣が暴れてだしてしまう！！

「ぶはっ！　お止め下さい、香苗さん！！」

「嫌だった？　ごめんね」

乳は、あっさりと離れてしまった。……これで良かったのか？　俺は自分の心を偽っただけじゃないのか？

「ママ！」

「うわ！？」

花梨が怒りの形相で迫って来た

「どーしたの？　花梨ちゃん」

「どうしたのじゃ無いわよ！　恥ずかしい事しないでよね！！」

「恥ずかしい事？」

「応援とか、あ、あたしをソイツに任せるとか！」

ビシっと俺を指差す花梨。なんとも失礼な、お子さんだ

「だ、だってママ、身体弱いし、多分そんなに長生き出来ないもん。だからママが居なくなった後に花梨ちゃんを任せられる男の子に会えて、嬉しかったんだもん」

香苗さんは、いじけた子供の様に花梨の顔色を伺いながら言った

「……ママは長生きするわよ。て言うかしなさい！！」

「は、はい！」

「だから、コイツに任せるとか言わなくて良いから。大体、こんな奴に任せる程、あたしって頼り無い？」

こ、このガキ……

「ううん、花梨ちゃんは頼りがいあるよ！　恭介クンなんかよりも、よっぽど！」

こ、このアマ……

「でしょう？　だから心配要らないわよ。……あたしより自分の身体の事を心配しなさい」

「花梨ちゃん……うん！」

「……うむ～」

花梨の方が親っぽいな

「香苗ちゃんは、いっつも子供を、特に花梨ちゃんの事を心配しているのよ～。子供を心配しない親なんて居ないけど、香苗ちゃんは自分の身体の事があるから特にね」

母ちゃんは、二人を優しい眼差しで見つめている

「……ま、子供の方も負けないぐらい、親を心配しているものだけどな」

事情は分からないが、早く健康になって欲しいものだ

俺の父兄参観　7

休み時間は終わり、算数の時間。教える人はさっきと同じ、青山先生

「A子さんには18人子供がいました。そんな大家族の元に、田舎から36個のリンゴと1620個のミカン、そして9個の梨が届きました。さて、全員にリンゴとミカンと梨を行き渡らすには、リンゴと梨をどのように配れば良いでしょうか？」

「……」

結構難しいな。つかミカン多過ぎ。そしてA子さん、産みすぎ

「はい！」

最初に手を挙げたのは、またしても花梨だった

「お、早いな～霧島。じゃ前で頼む」

「はい」

「花梨ちゃん、頑張れ～」

小さい声で、応援する香苗さん。なんか期待する目で俺を見てるんですけど……

「が、頑張れ花梨～」

「愛してるぞ」

「愛してるぞ～って何言わせるんですか！？」

びくっ。花梨の身体が軽く跳ね、チョークの文字が乱れる

「ん？　……うお！？」

一瞬雪葉が首だけをこちらに回し、俺を見た……超笑顔で！

「後で覚悟してね、お兄ちゃんって所かしら～」

「訳さないで良いよ！」

怖いっての！！

それから雪葉も問題を答えつつ、授業は何事もなく終わって再び休み時間

休み時間では、奥様達が子供達について話している

「霧島さんのお嬢さんはほんと優秀だわ」

「なに、うちの子も結構やるもんさ！」

「しかし一番可愛いのは雪葉だな。あの可愛さは、もはや犯罪だろう」

奥様方の会話に混ざってみる

「そうねぇ、確かに雪葉ちゃん可愛いわねぇ。でもうちの子には敵わないわ！」

「ちょっとお待ち！　うちの美月だって負けてないよ！！」

「いんや！　うちの子が一番！！」

「一番はうちの子よ！」

「うちだ、うちだ！」

「いや、うちだ～」

第一次、奥様戦争勃発

「子供達の前で不毛な争いは止めましょ～」

母ちゃんが、のんびりやんわりと争いを止めた

「うちのが最高だって言ってんだろうが！」

「あ？　ふざけた事言ってないで、養豚場に帰れよブタ」

「うふふ……テメェら、みんな細切れだよぉ」

しかし戦火は広がり、教室内は９０年代のマガ〇ンみたいな世界になってしまう

最初は気にして無かった子供達も、今は不安げに自分達の親を見ている

……この戦争を止める事が出来れば、俺は失ったであろう名誉を挽回出来るのでは？

よし！

「みなさん、落ち着いて下さい！　こんな言い争い、良くありません！　僕達は、僕達は同じ子供を持つ、いわば仲間じゃないですか！　そんな僕らが何故憎しみ合わなければならないのです！　そんな風に憎しみ合う親達を、子供達はどう思うか、考えた事はありますか？　僕はそれを思うとこの胸が張り裂けそうです！！」

俺の魂の叫びに、教室内は静まり返った

「……そうね。ごめんなさい、田中さん」

「い、いや、あたしも悪かったよ！　ごめんね」

奥様達はうなだれ、一様に反省の色を見せる。どうやら止める事が出来たらしい

「荒れ狂う獣達を、覇気で抑えおったか……流石は佐藤家の若き獅子よ」

「お、お兄ちゃん……カッコイイ！」

俺を見る雪葉の目が輝いている。ふ、その輝きが俺のダイヤモンドさ

「き、恭介クン……」

香苗さんは、ワナワナと震え……

「結婚して！」

首に抱き着いて来た！？

「な、な、なな！？！」

「あ、花梨ちゃんとだよ？」

「なっ！？　ママ！！」

ギラン！

「ひぃ！？」

雪葉の目が、さっきより強く輝く。抜き身の日本刀に近い冷たい輝きだ

「駄目！　兄ちゃんは私と結婚するんだ！！」

「ふげ！？」

美月が勢い良く立ち上がって、そのまま俺の腹にタックル！

「……ふふ。せっかくだし、僕も便乗させてもらうよ？」

「こ、こら！」

風子は、ゆっくりと近寄り、ギュッと俺の右腕に抱き着いた

「ち、ちょっと！　そ、そいつは、あ、あたしのでしょ！？」

「うお！？」

ドカドカ向かって来た花梨は、俺の左腕を引っ張る

「お、おに……お兄ちゃんは雪葉だけのお兄ちゃん！」

そう言って妹は俺に向かって駆け寄り……

「って、ちょっと待て！　こ、このパターンは、まさか！」

あの王道の！

「あっ！」

やっぱり躓いた！　そんで慌てて目の前にある俺のアレを掴……

「ぎゃー！！」

今日のアイアンクロー

雪

続きましょう

第１０４話：春の合コン

「そりゃ災難だったな、ほっと」

「ああ、もう父兄参観は懲り懲りだ、よっと」

めちゃくちゃだった父兄参観が終わり、へとへとになりながらも帰宅

学校はサボってしまったが、きっと神様も許してくれるだろう

「でも雪、喜んでたんだろ？　なら良かったんじゃないか？　お、ファイアーキノコ！」

「ファイアーなのかね？　ファイヤーじゃないのか？」

「どっちでもいいし」

「まぁ、そうかもな」

此処は俺の部屋。学校から帰って来た春菜を捕まえて、グチ＆ゲームに付き合って貰っている

「しかしアレだな、お前上手いな」

二人同時プレイな為、差がハッキリと分かってしまう

「そうか？　あんまりやってないんだけどな、これ」

ピンポコピンポコ

「携帯鳴ってるぞ」

相変わらず変な着信音だな

「ん、ちょっとタイム……もしもし？」

春菜の使う携帯は、二年前の機種。俺のお下がりなのだが、不満は無いらしい

「え？　合コン？　なんだそれ？」

「……」

……合コンだと？

「……ふ～ん。でも知らねー奴と遊びたくないし」

そうだ、その通りだ。成長したな、春菜。兄ちゃん、一安心

「え？　マジ！？　マジでタダで食い放題？　行く！！」

「馬鹿かお前は！」

「うわぁ！？　な、なんだよ兄貴？」

「合コンへ行くのは良いさ、そこで好きな奴を見付けるのも良いさ！　だけど食い物に釣られるとか……兄ちゃんは情けない」

ともすれば零れそうになる涙を堪え、俺は春菜に語る

「で、でもマグロ花子（回転寿司屋）で食べ放題だぜ？　これは外せないって言うか……」

「……兄ちゃんが奢ってやるから」

「マジで！？　あ、加奈？　合コンだっけ？　行かないから。え？　代われって？　ああ、良いけど……兄貴」

春菜が俺に携帯を差し出す

「ん？　出ろってか？　……もしもし？」

「春菜のお兄さん！」

「な、なんでしょう？」

声の迫力にビビってしまう

「今回の合コンは、あの鳴神との合コンなんですよ！　分かってます！？」

「す、すみません」

「この機会を逃したら、あたし達が鳴神の男と付き合える可能性なんて無くなってしまいます！」

「は、はぁ、そうなんですか……」

「そうなんですかじゃないですよ！　良いですか、鳴神は」

１０分経過

「と、言う訳で言わばエリートなんです！　その辺のボンクラとは違うんです！！」

「よ、よく分かりました。ご、合コン頑張って下さい」

「春菜が居ないと困るんですよ！」

「な、なんで？」

「その鳴神の人、春菜に声を掛けたんですから」

「は？」

「先週、マックで声掛けられて電話番号教えて貰ったんです。春菜はめんどくがって先に帰っちゃいましたけど」

「……」

「ですから、合コンの主役は春菜なんです。あたし達は、他の脇を捕まえる事が出来れば……」

「……なるほど、話は分かった」

「じゃあ！」

「友達付き合いも大切だろうし、春菜が行きたいなら止めはしない。

しないが！」

「……が？」

「俺も行くぞ！！」

「ええ！？」

中学生に声を掛けるボケのツラを見てやるぜ！

春の合コン　2

「……」

まだ携帯の電話帳に残っていた、この番号。掛けるのは、少し躊躇われるが……

「……」

よし！　掛けるか！

トゥルルルと何度かコール音が鳴り、

ガチャ

「も、もしもし！　何事だ！？」

いや、そっちこそ何事だって感じだが……

「燕？　恭介だけど……突然連絡なんかして、ごめんな」

「い、いや、良いんだ。丁度、時間が空いていた頃だったし……」

大変です生徒会長！　奴がまた暴れ出しました！

生徒会長～。理事長の裏金発覚です～

た、助けて下さい会長！　豚が、豚が～！！

「……また後にしようか？」

「い、いや、問題は無い！　ゆかな、後は頼んだぞ！！」

ち、ちょっと、燕～！

電話越しに聞こえる悲鳴や、物音。どうやら燕はその場所から走って逃げ出しているらしい

なんだか知らんが、えらい時に電話をしてしまったようだ

「ハァハァ、ハァハァ……ん。……フウ」

「……大丈夫か？」

「う、うむ、問題ない。……それで、どうしたのだ、電話などしてきて」

「あ、ああ……えっと、燕に聞きたい事があってさ」

「私に？　なんだろうか」

「燕と同じ二年らしいんだけど、柳田　圭一って奴、知ってるか？」

「柳田……。ああ、サッカー部の部長に選ばれた者だな。この間、顔を見合わせた」

「どんな奴か知ってる？」

「余り話した事が無いので、答えられんな」

「そうか……」

残念だ

「う……だ、だが、噂レベルで良ければ多少は耳に入っているぞ！」

「本当か！？　それで構わないから聞かせてくれないか？」

普通の奴だったら良し。合コンに着いて行くなんて不粋な事はしないさ

「構わないが、あくまで又聞きだぞ。それで全てを判断するような事はしないで欲しい」

「分かってるよ」

「うむ。では話そう」

柳田　圭一。明るく社交的で、家柄も良く、本人も中々の偉丈夫な為、女生徒の人気も高かった

しかし、一方で女癖の悪さも目立つ。それがばれてしまって、今は余り女生徒に相手にされなくなってしまったが、過去二年の間に付き合った女性の数は、十人を越えているらしい

「と、こんな所か」

「じ、十人以上……」

なんて羨ま……いや！

「多過ぎだろ、それ！」

「うむ。本当だとしたら付き合うな、とは言わんが、少々節操が無いな。大体一月、二月程度交際しただけでは相手の事など理解しきれないだろうに。……私など今だに分からない事の方が多い」

「ん？　今、誰かと付き合ってるのか？」

「君のそういう所が分からないと言うのだ！」

「す、すまん」

迫力に負け、つい謝ってしまう

「全く。……しかし、こんな事で連絡してきたのか。喜んで損をした気分だよ」

「……ごめんな」

多分、忙しいってのに余計な時間を取らせてしまった

「あ、べ、別に責めてる訳ではないのだぞ？　少し驚いてしまっただけなんだ。本当は……嬉しい」

「何が？」

「……君は馬鹿か？」

「ぐっ！」

久しぶりに言われると、傷付くなコレ

「……では失礼するが、また何かあれば……。無くても構わない、好きな時に連絡をくれ」

「ああ、ありがとよ」

「うむ。では」

「ああ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……さ、先に切ってはくれないだろうか？」

「あ、そう？　じゃ、またな」

「う、うん……また」

ガチャ。ツーツー

「……うむ～」

なんか緊張したぜ

しかしこれは……

「動かなくてはならない様だな」

兄として！

春の合コン　3

日曜日の午前。待ち合わせの場所だった駅前へ春菜と一緒に行くと、既に来ていた茶髪の子（加奈ちゃん？）は、呆れた目で俺を見た

「……本当に来たんですか？」

「なんだよ、文句あるのかよ」

春菜が加奈ちゃんに詰め寄る。その姿は、めちゃくちゃ男っぽい

「俺が悪いんだから、友達を責めるなって。……あ～、心配しなくても着いて行かないから」

俺がそう言うと、加奈ちゃんは頬を緩ませ

「ですよね～」

っと、言った

「え～兄貴、一緒じゃないのかよ～。……行くの止めようかな」

「ち、ちょっと春菜～」

「こらこら。俺の事は良いから楽しんで来なさい」

「だけどよ～」

「たく……お、向こうで手を振ってる子が居るぞ。お前の誕生日ん

時に見たな」

「あ、真理だ。よ～」

春菜は友達の元に駆けて行く

「……色々ごめんな。アイツ結構寂しがり屋だからさ。春菜の事、頼んだよ」

「はい、任せて下さい！」

ニッコリと頷く絵里ちゃんに頷き返し、俺は家の方向に向かって歩く

「さて、俺は引き上げるとするか。余り遅くなるなよ春菜～」

「ああ！　食ったら直ぐ帰る～」

「ふ、じゃあな」

春菜達と別れて、俺は家に……帰らないで！

ささっと、俺の方の待ち合わせ場所である駅前銅像の裏に回って、そこから観察開始！！

「……そろそろだな」

春菜達を観察しながら携帯を見ると、もうすぐ待ち合わせの時間となっていた

凄まじく気は進まなかったけど、こんな事を頼める人は他に居ない。

そして、こんな時には凄く頼りなる……様な気がする

「むっ！」

春菜達が移動を始めやがった

どうやら彼女は間に合わなかったらしい。取り敢えず先に追跡を……

「お待たせです！」

「ぐえ！？」

後ろから首に抱き着かれた！？

「今日はストーカーのお誘いありがとうございます。精一杯、付け回しますから宜しくお願いしますね」

「く、首、くび、くび！」

「おっと失礼しました」

首、解放！

「ふひ～、ゴホ、ゴホ……ふぅ。……き、今日は無理を聞いて頂き、ありがとうございます」

咳込みながら後ろを向くと、そこにはチェックのミニフレアスカートに、淡い黄色のサマーセーターを着た美女の姿

「お礼は松茸でお願いします。ずばり１５センチと見ましたよ！」

最終兵器、徳永　綾音さんだ！

春の合コン　4

無事に綾さんと合流し、いよいよ本格的に追跡開始

「……さて、では行きましょうか」

春菜達が少し離れたのを見計らって、銅像から移動する

「佐藤君」

「なんでしょう？」

ぽんぽんと肩を叩かれ、振り替えってみると

「……あ！」

「キャスケット被ってサングラスでーすよ」

「見知らぬ、ねーちゃんの誕生や！！」

帽子被ってサングラスしただけなのに、さっきと全然雰囲気が違う

「ふふふー。変装は尾行の基本です。佐藤君は何も用意していないんですか？」

「……ふ、侮ってもらっては困りますね。ちゃんと持って来ています！」

俺はポケットから、マスクと真っ黒なサングラスを取り出して……

「……佐藤君。それは下着を盗む時の為に取っておいた方が良いですよ」

そう言いながら、綾さんはフゥっと溜息をつく。どうやら呆れさせてしまった様だが……何故？

「佐藤君の分、持ってきていて良かったです」

綾さんは、手持ちのバッグからニット帽を取り出して、俺に被せる

「変装は自然に。基本ですよ。と、そろそろ急がないと見失ってしまいますね。行きましょう、佐藤君」

「は、はい」

素早く歩き出す綾さん。慣れている気がするのは気のせいだろうか

「しかし、佐藤君も中々のシスコンですね～。妹の合コンに隠れてついて行くなんて、普通出来ませんよ？」

「否定は出来ませんね。ですが、やはり心配で」

春菜だし

「でも、大丈夫そうでしたら直ぐ引き上げます」

だが、変な奴だったら計画通りに！

「うふふ。みんながどんな反応するか、楽しみです。お、ファミレ

スに入りましたね。行きましょう」

「ええ」

春菜達が入ってから2、3分に俺達もファミレスに侵入

からんころん

「いらっしゃいませ。2名様ですか？」

「ええ。席は禁煙席で」

「では、あちらでお好きなテーブルをどうぞ」

「ありがとう」

テーブル毎に仕切りで区切られている禁煙席。奥がには8人用とかの広いテーブルがある為、恐らく春菜達はそっちの方だろう

「佐藤君、奥手前の窓際のテーブルに行きましょう」

綾さんは、迷い無くテーブルへと向かって行った

「よっと」

「此処で良いんですか？　ブライド閉めます？」

綾さんに続いて、俺も向かいに座る

こちらは西側なのか、夏の日差しが入って来て、少し眩しい

「大丈夫です。それより後ろの会話を聞いてみて下さい」

「え、ええ」

後ろったって……

「今日は何でも食い放題なんだよな！　よっし、和風ハンバーグとナポリタンとカツ丼で！！」

「は、春菜？　後でお寿司食べに行くんだよ？」

「だから？」

「……お金足りるかな」

「……」

「何だか私もお腹空いてきました。佐藤君は何を注文します？」

「……そうですね、まだモーニングやっていますからそれを」

「私もそうしようかな」

ピンポーンっと呼びベルを押して、注文

「承り～！」

やけに明るい店員に注文し、俺は立ち上がる

「ドリンクどうします？」

「お、ありがとうございます。お茶をお願いします」

「了解」

俺はドリンクを取りに、ドリンクバーへ……げ！

「ん？　……あれ？」

春菜の友達の、真理ちゃんって子だ！

「……じ～」

「……な、何飲もうかな」

視線を無視し、俺はコップを取る

「……じ～～」

「お、ド、ドクダミ茶炭酸入り！　これ最高にクールでホットなドリンクだぜ！！」

「春ちゃんのお兄さん？」

「……幾ら出せば見逃してくれるか？」

「え？」

「取り敢えず、拉致ですね」

「え！？」
「うわ！？」
いつの間に背後に！
「では連行しましょう」
「ど、どこにですか？」
「トイレです。佐藤君、先に食べていて下さいね」
「え、ええ」
「た、助け、むぐ！」
口を抑えられ、ずるずると引きずられて行く真理ちゃんを見ながら、
俺は改めて綾さんの恐ろしさを知った……

春の合コン　5（前書き）

呼び方変化表

幼年期→少年期→青年期

夏紀。恭介→恭ちゃん→アンタ

雪葉。→にー→にぃ→にぃたぁ→お兄ちゃん

秋。→恭くん→恭介→恭介

春菜。→なぁ→兄貴→兄貴っ♪

何気に登場人物が多い、女系家族。誰が喋っているか当ててみよう

【恭介について】

「あん？　……奴隷ね」

「か、彼の事か……い、いや。その、なんだ？　いわゆるアレだ、こ、恋人的な……元だけど……え、ええい！　これ以上聞くな！！」

「自慢のお兄ちゃんです！」

「彼ですか？　彼は良い青年ですよ。間違いなく出世するでしょうね」

「……弟。大切」

「え？　あいつの事？　あいつは……悪い奴じゃないわよ。馬鹿だけど」

「兄貴っ！　なんか最近超好き～」

「ふふ。素敵な人だと思うよ」

「お姉ちゃんと仲が良い痴漢さん」

「恭介さんですか、凄い人です。今の俺じゃ何一つあの人に勝てません。でもいつか！　いつか必ず追い付き、告白を！」

「こ、怖い人……です」

「兄ちゃんの事？　う～ん……うん！　好き！！　またゲームやろー、兄ちゃん」

「良い子よ～。自分の命よりも大切ね～」

「佐藤君ですか。そうですね～、私としては佐藤君本体より、佐藤君の下半身に寄生する、おっ立った象さあいた！？」

「佐藤君？　ああ、秋さんの弟ですね。ええと、可愛い……かな？　好きですよ、ああいう子……って確か同い年だっけ」

「奴か……奴はとんでもない男だよ。歴史に残る犯罪者とは、奴の様な者を指すのだろうな。いつか必ず捕まえる！」

・0人分かった
読んでないだろ！

・1人～2人
誰の事が分かったのか、気になります

・3人～4人
1話観覧ありがとうございます。今後ともごひいきに

・5人～8人
普通。良いのか普通で？　もっと高みを目指しなさいよ！

・9人～13人
やるね！　その勢いのまま、読み漁れ！！

・14人～15人
惚れもうした～！！

・全員

え？　嘘でしょ？　そんなまさか……。しっかりと読んでありがとう、もう何も言う事なんてないさ。これからも宜しくお願いします。

……あれ？　涙で前が見えないや！

春の合コン　5

「お待たせです」

二人は、5分程でトイレから戻って来た

「私は何も見ていません。春菜のお兄さんなんて知りません」

綾さんの横に居る真理ちゃんが、虚ろな目で見事な棒読みをした。

大丈夫なのだろうか？

「……一体何をしたんですか？」

「真摯な態度の説得です。ね」

「はぁい、お姉様～」

「本当に何したんだアンタ！？」

「ん？　兄貴？」

後で春菜の声が！　ヤバイっ！！

「大きな声は駄目ですよマコト君。あ、それじゃ真理さん、後は宜しくお願いします」

「はい、お任せ下さい！」

元気良く頷き、真理ちゃんは後ろの席に戻って行く

「お待たせ～」

「おかえり。……で、お兄さんがどうしたって？」

「いや、今、そっちから兄貴の声がした気がするんだけど……」

「……あなた、どんだけお兄さん好きなのよ」

「向こうは、カップルだよ。知り合いのお姉さんと、その彼氏さんでマコトさん」

「ふ～ん。ま、良いか。カツ丼～」

……どうやら危機は去ったらしい

「……助かった」

「危なかったですね。でも味方が出来ました」

「味方って……」

からんころん。店のベルが鳴る

「いらっしゃいませ～」

何気なく入口の前を見ると、俺と同い年ぐらいの奴らが、三人で店内へ入って来ていた

長身で細い奴一人に、童顔が一人。そして、眼鏡を掛けた神経質そうな奴

その三人は店員に何かを言った後、誰かを捜すそぶりを見せながら、こちらへ向かって来る

「……どうやら来たみたいだな」

恐らく奴らだろう

「どれどれ……。ふむふむ、中々カッコイイですね。でも私は佐藤君の方が好みですよ」

「はぁ。それはどうも」

話半分に聞いておこう

「キュンっ！　つれない態度で、私の好感度アップ！」

「あ～また上がっちゃったか……」

次は下げよう

そんな会話をしている間に、男共は俺達の横を通り過ぎて……

「おまたせ。ごめんな、遅くなって」

春菜達に話し掛けた！

「注文分は俺らが出すからさ。あ、こいつらクラスメート」

「岡田　智明だよ。今日は宜しくね～」

童顔が岡田か

「中川　純也。宜しく」

眼鏡は中川

「で、俺が柳田　圭一っと。よ～し、自己紹介終わり！　今日は楽しもうな」

野郎共は簡単な挨拶をした後、席に座った

「あ～でもヤベ～、みんな超可愛いし、俺、緊張しちゃってるよ～」

圭一は全く緊張していない声で、そう言った

「この合コンは血に塗れる。殺意を隠さず三人の男達を睨み据え恭介は、ポケットに忍ばせた凶器を手に、三人へ襲い掛かった」

「勝手に恐いストーリーを作らないで下さい」

「因み凶器は、１５センチの松茸だった」

「怒りますよ、本気で」

それに今はそれどころじゃない

「こっちこそ皆さん格好良くてドキドキです！　今日は、こちらこそ宜しくお願いします！！」

合コンは始まったのだ！

春の合コン　6（前書き）

誰が喋ってるか当ててみよう。答え合わせ

解答者、佐藤　恭介君

「はぁ、どうも」

問1　あん？　……奴隷ね

「……夏紀姉ちゃんだろ」

問2　か、彼の事か……い、いや。その、なんだ？　いわゆるアレだ、こ、恋人的な……元だけど……え、ええい！　これ以上聞くな！！

「燕だな。他に元カノなんて居ないしさ！」

問3　自慢のお兄ちゃんです！

「俺もお前が自慢だぜ、雪葉」

問4　彼ですか？　彼は良い青年ですよ。間違いなく出世するでしょうね

「……宗院さんに言われると何か凹むんだよな」

問5　……弟。大切

「俺も秋姉が大切や～！！」

問６　え？　あいつの事？　あいつは……悪い奴じゃないわよ。馬鹿だけど

「……やっぱ花梨とは一度ゆっくり話し合う必要があるな。正座で」

問７　兄貴っ！　なんか最近超好き～

「ありがとよ。でも最近ちょっと甘え過ぎだぞ春菜」

問８　ふふ。素敵な人だと思うよ

「風子も素敵な女の子だぜ。これからも雪葉を宜しくな！」

問９　お姉ちゃんと仲が良い痴漢さん

「なづなちゃん……」

問１０　恭介さんですか、凄い人です。今の俺じゃ何一つあの人に勝てません。でもいつか！　いつか必ず追い付き、告白を！

「……それじゃ俺に告白するみたいだぞ直也君」

問１１　こ、怖い人……です

「鳥里さん……なんか本当にすみません」

問１２　兄ちゃんの事？　う～ん……うん！　好き！！　またゲームやろー、兄ちゃん

「お、嬉しい事言ってくれるな美月！　来月発売の翼子、勝負だぜ！！」

問１３　良い子よ～。自分の命よりも大切ね～

「母ちゃんはマジで言ってるからなぁ。嬉しいけど、自分も大切にしてくれよ？」

問１４　佐藤君ですか。そうですね～、私としては佐藤君本体より、佐藤君の下半身に寄生する、おっ立った象さあいた！？

「いや、俺はこれに何てコメントすれば良いんだよ……。　綾さんだろ？」

問１５　佐藤君？　ああ、秋さんの弟ですね。ええと、可愛い……かな？　好きですよ、ああいう子……って確か同い年だっけ

「きっと向こうでも剣道やってんだろうな。またいつか会おうね、宮田さん」

問１６　奴か……奴はとんでもない男だよ。歴史に残る犯罪者とは、奴の様な者を指すのだろうな。いつか必ず捕まえる！

「組織の犬め……」

よく出来ました

「あ、どうも。……って結局アンタ誰！？」

春の合コン　6

「よ、春菜ちゃん。この間はごめんね」

「ん？　何が？」

「なんか嫌な思いさせたみたいだからさ。でも俺って、あんまり女の子に声とか掛けない奴なんだよ？　春菜ちゃんには思わず声を掛けちゃったけど」

「いや知らないって。てか誰？」

「ぐっ……お、俺、鳴神に通ってるんだけど、そこで―」

「だから知らないって。今、カツ丼食ってんだから話し掛けてくるなよ」

「ぐぐ！」

席の後ろで繰り広げられる会話は、三組に別れていた。その会話の中で俺が耳を澄まして聞いていたのがこれ。春菜と圭一の会話だ

「春菜さん、全く相手してませんね」

「春菜に男女の駆け引きなんか通用しませんよ。それに春菜の理想にアイツは掛け離れてますし、懐きもしないでしょう」

春菜の理想は人が良くて優しくて、自分をしっかりと愛し包み込んでくれる人。要するに親父だな

「他の二組も余り盛り上がってない様ですよ」

「組み合わせが悪いんじゃないかな？」

真理ちゃんと中川って奴の間には、殆ど会話が無く、加奈ちゃんと岡田にはお互い共通する話が無いらしい

「加奈ちゃんは多分中川の方を狙ってんじゃないかな？　大人っぽい男が好きそうだし」

「岡田君はゲームやマンガの事しか話してませんもんね。私は全然構いませんが、初顔合わせにゲームの話は普通に引きます」

「中川は中川で無口だよな。真理ちゃんも進んで話す方じゃなさそうだしこれは間が持たないだろう」

「合コンで無口の人は、ほぼ１００％彼女作れませんよ。と言うより基本的に受け身の男性はモテません」

「ではこの中では圭一が一番と？」

「下心見え見えですけどね。その下心を楽しむのも合コンだったりしますが、中学生に対して露骨過ぎます。私的には、ごめんなさいです」

「成る程。なんだか、ねるとんみたいになってきたな……」

「……佐藤君って本当は歳、幾つですか？」

そんな会話をしている間に、後ろで動きが有った

「食べ終わった？　それじゃ、次はカラオケ行ってみっか～」

「賛成～。ほら春菜、立って、立って」

「ちぇ。めんどくせ～の」

六人は立ち上がり、会計所へと行く

「……まずいですね」

綾さんは珍しく顔を曇らせ、そう言った

「まずいって……何がですか？」

「カラオケは一番安くて気軽な個室です。個室に連れ込まれてしまうと、万が一、中で何かが有ったとしても……どうしたんですか？　そんな面白い顔をして」

「心配してるんですよ！」

「大丈夫です。いざとなれば強行手段を使いますから」

ニコッと笑う綾さんを見て、この人には逆らわない方が良いと、本能的に悟った

「では行きましょうか」

「え、ええ。あ、料金は俺が払いますよ。そのくらいさせて下さい」

「お言葉に甘えちゃいます！　ありがとう」

今度の笑みは、とても可愛いらしい

「こうして私は、この若い男に篭絡されて行くのでした」

「しませんよ」

……普通にしていれば、魅力的な人なんだけどねぇ

春の合コン　7

駅前には二軒カラオケがある。しかし奴らは駅前へは行かず、駅前の道路沿いを１０分程歩いた場所にある、ダーツやビリヤードも出来るカラオケ屋、本能寺へと入って行った

「佐藤君、このシチュエーションは！」

「敵は……敵は本能寺にあり！　行くぞ～！！」

「お～！」

店の前で拳を振り上げ、道行く人の注目を浴びつつ、俺達は本能寺に乗り込む

「会員証か身分証をお願いします」

「え！？　身分証とかいるんですか？」

一時撤退か！？

「はい、会員証」

「はい、ありがとうございます。場所はどうしますか？」

「場所は１５番で、ビリヤードもやりたいのでキューを貸して下さい」

「分かりました」

俺が撤退準備をしている間にも綾さんは話を進めて行き、ビリヤードのキューを受け取った

「はい、マコト君」

「あ、はい。ありがとうございます」

しかし何故キューを？

「先ずはビリヤード場を見に行きましょう」

「はぁ……」

疑問に思いながら綾さんに付いて行くと……

「お！」

５つのダーツと、６台のビリヤードが一緒にあるこのフロアに、春菜達が居た

キューを持っている所を見ると、どうやらビリヤードをやっているらしい

「会って直ぐカラオケと言うのは、女の子を警戒させてしまいます。駅前にもカラオケがあるのにわざわざ本能寺を選んだ時、私はビリヤードかダーツの可能性を疑いました」

「め、名探偵誕生……」

「ふふふ」

綾さんは不敵に笑い、

「ずばりマコト君は、童貞ですね！」

ふざけた事を吐かしやがった！！

「まぁ、それは置いといて。ビリヤードをやりましょう。ぽけーっとしていますと目立っちゃいます」

「……了解」

置いとかれても困るが、取り敢えず春菜達とは離れた台に付き、適当に始める

「マコト君はビリヤードの経験ありますか？」

「ええ。中学の頃、よく打ちました」

ビリヤードに嵌まった夏紀姉ちゃんの相手をさせられただけだが

「ではナインボールでもしましょう。負けた方が一枚ずつ服を脱いで行くルールで」

「いや、目立つから」

「ではムチで」

「意味が分からないんですけど？」

グダグダな話をしつつ、ビリヤードを開始。バンキングをしたが、綾さんは何故か打たず、俺が先行となる

「絶妙な撞き加減。相当やってますね」

「ご想像にお任せします」

上手くならないと、生き残れなかった……

「それではブレイクショットをば」

「慣れた手つきに、巧みなテクニック……よっ、後家殺し！」

「ぶっ！」

掛け声のせいで手元が滑って、一つも落とせなかった

「……綾さん」

「褒め言葉ですよ？」

「いや、その、そんな何で喜ばないんだろ？　って顔をされても困りますよ」

まさか本当に褒め言葉だと思っているのか？

「とにかく、ショット失敗です。綾さんどうぞ」

「はい」

綾さんは頷き、キューを構える。その瞬間、彼女の周囲がピンっと張り詰められた。凄い緊張感だ

「さ、流石剣道家」

勝負毎になると、隠した牙を見せおるわ

「……」

「……」

ごくり。緊張に耐え切れず、俺の喉が鳴る。そして――

「……えい！」

こす

「……」

「……ビリヤード、教えて欲しいです」

「……ええ」

先ずは球に当てる所から教えよう

春の合コン　8

「やん、マコト君のエッチ」

「……」

「あ……ダメ。ここじゃ……ね？」

「……」

「マ、マコトぉ。私、もうだめぇ～あいた！」

「……宗院さんが綾さんを叩きたくなる気持ち分かりました」

ビリヤードを教え始めて１０分。綾さんは何かある度に変な声を出す

そんなに大きな声ではなく、店内には音楽が鳴っている為、特に注目は浴びていないが、非常に恥ずかしい

「雰囲気を盛り上げようと頑張ってみました」

「盛り下がりましたよ」

春菜達も盛り上がってなさそうだな

「……このまま解散になるか？」

「そうはイカのキンカクシ坂東玉三郎ですよ。見てください、彼を」

「本当に母ちゃんと気が合いそうですね……」

呆れつつ綾さんの視線を追うと、やけに爽やかな笑顔でビリヤードを打つ圭一の姿が目に入った

「あれがなにか？」

「良く見て下さい。自然を装っても、笑顔はわざとらしいですし体に力が入り過ぎています。余り上手く進んでないので焦っているんですね」

「うむ～」

言われてみてもイマイチ分からないが、綾さんが言うのだ、そうなのかもしれない

「私の勘では後、１０分ですね。雰囲気に堪えられなくなって引き上げるか、一か八かでカラオケに行くか。後はダーツですが、最初に盛り上がり易いダーツを選ばず、初心者には楽しみづらいビリヤードを選んだ時点で得意ではなさそうです」

「な、なるほど」

さっきからやけに詳しいな。経験者か？

「エロマンガの受け売りですけどね」

「……」

そんなこんなで１０分後

「そ、そろそろカラオケ行っか～」

「さ、さんせ～」

綾さんの言う通りになった！

「え～まだ遊ぶのかよ。もう寿司食って帰りたいんだけど」

「ち、ちょっ、春菜～」

「は、腹空いてるんだ。此処出前取れるから寿司取ろうか、奢るよ」

「本当か！？　サンキュー！」

圭一の言葉に春菜は声を弾ませる

「……やばいな」

春菜の好感度が０から３０にアップしたっぽい（７０で無警戒になり、１００で友達感覚に）

「じゃ、行こうぜ」

圭一は、さりげなく春菜の肩に手を回して誘導する

「ああ！」

明らかに機嫌が良くなった春菜は置かれた手を気にせず、嬉しそうにカラオケへと向かって行った

「……そろそろ止めた方が良いか？」

しかし妹の交遊関係に口出す兄と言うのも如何なものか

「大丈夫ですよ、マコト君。もし本当に大変な事になるようでしたら、必ず私が止めます」

いつもの冗談っぽさが無く、真剣な顔で綾さんは言う

「……ありがとうございます綾さん。でも危ない事はしないで下さいね。そう言うのはアイツの兄貴である俺の仕事ですから」

信じられる。この人は信じられる人だ

俺は綾さんに頷き、感謝を言葉にして伝えた

「……分かりました、マコト君。では、脱いで下さい」

信じられない。この人は信じてはいけない類の人だってのを、すっかり忘れていた

「そ、そんな目で見ないで下さいよ。ちゃんと考えがあるんですから」

「考えですか？」

「はい。実は私、此処の店長さんと知り合いなんですよ。ですので」

そんなこんなで五分後～

スタッフルームで制服を手に入れた！

「って都合良すぎて何だか恐いですね」

「それで良いんですよ。それでは店長さん、何かありましたら宜しくお願いします」

「相変わらず強引だね、綾ちゃん。ま、いいけどさ。代わりっちゃあれだけど、お父さんに宜しく言っといておくれ」

「はい、分かりました。ではマコト君、着替えていつでも行ける様にスタンバっておきましょう」

「は、はい」

一体何者なんだ、この人は……

「警察官の娘です」

「なるほどって、もう少し引っ張りましょうよ」

つくづくお約束を守らない人だ

「お父さんは私に甘々ですから、私がお願いすれば無実の人でも捕まえてくれます。実際に何……冗談です」

「はぁ、そうですか」

なんか深く聞くのはヤバそうなので、適当に聞き流しつつ更衣室へ

「……着いて来ないで下さいよ」

「お約束ですので」

「……そのうち逮捕されますよ」

綾さんを更衣室から追い出し、カギを閉める

「……はぁ」

宗院さんも大変だな

春の合コン　9

「ジュースとお菓子になりま～す」

「……なります」

店員の制服に着替え、何故か働かされている俺達

「それではまた何かありましたら御呼び立て下さ～い。……よし、次はお皿洗いに行きましょうマコト君。優しくして下さいね」

「……はい」

「でもたまには激しくされたい年頃です」

「そうですねぇ」

適当に聞き流して……

「マコト君！」

「うわっ！？　な、なんですか？」

「マコト君はいつデレるんですか！」

「は？」

「これだけ攻めてデレないなんて……。読者数稼げませんよ！？」

「ど、読者数って……大丈夫ですか？」

頭とか

「やっぱり裸でエプロンしか……でもそれは流石に……よし！」

「よし、じゃ無いでしょう」

綾さんの頭に軽くチョップを入れる

「早く皿洗いに行きましょうよ」

サボってると給料貰えない……って、目的が違いまんがな！

「綾さん、真理ちゃんから連絡ありませんか？」

「はい、まだありません。そろそろ注文がある頃だと思いますけど……ちょっと覗いてみましょうか？」

「覗く？」

「こっちです」

綾さんに連れられ、廊下の奥へと向かって行く

「ええと……此処ですね」

一分弱歩き、着いた場所は廊下の突き当たり。木で出来た赤いドアにモニタールームと書かれたプレートが刺してある

「此処は？」

「防犯カメラの映像を見る場所です。店長やリーダークラスじゃないと入れない場所ですよ」

ポケットから鍵を取り出し、綾さんは言う

「……なんで鍵を持っているのか聞かない方が良いですか？」

「共犯で良ければ是非聞いて下さい」

「……」

重い沈黙の中、カチャっと軽い音で鍵が開く

「どうぞ、マコト君」

「はぁ……」

渋々ドアを開けて先に入ってみると、人がギリギリ二人入る程度の狭い部屋。中にはパソコン机とパイプ椅子が置いてある

その椅子に座って、マウスを手に取ってみた

「失礼しますね、マコト君」

続いて後から綾さんが入って、閉められるドア。一人でさえ狭いのに、二人入ったのでギュウギュウ詰めだ

「ん……ちょっと狭いですね。今なら痴漢されても誰にされたか分

からないかも……」

「アホですか貴女は」

「う……草食と見せ掛けて、以外と厳しいですねマコト君は」

「友達ですからね。遠慮はしませんよ」

「……」

「……ど、どうしました？」

綾さんが急に黙ってしまった。狭くて振り返れないのが、もどかしい

「あ、いえ、少し驚いてしまいました。……そっか、恭介君はそう言う人なんですね」

「え？　な、何がでしょうか？」

な、なんかやったか俺？

「何でもないですよ、ちょっと嬉しかっただけです。さ、モニター見ましょう」

「え、ええ」

良く分からないが、取り敢えずモニターを見ながらマウスを動かしてみる

「……お、部屋の中が見える」

モニターには、六つの部屋が映っている。その内の二部屋つ人が居るが、どちらも春菜達では無い

「マウスお借りします」

綾さんは後ろから腕を伸ばし、マウスを手に取った

俺の後頭部に何か柔らかい物が当たっている気がするけど、こ、これはまさか……

「お腹ですよ」

「心読んでます！？」

さっきから的確に読んで来る！

「マコト君、分かりやすいです。……あ、此処ですね」

モニターには、春菜達六人が入った部屋が映された

それぞれペアになっているらしく、圭一は春菜の横で春菜の肩を組ながらベッタリ密着状態で座っている

「よ～し、一丁殺ってみっか！」

清く正しい交際をとは言わないが、女を物で釣って直ぐ調子に乗る野郎に大切な妹は任せられん。此処は天に変わって鬼を退治致す！

「お、落ち着いて下さいマコト君。私が一度部屋の様子を見に行き

ますから、待っていて下さい」

「……分かりました。お願いします」

「はい、行ってきます」

そう言い、綾さんは部屋を出て行った

……過保護すぎると呆れられたかな

春の合コン　１０

「……お」

綾さんが偵察に行ってから数分後。カメラの映像を見ていると、春菜達が居る部屋に彼女は現れた
そして、みんなに何かを聞いて回っている

「注文取ってのかな？　……ん？」

急に綾さんがカメラに向かって何か妙な動きをし始めた。あれは一体……

ぱんっと手を叩き、ピースサイン。両手で頭の上に円を描き、見回すような仕草

「……パンツ、まる見えって、こら！」

何やってんのさ！？

「たく……うん？」

今度は手招きをしている様な……

「……来いって事なのか？」

いやしかし……

「うん？　また妙な動きを……」

足と手を大の字に広げ、髪を前に尖らせる？　そして後ろ向いて尻を突き出し……？？

さっぱり分からん

「……」

とにかく行ってみるか。春菜達にはバイト中だとでも言っておこう

俺はモニタールームを出て、春菜達が利用している部屋へと向かう

部屋の前には綾さんが居て、俺に軽く手を振っていた

「こっちです、佐藤。話はつけときましたよ」

「はい？」

「さ、どうぞ」

「え、ええ」

良く分からんが、誘導されて部屋に入ると、春菜が超笑顔で俺を迎えた

「兄貴っ！」

「な、なんだ？」

俺の右腕を抱き、ぐいぐいと外へ引っ張る

「早く行こ～」

「は？」

「私、ブッチャーデパートで、和食バイキングに行きたいぞ！」

「はぁ！？」

「何でも好きな物を食べに連れてってくれるんだろ。なら、あいつらと食いに行く必要ねーし！」

あいつら。圭一や、その仲間達は、唖然とした表情で俺達を見ている。つか、多分俺も同じ表情だろう

「お兄さん！」

その時、加奈ちゃんが立ち上がり、俺に向かって来た

「あ、ご、ごめん。なんか色々と……」

「水臭いですよ、お兄さんたらぁ」

超猫撫で声！？

「も～いじわるなんだから」

シナを作り、俺に擦り寄って来る加奈ちゃん。一体、何が起きて……

「まさか春菜のお兄さんがぁ、溝口君とお友達だったなんてぇ。加奈、びっくり」

「溝口君？」

「俳優の溝口　文之君ですよぅ。も～しらばっくれちゃってぇ。つねつねしちゃうぞ！」

「うひゃ！？」

どっかのキャバ嬢みたいな加奈ちゃんに脇腹をつねられ、５のダメージ

「今度紹介してくれるって本当ですかぁ」

目がキラキラしている。後輩に、こんな目で見られるのは初めてかもしれん

「し、しかし紹介ったって、俺は溝口なんか……」

「私の従兄弟です」

綾さんが手を挙げた

「そ、そうなんですか？　凄いですね……」

つくづく底が知れない人だな

「お兄様。加奈、お兄様とデートしたいな。それでぇ、デートしながら溝口君との合コンの段取りなんてしてみたり――」

「ち、ちょっと待ってくれよ！　俺達との合コンは！？」

慌てた圭一が、言う。すると加奈ちゃんはゴミを見るような目で一言

「ごめんなさい、鳴神さん。もう私達、引き上げます。さ、行きましょうお兄様」

ぐい。ぐいい！

春菜より力強く、引っ張られる！

「因みに合コンで相手の名前を呼ばないで、職業や学校名だけを言って解散する場合、『興味あんのはテメェらの肩書だけで、テメェら自身には、はなっから眼中になかったんだよダボが！』と、暗に言っているのと同じ事です」

「凄い悪意ある例え文章ですね」

綾さんに突っ込んでる間にも、ぐいぐい引っ張られ、そのまま店の外に……

「待てよ！　納得行くかよ、こんなの！！　春菜ちゃん、寿司食いに行こうぜ、回んない寿司！」

「け、圭一。もう良いから帰ろうよ～」

「良くねぇよ！　あんな死んだ目をした奴に女取られて納得出来る訳ねぇだろ！！」

こ、この野郎……

「兄貴は死んでなんかないぞ！」

お、春菜。ふふ、後で小遣いやらんとな

「濁ってるだけだ！！」

小遣いやらん

「そうですよ。それに、圭一君でしたっけ？　貴方より、佐藤君の方が千倍魅力あります」

綾さんは俺の側に立ち、妙にエロい手つきで俺の太ももを撫であげた

「ど、何処がだよ。はっきり言って俺の方が、どこをとっても上だし」

「プレイボーイを気取るなら、貴方も聞いた事があるでしょう？股間に黄金戦士を宿す男の、ペガサスファンタジーを」

いや、無いでしょう

「ま、まさか、あの伝説の！？」

あるんだ

「彼に抱かれた女達はセブンセンシズを覚醒し、快楽の虜となります。かくゆう私も、かつて彼のセックスカリバーに一刀両断されて」

「もう喋らないで～！」

なんか色々な所に怒られそうだ

「とまぁ、そんな感じでもう諦めて下さい。春菜さんは、貴方には勿体ないです」

「ぐっ！」

「……なあ、兄貴」

「なんだよ」

「なんか、さっきから話が良く分かんねーんだけど？」

「……とにかく俺と飯食いに行けば良いんだよ、お前は」

「そっか！」

随分大袈裟になったけどさ

春の合コン　11

「それじゃ、行こうぜ」

バイトの服を返却し、春菜とその友達二人、それと綾さん達と共に店を出る。因みに利用料金はバイトしたって事で無料にしてもらったんだけど、大して働いてない気がするが……

「……いかねぇ」

「圭一？」

「やっぱ絶対に納得いかねぇよ！　俺らもついて行くぞ！！」

圭一達はそう言い、どん引きしている二人の友人を引き連れて俺達の後を追って来た

「……意外に頑張りますね。あれはもう春菜さん云々より、佐藤君に負けた事が許せないんでしょうね」

綾さんはそう言い、振り返る

「……では勝負してみますか圭一君。それで負けたら二度春菜さん達に付き纏わない様にして下さい」

「……分かった。俺が勝ったら春菜ちゃん達は俺らと昼飯だからな」

「ち、ちょっと」

「兄貴は負けねーよ！　な、兄貴！！」

「あのなぁ……」

話は俺を置いて、どんどん進んで行く

「後腐れ無い様に、此処で断ち切りましょう。大丈夫です、どんな勝負でも佐藤君が勝ちます」

なんだか分からないが、凄い自信だ

「それで、勝負方法はどうします？　明らかに不利なもので無い限り、なんでも受けますよ」

「勝負内容は――」

【女友達対決】

制限時間は一時間。より多く女性を連れて来た方が勝ち

「……」

「アンタ伝説なんだろ？　これなら不利にはならないんだろ？」

圭一は、伝説など全く信じてない口調で、そう言った

「……」

「頑張れ兄貴っ！」

勝ったら飯代自腹。負けたら春菜の危機と、勝っても負けても俺に利益が無い。一体何故こんな事になってしまったのだろうか……

「聞いてんのかよ！」

「……ああ」

ええと、夏紀姉ちゃんに秋姉だろ。後は雪葉……あれ？　呼べる女の子が家族しか居なくね？

「……ふ、ふふ。ふふふふふ」

「っ！？　な、なんだ？　この自信ありげな笑みは……ま、まさかあの伝説は真実？」

どんな伝説なのか気になるな

「と、とにかく始めるからな！　純、合図！！」

「本当にやるのか……では、対決始め」

合図と共に圭一は携帯を取り出しながら、何処かへと走って行く

「……」

「大丈夫ですよ佐藤君。私、誰か呼んで来ますから」

「あ、ありがとうございます……」

しかし俺の話だと言うのに、今日は綾さんに頼りっぱなしだ。これ

では情けない

「俺も……俺も頑張ってみます！」

「はい。頑張りましょうね」

俺は綾さんやみんなと少し離れ、携帯を取り出す

「先ずは……」

登録番号６６６

トゥルルル。トゥルルル

ガチャ

「……」

「ね、姉ちゃん？」

「……なによ」

「うっ」

この声は、寝起きで超機嫌が悪い時。だが、躊躇している場合じゃ無い！

「ね、姉ちゃ……お姉ちゃん！！」

「きゃ！？　……な、なによ！！」

「助けて！」

「助けてって……どうしたの！？」

「今すぐカラオケショップ本能寺に、姉ちゃんの女友達を何人か連れて来て下さい！」

「はぁ？」

「頼んだよ！」

「ち、ちょっ待」

電話を切って、すかさず着信拒否

「……」

後の事が恐すぎるが、今はただ来てくれる事だけを祈ろう

「次は……」

秋姉か。朝は出掛けて居なかったけど、今日は部活無い筈だから、もしかしたら来てくれるかも

「……」

夏紀姉ちゃんの時も緊張したが、今度は更に緊張してしまう。なんか変なもん吐きそうだ

「ええい、ままよ！」

勢いに任せ、電話帳の1番最初に登録してある秋姉の番号へ

ガチャ

「……あ、あの。もしもし秋姉？」

「……うん。どうかしたの？」

「え、えっと……」

「？」

「た、助けて」

「えっ？」

「助けて秋姉！」

「き、恭介？　……うん分かった。私、どうすれば良い？」

秋姉は理由を聞かず、直ぐに承諾してくれた。ごめんよ、秋姉……

「カラオケショップ本能寺知ってる？」

「うん」

「その店の前に来て欲しいんだ」

「ん、分かった。急いで行くから。……それまで待てる？」

「う、うん……大丈夫」

「……ん。急ぐ」

罪悪感に苛まれ、友達も連れて来いなんて言えそうもない

「じ、じゃあ後でね！」

「あ、恭」

ツーツー

「……」

後で土下座しよう

「……そして」

もう一人だが、雪葉……と言う訳にはいかないだろう。となると

「……これか」

あいつの誕生日に因んだ数字、２２４番

「……よし！」

俺は携帯のボタンを押した

春の合コン　１２

「……あ～腹減った～！　いつまで待てば良いんだよ～」

「直ぐ終わっからさ。そしたら行こうぜ春菜ちゃん」

みんなに電話をしてから２０分。痺れを切らす春菜に、圭一はそう言った

奴は余裕の発言をしているが、確かに今現在、俺の方には一人も来ていなく、圭一の方には既に七人が来ている

「……暇人達め」

などと悪態をついてみたが、正直に言って俺は焦っていた。まさか七人も呼んで来るとは……まだ増えそうだし

しかし、しかしその時！　俺の方にも女神が来てくださった！！

「はぁはぁ……ん。……恭介」

息を切らせながら、俺を見付けてホッとした表情を見せる秋姉

「き、来てくれたんだねありがとう」

それと、ごめん……

「うん。……春菜？」

「あれ、秋姉？　どうしたんだ？　一緒に飯食べに行くのか？」

「ご飯？」

秋姉は不思議そうに俺と春菜達を見る

「あ、えっと……こ、これはその……」

「恭介！」

「うわぁ！」

怒声に顔を向けると、数メートル先に夏紀姉ちゃん。やたらスタイルの良い三人の女性達を引き連れている

「アタシをあんな電話で呼び出してといて、随分余裕そうじゃない？」

ボキ、ボキボキ

指を鳴らし近付いて来る姉を見て、俺は死を覚悟した

「し、信じられねぇ。なんであんなレベルの高い女達が……」

夏紀姉ちゃんや秋姉達を見て、驚愕する圭一。俺恐怖は伝わってないらしい

しかしその時、大魔王を前に女神が立ち塞がった

「……姉さん」

「え？　アキ？　それに春菜まで……もしかして貴女達もソレに呼び出されたの？」

「……うん。でも、大丈夫だったみたい。安心した」

秋姉は俺を見て、優しく微笑む。こんな美しくて素晴らしい姉を騙すなんて……俺って言う奴は！

「私は違うぞ」

「そうなの？　……で、一体どういうつもりなのか説明してくれるのかしら？」

一人脳内反省している俺を、夏紀姉ちゃんが怒りの目で睨む。や、やばい、マジで怒ってる

「あ……、その……」

もう駄目だ、土下座をして頭を踏まれよう。運が良ければそれで許してくれるかも……

「皆で昼飯食いに行くって話しになってんだ。それで兄貴が姉ちゃん達を呼び出したみたいだぞ」

素晴らしい土下座を披露しようとした時、春菜が俺をフォローをした

「飯ぃ？」

ギョロリ！

「ひぃ！？」

「……賛成」

「へ？　ア、アキ？」

「みんなで一緒に食べよう」

女神の微笑み（効果、ＨＰとＭＰ全回復）

「う……分かったわよ。ごめんね、あんた達。馬鹿な弟が……あんた達もご飯食べる？　お詫びに奢るわよ」

「はい、夏紀先輩！」

連れて来たのは大学の後輩なのかな？

「よし。じゃ、此処にいるメンバーで……あっちのはアンタの友達？」

夏紀姉ちゃんは、唖然としている圭一達を指差す

「違うけど……」

気付けば向こうは、一人増えて八人。勝てそうも無いし今のうちに逃げてしまおうか……

「き、恭介～！」

「え!?　つ、燕!?」

最後に連絡した奴、燕が何故か制服姿で、おまけに走って来てくれた。しかも二人を連れて！

「つ、燕～!!」

俺も燕に向かって走る

「うわ!?　ち、ちょっと待ってくれたまえ、此処は人前だ！　だ、抱きしめるなら、あちらの人目がつかない方で……」

「……良く来てくれた、ありがとう燕」

立ち止まった燕の前に立ち、心からの感謝を伝える

「あ、あれ？　……こほん。……よしてくれ。君と私の仲ではないか」

「燕……。ありがとな」

「う……うむ」

なんて素晴らしい友を持った男なんだ俺は……

「……盛り上がっている所をすみませんが、ようやく捕まえましたよ燕」

「う……」

「ゆ、ゆかな？」

「こんにちは恭介君。燕が仕事ほっぽり出して逃げたしたので、多分貴方に呼ばれたのだと思いましたが……やっぱりそうだったんですね」

ゆかなのニコニコ顔に、言いようの無い恐怖を感じる

「ま、まさか……燕？」

後ろの二人は連れて来たのでは無くて……

「か、会長、逃げ足早過ぎです……」

逃げて来たのか！

「す、すまない、ゆかなに桜。しかし、今暫くの猶予をくれ！　恭介がピンチなのだ！！」

「……そうは見えませんね」

「か、会長！？　な、なんで！」

ゆかなが疑惑の目で俺を見たのと同時に、驚きの声が上がる

「ん？　ああ、君はサッカー部の」

「は、はい。……ど、どうして会長が？」

「うん？　彼に呼ばれたからだが？」

「よ、呼ばれたって……ええ！？　えええ！？」

俺と燕を交互に見回し、何度も驚く圭一。いや、圭一だけでは無く、圭一サイドの人間は皆、驚きで固まっていた

「こ、この俺ですら、声も掛ける事が出来きなかった会長を……」

「あら？　では私に声を掛けたのは、私なら落とせるとでも思ったからですか？」

「ヒ、ヒィイ！？」

あくまでも笑顔を崩さない、ゆかなに睨まれ、圭一はペタリと座り込んだ

「……」

どうやらこの勝負、此処で終わりになりそうだ。……今のうちにまとめておこう

「まだやるかね？」

「お、俺の負けで良い……です。伝説、この目で確かに見させて頂きました。すみませんっした！」

「……ま、遊びとかじゃなく、本気で春菜を好きになったら、告白でもしに来いよ。そのかわり俺の目の前でしろよ？」

「はい、アニキ！」

「てめぇにアニキ言われる筋合いはねぇ！！」

もう義理の弟気取りか！

「す、すみません！」

しかし、ま、何とか勝ったな

「じゃ、みんなで飯でも行くか。燕も来いよ」

人数は多いが、ファミレスなら何とかなるだろう

「……ゆ、ゆかな？」

「はいはい。そのかわり明日は5時起きよ？」

「う、うむ！」

そういえば燕と夏紀姉ちゃんは初対面だったな。ついでに紹介を……

「お待たせです、恭介君！」

しようと思った時、駅の方から綾さんの声がした

「お、綾さん。戻って……き……て」

がやがや、がやがや

綾さんの後ろには、百人を越える女性集団

「……ええええ！？」

なんでこんなに！？

「まだまだ来ますよ～」

ぞろぞろ、ぞろぞろ

「……」

「ペ……ペガサスファンタジー」

「……どうしよう、これ」

今日の土下座

俺＞＞圭

つづくらげ

第１０５話：秋の親友

「すみませんっした！」

「すみませんでした！」

俺と圭一の、見ている方が悲しくなりそうなマジ土下座により、綾さんが連れて来た集団は不満を漏らしながらも解散してくれた

「……じゃ俺らも引き上げるから」

「ああ。……お疲れさん」

圭一達とも別れ、少し落ち着いた後に、綾さんを捕まえて「どうやってあれだけの人数を集めたんですか？」と尋ねてみると、綾さんは笑顔で、「無限連鎖講って知ってます？」と、言った

「な、なるほど～。あははは……」

良く分からなかったが、深く関わるのは危険だと俺の本能が告げた

「と、とにかくありがとうございました。お礼と言うのもなんですが、昼飯食奢ります。行きましょう？」

「はい、ご一緒させて頂きます。それにしても佐藤君は美人ばかりを集めましたね～」

今居る女性は、秋姉と春菜とその友達二人。それと夏紀姉ちゃんに、姉ちゃんが連れて来た三人。そして燕、ゆかな、桜って子と、最後

に綾さんを入れて十二人だ

確かに皆、一騎当千の美女ばかり。特に秋姉は一人で世界を破壊出来る程の力を持つ（大まじめ）

「佐藤君は誰が好みなんですか？」

幾つかのグループに別れて話をしている皆を、ぽけーっと見ていたら綾さんがそう聞いてきた

「好み言われても三人は身内ですからね」

身内を除外すると、やはりなんだかんだ言っても燕が一番に浮かぶ

「私的は菊水さんが良いですね。気の強そうな眼差しに、知的で隙のなさそうな雰囲気。典型的なツンデレタイプでしょうか」

「燕は、そんなに気が強い方じゃ無いですよ。むしろ――」

弱い方だな

「だけど、皆さん少し気まずそうですね～」

綾さんは軽く言っているが、確かに雰囲気は気まずい。そしてそれは一カ所が原因なのだが……

「佐藤君のお姉さんは、あちらの方でしたよね」

右の方で、後輩達や何故かゆかなと話している夏紀姉ちゃんを見ながら、綾さんは尋ねた

「ええ、あの性格悪そうで偉そうな女が家の長女です」

「お姉さんは、一歩後ろで皆さんを見守っている感がありますね。ゆかなさんもそんな感じのタイプっぽいですし、結構話しが合うのかもしれません」

「ふむ……言われてみれば珍しく穏やかに話しているな」

時折ウフフなんて似合わない笑い声すら聞こえる

「向こうでは春菜さん達と、桜さんですね」

四人は左の方で話しており、和気あいあいと盛り上がっているようだ。やっぱり歳が近いせいかな

「あとは……あちらですね」

「……ええ」

秋姉と燕の一騎打ち。妙な緊迫感と緊張感がある

「……久しぶりだね、燕」

「……うむ」

風で流れてきたのは、申し訳なさそうな燕の声だ

「すまない、私は君を避けていた」

「ん。……恭介から聞いたよ。仲直り出来たって」

「う、うん。……まだ少し気まずいけど……」

「……よかった」

「秋？」

「仲直り。……嬉しい」

「秋……ありがとう」

微笑み合う二人

「……」

元々が親友同士だったんだ。きっと直ぐ以前の二人に戻れるだろう

……いや、まぁ疎遠になったのは俺のせいなんだけどさ

秋の親友　2

燕と秋姉の間にあった壁が無くなり、ホッとした空気が辺りに流れる

今のうちに紹介しておくかな

「綾さん。綾さんの事をみんなに紹介しても良いですか？」

「はい、紹介して頂けますと嬉しいです」

「では……秋姉～」

先ずは一番近くに居る二人の所へ行く

「あ……こんにちは、徳永さん」

「はい、こんにちは。秋さん」

挨拶をしあう秋姉と綾さんを、燕はきょとんと見ている

「燕、紹介するよ。こちらは綾さん」

「徳永　綾音です。宜しくお願いします」

「ご丁寧にありがとうございます。私は菊水　燕と申します」

燕はお辞儀をし、軽く微笑する。こういう所はやっぱりお嬢様っぽいな

「秋さんや恭介君とは、友人としてのお付き合いをさせて頂いてます」

「私は佐藤君の内縁の妻としてお付き合いをしています」

シレッとした表情で言うから綾さんは恐ろしい

「なるほ……つ、妻!?　え?　そ、そんな、だって……」

燕は絶句し、唖然と立ち尽くす

「あ、いや、違うぞ?」

と、否定してみたが、燕の表情は変わらない

「つ、燕?」

「……驚きの余り取り乱してしまい申し訳ございません、醜態を晒した事お許し下さい。徳永さん、彼は素晴らしい男性です。き、きっと貴女を幸せに……」

燕の目から大粒の涙が、ぽろぽろとこぼれ落ちる

「幸せにしてくれる筈です。……おめでとう、恭介」

涙で崩れた顔に無理矢理笑顔を作り、燕は俺達に祝辞をって

「ち、違うから!　少し考えれば分かるだろ!」

「そ、そうですよ、冗談です。結婚なんてしませんよ」

「ぐす、ぐす……冗談？」

燕は濡れた目で、心細げに俺達を見る。まるで捨てられた子犬の様だ

「そ、そう！　ドッキリ大成功～。だ、騙されただろ～」

「……うん」

燕は、コクンと頷き

「びっくりしたぞ」

目元を指で拭い、微笑んだ。……罪悪感が凄いなこれ

「つまらない冗談を言ってしまいました。すみません」

珍しく、と言うか俺が知る限り初めて綾さんが真剣に頭を下げる

「い、いいえ、こちらこそ変に驚いてしまいました、お気になさらないで下さい。……あ、目にゴミが入ってしまったようです。少し洗顔して来ます」

そう言って燕は駅の方へ向かって行った

「……悪い冗談は駄目だよ？」

側で心配そうに見ていた秋姉が、燕が居なくなったのを見計らって俺達に注意をする

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

なんで俺も謝ってるのか分からないが、とにかく綾さんと一緒に反省

「……うん。私、姉さんと話して来るね」

「行ってらっしゃい」

華麗なる姉は、俺達の側から美しく去って行く

「……怖い訳では無いのですが、何だか逆らえませんね」

「それが俺の姉です」

もう一人の方も別の意味で逆らえない

「ところで……菊水さんは佐藤君の事が好きなんですね」

「どうなんでしょう。一度フラれてますからね」

あれはきつかった……

「佐藤君は、菊水さんの事好きですか？」

「ええ、好きですよ。ただ、恋人にって感覚では無い気がします」

近いのは親友かな？

「私の事は……好き？」

「え！？　い、いや、好きって言うか、何て言うか……」

「嫌い？」

「い、いいえ！　もちろん嫌いじゃ無いですよ。だ、だけど」

「なら……抱いて！」

「えええ！？」

な、なんだこの東京ラブストーリーは！　これが噂のモテ期って奴か！？

「と言う、泥沼を希望します」

「おぃぃ！！」

「ラストは刺される感じで」

「アンタ、俺の事嫌いでしょ！？」

「好きですよ」

「ええ！？」

「友達ですもん」

そう言って微笑んだ後、背を向けて俺から離れる綾さん。その仕種

が妙に格好良く、何だか少し悔しくなる

「恭介っ！」

そして綾さんは突然振り返り、

「セックスしよ！」

「鈴木保奈美!?」

「ボケておいてなんですが……佐藤君、歳幾つです？」

「……そちらこそ」

秋の親友　3

「す、すまない、待たせてしまった！」

お互いに年齢詐称を疑って牽制していると、燕が戻って来た

「お、来た来た。じゃそろそろ行くとするか、春菜も限界だろうし」

「その春菜さんなのですが、先程から凄い目で佐藤君を見てますよ？」

「え？」

「グルルルル！」

ま、まずい！　奴が飢えはじめている！！

「め、飯行くぜ～！」

「おっしゃー！」

ごまかす俺の声に、春菜はガッツポーズで喜ぶ

「よし行くよ、夏紀姉ちゃん達！」

「たく、待たせるんじゃないわよ」

ぶつぶつ文句を言いながら、姉ちゃん達は俺の側に来る

「駅デパの和食バイキングで良い？」

自分で金を出してくれるだろうか……

「どこでも良いわよ。……あ～、こっちはこっちで出すから」

俺の訴えかける瞳が効いたのか、姉ちゃんは呆れた溜息と共にそう言って下さった

「あ、ありがとうございます」

てなると、俺が払わなくてはならないのは春菜、燕、綾さん、ゆかな、桜って子、春菜の友達二人、秋姉、そして俺

確か食い放題で一人二千円だったから……一万八千円！？

きつい……これはきついぞ～！！

「……お金の事は心配しないで」

マネーの事で苦悩していると、それに気付いたのか秋姉は俺の耳元に寄って小声で優しく言った

「だ、駄目だよ。いつも頼りっぱなしじゃ情けないから、今日は俺に任せて」

「……男の子だね」

ニコッと笑う秋姉。この笑顔だけで俺は、三百万の借金を背負える

「兄貴まだ～」

「あ、ああ、悪い悪い。もうちょっと待ってくれな」

「う～。まだかよ～」

春菜は悲しそうな顔をし、座り込んでしまった

「すぐ行くから……あ、そうだ。ゆかな」

「なんでしょう？」

「今、何か食い物持ってるか？」

俺の記憶が確かなら、いつも飴とかを持っていた筈だ

「はい、キャラメルがあります」

「一粒貰えるか？」

「ええ、構いません」

「サンキュー」

ゆかなに近付き、キャラメルを一粒貰って春菜の元へ

「……鳥。唐揚げ……焼鳥……丸焼き」

「鳩見ながら怖い事言ってないで、これ食って我慢しろ」

「キャラメルかよ～。これ食っても腹の足しにならないんだよな～」

ぶつくさ言いつつ、結局食べる春菜さん

「あ、メロン味だ。……へへ」

少し機嫌が良くなり、ほっと一安心ってか単純過ぎて逆に心配だな

「じゃ、皆さん行きますよ～」

準備が出来た所で、集団の先頭に立ち、皆を旅行コンダクタの様に誘導する俺

雪葉も呼べは良かったかな

「……呼ぶか」

この際だ、破産してしまえ！

「今日はヤケクソで食いまくるぜ！　春菜、勝負だ！！」

「おー！！」

それから俺達は大人数で食事に行き、トラブルに見舞われるのだが、それはまた別の機会に語りましょう……

「……ちゃんちゃん」

「さ、流石に今回はそれじゃオチないと思うよ、秋姉」

「……残念」

気に入ってたんだ……よし！

「ど、どっか～ん！」

俺の渾身の盛り上げギャグに、秋姉は驚いた顔をして

「……ん、頑張ったね」

よしよしと頭を撫でてくれた……

「……ごめんなさい」

今日の食事量

春＞＞俺＞＞＞＞夏＞雪＞秋＞＞燕

おまけ

「あれ？　あんまり食ってないじゃんか。今も温泉卵なんか食ってるし……食欲無いのか？」

「え？　あ、いや、そんな事はないぞ、美味しく頂いている。ただ……久しぶりだと思ってな」

「久しぶり？」

「……うむ」

「燕？」

「……やっぱり私は君が好きだよ、恭介」

「そうか。俺は――」

「あ、いや、返事は良いんだ！　す、すまない、今のは不意打ちだった！　なんでもない、なんでもないのだ～！」

「は？　え～っと……俺は白身の方が好きなんだけど……変か？」

「……馬鹿っ！」

「なんで！？」

つるべ

第１０６話：雪の最終回

「……お兄ちゃん」

「ああ……」

水曜日の夕方。俺達は頷き合い、テレビをつける

「いよいよか」

「うん……」

これから始まる番組は雪葉がまだ小さい頃、良く一緒に見ていたものだ。十年を越える長寿番組だったのだが、遂に今日最終回を迎える

「始まったな」

前番組が終わり、テレビにはランニングシャツ姿の爽やかなお兄さん？　が現れた

「良い子のみんな～」

明るく元気な声で子供達に呼び掛けるお兄さん。優しい笑顔が素晴らしい

「集ま……りやがれぇえええ！！」

しかしお兄さんの表情は一変し、鬼の形相となった！

「今日で最終回だ。良いかお前ら、これから先は瞬き一つ許されねぇぞ！　それじゃオープニング行くぜ、わっしょい！」

わっしょい、わっしょい！

わっしょい、わっしょい！！

音頭に合わせて子供達が踊り狂う。それはまるで地獄に住まう餓鬼

「お兄ちゃんの『お』は大きいのお！」

はぁはぁ……、おおきいのお！

息を切らした子供達が一心不乱に復唱する。某宗教団体を連想させる光景だ

「お兄ちゃんの『に』は人間離れ！」

にんげんばなれ！

「お兄ちゃんの……飛んで『や』は、やんのかこら！？」

やんのかコラ！？

「ん？　拳で語りたいのかい？　良いぜ、俺はノーガードだ！　ほら殴りなさいよ、殴ったらいいじゃない！！」

「……相変わらず変な番組だよなこれ」

「でもお兄ちゃんを持つ妹としては見逃せない情報が満載なの。雪

葉もこの番組には随分お世話になったなぁ」

俺の妹は、どこか遠くを見ながらそう言った

「んじゃそろそろ始めっか！　何度も言うが今日は最終回だ……。取って置きの情報をテメェらにくれてやるぜ！！」

【週間、お兄ちゃんニュース】

テロップが流れた後、お兄さんはニュースタジオに似せた場所へと移動した

「では最初のニュースです。え～本日、仕事を干される事になったお兄さんですが、次の仕事がありません。どうしたら良いでしょうか？」

「知らないよ」

「ハローワークに行けば良いと思うの」

「……雪葉はいい子だねぇ」

ハローワークを知っている小学生……か

「それだけ世の中が不景気ってことかな」

辛い世の中になるかも知れないけど、頑張るんだよ雪葉

「さて、次のニュースです。お兄さんが付き合っていた女の子が、仕事の無いお兄さんを見限って他の男と付き合い始めました。どう

したら良いでしょうか？」

「知らないよ」

「諦めたら良いと思うの」

「……バッサリだねぇ」

結構、恋愛にはシビアな性格なのだろうか？

「あ～！　ウゼェ！！　女もガキもスタッフもみんなウゼェんだよ！　だけど一番ウゼェのは俺自身だ～あはははは！！　……殺せ！　いっそ殺してくれぇえええ！！」

「……」

「……」

「もう何もかもが嫌になった。……そうだ京都に行こう。京都～大原三千院ってガキには分かんねぇだろ～！　バ～カ」

「……チャンネル変えても良いか？」

「ま、待って、お兄ちゃん。きっともうすぐ耳寄りなお兄ちゃん情報が入るから……多分」

「う～ん」

なんとも微妙だが、もう少し見てみっか

雪の最終回　2

それから番組は続き、たいした情報も無いまま終盤を迎えた

「なんか最終回の割にはイマイチ盛り上がらないな」

「うん……残念」

しょんぼりとしてしまう雪葉。たく、何やってんだよＮ○Ｔ！

受信料を払わされているＮＴ○に怒りを覚えていると、スタジオの照明が消え、お兄さんは床に座り込んだ

「さて……頃合いだな。そろそろマジに耳寄り情報を話してやろう。お兄ちゃんと仲良くなれる秘策、語ってやるよ」

「あ、これ！　これが見たかったの！！」

雪葉の目に、輝きと真剣さが戻る

「きっと凄いためになる事だよ！」

「そっか。じゃ真剣に見てみるかな」

俺には関係無い情報だけど、雪葉が喜んでるなら俺も嬉しいぜ。俺達はテレビ画面に集中する

「……先ず兄をお兄ちゃんと呼んでる奴、お兄さんと呼んでみろ」

「……は？」

「え？　……お兄さん。これで良いのかな？」

「甘い声で、囁く様に呼ぶんだ」

「……お兄さん」

「上目使いを忘れるな！」

「お、お兄さん……こ、こう？」

「耳に軽く息を吹き掛けろ！！」

「ふ～」

「うひゃ！？」

「これで君はキャバクラで人気者！」

「アホか！？」

何の情報だよ！

「……キャバクラ？」

「い、居酒屋の様な物だよ。それにしても……」

この番組もう駄目だな。終了になった理由も分かる

「チャンネル変えても良いか？」

確か6チャンで時代劇があったよな

「……うん。いいよ、お兄ちゃん」

まだ少し未練がありそうだ。残り五分か……

「やっぱこのまま見てよう」

「うん！」

ふ、可愛い奴め

「はっ！　どうやら冗談が過ぎた様だな、抗議の電話が凄いぜ。……テメェらは、とうとう俺を本気にさせた。次はマジだせぇ」

「お兄ちゃん、お兄さんが真剣だよ！」

「……ああ、どうやらいよいよ奴もマジらしい」

俺には分かる。今のお兄さんは餓えた野獣だ

「……今、お兄ちゃんが側に居る奴。今すぐ体育座りをしてもらえ！」

「え？　……お、お兄ちゃん、お願いしても良い？」

「あ、ああ」

「そしたらマタを開いて貰え」

「……」

「……お兄ちゃん」

「わ、分かったよ」

意味が分からないが、訴えかける雪葉の目には逆らえない

「出来たな……。そうしたら、その間にスッポリ入るんだ！」

「こ、こう？」

雪葉は俺の間にスッポリ入った

「ラストだ！　お兄ちゃんの顔を見上げながら下記のテロップを読みやがれ！」

「え、えっと……。お兄ちゃんの事なんて好きじゃ無いんだからね！」

「……」

プチ。俺は無言でテレビを消す

「……お、お兄ちゃん？」

「……俺は今の雪葉が大好きだぞ」

変な番組に染まらないで欲しい

「う、うん！　雪葉もお兄ちゃんが大好き！」

「ありがとな。しかし……うむ～」

なんだかんだ言って、見る前より仲が良くなった気がする。まさかこれを狙って？

「……最後まで見てみるか」

昔は雪葉と一緒に楽しんだ番組の最終回だ。その最後を見てやろう

ノスタルジックな気分でテレビをつけると……

「オラァ！　負け犬はさっさと消えろよコラァ！」

「ひ、ひぃ～」

お兄さんよりも若いお兄さんが、お兄さんを蹴って番組の隅に追い払っていた！

「たく、これだからロートルはよ。……あ、良い子のみんな、こ～んにちは～。来週からこの時間は僕が【弟と仲良くする千の方法】を紹介していくよ！」

「……」

「……」

急展開する内容についていけず、俺達はテレビを見たまま固まってしまう

「弟って良いよね～。僕大好き！　弟、おっとうと、おっとっと～」

わ～

歌う新お兄さんの元に先程の子供達が集まって来る。途中、隅にいる旧お兄さんを蹴っ飛ばす子供もいた

「それじゃ、来週から宜しくね～」

ボクたちワタシたちは、あたらしいおにいさんがだいすき～！

そして番組はフェードアウトし、次の番組に……

「……何この後味悪さ」

「……ごめんね、お兄ちゃん。雪葉が見たいなんて言わなければ良かったのに」

「気にすんな。楽しかったぞ」

「……うん」

こうして数年に渡って放送されたこの番組は、俺達兄妹に気まずさと苦い思い出を刻みつつ、無事に終了したのであった

今日の後悔

雪＞俺＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞春

津田の松原

第１０７話：夏のダイエット

「……あ」

「お、花梨。遊びに来たのか？」

「え、ええ……あんたに会いに来た訳じゃないからね！」

「そりゃそうだろ」

土曜日昼。遊びに来たらしい花梨と廊下ですれ違う。相変わらず生意気な奴だが、今日はそれどころじゃ無い

この間、雪葉に貰ったブッチャークエストΩ。ようやく最後の町に入ったのだ。今日は部屋に篭ってクリアーするぞ～

「じゃあな」

「頭撫でないでよ！」

怒る子供はほっといて、部屋に戻る。此処からは大人の時間だ

テレビの電源を付けて、スイッチオン！

チャチャラーラーチャラララー

『おお、ゆうしゃよ。よくもどってきた。さあ、まおうをたおしにいくのだ』

はい

いいえ↑

『いいえ……だと？　テメェ、ちょっと調子に乗ってねーか、最近。そう言えばニチョーメのキャバクラ、ミーアで近頃マユマユにちょっかいだしてるらしいじゃねーか。あれはオヤッサンのスケやで？　手ぇ出したらエンコの一つや二つじゃ済まされねぇぞ！』

殴る

蹴る↑

酒を浴びる

『ぐえ！？　やられた。であえ、であえ、こいつは上様の名を語る偽者のだ。切り捨てぃ』

【サムライ達が一万匹現れた！　ボタン連打で皆殺しにしろ！！】

「よしっ！！」

連打、連打、連打！！

『時間切れだＺｅ！　おとといきなＹｏ！！』

【ゲームオーバー】

「くそ～！」

何度やっても神父Ｔｏ侍に勝てない。やはり特殊なアイテムが必要なのだろうか

「……ふぅ」

少し疲れたな。一息付くか

俺は立ち上がり、麦茶を取りにキッチンへと向かう

「むむ麦茶、良い子の麦茶～」

一息付いたらエンディングまでノンストップだ！

冷蔵庫から冷たい麦茶を取ってゴクリと飲む

「ふ～」

うまい！

煎餅かなんかないかな～

「あら、ちょうど良い所に居たわね」

煎餅を探していると、キッチンとリビングを結ぶドアから、不吉な呼び声がした

恐る恐るそちらを見ると、そこにはスポーツウェアに身を包み、後ろ髪を結んだ夏紀姉ちゃんの姿

「ちょっとアタシに付き合いなさい」

奴は何に付き合えば良いのかすら言わない。従わなければ、ぶっ飛ばす。そんなジャイアニズムをこの姉は持つのだ

「い、忙しいんだけど」

精一杯の反抗をしてみる

「そうなの？　なら仕方が無いわね」

通じた！

「何で忙しいの？　手伝ってあげるわよ」

無駄に優しい！？

「あ、いや……良いよ。大丈夫だから」

「そう？　遠慮しなくて良いのに」

今日はマジで優しいな。宝くじでも当たったか？

「ところでさ」

「な、なに？」

「何か気付かない？」

姉ちゃんは満面の笑みを浮かべながら俺に聞いたが、正直言って何を指して言っているのかすら分からない

「え、えっと」

考えろ、考えろ俺！　姉ちゃんの機嫌が良いのは多分その事が関係している。間違えたら……

「う、う～ん。そうだな～」

分からない時は、機嫌を損ねない様な軽いトークから始めよう

「あ、もしかして……痩せた？」

この会話を取っ掛かりにして、姉ちゃんの腹を探ろう

「……」

しかし姉ちゃんは、ムスッとした顔で黙ってしまった

「……あ、あの」

「分かる？」

「はい？」

「やっぱり分かちゃうわね！　そうなのよ、ニキロ痩せたのよ！！」

「……へ～」

凄いな俺

「最近ちょっと怠けてたじゃない？」

ちょっと？

「最低限の運動はしていたけれど、いつの間にかウェストが少し太くなってたのよ」

そりゃあれだけ適当に生きてれば太りもするわ

「それでちょっと運動始めてみたら思いの外、楽しくてさ。気付いたらこれよ」

夏紀姉ちゃんは上着を捲り、よく締まった腹を俺に見せる

「へ～凄いね」

どうでもいいけど

「じゃ、今から走りに行くわよ」

「……え？」

「アンタも最近ちょっとヤバイわよ？」

俺の腹を見て、ボソっと呟きやがった

「……大丈夫だよ」

「そうかしらねぇ」

「ほ、ほら！　見てよこの腹筋！！」

服を捲くって、腹を見せると……

「ふん」

鼻で笑われた！

「そんなお腹じゃ燕ちゃんに笑われるわよ」

「燕は関係無いよ！」

「ならアタシが笑うわ。あははは」

「ぐうぅ！」

なんつー性格の悪さだ！

「そのお腹じゃ、走れないかもね。ごめん、ごめん」

「走りに行くよ！　準備するからちょっと待ってて！！」

姉ちゃんになんか負けるかよ！

俺は早足でキッチンを出て行った

「……単純ねぇ」

夏のダイエット　2

「走るコースだけど、商店街の方をぐるーっと廻って、中学校まで行った所で折り返すわよ」

ジャージに着替え、玄関を出た俺を待っていたのは、真っ赤に燃える灼熱の太陽と、やけに張り切ってる姉だった

「それじゃ準備体操しましょう。私と同じ様にやりなさい」

「はいよ」

準備体操は中々本格的なもので、足や腕、更には首や背中までも入念に解してゆく

「ストレッチに３０分。走るのにも一時間。無理をしない有酸素運動である事が一番大事なのよ」

姉ちゃんは、足を閉じて身体を曲げる。額が膝上にピッタリと付き、気持ち悪い程の柔軟さを俺に見せた

「以外と身体柔らかいんだね、姉ちゃん」

「まね。毎日ストレッチだけはやっていたから……よっと」

最後に軽く身体を伸ばし、姉ちゃんは俺に向き直る

「じゃ、行くわよ。遅れずに着いて来なさい」

「はいはい。遅れたら何でも言う事を聞きますよ」

「あら、面白い。なら少しペースを上げるわ、着いて来れたらご褒美あげる」

そう言って姉ちゃんは、先に走り始めた

さて、こうして姉ちゃんとのランニングが始まった訳だが、姉ちゃんは一つ勘違いしている。俺が運動オンチだと思っているのだ

確かに春菜や秋姉には全く敵わないが、その二人のトレーニングを良く手伝っている俺は、体力には少し自信があるのだ

此処は一つ、ご褒美だとか偉そうな事を言っている姉に、吠え面でもかかせてやろう

そんな事を思いつつ5分程度走っていると、家の近くにある桜並木の道へと入る

この道は殆ど直線に出来ていて、およそ2キロ程続いている。その道筋に植えられた桜の木は百本近く。今は青々とした葉が木漏れ日と共に風に揺れている

「ふぅ。……もうすぐ本格的な夏ね、忌ま忌ましい」

夏紀の癖に夏が嫌いな姉が、ぽつりと呟く。そろそろ絡んで来そうだし、ペースを上げるか

「……ん？　あら？　随分急ぎ足じゃない。まだ先は長いのよ？」

「大丈夫だよ、いつもこんなもんだから。あ、俺先に行くから、姉

ちゃんは自分のペースを守って走りなよ」

むう、これはカッコイイな俺。もっと差を付ける為、もう少しペースを上げよう

「あ、あらそう。アタシもアンタに併せてペースを落としてたんだけど、そんな気遣いは要らないみたいね」

「なっ！？」

俺より更に早いペースで姉ちゃんは走り出した！

「さ、さ～て、そろそろ俺も本気を出すかな～」

それよりも更に更に早く走る！

「ハァ、ハァ、ハァ……ふふふ、や、やるわね。な、ならちょっとだけ本気見せてあげる！」

全力疾走！？

「あ、はは。さ、流石姉ちゃん。俺も頑張っちゃおうかな！」

全力疾走！！

「くっ！」

「ぬぅう！」

「くぅうう！！」

「ぬぅううう！！」

くそ暑い空の下、ぶっ倒れるまで走りつづける姉と弟の妖怪がいる。
そんな都市伝説が生まれた日

今日の脱水症状

俺≦夏

ツヅコデラックス

第１０８話：父の奴隷（前書き）

【僕の私の将来】

登場人物が小学生の頃に書いた将来の夢を読み、誰だか当ててみよう

全１５問で難易度は上級

・可愛いお嫁さんになりたいです！

・金持ち

・姉さんの様な優しい人

・走って食って寝る！

・宇宙ヒーロー、アンパン太郎！

・借金完済。頑張ります

・クジラを倒す！

・転校しない生活

・保母さんです

・菊水流を継ぎます

・補佐官

・愛人

・係長。そのくらいのものですよ、私は

・素敵な家庭を作りたいです

・父さんや母さん達のような、暖かい家庭を僕も持ちたい

採点表（コメント付き）
0点
「良いんじゃない？　こんなもん分かったからって、役に立つ訳で

もないし」

1～2点

「情けないわね！　もっと頑張りなさいよ！！」

3～4点

「微妙だねぇ。もう少し頑張りたまえよチミィ」

5点～8点

「可も無し不可も無しと言った所だが、平均点はちゃんと取れているね。しかしこの点数に満足する事無く、更に上の点数を目指すべく努力する事を怠らないでほしい」

9点～12点

「後少しで満点じゃん！　すっげ～。でも……せっかくだし、もう少し頑張ってみようよ！　ね？」

13点～14点

「やりますね。ですが、後一つ足りない物があります。……どうです？　その足りない一つを埋めるのに、私の力を利用してみませんか？」

満点

「ん……、良く頑張ったね。おめでとう」

答え合わせは次回！

第１０８話：父の奴隷

「ポリス！　ポリス！」

掛け声と共に発砲する二人の警察官。しかしその弾は、前を走る男に当たる事は無かった

「オー、ナンデアタラナイノダー！？」

「オーラダ！　ヤツハオーラバトラーナンダ！！」

弾かれる弾。男が背負う聖剣から発する黄金色の光が、弾の勢いを殺しているのだ

「な、なんで僕がこんな目に～」

このアメリカンポリスに終われている情けない顔の中年男。名を佐藤と言う

彼は、かつて世界の危機を救った勇者であり、銃刀法違反の現行犯でもある

逃げ足天下一の称号を少年時代に貰っていた佐藤は、人通りが無い方、無い方へと逃げ込み、ようやく警察官を振り切った頃には、すっかり日は暮れ、街から随分離れた港へと着いていた

「はぁはぁ……助かったぁ」

佐藤は剣を背から外し、腰を下ろす。疲れているのだ

「……これからどうしよう」

早く家に帰りたい。しかしこんな物を背負っていたら、空港チェックで金属探知器に引っ掛かってしまう。いやそれどころかテロリスト扱いにも成り兼ねない

佐藤は思う。剣を捨てたいな～っと

だが、これは友情の証に貰い受けた物だ、何とか持ち帰りたい

「……宅配便で」

送れるだろうか？

「……」

取り敢えず今日はもう休もう。佐藤はそう考え、剣を背をって風よけ出来そうな場所を探す

その場所は直ぐに見付かった。少し歩いた所に大きな倉庫があったのだ

今日はこの場所を借りて眠ろう。朝になったら行動を開始だ

海の潮風が身に染みる中、佐藤は倉庫の脇で何列かに分けて置いてあるコンテナとコンテナの隙間に入り、ごろりと仰向けに寝転ぶ

「……」

星が綺麗だ。明日も晴れるだろう

「……おやすみ。みんな」

直ぐに訪れた眠気に抗う事無く、佐藤は深い眠りについた

ゆらゆら、ゆらゆら

それはまるで赤ん坊の頃に、母に優しくあやされた時のような感覚

実際、佐藤にはそんな記憶など無いのだが、この時佐藤は安らいでいた

「新入りさん、新入りさん」

ゆさゆさ、ゆさゆさ

「起きなよ、新入りさん」

「え？　……」

目が覚めた佐藤が見た物は、木質で出来た十畳程度の何も無い部屋と、真っ白い髭でアゴを隠したサンタクロースの様な初老の男。部屋は薄暗く、天井の隙間から漏れる僅かな光だけが明かりだった

「こ、此処は？」

状況が全く把握出来ないまま、佐藤は誰に尋ねる訳でも無く、そう呟いた

「この船は奴隷船さ」

「奴隷船！？」

今の時代に、奴隷など居ない……と思うのは早計だ。頭脳ある人間は他の生物とは違い、効率化や娯楽性を求める傾向がある。そして人間は支配する事に喜びを感じる性質を持つ生き物で、うんたらこんたら。そう、とにかく奴隷制度は今現在もあるシステムなのである

「これから行くのは死の島、灰巌島。そこでみんな、み～んな死んでゆくのさ」

今日の奴隷

父

適当に続く

第１０９話：剣の手紙（前書き）

【僕の私の将来】

登場人物が小学生の頃に書いた将来の夢を読み、誰だか当ててみよう。答え合わせ

解答者は佐藤　恭介君

「はぁ、どうも」

・可愛いお嫁さんになりたいです！

「雪葉なら、なれるよ。……相手の男は俺の審査を通る必要があるがね」

・金持ち

「夏紀姉ちゃんの適当さは凄いよな。真面目に書く気が無いのがまる分かりだ」

・姉さんの様な優しい人

「し、小学生の頃だからね～。今は違う筈さ！　そうだよね、秋姉！」

・走って食って寝る！

「……全く意味が分からない。てか夢なのか、これ？　夢ならまぁ、

叶ってると思うけど……春菜だろ？」

・宇宙ヒーロー、アンパン太郎！

「……俺です。いや、今は違いますよ？」

・借金完済。頑張ります

「……え？　誰？」

花梨さんです

「へ～……って重すぎて何も言えんわ！」

・クジラを倒す！

「う～む。言いそうなのは……美月かな？　クジラに何か因縁でもあるのかね？」

・転校しない生活

「……花梨と風子は寂し過ぎるな。今度何か奢ってやろう」

・保母さんです

「うん、定番だな。こういうのは宮ちゃんだろ。いつもみんなを気遣ってる優しい子だし、きっと良い保母さんになるぞ」

・菊水流を継ぎます

「夢……なのかな。よく分からんが、応援してるからな燕……あれ？」

それと……世界征服

「……文字が小さくて最初気付かなかったけど、えらい事書いてんなコイツ」

・補佐官

「……小学生だよな？」

・愛人

「小学生だよね！？　てか誰だよ！！」

ゆかなさんと綾音さんです

「あの二人、絶対年齢詐称してるよな」

・係長。頑張ってもそのくらいですよ、私は

「……頑張れスペシャルアドバイザー」

・素敵な家庭を作りたいです

・父さんや母さん達のような、暖かい家庭を僕も持ちたい

「……これは親父と母ちゃんから聞いた。叶ったね、二人とも。これからも宜しく！」

以上です。ありがとうございます

「ん？　終わり？　あ～疲れた」

あ、因みに採点表のコメントは、上から夏紀、花梨、恭介、燕、美月、宗院、秋の順番です

「へ～ってあれって俺なの！？」

第１０９話：剣の手紙

「雪葉と！」

「お兄ちゃんと」

「……秋の」

「ドキドキ科学実験コーナー！」

「こ、コーナー」

「……コーナー」

たまに始まる謎のコーナー。今回は何故か秋姉も参加して、俺の心もドキドキだ

「今日はペットボトルロケットを作成したいと思います」

「……わ～」

秋姉は盛り上げ役なのだろうか？　なら俺も俺の役を演じよう

「ほう、ペットボトルでロケットとな？　それは実に楽しそうな実験ではないか雪葉君」

「はい、博士！　秋君、ペットボトルの準備をお願いします！！」

「……イエス、マスター」

「あ、秋姉？」

雪葉の部屋から無表情で出て行こうとする秋姉に、俺は思わず声を掛けてしまう

「……なに？」

「秋姉の役って……」

「……戦争末期に造られた人型殺戮兵器。小鳥が友達」

「凄い設定だね！？」

「……天空の城に住んでる」

「ラ○ュタ！？」

「昨日見たの」

「あ、ああそう」

どうやらキャラ設定は雪葉の仕事らしい

「……ペットボトル取って来るね」

「お願いします、お姉ちゃん。さ、お兄ちゃん。その間に雪葉達はこの画用紙で尾翼を作ろ？」

「うむ。ではやり方を教えてくれたまえ」

「うん。後で1．5リットルのペットボトルを三等分にするんだけど、その底を尾翼にするの。だから、その底に合うような紙の翼を、4枚均等に作って欲しいの」

「う、うむ。了解だ雪葉君！」

俺の妹は三国一のしっかり者やで！

チョキチョキ……チョキチョキチョキ

何とも地味な作業をやること数分。コンコンとノックの音がした

「どうぞ～」

「……お待たせ」

ペットボトルをトレイに載せて、秋姉は戻って来た……のだけど

「こ、コーラ？」

「ん……。空のペットボトル無かったから」

ペットボトルの中には、半分以上残った琥珀色の液体が、ゆらゆらと揺れている

「……おやつ」

部屋の円卓に、秋姉はコップと、美味しそうなシュークリームを三つづつ置き、コップにコーラを注いでくれた

「ありがとう秋姉。じゃ雪葉、少し休憩しよう」

「うん！　いただきます、お姉ちゃん！！」

「いただきます秋姉」

俺達はシュークリームを手に取って、がぶりと一口……

「ぶはっ！？」

「う……うぇ」

「……？　どうしたの、二人とも」

「い、いや、何でもないよ秋姉……て、手作りなんだ」

「……うん。お昼に少し」

はにかむ秋姉。この姉は何かを持っている！

「お、美味しいよ秋姉」

この味は味噌と生クリームだろうか

「……うれしい。今度はケーキ挑戦」

「お、お～。それは楽しみ～。あ、なんか水飲みたくなってきたな～」

「ん……ちょっと待ってて」

そう言って秋姉は部屋を出て行った

「ごめんよ秋姉……。雪葉、無理をしないでお兄ちゃんに任せなさい」

「お、お兄ちゃん……」

「……ふ」

「あっ！」

躊躇する雪葉からシュークリームを奪い、一気に食う！

「……」

「お、おにぃ？」

「……ごめん、少し部屋で休んで来ても良いか？」

「う、うん」

「……はぁ」

どうやら今回は肝臓にダメージを受けらしい

「それじゃ、また後で」

「うん。……おやすみなさいお兄ちゃん」

「おやすみ」

よろよろと立ち上がり、ドアを開ける。……階段を無事に降りられるだろうか

ふらふら、ふらふら

「うぎゃ！」

最後の一段でこけて、ぶっ倒れてしまった

「いって～」

ついた手がビリビリ痛む

「……大丈夫？」

「え？　あ、秋姉」

階段の下で痛がっていると、秋姉が傍に来てくれていた

「……怪我は無い？　痛む所は？」

「う、うん。大丈夫、大丈夫。水をありがとう、秋姉」

「ん。……怪我が無くて良かった」

ほっと息をつく秋姉。いつも心配を掛けてしまうな……

「うん……あ、そうだ！　俺、部屋でやる事があったんだった！！
ちょっとやってくる！」

「……ん。頑張って」

「あ、ありがとう。じゃまた後で！」

早く肝臓を休めて、ドキドキ科学実験に復帰するとしよう

軽く手を上げ、俺は自分の部屋へと戻った

剣の手紙　2

「……」

部屋に戻ってから早１０分。ベッドの上で俺は、窓の外に広がる空をノンビリ眺めていた

流れる雲は穏やかで、時折聞こえるのは子供達の遊ぶ声

「……平和だねぇ」

こんな晴れた日に、手作りロケットなんかを発射出来たらさぞ楽しい事だろう

「……さて」

回復してきたし、そろそろ戻るとするか

「よっこいしょっと」

ベッドからゆっくり起き上がり、軽く柔軟体操をする

「……むぅ」

ちょっとふらつく。どうやらまだ三半規管が回復していないようだ

「味噌、か」

秋姉の作る料理は技術的には、もうプロ並と言ってもいい。あの謎

アレンジさえ無ければ……

コンコン

「ん？」

思案していると、ドアがノックされた

「はいよ」

雪葉か秋姉が迎えに来たのかな？

なんて思いつつ、ドアを開けると……

カッ！

「ぎゃああ―！？」

目を見開いた母ちゃんの姿が！

「びっくりしたかしら～」

「だから心臓止まるっての！！」

「ごめんなさ～い。はいこれ～」

全く反省してなさそうな母ちゃんは、俺に一通の白い封筒を渡す

「これは？」

宛名を見ると、俺と秋姉の名前が書いてある。裏を見てみると……

「……剣？」

なんだ剣って……剣！？

「かなたさんか！」

「銀河のかなた～イスカ〇ダルへ～」

著作権が気になりそうな歌を歌いながら、母ちゃんはリビングへと去って行った

「ロケット完成です！」

手紙を持って雪葉の部屋の前へ行くと、喜ぶ雪葉の声がした

「……おめでとう博士。凄い化学力です」

「ありがとう、秋君！　私はこのロケットで地球を救います！！」

随分スケールが大きい話だな

「……わ～」

「その前に先ずはお部屋のお掃除です！」

スケール小さっ！

「……はい、マスター。……ういーん。がちゃん」

ロボット音!?

「ゆ、雪葉～」

もう少し聞いていたい気もするが、取り敢えず俺も混ざってみよう

「あ、お兄ちゃん。ちょっと待ってて」

がちゃりんことドアが開き、ロケット片手に雪葉が迎えてくれた

「雪葉君、ロケットが完成したらしいな！」

手紙をテーブルに置きつつ、雪葉に迫る

「え？　あ、えっと……はい、博士！　こちらになります」

「うむ」

雪葉からロケットを受け取り見てみる。装飾がキッチリとされていて、短時間で出来たとは思えない出来だ

「素晴らしい……これならば地球を支配できる」

「は、博士!?　これは地球の平和の為に開発されたロケットです！」

「ふふふ。支配こそが、平和に繋がるのだよ雪葉君。秋君、雪葉君を拘束したまえ！」

「……はい、首領」

秋姉は、うぃーんと雪葉を拘束する

「あ、秋君!?　な、何故博士の命令を……ま、まさか」

「ふふふ。秋君は改造させてもらったよ。彼女はもう、私のいいなりさ」

「……いいなり」

こくんと頷く秋姉。素晴らしい設定だ……

「じゃ、せっかくだしくすぐってみようかな」

「ええ!?　お、お兄ちゃ、や、やめ……んぁん!　あ、あはははははは!!」

一分後

「……恭介。そろそろ雪葉つらそう」

「え?　あ……」

「雪葉もう……だめ」

解放すると、雪葉は床にへたりこんでしまった。どうやら少し調子に乗りすぎてしまったようだ

「ごめん、ごめん。よっと」

雪葉を抱き上げ、ベッドに乗せる

「少し休んでな」

「はい、お兄ちゃん」

目を閉じる雪葉。相変わらず素直な妹だ

「ちょっとやり過ぎちゃったね。はい、秋姉」

「手紙？　……あ、宮田さん」

「久しぶりだよね」

「……うん。一緒に読もう？」

「うん！」

剣の手紙　3

ハローこちら宮田です。うん？　電波遠いかな？　メーデ、メーデ。もしも～し……なんてね。そのぐらい遠い遠～い所からのお手紙です。

さて秋さん、ついでに恭介君。お元気にしてますでしょうか？　こちらは元気です。私は今、アメリカのカリフォルニアって言うド田舎で暮らしています。

カリフォルニアってロサンゼルスじゃん、サンフランシスコじゃん都会じゃんって思いました？　私も来る前はそう思っていたのですが、今住んでいる場所は、見渡す限り谷と山と道と土！　ビルなんてどこにもありません。刺激的な事と言えばたまに熊が出るぐらいです。がおーです。まぁ、車で３０分も行けば都会に出ますけど。

そんなへんぴな所に来て早一月。最初は戸惑いましたが、今となればお友達も出来まして、なんと剣道場まで見付けてしまって、鍛練、勉学等と充実した日々を送っています。びしばしです。

と、私の事は此処までにしまして、秋さん。インターハイ出場、本当におめでとうございます。試合の方も、ネットで見させて頂きました。……凄い試合でした、震えました。

あの氷の女王と呼ばれていた徳永さんが、あれだけ慌てる姿を見るのも初めてでしたし、何よりあの凄い突き。おそらく……いえ、今の私では、かわせません。その突きを破り、勝利した秋さん。正直言って嫉妬です。ジェラシーです。

「ん……」

楽しそうに手紙を読んでいた秋姉の顔が曇る。ライバルだと思っている宮田さんに、嫉妬されたのが悲しいのだろう

「……秋姉」

「うん……ごめんね」

秋姉は、一枚目の手紙をめくり二枚目を読み始める。すると、秋姉の表情は嬉しそうなものへと変わっていった

そんな凄い秋さんと試合が出来た徳永さんが羨ましいです！　私も秋さんと戦いたかった、そして勝ちたかったです！

「……うん。私も戦いたかったよ、宮田さん」

いつか必ず、必ず私は日本へ戻ります！　だから待っていて下さい、なんて都合の良い事は言いません。今度は秋さんの方から勝負したくなるような剣道家になります、絶対に！！

「……これは負けられないね、秋姉」

「……うん」

それでは唐突ながら最後になりますが、一番言いたかった事です。

熊は嘘でした。既に絶滅しています。残念……

「こ、これが一番言いたい事なのか？」

「……グレスリー」

あ、あれ？　秋姉もなんか残念そう

冗談です

「……宮田さんって冗談のセンス全く無いね」

一番言いたかった事は

秋さん、インターハイ頑張って下さいね！　地球の反対側から、精一杯応援しますから！！

それでは、またいつかお会いしましょうね。　宮田　かなた

うぅ、読み返すと自分の事ばっかりだ。手紙って難しい……あ、恭介君の事忘れてた。恭介君も何か頑張れ～

「……何かって」

所詮ついでか……

「……ありがとう、宮田さん」

秋姉は手紙を閉じ、大切そうに封筒へとしまった

「元気そうで良かったね」

「……うん。私も頑張らなくちゃ」

よしっと気合いを入れる秋姉。実に可愛いらしく美しい

それにしても……

「……あの人、氷の女王とか呼ばれてたんだな」

それが一番驚いたよ

今日のくしゃみ

徳

土屋アンナ

剣の手紙　3（後書き）

超適当小説、今日の燕さん。その１

鳴神学園、本館。階段を三階まで上がり、東側に進んで最初の広い教室

そこは鳴神に通うの生徒達にとって、前を素通りする事ですら躊躇われる特別な場所であり、全ての英知が集う場所でもある

その場所に入る事が出来るのは、全校合わせても１３人。それは様々な分野で天才と呼ばれる、選ばれし円卓の騎士たち。そしてその騎士たちの頂点に居る者、それが――

「副会長」

「はい、会長」

鳴神は休日も門が閉められる事は無い。此処には町の図書館など遥かに凌駕する資料が揃っているし、休日を返上し、勉強を教える熱い教師も居る

何より、学園において絶対な力を持つ生徒会、その中で過去最高とうたわれる生徒会長、菊水　燕が居るのだ。彼女が居る限り、学園は決して休まない。それは常識となっている

そんな彼女は、今日も実務に追われていた

「２－ＡとＤ、そしてＥの英語授業だが、予定していたカリキュラムが少々遅れている。これでは期末に影響が出てしまうぞ」

「その３クラスは上中先生ですね。彼は教科書に沿って授業をするのでは無く、実地での経験を交えて授業を行う癖があります。ですので、一つ一つの授業が濃くなってしまい、時間が足りなくなってしまうのでしょう」

「うむ。それはそれで素晴らしいのだがね。しかし学校にはテストと言うものがある。点数を取る事だけが全てとは言わないが、少なくとも社会は点数だけを見て判別する傾向が強い。此処は上中教員に折れてもらい、授業を早めてもらおう」

会長と呼ばれた生徒は、机に置かれた書類にハンコを押し、副会長と呼ばれた女性に手渡す

「では次に化学室の予算についてだが……ん？」

スカートの僅かな震えに気付き、会長は副会長に断ってポケットから携帯を取り出した

「お電話なんて珍しいですね、会長」

「私の携帯には、余り連絡が入らないからね。母上かな……な！？」

「ど、どうしたの、燕？」

「き、恭介からだ。何かあったのだろうか……。ゴホン、ゴホン。……声は変じゃないか？」

「良いから、早く出なさい！」

「う、うむ。……もしもし……ん？　うむうむ。……む！　ふむ～。ふむふむ」

「……よくそれで会話が続くわね」

「うむ……分かった。では、後ほどファックスで……え！？　え、ええと……じ、時間は、その……」

会長は、窺う様に副会長の顔を見る。すると副会長は、渋々と頷いた

「あ、ありがとう、ゆかな。……な、なんでもないぞ！　大丈夫だ、今日は暇だぞ、恭介！」

「……はぁ。明日はまた早起き、か」

呆れ声の副会長。しかしその会長を見る顔は、見守る様に微笑んでいた。

番外編　夏紀（前書き）

あちこちに散らばっていた番外編が、少し見苦しいので、まとめてみます

番外編　夏紀

「お兄ちゃん！」

「どうした雪葉ぁあ！」

「雪葉は遂にお兄ちゃんを倒さなくてはならない時が来てしまいました！！」

「な、なにぃ！？　この兄を倒すと言うのか！」

「……はい。もうこれ以上、お兄ちゃんが悪に染まるのを、雪葉には堪えられない」

「ぬううう！　ならば俺を止めてみろ、我が最愛の妹よ！　止められるものならな！！」

「止めます。止めてみせます！！」

「……」

日曜日の午後。棒アイスを食べながら部屋に戻ろうとした時、バカの部屋からアホな会話が聞こえて来た

「ぐわぁ、やられた～」

「これで雪葉の八連勝だね、お兄ちゃん♪」

……ゲームでもやっているのかしら？　相変わらず無駄に仲の良い

兄妹ね

そういえば最近、雪葉と遊んでないわね。たまにはアタシの部屋にも遊びに来て欲しいけど――

「この部屋じゃねぇ」

部屋に入ると、真っ先に目につくのは床に転がった酒瓶。次に脱ぎ散らかした服や、山積みになった参考書

こうして改めて見てみると、自分の部屋ながら汚いわね……

恭介に掃除してもらおうかしら（強制）

『姉ちゃんは片付けられない女かよ！？』

ムカっ！

前に掃除をしてもらった（強要）時に言われた言葉を思い出す

なにが片付けられない女よ！　ちゃんと食べ物は片付けてるし、たまにコロコロしてるし……

『姉ちゃんは豚だよ！　豚小屋に住む猪八戒だよ！！』

……流石にあの言葉は傷付いたわね。注１

「……よし！」

自分で掃除するか！

思い立ったら吉日。先ずは本棚を片付け、次は酒瓶を処分。そして、クローゼットを整理して、ベッドのシーツを変えて、床を拭いて……

「……」

止め。無理、明日やろう。やろうと思った。その気持ちが大切なのよ

納得した所で、ビールでも飲みましょう

冷蔵庫まで取りに行くのが面倒よね～

「ふんふ、ふんふ～ん」

階段を下りて、キッチンへ……

「あ、だめぇ、お兄ちゃん」

え！？

「良いではないか良いではないか～」

ま、まさかあの馬鹿……

「……うん。でも優しくしてね？」

「げへへ、目茶苦茶に揉みほぐしてやるぜ！」

階段を駆け降り、恭介の部屋に飛び込む

「アンタ達！！」

「うわ！？」

「きゃ！？」

飛び込ん先の光景は、恭介が雪葉の肩を揉んでいる所だった

「……」

「な、なんだよ姉ちゃん」

「お、お姉ちゃん？」

「……おやつ何、食べたい？　アタシ買って来るわ」

「はぁ？」

恭介が何言ってんだこの馬鹿は（被害妄想）って目でアタシを見た。
後でシメよう。注2

「と、とにかく買って来るから！　ほら、さっさと言いなさい！！」

取り敢えず勢いでごまかそう

「え、えっと……プ、プリンでお願いします」

「雪葉もプリンが良いな」

「プリンね。すぐ買って来るから」

「……プリン」

「ギャー！！　って、アキ！？　い、いつの間に」

いつから居たのか、アキが後ろに立っていた。我が妹ながら全く気配が無いわね……

「……さっき。はい」

「え？　何よこれ」

アキからコンビニ袋を受け取り、覗いてみる

「あ、プリン？」

「……プッチン。みんなで食べて」

数は四つ。ア、アタシの分まで……

「ありがとうアキ。姉ちゃん、感激よ！」

「……ん」

優しくて、可愛くて、強くてしっかり者な妹

こんな魅力的で完璧な子が、世の中に居ても良いのかしら？　良いに決まってるわ！　何故ならアタシの妹だから！！

「……恭介、雪」

アキが二人を呼ぶ

「なあに、秋お姉ちゃん」

「なんだい秋姉？」

にこにこしちゃって、随分アタシに対してと態度が違うわね、このバカ

「……今日、調理実習あって」

二人の顔が、笑顔のまま固まった。アタシの額からも汗が流れる

「……クッキー」

バッグからチェック柄の紙袋を出した瞬間、アタシの視界がぐらついた

眩暈、吐き気、頭痛。それは二日酔いに近い症状

「……よかったら、これも食べて」

アキは、にこっと微笑んで、アタシその包みを渡す

「ア、アリガトアキ」

「ん。……着替えてくる」

そう言ってアキは、自分の部屋へ戻って行った

「……どうする、これ？」

「……俺が食う！」

恭介は、こんな時だけ男らしい。恭介の目が死んだのは（注４）アキの料理を食べ始めてからの気がするけど、そこには触れない方が良いわね

「ただいま～！」

元気な声が玄関に響く。春菜ね

「おかえり、春菜」

「お、夏姉！　ただいま！！　兄貴の部屋の前で何してんだ？」

「ん？　ちょっとおやつを……プリン、アンタも食べる？」

「食う！　兄貴の部屋で食う～。ただいま兄貴～」

廊下にバッグをほうり投げ、春菜は恭介の部屋に入って行く

「うお！？　何で一々抱き着くんだよお前は！」

「兄貴の匂い好き～」

「シャンプー変えたぞ、この野郎！！」

「むっ！　春お姉ちゃん！！　お兄ちゃんに抱き着くのは、五秒ま

でですよ！　それ以上は条約に反しています！」

「なら雪も抱き着け～」

「え？　キャー！？」

春菜は強引に雪葉の手を引っ張って、そのまま恭介の胸に飛び込んだ

「ぐは！？」

「兄貴、プリン食べさせて～」

「自分で食えよ！　てかお前、どんだけ甘え上手なんだよ！？」

「お兄ちゃん！　雪葉は一人でプリンを食べれますよ！！」

「あ、ああ。え、偉いぞ雪葉」

「私は兄貴に食べさせてもらう～」

「む～！！」

ギャーギャー、ワーワー

「……はぁ」

騒がしい家ね

「……でも、なんだかんだ言って」

コイツの周りに自然と、みんな集まる

「アンタが、この家の主役って事かしらね」

「や、止め、止めてくれ二人とも～」

情けない主役だけど

注１：傷付いた夏紀の関節技で、恭介さんは全治二週間の軽傷

注２：夕食の後、ソファーでねっころがっていた恭介さんは、夏紀にドシンと座られました。注３

注３：「お、重いよ、猪八戒！」「……あ？」

注４：死んでません

「ところで……最近、アイツどうしてる？」

「え？　お兄ちゃんの事？」

「う、うん。別にどうでもいいんだけど……げ、元気？」

楽しい給食の時間。花梨ちゃん達とお昼を食べていると、花梨ちゃんは聞きづらそうにお兄ちゃんの事を私に尋ねました

「うん、元気だよ。今日学校終わったら会いに来る？」

「え？　あ、いいわよ別に。聞いてみただけだもの」

「ふぅん」

最近花梨ちゃんは、良くお兄ちゃんの事を聞いてきます。もしかして花梨ちゃん、お兄ちゃんの事が好きなのかな？　妹としてはちょっと複雑です

「あ、わたし遊びに行きたい！　兄ちゃんとも会いたいし！！」

花梨ちゃんは良く分からないけど、美月ちゃんはお兄ちゃんの事が好きみたい。妹として最重要警戒人物です！

「僕も会いたいな、お兄さんに」

風子ちゃんも何だか怪しいかんじです！　危険です！！

「……私はいい」

宮ちゃんは安心。

「ふ、二人とも行くの？　……ならアタシも行こうかな」

花梨ちゃんが私を期待するような目で見ます。断れる雰囲気ではありません

「う、うん。みんなが来てくれると、お兄ちゃんも喜ぶと思う」

みんなと遊べるのは私も嬉しいけど……

「じゃあ、学校終わったら私の家で遊ぼ」

けど、やっぱりちょっと複雑。お兄ちゃん、カッコイイからなぁ

授業が終わって、放課後。宮ちゃん以外のみんなと一緒に、お家へと帰ります

「ただいま～。みんな、上がって」

「はーい！　おじゃましま～す」

「お邪魔します」

「失礼するよ」

お兄ちゃん、もう帰ってるかな？

「みんなは先に私の部屋に行ってて。お菓子とジュース持って来る」

「アタシも手伝うわ」

「ありがとう、花梨ちゃん。それじゃキッチンに行こ。美月ちゃん達は部屋で待っててね」

「は～い」

「うん」

階段の所で二人と別れて、私と花梨ちゃんはリビングへ向かいます

「美味しいクッキーがあるんだぁ」

「そうなの？　それは楽しみだわ」

お話しながらリビングへ行くと、そこには誰も居なくて、シーンと静かでした。みんなまだ帰って来て無いのかな……

「雪、コップはこれを使って良いの？」

「あ、うん！　花梨ちゃんはコップをお盆に乗せて、先に持って行ってくれる？」

「ええ、分かったわ」

花梨ちゃんは、コップを乗せたお盆を両手で慎重に持って、ゆっく

りとリビングを出て行きます

今日は花梨ちゃん達が遊びに来てくれて良かったなぁ。お家に一人じゃ、寂しいもん

「……えっと、あれ？」

おかしいな。レンジ台の二段目に置いといたのに

「キッチン台かな？」

キッチンの収納台に、夏お姉ちゃんのお菓子（つまみ）をしまう場所があります。もしかしたら、お母さんが間違えてそっちに入れたのかも

「んしょ……う～」

私の身長じゃ届きませんので、キッチンの隅に置いてある踏み台を持って来て乗ってみたけど、それでも微妙に届きません。これはあれですか？　雪葉に対する挑戦ですか！？

「ん～～」

お兄ちゃんの妹として、負けられない挑戦を挑まれた私は、精一杯背伸びを

「きゃっ！？」

急に後ろから、身体を持ち上げられました！

「よ、雪葉」

「え？　あ、お、お兄ちゃん？」

振り向くと、笑顔のお兄ちゃん！

「探し物か？　持ち上げといてやるから探しな」

「う、うん」

軽々と雪葉の事を持ち上げてるけど、お兄ちゃん重くないのかな……。最近ちょっと太っちゃったし……

「昔は良く、こうして高い高いしたもんだ」

「も～お兄ちゃん！！」

お兄ちゃんは、いつも雪葉を子供扱いするんだから！

「ふふ。あったか？」

「う～ん……あ、あった！」

やっぱり、此処だったんだ！

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「ああ」

お兄ちゃんは、そっと雪葉を降ろして、

「ただいま、雪葉」

「おかえりなさい、お兄ちゃん！」

やっぱりカッコイイな、お兄ちゃんは。みんなが好きになっちゃうのも仕方ないよね

「……で、雪葉さん。物は頼みなのですが、夏紀姉様に僕の宿題を見せに行ってもらえませんでしょうか？」

「え？」

「どうしても分からない所があるんだよ～！　でも俺が聞くと教えてくれないんだよあの女！！　かと言って秋姉に聞くのは恥ずかしいし……お願いします、雪葉さん！　何とぞ、何とぞ～」

「……うん。分かったよ、お兄ちゃん。雪葉に任せて！」

「て、天使光降……」

たまにカッコワルイ時もあるけど……。そんな所も大好きだよ、お兄ちゃん！

秋姉

『夏紀、秋～。この子が貴女達の弟よ～』

『うわぁ、ちっちゃい！　可愛い～』

『と～と？　あう～』

『仲良くしてあげてね、二人とも』

『うん！』

『と～』

恭介が弟なのだと自覚したのは、保育園へ入園した頃辺り。その頃から何となくだけれど、恭介を守らなきゃ、と思っていた

『お姉ちゃん、おんぶ～』

『ん』

ふらふら、ふらふら……コテ

『……うっ、うわぁああん！』

『ご、ごめんね。あ、血……お、お姉ちゃん、来て！！』

『な、なに？　何事！？　ん？　怪我？　ん～、かすり傷ね、大丈夫、大丈夫。ほら、痛いの痛いのどっかに飛んできやがれ～飛んで

かないとぶっ飛ばすわよ～』

『う……ぐす』

『お、泣き止んだ。恭介は強いわね！』

『……えへへ！』

『……あ、ありがとう、お姉ちゃん』

『へ？　何か？　それよりアキは大丈夫なの？』

多分、それは姉さんの影響。幼い私や恭介、それに春菜の面倒を、自分の時間を割いてまで面倒を見てくれていた姉さん

『秋姉、大丈夫？』

『ん。平気……コホ』

『無理しちゃ駄目よ～。明日は学校を、お休みなさい。それにしても夏紀遅いわね～』

『プリンと買ってくるって言ってたけど……』

『もう三時間ぐらい起ってるわよね～。あら～噂をすれば』

『ただいま！　遅くなってごめんね。はい、バッチリプリン！』

『あれ？　それってこの間から製造中止になってなかったっけ？』

『少しだけど、まだ作ってるみたいよ。コアなファンが居るからかしらね』

後で知ったのだけれど、この頃、私が一番好きだったバッチリプリンは、この辺では電車で五つ離れた町の、小さなスーパーにしか置いてなかったみたい

『う～ゴホン、ゴホン！　あ～頭いたい～』

冬の外を、汗をかいてまで何時間もプリンを探してくれた姉さん。
その日の夜に熱を出して、お母さんに怒られてたね

姉さんの様になりたいな

ずっと、そう思ってた。憧れの人だから

「……姉さん？」

姉さんの部屋の前。ノックをして、声を掛ける

「姉さん」

返事は無い。いつもの事

「……入るよ、姉さん」

カチャ、ドアノブを回す音

「あああ！　待って、待って！　開けないで！　今、起きたから

！！」

姉さんは慌てた声で、言う。ドタンバタン、部屋の中で凄い物音がする

「……大丈夫？」

「も、もちろんよ！　アキは先にリビングへ行ってて！」

「ん」

此処数ヶ月、姉さんの部屋を見た事、無い。中がどうなっているのか想像はつくけれど……少し怖い

「あ。おはよう、秋姉」

「ん……おはよう」

「おはよ、秋お姉ちゃん」

「……うん。おはよう、雪葉」

姉さんを置いてリビングへ行くと、もう恭介と雪葉は着替えていて、準備が出来ていた

「二人とも早いね」

二人は、いつもしっかりしてる。私も見習おう

「俺は今日、早く起きちゃったからね。遠足前の子供かって感じだ

よ」

「お兄ちゃんにお弁当作り手伝ってもらったの！　お母さんと雪葉とお兄ちゃんの合作！　自信作だよ」

「凄い。楽しみ」

私も手伝いたかったな……。今度はもっと早く起きよう

「夏紀姉ちゃんはまだ寝てる？」

「……起きてる」

「そっか。春菜は今、コンビニ行ってるよ。お菓子買って来るみたい」

今日はみんなで旅行。一泊二日で箱根温泉

「……楽しみだね」

「うん！」

「旅行最高～！」

「うるさいわね～。旅行ぐらいで騒ぐんじゃないわよシスコン！」

姉さんが頭を抑えながらリビングへ来た。顔色が悪いけど、大丈夫かな

「はぁ～頭いた」

「大丈夫かよ姉ちゃん。運転出来る？」

「……母さんの車に乗るよりは良いわ」

「……だね」

「ただいま～！」

「お、春菜も帰って来たし、後は母ちゃんか。母ちゃ～ん、準備出来たか～？」

「オッケーで～す。先に車に乗っててて～」

恭介がキッチンの方へ声を掛けると、奥から母さんの声

「あいよ～。じゃ、行こうか」

「うん！」

「お～！」

「……ん」

恭介を先頭に、家の駐車場の前へ行く。そこで何故だか恭介は難しい顔をした

「……じゃ、一台に三人ずつ乗るとして……。どっちの車に乗るか決めようか」

「……うん」

「ああ……」

雪葉と春菜が神妙に頷く。凄い緊迫感

「……私、どっちでも良いよ？」

「いや、此処は公平に……ぐーとぱーで分かれましょ。でいこう」

「なにそれ？」

「知らないの姉ちゃん？　ジャンケンのグーとパーだけを使って、チーム分けする時に使うんだけど」

「あ～、ぐっぱーじゃすね」

「……なにそれ？　つかじゃすってなにさ」

「え？　言わない？　ぐっぱっぱの方かしら？」

「……歳、幾つだよ」

ぱこん。姉さんの平手打ちで恭介の頭が鳴った

「……姉さん」

「だ、だって……ご、ごめん」

「たく、直ぐ手が出るんだから。じゃ行くぞ～、ぐーとぱーで分か

れましょ！」

春菜と雪葉がグー。私と恭介と姉さんがパー

「お、お兄……ちゃん」

「ゆ、雪葉……」

「あ～あ、兄貴と行きたかったんだけどな。ま、良いか。行こうぜ雪」

「あ！　お、お兄」

春菜は雪葉を連れて車に乗った。雪葉、凄く悲しそう

「……私、代わ」

「はい、お待たせ～。あら～二人とも、もう乗ってるのね～。じゃ出発よ～」

来て直ぐ車に乗り込む母さん。そのまま、直ぐ発進

「お兄ちゃ～ん」

「雪葉～」

引き裂かれた兄妹のドラマ見ているみたい。ちょっと感動

「さ、さてと、アタシ達も行きましょう」

それから箱根を目指して数時間。途中、小田原城で合流して、みんなでご飯

「あ～、あと、ひと踏ん張りね。ほら二人とも乗り込め～」

だらし無くて適当で、乱暴でいい加減

「大丈夫アンタ達？　疲れてるなら途中で休むわよ」

でも優しくて強い人

大きくなったら姉さんの様になりたい

その想いは今でも変わってないよ、姉さん

そして、旅館。私達は母さん達よりも早く着いたみたい

「あ～、疲れた。たく、何時間運転させるのよ……。おら恭介！酒持って来なさい、酒！　飲まなきゃやってられないわよ！！」

「あ、あのなぁ、姉ちゃん。その前に温泉や景色を楽しむって言う風情は無いのかよ」

「旅館でマッタリと、マッサージ付きでお酒を飲む。これが大人の女の楽しみ方よ。分かったらさっさと冷えた日本酒でも買って来なさい」

「……それ、おばちゃんの楽しみ方だって」

「ああん？」

「な、何でもない、何でもないよ！」

「問答無用のカニ挟み！」

「ギャ！」

「すかさずアンクルロックよ！」

「ぎゃー！！」

……変えた方が良いのかな

秋の旅行に続く。

そして何故か燕

他の家がどうかは分からないが、少なくとも私の家は厳しかった

物心がついた頃には、朝四時に起き、七時の朝食まで舞踊の稽古を行う事が習慣となっていて、その稽古で私のやる気が無いと師匠である母の目に映れば、学校へ行く事を許されず、食事抜きで稽古を続けさせられたものだ

夕方は生け花やピアノと言った、舞踊以外の教養を詰め込まされる

夜は基礎体力を養うトレーニング。そして、就寝前に演舞

休みの日など、朝から晩まで稽古、稽古、稽古の日々

そんな毎日は、私の精神を強制的に抑制させ、一時は感情すら薄くなってしまった

だから、とは言い訳に過ぎないが、私に友と呼べる者は無く、学校でも家でも必要な事以外は喋らない、無愛想で陰気な女であったと自覚している

『燕。貴女はこの菊水を継ぐ者です。その為、貴女に自由はありません。しかし、それでも貴女は菊水を背負わなくてはならないのです』

『はい、お母様』

『貴女を汚す事は誰にも出来ません。菊水を継ぐ者だけに許される、

誇りと伝統が貴女を守るでしょう。それは凡庸な者、いいえ。例え天才と呼ばれる者がいくら追い求めようとも手に入らない、貴女だけの力』

その為には、私の意志など必要無い。私は菊水を背負う為だけに生まれ、菊水を守る為だけの存在なのだから

幼心に、そんな諦めれに近い想いを抱き、私は小学校を卒業する。そして中学へと進学しても、相変わらず友人は無く、いつしか近寄る者さえ居なくなっていた

『菊水さんて何か恐いよね』

『てかアタシらの事なんか眼中に無いって感じでしょ』

人と関わる事を拒否していた私に、友人など作る資格は無い。だからこの会話に悲しむ資格も無い

『菊水の奴また成績トップだってよ』

『家は金持ち、頭は優秀おまけに美人。俺ら凡人とは会話もしたくないんだってよ』

学校でいつも俯いていた

早く学校が終わって欲しくて、早く一日が終わって欲しくて……

いっそ、全てが終わってくれれば……

『……何を考えているのだ、私は』

『何を考えていたのかしら、菊水さん』

顔すらまともに見た事が無かった前の席の同級生は、穏やかにそう声を掛けて来た。これが、初めての友であり、親友となった、柊ゆかなとの出会い

そしてその後、幸運にも私はもう一人の友人を得る。そ、そして、こ、恋人なんてものも得る機会があったのだ！

『……燕』

『うん？　どうしたのだ秋』

『今日、私の家に寄れる？』

『ふむ。２０分ぐらいならば余裕があるが』

『……良かった。燕にあげたい物があるから』

『わ、私にか？』

何故だ？　そんな疑問が顔に浮かんだのか、秋は微笑み

『……誕生日』

と言った

『あ！？　そ、そうだったな、すっかり忘れていたよ。……すまない秋。こんな時、何と言ったら良いか分からない』

『ん。……ありがとう』

『あ……。ありがとう、秋』

秋に連れられ、彼女の家へと入る。秋の家は何故かいつも温かく、訪れる度に私を落ち着かせてくれた

『先に水を貰っても良いだろうか』

緊張し、喉が渇いてしまったのだ

『……冷蔵庫に麦茶ある』

『ありがとう』

勝手知ったるなんとやらと言う奴で、秋を先に部屋へ行かせ、私はキッチンへとお邪魔する

冷蔵庫を開け、コップを拝借し、麦茶を頂いていると、ドアが開く音がした

『ん？』

秋かと思い、視線を移す

視線の先には、驚いた顔をした少年の姿だった……いや、歳は変わらないのだがね。後でびっくりしたよ

『君は秋の弟かな』

顔は余り似ていないが、雰囲気が似ていた。優しくて穏やかな、雰囲気だ

『は、はい、そうです……貴女は？』

この時、恭介は緊張していたのか声が若干震えていた。私も緊張していたのだが……

『私は秋の友人で菊水　燕。宜しく』

『よ、宜しくお願いします』

戸惑いながらも、しっかりと私の目を見て話す恭介に、私は好感を覚えていた。だからなのか、それとも秋の弟だと思っていたからなのか、私は普段、尋ねる事が無い事を恭介に聞いていた

『君の名前を聞いても良いだろうか？』

『恭介と言います』

『恭介君か、良い名前だと思うよ。響きが綺麗だ』

うん。良く似合っている

『燕も可愛いと思いますよ』

……いや、此処から先は余り思い出したく無い。私の人生の中でも、最大級の失敗だ

逃げるように化粧室に篭った後も、暫くの間は顔のほてりが収まらず、ようやく落ち着いた頃に、二人は私の誕生日を祝ってくれた

あれは不意打ちだ、不覚にも涙が出てしまったじゃないか

しかしそれからだろう、私が私自身の事を気に始めたのは

今まで適当に切っていた髪は、少し高いが腕の良い美容師がいる美容室へ通うようになり、服にも多少だが気を使うようになる。今までの私からすれば考えられない事だ

全く。君が何気なく言った言葉は、私の中でこんなにも革命を起こしたのだぞ

……いきなり可愛いだなんて、卑怯じゃないか

『遊びに行こう、菊水さん』

『優し過ぎるんだよ、燕さんは』

『好きだぜ燕』

君に名前を呼ばれる度、私は菊水から離れて行って、失ったはずの燕を思い出す

『不器用で可愛い俺の燕だ』

……うん。私は君の燕

『君が好きだよ、恭介』

大好きだ

「ん？　どうした？　俺の顔に何か付いてるか？」

「いいや、いつも通りの君だよ。敢えて言うならば、さっき食べたうまか棒が付いている、と言った所だろうか」

「早く言えよ！　ぐううう、荷物のせいで両手が使えん！！」

「ふむ。私が拭こう」

「い、良いよ！　後で拭くから！」

「遠慮しないでくれ。どれどれ」

私は最終的に菊水の方を選んでしまい、君の元から離れてしまった

君を信じていたはずなのに、結局私は一人で勝手に決め、勝手に去って行く

狡くて弱い私に、君は相応しく無い。君ならばもっと素敵な女性が現れるだろう

だから私は……

諦め切れなかった。

君が好きだったから。本当に好きだから

『なら頑張らないとね。今まで貴女は人との関わりを、貴女自身を頑張ってこなかったんだもの、一度ぐらい本気を出さければ恭介君に失礼よ』

『……ああ、その通りだな』

ありがとう、ゆかな

『私の……燕の本気を見せてやる！』

諦めんぞ、私は！！

「いて、いて、いてぇ～！！　何でそんなに力いっぱいで拭くんだ～！」

一昨年のクリスマス

「さ、最近世間がやけに賑やかだが、何かあるのだろうか？」

十二月二十日。燕と一緒にマックで昼飯を食べていると、燕は棒読みで俺に聞いてきた

「ん？　何って……何かあったかな？」

天皇様の誕生日？

「う、うむ。私も良く知らないのだが、何でも異教の祭がどうとか……」

「異教？」

なんだその怪しげな単語は

「う、うむ。なんでも赤い服を着たご老体が、私財を投げ売って子供達にプレゼントを配るとかなんとか……」

燕は俺の様子を窺う様に言う

「……もしかしてクリスマスの事か？」

「そ、そうだ。確かそんな名前の祭だった」

うむうむ、とわざとらしく頷く燕。一体何が言いたいのだろうか

「……と、時に君はあれかね？　異教の祭等には興味無いあれかね？」

「い、いや別にそんな事は無いけど。一応家族でパーティーするし」

「そ、そうか。……うん、それは素晴らしい事だ。仲の良い家族でうらやましく思うよ」

燕は少しだけ残念そうたが、それでも微笑みながらそう言った

「だから２５日は無理だけど、２４日、デートでもしないか？」

「なぁ！？　……」

燕は勢い良く椅子から立ち上がった後、再び静かに座り直す

「つ、燕？」

「……ごめんなさい、取り乱しました」

「そ、そうか」

びっくりした～

「で、デート……宜しくお願いします」

「あ、ああ。こ、こちらこそ」

急にしおらしくなった燕に戸惑いつつ、なんだかお見合いみたいな雰囲気で、俺と燕は日が落ちるまで２４日の予定を話し合った

んでもって２４日

待ち合わせは午後四時だが、なんだかんだで緊張していた俺は、一時間も前に待ち合わせ場所に着いてしまう

「……ふぅ」

早く来すぎたな……って！

「なんで着物やねん！」

銀糸のラメが入った黒と赤の生地。半袖と帯は白で、クリスマスらしい雪ダルマやツリーの柄がちりばめられている

そんな着物を見事に着こなす彼女を、通る人通る人がちらちらと見て、感嘆の声を上げてゆく

その彼女は、傍目からも緊張した様子で、時計を何度も確認している

……ああ、確かに良く似合っているよ。こうして見ると凄く綺麗だとも思う。しかしアレだ。俺はどうすれば良いんだ？　ジーパンにセーターにダッフルコートだぞ？　着物と合ってないってゆーねん

「……はぁ」

今更引き返す訳にもいかないし……仕方ない

俺は渋々と燕の方へ歩いて行く

「燕〜」

「あ、恭介……は、早いではないか」

「燕こそ。てか何故に着物を？」

「う、うむ。学校の友人なのだが、その友人がクリスマスの……そ、そので、デートと言えば良いのかな、うむうむ。と、とにかくそれは特別だから一番自信がある服にしなさいと……似合わないだろうか？」

燕は急に弱気な表情になり、上目使いで俺を見ながら恐る恐る尋ねた

……こういう所、狡いよな

「良く似合ってるよ燕」

「……ありがとう、恭介」

燕は恥ずかしそうに、でも本当に嬉しそうに微笑んでくれた

そんなこんなで、デート開始

「じゃ、先ずは映画に行こうぜ」

映画→夕食→イルミネーション見物→燕んちの前で解散の王道コースだ

「う、うむ」

映画館へ向かい歩き出す俺の後を、三歩下がって燕が着いてくる

「……」

「……」

「……よ、横に並ぼうぜ！」

なんか寂しいじゃんか！

「しかし、殿方と並んで歩む訳には……」

「え!?　な、なんて奥ゆかしい……」

言われてみれば、燕はいつも俺の一歩後ろを歩いてたな

「だ、だからってそんなに離れるなよ。せっかく一緒に歩いてるんだから、やっぱり顔を見て話したい」

このままでは首が疲れてしまう

「うえ!?　……」

奇妙な声を上げて数十秒沈黙した後、燕は一歩前に出た

「もう一歩」

「ま、まだか？」

燕はもう一歩前に出て、いつもの定位置へと付く

「更にもう一歩！」

「こ、此処では駄目だろうか？　これ以上は心の準備がまだ出来ていないんだ……」

艶っぽい声で呟く燕

「って……あのなぁ」

「だ、だって……」

しょんぼりとしてしまった

「ぬぅ」

なんだか虐めてるみたいだな

「……分かったよ、そこで良い。ちゃんと顔も見れるからな」

「う……うむむ」

唸りながら、燕は髪を直す。我が恋人ながら変な奴だ

微妙に話し難い雰囲気の中、映画館に到着。当初は【ブッチャー殺人事件】を見る予定だったのだが、早く来すぎてしまった為、まだ上映中だ

「どうする？　他の見るか？」

他のはホラーで【怪奇！　河童ｄｅ☆川流れ】と、【パチンコ放浪記】がある

「……」

「……凄くつまらなそうだな」

「う、うむ……河童には少し興味あるが……あちらはどうだろうか？」

「ん？　えっと……」

燕が指差す看板を見ると

スーパーエロサスペンス【コニャック夫人】

「……燕」

「え？　あっ！？　ち、ちがうぞ！　見たくなんてないのだぞ！？」

俺の左腕を両手で軽く抱き、燕は必死に弁明する

「あ、ああ、分かってるって。……あ～取り敢えず河童見るか？」

「あ……こ、こほん。失礼、取り乱した。君がそれで良いのなら、是非」

「よし、行くべ」

「うむ」

冷静さを取り戻し、いつもの燕に……

「……つ、燕。そっちの入口はコニャック夫人の方だぞ」

「わぁ！？」

戻って無かったな……

「お待たせ燕。はい、コーラとポップコーン」

買って来たポップコーンとコーラを燕に差し出す

「あ、ありがとう」

映画館に来た事が無いらしい燕は、珍しくおどおどした様子でコップを受け取った。どうやら不安だったらしい

先に席を取っておいてもらっていたのだが、この客数なら一緒に買いに行った方が良かったかも知れないな

「……ん？」

室内が段々と暗くなって行き、上映開始のベルが鳴った

「そろそろ始まるぞ」

「う、うむ」

ごくり。燕の喉が鳴る

「そんなに緊張しなくても大丈夫だって」

「と、とは言われても」バババーン！

びくっ！

でかい効果音に燕の身体はビクつき、石化したかの様に固まってしまった

「つ、燕？」

「だ、大丈夫だ。何も問題無い」

ギギギと音が鳴りそうなぐらい不自然に正面を向き、燕は画面に集中し始める

……大丈夫そうだな。俺も集中しよう

一時間後

クスン、クスン

映画が佳境に入った頃、俺の隣から妙な音が聞こえて来た

「うん？」

声の方向、即ち燕の方を見てみると、燕はハンカチで目元を拭いながら真剣な表情でスクリーンを見ている

「……」

場面は、主人公が生き別れになっていた親に会う感動シーンなのだが、正直、泣ける程では無い

「ぐす……？　ど、どうしたのだ恭介？」

視線に気付いた燕は、急いで目を擦り、俺の方へ向く

「……いや、なんでもない。それより手、繋いで良いか？」

「にゃ！？」

「にゃ？」

猫？

「に、にゃに言ってるのなのだ！？」

「お、落ち着けよ、何かバカボンになってるぞ。それに他のお客さんの迷惑に……」

ならないな。周りに誰も居ないし

「と、とにかく繋ぐぞ！」

実は初のクリスマスデートで、何気に緊張している俺。勢いに任せて強引に燕の手を握った

「っ！？　あ、ぅう」

燕は顔を伏せ、手に力をって

「いてぇ、いてぇ、いて～～！！」

彼女の握力は強かった

そんな、いっぱいいっぱい感じで時間は進んで、上映終了

「……手がベトベトだ」

やけに手の平が汗ばむ燕に呆れつつ、映画館を出る

「あ、暑かったのだ。……ものすごく」

確かに燕の顔は、ほてっており、ほんのり赤くなっていた

「あっちの公園で涼もうぜ」

「う、うむ……うむ」

元気の無い燕を誘導し、近くの公園へ

「……ふぅ。冷たい風が気持ち良いな」

空いていたベンチに座り、ほっと一息

普段なら寒い！　と言って良い気温なのだが、映画館が妙に暑かったので心地良い

「……」

「燕？」

「……す、すまない恭介。せっかくのデートなのにてんやわんやしてしまって……」

「うむ～。確かに変だったな、今日の燕は」

人の事は言えなかったりするが

「し、仕方ないではないか。す……好きな人と、始めてクリスマスを一緒に過ごしたのだから……」

燕の声は、耳を澄ませないと聞こえないぐらい小さなものだった。

でも、俺にはしっかりと届いていた

だけど、どうやら今日の俺は少しいじわるならしい

「ん？　聞こえないぞ、燕」

「だ、だからぁ……ええと、あ……あうう」

燕は顔をめちゃ真っ赤にし、

「に、二度も言えない！」

泣いてしまいそうな顔と声で、そう言った

「……たく、本当に変な奴だよな燕は」

「う、うむぅ～」

こんな変な奴、好きになるのは俺ぐらいなもんだぜ

俺は苦笑いをしつつ燕の頭を抱き寄せて、

「メリークリスマス。大好きだぜ、燕」

なんて言って、おでこにキス

「……きゅう」

「ん？　うわ！？　つ、燕！？」

な、なんて古典的な気絶の仕方をって

「それどころじゃねぇ！　燕、しっかりしろ～！！」

ある家庭の正月風景

「明けましておめでとうございます、お兄ちゃん！」

一月一日、元旦早朝。晴れ着姿の雪葉が、リビングで俺を向かい入れてくれた

「おめでとう雪葉。……え！？」

「……なによ」

リビングには、雪葉の他に俺の目が確かなら夏紀姉ちゃんっぽい人が、ソファーで偉そうに座っていた

「……徹夜？」

「……」

無言で目を逸らす姉ちゃん。図星らしい

「まぁ、正月だし良いと思うけど……母ちゃん達は？」

「お母さんと秋お姉ちゃんは、ご近所さんにご挨拶だって。春お姉ちゃんはまだお部屋みたい」

「フムフム、なるほど」

二人ともマメだからな～

「それにしても晴れ着姿が可愛いな、雪葉」

「えへへ」

「よーし、可愛い雪葉におじさんがお年玉をあげるからね～」

「はい、おじさん！」

「……なんちゅー会話よ」

呆れる姉ちゃんを無視しつつ、雪葉にお年玉（千円）をあげていると、玄関が騒がしくなって来た

「ただいま～」

「……ただいま」

お、母ちゃん達が帰ってきた。出迎えよ～っと

「お帰り、二人と……も」

「ただいま～」

「……ん。ただいま、恭介」

「は、は……」

「？　はくしょん？」

秋姉は、着物の帯からハンカチを取り出し、俺の口許にそっと当てた

「あ、ありがとう。もう大丈夫だよ。それより……晴れ着？」

「ん。……どうかな？」

紺色の着物を着た姉が、俺に向かって優しく微笑む。もはやこれは

「全財産で！」

銀行から下ろして来ないと！！

「え？」

「え？　あ、いや、違くて……めちゃくちゃ似合ってるよ秋姉！！」

美し過ぎる姉。ベストドレッサー賞を狙える逸材だ

「……ありがとう」

「良く似合ってるでしょ～。母さんも頑張ったかいがあったわ～」

「ナイス母ちゃん！」

年始から良い物を見れたぜ

「さあさあ、寒かったでしょう。リビングの方へどうぞ、どうぞ」

「は～い」

「ん」

俺の誘導でリビングへ向かう母ちゃんと秋姉

「……あ、そうだ」

秋姉は、途中で足を止めて、俺にちょっと待っててと言って、自分の部屋へと入る

「なんだろ？」

「母さんリビングに一番乗り～」

疑問に思う俺を無視して、母ちゃんは嬉しそうにリビングへ入っていった

秋姉を待つ数十秒の時。それは短い様で長い、緊張の時間

秋姉は何故、俺を待たせたのだろうか……ま、まさか説教！？

『……去年、調子に乗りすぎ。今年は厳しく行くから』

「……」

あれ？　以外と良くね？

「い、いや、秋姉はそんな事言わないな」

怒る時は怒るけど、その場、その時に怒るので、後になって怒ると言う事はない

と、なると……

『……恭介』

『なに、秋姉』

『着物、一人じゃ脱げない。……手伝ってくれるかな？』

「……正月、最高」

かちゃ

そんな妄想を一人でしていると、ドアがゆっくりと開かれた

「……待たせて、ごめんね」

「ぜ、ぜ～んぜん待ってないよ～」

妄想で時間潰していたとは言えない

「ん。……はい、お年玉」

そう言って秋姉は、俺にトラえもんの絵が描かれたお年玉袋を差し出す

「い、いいよ秋姉！　そんなの貰えないって！！」

秋姉は剣道の道具や身の回りの物を買う為に、夏休みや冬休みにアルバイトをしている。秋姉の事だ、きっとこのお年玉もそこから出ているのだろう

「縁起物だから。……気にしたら駄目だよ？」

「で、でも……」

「……貰って欲しい。嫌……かな？」

寂しそうに微笑む秋姉

「は、はい！　不肖、佐藤　恭介、慎んでお年玉を頂戴致します！！」

どこぞの大統領に手渡されたとしても、此処まで緊張しないだろう震える手つきで、秋姉からの賜物を受け取りござりていざそうろう

「ありがとう、秋姉！」

「うん。……今年も宜しくお願いします」

「こ、こちらこそ宜しくお願いします！」

新年の挨拶をし終え、秋姉は着替える為、再び部屋へ戻って行った

俺もお年玉をしまう為に部屋へと戻る

「……」

幾ら入っているのだろうか？

こういうのは、もちろん気持ちが一番だ。しかし気になってしまうのが人の性

俺は何故か部屋の隅に隠れ、恐る恐る袋を開けると……

「ふ、福沢諭吉先生！？」

暫くご無沙汰だった先生のお顔を拝見し、俺の心臓は高鳴る

「こ、こんな大金を秋姉は……」

家宝に取っておこう。ありがたや～、ありがたや～

などと拝んでいたら、突然部屋のドアがバーンっと乱暴に開かれた

「うわ！？」

「お年玉くれ～！」

開けたのは春菜。寝間着姿で、元気良く部屋に飛び込んできやがる

「ノックしろって、いつも言ってるだろ！」

「忘れてた。と、言う訳でお年玉くれ」

「お前ね……。普通、先ずは新年の挨拶が先だろう」

「明けましておめでとうな兄貴！」

「ああ、おめでとう」

「お年玉！」

「……はいはい」

三千円ぐらいで良いかな

「大切に使うんだぞ」

お年玉袋に三千円を入れて、春菜に渡す

「サンキュー！　勿論大切に使うぜ！！　お年玉で歳明けにやる中華料理食べ放題に行くんだ～」

「……」

ドンマイ、俺

「お雑煮食べる人～」

お年玉袋を、その場で開けようとする妹に、世間の常識を正座で語っていると、呑気な母ちゃんの声が聞こえてきた

「やった、雑炊！　……あ、兄貴～」

春菜は甘えた口調で俺を見上げる

「はいはい。分かった、分かった。雑炊食いに行こうぜ」

「ああ！」

元気良く立ち上がり、部屋を飛び出して行く春菜

「……まったく」

今年こそは春菜をきちんと教育せねば

心にそう決め、俺も雑炊を食べるべく立ち上がった

「恭介はお餅何個～」

リビングへ入ると、母ちゃんは直ぐに声を掛けて来た。台所からは死角になっていると言うのに、どうやって俺の存在に気付いたのだろうか

「1コン、2コン、サンコーン」

「は～い」

「……」

「……」

「……」

「ん。座布団一枚」

一人を除く3人の姉妹達の、冷たい視線が俺を突き刺した

「す、すみませ」

「……秋姉は飽きねえ」

「え！？」

「え！？」

「え！？」

「え！？」

「……駄目？」

残念そうに言う秋姉

「あ、え、ええっと……ね、姉ちゃん！」

「あ、あたし！？　ざ、座布団三枚よ！！　山田君、持って来なさい！」

「は、ははぁ！！　直ちに～」

「三枚……やった」

小さくガッツポーズ

「よ、よ～し、次は春菜君！」

「わ、私か！？　う、うう～ん……も、餅を詰まらせて勿論即死！」

「……」

「……」

「……」

「……」

流石に誰もフォロー出来なかった

それから大喜利大会をしつつ、雑炊を食べて、ノンビリみんなでテレビ

「う～ん。やっぱりお正月はノンビリ出来るわね～」

「……いつもノンビリな癖に」

「ああん？」

「な、なんでもないです」

俺は今年もこの姉に弱いままなのだろうか……

「元気だせよ兄貴」

「……」

妹に慰められる兄。なんとも情けない話だ

今年こそは兄としての威厳を保ち、弟としての尊厳を守って……なんて思っていたら

「こら」

「お兄ちゃん」

「あーにき」

「……恭介」

てな感じで四人は俺を見て、

「今年も宜しく」

なんて言われてしまった

「……うん。宜しく」

ま、色々あるけど、今年も去年と同じように、みんなで楽しく暮らせれば良いやね

「……ちゃんちゃん」

「オチありがとう、秋姉」

2月14日の怪奇

「佐藤先輩、受け取って下さい！」

「あいよ」

「佐藤先輩～、私のも、私のも～」

「オッケー」

2月14日。一般的にはバレンタインデーと言われる日だ。毎年この日の登校時には沢山の後輩達に囲まれ、チョコレートを貰う

「先輩っ！　お願いします！！」

「お願いされましょう」

この日の為に持って来た空のスポーツバッグに、チョコレートを入れてゆく。因みにバッグは三つある。これで足りるだろうか……

「せんぱ～い」

「はいはい」

そしてたどり着く学校。この時点で、既に十七人の子達からチョコを受け取っている。中々のハイペースだ

「あ、佐藤君。あの……」

「ああ、はい。どうも」

「きょ～すけ君！　はいこれっ！」

「ええ、頂きましょう」

校門では、先輩達が俺を待つ。俺にアプローチするタイミングを振り分けしているのか、この時は後輩達は来ない

「恭介君、私も～」

「はいどうも。あ、皆さん、受け渡し時間の終了です。残りは昼か放課後にお願いします」

渡したがっている人は、まだまだ居るが、全部受け取っていたらキリがない

残念がる先輩達を尻目に、俺は教室へと向かう

その教室へ向かうまでの一分と三十秒。此処では他クラスの同級生達が俺を囲む

「佐藤君、お願い！」

「どいて！　私が先！」

「押さないでよ！　佐藤君、佐藤君！！」

数十人の女生徒達に全身を揉みくちゃにされながらも、教室へと辿り着く

乱れた髪や、制服を直しながら自分の席に向かうと、机はチョコレートの箱で埋まっていた

「……相変わらず凄いな佐藤」

前の席のHが呆れ混じりの声を上げる

「まぁね」

軽く流し、箱をバッグしまう

なんだか淡々としているって？　毎年これだから機械的にもなりますよ

「ところで……佐藤」

「なんだよ」

「お、俺のも受け取ってくれないか？」

「テメェが食え」

男からも結構貰ってしまうが、それは全て却下

それから先も、一日中こんな感じ。先生達も毎年の事なので、既に諦めているらしい

そんな長い一日も、終りは来るもので放課後。三つのバッグは、ファスナーが締められない程パンパンになり、これ以上は受け取り不

可って事で終了。後は持って帰るだけ

「……ふう」

合計１１３個のチョコレートが肩に響く

「あ～、あのお兄ちゃん凄いチョコレートの数だぁ。お母さ～ん、今ってあ～ゆ～目が死んでる人が人気なの？」

「そうね～。今は肉食や草食系じゃなく、死人系が流行りなのかも知れないわね～」

「……」

これは泣いているんじゃない。夕日がちょっと目に染みただけさ……

「ただいま～」

肉体と精神にダメージを受けたが、何とか帰宅。玄関には秋姉の靴が置いてあったので、部屋には戻らず、そのまま秋姉に声を掛ける

「秋姉、居る？」

「……うん。今出るね」

そして待つこと数秒。襖が静かに開く

「……おかえりなさい」

「うん、ただいま。はい秋姉。これバレンタインのチョコレートだって」

バッグを肩から下ろし、秋姉の前に置く

「……いつもごめんね、恭介。……あ」

秋姉は申し訳なさそうな顔をし、次に何かを思い出した様に部屋の中へ入って行った

「秋姉？」

「……これ」

戻って来た秋姉が、俺に差し出したのは……

「もしかしてチョコレート！？」

赤いチェック紙に可愛いリボンを付けた小さな箱だ！！

「……うん。よかったら食べて」

「ありがとう秋姉！」

体力、気力ともに回復だぜ！

「じゃ、俺着替えて来るね！　バッグ、秋姉の部屋に入れようか？」

「ん……大丈夫、ありがとう」

にこ

「グハァ！！」

「だ、大丈夫？」

「だ、大丈夫、大丈夫」

「……疲れちゃった？　ごめんね」

膝をついた俺に、秋姉は心配そうな顔で手を貸してくださった

「平気、平気。ちょっと躓いただけだから」

秋姉の笑顔は相変わらず破壊力がありすぎる。このままでは、いつか男をショック死させてしまうだろう……ちょっと大袈裟かな？

「ふぅ……さて、と。それじゃ、今度こそ着替えてくるよ」

「……うん。お疲れ様」

にこ

「グハァ！！」

以下三回続く――

「……うむ～」

ループから抜け出し、部屋に戻った俺。秋姉から貰った箱をテーブルに置き、その前で座る

開けるべきか、家宝にするべきか……って、開けるべきだよな

「そりゃそうだ」

一人ツッコミをしつつ、包装紙を外すと、中には白い箱と一枚のカードが入っていた

「なんだろ？」

カードを手に取り裏返してみると、そこには秋姉の字で一言

いつもありがとう

「……こっちこそだよ、秋姉」

なんだか幸せな気分になり、そのまま箱を開ける

「お、ショコラって奴かな」

中に入っていたのは、銀紙の上に乗り綺麗にトッピングされている小さなチョコレートが八個。デパート等で売ってそうな高級感がある

わざわざ買ってきてくれたんだろうか？

出来れば永久保存しておきたい所だが、せっかくの頂き物だ。素直に食べよう

「いただきま～す」

一個丸ごとパク……

「……あれ？」

今、食ったよな？

口に入れた後の記憶が無い

「……ちゃんと減ってるよな？」

箱を覗くと、確かに残り五個に……

「五個！？」

もう三個食べたのか！？

「う～ん」

食べた記憶が無いのは不可解だが、部屋には俺しか居ない。きっと美味すぎて無意識に食べてしまったんだろう

「……たく」

どんだけ食いしん坊なんだ俺は

「……」

もう一個だけ食べるか

チョコを手に取り、一個丸ごとパク……

「……あれ？」

今、食ったよな？

口に入れた後の記憶が無い

「……ちゃんと減ってるよな」

箱を覗くと、確かに残り二個に……

「二個！？」

何で！？

いつ食べたんだ俺は！

箱を手に取り、中をじっくり探してみるが、やはり残りは二個だ

「い、いったい……」

何だこの怪奇現象は。金田一さんでも解けない謎だ

「……はぁ」

良く分からないが、とにかく勿体ない事をしてしまったな……。残り二個は後でゆっくり食べよう

俺は箱を閉め、ベッドの上に転がり目を閉じた

「ぬぅ……ぐぅぐぅ」

「兄貴！！」

「うわ！？　な、なんだ！？」

事件か！

「ケーキ食おうぜ！」

「はぁ？　……ああ、寝てたのか俺」

ぼんやりとする目を軽く擦り、身体を起こす

「今、帰ったのか？」

俺を見下ろしている春菜の姿は、まだ制服だ

「ああ！　ただいま、兄貴！！」

「おかえり……ふぁーあ」

「でっけー欠伸。それより一緒にケーキ食おうぜ、ケーキ」

そう言い、春菜は持っていた小箱を俺の前で開ける

「唐突だな……お、チョコレートケーキか」

確かこれは不三家のプレミアチョコレートケーキだ。一個４００円ぐらいするんだよな、これ

「しかし一個しか無いぞ」

「金あんまり無くてさ、一個しか買えなかったんだ。半分ずつ食べようぜ」

春菜は、箱に入っていたプラスチックスプーンを手に取り、ケーキを小さく切る

「ほら、兄貴」

「ほらって言われてもな……」

「じゃ、先に私な！　……う～ん、うめ～」

超幸せそうな顔だ

「ほら、兄貴」

次は俺の番だと言わんばかりに、ケーキを乗せたスプーンを俺の口許に持ってくる

「いや、だからほらって言われても……そもそも何でお前は俺にケーキを食わそうとするんだ？」

いつもは一人で食うくせに

「今日はバレンタインで好きな奴にチョコレートあげる日なんだぜ。私は兄貴が好きだからな！」

食わせるのは当たり前だろって感じで春菜は言いやがる

「……お前ね」

多分春菜の中でバレンタインは間違った情報がインプットされているな

「好きってのはな……」

……家族とか、友達とかも含むからな。説明が難しい

「とにかく食べて。兄貴の為に買ったんだぞ」

「は、春菜……」

買う＝食うの春菜が、人にあげる為に食い物を買ってくるのは……半分だけど

「成長したな、春菜。よし！　ありがたくいただこう」

「ああ！」

再びスプーンを押し付けくる春菜さん

「ち、ちょっと。自分で食うから」

春菜からスプーンを受け取り、一口

「……うん、美味いな」

「だろ？」

「ああ、サンキューな」

「へへ……ん？」

春菜はテーブルの上に置かれている箱に目を止めた

「おお、こっちもチョコレート！　いただき～」

「あ、こら、勝手に……春菜？」

チョコレートを口に含んだ後、春菜の動きは止まり、視線は宙をさ迷う

「ど、どした？」

「……」

「お、おい……あっ！」

春菜は無言のまま、チョコレートをもう一個手に取り、俺が止める間も無く口に含む

「……」

「最後の一個が……は、春菜さん？」

「……」

声を掛けても反応がない

「だ、大丈夫か？」

「……あれ？　チョコレートは？」

「え？　い、今食べてただろ？」

「そう……私、食べた……食べた？」

不思議そうに俺とチョコレートの箱を見比べる春菜。奴が一度食べた物を忘れる筈は無い

「こ、これは一体……」

「……」

春菜は無言で立ち尽くし、おもむろにスカートのホックを外した

「って何やってんだお前は！？」

「……寝る」

「はぁ？」

「もう寝る。おやすみ兄貴」

スカートを脱ぎ、春菜は有無も言わさずベッドに転がった。もぞもぞと、ミノムシの様に布団へ潜っていく

「な、なんなんだ？」

いや、確かに俺も秋姉から貰ったチョコレートを食べた後なんだか眠くなった。これは一体……

「ただいま～」

箱を手に取って震えていると、玄関から雪葉の声がする。続いてコンコンとドアをノックする音

「あ、ああ。今出るよ」

謎解きは後にして、取り敢えずはドアを開けるとしよう

「ただいま、お兄ちゃん」

ドアを開けると、雪葉がニコニコ笑顔で待っていた

「おかえり。それと」

雪葉の後ろには四人の子供達

「いらっしゃい」

「こんちは兄ちゃん！」

「ああ、こんにちは」

いつも元気な美月は寒い日でも元気いっぱいだ。ブラウン色のダウンジャンバーが男の子っぽくて可愛いらしい

「こんにちは……」

「こんにちは」

最近少し態度が軟化してきてくれた宮里さん。白いニット帽と雪柄のカウチンセーターが冬らしくて良い

「ふふ。お邪魔します、お兄さん」

グレージーンズに、黒のスタンドカラーコート。若干おっさんぽい気もするファッションだが、綺麗に伸びたストレートヘアーがかえって女の子らしさ強調している

「……ふん！」

失礼な子供は黒をベースとしたチェック柄のフリル付きミニスカッツに、モコモコのセーターを着ている。非常に暖かそうだ

「今日はみんなで来たんだな」

「うん！　それでね、お兄ちゃん……」

雪葉はモジモジとした様子を見せた後、いつも通学に使っている手下げバッグに手を入れて、赤い箱を取り出した

「はい、お兄ちゃん！　バレンタインのチョコレートだよ」

「お、ありがとな雪葉。嬉しいぜ！」

毎年貰っているが、この瞬間は何度体験しても嬉しいものだ

「では僕からも。パッピーバレンタイン」

「お？　風子もくれるのかよ。サンキュー！」

風子からブルーの小箱を受け取って、礼を言う。今度何かお返ししないとな

「兄ちゃん、わたしのも受け取ってくれる？」

「美月もくれんのか？　もちろん貰うに決まってるだろ！」

「やったー！」

チョコレートを受け取ると、美月は俺の腰に抱き着いてきた。元気だねぇ

「あ、あの……こ、これ……」

美月を見ながら、鳥里さんが恐る恐ると俺に近寄り、グリーンの箱を差し出す。その間、一回も俺を見ていない

「あ、ありがとう」

渡した後、ささささと下がってゆく。やはりまだ嫌われているようだ

「……」

最後に花梨だが、奴は下を向いたまま動かない

「……花梨？」

「あ、あたしは、あげたくてあげる訳じゃないからね！　みんながあげてるから仕方なくなんだから！！」

そう言い、ずんずんと俺に近付いて、パンダ柄の小袋を俺の前に突き出した

手に取ると、軽い感触。クッキーか何かだろうか

「ありがとな」

つい撫でてしまう

「っ！？　な、撫でるなぁ！」

「ごめん、ごめん。えっと、みんなありがとな。お陰で今年は良いバレンタインだったぜ」

いつもは秋姉宛てのチョコレートしか貰えないからな……

「あ、そうだ。今からおやつにしないか？　多分今頃秋姉がリビングでチョコレートの整理している頃だから」

そう秋姉は毎年貰ったチョコレートの全てを整理し、何日も掛けて

一口づつ食べるのだ

そして、くれた相手が分かる場合には、その人と会った時に感想やお礼を言い、メッセージが添えられている物にはしっかりと返事を書くと言う素敵過ぎる対応。返事を貰える奴らが羨ましいぜ！

「おやつ？　食べる、食べる！」

「うむうむ」

「……秋姉ちゃん、今年は？」

「うちの学校だけで、１００越えた。学校に居る女子が確か１３８人ぐらいだったから……」

我が姉ながら恐ろしい人気だ

「秋姉ちゃん、カッコイイもんね……」

「ちなみに俺は０だ」

「……」

二人でフゥっとため息

「ま、とにかくリビングに行こうか」

「あ、お兄ちゃん。雪葉着替えて来るから、先に行ってもらって良い？」

「ああ。じゃ行くぞ～」

「うん！」

美月と手を繋ぎ、いざリビングへ！

カチャリ

最愛の妹と別れ、長い旅の末、ついにリビングへと続くドアの前へたどり着いた俺達。ドアを開けて中に入ると、リビングのテーブルには大量のチョコレートが並べられていた

「師匠～」

テーブルの前で思案している秋姉に、美月が飛び込む

「あ……美月ちゃん。こんにちは」

その美月を抱き留め、軽く微笑む秋姉。まるで絵画の様だ……

「こんにちは、秋さん」

「こ、こんにちは……」

「お邪魔しています」

「ん……いらっしゃい」

秋姉は、皆と挨拶を交わし

「……お茶。紅茶で良いかな？」

と尋ねた

「うん！　ところで、師匠。これみんなチョコレート？」

「うん……みんなで食べよ？」

「はーい！」

「ありがとうございます秋さん」

「あ……こ、これ、名パティシエ、ブッチャー作のチョコレートです！」

「す、すごい、チョコレートがいっぱいある。えへへ……はっ！？　あ、あたしは毎日食べてるけどっ！」

「ん。……あ、そうだ。ちょっと待ってて」

秋姉は、珍しくウキウキした様な足どりでキッチンへ行き、銀色のトレイを持って俺達の前に戻って来る

トレイには、秋姉に貰って食べたチョコレートと同じ物が２０個前後あった。ま、まさか……

「……自信作」

これまたレアなＶサイン！　写メだ、写メを取らなくては！！

「凄く綺麗……秋さんが作ったんですか？」

「これは見事だね。食べるのが勿体なくなってしまうよ」

「すっげー！　師匠、すげー！！」

「凄いです……尊敬しちゃいます！」

「ん？　あ！　ちょっと待っ」

携帯を構えている内に、子供達は秋姉のチョコレートを手に取り、口に含んだ

「……」

「……」

「……」

「……」

「……き、君達？」

子供達の動きは止まり、視線は宙をさ迷う

「……どうしたの、みんな？」

「だ、大丈夫か？」

「……兄ちゃん」

お、反応がある！

「なんだか身体が熱いよ～」

そして着ている物を脱ぎ出した！？

「あ、あたしも……」

「……僕も、だめ」

「わ、わたしは……脱ぎます！」

「こ、こら、お前ら！」

慌てて止める俺

「……」

突然の事に、びっくりしている秋姉

「ふぅ、ふぅ、熱い～」

熱いのに何故か、シャツ一枚の姿で俺に抱き着く美月

「みんな、お待たせ！」

そして間の悪い雪葉！

「お、お兄……ちゃん」

「ゆ、雪葉、美月達をなんとか」

「お兄ちゃんのバカァ！　スケコマシ！！」

「ど、どこでそんな言葉を……って、なんとかしてくれ雪葉～」

人物紹介3

そのうち削除な人物紹介

菊水　燕

容姿端麗、成績優秀、品行方正おまけに金持ち。俗に言う出来杉君。カリスマ性も強く、彼女を慕う者は多い

髪型は黒のストレートロング。足が長く細身なスタイルで、実は着物が似合わない体型だったりする

恋愛に関しては古風で一途。尽くすタイプではあるが、理不尽な要求や、嫌だと思う事には応じない強さもある（恋人への許容範囲は広い）

指導力と判断力に優れ、滅多な事では動じない。しかし、恋人にはテンパってしまい、弱気になってしまう。彼女の親友いわくそれが本来の彼女であって、普段の彼女は厳しい環境で育ち、完ぺきを求められた末に作られたペルソナであると言う

弱点は非情に成り切れない性格と元彼。決められた結婚相手が居るが、それを拒否した為、親との関係が余り良くない

徳永　綾音

無機質で寒さを感じる程の美貌と、試合での緊張感から、世間では

氷の女王と呼ばれている……けど、話してみたらただのセクハラ大王。そのせいで勝手なイメージを描いて近寄って来た人達は、イメージを崩されて離れて行く

家族や親戚構成が凄く、父は警視正、母は有名な小説家、兄は弁護士で従兄弟に芸能人二人。それと叔父に百店舗以上の店を経営している社長さんがおり、おまけに部活のアドバイザーにはかつて土佐の白狼と呼ばれた剣道家、日永　宗院（無職）がいる

そんな宗院と名字が似ていると言う理由で目を付け、彼をからかい始めたが、結構からかいがいがあったので今ではお気に入り。最近出来た友達もお気に入り

セクハラは気に入った人にしかしないので、され始めたら好感度が高いと思っても良い。基本的には相手を気遣う優しい人でもあるが、相手には余り通じない。と、言うより通じさせようとも思っていない

自由に楽しく生きている綾音は、様々な事に縛られている燕とは真逆の性質を持っているので、相性は良くない。そんな二人にある程度好かれている主人公は凄いと思う

直也

短く切り揃えられた髪と笑顔が爽やかなサッカー少年。中学生とは思えない程の純粋さと、時折見せる大人っぽさで年上年下問わず女性に凄く人気がある

運動神経も良く、真面目に練習をする事から、部活内ではエースとなっている。そんな彼は二年前にあった球技大会で、春菜のプレー

を見て彼女に一目惚れ。それから緊張しつつも春菜に話し掛けてみると、気さくで明るい性格に益々好感を持ってしまう

基本積極性は無いので、恋愛に関しては受け身になってしまうが、それでも頑張って春菜にアプローチをしている。しかし全く通じず、最近では逆に嫌われてしまい、意気消沈。だが春菜のお兄さんに慰められ、彼に頑張ると誓う。そして立派な男になろう決意をし、現在は様々な事を努力をしている

尊敬する人は春菜のお兄さん。性格は正直者で隠し事が出来ないが、人に聞かされた秘密はどんな事があっても守る為、周りからの信用は高い。本人は出来れば秘密を聞かさないで欲しいと思っている

主人公に認められた数少ない漢

第１１０話：花の逆上がり

「お、兄貴。寿司いつ食べに行くの？」

日曜日の昼下がり。すっかり寝てしまった雪葉に布団を被せ、部屋に戻ろうと一階へ降りると、廊下ですれ違った妹が素っ頓狂な事を言って下さりやがりました

「突然何を言っているのだね、君は」

「前、カラオケん時、言ってたじゃん。俺と飯食いに行けば良いんだよって」

「その後バイキング食いに行っただろ？」

兄ちゃんにはあれが精一杯だ

「え～、あれはあれじゃないの？」

「あれじゃない。俺は八月迄に金貯めないといけないんだよ」

「なんで？」

「秋姉のインターハイを見に行くからだ」

今年の会場は大阪。来週から週払いバイトで二、三万稼がりゃなりません

「母ちゃんに連れてってもらえば？」

「まぁ、それも考えたんだけどな。やっぱ自分の金で行くのが、真の追っ掛けと言うものなのだよ」

実の姉を追っ掛けて、どうすんだって気がしない事もないが

「ふ～ん。良く分からないけど大変なんだな。ちぇ、兄貴と寿司食いたかったのに」

「そのうち連れてってやるよ。それより春菜」

「なんだ？」

「お前は何で素っ裸なんだ？」

「ああ。ちょっと汗かいたからシャワー浴びようとしたら、急に便所行きたくなってさ。だから」

「バスタオルぐらい巻きなさい！！」

「は、はい！」

俺の怒鳴り声に春菜は慌てて洗面所へ飛び込んで行った

「……全く」

何を考えてるんだ、あいつは

思春期を通り越して、大阪のおばちゃん（偏見）並に羞恥心が無い

ま、まさか学校でもあんな感じで……

ピンポーン

学校での妹を心配していると、正解音が鳴る

「やっぱり！？」

今度、直也君を問い詰めよう……って、インターホンだわな

「はいはい、今出ますよ」

よっこいしょっと靴を履き、ドアを開ける

「はいよ……花梨？」

開けた先に居たのは、フリフリのスカートにシャツを着た、いつもより一回り小さい花梨さん

「あ、お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん！？」

どうしたんだ、こいつ！　熱でもあるのか！？

「……お兄ちゃん？」

俺を見つめる、つぶらな瞳。いつもの邪気が全くない

「えっと……もしかしてなづなちゃん？」

「うん！　こんにちは、チカンさん」

ぺこりと頭を下げる、なづなちゃん

「あ、ああこんにちは」

俺も慌てて下げる。しかし何故お兄ちゃんからチカンに言い直したのだろうか……

「今日は、どうしたんだい？　雪葉を呼びに来たとか？」

「今日はチカンさんにお願いがあって来ました」

「俺に？」

一体なんだろう？　チカン呼ばわりをされつつ、なづなちゃんの言葉を俺は待った

花の逆上がり　2

さて、なづなちゃんに連れられ、やって来ました二丁目公園

少し狭いが辛うじてサッカーも出来るグランドの奥に低い階段があり、その階段を上がった先に滑り台等の遊具が置いてある

「じゃ、行こうか」

「うん」

途中なづなちゃんに事情を聞いていたので、俺はそのまま奥を目指して歩く

「しかし鉄棒ねぇ」

「うん。お姉ちゃん唯一の弱点なんです」

「ふーん。お、やってるやってる」

「お姉ちゃ～ん」

「え？　なづな？　家に帰ったんじゃ……って何よ！」

「何んだよ！？」

なづなちゃんと一緒に近付く俺を見て、花梨はいきなり怒声をあげやがった

「な、何であんたがなづなと居るのよ！？」

「なづなが呼びました！」

褒めてって顔で花梨を見上げる、なづなちゃん。花梨は困り顔で俺となづなちゃんを見比べた

「……お姉ちゃん？」

「う……あ、ありがとうなづな」

「はい！」

花梨は、なづなちゃんには辛うじて笑顔を見せたが

「……で、何か用？」

俺には冷たい眼差しを向けて下さった

最近、こいつの態度が益々悪くなってるのは気のせいだろうか……

「逆上がり出来ないんだって？」

「う……な、なづなに聞いたの？」

「教えてやるよ」

「いらないわよ！」

「今度、テストあるんだろ？」

「うっ！？　……な、なづなぁ」

「チカンさんに教えてもらおうよ、お姉ちゃん」

「お、教えてもらえって言われても……」

「遠慮すんなよ」

「してないわよ！」

「よし。じゃ、やってみよう」

「頑張って、お姉ちゃん！」

「な、なづな……うぅ、なんでこんな事に……」

明らかに嫌そうだが、しぶしぶ花梨は鉄棒を握る

「よし行け！」

「煽らないでよ！　……えい！！」

ずさっと両足を斜め前に突き上げる花梨さん。これは逆上がりじゃなく、ドロップキックだ

「腕が伸び切ってるんだよ。後、足は斜めに蹴るんじゃなくて、頭上目指して蹴り上げる様にするんだ」

「こ、こう？　……えい！」

バランスを崩しながら、ずさっと右足を斜め前に突き上げる花梨さん。これでは逆上がりでじゃなく、南斗獄屠拳だ

「う～ん、ちょっと変なんだよな。どれどれ」

お手本って事で花梨の隣にある、ちょっと高めの鉄棒の前へ行く

「よっと」

そして軽く逆上がり

「チカンさん、凄い！」

「で、出来て当たり前よね。大人だし……」

「はいはい。じゃ、やってみな」

「……えい！」

ずさっと両足を斜め前に突き上げる花梨さん。これでは逆上がりじゃなく……ってしつこいか

「そうだな……先ずは補助するから、形を覚えよう」

花梨の後ろ横に立つ

「腕を縮めてな、こうやって腰を……」

「きゃ！？　お、おしり触らないでよ！！」

「あのなぁ……じゃ足持つから鉄棒から手を絶対に離すなよ」

今度は前に回って、花梨の両足を支える

「行くぞ～」

足を上げて鉄棒に腹を触れさせて……

「足はこう、んで腕は縮めたまま」

「う、う～～」

「そんで、ぐるんと！」

見事な一回転。逆上がり完成！

「どうだ？」

「……出来た？」

感想を尋ねると、逆に尋ねて来た

「形にはなってたぞ。何となく分かったか？」

「……多分」

「よし、じゃあ行け！」

「う、うん……えいっ！」

腹を軸に、鉄棒をくるりと回る花梨さん

「おお！　やったな、花梨！！」

そして流石、俺

「う、うん！　出来た！！」

「凄い！　お姉ちゃんもチカンさんも凄い！！」

手を合わせ、三人できゃっきゃと喜んでいると、サイレンの音が聞こえた

「ん？　パトカー？」

車は段々近付いて来て、公園の前で止まる。そして現れる組織の犬

「お、お巡りさん、あれです！　あれが女の子をべたべた触っていた変態です！！」

「通報ありがとうございます！　……ん？　あ、あいつは！？」

「……俺、嫌な予感してきちゃったな」

また、いつものパターンか……

「き～さ～ま！！」

「じゃ、俺は帰るよ」

逃げる準備完了

「ありがとうございましたチカンさん！」

「……あ、ありがと」

「うむうむ。またな、二人とも」

そしてダッシュ！！

「ま、待て、変態がぁあああ！！」

「誰が待つかよ！」

そしていつものように始まるトムとジェリー。今日は距離があるので余裕だ

「あ！　チカンさんがお巡りさんに追われてる！　お巡りさ～ん。チカンさんは、お姉ちゃんのおしりを触っただけで悪い事してませ～～ん」

「ち、ちょ、な、なづなぁ！！」

「……」

「……」

僕と彼との時が止まった

「……あははは」
」
「き、貴様ぁあああ！」
「ひぃいい！？」
組織の犬、スピードアップ！！
ま、まずい。このままでは追い付かれる！
逃げながら携帯電話を取り出し、雪葉の携帯へピポパ
「はい、もしもし？」
「ゆ、雪葉！　作戦九、出来るか！？」
「お、お兄ちゃん！？　う、うん大丈夫！」
「分かった！　今からそっちに向かう！！」
「はい！」
それから全力でひたすら走り、我が家の前へ
「ハァハァ、ハァハァ……つ、着いた！」
「ヒィ、フゥ……や、やっと諦めたか」
家の前で足を止めた俺に、ゆっくりと近付いてくる組織の犬。そして

「今度と言う今度は、ただじゃ済まさんぞ……あ、あの、どいて頂けませんか？」

「……だめ」

その間に立つ秋姉！

「あ、貴女の後ろにいる男は歴史的ロリコン性犯罪者で！」

「……誤解」

「で、ですが目撃者が」

「……呼んで」

「え？」

「……目撃した人。呼んで」

「う！」

「う！」

秋姉が怒っている！？

「そ、それは……」

「……」

「そ、その……」

「……」

「で、ですから」

「……」

「ほ、本官は職務に戻ります！　し、失礼しました～！！」

逃げて行く組織の犬。女神の勝利だ

「あ、ありがとう秋姉」

「ん。……もう大丈夫？」

「うん！」

「お兄ちゃ～ん」

2階の窓から我が妹が手を振っている

「作戦成功だ、ありがとな雪葉！」

「えへ」

作戦九。それは禁断の最終奥義

【秋姉に助けてもらう！】

今日の眼力

秋＞＞＞＞＞＞な＞＞＞＞花＞＞俺≧雪

すずかけ台

第１１１話：俺の孤独

「美少女と仲良くなるにはどうしたら良い？」

月曜日の朝。教室へ入り席に座ると、クラスメートのSが俺に近付き、いきなり聞いて来た

「セーブを小まめにやって、好感度上がる選択肢でも選べば？」

「三次元の話！　触れる女！！」

「俺に聞くなよ」

小学生の頃、３年連続で良いお友達でいたい人１位を獲得した俺に、何を期待しているんだこいつ

「この間駅前で見たぜ。すげぇ綺麗な人と仲よさ気に歩いてたのを」

「……」

記憶にございません

「見間違いだろ？」

「見間違うかって。女の方はサングラスかけてたけど、超スタイル良かったし、目立つし」

「……ああ、あの人ね」

綾さんの事かって、結局目立ってたんかい！

「佐藤の姉ちゃんは秋さんと夏紀様だし、なんか美女が寄って来るコツを知ってんだろ？」

何で夏紀姉ちゃんには様付け？

「……あのなぁ、二人は家族なんだからコツも何も無いだろ。サングラスの人も、仕事場の知り合いで」

「じゃあ、お前！　鳴神の生徒会長はどうなるんだよ！！」

「うぉう！？　な、なんだよいきなり」

俺らの話を聞いていたのか、突然声を荒げて会話に参加する後ろの席のＢ君。目が血走っている

「なんだ鳴神って！」

「鳴神様がどうしたのよ！？」

「な、鳴神の生徒会長って……ま、まさかあの、き、菊水……」

鳴神と言う単語で集まって来るクラスメート達。つか、どんだけ暇なんだこいつら

「私、見たんです。二週間前……」

お前は稲川　〇二か、都市伝説か、と突っ込みたくなる雰囲気と口癖で語り出すＢ。そのＢの言葉を、一字一句逃さんと耳を澄ますク

ラスメート達

「……平和だねぇ」

天下太平事もなし。今日もお江戸は日本晴れってか

たいして面白そうな話でも無いし、俺は頬杖をついて、ぼけーっと

空を眺める

しかし、有名なんだな燕は

『君に見つめられると何だか恥ずかしくなる。でも……幸せだよ、

恭介』

まぁ、なんだかんだ言っても可愛いし……

『だ、だからって、そんなに見つめるな～』

……ちょっと変な奴だけどな

「も、元彼ぇえ!?」

「うわぁ!?　な、なんだ!?」

突然起きたクラスの怒声にビックリしＢの方を見ると、あら素敵。

殺意に芽生えてそうなクラスメート達の視線

「ほ、本当に、菊水様があの死人を元彼と?」

「ああ……信じられない気持ちは良く分かる。俺も自分の耳と記憶

を信じるまで、二週間も掛かった」

「……なぁ、俺、今泣いてるか？」

「秋さん、夏紀様、サングラスの君、春菜さんに雪葉ちゃん……」

クラスメート達は怨みの篭った声で、ぶつぶつと呟いている。……怖い

「……今日、五寸釘買って帰る」

大工さんですか？

「俺は藁人形」

「じゃ私は金属バット」

「俺は出刃包丁」

「って段々怖くなってるな！？　言っとくけど、俺もう燕にフラれてるから！」

命の危険を感じ、そう叫ぶと

「だよな～」

あっさり信じてくれた！

「秋さんの弟だって事すら殺したいのに、菊水さんまで彼女だったら殺してるよ～」

「にこやかな顔で物騒な事を言うなよ！」

な、なんだこの呪怨は。まさかこんなにもクラスメート達から恨まれていたとは……

「……良いさ、別に。どうせ男は孤独な旅人さ」

家に帰れば秋姉が居る。ならそれでいいやん？

「……でも」

ショックを受け一人で引きこもっていると、A子さんがぽつりと呟いた

「佐藤君なら分かる気がする」

おっ！

「……確かにな。他の奴が菊水さんの彼氏だって言っても信じられねーけど、佐藤ならもしかしてって思っちまったわ」

おお！

もしかして俺って、モテる隠れ要素なんかがあったりするのだろうか

「なんせ」

「……なんせ？」

何だろ？　良く見るとハンサムボーイだとか？　実は目が輝いてるとか！

ワクワクしながら耳を澄ませる。すると

秋さんの弟だからな！

秋さんの弟だからよ！

なんて一糸乱れぬクラスメート達の声が、教室内で響き渡りました。

終わり

今日の凹み具合

俺＞＞＞＞＞＞S＞＞B

「てゆーか、結局美少女と仲良くなる方法は？」

「……お前も美人で素敵な姉ちゃんを持てば良いだろ」

「どうやって！？」

「知るか！」

妻夫木聡

第１１２話：家の豆知識

意外と知られていないが秋姉は落語が好きだ

《へい、はっつあん。隣の家に垣根が出来たんだってね！　へ～》

「……」

《はっつあん、はっつあん、別の家に塀が出来たんだってよ！
かっこい～》

「……」

《猫が寝転んだ後、布団が吹っ飛んだ！！》

「……」

一見すると、笑い声一つなく醒めているかに思えるが、その表情は柔らかく、口許も綻んでいる筈

「秋姉」

試しに後ろから声を掛けてみると

「あ……。恭介、この番組おもしろいよ？」

やっぱり楽しそうだ！

「そうなんだ。始まったばかり？」

「……終わりの方」

「そっか。残念」

「……録画中」

秋姉はピースサインをしながらそう言い、後で貸すとも言ってくれた

「今度、貸してもらうね」

「……うん」

と、まぁ、こんな感じ。ちなみに笑点なんかも良く見ている

意外と言えば、春菜もまた意外な部分があったりする

「なぁ兄貴」

「なんだ、妹」

「最近掃除してるか？」

「特別してるって感覚は無いが、ある程度はしてるぞ」

「ふ～ん……していい？」

「駄目」

「なんでだよ～」

「落ち着かないから」

そう、春菜は掃除好きなのだ。特別綺麗好きって訳でも無いのに、なんとも不思議な趣味を持っている奴である

「じゃ耳掃除だ！」

「間に合ってます」

「ケチ！！」

「夏紀姉ちゃんの部屋でも掃除してこいよ」

「……結構鬼だよな兄貴って」

「そうか？」

「ちぇ、風呂掃除でもしてくるよ」

「ああ、偉いぞ」

後でホットケーキでも焼いてやろう。それにしても、こんな偉大な兄を鬼呼ばわりするとは……

本物の鬼ってのは乱暴で酒好きで、やたら偉そうな――

「あ～眠い。コーヒー入れなさい」

「ほんと息をする様に命令しますね、姉様は」

しかしこんな鬼にも弱点はあるもので、まず姉ちゃんは秋姉に凄く弱い。苦手な訳じゃないみたいだが、どうにも逆らえないらしい

後は

「ワインねぇ……」

ちょうどやっていたワインのCMを見て、姉ちゃんはうんざりと呟く。そう、姉ちゃんはワインが苦手なのだ

姉ちゃんには一人で日本人の平均飲酒量を2~3%上げていると言う有名な逸話があるが（適当）その中にワインは含まれていない

前に一度聞いた所、あれは酒じゃない的な事を言っていた

『ワインを飲まない人間は、人生の半分を損しているね』

二年前、姉ちゃんとちょっと良い雰囲気になった大学生が居たのだが、二人でレストランへ行った時に、彼はそんな台詞を言ってしまった。その台詞に対し、姉ちゃんは

『なら貴方と一緒に居ると、人生を半分損してしまうって事ね』

なんて言って、料理も食べずレストランを出て行ったらしい

とにかく、そのくらいワインが嫌いなようだ

「はい、コーヒー」

「ご苦労」

相変わらず感謝のカケラも無い。足を組んで椅子に座る姉ちゃんは、シャロン・ストーンかってぐらい絶妙な足の組み替えをし、コーヒーを一口

「……恭介」

コーヒーカップをテーブルに置き、姉ちゃんは俺をジっと見つめる

「な、なんだよ」

マズイとか言う気か？

「明日からアンタがアタシのコーヒーを入れなさい。……成長したわね」

そう言い、姉ちゃんは優しく微笑んだ

「ほ、ほんと!?」

や、やっと主に認められた！　って

「どういう設定だよ!?」

「朝起きてアタシが眠そうだったらコーヒー。元気そうなら麦茶。風呂上がりだったらビールよ」

「いつもと変わらないじゃん！」

てゆーか、いつもやらされている俺が可哀相

「今日からは自主的にやるのよ。……さて、そろそろ出掛けようかしら。母さんに夕食までには帰るって言っておいて」

「はいはい」

「あ、台所の戸棚に貰ったクッキー置いてあるから雪達と食べなさい」

「あいよ」

リビングを去って行く姉ちゃんを見送り、俺は戸棚へと向かってみた

家の豆知識　2

「キッチン、それはキッチリキッチン～」

新曲を作りながら戸棚を物色していると、見覚えがある真っ黒い箱が下段に収納されていた

「これは……」

南国名物、黒い恋人。チョコレートクッキーの中に黒蜜を挟んだ、甘い甘いお菓子だ。雪葉が好きなんだよな、これ

初めて食べたのは、確か四年前――

～若かりし頃の回想～

『うわぁ、このクッキー美味しい！　美味しいです、お兄ちゃん！！』

四年前の夏。黒い恋人を初めて食べた雪葉は、よほど美味しかったのか少し興奮していた

『ああ、凄く美味しいな雪葉。ほら、良かったらお兄ちゃんの分もお食べ』

嬉しそうにする雪葉をもっと喜ばしてやろうと思い、何気なく言った俺の言葉に雪葉は少し迷った顔をし

『雪葉はもう満足です。お兄ちゃん、雪葉の残りの分、食べて下さ

い！』

と、ニッコリ笑顔で言って、俺へクッキーを差し出した

『い、いや雪葉が食べなよ。兄ちゃん甘いの少し苦手だから』

『……ほんとですか？』

『本当ですよ』

『じゃあ……いただきます！』

『うんうん』

「……うむ～」

今思えば、雪葉は昔から俺の事を気遣い、立ててくれていたな。昔は常に敬語だったし……今も真剣な時や、テンパったりすると敬語になってしまう様だけど

「お兄ちゃん？」

なんて事を考えてると、俺に声が掛かった

「ん？　ああ、雪葉。何か取りに来たのか？」

「うん。喉が渇いちゃったから、麦茶を取りに来たの」

雪葉は、とことこと冷蔵庫の前へ行き、ドアを開いて麦茶を取り出す

「そっか。ほら、コップ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

笑顔の雪葉が抱える麦茶入りポット。夏のコマーシャルは、これで決まりかもしれん

「どうしたの、お兄ちゃん?」

「いや、なんでも。それより夏紀姉ちゃんが、クッキーくれたぞ。一緒に食べよう」

「あ！　黒い恋人!?　うん！」

今も昔も可愛い雪葉。この子もいずれ恋をし、俺から離れて行くだろう

でも、俺にとってお前はいつまでも大切な妹だ。お前に何かあったら飛んで助けに行くからな

俺の側に寄る雪葉の頭を撫でつつ、なんで俺が娘を嫁にやる感情に包まれなきゃならないのか、疑問に思いながらリビングへと戻る事にした

今日のおやつ量

春＞＞＞＞俺≦雪＞＞秋

つづきあり

第１１３話：秋の挑戦

「兄貴はフランス料理とか作らないのか？」

火曜日の夜。テーブルで食後の紅茶を楽しんでいると、向かいで一緒に飲んでいた春菜が、そんな事を聞いてきた

「フランス料理？　あんまり興味無いな」

難しそうだし

「ふ～ん。……作る気ない？」

「フランス料理ったって色々あるけど……何か気になってる料理があるのか？」

「なんか肉使う奴。肉焼いて、ホワイトソースがどうのこうのって言ってたぞ」

ホワイトソースか……

「今度作ってみても良いけど、作るなら材料費はお前持ちだからな」

「え～、ただで作ってくれないのかよ～」

「お前ねぇ」

コイツには一度、等価交換と言うものを教える必要があるようだ

「とにかく、ただじゃ作らないぞ。クイズに勝って母ちゃんにでも頼めよ」

「ちぇ。……秋姉？」

「え？」

春菜の視線を追い、振り返ると、秋姉がエプロンを外しながらこっちを見ていた

「洗い物ご苦労様、秋姉」

「ん。……フランス料理」

ビクっ！　確認するように言った姉の一言で、春菜の身体が跳ねる

「……食べたい？」

「や、やっぱいいや！　フ、フランス料理とか良く分かんねーし！！」

「……がんばる」

「ええ！？　で、でもほら、む、難しいんだろ！　た、大変らしいし、なっ兄貴！！」

「そ、そ、そうだよ、難しいよ！　大変だし、お金掛かるし」

必死で断ろうとしている俺達を見て秋姉は微笑み

「……まかせて」

「よ、良かったな春菜！　秋姉に作ってもらえるぞ～」

絶句している春菜に、わざと明るく言い、俺は立ち上がる

「じゃあ、僕はこの辺で失礼しますね」

お前を見捨てる兄ちゃんを許しておくれ……

「あ、兄貴も食べたがってたよな、さっき！」

ブルータス！？

「お、お前っ！　あ、いや……ふふふ」

春菜に文句を言おうと思ったが、秋姉の前でそれは出来ない。なので、上手く断ろう

「俺は良いよ。材料費だって掛かるんだ、お前だけ秋姉に食べさせてもらいなさい」

なんて、良い兄貴を演じつつリビングを脱出

「恭介の分も作るよ？」

出来なかった！

「で、でも二人分だと大変だし！　それにもうすぐインターハイが……」

「……どんとこい」

胸をトンっと叩き、力強く頷く姉を見て、私は逃れられない運命があると言う事を知りました

秋の挑戦　2

トントントントン

リズミカルに鳴る音は、ブロッコリーやパセリを刻む包丁の音

ジュージュー鳴るのは、肉を焼くフライパンだ。香ばしい匂いが食欲をそそる

ここはキッチン、大魔境

勝負服である割烹着を着て、フランス料理に挑戦している秋姉

「頑張ろうね、秋姉」

「……うん」

サポートは料理本と俺

忙しい中、秋姉が俺達の為に作ってくれるのだ、反対など出来やしない

ならば俺は料理のフォローをし、食べれる物に仕上げる。それだけさ……

「ホワイトソース……ワイン、小麦粉、バター、牛乳……唐辛子」

唐辛子!?

「あ、秋姉？　ホワイトソース作るのに一味唐辛子は入れない方が良くない？」

「……ひと刺激」

「で、でもほら、初めての料理でしょ？　最初は基本に忠実な方が良いんじゃないかな？」

「ん。……そうかも」

秋姉は唐辛子の蓋を閉めて棚に置いた……と思ったら、返し手で！？

「ケ、ケチャ」

早いっ！！

秋姉の左手が閃光の様に煌めき、ホワイトソースは赤く染まった

「……基本はケチャップ」

なんで！？

「……しお」

秋姉は次に、ソースへぱっぱと軽く塩を振り

「……コショウ」

コショウを軽くかける。色はともかく、美味しそうだ

「……砂糖」

「砂糖……砂糖！？」

「……バルサミコ酢」

「バルサミコ酢！？」

「……イカスミ」

「イカスミ！？」

「……絶品」

「絶品！？」

電光石火な秋姉の手は、止める事すら叶わないって、なんでイカスミが家に……

「……完成」

ソースは甘生臭いと言う新境地を開拓し、完成してしまった

「す、凄い……」

鍋の中で暗黒が渦巻いている

「……次はカボチャ」

「あ、お、俺が用意しておくよ」

「ん……ありがとう」

今日のメニューは、サーロインステーキとカボチャのテリーヌ

バターで炒める甘いカボチャと、ガーリックと一緒に焼く香ばしいステーキ、そしてどんな味かするのかすら想像つかないホワイトソースをかけ、完成する究極の一品

「……私、お肉を見ているね」

「うん」

秋姉は、肉をひっくり返し、火を強める

……今のうちに、さっさとカボチャを作ってしまおう

「……ガーリックに敢えて混ぜようバルサミコ」

俳句!?

「あ、秋姉。春菜はシンプルな味を好むと思うんだ、だから今回はこれで終わりしよう?」

「……ん」

ちょっと残念そうだが、秋姉は頷いてくれた

そして――

「完成！！」

で、出来た……ソースはアレだが、初めて秋姉の手から結構美味しそうな料理が誕生したぞ！！

思わず感涙を流す俺を、秋姉は不思議そうな顔で見つめ

「……あなたが手伝ってくれたから、凄く美味しそう」

と、微笑んでくれた

「……うん」

これで俺の役目は終わった。後は身を任せる、それだけさ……

秋の挑戦　3

「……サラダ」

前菜であるサラダと、主食であるパンがテーブルに並べられ、水曜日の夕食が始まろうとしている

『またまた助かっちゃう～』

母ちゃんは、のんきな声をあげ、雪葉を連れて服を買いにデパートへと行った。夕食も食べてくるらしい

『お兄ちゃん……』

『……雪葉』

『……また、会えるよね？』

『ふ、当たり前だろ？』

『うん……。うん！』

そんな感動的な別れのシーンを回想しつつ、いよいよ立食の時間

審査員は三人。先ずは鋼の胃袋を持つ女、春菜！

「……はぁ」

続いてドSな酒飲み、夏紀！

「……なんでアタシまで」

そして俺！

「そんなに心配するなって二人とも。俺も手伝ったけど、結構良く出来たから」

「……」

「……」

疑うような目で二人は俺を見る。温度が感じられない屍の目だ

「……お待たせ」

そして、メインである肉料理がキッチンから現れた

「……あれ？」

視界がぼやける

コト。軽い音を立てて、テーブルに置かれる皿

見下ろすと

「……」

涙が止まらない

両隣を見てみると

「……」

「……」

声も出さず泣いていた

「……飲み物。麦茶で良い？　姉さんはビール？」

「そ、そうね。……ビールが良いわ」

「ん」

早く食べて欲しいのだろう。いそいそとキッチンへ戻って行く秋姉

「……染みるわ」

「……染みるね」

「目が痛て～よ、兄貴～」

残された俺達は、涙を拭きながら料理を改めて見る。このメインディッシュは目に染みるのだ

「……この、上にかかった生臭いソースは何？」

「……イカスミ風バルサミコ酢和えケチャップ仕立てのホワイトソース」

「そう……」

姉ちゃんは納得した顔をし、ステーキにナイフを入れる

「ミディアムレア……お肉は柔らかいし、上手く焼けているわ」

「だろ？　今回特殊なのはソースだけだ」

本来ニ人前だった肉は、三人分に切り分けられている為、少し小さい。しかし、その分、肉に対してソースの量が多い

「……恭介」

「……なにさ」

「アタシが倒れたら、寝不足で調子が悪そうだったとアキに言いなさい」

「ね、姉ちゃん」

ま、まさか率先して試食を……

「……たまには姉らしい事をしてあげないとね」

そう言い姉ちゃんは、うっすらと笑いました。それはまるで仏の様に穏やかな笑みでした

「……行ってらっしゃい姉ちゃん。ご無事をお祈りします！」

「な、夏姉……がんばって！」

「ふふ。姉って、因果な生き物よね……」

敬礼する俺らを一瞥し、姉ちゃんはフォークを使って肉を口に入れる

「……」

「……姉ちゃん？」

動きが止まってしまった

「……ゆでたまご好きやで～」

「ね、姉ちゃん？」

「いや、こりゃ洒落にならんわ、ほんま。訳分からんって」

姉ちゃんが何故か突然、板東　〇二に変わってしまった！

「……と言うか本当に訳分からない。自然界に無い味じよ、これ」

あ、戻った

「野菜やパンと一緒に食べればどう？」

「……食べてみなさい」

「……春菜君。先程から君のお腹が鳴っている様ですが？」

「あ、兄貴……私の事、嫌いか？」

「好きだよ。だから早く食べなさい」

「鬼っ！」

涙目で俺を睨み、覚悟を決めたのか春菜はフォークを手にする

「よし、いけ！」

「うう……食べる！！」

パクっと一口、春菜さん

「……あれ？」

目をパチクリ、春菜さん

「だ、大丈夫か春菜？」

「結構、大丈夫だぞ」

春菜は頷き、もう一口食べる

「……うん。超マズイけど大丈夫だ」

あらハッキリ言う子だこと

「……そうよね。味はともかく頭痛も吐き気も無いし」

「……よし、俺も！」

覚悟を決めて食ってみる

「……うん。まぁ、確かに」

普通にマズイだけだ

「これくらいなら大丈夫だね」

口の中に膨らむのは肉の旨味、ガーリックの香ばしさ。そしてミャンゴニキな味……ミャンゴニキってなんだ？

「なんて言うか……ミャンゴニキな味よね、これって」

「そうだな……ミャンゴニキな味だよな、兄貴」

姉ちゃんや春菜も頷きながら、不可思議な言葉を言っている

「……てか、ミャンゴニキってなにさ」

「……さぁ？」

「なんか頭に浮かぶんだよな……ミャンゴニキ」

三人で悩んでいると、キッチンとリビングを繋ぐドアがゆっくりと開く

「……待たせちゃって、ごめんね。ビールが冷えてなくて……あれ？」

「ごめん、秋姉。もういただいてるよ」

「腹減って、待てなかった！　このカボチャとかうめ～！！」

「やるわね、アキ。さすがアタシの妹よ」

秋姉の手から食べれる物が生まれた。その偉業と喜びは俺達を笑顔にし、食を進ませる

「あ……うれしい」

そして秋姉の笑顔！　もうこれ以上望む物なんてない

「私、ビール買ってくるね」

「あ、もういいわ……よ」

よほど嬉しかったのか、秋姉は割烹着を着たままキッチンを飛び出して行ってしまった

「……あんなに喜じゃって。なんだか騙してるみたいで、悪いわ」

「う～ん。そんな事ないんじゃない？　秋姉は勘が良いし、俺達が本当に喜んでいたのは分かると思う」

それにこの一歩は偉大なる一歩

約四年。ここまで来るのに四年も掛かってしまったが、初めて秋姉は、わりと食べれる物を作ってくれたのだ

「俺はこれからも秋姉の料理を見守り、食べ続ける！」

目が死んだままでも構わない。俺の輝きは、秋姉だ！！

今日の決意

俺＞＞＞＞＞＞秋＞＞＞＞春≧夏

「……それにしても、相変わらずアキに弱いわねアンタ」

「姉ちゃんの料理とかだったら、絶対食わないけどね」

「あぁん！？」

「あ、ご、ごめ……ぎゃ～！！」

「……バカだよなぁ兄貴も」

ツーリング

第１１４話：風の音

六月最終日。学校の帰り道にある古本屋で立ち読みしていると、後ろから声を掛けられた

「お兄さん」

「ん？　お、風子。本でも買いに来たのか？」

振り返ると、俺を見上げる風子の姿。深く被ったチェック柄の帽子と、色が落ちたジーンズが良く似合っていて、相変わらず男の子っぽい

「今日は文庫本がセールをやると聞いたからね。見に来たんだ」

「そっか。じゃ、店見たらマックでも行くか？」

なんか久しぶりにポテトが食いたくなって来た

「お誘いありがとう、喜んでお付き合いさせてもらうよ。でも……もう少し可愛い格好をすれば良かったかな」

「ん？」

「ふふ、なんでもないよ。ではまた後ほど」

そう言い、風子は文庫本コーナーの方へと向かっていった

ちなみに俺は趣味の本コーナーで、読んでる本は年刊将棋太郎だ。

最近、雪葉に将棋で負け続けているからな……

んでもって15分後

「なるほど、これで詰みっと……」

「お兄さん」

「お、風子。ちょうど良い時に来たな」

本を閉じ、棚に戻す

「そっちはもう良いのか？」

「うん」

「そうか。じゃ行くべ」

クーラーが効いた店内を出ると、真っ赤に燃えた太陽が俺達を照らす

「あちーな」

「いよいよ本格的な夏だからね。お兄さんは夏の予定、何か決まってる？」

「大阪行って秋姉の試合を見に行くぞ。後は家族旅行だな」

学校のダチ達とも何か約束をした気がするが、それはどうでも良いやね

「秋さんは、いよいよインターハイ。何だか僕まで緊張してしまうよ」

「よかったら応援してあげてくれな。秋姉は、その応援を必ず力にするから」

「うん」

そうこう話をしている内に、駅前のマックへと着く

「今日は年上特典として奢らせてもらうぞ」

「ありがとう。じゃあ遠慮なくコーヒーをお願いします」

「ああ。頼んでおくから席をとってもらっても良いか？」

「うん」

風子は頷き、店の奥へ入って行く

「いらっしゃいませ」

「コーヒー2つとポテトのLを1つお願いします」

広告は……ポケ〇ンセットか。メニューの割には安いんだよなこれ。今度雪葉と頼んでみよう

「かしこまりました。ご一緒にポテトはいかがですか？」

「いや、頼んでま……え！？」

広告から顔をあげて店員の顔を上げると、そこには

「こんにちは、佐藤君。今日は暑いですねぇ」

０円ですら勿体ない不景気なスマイルで、宗院さんが働いていた

「びっくりした～。バイトですか？」

「ええ。３５０円です」

「はい、ちょうどで」

「ありがとうございます。それでは右にズレてお待ち下さいますか？」

「ああ、はい」

右にズレてお待ちする

「コーヒー２つとポテトお待たせしました」

「はい」

知り合いが働いていると言うのに、全く盛り上がらない会話だな

「それじゃ、がんばって下さい」

「ええ。……ああ、佐藤君」

「はい？」

「多分、来ますよ」

「……来ちゃいます？」

「ここ何日かテスト勉強の為に部活が休みで、暇みたいですから」

「そうですか……気をつけます」

いや、別に避けてる訳じゃないんだけどね……

風の音　2

トレイを持って店の奥へと入る。店内は結構混んでいて、中々風子の姿が見付からない

「風子は……」

「こっちだよ、お兄さん」

「お、いたいた」

喫煙コーナーの手前にある、店内右端奥の禁煙コーナー。そこで手を振る風子を発見し、そっちへ向かう

「混んでるな」

風子の向かいに座り、軽く店内を見回す。殆ど満席だ

「学校帰りの人達が多いみたいだね。僕の学校の子達もいるよ」

「そっか。ほら、コーヒー。一応砂糖とミルク2個ずつ貰って来たぞ」

「ありがとうお兄さん。じゃあミルクを2つ頂くね」

「お、渋いな。砂糖は入れないのか？」

「甘いのが苦手なんだ。でも苦いのが好きって訳でもない。だから、ミルク2つが好きな味」

そう言い風子は両手でカップを持ち、ゆっくりとコーヒーを飲む

「……うん。美味しい」

「なるほどな、覚えておくよ。ポテトも適当に摘んでくれや」

「ありがとう。お兄さんは、どうコーヒーを飲むんだい？」

「俺は砂糖1つ、ミルク1つだな。甘すぎず、苦すぎず。程々が一番だ」

「ふふ。お兄さんらしい」

「ふ、かもな」

お互い微笑み合い、泥水の様に濁った黒いコーヒーを飲む……マズっ！？

「砂糖とミルクは1個ずつ。……うん、僕も覚えておく」

「……ああ」

もう一本砂糖を入れたいが、我慢しておこう

「しかしコーヒーは奥が深い飲み物だな。無限の可能性がある」

「コーヒーはよく人生に例えられる。そして作り方はその人の生き様と言うね。でも肝心なのは」

「美味いかマズイか。そしてこのコーヒーはマズイ、そういう事さ」

「でも僕らはそれを美味しいと飲んでいる」

「それだけ俺達が今の腐った世界に染まっているって事さ。だが世界はそれで上手くいっている。皮肉なものだぜ」

何を言ってるのか自分でも良く分からんが、とにかくハードボイルドだ。タバコがあったら吸いたい所だが吸わ無いんで、取り敢えずポテトをくわえてみた

「あ、そうだ」

「ん？」

「ごめん、お兄さん。ちょっと電話して来ても良いかな？」

「ああ、行ってらっしゃい」

「うん」

風子は立ち上がり、急ぎ足で店を出て行った

「……」

やっぱ一人だと何か気まずいな。だから風子を誘った訳だが……

「今日はショタ萌えですか、佐藤君？」

「そう、ショタ最高ーって、いつの間に！？」

声のする方、すなわち左横を見る。半透明な板ガラスの仕切りがある為、顔は分からないが、この声は間違いなく綾さんだろう

「いつ声をかけようか悩んじゃいました」

「……もしかしてずっと居ました？」

「はい。３０分前から友達と。眼鏡は気付いてないみたいでしたけど」

「俺も全然気付きませんでしたよ、ってか顔見ないで話すと落ち着きませんね」

「そうですか？　テレクラか何かだと思えばドキドキしませんか？」

「……相変わらずアホですねぇ」

「佐藤君こそ相変わらず容赦無いですね……。惚れてまうやろー」

「……」

「覚えたてです。後、どんだけー」

「……やっぱ母ちゃんと話合いそうですね」

微妙にネタが古いんだよなぁ

「それにしても今日は静かでしたね。本当に気付きませんでした」

「基本的に静かですよ、私」

「そうなんですか？」

「佐藤君は知らないと思いますが、一応私、鞭の女王様と呼ばれて――」

「氷の女王でしょ。適当あだ名を教えないで下さいね」

「ちぇ……。知っててくれたんですね。綾音、嬉しい！」

「舌打ち聞こえてましたよ～」

俺としては鞭の女王ってあだ名の方がしっくりくるけどな

「……う～ん。やっぱり佐藤君は手ごわいです。アプローチの仕方を変えた方が良いかも」

「アプローチされてた事を今、知りました」

「こうなったらバターを使って……」

「良く分からないけど止めとけー」

「あはは。やっぱり佐藤君は可愛くて素敵です。また遊んで下さいね」

「……むぅ」

からかわれてるぜ

「では友達が戻って来ましたので失礼します。ついでに眼鏡もかってこなきゃ」

「……行ってらっしゃい」

頑張れ、スペシャルアドバイザー

風の音　3

友達らしき人と店を出て行く綾さんを何となく見送ってると、ちょうど入風子も戻って来た

通路が狭いので綾さんは風子に道を先に譲り、風子とすれ違った後、ちょっと振り替えって俺に手を振った。俺も軽く手を振り返すと、自分に振られたと思ったのか風子まで俺に手を振る。だから俺は、振るか振らないか迷った後、今度は風子に向けて振ろうと思った。さて、俺が実際に手を振った回数は何回でしょうか？

「ごめんね、お兄さん」

「ああ。用事は済んだのか？」

答えは1回。いやまぁ、どうでも良いんだけど

「うん。父さんに少し遅れるって」

「え？　用事が有ったのか？　……無理に誘ったな。ごめん」

「ううん。僕がお兄さんと一緒に居たかっただけだから」

風子は席に座り、帽子を外す。帽子の中で束ねていたらしい長い髪が、さらさらと揺れながらこぼれ落ちた

「……相変わらず綺麗な髪してるよな。帽子で隠しているのが勿体ない気がする」

「ありがとう。本当は切りたいのだけど、こうして褒められるのなら我慢したかいがあるよ」

「そうなのか？」

「うん。父さんから絵のモデルにしたいから切らないでくれと頼まれているんだ。そのかわり、その絵が売れたら全額僕の口座に貯金してくれてるみたいだけど」

「ふ～ん。風子も大変なんだな」

娘の髪型ぐらい好きにさせてやれってんだ

「……変わってるね、お兄さん」

「……良く言われる」

まことに遺憾だが

「この話をすると、殆どの人は良いお父さんだねと言うんだ。うん、僕も良いお父さんだと思うけど……」

「……風子？」

「……ふふ。なんでも無いよ」

そう言って風子は、寂しそうに微笑む

「……あ～、自分の絵のテーマに風子を選ぶって事は、それだけ風子が大切で掛け替えの無い娘って事なんだろうな、きっと。じゃな

かったらわざわざ娘の絵なんて書かないで、自分の好きなもん書いてるって」

俺がそう言うと、風子は驚いた表情で俺を見つめ

「……まいったな」

と、苦笑いをした

「僕は、よく大人びていると言われるけど、お兄さんと話していると自分が子供だと言う事を強く実感してしまうね」

「そ、そうか？」

明らかに俺の方がガキっぽいと思うが……

「うん。素敵な大人だよ、お兄さん」

そう言い、再び笑顔を見せる風子。今度は優しい微笑みだった

「……やっぱ風子の方が大人だと思うぜ？」

「ふふ」

しかし今日は2度も素敵と言われてしまったな。良いことあるだろうか？

今日の幸運

風＞綾＞＞＞＞＞＞＞＞＞俺

「じゃ、そろそろ引き上げようか」

「うん……っ！？　……お、お兄さん？」

「なんだ？」

「トイレに行って、ズボンの前を見て来る事をお勧めするよ」

「ん？　……げ！？　チャック全開かよ！」

「……ばか」

サザエ

第１１５話：俺の学校

「友達の恋人を好きになりました。どうにか出来ませんか？」

「どうにも出来ません。スポーツでもやって発散しなさい」

「でも……」

「良いからやれ！　今すぐやれ！！　さっさと走れ～」

「は、はいぃっ！」

第四回世界一の姉、佐藤　秋様の弟が答える人生相談

この俺のアイデンティティをまるっきり無視した名前の企画は、四ヶ月前のある一言から始まった

『佐藤、相談に乗ってくれないか？』

４月１５日の朝、教科書を机に入れている時に、友人Ｔが掛けて来た声がそれだ

『ああ、良いぜ。言ってみろよ』

『実は今の彼女が……』

『彼女がいない俺に彼女の事を相談するな』

『いや、聞いてくれ！　頼れるのはお前しかいないんだ！！』

『俺しかいない？　ふふふ、中々見る目があるじゃないか。よし、聞いてやる』

んで、ノロケ話のような愚痴を聞き、適当にアドバイスしたらそれが良かったらしく、それをＴはクラス内で大袈裟に宣伝をした

そして、その宣伝を聞いた奴らが俺へ相談しに来たので、適当に答えてやると、そいつらもまた宣伝活動をし始めたと言うネズミ講的な事が学校内で起こり、連日何人かが相談に来るようになってしまった

だが、相談は面倒臭い。５日で飽きて相談を無視していると、なんと金を出す奴までが現れた。その不思議現象に何故かＴは乗り気になって、すったもんだのあげく下記の取り決めが俺の意志を無視して決まる

相談受付は月始めの一日のみ。相談料は１２０円で、これは缶ジュース一本分の価値って事でこの額に。とまぁ長い説明をし終えた所で、今に戻ってみよう

「では、次の迷える子羊よ。弟様の前へ立ちなさい」

Ｔは俺のマネージャーとなり、客や列の管理を無償でやっている。要するに馬鹿なのだ

「はい。……弟様、実は近頃、妹が俺にキモいって言ってきて……」

「痩せろ。次」

「最近寝不足でさ、テスト勉強がはかどらないんだよ。どうしたら良いかな？」

「寝ろ。次」

「彼氏が、あ、まだ付き合って５日なんだけど、エッチさせろって迫ってきて～」

「別れろ。次」

「俺さ、秋さんとマジで付き合いたいんだけど、紹介を」

「死ね。次」

新宿の母を超える明確で的確なアドバイスを、ばしばし答えてゆく。なんせ休み時間や放課後を使って、一日に５０人ぐらいの相談を受けなくてはいけないので、のんびりやってられない

「金持ちになりたいんだけどよ、どうすりゃなれる？」

「働け。次」

「宇宙が！　宇宙からの電波が！！」

「病院行け。次」

相談に来る奴らは、基本的に自分の中である程度の答えは決まっている。だから俺はその後押しをしてやると言う訳だ

「うちの猫が居なくなったの……。どうしたら良いのかな」

「先ずは保健所に電話して、確認。次に写真付きのチラシを作り、許可を貰ってコンビニやスーパーに張る。そのチラシには自分の電話番号や住所は書かず、捨てても良いメールアドレスを書く。後、僅かでも懸賞金があると良い。次」

「ミトコンドリアって、たべもの？」

「真核生物の細胞小器官の一つ。次」

たまに思う。この学校は大丈夫なのだろうかと

「ドラ〇もんが欲しい！」

「……本屋行け。次」

きっと大丈夫じゃ無いだろう

今日のカオス

全員

カツオ

第１１５話：俺の学校（後書き）

超適当小説

今日の燕さん。その２

「立てばシャクヤク、座れば牡丹。歩く姿は百合の花……か」

鳴神学園、生徒会室。四人で行っていた書類整理作業も一段落した頃、一年の書記が呟いた

「あら、突然どうしたの宮川さん？」

直ぐ隣で作業をしていた副会長が、不思議そうに声を掛ける

「あ、副会長。今、修学旅行用のパンフレットを見ていたら、そんな言葉があって……会長にピッタリだなぁって思ったんです」

書記は今も手を休めず作業をしている会長をチラ見し、ほぅっと感嘆のため息を吐いた。憧れているのだ

「そうね、会長は立ち振る舞いが綺麗だから。宮川さんも真似をしてみたら？」

「そ、そんな！？　わ、わたしなんかが会長の真似なんて出来ません！　会長が百合の花なら、わたしは道端に生えてる雑草程度のものです！！」

「そ、そんなに自分を被虐しないで。大丈夫、宮川さんも会長に負けないぐらい魅力的よ」

「……」

「宮川さん？」

「会長のように完璧な方と比べられてしまうと、自信を無くしてしまいます……」

「あら……そうねぇ。会長」

「……」

副会長は会長に声を掛けるが、集中している会長には届いていなかった

「……燕、ゴキブリ！」

「む？　……ゴ、ゴキブリ！？　ど、どこ、どこにいるのだ！？　うわぁ！？」

会長は慌てふためき、椅子から転げ落ちてしまった

「か、会長！？」

「ね、完璧なんかじゃ無いでしょう？」

その副会長の笑顔に、書記は恐怖を覚えたという

第１１６話：父の船旅

船は長い航海後、唐突に止まった

「つ、着いたのか？」

三日。三日と言う時間、僅かな水と、カビたパンだけを与えられ閉じ込められていた佐藤達は、今おかれた状況も忘れ、安堵の息を吐く

「……お、お水が欲しいよ」

掠れた声で、うわごとの様に呟いたのはミーシャだ。彼女は、この部屋で唯一の女性であり、最年少の少女である

「きっともうすぐ飲めるから、頑張るんだよ」

彼女に声を掛けたのは、優しい瞳をした日本人。彼は、この三日間自分が飲むべき筈の水を、約半分少女に与えていた

「サ、サトウ……ありがとう」

「けっ！　さっさと死んでくれりゃ、そのガキの分、水が飲めたのによ」

二人を見て悪態をつくのは、元水夫のバッファード。彼は人より身体が大きいと言う理由で、他の者より多くの水や食料を奪っていた

「おい、そんな言い方は無いだろう！　彼女も仲間じゃないか！！」

憤るのは閉じ込められた五人の中で、もっとも元気だった男、スナフ。現役の軍人であり、真面目な男だ。彼のお陰で、辛うじて船の中の秩序が保たれていたと言っても良い

「くくく」

「なにが可笑しいのだ、ご老体！」

「なに、生き残ってしまった事の哀しみに、思わず笑みが零れてしまっただけさ」

その言葉に、部屋は静まり返る。彼等はこれから先、自分達に何が起きるか分かっていない。しかし――しかし、この老人の言う事が確かなら、これから待ち受ける物は、苦難を越えた地獄である

ギギギギギ

天井の端にある、入口が音を立て開く

「うっ！」

三日振りの強い太陽の光が、サトウ達の目を強く刺激した

「灰巌島へようこそ、薄汚い奴隷達。私達は君達を歓迎しよう」

男にしては高く、耳障りな声が、まばゆい光から響く

「そして誓おう。君達へ素晴らしい未来を与えると」

そして地獄が始まった

今日の船酔い

父＞ミ＞＞老＞バ＞＞＞＞ス

つづ……かなくてもよくね？

第１１７話：俺の友人（前書き）

学校シリーズ三部作ラスト。彼の学校は、明らかにおかしい

第117話：俺の友人

7月2日は朝から雨が降っていた

「止まないね」

「止まないな」

学校の授業が終わり、放課後。朝は小雨だった雨は、今では夏の豪雨となって地面に突き刺さっている

その雨を俺とFは、二人きりとなった教室で眺めていた

「佐藤君も傘、忘れたの？」

「ああ。夕方には晴れると思ったから……」

勢いは衰える事なく、雨はザアザアと降り注ぐ

「それに今日は自転車で来たんだよ。たく、ついてないぜ」

「私も。朝の時点で、大丈夫だと思っちゃった」

「そうだよなぁ。はぁ」

濡れるの覚悟で飛び出しても良いが、家まで距離が結構あるので、ならべく避けたい所だ

「……仕方ない。奴を使うか」

「奴？」

「ちょっと待ってな」

俺は携帯電話をポケットから取り出し、悪魔のナンバーを押す

６６６

プルルルル、プルルルル……おかけになった電話番号は――

数回呼び出し音がなり、留守番電話サービスに繋がった

「……駄目か」

肝心な時に役に立たない姉ちゃんだぜ！

「佐藤君？」

「ん、ああ……職員室行って貸してくれるかどうか聞いて来るよ」

「あ、私も行く」

「そうか？　じゃ、行くべ」

教室を出て、薄暗い廊下を歩く。途中で階段を上がり、三階にある職員室へ

コンコンとドアを軽く叩き、失礼しますと中へ入る。中には授業を受けた事は無いが、顔は知っているＹ先生が居た

「ん？　おお、佐藤の弟か。どうした？」

俺も佐藤ですが？

「貸せる傘ってありませんか？　俺達忘れて来ちゃって」

「馬鹿だな～、朝降ってたろ。仕方ない、俺の貸してやる。一本しかないけどな」

何がおかしいのかY先生は、ガハハと豪快に笑った

「一本か……じゃ貸してもらいます。ありがとうございます」

「ありがとうございます先生」

「ああ、気をつけて帰れよ」

黒い傘を受け取り、教室へと戻る

「鞄は……」

置いて行くか

「そっちはもう帰る準備出来たか？」

「うん。いこ、佐藤君」

Fは小さなスポーツバッグを肩に担ぎ、早足で俺の側へ寄る

「じゃ帰るべ。傘、二人で入る事になるけど、構わないよな？」

「うん」

了解を得た所で、俺は昇降口へ向かう事にした

「Fんちは何処方面？」

「私は電車通学。佐藤君は3丁目の方でしょ？　駅まで送ってくれたら後は大丈夫だよ」

「わかった」

雨は勢いを落とさず、さした傘へ容赦無く落ちる

駅までは、歩いて約２０分。全く濡れずに行くのは無理だろう

「自転車サビなきゃ良いけどな」

「そうだね～」

「この間、買ったばかりだからさ。Fはいつも自転車なのか？」

「うん、駅前の駐輪場借りてる。明日は少し早く起きなくっちゃ…
…自信ないなぁ」

「確かに早起きはキツイよな。俺も結構夜更かししてるから」

「そうだよねぇ～。夜の方が楽しいもん」

「だよな。でも早寝早起きの習慣つけないとな」

そんな軽い会話をしながら歩いていると、以外と早く駅の近くへと着いた

「ふ～。結構足、濡れたな。Ｆは平気か？」

「うん、ちょっと靴下が濡れただけ」

「風邪は足元から来るって言うし、帰ったら暖かくしろよ」

「うん……。佐藤君って凄く女の子慣れしてるよね。もしかして……結構遊んでる？」

主に遊ばれる方です

「……うちは５人、女だからな。慣れもするよ」

「う～ん……そっか。凄いよね、佐藤君の家族。秋先輩や夏紀様がいるんだもん」

ここでも様づけ？

「ま、まぁそうかもな。Ｆには兄弟とか居るのか？」

「いるよ～。生意気な弟が一人」

「仲良さそうだな」

「え？　どうして？」

「嬉しそうだからだよ」

「そ、そうかな？」

「ああ。と、こらこら肩が濡れてるぞ、俺から離れるな」

「あ、うん……。佐藤君ってやっぱり女の子慣れしてるよ……」

「ところでさっきから気になってたんだが」

「なぁに？」

「ズボンのチャック開いてるぞ」

「きゃ！？　も～早く教えてよねっ！」

「……」

やはりこの学校は、大丈夫じゃない

今日のカマ

F＞＞＞＞＞＞＞俺

通学

第１１８話：吉の牛丼（前書き）

食べながら書きました、後悔はしていません。
つか、４時まで残業で９時出勤って……

第１１８話：吉の牛丼

飲み物、カレー、おやつ

「……よし」

準備完了だ

「やるぞ～」

今日、俺は新しいゲームを買ってきた。名探偵ブッチャー物語

一月前から予約し、楽しみにしていたソフト。予約特典のブッチャーカレーを食いながら、いざプレイ！

ちゃーちゃらーちゃららーー

《私、助手の花子。あなたのお名前を入力してねっ》

「う～ん」

名前ねぇ。本名でやるとなんか恥ずかしいんだよなって、このカレー美味っ！？

鈴木　京一っと。

「……」

何となく俺の名前を残しつつ、いよいよスタート

《京一君ね。じゃあ次はプレイスタイルを選んでね》

プレイスタイル？

《1、お姉ちゃん系。2、妹系。3、ヤンキー系。4、人妻系。5、アグレッシブ系》

「あ、アグレッシブ？」

良く分からんが、めちゃくちゃ気になる

《5……ね。じゃ、始めるね。頑張ってね～》

※

その少女は、野獣の様だった

風で身体に張り付く黒の制服に、赤い瞳

黒豹が人の姿に変化するのならば、きっとこのような姿であるだろう。そう思わせる程、彼女はしなやかに、かつ美しく朝の町を駆ける

《ふぅ……遅刻してしまうわ》

目覚まし時計の電池が切れていた。そんな彼女らしくないミスは、彼女の貴重な時間を奪い、いつもは紅茶と共にゆっくり咀嚼するトーストを、走りながら食べると言う曲芸じみた事をやる羽目にまでなってしまった

《次の道を曲がれば……あ！？》

最短にして最速。直角に近い動きで、道を曲がろうとした彼女は、そのせいで曲がり角を壁沿いに歩いていた青年と激突してしまう

《ぐわぁ！？　な、なんだ！！》

衝撃は強く、お互いが尻餅をつく状態となる

《くぅ……》

少女は頭を打ったのか、頭を押さえ、くらむ視界を収めようとしていた

《たく、気をつけ……あ、水玉》

それは彼女の今日の下着である

《……殺す》

トカレフ。一般人でも耳にした事はあるだろう、かつて日本の暴力団が主に使用していたオートマチック・　ピストルだ

粗悪品が多く、良く暴発を招くと悪評高い銃でもあるが、それは主に中国から密輸した物であると言う

しかし彼女の持つトカレフは、旧ソビエトで作られた純粋なトカレフ。それもトカレフの特徴である早い弾速、耐久力、貫通性と全てにおいて平均以上の成績を出すワン・オブ・サウザンドであった

そのトカレフを、彼女はスカートのポケットから抜く。０．７秒。素人にしては早過ぎる速度で、総弾数８発を青年の脳天に向かって発砲すべく、引き金に力を込める

《……なっ！？》

しかし、青年は既に視界には無く、それどころかいつの間にか少女の背後に回って、強い力で腕を押さえていた

《は、離せ！》

《おっと、暴れるなよ可愛い子猫ちゃん。その物騒な物をしまってくれたら解放してやる》

《くっ……この！》

少女は、青年の膝を狙って後ろ蹴りをし、それをかわした青年が思わず力を緩めた隙に振り返り、銃を――

《あ……っん》

《……》

向ける前に、唇を奪われていた

《……惚れたぜ、子猫ちゃん。一生俺のみそ汁を作ってくれ》

《……はい》

ファーストキスは甘いと言うけれど、なんだか吉野家の味がしました

《つゆだく、ネギ抜き、温泉卵。これが俺さ、京一さ》

《……すてき》

明日は吉野家へ行こう。そして、キムチも頼もう

でも、それがまさかあんな大事件に発展するなんて……

第一話：どちらかと言うと松屋派殺人事件

「……」

ポチ

電源を落として

「よ～し」

売りに行こう！

今日の無駄遣い

俺＞＞春＞＞＞＞＞雪

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第１１９話：雪の残念

『さて、何の本を読む？』

『今日は、このご本を雪葉に読んで下さい』

『ん、なになに……ネズミ小僧、危機一髪……渋いね、雪葉は』

『はい！』

『よし、じゃ読むよ。えっと、むかしむかし、江戸の町に、一人の義賊がいて……』

チュン、チュン。チュンチュン

「……ん？　ん～ふぁ～あ」

夢か

「……ふふ」

懐かしいな

あの頃は、雪葉もまだ幼稚園で――

なんて回想を入れようとしたら、コンコンとドアをノックする音が聞こえた

「開いてるよ」

「うん。入るね、お兄ちゃん」

「雪葉？」

「おはよ、お兄ちゃん」

雪葉は妙に照れ臭さそうな表情で、俺に朝の挨拶をした

「おはよう、雪葉」

「うん。……」

「ん？」

なんかモジモジしてるな

「どーした、雪葉？」

ベッドから起き上がり、雪葉に近づく

「あ、うん……えへへ」

「ん～、なんだよ～」

夢の影響か、なんだか昔を思い出し、雪葉を抱き上げた

「きゃ！　も～下ろしてよ～」

子供扱いをされたからか、雪葉はしかめっつらをするが、口許は緩んでいて、声も甘え口調だ

「どうしたのか言うまで下ろさないぜ～」

「……あ、あのね、子供の頃の夢を見たの」

「夢？」

今も子供だぞってツッコミは置いといて、雪葉を下ろしてやる

「……うん。お兄ちゃんが、ベッドで絵本を読んでくれた夢」

「え！　ま、マジか？　俺も今日そんな夢を見たんだよ」

「え！？　ほ、ほんと？」

「ああ、本当。もしかしたら、読んだ本も同じかも知れないな」

「う、うん。じ、じゃあ一緒に言おう？」

「ああ。……じゃ、いっせーのせで言うぞ」

「う、うん。……い、いっせーの」

せ！　のタイミングで、俺と雪葉の声が重なる

「ネズミ小僧、危機一髪！」

「おやゆび姫！」

「……」

「……」

なんか色々と残念な兄妹だった

今日のため息

俺≦雪

痛恨

第１２０話：春の小旅行

「夏だ！　海だ！　大好きだ～！！」

夏の海……とは言っても少し肌寒い曇り空。海に入れない事は無いが、まだ少し早い様であり、そもそも入るつもりもない七月五日

「泳ごうぜ兄貴～」

「いや、それよりこれからどうする？」

「泳ぐ！」

「少し寒いだろ。大体水着が無いし」

「う～ん……ちぇ」

春菜は、しょんぼりと肩を落とす。どうやら諦めてくれたらしい

「じゃあ、トウモロコシ食べる～」

浜辺に出ている屋台を指差して、春菜は言った。どこへ行っても食い物ばっかだなコイツ

「ま、いっか。よしよし買ってあげましょう」

前に稼いだ金もあるし

「やった～！　兄貴、最高！！」

「暑いって！」

腕に抱き着く春菜を離しつつ、俺達は屋台へと向かった

さてここは小田原、海の側

『かまぼこ食べたいの～』

そんなノンキな母ちゃんの声で始まった、かまぼこ放浪買物記。お小遣をくれると言う甘い囁きに釣られ、春菜と共にわざわざやって来たと言う訳だ

「超うめ～！　なっ、兄貴！！」

買った焼きトウモロコシを勢い良く食べ、ニカッと笑う春菜。歯に引っ掛かったコーンが腕白すぎる

「しかし……確かに美味いな」

醤油の匂いが香ばしく、トウモロコシ自体の甘味も強い。これは当たりだ

「ごちそうさんっと。さて、時間もまだあるし、小田原城にでも行ってみるか？」

「ああ！」

トウモロコシの芯をゴミ箱に捨て、いざ城攻めへ

「しかし……海って広いよな」

「今度は釣りしに来ようぜ」

「ああ」

今度こそ巨大魚を吊り上げてやる！

「ところで、兄貴」

「なんだ妹」

「城見てなにすんだ？」

む、中々核心をつきやがる

「……分からん。とりあえず見て決めよう」

「城かぁ」

んな会話をしながら、歩いていると、視界に城っぽいのが目に入って来た

「結構駅の近くにあるんだな」

町に上手く溶け込んでいて、違和感が余りない

「かっけ～」

「近くで見たら、きっともっと迫力あるべ」

「よし、ダッシュだ兄貴！」

「おう！」

1分後～

「はぁはぁ、はぁはぁ……う……」

「だ、大丈夫か兄貴？」

城まで意外と遠く、約４００メートルの距離をほぼ全速力で走った俺達。少し楽しくなって来て、調子に乗ってしまったのが悪かった、俺の心臓は爆発寸前だ

「お、おま……ゴホゴホッ！」

「うぅ、兄貴～」

春菜は心配そうな声を出し、座り込む俺の背中をさする

「ふぅふぅ、はぁはぁ……ん……お、お前、早過ぎ」

「そ、そうか？　普通だと思うけど……」

「お、お前が普通なら、い、今頃日本人が金メダル取って、ゴホゴホ！」

「あ、兄貴～」

「だ、大丈夫だから泣きそうな顔するな」

兄として、これ以上妹に心配を掛けさせる訳にもいかない。俺は無理に息を吸い、呼吸を整えて立ち上がる

「ひゅーふぅ……もうスポーツではお前に敵わないな」

元々勝った事ないけど

「……へへ。ま～な」

まだ少し心配そうだが、何とか笑顔に戻ったか。ふ、全く手間の掛かる妹だぜ

春の小旅行　2

呼吸が完全に落ち着いた所で、城へ向かって進軍再開。近づくにつれて、首の角度が上がってゆく

「お～城だ～」

「城だな」

城の直ぐ近くにある大きな公園に入り、丁度やっていたフリーマーケットを横切って、城の敷地内へ侵入

松だかなんだか分からんが、時代劇っぽい木が多く植えられ、時代劇っぽい堀があり、その堀で時代劇っぽいカモが泳いでいた。地面もなんか時代劇っぽい道で、歩くと道に敷き詰められた砂利が小気味よい音を立てる

「凄い城だな、兄貴」

「ああ、日本一堅固らしいぞ」

「そっかぁ」

「ああ、凄いよな」

「凄いな～」

「ああ……」

「……」

「……」

「……天守閣に上がってみるか？」

「ううん。兄貴行ってくれば？」

「いや、別にいい」

「そっか……」

「……ああ」

「……」

「……」

「……そ、そろそろ帰るか」

「……うん。帰ろうぜ、兄貴」

どうやら春菜は城に興味は無いらしい。つか俺も無いってのに何で来たんだ？

「……帰り、駅地下にあったお土産屋見てみようぜ。なんか買ってやる」

城見物に付き合わせた、お礼の意味も兼ねまして

「え！？　マジで！？　やったぁ～、今日の兄貴は最高！」

「だから暑いから腕を組むなって！」

それにしても、この何ヶ月間で随分俺を信頼してくれる様になったよなコイツ……

「……また夏休みにどっか行こうか、春菜」

ちょっと照れ臭いけど

「ああ！　兄貴となら何処でも行くぞ！」

今日の浪費

俺＞＞＞＞＞春

「あと、これとこれとこれとこれ！　おっ、この駅弁もうまそ～」

「お、おまっ！　ちょっとは遠慮しろよ！！」

「へへ！　後で一緒に食べような、兄貴っ♪」

つづづ

第１２１話：夏の禁酒

２０ＸＸ年、７月７日。佐藤家に衝撃が訪れた

「……お酒止めようかしら」

「ええっ！？」

「そ、そんな……。身体の調子が悪いの？　お姉ちゃん」

「な、夏姉！　病院に行った方が良いよ！！」

「……びっくり」

みんなでベランダから七夕の空を、まんじゅう食べながら見上げていた夜の事。飲んでいたワンカップ酒を置き、呟いた夏紀姉ちゃんの一言に、俺達は驚愕する

「あ、あんた達ねぇ」

「だ、だって、姉ちゃんから酒を取ったら、何も残らぁたたたっいたたたたた！？」

ナツキの必殺、アイアンクロー！！

「……まったく。こっちは真面目に話をしているのよ」

姉ちゃんは呆れた風に呟き、アイアンクローを俺から解除してくれた

「ご、ごめん」

「もう良いわ。お酒止めるし」

「でも……どうして？」

心なしか秋姉も心配そうに尋ねると、夏紀姉ちゃんは、ぽつりぽつりと語り出す

「ちょっと前に大学の仲間と飲み会に行った時、ハメを外しすぎて」

「ハメを？」

「ええ。それで飲み過ぎちゃって、クラクラしている時に、あたしに言い寄る男が居てね、あたしは無視してたんだけど二次会の時に強引に連れ出されてさ、そこから先の記憶が曖昧なのよ。気付いたら――」

「き、気付いたら？」

ま、まさか……

「その男が道端で泣きながらあたしに土下座をしていたわ」

「……え？」

聞き間違いか？

「それでその翌日、彼に改めて話を聞きに行ったのよ。そうしたら、

彼、怯えながら昨日はすみません、もうしません、生きていてごめんなさいって平謝りしてきて……」

「……」

「話を聞くどころか、二度と近付きません、同じ空気も吸いませんから許して下さいって事で終わったわ」

「……へ～」

何もコメントできん

「それで……姉さんは大丈夫だったの？」

「ええ、何も無いわ」

「……そう。気をつけないと駄目だよ？」

「はい。心配掛けてごめんねアキ」

「……」

「……」

秋姉と姉ちゃんの深刻そうな会話に雪葉達は入っていけないらしい

「とにかくさ、そう言う事でお酒は今日で止め！」

「うん、でも良いことだと思うよ」

俺の被害も激減しそうだし

「そうだよな～。夏姉飲み過ぎだし、私達も心配してたんだよ。な、雪」

「うん。でも良かったぁ夏お姉ちゃんが病気になったら嫌だもん」

「うぅ、家族にもそんなに心配をさせていたなんて……」

姉ちゃんは、よよよと泣きまねをし、おもむろに立ちがって

「よし、今日で最後！　今日は秘蔵の酒、限界まで飲むわよ～」

と、高々に宣言しました

「ね、姉ちゃん？」

「はぁ……まんじゅう食べよ」

「お姉ちゃんって……」

「ん、……だめだこりゃ」

今日の呆れ顔

俺＞＞秋＞春≦雪＞＞＞＞＞＞夏

つみれ

第１２２話：坂の噂話

「貴方が花梨や風子さん達に手を出してるって噂の鬼畜男ね！」

学校帰りの夕暮れ時。いつもと同じく家の近くにある公園を横切ると、突然二人のガキンチョに立ち塞がれた。まるで待伏せでもされていたかの様なタイミングだ

「な、なんだ？」

ま、まさかカツアゲ？

「うん、確かに彼が言うとおりド貧相でド低脳な顔した屍人。でも気をつけてミサ。ド間抜けそうに見えてもこの人が希代の悪党である事には変わりないから」

「そ、そうね千里。屍の癖に私達を見る目がエロいもの」

「初対面で随分失礼なガキンチョ共だな！」

「うるさい屍！！」

「こ、このガキ……」

人を屍呼ばわりするこのガキンチョは、外国人なのか金色の髪と藍色を瞳を持った、やたら気の強そうな奴だ。右腰に手を当て、左手で俺をビシっと指差す態度は、偉そうを通り越して清々しささえ感じる

もう一人は日本人形みたく切り揃えられた短い黒髪と、余り感情を感じさせない大人びた表情が特徴的な子だ。和服が似合いそう

「わわっ！　屍が舐める様に私達を見てる!?　千里、ここは一時撤退よっ！」

「大丈夫、まだ人通りがあるから。……いざとなれば私の右拳が火を噴くし」

シュッシュっと、黒い方はシャドーボクシングを始める。自信ありそうな割にはめちゃくちゃ弱そう

「てか、なんだ？　俺に用事でもあるのか？」

急いでるんだが……

「……ええ、あるわ。花梨達に今後一切近づかないで欲しいの」

「花梨？　……ああ、あいつの友達？」

なんか似てるし

「ち、ち、違う！　と、友達なんかじゃ……ないもん！　今の言葉、訂正してよ!!」

「そ、そうか？　ごめん」

何故か謝ってしまう

「しかし……何故に花梨に近づくなと？」

別にそんなに会ってもいないけど

「しらばっくれて！　知ってるんだからね、貴方が花梨や風子さん、美月ちゃんに雪ちゃん達と付き合ってるの！」

「……え？」

「え？　じゃないわよ鬼畜！」

「すけべ」

「ロリコン！」

「すけべ」

「おためごかし！」

「すけべ」

「ち、ちょっと待て！　身に覚えがってか、そもそも雪葉は妹だ！！」

「なにを～、……え？　妹？」

「すけべ」

「ああ、妹だ」

「すけべ」

「え、だって同棲してるって……」

「すけべ」

「そりゃ家族だし当たり前だろって相方が壊れたテープリコーダー見たいになってるぞ」

「ＳＵＫＥＢＥ」

「発音変わった！？」

「ああ、気にしないで。たまにこうなるから」

「なるのかよ！？」

「にゃんぱらり」

「なんか懐かしいキャラが出て来た！？」

「だから気にしないでって。それより！　雪ちゃんは妹って事で良いわ。でも他の子は！！」

「良いわって……。あのなぁ、誰から聞いたのか分からないけど、そんな下らない嘘を信じるのは花梨達に失礼だぞ」

「で、でも……坂田君が言ってた！」

「あいつか……。花梨達は雪葉の友達であって、直接俺とは関係ないよ。俺は雪葉の兄貴だから、話ぐらいは普通にするけどさ」

ゆっくりと、真剣に諭してやる。俺だけの問題じゃないからな

「……ほんとに？」

「ああ、本当だ。だから学校でもちゃんとそう言ってくれよ？」

「……」

それにしても最近のガキンチョは、ませてるな

「……いちおう、分かった」

「そりゃ良かった。じゃあ俺、急いでるから、そろそろ帰るよ」

もうテレビが始まっちまう！

「急いでる？」

「ああ、月一回しか放送しない番組が、もうすぐ始まるんだよ。じゃ」

「え、ええ。さような」

「……月一？　ま、待って！」

振り返り、急いで帰ろうとした時、黒い方が慌ててと言った感じで俺を呼び止めた

「な、なんだ？」

「ち、千里？」

「月一。……山田巖象の月間将棋っ子クラブ？」

「知っているのか！？」

あの超マニアックな番組を！

「当たり前。あの番組はＮ○Ｋ最後の良心だし。……うかつだった、先月からチェックしていたのに。もう間に合わない」

「録画は？」

「してるけど、駄目。ライブ感が伝わらない」

「た、確かに……」

このガキンチョ、分かっているな！

「……あなたの家に行く。近いし」

「よし分かった！　行くぞ友よ！！」

「うん、友よ」

「ち、ちょっと！　何、意気投合してるのよ！？　大体この人、まだ完全にシロって訳じゃ」

「……分かってないな」

「ね」

俺と千里って子は一度顔を見合わせ、次にミサってガキンチョを見て

「将棋っ子クラブを見ている人に、悪い人はいない！」
「将棋っ子クラブを見ている人に、悪い人はいない」

と、同時に番組のキャッチフレーズを言った

「……は？」

「決まった……。じゃあ急いで」

「ああ、もう始まっちまうからな」

「な、なんなの……」

「将棋っ子！」

「クラブー」

「イェーイ」
「イェーイ」

お互いの手を叩き合い、家へ向かう。思わぬ所で同志に出会えたものだ

「なんなのよ～！！」

今日のマニア

千＞＞俺＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞リ

「あれ？　リサちゃんに千里ちゃん？　どうしたの？」

「こ、こんにちは、お邪魔してます」

「こんにちは。……雪ちゃん、雪ちゃんの兄、なかなか見所があるよ」

「え？」

「でも王手。しかも決まり手」

「ま、参りました……」

詰み

第１２２話：坂の噂話（後書き）

将棋戦闘力早見表

雪葉　１０

千里　８

俺　５

リサ　０

「ゆ、雪葉……俺の、俺の敵を～！　グハッ」

「お、お兄ちゃん！　お兄ちゃん……勝負だよ、千里ちゃん！！」

「え？　……こ、この闘気。まさか雪ちゃんはあの伝説の戦法を受け継いだ最後の！？」

「雪葉の裏ヤグラ……見せてあげる」

「くっ。なら私は地獄のアナグマを！」

そして決戦の火蓋が幕をあげた！！

多分続かない

第１２３話：雪の妹大会

がやがや、がやがや

「レッディース・アンド・ジェントルメーン！　遂に来たぜこの日がぁあ！　全日本妹大会の日がぁあああ！！」

７月１１日の日曜日。家から下りで四つ先の駅にある総合体育館で、大会の開幕式が始まった

「今日はすげぇ集まってくれたな！　このシスコンどもが！！」

ウォオオオ！

妹、最高ー！！

「……」

既に三百人ぐらいの人が入っているが、まだまだ余裕がある広い体育館。しかし何故か非常に暑苦しい

「妹っ妹っ妹っいっもっうっとぉおお！！」

「ああ神よ、私は今日までこの大会だけを目的に生きて来ました。どうかこの大会が終わるまで、私に生きる力を与えて下さい～」

「……」

暑苦しい理由が分かった気がする……

さて、今日は二年に一度しか無い全日本妹大会の日

俺も一昨日駅前で見たポスターで知ったので、詳しい事は分からないが、一部で有名らしく、地元のテレビ局まで入っている

この大会、妹達はそれぞれ五つの部門のどれかに別れ、その中で優勝を競い合い、最終的に優勝者達の中からゴッドシスターてなもの誕生させると言った、訳分からない趣旨の大会である

このヘンテコな大会に出場出来る条件は三つ

1、妹が小学生であるとこ

2、保護者の付き添いがあること

3、保護者と妹が仲の良いこと

そして、これが肝心なのだが……

ゴッドシスターには賞金一千万！　凄いぜ、ヒャッホー！！

……コホン。とにかく、そんなこんなで俺は今日の為、最強の布陣を作って此処へとやって来たって訳だ

「んじゃ、説明するぞ妹ちゃんとシスコン共よ！　パンフレットに書いてあった通り部門は全部で五つだ。確認するぞ、耳をかっぽじって聞きやがれ！」

全身金ぴかスーツの司会者の説明が始まった。俺は手元のパンフレ

ットを開き、自分でもう一度確認する

【これぞ妹部門】

スタンダードな部門だ。これにはもちろん

「頼んだぞ雪葉！」

「う、うん……何するんだろ？」

【ハードボイルドな妹部門】

なんでハードボイルドやねんって感じだが、頼りになるのは

「来てくれてありがとな風子」

「ふふ。こんな部門がある事自体、この大会の胡散臭さを感じるね」

【元気な妹ちゃん部門】

元気と言えば奴しかいない！

「美月、宜しくな！」

「うん！　兄ちゃんの為に頑張るねっ」

【不思議な妹部門】

不思議っぽい奴は三日前に発見！

「千里、お前なら勝てるぞ！」

「私、不思議？　それが不思議」

そして、過去ゴッド・シスターを一番誕生させたと言われる

【ツンデレ部門】

ツンデレってのが良く分からんが、とにかく気の強い奴なら

「これはダブルで行く！　頼んだぜ二人とも！！」

「ツンデレって……それはともかく、何でミサまで居るのよ？」

「貴女が大会に出るって言うから邪魔しに来たのよ！」

「……はぁ。馬鹿じゃないの？」

「ばっ……か、花梨～！」

「なによ」

バチバチと睨み合う両者。この部門、もらったな

「ふぅ……。それにしても凄い熱気ね、出場する子達も沢山居るし……。一千万円、狙うわよ！」

六人の中で一番やる気がある花梨。目が燃えている

確かに妹っぽい子だけで七十人は居る。だがこんなに妹が居るのは

多分俺だけだろう

卑怯？　血縁関係が必要とはパンフレットに書いてないやんか！

注意されたらそう言い張ってやる。一千万は人を変えるのさ……

「これで説明は終了だ。最初はこれぞ妹部門からスッッタート！！」

「じゃ、行こう雪葉」

「う、うん。頑張る」

そして戦いは始まった！

雪の妹大会　2

「では、最初の競技の説明をする」

金色オッサンの誘導に従い、体育館の壇上へと出た俺達。壇上には何も乗ってなく、サッカーが出来そうなぐらい広い

その壇上に上がったのは俺を含めた十組の兄妹達

どの子も良い服や、時間が掛かりそうな髪のセットをしているが、ノーマルなうちの子が一番可愛いぜ

「まず、妹ちゃん達には目隠しをしてもらう。その妹ちゃん達から５メートル先に、君達兄が並ぶんだ」

ふむふむ

「そして目隠し状態の妹ちゃん達は、一斉に自分の兄を目指して歩いてもらう。その間、君達は妹ちゃんを誘導してはいけない。声なんて出したら即失格だ」

結構難しそうだな

「無事自分のお兄ちゃんへたどり着いた時のタイムを競うのがこのゲームだ。シックスセンスと冷静さが問われるクールなゲームだぜぃ！」

クールねぇ……

「しかしなるほど。中々の難問だが……いけそうか、雪葉」

「う、うん。なんとか頑張ってみる」

「ま、気負わず行こう」

雪葉は、こういうの苦手っぽいよな

「それじゃ準備開始！　カモン、バニー！！」

「バニー？　……お、おおお！」

壇上の右袖にある黒い段幕の中から、バニーガールさん達が現れた。
こぼれ落ちそうな乳に、際どいスリット。これはドキドキもんだぜ！

「……どこを見てるのかなぁ？　お兄ちゃん」

「う！？」

雪葉の目が冷たい！

「い、いや……けしからん！　まっことけしからん！！」

「……」

「ほ、ほんに、けしからんなぁ。ま、まったく若い娘が……ははは
はは」

ジーっと疑惑の目で俺を見つめている。なんて目力だ……勢いでごまかそう

「ゆ、雪葉！」

「は、はい！」

「そんな事を言っている場合じゃない！　今はチームワーク第一だ、そうだろう？」

「そ、そうだね。ごめんなさい、お兄ちゃん」

「あ、ああ。全然大丈夫だ」

ごめんよ雪葉。後で回転寿司をごちそうするからな……

そうこうしている内に、バニーさんの一人が俺達の前へやって来る

「はーい、こんにちは」

「こ、こんにちは」

雪葉は、バニーさんにぺこりと挨拶をし、びっくりした顔でバニーさんの乳を見上げた。確かに凄い迫力……

「……じー」

「ご、ごほん、ごほん！　喉が～喉がー」

「じゃ、お兄さん。妹さんをお借りするわね」

「え、ええ。そ、それじゃ雪葉、待ってるぞ！」

「う、うん。行ってきます」

段幕の方へバニーに連れていかれる妹……シュールだ

「お兄さん達はこちらに集まってくれ」

俺達は金色オッサンが居る方、すなわち壇上の奥へ、わらわらと向かう

「よし来たな！　このワッペンを胸に貼ってくれぃ！！」

番号の書かれたワッペンを貰い、胸に貼る。俺は三番だ

「その番号通り、横一列に並ぶんだ！　間隔は1メートルだぜぃ」

指示通り並ぶと、男達がずらりと並ぶ不気味な光景となった。緊張と恥ずかしさからか、皆、苦笑いをしながら視線を泳がしている

「さぁ、妹ちゃん。登場宜しくぅう！」

合図と共に目隠しをした妹達がバニーさん達と手を繋ぎながら登場

「出た、妹！」

「よっ、真打ち！」

その登場に、会場のボルテージはマックスを向かえる

そんな中、妹達は俺達と同じように一列に並べられた。雪葉は左か

ら六番目か

妹達の後ろには壇上から落ちない様、バニーさんが控えている

「さあ、いよいよだ、いよいよ始まる……。第一試合これぞ妹部門、開始１０秒前！」

１０

９

８と、カウントダウンが始まった。雪葉は深呼吸を何度かし、キョロキョロした後、こっちをジっと見た！

３

２

１……

「ゼロー！！」

わーっと会場が震える程の大声援の中、十人の妹達が一斉に歩き出す

「あぅ！」

「きゃあ！」

他の子とぶつかったり、あさっての方向を行ったり

そんな中、雪葉はよろよろしながらも、ゆっくり真っ直ぐと俺の方へ向かって来る。す、すげぇ、さすが雪葉さん……

よろよろ、よろよろ

頑張れ、頑張れー

よろよろ、よろよろ

もう少し、もう少しだ！

よろよ……こてん

「きゃ！」

こ、こけた！　しかも顔面！？

「だ、大丈夫か雪葉！」

俺は慌てて飛び出し、雪葉の元へ！

「三番、失格です！　惜しいっ」

「……え？」

「いたた。……あれ？」

一試合目、敗退！

雪の妹大会　3

結局これぞ妹部門は、俺達が破れて数分後、朔美って子がベストタイムを叩き出し、終了。今、優勝した二人は表彰台でメダルを首に掛けられている

「ごめんなさい、お兄ちゃん……」

「いや、どちらかと言えば悪いのは俺だろ？　だから気にするな」

「うん……」

落ち込む雪葉を慰めながら風子達の元へと戻る

「悪い。負けた」

「頑張ったわね雪。つ、ついでにアンタも……。雪、後はアタシ達に任せて」

「花梨ちゃん……うん！」

気まずい雰囲気は、花梨の一言で払拭され、逆にみんなのテンションが上がってゆく

「よーし、次はわたしが行くぞ！」

ピンポンパンポーン

「第二試合はハードボイルド部門、ハードボイルド部門です。参加

する方は体育館の外で係員からワッペンを受け取って待機して下さい。その他の方は今暫く体育館内でお待ち下さい」

スピーカーからお知らせ時の定番音が聞こえ、次の試合を知らせた

「ごめん、美月。どうやら先に僕の出番のようだよ」

「え～、超気合い入ってんのに。でもいっか、頑張れ風子！」

「ありがとう。それじゃ行こうか、お兄さん」

「ああ。じゃ行って来るよ」

「行ってらっしゃい、お兄ちゃん」

「がんばんなさいよ、アンタ達！」

「兄ちゃんも！」

「私、不思議っ子。だから敢えて応援しない。負けろー」

「それ、ただのひねくれ者だって……」

五人の妹（仮）に見送られ、俺達は体育館の入口に向かって歩く。歩きながら周りを見渡すと、同じように歩いている奴らは3、4組しか居なかった

「……まぁハードボイルド部門だからな。参加者も余りないか」

「変わった部門だね。でも、一筋縄ではいきそうもないよ」

風子に言われて、改めて歩いている兄妹を見てみると、確かに普通じゃない事に気づく

ほんとに小学生かって思う程、高身長で筋骨隆々の女の子に、目付きが鋭く、隙が無い女の子。そして何故かグリンベレーをかぶり、迷彩服を着た子。それぞれ特徴は違うが、どの子も共通してピリピリとした危険な雰囲気を持っている

「……ハードボイルドって言うより、戦争でも始めそうな雰囲気だな。部門が部門だし、危ない様なら棄権しようぜ？」

怪我をさせる訳にはいかないしな

「……固ゆでの卵。確か元々の意味は、そうだったよね」

な、なにが？

「だけど固くゆでた卵は意外と弱い物だよ。一度崩れれば自分の形さえ、見失う。大丈夫、どんな競技でも僕は負けない」

そう言い風子は帽子を脱ぎ、俺を見上げ

「お兄さんにも良いところを見せたいからね」

と、穏やかに笑った

「……頑張ろうな、風子」

「うん、お兄さん」

どうやらこの対決、凄い事になりそうだ

決意を込めて頷く風子を見て、俺はそう思った

雪の妹大会　4

第2試合、ハードボイルド部門。体育館を出た俺達を待っていたのは、血にまみれたナイフを右手に握っている男だった

「ナイフねぇ……ナイフ……ナイフ！？」

過激派！？

「や、やば……に、逃げっ！　逃げるぞ風子！」

風子の手を掴み、慌てて体育館の中へ逃げ込もうとした時、マッスルな女の子が雄叫びを上げて男へ向かっていった

「チェエエエ！！」

女の子は男の間合いに入る一歩前あたりで、高く飛び上がり、男の顔面へ向かって体重を乗せた飛び蹴りを放つ

男は咄嗟に両腕でガードをしたが、後方へ吹っ飛び、ナイフを落として尻餅をつく

「ぎゃっ！」

「貰った！」

女の子は左足を踏み込んで、男の頭を狙い、右のローを

「や、止めて下さい！」

必死な犯人の声に、女の子は蹴りを止める。後数センチで当たる所だ

「わ、私はこの大会のスタッフです！」

「スタッフ……だと？」

訝しげに男を見下ろす女の子。それと同じく、横で舌打ちが聞こえた。見てみると、いつの間に居たのかグリンベレーの子が、左手にコンバットナイフを構え、投げようとしていた

「ってこら！」

「……なに？」

グリンベレーはギロリと俺を見る。結構迫力あるが……

「ナイフなんか持って、危ないだろ！」

俺は子供を叱れる大人なのだ

「べつに」

不機嫌そうに答え、そっぽを向くグリンベレー。ナイフを腰のベルトに挟み、つかつかとマッスルっ子達の方へ歩いて行く

「あ、こ、こら！」

「ご、ごめんなさぁい」

呼び止め様とすると、情けない声で謝られた。グリンベレーの側に居た少年だ。ひょろりとした体格にオカッパ頭は、気の弱さを感じてしまう

「あの子ぉ、ミリタリーが好きでぇえ。あれはぁレプリカでぇすぅ」

突然高くなったり低くなったりと妙な音程で話す少年。常にキョロキョロしていて余り落ち着きが無い

「……そっか。でも模造刀だからって持ち歩くと良く無いと思うぞ。気をつけてな」

まぁ他人がとやかく言っても仕方ない。この辺で説教モードはおしまいだ

「はぁい、すっみませぇん！」

「あ、ああ」

元気な奴……

「……兄さん、早く」

「は、はぁい！」

グリンベレーっ子が呼ぶと、オカッパ少年は慌てて追い掛けて行った

「……」

「僕達も行こう、お兄さん」

「あ、ああ……」

個性的な兄妹だったな

風子に促され、警戒しつつスタッフ（自称）へ近付く。いざとなれば俺の逃げ足が光るぜ！

「スタッフの者か。すまなかったな」

そんな事を考えていると、マッスルっ子がスタッフ（多分）に手を差し延べて起こす。スタッフ（仮称）は、その手を借りてフラフラしながら立ち上がる

「ふ～。びっくりしましたよ」

「あっはっは。すまんのう、うちの咲が」

そう声を上げたのは、マッスルっ子（咲？）よりゴツイ、白胴着を着た白髪頭のおっさん。実はさっきからマッスルっ子の側に居て目立っていたのだが、危なそうなので目を逸らしていた

「あ、兄者」

お、お兄さんなのか。随分と歳が離れているんだな……いや、見た目で言えば妹の方の歳も想像つかないけど

「すまないな、青年。咲はこう見えて中々おちゃめな子であってな。はっはっは！」

「や、止めて下さいまし兄者。咲は恥ずかしゅうございます……」

「はっは！　ういやつ、ういやつ」

「……」

「……お兄さん？」

「え？　……ああ、ごめんごめん」

個性が強すぎて、思わず足を止めて見入ってしまった

「しかし……凄いなハードボイルド部門」

てか濃すぎ……

「そう？　あんなのは見かけ倒しよ」

風子じゃない声の返答に顔を向けると、最後の一組、目付き鋭い少年、少女達が居た。二人はスカートとズボン、そしてシャツと一般的な格好をしている

「私達なら、一分もあれば二組とも倒せる。もちろん貴方も」

「そ、そうか？」

たかが妹大会で、随分物騒な事を言うちびっ子だな……

「うん。ただ――」

女の子は言葉を止め、視線を俺から風子に移し、

「貴女だけは、分からない」

「僕を買ってくれてありがとう。でも、一つ間違えているよ」

風子は女の子の方を向かず、背中で語る

「お兄さんは、僕よりずっと強い」

「俺!?」

俺は多分、あのマッスル兄妹にも勝てないぞ～

「……へぇ。なら一番最初に貴女のお兄さんを狙ってあげる」

「また俺!?」

てか何で戦うって話になってんだ?

「ふふ、楽しみにしているよ。では、後で」

「ええ。……後で」

二人は視線を合わせず、歩き出す。俺と少年は、何となく取り残されてしまった

「……すみません、生意気な奴で」

「あ、いや。……かっこいいじゃん、妹さん」

「かっこいい……ですかねぇ」

フゥっとため息をつく少年。苦労してるんだな

「お兄ちゃん、早く！」

「あ、ああ！　じ、じゃあ、また後で」

「お、おう。また後で」

良く分からんが、戦いの図式が出来上がってしまったようだ

「……ハァ」

俺は、少年に負けないため息を付き、みんなの所へと走り寄った

妹大会用、能力表（前書き）

子供の頃、こういう能力表を見るのが大好きでした。このキャラと、このキャラ、どっちが強いんだ～とかを一日中考えたり。
まさか自分の小説で書ける日が来るとは……。コメディーなのに

妹大会用、能力表

その内削除な能力早見表

・佐藤　雪葉

体力３　頭脳６　敏捷性２　冷静さ５　攻撃力１

特殊能力

【召喚】

兄が近付くに居れば、召喚の呪文を唱えられる。覚えている呪文は

・国家権力
・女神降臨
・６６６の悪魔
・ご近所さん１００人などがある

【兄好き】

稀に皆が想像もつかない行動を起こす能力。この能力は、風子でも予測出来ない

【暗黒の波動】

とても怒る（兄に）と発動。自分以外全ての人物を恐怖状態にさせ、ステータスを２づつ下げる。解除には特殊アイテム、兄の平謝りが

必要

・坂上　美月

体力１０　頭脳３　敏捷性８　冷静さ２　攻撃力７

特殊能力

【ハッピータイム】

気分が乗ってくると、ステータスが倍になり、たいていの事をこなす様になる。ただし、それが終わると、ステータスは初期値の半分に

【つぶらな瞳】

邪気の無い瞳に、邪気ある者は心にダメージを受ける。ダメージを受けた者は数秒間、行動停止状態になる

・風見　風子

体力８　頭脳１０　敏捷性１０　冷静さ１０　攻撃力８

特殊能力

【状況把握】

今、自分の周りで何が起きているかを把握する能力。調子が良い時は、これから何が起きるかを予測する【状況予測】にランクアップ

する

・霧島　花梨

体力３　頭脳８　敏捷性２　冷静さ５　攻撃力６

特殊能力

【魔法】

作者ですら忘れていた、厄介な設定である魔法を使える能力。胸を少し大きくしたり、遠くに買い物へ行ったり、雨を弾いたり出来る

【節約術】

家計を上手くやりくりする能力。花梨はこの能力を最上級であるＳまで極めているので、貧乏でも貧乏を感じさせない水準の生活をキープ出来る

【強気な舵取り】

皆を引っ張り、成功に導く能力。行動が間違えていても途中で気付き、そのつど修正出来る柔軟さもある為、性能は高い

・神崎　千里

体力２　頭脳９　敏捷性１　冷静さ１０　攻撃力２

特殊能力

【行動誘導】

会話をしていると、押しが強い訳では無いのに、何故か千里の望む方向へ行動や会話が誘導されてしまう。それは千里の能力によるもの。ただし、効果がある相手は限られていて、冷静な風子や、暗黒化した雪葉などには無効化される

【混乱】

行動誘導の発展系で、会話をしていると、相手を混乱させる能力。夕食話をしていたと思ったら、気づくと宝くじの話に。宝くじの話をしていたかと思えば、フランスパンでチャンバラをする話に変わったりと、それぞれ脈絡が無いのに普通に会話が続いてしまうので、いつの間にか訳が分からなくなる。しかしこれも風子には通じない

・リサ　クオーデン

体力7　頭脳7　敏捷性4　冷静さ2　攻撃力6

【ライバル】

ライバルが側に居ると、基礎ステータスにプラス2の恩恵を得る

【泥仕合】

自分より実力が上の者が相手でも、同等の戦いが出来る能力。ただし、体力が著しく減ってしまう

【逃亡】

負けそうになったら負ける前に逃げ出す能力。ある意味無敵

オマケ

・佐藤　秋

体力１０　頭脳１０　敏捷性１０　冷静さ１０　攻撃力１０

特殊能力

【ブラック秋姉】

四姉妹の中で、最も色濃く流れていると言われる鬼の血が、怒りとともに覚醒した状態。全ステータスを１０から１０００倍にまで上げ、更に相手の特殊能力を打ち消し、そのステータスまで下げてしまう最強の能力。ただし元々温厚な為、殆ど発動する事がなく、今では彼女の姉専用となっている

【眼力】

じっと見つめられると、なんだか逆らえなくなる能力。国家権力ですら退ける

【ステルス】

気配を消す能力。ただし本人は望んでいない

佐藤　夏紀

体力２　頭脳１０　敏捷性１　冷静さ９　攻撃力１０

特殊能力

【女王の威厳】

その場に居る男達を一瞬で奴隷にする能力。男である限り、抗えない

【五臓六腑】

酒を飲むと、体力が回復する。飲み過ぎると、冷静さは０になるが、攻撃力が上がる。更に飲み過ぎると、混乱状態に

・佐藤　春菜

体力１０　頭脳３　敏捷性１０　冷静さ１　攻撃力１０

特殊能力

【天才】

やろうと思えば何でもやれる能力。ただし、興味を持たないと並以下

【見抜き】

相手が良い奴か悪い奴かを自然と見抜く能力。悪い奴には懐かない

・佐藤　恭介

体力５　頭脳６　敏捷性５　冷静さ５　攻撃力５

特殊能力

【ドーピング】

姉（優しい方）が側に居ると発動。全能力をプラス５

【兄として、弟として】

命掛けで妹や姉を守る覚悟。例え目の前に拳銃を突き付けられても引かない

【死んだ目】

相手に切なさを感じさせる目。きっと辛い事があるんだろうなと、同情を誘う

雪の妹大会　5

「今回のゲームは犯人逮捕ゲームです！」

みんながスタッフの周りに集まった所で、スタッフは俺達にワッペンを配り、そう宣言した

「犯人逮捕？」

「はい。今から私、犯人がこの体育館が建つ森林公園全体を使って逃亡します。その私を、最初にこの手錠で捕まえた組が優勝となります」

スタッフは、明らかにおもちゃだと分かるファー付きの手錠を持って、その使い方や簡単な注意事項を説明し始める。それらをまとめると

・兄と妹、二人一組で行動し、一番最初に犯人を逮捕した組が優勝

・逮捕には手錠が必要。手錠は一組に二つ貰える

・手錠は手首と足首にしか使えない。ただし、かけるのは片方だけで構わない

・手錠は犯人以外にも使える。使われた相手は、行動不能となり、妹が行動不能になった時点で兄が無事でも失格

・兄は兄相手にだけ、手錠を使える。妹は、兄と妹と犯人の全てに使える

・手錠は内側にある突起に衝撃を与えると自動的に閉じる物だが、鍵は渡されないので勝手に閉じない様に気をつけなくてはならない

・暴力は駄目。あくまでも怪我をしない、させないが基本

こんなところか

「制限時間は一時間。それが過ぎても犯人逮捕に到らなかった場合、ハードボイルド部門は優勝無しと言う事になります」

なるほど、要するに鬼ごっこのような物か。しかしハードボイルドのカケラも無いな

「皆さんの動向は、各所に取り付けられているカメラで映されます。ですので、インチキは駄目ですからね～」

「御託は良い、さっさと始めい！」

マッスル紳士が焦れた様にスタッフを恫喝する。スタッフは、ヒィっと悲鳴を上げ逃げ出した

「始まったか！　行くぞ咲！！」

「はい、兄者！」

「……兄さん」

「は、はぁい！」

意外と速いスタッフを、マッスルブラザーズとミリタリーっ子達が追い掛けて行った。体育館前に残ったのは、俺達と目つきの鋭い兄妹だけだ

「俺達も行こうぜ」

「うん。でもその前に、彼女達を退ける必要がありそうだよ」

風子の言葉通り、辺りには不穏な空気が立ち込めている。それは俺達を睨み据える、鋭き双眼によるものだ

「貴女のお兄さん……。約束どおり倒させてもらうわ」

女の子は風子に向かい、そう言い放つ

「し、雫？　俺らも犯人を捕まえに行った方が良くないか？」

「お兄ちゃんは黙ってて！」

「お、おう」

力関係がはっきりしている兄妹だな……

「律儀だね。良いよ、相手しよう」

風子は俺を庇う様に前へ出た

「貴女は後。最初は貴女が信頼するお兄さんを壊してあげる」

壊すって……

「悪いけど――」

そこで風子は一度言葉を止めて軽く振り返り、俺を見上げ、

「今日は少し格好をつけたいんだ」

と片目をつぶって微笑んだ

「……そう。なら、仕方ないわ」

「退いてほしいけれど、……仕方ないね」

雫ちゃんと風子は、片手におもちゃの手錠を構える。なんてシュールな光景だ……

「す、すみません、うちの妹が」

雫ちゃんの兄ちゃんが俺の側に寄り、申し訳なさそうに言う

「大丈夫だけど……俺達はどうする？」

「えっと……見てましょうか」

「……そうだな。勝っても負けても恨みっこなしで」

「ええ」

と、言う事で見物に専念しよう

「最初貴女を見た時、この大会で一番手強い相手だと思った。だって、隙が無いのだから」

「そうかな？　意識していないけれど」

雫ちゃんは、ジリジリと風子に近付いてゆく。しかし風子は何もせず、目ですら追わなかった

「……ふっ！」

息を強く吐き、体勢を低くして大胆にも正面から風子の懐へ飛び込む

対して風子は、棒立ちのままだ。雫ちゃんは意外な展開に少し顔をしかめたが、そのまま風子が手錠を持っている方の手、すなわち左手に向けて右手に持つ手錠を使う

「もらったわ！」

「おっと」

「な！？　くっ！」

手錠が、かかる直前に雫ちゃんの右手を、風子が右手で上から押さえた。すかさず雫ちゃんは、左手で風子の左手を掴む。交差する格好だ

「ふ、ふふ。これで貴女も手錠を使えないわね」

「そうでもないよ」

風子は手錠を離す。その手錠は重力によって当然地面に落ち

「え？」

る前に、手錠の鎖部分を左足のつま先で受け止めた！

「ちょっと恥ずかしいけれどね」

風子は手錠を真上に蹴り上げ、それを口でくわえる。そしてそのまま掴んでいる雫ちゃんの左腕に口を寄せ、手首に手錠をかけた

「……あ、あれ？」

「良い勝負だったよ、ありがとう」

「私の……まけ？」

「ルールでは、そうなるね」

「あ……ふくぅ……ふ、ふぇえ」

「し、雫っ！」

泣き出した雫ちゃんに兄ちゃんが駆け寄り、雫ちゃんを抱きしめて優しく頭を撫でた

「……俺達の完敗です。参りました」

「あ、ああ。手強かったぜ」

俺は何もしてないが

「……あの、よかったら俺達の手錠を持って行って下れませんか？
ルールでは他の組の手錠を使う事を禁止されてないはずだから」

「良いのか？」

「はい。俺達の分まで頑張って下さい」

「……分かった、君らの分まで頑張るよ」

「はい！」

「あ、ああ……」

な、なんだこの胸の高鳴りは。ま、まさかこれがあの有名な友情、
努力、勝利って奴なのか？

「……よし！　じゃ、いっちょ犯人捕まえに行ってみっか！！」

オレ達の戦いはこれからだ的な感じで、新たな戦場へ出陣だ！

雪の妹大会　6

「とは言ってもどこに行けば……」

公園は広く、一部は森の様になっているのもあって、どこから犯人を捜せば良いのかさっぱり分からない

「その答えは直ぐに見付かりそうだよ」

風子は目を閉じ、耳に手をあてる

「……」

俺も同じようにやって耳を澄ましてみると、東へ続く石道の先から怪鳥音が、うっすらと聞こえて来た

「行きたくないな」

絶対、マッスルブラザーズの声だよこれ

「誰かと戦っているのかな。少し怖いね」

そうは言うが、風子の表情はいつもと変わらず、落ち着いたものだ

「……仕方ない、行ってみるか」

「うん」

様子を見に、いやいやながら声がする方へと向かう

それから五分ほど歩いただろうか声は直ぐ側で聞こえるようになり、その内容も分かって来た

「これでも捕まえられませぬか」

「ふあっはっはっは！　咲よ！！　その者は中々のてだれ。しかしその者も倒せぬ様では、まだまだおやつにチーズケーキは早いのう」

「ち、チーズケーキ……見ていて下さい兄者！」

なんとも不可思議な会話だが、マッスルブラザーズが何かと戦っている事は理解出来た

「この曲がり道の先に居るみたいだが……。ちょっと外れて森の中に入ってみるか？」

「うん。お任せするよ」

「ああ」

道の脇に入り、森の中を北（多分）へ進む

「……お、あれか」

木々の間から見える先には、噴水がある開けた場所だった。そこでは手錠を持ったマッスル妹と、グリンベレーっ子が向かい合っている

「木に隠れて覗いてみようぜ」

どうやら犯人は居ないみたいだが、今の状況をまとめる為にも様子見だ

「はぁはぁ……んく」

余裕のマッスル妹に対して、グリンベレーっ子の息は荒い。兄貴の方も既にやられたのか見当たらないし、どうやら追い詰められているのはグリンベレーっ子のようだな

「はぁはぁ……も、もうゴリラには付き合ってられない！」

グリンベレーっ子は踵を返し、マッスル妹……咲ちゃんで良いのかな？　咲ちゃんとは逆方向に走り出した

「あ！」

「咲、逃げる兎は獅子の獲物よ！　狩れい！！」

兄の声を受け、咲ちゃんは走る。グリンベレーっ子の倍近い歩幅で、全身のバネをフルに使った走行は、パワフル過ぎる

そのパワフルな走りに、グリンベレーっ子は、あっという間に追い付かれて……

「なに！？」

追い付かれる前に急ブレーキをし、身体を丸めてしゃがみ込んだ！

「あ、危な」

「キェエエ！！」

咲ちゃんが、グリンベレーっ子にぶつかる瞬間、咲ちゃんは高く飛び上がった。そしてグリンベレーっ子の前に着地する。コマネチ１０点！　って感じだぜ

「……もう逃がしませぬぞ、一之瀬殿」

ハードボイルドって言うか時代劇な雰囲気で、咲ちゃんはグリンベレーっ子に迫る

「……もう良い。めんどくさい。私の負け。帰る」

グリンベレーっ子は立ち上がり、ふて腐れた顔で自分の手首に持っていた手錠をかけた

「い、一之瀬殿？」

「兄さんは3秒で負けるし、ゴリラは居るし……最悪」

「ゴリラですか！　ど、どちらにいらっしゃいますのでしょうか！？　一度お手合わせを……」

「うるさい！」

「ど、どうなされました一之瀬殿」

「別に悔しくないから！」

グリンベレーっ子は捨て台詞を吐き、オロオロする咲ちゃんを無視して体育館の方へ歩いて行った

「……むぅ」

ついつい見入ってしまったが、これで優勝は俺達かマッスルブラザーズのどちらかになったと言う訳か

マッスルブラザーズに勝てる気しないし、ここは素直に犯人探しだな

「じゃ、見付からない内に行こうぜ風子」

「とても残念だけれど、もう見付かってしまっているみたいだよ」

「え？　……あ、あれ？　マッスル兄の方が居ない？」

「僕らの後ろだね」

「え？　うわ！？」

後ろを向くと風子の言葉通り、マッスル兄が俺達の直ぐ後ろで腕を組ながら仁王立ちしていた

「咲の奴、強敵（とも）を得てまた一つ成長しおったわ」

咲ちゃんの方を見て、マッスル兄はしみじみと呟く

「さて、主らは咲の強敵となりえるかな？」

「無理です！」

「え？　きゃ！？　お、お兄さん！？」

風子の身体を横抱きし、逃亡。俺の逃げ足は夏紀姉ちゃん直伝だ、木の間をスルスルと抜け走る

「ぬ、ぬぅ！　早い！　咲！！　鼠が森を東に向かって逃げおった、先回りせい！！」

「は、はい！」

「我はきゃつらをこのまま追う！　まていコワッパ！！」

「待つかよ！」

そして恒例のトム＆ジェリーが始まった！

で……

唐突に！

～若き日の回想～

『恭ちゃん。アンタ弱いんだから逃げ足だけは鍛えなさい』

『う、うん……でも僕、足遅いし……』

『逃げ足ってのはね、ただ足が早いから良いって訳じゃないわ。例えば逃げながら助けを呼ぶとか人通りが多い所へ行くとか。後は……相手の気を逸らすのよ』

「あ！　今、レディ〇ガが居た！！」

「まてい、まてい！」

嘘が効かない！？

「ま、松〇健がマツケンサンバを踊りながら、アメリカンドッグを食ってる！」

「まてい、まてい、まてぃい！」

「の、のび太！　のび太大量生産！！」

「ヌガァアアア！」

距離は広げられず、逆に縮まるばかり。も、もう駄目か……

「……あ、ツキノワグマだ」

「ガアアア……あ？　なんだと！？　ど、何処だどこにおる！　是非手合わせを！！」

「さっき、向こうにある信号を渡っていたよ。急いだ方が良いかもね」

「向こうか！　感謝する童女よ！！」

「ふふ。どういたしまして」

マッスル兄は、風子の指差した方へ走り去って行く

「はぁ、ふぅ……。た、助かった。ありがとな風子」

「お疲れ様、お兄さん。ところで……」

「ん？」

「お、下ろしてもらっても良いかな？」

「あ、ああ。ごめん、ごめん」

恥ずかしそうな風子を下ろし、息を整える

「……さて、取り敢えず森から出ようか」

ぼやぼやしてると咲ちゃんが来そうだし

「うん」

「でも、そっから何処行くべ」

この公園、広いからな

「……このゲームの基本は犯人を捕まえる事。なのに開始１５分にして、もう二組が消えてしまった。残ったのはあの逞しい二人と僕らだけれど、向こうの二人組は犯人捜しより、戦う事に熱中したみたい。でもこのままじゃ盛り上がらないし、当初の趣旨と違う。だから犯人は捕まり易い所にわざと出て来ると思う。例えばカメラ多く設置してあって、みんなも楽しめる場所とか……かな」

「体育館前か！」

犯人は現場に戻るって奴だな！

「ふふ。行こう、お兄さん」

「ああ！」

雪の妹大会　7

体育館前へ戻ると、体育館の中には雪葉達も含めた数多くの人達が外で待っていた

「うぉおー来たー！　風子ちゃーん！」

「風っ！　風っ！　風の子、風子！！」

「クールな君は、この夏の節電大臣さ～」

その人達は、風子を見て歓声を上げる

「……凄い人気だな風子」

「僕は雪達みたいに可愛くは無いんだけど……不思議だね」

「風子も可愛いぞ」

「あ、ありがとう」

「うむ。さて」

犯人は……と

観客達はキョロキョロする俺達を笑顔で見守り、次に視線を軽く一カ所に移した。その視線を追うと、血のシャツを着た犯人が！

「いた！　行くぞ風子！」

「うん、お兄さ……危ない！」

「え？　ぐあ！？」

突然後頭部に強烈で重い衝撃を受け、視界が暗転する。次に顔への鈍痛があったが、その痛みを、どこか他人事のように受け止めている

「お、お兄さん！」

「葵流裏奥義、靴飛婆死。闇に抱かれぃ」

声は聞こえ、意識もしっかりしているが、辺りは真っ暗で何も見えないし身体も動かせない。これはもしかして……

「お、お兄ちゃん、お兄ちゃ～ん！」

雪葉が俺を呼びながら泣いている。今まで聞いた事が無いぐらい、悲痛な声だ

……そうか、俺は死んだのか。それでこれが臨終体験って奴なんだな

ああ、それを知ったらなんだか急に眠くなって来たよ。少し眠るね、パトラッシュ……

「お兄ちゃん！　お兄ちゃん！　お兄ちゃん！！」

雪葉……心残りだよ、雪葉。でも元気でな。俺が居なくても強く逞しく育つんだぞ

「お、おに……あ、ああ……お兄ちゃんが、お兄ちゃんが……あ、あぁ……い、いや、いやぁ！！」

春菜、夏紀姉ちゃん、父ちゃん、母ちゃん、そして……秋姉。雪葉を宜しくね。そして、ありがとう。さようなら……さようなら……

「雪！　揺すっちゃ駄目だ！！　お兄さんなら大丈夫だから！」

「に、兄ちゃん！　兄ちゃん！　兄ちゃぁあん！！」

「う、嘘でしょ？　ほ、本当に？　……死んじゃった？」

「し、死んでない！　どいて！　あたしが治すから！！」

「大丈夫。傷、浅いし。ね」

「う、うむ。後頭部にある秘孔を、履いている靴を飛ばしてつき、一定時間視力を奪うだけの技なのだが……のう、咲よ」

「は、はい。……でも、まさか顔面から転ぶなんて……咲はびっくりしてしました」

……ん？　言われてみれば、もう何処も痛く無いような……

「……むう」

瞼を開けると、そこは光の世界。そこで俺は泣きじゃくる雪葉達や観客、マッスルブラザーズに囲まれていた

「え？　……お、お兄ちゃん！」

「ええと……し、心配かけてごめんな雪葉。俺は大丈夫だ」

危うく勘違いで死ぬ所だったが……

「よいしょっと」

俺は立ち上がり、頷く。やはり身体は何処も痛く無く、むしろ力に溢れている

「……そうだよな」

俺には秋姉が、大切な妹達が居る（長女、ナチュラルに忘却）死んでなんていられないのだ

「よ、よかったぁ……って！　無事ならさっさと起きなさいよね！！　心配させないでよ、ド馬鹿っ！」

ド馬鹿って……

「兄ちゃん……どこか痛くない？　大丈夫？」

「ああ、本当に大丈夫だぞ美月。心配してくれてありがとな」

「……うん！」

「お兄さん……」

「そんな顔するな風子。今は、むしろいつもより調子が良いぐらいなんだぜ？　あのマッスルにも勝てる！」

俺はマッスル兄を見て、言い放つ

「ええっ！　お、お兄ちゃん！？」

「この試合……ケリを付けるぞ！」

「違う……この男、今までと違う！」

マッスル兄が臨戦体勢になると、観客は慌てて退いた。心配そうな雪葉達に親指を立てて、頷く

「お、お兄ちゃん……」

「俺を信じろ、雪葉」

「お兄ちゃん……うん！　頑張って、お兄ちゃん！！」

「ああ！」

「し……くで～す」

もう絶対に雪葉を心配させない。だから負ける訳にはいかないのだ！

「俺は勝つ！！」

「く……お、お逃げ下さい、兄者！　その男に悪鬼羅刹を感じます！！」

「……か……で～す！」

「……分かっておる。しかし、ここで引く訳には行かぬ。ここで引けば奴は更に力をつけ、いずれ人類を滅ぼすだろう」

いや、滅ぼさないから

「此処で我が倒れるか、きゃつめが滅びるか」

「いやいや」

そんなに深刻な話じゃないから

「……で～す！　……かくですってば～！！」

「……行くぞ！　死ねいっ！！」

マッスル兄貴が右拳を固め、勢い良く俺へ向かって来た。止められるか？　いや、止めてみせる！　今の俺ならロケットだって止められる！！

「来い！」

「ウォオオオ！！」

互いが相手の間合いに足を踏み込み、ほぼ同時に右拳を放った。それは相交差し、顔面を襲う。そう、これは幻のクロスカウガチャ……ガチャ？

「ぶへぇ！？」

マッスルがいきなり目の前でこけた！

「隙ありだよ」

倒れたマッスルの横に立つ風子。どうやらマッスルの足首に手錠をかけ、おもいっきり引っ張ったらしい

「ふ、風子？」

なんてえげつない……

「お兄さんを、二度は殴らせない」

そう風子は言い、いつもとは違った冷たい目でマッスル兄を見下ろす

「……」

も、もしかして少し怒ってらっしゃる？

「と、言うより靴飛ばしは失格で～す。さっきから言ってるのに……」

「なんと！？」

「失格？　って事は！」

「優勝は三番、風ちゃんとお兄さんペアで～す」

「やっ、やったぜ！」

「ふふ。おめでとう、お兄さん」

「ああ！」

これで一千万が、近付いた！

「う……葵流、八代目にして始めての敗北……腹を切る！」

「お、お止め下さい、兄者！？」

「ええい、離せぃ！」

向こうは、えらいことになってるな……。よし、まとめるか！

「止めたまえ、マッスル兄よ！」

「……我の事か？」

「君は俺との死闘を馬鹿にするのかい？」

死闘してないけどな

「い、いやそういう訳では無いが……」

「だが、今の君の行為はそれと等しい」

「な！？　し、しかし我ら葵流にとって、戦いとは命を掛けるものよ。敗北は、即ち死と同意で」

「馬鹿野郎！！」

「ぐっ！？」

「死に逃げるな。負けても命ある限り戦え！　死ぬのなら、戦って死ねぃぃ！」

責任は持ちませんが

「な、なんと凄まじい気迫よ。これが修羅……。未だ人の身である我が勝てるはず無かったのだ」

「……兄者、一から出直しましょう」

「咲……。ふ、今日からお前が当主だ」

「あ、兄者！？」

「我は負けたのでな、当主に相応しくない」

「兄者……」

「それにのう、ただの一人の男として戦ってみたい男がおるのよ」

そう言い、マッスル兄は俺を見る

途中から会話について行けなくなってしまったのだが、どうやらマッスル兄は俺をライバルだと思っているのだけは分かった

「また会おう、修羅よ」

「は、はあ」

「ふ、さらばだ！　行くぞ咲！！」

「は、はい！　で、では失礼致します」

二人は、８０年代のジャンプを匂わせながら、森の奥へと入っていった

「……」

「……」

「……濃いなぁ」

胸やけしそうだ

「……あ、そ、そうです！　風ちゃんさん、お兄さん、こちらはお二人の優勝メダルです。どうぞ」

犯人兼スタッフが、黒いポシェットから二つのメダルを取り出して、俺達に手渡した

「お、サンキュー！」

「ありがとう」

いかにもメッキの金メダルだが、嬉しいものは嬉しいぜ！　特に何もして無い気もするが、気にするな俺！

「おめでとう、お兄ちゃん、風子ちゃん！」

パチパチパチっと拍手の音があっちこちから、し始めた。みんな、俺達を称えてくれているのだ

「流石ね、風子。かっこ良かったわよ。それと……ま、まぁ、あんたにしては頑張った方なんじゃない？　……おめでと」

「兄ちゃんも風子も超すげかったー！　次は私が行くぞ～」

「風子ちゃんだけしか頑張ってなくない？　ま、勝ったから良いんだけど」

「リサは、空気読めなすぎ。罰としてナイジェリアを五回発音」

「え？　え、えっと……ナイジェリア、ナイジェリア、ナイジェリア、ナイジェリア、ナイジェリア」

「花梨ちゃんのお胸は？」

「ナイジェリれ！？」

「ぶっとばすわよ！」

「ぶっとばされたわよ！　今、貴女に、頭を！！」

一部を除いて喜び合う妹達。こいつらが居なければ、俺は立ち上がれなかったかも知れない

「……ありがとな、妹達よ」

これはお前らがくれたチャンピオンメダルだぜ

メダルを掲げ、十、二十代には絶対分からないであろうネタをしつつ、俺はいがみ合う二人を宥める事にした

て、事で

二回戦目、辛勝！

雪の妹大会　8

第三試合。不思議っ子対決

体育館の中へ戻ると、そう書かれた大きな垂れ幕が一本、壇上にあった

「次は不思議っ子か」

「え～次もわたしじゃないの？　ちぇ～。でも、仕方ないっか。頑張れ千里～！」

「了解。ＫＯ行くよ？」

千里は静かに頷き、シュッシュっとシャドーボクシングを始める。相変わらず弱そうだ

《あ、あ、マイクテス、マイクテス》

「お、なんか始まりそうだな」

姿は見えんが、スピーカーから若い男の声が聞こえる

《次の対決は、不思議しりとりです！》

「……また変な対決を」

誰が考えてるんだ？

《不思議しりとりは、不思議な事をテーマにするしりとり。それを五人の審査員が不思議かどうか判定し、その内三人以上の札が上げればセーフ、上がらなければ失格ですよ～》

「……」

俺が悪いのだろうか、さっぱり理解出来ない

《それでは、出場する子は壇上に来て下さい～》

「……行ってみるか」

色々と言いたい事もあるけど、なんせ一千万だ。多少の事は我慢しよう

「了解、恭くん」

千里は余り一千万に興味無さそうなのだが、協力してくれた。感謝しないとな

「頑張って～。お兄ちゃん、千里ちゃ～ん」

雪葉達の応援を背に、千里と共に壇上へ上がる。その俺達と前後して壇上へ上がったのは、十二人の戦士達。俺達を入れたら計十四人、七組の兄妹達が揃った

「一千万円で第二のムツゴロウ王国を作るの」

「お兄ちゃん、勝ったら一週間奴隷だからね？　うふふ」

「……」

中々手強そうだ

《全員集まりました？　では、妹さん達だけで手を繋いで大きな円を作って下さい。お兄さん達は今回見学ですから、少し下がって見守ってあげてで下さいね》

さっきから声だけで指示をしているが、どこかで俺達を見ているのだろうか？　そう思うと、少し気分悪いが、取り敢えず言われた通り下がって、見学に専念する事にした

《円が出来たら手を離して良いですよ。では今からワッペンを配りますから、胸に付けて下さい》

右の幕裏から五人の黒スーツ姿の男が現れ、千里達にワッペンを渡す。千里達がそれを胸に付けると、男達は千里達の近くで横一列に並んだ

《各自しりとりの持ち時間は１０秒です。１０秒過ぎたら失格ですからお気をつけて》

１０秒以内に答えないといけない訳か

《では最初のキーワードを言いますね。最初は【フシギ】一番のワッペンを付けた子から右周りで始めます。では……いきなり始め！》

「え！？　え、あっと……ぎ、は……ぎ……義理のはとこ！」

横一列に並んでいた五人のスーツ男達が、一斉にセーフと書かれた札を上げた。どうやらあの人達が審判らしい

「おお～、なんか不思議な響きだ」

「はとこまで行くと、義理とかどうでも良いもんな」

感嘆する観客達。なるほど、そんな感じで良いのか。しかし凄まじく、くだらない企画だなこれ。千里は大丈夫だろうか

俺は二番目である千里を見て、その言葉を待つ

「コ○スケ爆破。犯人キテ○ッ」

即答!?　つかそれ、しりとりじゃねー

「な、なぜ爆破を……」

「不思議だ……不思議すぎる！」

観客達からは声援が上がり、札も五つ全て上がった。負けを覚悟してたんだけど、基準が分からんな

「津軽海峡、夏景色！」

「き……キリン、ダイエット宣言！　って、あ！　ん、言っちゃったよ～」

失格っと、そんなのが暫く続いて七順目

「し、しは……支配人の荒稼ぎ！」

札は2枚。失格

九順目

「あ……あ……あ……わ、分かんない～」

言葉が出ず、泣いてしまい、失格

十七順目

「か、買います、株！」

失格。とまぁ、次々に退場していって、いよいよ千里を含めた三人だけとなった

「し……シマウマの共食い！」

「イスタンブールにて、ゴルゴンゾーラ」

「ら、来週はアルマジロ購入予定！」

段々しりとりから離れていってる気がするが、それでもまだ続いている。一体いつ、試合は終わるのだろうか

「い、い～い、イスタンブールでアマリリス！」

失格

「イスタンブールでフランス語」

千里はセーフって違いが分からん

「ご……ごくろうさんぱ２４！」

「死に急ぐな大阪スパーク」

「く、クマのプータロー！」

「ローキックで足を折る」

「る、ルビーを質屋で売った母！」

「ハイキックで首も折る」

「ま、また、る！？　ええと……る、ルネッサンス革命児！」

「ジジイの首も折る」

「折るな！　って何でセーフだ！？」

味方なのにツッコんでしまう

「る、る、る～！」

セーフ

「ってなんでセーフなんだよ！？」

狐か？　北の国か！？

「ルーカスの首も折る」

「誰！？」

「スター〇ォーズ」

「止めて～怒られる～」

「またぁ！？　もうないよ～」

女の子が悩んでいる間にもカウントダウンは続き

「あ～も～ダメっ！　ごめんね、お兄ちゃん！」

《はい、タイムオーバーです！　優勝者は2番、恭君と千里ちゃんペアー》

訳の分からない内に勝ってしまった

「楽勝。ね」

「あ、ああ……」

不思議な対決だった……

ま、それはともかく

第三試合、完勝！

雪の妹大会　9

「第四試合、もしも元気な妹ちゃんが浴衣姿でキャッキャしながら金魚すくいをしてみたら！」

「……」

「……」

「……」

次の試合内容の発表があった時、会場の誰もが無言だった。しかし、みな同じ事を思っていただろう。はっきり言ってしまうと、何言ってんだこの馬鹿って空気だ

「……なにそれ？」

音一つ無い重苦しい雰囲気の中、最初に呟いたのは花梨だった。訝しげに壇上の、金ぴか司会者を見ている

「説明すると、今回の対決は妹ちゃん達に浴衣を着てもらって、キャッキャしながら金魚すくいをしてもらう。そんな感じだぜぃ！」

「……」

ほんと何言ってんだ、このオッチャン

「なんだ、その反応の鈍さは！　浴衣姿の妹達が金魚と戯れる姿を見たくは無いのか～！　私は見たい！　もの凄く、見たい！！」

「な!?　い、言ってる事は無茶苦茶だ……だが確かに見たい!」

「俺もだ!　俺も妹ちゃんが見たいんだー」

司会者の魂の叫びに会場に居る客達は呼応して、ウォーッと歓声を上げる

しかし、それとは対称的に妹達はどん引き

「……こりゃ棄権かな」

既にもう二種目優勝しているし、わざわざこんな怪しいものに出なくても一千万円のチャンスは十分にあるだろう、なんて思っていたら美月は大きな目で俺を見上げて

「え?　なんで?」

と、聞いてきた

「なんでって、今回の試合は今まで以上に意味が分からないだろ?　んな意味の分からんもんに美月を参加させ訳にもいかないだろ?」

「わたし出たいよ?　面白そうじゃん」

「そ、そうか?」

「うん!」

別に俺を気遣かっている風でもなく、どうやら本当に面白そうと思

っているらしい

「……そっか、じゃ出てみっか」

「うん、頑張ろ～ね。ねっ兄ちゃん！」

「ああ」

何かあったら俺が守れば良いやね

「俺達、参加します！」

まだみんなが戸惑う中、真っ先に手を挙げて、司会者にアピール

「オゥ、イエス！　君達は佐藤君と、美月ちゃんペアだね！　バニーちゃん、この二人を着替え室にヨロシク～」

「は～い」

さっきのバニー達が乳を揺らしながら現れた！

「ナイスガール！」

「……お兄ちゃん」

「……ふふ」

「変態！」

冷た過ぎる三人の目が、俺を貫く

「う……い、行こうぜ美月」

「うん！」

視線を避ける様にバニーさんに着いて行くと、フロアを出て廊下を少し歩き、ロッカー室前へと案内された

「中には浴衣が幾つか用意されてありますので、お好きな物をお選び下さい。浴衣はお一人で着れますか？」

「俺は大丈夫ですよ」

「わたしも、ばーちゃんから教えて貰った！」

「そうですか。では、こちらで待機していますので、何かありましたらお知らせ下さい」

「ええ」

「はーい！」

ロッカー室は広くて清潔で、入口の所にあるテーブルの上には、きちんと畳んである浴衣が数十着単位で置いてあった

「うむ～」

紺色で無地の浴衣を手に取り、素早く着替えて鏡を見る

「……」

なんかバカボンみたいだな……ま、いいか

取り敢えず納得し、ロッカー室を出てみると、既に美月が着替えて待っていた

「早いな」

「まーね！　どお？　兄ちゃん」

淡い桃色の浴衣に、黒に近い紫色の帯。帯を流れる星の柄がまた良い

「うむ、可愛いぞ。良く似合ってる」

膝上丈の短い浴衣だが、確かに元気な子って感じはするな

「やったー！」

くるっと回転、美月さん

「よし行くべ！」

「うん！」

廊下で何組かの兄妹とすれ違いながら、フロアへと戻る。フロアの中心には大小バラバラな金魚用水槽が、いつの間にか五つ並べてあった

一番大きな物では縦3、横6メートル程度の巨大な水槽。小さい物では手を広げれば俺でも担げそうな大きさだ

「この試合、何組ぐらい出場するんだろうな？」

すれ違ったのは、二組ぐらいだったが……

チャーン、チャラララーン、チャラララ、チャラララ、チャラララーン

突然、競馬場のファンファーレみたいな音楽が鳴り、続いてスピーカーから司会者の声が流れる

「今回の試合、出場者は五組だ！　水槽は一組に一ヶ所を使う！　水槽はくじ引きで選んでもらうぜぃ。それじゃ最初に着替えて貰った佐藤君と美月ちゃんペア！　バニーちゃんからくじを引いてくれぃ！！」

水槽の横に控えていたバニーさんが、小さな箱を持ちながら手を大きく振っている。乳は……余り無い

「どうしたの、兄ちゃん？」

「あ、い、いや、別に残念じゃないぞ？」

「？？」

美月は顔にハテナマークを浮かべ

「良く分かんないけど、早く行こ、兄ちゃん」

俺の手を取り、バニーさんが居る方へと引っ張った

「おっと。こらこら、慌てなさんなって」

しかし

「金魚すくい……か」

雪葉も俺も超下手なんだよな……

「美月は金魚すくい得意なのか？」

「やったことないよ」

「そ、そう」

アドバイスすら出来ない俺が情けない

「けど……楽しければ良いか」

元々棄権するつもりだったしな

「よし、じゃあ気合い入れて！　頑張ろうぜ、美月！！」

「うん！」

夏の太陽より熱い戦いが今、始まる……かも

雪の妹大会　１０

さて、くじ引き。箱持ちバニーさんの前に立ち、しばし思案する
俺がくじを引くべきか美月が引くべきか。そもそも、どの水槽を狙うべきか

「兄ちゃん、わたしでっかいのが良い！」

悩んでいると、美月は期待するように俺を見上げて、そう言った

「でかいのか……」

確かに大きい水槽は、小さな水槽に較べて金魚の数が多い。どう考えても大きい水槽の方が有利だろう

「そうだな。一番でかい水槽が狙い目だな」

「うん。頑張って、兄ちゃん！」

どうやら美月は、俺にくじを引かせてくれるらしい

「よーし！　くじ運なら任せとけ（根拠無し）」

「では佐藤さん、お願いします」

「おうよ！」

バニーさんが持つ箱に手を突っ込む。箱の中にはピンポン玉程度の

大きさな玉が五個ぐらいある。これだ！

一個を掴んで箱口から取り出すと、緑色の玉だった

「緑でましたー」

「オーウ、ざんねーん。美月ちゃん達は五番の一番小さい水槽でーす」

「……」

最悪だ

「やっぱり駄目な男ね、あの人」

「リサ、出世を逃した夫に対する妻の最終的な評価みたいな言い方は良くない。此処は今風に、超ベリーバットな感じー。みたいな」

「……なにそれ」

味方からも批難（多分）の声が聞こえてくる

「ドンマイ、兄ちゃん」

「……ありがとな」

ポンっと背中に手を置かれ、慰められてしまった

「それじゃあ佐藤さんと美月さん、五番の水槽にスタンバって下さ～い」

「ええ」

元気なバニーさんの指示通りに水槽前に行き、ぼけーっと待っていると、他の四組も現れ、それぞれの水槽も決まった。つか、どの妹達も膝上丈の短い浴衣なのだが、主催者側の趣味か？

「はーい、ポイをどうぞー」

「あ、ああ。ありがとうございます」

渡されたポイは一つ。薄い紙と針金だけで出来たしょぼい物だ

「金魚をすくえるのは妹ちゃんだけだ！　妹ちゃん達は配られたポイを使って、金魚を十匹すくってもらう。最初に十匹すくった子が優勝！！　ただし、出目金に関しては二匹で一匹扱いとなるぜぃ」

「ふ～む」

自分達の水槽を見ると、出目金の数は少ないが、金魚自体が三十匹前後しかいない

「やっぱ不利か」

美月にポイを渡しながら思わず呟くと

「全然平気！　頑張ったら褒めてね？」

「……ああ！」

美月の方が俺よりずっとポジティブだな

「よーし、これで一通り説明し終わったが、質問ある子！」

「はーい」

一番大きな水槽を手に入れた子が、ぴょこんと手を挙げた。あの子、どっかで見た事あるような気が……

「えーと、瑠璃ちゃん。質問よろしくー」

「ポイが破けちゃったらどうするんですか？」

「オーゥ、ナイスな質問ちゃんだ。その時はバニーさんが代わりのポイを出してくれるぜぃ。ただし２０秒のロスがついてしまうぜベラマッチョ」

キャラが統一しないオッサンだな

「分かりましたー。ありがとうございます！」

「こちらこそ素敵な質問テンキュー。他に質問ある妹ちゃんはいらっしゃるかい？」

手は挙がらない

「オッケー。それじゃ、第四試合そろそろスタートするぜぃ！」

ウォーッ！！　っと、盛り上がる会場。凄い熱気だ

「よーし、よし。喜べロリコン共！　今回は特別に妹ちゃん達を近くで見れるぜ！！　水槽前に張った、白線まで出て来いやシスコン野郎が！」

水槽から2メートルぐらいの場所に、白いテープで張られた線。客達は、ぞろぞろと集まって来る

「こ、これは……」

なんて暑苦しい

「俺は2番の水槽に行くぜ！」

「ばーか。元気っ子ちゃんなら、5番の美月ちゃんに決まりだろ！」

いつの間にか派閥が出来ているらしく、客はそれぞれ見たい水槽前へと別れて行った。一番集まってるのは断トツで瑠璃ちゃんって子だが、美月も2、3番目に入るぐらいの人気はある

「どいて、邪魔よ！　どいてって、言ってるでしょ！！」

偉そうな声が目の前の集団から聞こえ、そこから人混みを掻き分けて花梨が強引に一番前へと出て来た

「ふー、あつ。バーゲンに比べればたいしたことないけど」

花梨は胸元をパタパタさせた後、俺達を見て

「金魚すくいのアドバイスをしてあげる！」

と、超偉そうに言う

「自信ありげだな。金魚すくい得意なのか？」

「ええ。地元のお祭りでは、祭荒らしの花梨って呼ばれているわ。金魚すくいなら一つのポイで二十匹はいけるもの」

「す、凄いな。飼うの大変だろ？」

「飼わないわよ。金魚屋のおじさんと交渉して、買い取って……って何言わせるのよ！」

「わ、悪い」

「まったく！」

「……」

なんか最近、花梨にも弱くなったな俺

「とにかく教えてあげるから二人とも良く聞きなさい」

「あ、ああ宜しく」

「宜しくー」

「ええ。先ずは、持ち方よ。ポイは指を三本使って、優しく握る」

「なるほど」

「次にすくい方。金魚すくう瞬間まで水に触れないで、捕りたい金魚の動きを空中で追う。そして獲物が捕り易い場所に来たら素早く水を切る様に金魚をすくう！」

「それでは、金魚すくいスタートだぜぃ！」

「あ！　まだ説明の途中なのに！！」

そんな花梨の文句も虚しく、金魚すくいは遂に始まった

「よーし、すくうぞー」

「いい、美月。最初は落ち着いてやるのよ？　最初が一番肝心で――」

「やー！」

花梨の言葉の途中で、美月はポイを持った右手を金魚に向かって素早く振った

「ち、ちょっと！　そんなに慌てたら……え？」

美月が持つお椀の中に、金魚が三匹入る

「三匹同時すくい！？」

「お、おおー！」

美月うめー

「これで良いの花梨？」

「え、ええ。ポイのダメージも少ないし、完璧だわ」

「よーし！　どんどん行くぞー」

「……今年のお祭りは美月と一緒に行こ」

それからも美月はポイを破る事なくバンバンと捕って行き、断トツのスピードで七匹目もゲットした

「後三匹！」

「ちょっと美月、足か開いてきてるわよ。しゃがんでる時はちゃんと足を閉じなさい。下着が見えちゃうでしょ？」

「え？　大丈夫だよ」

「何が大丈夫なのよ。実際こうしてアタシがしゃがんで覗いたら……」

そこまで言った後、花梨の表情は凍り付いた

「どうした花梨？」

「み、美月？　アンタもしかして下着……」

「うん？　もちろん履いてないよ？　浴衣着る時はパンツ履かないのが基本なんだって。ばーちゃんが言ってた」

「なっ！？」

「それより、後二匹！　この勝負もらったね！」

そう言って美月は、俺を見上げてえへへと笑う。なんて無邪気な……

「～～～っ！　アンタは～！！　あ～も～、馬鹿、馬鹿美月っ！　棄権よ、棄権！！」

「あ、ああ！」

話を聞いていたのか客達が不自然にしゃがみ始めたし、これ以上続けるのは色々とヤバイだろう

「すみません、俺達棄権します！」

「え～！　なんで！？　もうすぐで勝てそうだったのに！」

「ごめんな、大人の事情って奴で……。と、とにかく今回は諦めよう。早く着替えてきな」

「……分かった」

がっくりと肩を落とし、美月は渋々頷いた

「美月が一番だってのはちゃんと俺が知ってるから。頑張ったな美月」

「……うん！」

って事で

四試合目、棄権！

雪の妹大会　１１

そして、始まる――

ドン、ドン、ドンドコドン！！

体育館に和太鼓の音が響き、金ぴか司会者は叫んだ

「最終試合！　ツンデレ対決だぁあああ！！」

ウオオオオー！

体育館は今日一番の歓声に震え、中には失神する客も出る始末

だが俺にも分かる。いよいよ最後にして、尤も熱い戦いが始まろうとしているのだ。ちなみに元気っ子対決は希美ちゃんって子が優勝。負けた子は

「お兄ちゃん、あ～ん」

「ち、ちょっと瑠璃ちゃん。お兄ちゃん恥ずかしいよ」

体育館の端っこで呑気に弁当を食べている

「よし。頼むぞ、リサ、花梨」

「はいはい。一千万円だもの、ある程度の事は我慢してあげるわ。で、ツンデレって何をすれば良いのよ？　アンタを蹴っ飛ばせば良いの？」

「俺も詳しくは分からんが、少なくともそれは間違ってると思うぞ」

「ふぅ、駄目ね花梨は。世間の流行を何も分かってないんだから。ここは私が先に行かせてもらうわ」

自信満々に言うが、まだ何をするかも分かっていない。そんな時、金ぴかオッサンは再び叫んだ

「第五試合は、お寝坊さんのお兄ちゃんを、ツンデレっぽく起こしてみよう対決だー！！」

「やっったぁ！！」

「サンキュー、ツンデレ！」

「……」

盛り上がる会場。そしてやっぱり盛り下がる妹達

「なんだかアタシ、頭痛くなってきたわ」

「なら休めば？　どうせ花梨が出ても、私の優勝は間違いないし」

「リサが本当に優勝出来るのならそれでも良いんだけど」

「なによ！」

「なによ？」

相変わらず仲が悪そうな二人だな

「リサちゃん、花梨ちゃん。仲良く頑張らないと駄目だよ？」

「……ハァ。分かったわよ雪。一緒に頑張りましょリサ」

「ふん。頭下げたら、一緒に頑張ってあげても良いわよ？」

「あのねぇ！」

「そこまでだよ、二人とも。ほら、試合内容の説明が始まるみたいだ」

風子は喧嘩しそうだった二人をやんわりと止め、壇上の金ぴかオッサンに視線を移す。つか、やっぱ風子すげー

「試合内容は簡単だ。今からこの体育館に急いで部屋のセット組む。そのセットの中で、ベッドに寝ているお兄ちゃんを起こす、それだけだ。しかしそれは宇宙よりも可能性に満ちたレジェンドであり、神が与えし奇跡でもあって、時空間の流れがうんたらこんたら」

「……」

そんな説明されても分からんて。他の出場者もそう思っているだろうなと周りを見てみると、結構頷いている人が目立つ

「これは勝てそうだね、由良」

「シスコンのくせに気安く名前を呼ばないでくれない？」

「これ俺らの勝ちだな、美紀ちゃん！」

「ちゃんは止めて、気持ち悪い」

「……」

あちこちからギスギスした会話が聞こえる。これは、ただ仲が悪いだけでは？

「セットが出来るまで、三十分の休憩を入れるから、それまで自由にしてくれぃ！　開始予定は一時五十分。それまでには戻って来ておくれ」

「三十分後か。ジュースでも飲もうぜ、奢るよ」

「奢り？　やったぁ！」

ぴょんとジャンプ、花梨さん

「か、花梨ちゃん？」

「あ……べ、別に嬉しくなんてないんだから！　馬鹿！！」

「馬鹿って……」

奢る上に罵倒までされる俺って一体……

「ま、まぁ、とにかく外に行くべ」

休憩だ、休憩

「あ、あいつすげぇ。優勝した妹ちゃんを二人も連れて……それにあの子は俺の一押しだった美月ちゃん。ちくしょー！」

「なんだよ、なんなんだよこれは！　これが平等かよ、これが民主主義なのかよ！　生まれた時から俺は負けてるじゃないか！！」

「う……」

憎しみが篭った目が、俺を貫く

「お兄ちゃん？」

「……この近くにあったから、ファミレス行こうぜ」

今はただ、人の目が無い所へ行きたい

雪の妹大会　１２

「えっと、ドリンクバーで良いか？　腹減ってるなら食い物も取るぞ」

公園を東に出て直ぐにあるファミレス。店内は妹大会に来ていそうな客ばかりで埋まっていたが、幸いにも禁煙席には仕切りがしっかりした個室に近い場所が空いていて、俺達はそこへと入った

「僕はドリンクバーだけで構わないよ。ありがとうお兄さん」

「アタシもそれで良い。確か一杯の原価率が五円くらいだったから、四十杯飲めば……」

「同じく。後、ピザ」

「じゃあ私は、このパフェ。食べてあげる」

「わたし、肉！　この三種地獄肉セット！！」

「了解。雪葉はどうする？」

「カバさんうどん！」

「ええ！？」

メニューを見ると、確かにカバさんうどんの写真が載っていた

「あの動物園と何か関係あるのだろうか……」

それともカバブーム？

「ま、まぁ良い。俺はツナトーストを……花梨達は腹大丈夫なのか？　遠慮するなよ？」

「……み、ミックスサンド……」

「僕は大丈夫だよ。少し胃腸が弱いんだ」

「そうか。じゃ注文するぞ」

店員を呼び、ドリンクバーを六個と各自の食い物を頼む

「は、はい、ご注文承りました。そ、それであのぉ……」

なんだか、もじもじしている女性店員。俺に惚れたか？　……そりゃないな

「妹大会に出ている方々ですよね！　さっきシフト入る前、生放送で見てました！！」

「生放送？」

「はい！　地方テレビでやってます！」

確かにテレビ出演はオッケーしたが、まさか生放送だったとは

「それで……千里ちゃん様のご活躍、見させて頂きました！！」

「ファンゲット」

「サインお願いしても良いですか？」

「マネージャーを通して」

そう言って千里はリサを指差す

「宜しくお願いします、マネージャーさん！」

「くっ……今に見てなさい千里。明日には私がトップスターになるんだから！」

「この国では金髪の需要はない」

二人の間にバチバチと青白い火花が散る。なんか良く分からんが、とにかく熱いぜ

「あ、あのサイン……」

「私が書いてあげる。感謝して平伏しなさい」

「……馬鹿でしょ？　あの子」

俺に向け、花梨はため息混じりに呟く

「慣れてるよ」

夏紀姉ちゃんで

さて、それから二十分。なんだかんだと盛り上がりつつ、一通り食い終わった所でそろそろ時間だ

「よし、戻るか」

「うん。頑張ってね、お兄ちゃん達！」

「ふ」

可愛い奴め

雪の妹大会　１３

「おー。超すげー」

レストランから体育館に戻ると、既にその真ん中には簡易な部屋のセットが組まれていた。しかし簡易とは言え、本棚やベッド、左半分だけあるベニヤ板の壁があり、ドラマ撮影が出来そうなぐらいしっかりしている

「すげーね、兄ちゃん！」

「ああ。無駄に金掛かってるよな、この大会」

どこがスポンサーなんだろう？

「……ふん。私のテレビデビューにしては貧相だけど、花梨と決着をつけるぐらいは出来そうね」

「あ―そう。良かったわね」

温度差が激しい二人だな

「とにかく出場のワッペンを貰って来ようぜ」

「そうね行きましょう」

そう言って花梨が先頭になり、受付バニーさんの方へ向かうと、リサがそれを早足で追い越した

「ふふん」

「……馬鹿じゃないの？」

「ばっ！？　な、なによ！　馬鹿って言う方が馬鹿なのよ！！」

「はいはい」

「う、あ、アホー！」

「……」

リサは夏紀姉ちゃんに似ているかと思ったが、この哀れさはむしろ俺に近いかも……

「頑張れよ、色々」

何となく小声で応援してみた

「すいません、俺達出場したいんですけど」

バニーさんの前に立ち、そう言うと、バニーさんは俺を見て驚いた顔をする

「なにか？」

「あ、失礼しました佐藤様。この大会、全種目出場したお兄様は今までお一人しかいかなかったもので、少し驚いてしまいました」

「そうなんですか？」

「ええ。その方は二十二人の妹様を連れ、全ての部門で優勝された伝説の勇者です。もう二度そのような方は現れないと思っていたのですが……」

バニーさんは、憧れと尊敬を感じる目で俺を見つめた……が、正直そんな変態と一緒にしないで欲しい

「あ、失礼致しました。こちらがワッペンとなります。七番と八番、お兄様は両方ですね」

「どうも」

「私、七番貰うわ。文句ある？」

「ないわよ。頑張りなさい、リサ」

「あ……か、花梨なんかに応援されたって、頑張らないもん！」

いや、頑張れよ

「う～ん、ナイスツンデレですね。優勝目指して頑張って下さいませ」

「ええ。ありがとう」

後は試合が始まるのを待つだけだ

七番のワッペンを胸元に付け、雪葉達の元へと戻る。軽い緊張と、一千万円の期待で落ち着かない中、いよいよ最後の締め切りが発表

された

「ツンデレ部門、出場者の方は後五分以内に受付を済ませて下さい。それを過ぎますと、参加出来ません」

一度別の競技に参加した妹は、他の競技には出れない。そんなルールがあるので、今まで出なかった妹達は最後であるこの対決に出る筈だ。だが、思ったより人の流れが少ない

ピピー。笛の音が体育館に響く

「以上で受付終了です。出場者の方々は、セット前に集まって下さい」

「よし……行くぞ！」

「ええ」

「勝負よ、花梨！」

「いってらっしゃい、お兄ちゃん達」

「がんばれー兄ちゃんと花梨とリサ！」

「ふふ。応援してるよ、三人とも」

「金髪の珍プレイ期待」

みんなの応援？　を得て俺達は行く。最後の戦いへ

「……私は神を信じない。だが、もし私の命が尽きた時、私はこう言って死のう。神様、ツンデレをありがとう！　イィヤッハー！！」

ヤー！！

「それじゃ、一番目の妹ちゃん！　宜しくベイビィ！！」

「一番目、祐樹お兄ちゃんと初美ちゃんお願いします」

セット前に行くと、直ぐに金ぴかオッサンと、受付バニーさんが最初の兄妹を紹介した。そして紹介された兄妹はセットの上にあがった。兄はそのままベッドに入って寝たふりを始める

「これはしっかり見とかないとな」

一番最初は誰よりも新鮮な演技を出来るが、参考にする演技が無い為、不利だ。この二人は、どこまでやれるか

ジリリリリ

目覚ましが鳴り響く。そこへドアが開き、妹が飛び出して来た

「あ―まだ寝てるの？　早く起きてー」

「う～ん、まだ眠いよ初美」

「……起きろっつてんだろ、こら？　くせー息吐いて無駄に二酸化炭素を撒き散らかしてんじゃねーぞボケ！」

「は、はい！　今、起きます！！」

「あはっ、良かった～。はーやく起きないと、コンポタージュが冷めちゃうぞー」

「……あれで良いのか？」

まだ続いている芝居を見ながら、花梨に聞いてみる

「……さあ？」

花梨にも分からないらしい

「なによあれ。あんなのただのムカつく女じゃない。あれじゃ駄目ね」

リサはつまらなそうに呟いた

「……そうなのか？」

「ふふん。見てなさい、間が持たなくなるわ」

その言葉通りセットの上では、起きた兄に対して妹は脈絡の無い話を繰り返している

「そして逆ギレ」

「も～お兄ちゃん！　頷いてばっかいないで何とかしてよ！！」

「ほ、本当だ……」

「ゲームオーバー。おとい来なって奴ね」

すげぇ……。コイツ、ただもんじゃねえ！！

「あーあ、やっぱりレベル低い。花梨、見てなさい。断トツ優勝してあげるから」

「……期待してるわ」

花梨の疑惑に満ちた目に気付かず、リサは満足げに笑った

だがその次の兄妹達もリサが予想した通りに展開を進めて行き、それ以降の兄妹もリサは次々に当ててゆく。どうやら花梨の疑惑は外れたようだ

そしてあっという間に時間は経ち、六組目の兄妹も終了。遂に俺達の出番となった

「行くわよ、恭介お兄ちゃん」

「ああ。頼むな、リサちゃん」

前に一度舞台に出た。度胸はついているはず

「それでは七番の恭介君とリサちゃん。宜しくお願いします！」

よし、行くぞ俺！

「がんばれ～、お兄ちゃ～ん」

ああ、雪葉。一千万捕って温泉旅行だぜ！

俺は大きく頷き、セットの上へと乗り立った

雪の妹大会　１４

セットに上がり、最初に俺はベッドへと近く。そう、まずはここからだ

六百個以上ありそうな俺を注目する目と、三台のカメラ。以前演劇をやった時とは較べものにならない緊張感と、吐き気が俺を苦しめる

「……ふー」

息を思い切り吐き、震える足をごまかしてベッドへ入り込む。よし、頑張るぞ！

「ぐーぐー」

ジリリリリリ

始まった！　ドアがガチャリと開く音がし、止められる目覚まし時計。そして

「お兄ちゃん、起きて」

甘ったるい声で俺を呼ぶリサ

「ぐーぐーぐー」

「起きてー」

リサは俺を軽く揺すり、一生懸命起こそうとしている

「ぐーぐーふがふが」

……寝たふりも結構難しいな

「もーお兄ちゃんたら、はやく起きないとー」

ぎしっ。スプリングの音が鳴った。どうやらリサがベッドの上に乗ったらしい。何をする気だ？

「……踏むわよ？」

「ぐえ！？」

奴は冷たく言い放つ！　ってか、腹！？

「あら、ごめんなさい。もう踏んでたわ！」

「ぐ、こ、この」

「え？　なぁに、お兄ちゃん。お顔も踏んで欲しいって？　変態さんだぁ」

「ち、ちよっ！　それ違っうげ！？」

「うふふ。ねぇ、どうなの？　嬉しいの？　妹にこんなことされて嬉しいの？　ねぇ！　ねぇ！！　……あは。あはははははははは！！」

「こ、こら！　いい加減に」

「あ、起きた。じゃ～あご褒美。あげるね？」

リサは履いている靴下を脱ぎ、俺を冷たく見下ろして言い放つ

「ほら、舐めて良いよ。美味しくお食べ、豚」

「……おいこら」

起き上がり、リサの頭を掴んで縦に振る

「あ、あ、あ～～！　やめて～」

「まだ会って間もないけど、お前には少し説教をする必要があるようだ」

このままほっといたら、夜の女王様が誕生してしまう

「はなせ変態～」

「少しは反省しろって」

更に倍。はらたいら！

「あ～バターになる～。ご、ごめんなさいぃ、調子にのってました～」

「……よし。もう人の顔を踏もうとするなよ？」

頭、解放

「ううぅ……わ、分かったわよ」

リサは俺を睨み、スカートのポケットからコンパクトを取り出す

「あ～もう、人の頭を勝手に掴んで。髪が乱れちゃったじゃない、乱暴なんだから！」

「悪かった、悪かった」

しかし、これはもう駄目だな。周りの観客も引いて……

「……踏まれたい」

「はい？」

「ナイスツンデレ！」

「最高だ、最高だよ、あんたら！！」

パチパチと拍手が鳴り響き、俺達は大歓声に包まれる。てかなんで？

「ほら見なさい。所詮、豚なんてこんなものなのよ？　うふふ」

このへんてこな状況にリサは満足し、唇を軽く舐めて妖しく微笑む

「さぁ、最後の決めゼリフを言ってくれぃ！　妹ちゃ～ん！！」金色オッサンが興奮気味に叫び、その叫びを受けたリサは、俺をじっと見つめて最後の言葉を言った

「でも、私はそんなお兄ちゃんが大好きです！　えへっ♪」

「……」

だめだこりゃ

雪の妹大会　１５（前書き）

そのうち削除

おもいで

小学校六年の卒業アルバム

カッコイイと思う男子

１位　内藤君　↓スポーツ万能で、カッコイイ！

２位　仁賀君　↓優しくてカッコイイ

３位　増川君　↓みんなのリーダー！

友達になりたいと思う男子

１位　佐藤君　↓確か四年連続だよね、おめでと～！

中三

モテそうな人

１位　丸山君　↓面白いし、顔が良い！

2位　石田君　↓ちょっと恐いけど、実は優しいから

3位　早瀬君　↓実家がお金持ち！　うそうそ、格好良いよ！

友達かなって思う人

1位　佐藤君　↓なにげに三年連続っ！　おめでと～

高一

もう友達で良いじゃんって思う男

1位　佐藤君　↓屍な所が良い。でも屍を彼氏にするにはちょっと……

「……はぁ」

「ん……恭介」

「え？　なんだい、秋姉」

「……もし恭介が同級生なら、私、カッコイイ人に恭介を投票したよ？」

「あ、ありがとう」

その言葉で明日を頑張れます……

雪の妹大会　１５

「どお、花梨。これが私よ」

止まらない拍手や歓声の中、芝居は終わり、俺達はセットを降りる。
そんな俺達を呆れ顔で見上げていた花梨へ、リサは後ろ髪をゴムで縛りながら自信満々に言った

「へーそう」

感情を感じない棒読みだが、気持ちは非常に分かる

「ふふん。貴女に出来るかしら？　あの完璧な演技」

「そうね、出来ないわ」

やる気もなさそうだ

「うふふ。これで私達の優勝は決まりね、恭介お兄ちゃん」

花梨の言葉に気を良くしたのか、リサは俺の腕をとって喜びを表す

「だと良いが……」

確かに演技中の盛り上がりは一番だった。後、残っているのは花梨を入れて三組だし、優勝の二文字が近付いている感触はある

「……」

「ん？　どうした花梨？」

「あ！　べ、別に！」

花梨は俺とリサを複雑そうな顔で見ていたが、声を掛けると一気に不機嫌顔になってしまう

「花梨？」

「う～ん、さてと。それじゃ私は貴女が一番見える所に移動するから。私の前でせいぜい足掻きなさい」

そう言ってリサは、鼻歌まじりにセットの正面の方へと向かって行く

「……あいつ本当に花梨が好きなんだな」

花梨に構ってもらいたくてしかたがないのだろう

「よし、次は俺達だ。頑張ろうぜ」

「……もう優勝しそうなんでしょう？　あたしが出たって、リサより良い演技出来ないわ」

だから出なくても良いじゃないと、花梨は言う

「……俺はリサよりも花梨、お前に期待しているんだ」

気の強さなら、お前が一番だ

「え？　あ、あたし？」

「お前とならやれる。そう思ったから出場したんだぞ。俺に力を貸してくれ」

「……うん」

花梨がコクンと頷いた所で、俺達の紹介が始まった

「先に行って待ってるぜ花梨！」

「うん！」

長かった妹大会、これが最後の戦いだ。全力で行く（主に花梨が）！

「出番だぜぃ、恭介お兄ちゃんと、花梨ちゃん！　君達のパフォーマンスシスコン野郎共に見せ付けてやれー」

「おうよ！」

セットに上がり、例によって俺はベッドに入り込む。この寝たふりが中々難しい

「ぐーぐー」

ジリリリリリ

目覚ましが鳴った！

ガチャリ。

「あ、えと……ま、まだ寝てるの、お兄ちゃん」

若干たどたどしいが、演技は出来ている。良いぞ花梨

「し、仕方ないわね。起こしてあげるわ」

ゆさゆさ。軽い揺さ振りが、逆に心地良い

「起きて、お兄ちゃん」

「ぐーぐー」

「お、お兄ちゃん？　起きてって」

ゆさゆさ、ゆさゆさ

「お兄ちゃん！　いい加減に起きなさい！」

ゆさゆさ、ゆさゆさ、ゆさゆさ

「ぐーぐーぐ」

まだだ、まだ行ける！

「も、もぉ～。早く起きてくれないと困るんだから！」

揺れが更に強くなる。酔いそうだ

「う……」

「お、起きた？」

「……ぐーぐー」

「ちょっと！　まだやらせる気！？」

「ぐーぐーぐー」

「これ以上何をしたら良のか分からないわよ！」

「ぐーぐーもう少し、ぐー」

「もう少しって……。無理よ」

「ぐーぐーがんばれ、ぐー」

「無理って言ってるでしょ、馬鹿っ！　良いからさっさと起きなさいよ、馬鹿、馬鹿、馬鹿！！」

「ぐほっ！」

花梨のパンチが腹部にヒット！

「……ぐーぐー、ムカムカ」

「う……お、怒った？」

「ぐーぐー！」

「ご、ごめんなさい、お兄ちゃん。謝るから……お、お願い、起きて」

泣きそうな声で俺を起こそうとする花梨。なんだか俺が極悪人みたいな感じに……起きよう

「う、うーん。起きたぞー」

「あ……や、やっと起きてくれた……って、何でもっと早く起きてくれないのよ、馬鹿！」

花梨は、潤む瞳で俺を睨む。どうやら一人で演技するのが本当に辛かったらしい

「ああ、ごめんな。起こしてくれてありがとう、花梨」

「ひ、人前で頭撫でないでよ！」

「悪い、悪い。しかし」

俺は、じっと花梨を見つめて

「な、なによ？」

「よく頑張ったな花梨。ありがとう」

感謝の気持ちを伝えた

「う……ばか！」

「何故に罵倒！？」

礼言ったのに！

「ま、まぁ、とにかくこれで演技が終わったわけだが」

客の反応は鈍い。駄目だったのだろうか

「……では、お二人とも最後の言葉をお願いします」

金ぴかオッサンが、いつになく低いテンションで俺達に指示をした。

やっぱ駄目か

「……ま、それでも最後まで頑張ろうぜ」

思い出にもなるだろう

「最後って……も、もしかしてあれ？」

「ああ。お兄ちゃんが好きって奴だ」

「っ！　で、でも……」

「それで終わりだ。頑張れ、花梨」

「う、うぅ」

花梨は困惑の表情をし、そのまま顔を伏せてしまった

「……花梨？」

「ほ、本心じゃないんだから……演技なんだからね」

「ああ」

「ん……き」

蚊が鳴く様な、小さな声

「え？　なんだ？」

「だ、だから……き」

「聞こえないぞ花梨。もっと大きな声で言ってくれ」

「だ、だからぁ……」

「どうした花梨！　頑張れ！！」

今、主役は間違いなくお前だ！

「～～っ！　だ、だから好きだって言ってるでしょ、ばかぁ！！」

「ば、馬鹿って……」

だめだこりゃ……

「……優勝」

諦めていると選手控え所から、ぼそりと声がした

「……え？」

「もう、君達で優勝で良いよ！　僕達が勝てそうに無いよ！！」

まだ演技をしていない組の者が、半ギレ気味にそう言い、諦めのため息を漏らす

「……そうだな、あれは本物だ。あれの後じゃ、俺達はピエロになってしまう。ごめん、静香」

「仕方ないよ、お兄ちゃん。静香、お兄ちゃんの事大好きだから、あんな風に責めたり出来ないもん」

最後の一組もまた、俺達へ賛美の言葉と拍手を送り、棄権を表明する

「あ、あなた達……ふぅ仕方ないわね、兄さん」

「うん。悔しいが、審査するまでもないだろう。異議ある人だけ、審査を受ければ良い」

既に演技を終えた者が、そう言葉を残し、控え所を去って行く。それに続いて他の兄妹達も、負けたよ、ナイスツンデレなどと言い、一様に去って行った

「こ、これは……」

「……大変な事になりました。まさかこの目で、本物のツンデレが

見れるとは」

「誰が本物よ！」

金ぴか司会者の声に、花梨が反応する。ツンデレ呼ばわりが嫌らしい

「シスコンの客ども！　審査はいるか～！？」

いらないぜ！

花梨ちゃん最高だ～

うぉー！！

体育館は声援と感動で震え、地鳴りの様な拍手に包まれる

そして最後に、花梨の自称ライバルが俺達の前に立ち、言葉を紡ぐ

「……負けたわ、花梨。貴女がナンバーワンツンデレよ」

「ツンデレ言うな～！」

「……」

何が何だかよー分からんが、とりあえず

第五試合、優勝！

雪の妹大会　16

ツンデレ試合が終わり、興奮が冷めやらない体育館。俺達は壇上で優勝メダルを貰い、何故かそのまま待たされた

「え～、各部門の優勝が決まりました。各部門の優勝者様は壇上へお越し下さい！」

乳でかバニーさんが、マイクを使って優勝者に呼び掛けると、各部門の優勝者達は壇上へと向かい始める

「やったね、お兄さん」

「恭君。私、ツンデレ部門出たかったかも」

最初に来たのは風子と千里。この二人と花梨とで三人が優勝者だ、これは一千万貰ったか！

「ツンデレには勝てないかもな……」

「恐ろしいツンデレだよあれは」

残りの二組も上がって来たが、どちらも諦めの雰囲気が漂っている

「うぅ……一千万円、一千万円」

顔を赤らめ、花梨は恥ずかしそうに俯く。一千万の為、色々と我慢しているようだ

「……もう少し我慢してくれな、ツンデレ」

「誰がツンデレよ！」

「す、すまん」

つい釣られてしまった

パンパカパーン！

「うぉ！？　な、なんだいきなり！」

「妹……それは宇宙の神秘」

ファンファーレが鳴った後、不思議っ子対決の時にも聞いた声が、体育館のスピーカーから流れる

「人は何故妹を求め、妹を愛すのか」

な、なんだ！

誰だこの哲学を語る紳士は！？

んな風に会場はざわめき始め、皆がスピーカーを見つめる。その時、誰がが叫んだ！

「あそこだ！　あそこに誰か居るぞ！！」

体育館の2階、作業用のキャットウォークで腕を組み、俺達を慈愛の瞳で見下ろすスーツ姿の男

「あ、あれはＳＩＳＴＥＲ愛好会一番隊隊長、山口　真さん！？」

「な、なんと、あの誇り高きＮＡＩＴＯが！」

極一部の奴らが驚き戸惑う。なんか前にもこんな事があったような……

「とぅ！」

謎の変態はキャットウォークから飛び降り、何事も無かったように着地。そして、にこやかに微笑みながら

「最終対決は、兄の腕立て伏せ対決だ」

などと意味不明な事を言って変態は壇上へ上がって来る

「腕立て伏せ？」

いや、てかツンデレが最終対決だろ？

「各部門を優勝した兄達が制限時間内に腕立て伏せをし、一番回数が多かった兄の妹にゴッドシスターの称号を与えよう」

「え！？　ち、ちょっと待て！　それじゃ俺達が優勝して来た意味が」

「妹の応援が沢山ある。兄ならば、それだけで限界を超えられるはずだ。よって佐藤君！　君は断然有利なのだよ！！」

俺に向かって、どうだと言わんばかりに指を差す変態

「んなアホな……」

絶句し、他の兄達を見てみると

「お、おっしゃー！　まだ俺らにもチャンスがある！！」

「やってやる……やってやるぞ！」

燃えていた

「……マジかよ」

俺、腕立てなんて５０回ぐらいしか出来ないぞ

「とにかくこれは私を含めたスポンサー達の意向だ。受け入れてほしい」

「……」

「……私はね、かつて２２人の妹を引き連れ、最強の妹使いと呼ばれた伝説のキング。彼の魂を君に感じるんだ」

感じるなよ

「君ならば、彼を越えられるかもしれない」

越えないから

「さぁ、佐藤君！　我らに君の力を……妹魂を見せてくれ！！」

「妹魂って……」

相手の二人は、俺より運動神経が良さそうだし、テンションもがた落ちだし……

「お、お兄ちゃん……頑張って、お兄ちゃん！」

雪葉？

「兄ちゃんなら絶対勝てる！　いっけー！！」

美月

「花梨の目が正しいか、見極めてあげるわ」

リサまで……

「後はお兄さんの望むように」

風子

「今日は結構楽しかったし、おおむね満足。最後のオチきめて」

千里！

「正直一千万円は欲しいけど……。ま、ここまで来たらどうでもいいわ。それより、最後なんだから、ちゃんと頑張りなさいよね！」

お前ら……

「ああ、分かったよ。やるだけやってみる。……ありがとな、花梨」

「……うん」

「まったく……。ふ、俺は良い妹達を持ったものだ」

「ただし本物は一人。リサ、答えをどうぞ」

「……流石に私も空気読むわよ？」

「よーし！」

なんかテンション上がって来たぜ！！

「……どうやら内に眠る猛き獅子が目を覚ましたようだね、佐藤君。それじゃ最終対決、いよいよ始まるよ」

「ああ！」

「では各お兄さん方、腕立て伏せの準備をお願いします」

泣いても笑ってもこれが本当に最後。悔いを残さない為に全力でやってやる！

揺らがない彼女

お蔭様でお気に入り９００ありがとうございます&ギックリ腰、少し回復記念。そのうち削除

今日の燕さん。その５

「ううむ～。なるほど、手料理か……」

日曜日昼。午前中の予定を全て消化し、夕方の舞稽古まで自由に出来る時間を作れた燕は、彼女にしては珍しく就寝以外の目的でベッドに寝そべりながら、雑誌を真剣に読んでいた

「む！　キ、キスの種類だと？　なんと破廉恥な……」

と批判しつつも、足をパタパタさせながら軽くキス顔を作ってみる辺り、興味津々なのはバレバレであった。しかしこんなアホな姿を家族や友人に見られでもしたら……

「おじゃましますね、燕」

「ひゃあ！？　ゆ、ゆかな！」

部屋のドアが突然開き、咄嗟に雑誌を枕の下に隠した燕。視線の先には、彼女の友人であるゆかなが、穏やかに微笑んでいる

「の、ノックくらいしたまえ！　それに来るのなら、前もって連絡

がほしい」

燕は気まずそうにベッドから起き上がり、友人の為に洗い立てのクッションをフローリングの床にひいた

「ごめんなさい。びっくりさせてしまったみたいね」

頬に手をあて、ゆかなは申し訳なさそうにそう答えた。だが何処か面白がっている風でもある

「それにしても……燕もそういう雑誌を読むのね」

ゆかなは出されたクッションに腰を沈めながら、ちらりと枕元に視線を移す

「うっ！？　あ、あれは別に……」

「気にする事は無いわ、みんな普通に持っているもの」

「え？　そ、そうか？」

「ええ。最近はインターネットが多いみたいだけれど、私は紙の方が健全だと思っています」

「……なんの話だ？」

「だからえっち本の一つや二つ、隠す事ないわよ燕」

「違う！！」

～渋々説明中～

「別れた元彼と復縁する方法？」

燕が読んでいた雑誌はタウン情報系の物で、特集の一つとしてそんな企画が組まれていた

「べ、べつにその特集目当てで購入した訳では無いぞ！　あったから少し読んでみただけだ！！」

「一途ね、燕」

「だ、だから違うと言っているっ！」

わたわたと、あわてふためく燕に対してゆかなは全く動じず、ゆっくりとページをめくる

「そうねぇ……色々なキスの仕方？」

「ぬ……は、破廉恥極まりない低俗な内容で、私も困っていたのだ。まったく、なんとも呆れた物書きよ」

若干引き攣りながらそう話す燕に対し、ゆかなは憂いを帯びた顔で囁いた

「キス……私と試してみない？」

「にゃ！？」

「冗談よ」

「た、たちが悪い冗談は止めてくれ！」

びっくりして、猫の様に跳ねてしまった燕の姿を見て、ゆかなは嬉しそうにニコニコする。基本的に彼女はSなのだ

「ごめんなさい。でもキスが出来る仲なら、もうとっくに復縁しているとも言っても良いわよね」

「む……確かに」

「燕は恭介君とキスをした事はあるの？」

「な、何を聞く！？」

「約一年半年の付き合いだもの。してない筈が無いわね」

誘導尋問。この副会長の特技である。しかし、いつもの燕ならば何も答えず、即座にこの話を止めにするが、今日の燕は非常にテンパっていた。だからついウッカリ

「それは……まぁ……少しは……」

と、答えてしまう

そしてそれをこの副会長は逃さない

「あの頃の二人は凄く仲が良かったものね。恭介君と燕の相性は最高だと思うわ」

「ぬ……ま、まあそれは確かにそうかもしれないな。うむうむ」

「始めてのキスは何処で？」

「公園だ。おでこに」

「おでこ？」

「うむ。おでこに2回だろ、頬に1回。そ、それと……ううむ～」

「……あなた、いちいちキスの数を覚えているの？」

「な、なんだね、その可哀相な人間を見る目は」

「実際に可哀相だもの。それだけ少ないと言う事でしょ？」

「べ、別に良いではないか！」

「恭介君も燕も積極的ではないから……他の男の子と付き合ってみたりはしないの？」

「しない！」

「即答ね」

「好きな人が居るのに、他の男性と付き合えるほど、私は柔軟な思考を持ってはいない」

「じゃあ恭介君に恋人が出来たら？」

「それは……諦めよう。彼との約束だ」

「頑固者」

「ふん。どうせ私は頑固で可愛いげの無い女だ。そんな事、自分でも分かっている」

燕は唇を尖らせ、拗ね始める。他人には絶対に見せる事がないこの姿は、ゆかなに甘えていると言っても良いだろう

「拗ねないの。でもその時は仕方ないわね、私も恭介君と燕の復縁は諦めるわ」

「……別に諦めなくても良いではないか」

「え？　ごめんなさい、聞こえなかったわ。もう一度言って」

「な、なんでもない！　ニュース見る！」

気まずさに、燕はテレビのスイッチを押す。すると

「お兄ちゃん、カッコイイ！」

「ふふ。流石だね、お兄さんは」

「恭くん。ナイス」

「兄ちゃん、超すげー！　超やっべー！！」

「や、やるじゃないアンタも……ちょっと見直した」

「わ、私の方が活躍してた！」

噂の元彼が変な大会に出て、少女達にチヤホヤされていた

「……」

「……早くしないと恭介君、取られてしまうわよ？」

「なっ！？　い、いやしかし……と言うより何故テレビに！？　そ、それに妹大会とは一体」

ゴクリと燕の喉が鳴る。自分の想像力を越えた光景に、彼女は戸惑った

「此処は森林公園ね。此処から３０分ぐらいで行けるけど……行ってみます？」

「え！　あ、いや、しかし時間は……あるけど」

視線を落とし、弱気に呟く燕を見て、ゆかなは仕方ない子ねと軽い溜息をつき、

「行きましょう燕。私も見てみたいから」

と言った

「う、うむ……君がそう言うのなら付き合おう」

この気弱で頑固で大切な親友が、幸せになるように手助けをする

「ありがとう」

数年前のあの日誓ったこの決意は今までも、きっとこれからも変わる事なく彼女の胸の中にある。だから

「それでは、行きましょう燕」

彼女は揺らぐ事が無いのだ

雪の妹大会　17

「……腕立て伏せ、それは男と男の意地。腕立て伏せ、それはほとばしる汗と筋肉の共同作業！　今宵マッスルロマンを見せてくれるのはこの三人だ。まずはシスターマイストロ、光永　幸一！」

「奏でてやるよ。俺のオーケストラを」

「一日三十回は妹の写真にキスをする変態、陣内　悟！」

「最近、新しい写真撮らせてくれないんだよね」

「そして……今日伝説が蘇るか！　シスコン王、佐藤　恭介！！」

「誰がシスコン王だ！」

「対決内容は超単純だ。３０分の時間の中で、一番多く腕立て伏せをした奴が優勝。途中、崩れてしまったらその時の回数で終了。オーケー？」

司会の金ぴかオッサンの説明に、俺達は頷く。壇上には三枚のマットと、顎でスイッチを押すタイプの腕立て伏せカウンターがある

俺達はそれぞれのマットに別れて準備運動を開始する。その途中、雪葉達はバニーさんに連れられて体育館を出て行った

「妹ちゃん達が戻って来たら、勝負開始だ。スペシャルサプライズだからな、気合い入るぜ～」

気合いなんざとっくに入ってんだよ！　さっさと始めてくれ。なんて思っていたら、会場がざわめき出した

「風子ちゃん凄くカッコイイね！」

「ありがとう雪。でも少し恥ずかしいね」

「どう花梨、この私の完璧なスタイルは」

「別に」

「な、なによその醒めた反応！」

「風ちゃん見た後は、リサじゃ貧相すぎ」

「うるさい千里！」

「スカートやだなぁ。でも兄ちゃん喜んでくれるかな？」

会場の観客達は言葉を失い、何かを見ている。その視線を追うと、体育館入口から白と赤が冴えるチアガール姿の雪葉達が入って来た。太股まであらわになってしまっている短いスカートが、保護者である俺を心配させてくれやがる

「どうだシスコンども！　このスペシャルサプライズ！！」

ウオオー！！

「俺、この大会終わったらを死ぬつもりだった……でもまだやれる。

俺、まだやれるよ！」

「その通りだ、君。日本にはまだ妹達が居る。俺達は妹達が平和に暮らせるよう、この日本を守らなければいけないのだ。死んでなんかいられないだろう？」

「はい！　みんなー頑張ろうぜ日本！！」

オー！！

「……」

なんだか分からんが、観客達は日本を守る世界を守ると団結し始めた。俺達の事は無視かいな

「最終決戦、腕立て伏せスタート！！」

「いきなり！？」

呆気に取られている内に、突然合図で始まった腕立て伏せ対決。俺は直ぐに腕立て伏せの姿勢を取り、とりあえず一回目をやってみる

「頑張って、お兄ちゃ～ん」

「ああ！」

壇上へ急いで向かって来ている雪葉の応援に応えるべく、１、２、３と素早く腕立て伏せ。中々のペースだ、これなら６０回ぐらいいけるかも

チラっと横目で他の出場者を見てみると

「ふんふんふんふん！」

「ふっっはっ！！」

「早っ！？」

奴らの回数は……３０回と２２回！？

「ま、マジかよ」

俺なんかまだ7回目なんですけど……

「兄ちゃん、もっと早くしないと負けちゃうよ！」

「う……あ、ああ」

ペースを上げて、何度か腕立てを繰り返す。少しずつ腕が重くなり始め、怠くなってきた

「ちょっと。私が応援してあげてるのに、何よこれ。全然勝負になってないじゃない！」

「恭君、ひ弱」

「お兄さんは頑張っているよ。他の二人が早過ぎるんだ」

他とそんなに差があるのか？

「現在、一位は光永君で９７回！　二位の陣内君は８１。そしてどうした佐藤君、２８回だぞー」

き、９７？　まだ2、3分しか経ってないのに、もう俺の最高記録を越えてるじゃないか……

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「が、頑張りなさいよ！　……負けたって良いんだから」

「まだまだ時間あるから全然逆転できるよ兄ちゃん！」

「六人の妹ちゃん達に囲まれ応援されている佐藤君！　この応援をパワーに逆転出来るかー！」

「ひぃはぁ、ふぅひぃ」

無理だって。応援でなんとかなるんなら、阪神なんていつも首位だって

「光永君、開始5分で１５０回到達だ！　中々早いぞー」

ああ、疲れた。何で俺は日曜日にこんな事やってんだ？

「ふひ……はひ……」

「残り時間、５０分。まだまだ序盤だぜ！」

目が霞む。動悸、息切れ等、求心が必要な症状も現れてきた

「佐藤君、ようやく７０回到達だ！　一位との差は何と１４４回！！　もう追い付く事は不可能なのか？」

腕が限界だ。もう駄目、ああ駄目だ、駄目だったら駄目なのだ。所詮俺は姉好きのロリコンで、死んじゃった方が良いただの変態なのさ。あははは

「頑張って、お兄ちゃ～ん」

カッコイイ兄ちゃんを見せたかったけど……。ごめん、雪葉。代わりに明日お前の好きなフルーツサンドをカバさん柄に作って――

「……がんばって」

……？

「がんばって、恭介」

「こ、この声は？」

そ、そんな……、そんなはず……。だ、だけど

「……恭介」

「あ……ああ……」

最後の力で顔を起こす。壇上の下には、光が、輝く光が！

「あ、秋姉！！」

「え？　お、お姉ちゃんが！　どうして！？」

「ん……。友達に聞いて急いで応援。でもまだ来てないみたい」

「……ふ……ふふ」

「おーっと、どうした佐藤君！　差が付きすぎて諦めの嘲笑なのか！？」

「あーっはっはっは！！」

「お……お兄ちゃ……」

「一位との差は？　２７１回？　はっ！」

たった、それだけかよ！

「俺に勝ちたいのなら一億回ぐらいの差をつけるべきだったな！　うぉおおお！！！」

「な、なんと佐藤君、急激にスピードアップしました！　こ、これは早い……と、言うより早過ぎないか！？」

「まだまだぁあ！！」

「さ、更にスピードアップだぁああ！」

「……雪、アンタのお兄さんって」

「……凄いでしょ、花梨ちゃん」

「た、ただいま記録が出たぞ！　なんと佐藤君、１分で１２０回の腕立て伏せをしている！　これは逆転があるかも知れないぜ！！」

「ぐぅ……ば、化け物達め」

「ああっと、ここで陣内君が倒れたー！　記録は２２１回。お疲れ様でしたー」

「兄さん……。二度写真撮らせないから」

「さ、朔美ちゃん……ガク」

「残った二人！　一位は光永君の３９７回だが、ペースが落ちて来たぜ。逆に佐藤君はまだ２４０回だが、ペースが違い過ぎるー！！」

「くっ！　負けてたまるか！！」

「おお、此処に来て光永君もスピードアップ！　凄い、凄すぎる！　奴らは何者だ～！！」

「ぐぅっ！？」

意外とやるな、コイツ！

「お兄ちゃん！　勝ったら一緒にお風呂入ってあげる！！」

「お……おおおお！」

「光永君、更に、更にスピードアップだ～！　これは佐藤君より早

い！？　シスコンの鏡だぜ、光永君！」

「ぐ、ぐうう！」

な、なんて野郎だ。こんな変態が、まだ日本に居るとは……秋姉が応援してくれているのに、俺は負けるのか？　ち、ちくしょう……

「お、お兄ちゃん……そうだ！　秋お姉ちゃ～ん！！」

「……雪葉？　……どうしたの」

「はぁはぁ……お、お姉ちゃん！　ごにょごにょ」

「え？」

「お願い、お姉ちゃん！」

「……ん」

いよいよ腕の感覚が無くなって来た。頭も茹だってる。悔しいけど、もう限界だ

「佐藤君の動きが止まった！　これで決まりなのかぁ！！」

ああ、燃えたぜ、真っ白にな……

「……恭介」

秋姉……ごめ

「大好き」

「……」

ピキーン！

「ああ！　お、お兄ちゃんの眼が、何年か振りに生き返って！？」

「へぇ。本当はああいう顔してるんだ……まぁ、悪くないんじゃない？」

「リサが食いついた」

「私は魚か！」

「……もう俺から限界は消えたよ。ただ勝つ、それだけさ」

「な、なんだか分からないが、佐藤君の表情が仏のように穏やかに！？」

手足の疲労は消え、筋肉も４０％アップした。もはや負ける要素はない

俺は穏やかな気持ちで、腕立て伏せをひたすら繰り返した

「ば、馬鹿な！？　なんだそのスピードは！」

「遅いか？　ならもっと早くしよう」

更に早く、力強く。息をするように、自然に腕立て伏せを続ける

「な……あ、汗一つかかずに。そ、そうか、分かったぞ、これは幻だ。俺はかつてサトウと言われたシスコンの幻と、幻影と闘っているのだ」

「お兄ちゃん……」

「……すまん、知香。俺は奴に勝てないかもしれない」

「そ。じゃあ、お風呂無し。ほんと役に立たないね、お兄ちゃんは」

「う……」

ドサ

「おおっと、ここで光永君、力尽きたー。そして現在の数は！」

腕立てをしながらカウンターを見てみると、光永が７１２回で俺が７１３回。我ながらすさまじい数だな……っておい！　勝ってるじゃねーか！

「優勝は佐藤君と愉快な妹達ー！！」

「お……おっしゃー！！」

左腕を上げ、勝利の雄叫びを……ボキ

「ぐげっ！？　う……が……」

こ、これはやばい。身体のキャパを完全に越えてしまい、骨が悲鳴

を上げている。これは死……

「ん……凄いね、恭介。おめでとう」

にこっ

「秋姉のお陰だよ！」

俺、復活っ！！

「お兄ちゃ～ん」

「雪葉！」

俺へ走り寄る最愛の妹を抱き止め、くるくると回る

「どうだ、雪葉。兄ちゃん一番になったぞ！」

「雪葉にとって、お兄ちゃんはいつだって一番だよ。おめでとう、お兄ちゃん！」

「……ん。仲良し」

明日は筋肉痛だな。でも

「おめでとー兄ちゃん！」

「ふふ。やっぱりお兄さんは凄い」

「え、えと……か、か、か、かっこよかった……少しだけど！」

なんとか勝ったな

「ありがとよ、お前ら」

超、疲れたけど。ま、なにはともあれ

妹大会、優勝だ！！

雪の妹大会　１８

「全ての競技が終わりました。この後、２０分の休憩を挟み、閉幕式と今回のゴッドシスターの発表を致します」

そんなアナウンスがスピーカーから流れ、体育館内はユルイ雰囲気となる

「それじゃ雪葉達、今のうちに着替えて来るね」

「ああ、いってらっしゃい。……さて」

秋姉の所へ行こーっと

壇上を降り、わらわらと居る観客達を避けて秋姉が居た場所へ！

「……あれ？」

秋姉が見当たらない。何処か別の所へ移動したのだろうか？

「まずいな……」

秋姉は人混みに紛れてしまうと、見付ける事が非常に難しくなる。忍者みたいな姉なのだ

「あの人も妹だったのだろうか？」

「ん？」

「い、いや、妹にしては美しすぎる」

なんだか辺りがざわついている

「じゃあなんだと言うんだよ！　実は姉でしたってか？　はん、冗談じゃないぜ！」

「しかし雪葉殿がお姉ちゃんと……」

「……」

なるほど、秋姉の話をしているんだな。それにしても……物の道理が分かってない奴らだ

「ち、違う。あの方は恐らく……神。そう、神に近い存在なのかもしれない……」

「ほう」

少しは話の分かる奴が混じっているようだな

「君達」

「だ、誰だ！？」

「あ！　あ、貴方は、平成のシスコン王、佐藤　恭介様！？」

「……もうなんとでも言ってくれ。それより君。今、美しい女性の事を話していたね？」

「え？　あ、はい。まるで風の様に颯爽と現れ、去って行った方が居たのですが、あまりの美しさに彼女は神の化身か何かだったのではないかと……いや、すみません！　ただの妄想です！！」

「正解だ」

「え！？」

「……覚えておけ、あのお方こそが女神と言う存在だ。ふふ、良い体験をしたな君」

俺は青年の肩をポンっと手で軽く叩く

「や、やっぱり……ありがとうございます！」

「うむ。ところで、その女神がどこ行ったか知らない？」

「い、いえ。いつの間にか消えていたので……外ではないかと」

「なるほど。ありがとう」

「こちらこそ！」

頭を下げる青年に微笑みを返し、体育館の入口へと向かう

「……ふぅ。暑い」

太陽がギンギラギンだぜ

「あ……きょ」

「お兄ちゃ～ん」

「ん？　お、雪葉」

体育館を出ると、ちょうど着替えた雪葉と会い、雪葉はトテトテと俺の傍に走り寄って来た

「着替え早いな、雪葉」

他の子達の姿はまだ見えない

「うん。急いで着替えて来たの」

「そっか」

「うん……あのね、お兄ちゃん。賞金の事なんだけど……」

「七人だからな。分けると一人１４２万となんぼぐらいか……凄いよな。母ちゃんと相談して大切に使うんだぞ？」

俺は何に使おうかな。旅行と釣り道具と新しい将棋盤と、ゲームと。後は秋姉に貢いで、残りを雪葉の進学貯金に……

「……お兄ちゃん」

使い道に悩んでいると、雪葉は何故かとても真剣な顔で俺を見つめた。雪葉のここまで真剣な表情は、あまり見た事がない

「どうした、雪葉？」

「雪葉の分、花梨ちゃんにあげて欲しいの」

「え？」

「本当なら全部お兄ちゃんに預けないと駄目だけど……お願い、お兄ちゃん！」

「お願いって言われてもな……。どうしてだか説明してくれるか？」

雪葉の取り分は雪葉の物だ。使い道についてはある程度自由にしても良いとは思うけど……

「う、うん……」

「雪葉？」

「……花梨ちゃんのお家って、凄く借金があるらしいの。花梨ちゃんのお母さんも、病気で……だから」

「……花梨に同情でもしたのか？」

「違うよ！　同情とかじゃなくて……大切な友達だから！　友達だから助けてあげられる時は助けてあげたい！！」

そう言い、雪葉は強い目で俺を見上げた。真っ直ぐな目だ

「……金の問題って、結構シビアなんだぜ。渡す方も渡される方も、どこか負い目が出来てしまうし、卑屈にもなる。そうなったら対等な友達にはなれなくなるかも知れないし……でも」

お前達なら大丈夫だな

「……お兄ちゃん？」

「良いぜ雪葉。好きにしろ」

「お兄ちゃん！」

「まったく。いつの間にそんな大人になっちゃったんだよ！」

雪葉の頭を撫で、俺の心も決まった

「兄ちゃんの賞金もお前にやる。好きに使え」

「え！？　で、でも」

「まぁ、俺が金持ってたって無駄遣いしかしないしな。それならお前に任せた方がよっぽど良い」

正直かなり惜しいし、カッコもつけているが……

「俺は雪葉の兄ちゃんだからな！」

お前が喜んでくれんのが一番だ

「お兄ちゃん……ありがとう。……大好き」

雪葉は、ぎゅっと俺の腰を抱いて顔を埋めた。雪葉は体温が高いので、正直ちょっと暑苦しい

「僕達もその話に乗らせてもらいたいな」

背中からの声に首だけ振り向くと、着替えてジーンズ姿に戻った風子と、美月が立っていた

「風子……それに美月」

「お待たせ、兄ちゃん」

「私も居るし。恭君ふしあな」

美月の背後からヒョッコリと千里が顔を出す

「い、居たのか、すまん」

千里は身体が細くて小さいので、誰かの後ろにいると結構隠れてしまうのだ

「お兄さん。僕達の賞金も花梨にあげて欲しい」

「え？　い、いや、しかし……良いのか？　お前らが手に入れた賞金だ、遠慮とかする必要は無いんだぞ」

「僕にはお金の使い道なんて無いから。もし必要になったら自分の力で稼ぐよ」

「わたしも要らない。欲しいもん無いし！　あ、でも兄ちゃんは欲しいなぁ」

「う……」

美月の大きな目でジッと見つめられると、言う事を聞いてしまいそうになる

「お、お兄ちゃんはあげません！」

すかさず雪葉が俺の前に立ち、ガード。流石我が家の名ディフェンダーだ

「私もいらない。親に説明するの面倒し」

「面倒って……本当に良いのか？」

「うん！」

「オッケ」

「よろしく、お兄さん」

三人は、ごく自然にそう答えた

「……風ちゃん、千里ちゃん、美月ちゃん」

「本当に友達なんだな、お前達は」

少し羨ましいぞ、こんちくしょう

「よし、分かった。じゃそうしよう。……で、その花梨は？」

「あっち」

千里が指を差した方向を見てみると、リサと花梨が足を止め、何やら揉めていた

「だから要らないって言ってるでしょ！」

「あなたは貧乏なんだから素直に受け取れば良いのよ！　ど貧乳！！」

「な、なにお～」

「な、なんだ？」

なんかめっちゃ揉めてるような……

「どうしたんだ、お前ら」

「何でもないわよ！」

「何でもないわよ！」

「そ、そうか……ごめん」

ステレオで怒られてしまった……

「どうしたんだい二人とも」

「……」

「……」

風子が尋ねると、二人は顔を下げ黙ってしまう。俺とは随分態度が違うなこら

「花梨ちゃん？」

「……賞金、あたしに全部渡すってこの馬鹿が言うから……」

雪葉に見つめられ、花梨は言い難そうに呟く

「ば、馬鹿って言う方が馬鹿なんだから！」

「うるさい馬鹿！！」

花梨の本気の怒り声に、リサは短い悲鳴をあげて黙り込んでしまい、重い雰囲気に包まれる。そんな中、風子はあっさりと言う

「僕らの賞金も花梨に譲る事になったよ」

「……え？」

「これは僕らの総意。断らせない」

そう断言する風子の言葉に、花梨は驚きの表情を浮かべた

「受け取って、花梨ちゃん」

「雪まで……みんな知ってるのね、あたしの家の事」

「大人達の間で噂になっていたからね。結構強引な取り立てをして

いるらしいし」

「……確かにうちは貧乏だけど、それはあたし達の問題よ。助けてもらおうとか、なんとかしてもらおうなんて思わない。余計な事はしないで」

キッパリとそう言い放つ花梨の表情は強く、大人びていてるが、どこか諦めている様にも見えた

「……する」

「え？」

「余計な事、する！　花梨ちゃんがヤダって言ってもする！！」

「ゆ、雪？　な、なんで……や、止めてよ！　そういうの迷惑だから！」

「迷惑でもする！　するったらするの！！」

お、おお……久しぶりに見る強引な雪葉。こうなったら絶対自分の意見を変えないからなコイツ

「な、なんでよ！？　あたしは嫌だって言ってるのに！」

「そんだけお前が大切だって事だろ？　こんな大会のあぶく銭よりも」

俺がそう言うと花梨はハッとし、次に泣き出してしまいそうな顔で言った

「あ、あたし、みんなとは普通の友達でいたい。だからこんな風に同情してほしくないの」

「そうじゃないよ花梨。同情だとか、可哀相だからとか難しい話じゃないんだ。大切な友達だから助けられるのなら助けてたい。ほらね、単純でしょ？」

いつもより子供っぽく言い、微笑む風子。他の子らも、当然とばかりに頷いている。こりゃもう勝負ありって奴だな

「お前の負けだ花梨。お前もこいつらの事が大切だと思うなら素直に受け取れ」

「あ、あたし……何も出来ない。そんな事をしてもらっても、みんなに何もしてあげられない！」

花梨は目を潤ませ、搾り出す様な声で言った

「たく……馬鹿だな」

「ふふ、馬鹿だね」

「馬鹿花梨！」

「な、なによ、みんなして！」

「んなもん一言で十分だろ？」

「え？　な、なに？　あたし、どうすれば」

「ダチなんざ礼一個だけで良いんだよ、花梨」

「っ！　……あ……う……っく」

言葉に詰まった花梨の顔は、次第に涙と鼻水でぐちゃぐちゃになる。
嗚咽で息も絶え絶えだ。それでも花梨は顔を上げ、涙を袖で拭き、
その一言を言った

「……あ、ありがとう……ありがとう！！」

「うん、花梨ちゃん！」

「おう」

しかし、花梨ちの借金っていくらなんだろうな。余ったら少し……
って、未練がましいやね

「んじゃ、賞金貰ってさっさと帰るべ。んで帰りマックだ！」

「やったー！　早く行こう兄ちゃん！！」

「ち、ちょっと待て！　金貰ってから」

「み、美月ちゃん！　お兄ちゃんに抱き着く権利は雪葉にありますよ！」

「ふふ。ごめんね、雪。僕も抱き着かせてもらうよ」

「風子ちゃんまで！？」

「恭君もてもて。流石平成のシスコン王」

「つか暑い！　は～な～れ～ろ～」

今日の遅刻

燕≦ゆ

「ところで……秋姉はどこに行ったんだろ？」

「……うしろ」

「え？　う、うわぁ！　あ、秋姉！？　いつからそこに！」

「……最初から」

「え！　あ、ご、ごめん秋姉、最近ちょっと乱視で気味……」

「ん。……みんな素敵な子達だね」

「うん、俺もそう思う。みんな良い友達だよ。流石は雪葉かな」

「……あなたも」

「え？」

「素敵だったよ、恭介」

「う……うおおおおおおおおー！」

スズナリ横町

第１２４話：夏の誘い

「ただいま～」

妹大会は無事に終わり、家へと帰って来た俺

雪葉達は花梨の家に寄ると言うから、雪葉に賞金の小切手を渡してタクシーに乗せた（自腹）秋姉は友達と電話をした後、その友達と会ってくるからと駅前で別れ、結局ひとりぼっちで帰宅

「む、む、麦茶。俺は恭介～麦茶っ子～」

微妙な寂しさに思わず新曲を歌いながらリビングへ入る。すると日曜日の昼間っから、ソファーの上で寝ているシャツと短パン姿のオッサン、もとい夏紀姉ちゃんがいた

「ううん……さけ……むにゃむにゃ」

部屋が蒸し暑いからか、シャツは胸元までめくれていて、腹やら下乳やらがまる見えだ。このままほっとくと、風邪を引いてしまうかも知れない

「……よし」

ほっとこう。姉ちゃんならきっと風邪なんか引かないさ。触らぬ神に祟りなし、余計な事して怒られる前にさっさと麦茶を取りに行くべ

「こら」

「うわっ！？」

さっきまで閉じていた筈の姉ちゃんの目がうっすらと開き、その目がギロリと俺を捉える。まるでジャッカルの様だ

「お、起こしてしまいましたか姉様。どうかお許し下さい」

今、この疲労状態で姉ちゃんに絡まれるのは、非常に危険だ。ここはうまく逃げよう

「今、何時？」

「三時を五分過ぎた所にてござりまする」

「そう……なんだか四ヶ月ぐらい寝ていた気分だわ」

「そのネタはリアルタイムで読んで下さった方以外、分からないかと思いますが」

「あ～暑い」

姉ちゃんはソファーから身体を起こし、背伸びをする。シャツは乱れたままなのだが、直そうとは思わないのだろうか

「ふぁーあ……はぁ」

目を擦り、姉ちゃんは溜め息をつく

「どうしたのさ、溜め息なんかついちゃって。何か悩み事でも？」

「……ビール飲みたい」

なんだ、ビールね

「麦茶飲む？」

「麦茶……麦と茶……とホップ……サッポロ」

虚ろな目でぶつぶつと呟く姉。恐すぎる

「禁酒って何日やれば成功なのかしら……」

「いや、普通に一生でしょ？」

「そうよね。そうなのよね……はぁぁ」

俺まで落ち込んでしまいそうな程、深い溜め息だ

「辛いなら飲めば？　姉ちゃんの場合は飲み過ぎるから悪いんであって、少しぐらいなら大丈夫だろ」

「雪達と約束しちゃったから。これ以上、姉の威厳を損なう訳にはいかないのよ」

「一応、損なわれてた自覚はあったんだ……」

意外だ

「ところで――。どうしたのよその目」

「目？」

「久しぶりに生き返ってるじゃない」

「いつも生きてるよ！」

毎日元気です！

「あ、そう。どうでも良いわ、早く麦茶を持って来なさい」

「ぐっ……ただいま、お持ち致します」

今は辛抱だ、そのうち下克上をしてやる。そしたら姉ちゃんなんか、毎日俺の肩揉み係だぜ！

なんて空しい妄想しながら冷蔵庫を開け、冷えた麦茶とコップを二つ手に取る。やっぱり夏は麦茶だな

「喉渇いた～」

「はい、ただいま！」

悲しき条件反射か俺は背筋を伸ばし、素早くリビングへ向かう

「お待たせしました、どうぞ」

琥珀色の麦茶をコップへ注ぎ、姉に献上する。相当喉が渇いていたのか、姉ちゃんは一気に飲んで再びソファーにねっころがった

「お休みですか、姉様。ごゆるりと……」

逃亡チャンス！

「そういえば」

「は、はい！　なんでしょう？」

「アンタ朝から雪と何処行ってたの？」

「え？　えっと……隣町の森林公園に」

「ふ～ん。……楽しかった？」

「う、うん。それなりに」

「そう。良かったわね」

「まぁ、うん……」

何が言いたいんだ、この人

「来週さ」

「え？」

「日曜日。みんなで海行かない？」

「海？」

「アキも来月大会あるし、みんなで出掛けるなら来週ぐらいしか時間無いでしょ？」

「そうかもしれないけど……秋姉、来週空いてるかな」

今日も朝練あったみたいだし

「あの子が帰ったら聞いてみるわ。アンタは？」

「大丈夫だよ。春菜も喜ぶんじゃない？」

海行きたがってたしな

「よし、じゃそうしましょう。新しい水着も買ってあげるから、今度選んで来なさい」

それだけ言って姉ちゃんは、また寝るのか目を閉じる。なんだか随分、優しいが悪い物でも食ったか？

「タオルケット持って来ようか？」

「いい。少し横になるだけよ」

「そっか。じゃ、安らかに」

俺も寝よっと

今日の淋しがり屋

夏＞＞＞＞＞＞＞俺≧雪≧秋≧春

つまみ

第１２５話：燕の密着

「う……あぐ」

ベッドで目を醒ました俺を襲ったのは、両腕と腹筋の激痛だった

「はぁはぁ」

真夏の暑さに苦しむ犬の様に舌が勝手に出て、俺の呼吸を乱す。これは熱が出るかも……

「あ～」

参ったな。寝返りするのも辛い

「はぁ……ふぅ……」

とにかく無理矢理にでも眠ろう。次起きた時は、今よりマシになってると思うし

全く眠くないが、目を閉じて羊を数える

一匹、二匹、三匹、四

コンコン。ドアが軽快な音をたてた

「う……はい」

「……恭介？」

この麗しい声は秋姉か

「あいてるよ。どぞ」

「ん……失礼するね」

カチャっと静かな音でドアが開き、お邪魔しますと秋姉と違う誰かが言った

「あ、すまない。寝ていたのだね」

この声は……

「燕？」

「う、うむ。お邪魔させてもらっていたので帰る前に挨拶をと思ったのだが、休んでいる所をすまなかったね。では、おやすみ」

「あ、違う。身体が痛くて横になってた。……ごめん秋姉、何か飲み物がほしい」

「ん。待ってて」

タ、タ、タっと、軽やかなリズムで秋姉は廊下を走って行く。普段は急いでいても絶対に廊下は走らないのに……。ありがとう

「……恭介」

燕は俺の傍らにより、やけに冷たい手を俺の額にあてた

「手、冷たいな燕」

「先程までかき氷をご馳走になっていたからだろうね。……熱は無いみたいだ」

ほっとした様に言い、燕は乱れた布団を直す

「暑くはないかね。少し冷房を点けようか？」

「大丈夫。燕もありがとな」

「あ、い、いや、礼を言われる事では……」

「……お待たせ」

「あ、秋。恭介、身体は起こせるかね？　手伝うよ」

「あ、ああ……いっ！」

腕が、身体がいてぇ！

「……失礼するよ」

燕はベッドに上がり、俺の右側に座る。そして俺の首下に左腕を入れた。次に右手で俺の左肩を少し持ち上げ、それを左手で支える

「んっ」

息を吐き、燕は右腕を俺の背中に回し、左腕と一緒に力を入れてっ

て、なんか、もっの凄く密着してるんですけど!?　顔とか乳とかが!

「ふぅ」

「……あれ?」

いつの間にか、俺の身体が起こされている

「やはり救命講習の知識も役に立つ。三月に一度は生徒達に受けさせたいものだ」

顔を赤くしながら、燕はうむうむと頷く。やっぱり少し恥ずかしかったのだろう

「相変わらず色々知ってるよな燕は。ありがと、秋姉」

秋姉からコップに入ったポカリ的すいっとを受け取り、ごくごくと飲む

「ふ〜、うまい。生き返る」

「ん……よかった。燕、時間は大丈夫?」

「うむ。では私は帰るとしよう。お大事に」

「ああ。あ、と、そういえばもしかして今日、秋姉に連絡してくれたのって燕?」

「え?　あ、う、うむ。テレビで見て直ぐに秋へ連絡をしたのだ。

私達は試合に間に合わなかったけれど、君達が優勝した事は聞いたよ。おめでとう」

「そうか……」

俺達が優勝出来たのは燕のお陰なのかも知れないな

「ありがとう、燕」

「う、うむ。どういたしまして……なのだ」

今日のバカボン

燕

「では秋。また」

「……燕」

「うむ？」

「きっと恭介は燕の事、好きだよ」

「なっ！？　な、なにを言って！」

「あ、燕、前」

「え？　あう！？」

「ん……電信柱。怪我は無い？」

「……いたい」

つめじ

第１２６話：Ｔの天然

妹大会の翌日。筋肉痛はまだ治まってないが、もうすぐテスト期間と言う事もあり、無理をして学校へ来た俺。そんな真面目な好青年の俺へ、最初に声を掛けて来たのはクラスメートのＴさんだった

「あ！　おはよう、佐藤君。テレビ見たよ」

「お、おお。……見たのか」

地方テレビだってのに結構見てた奴いるんだな

「うん！　佐藤君って妹多かったんだね。みんな可愛くてびっくりしちゃった。ヤナの椅子借りちゃうよ～」

Ｔさんは、のほほんとした童顔に好奇心の色を浮かべ、俺の隣の席に座った

「あれは妹と、その友達だ。本当の妹は一人だけなんだが……秘密だぞ」

「わ、秘密聞かされちゃった。なるほど、なるほど。う～ん、そうだね～佐藤君の妹は……リサちゃんだ！」

「人種が違うだろ」

「じゃあ……すらっとした子！」

「風子の事か？　違う」

「金魚の子！」

「せめて本人の特徴ぐらい言ってやれよ。ちなみに美月な、違うけど」

「あ、そっか分かった！　もうこうなったら花梨ちゃん！」

「何が分かったってんだよ。違うから」

「え～。じゃあどの子？」

「雪葉だよ、雪葉。白いワンピース着てた子いたろ？」

「え？　あの大人しそうな可愛い子？　凄い！　びっくりするぐらい似てないね！！」

「大きなお世話だ、こんちくしょう」

似てないってなら俺とリサなんか絶望的に似てないだろ

「あ、でも秋先輩ともあまり似てないし……もしかして」

「いや違うから。血、繋がってるから。普通の家族だから」

「ちぇ」

「残念がられても困るんだけど」

「残念じゃないよ、がっかりなんだよ」

「どう違うんだよ」

そんな不毛な会話をしていると、クラスの連中が続々と登校してきた

「あ～暑い、暑い。ん？　あれ？　珍しい組み合わせね」

その中でＭが俺達に興味を持ったらしく、近付いてくる。そのＭを、クラスの連中が何となしに目で追った

明るく、目鼻立ちがはっきりしているＭは、クラスで一番の人気者だ。Ｍが普通に歩くだけで、皆は注目してしまう。花があるって奴だな

「おはよう二人とも」

そのＭは俺達の側に立って、長身を少し窮屈そうに屈め、俺達の視点に合わせた。クラスの女が憧れる１７０の身長は、Ｍにとっては邪魔なだけらしい

「おはよう美佳。今ね、佐藤君の妹の事を話してたんだ」

「妹？　春菜さん？　凄いよ彼女、また県の記録を更新したんじゃなかったっけ？」

「へぇぇ～。凄いね佐藤君」

「まあな」

自慢の妹達だ

「今は雪葉ちゃんの事を話してたんだ。佐藤君、昨日妹大会で優勝したんだよ」

「妹大会？」

「ほら駅前にポスターとか貼ってたやつ。優勝賞金一千万円の」

一千万円の言葉にMは目を丸くし、

「ずっと好きでした。付き合って下さい」

「金目当てだろ？」

「うん」

「即答は止めて！　せめて少し悩んで！！」

「金があれば愛もそのうち生まれてくるから」

「どんだけ達観してんだよ……言っとくけど金はもう無いぞ。みんなで分けた後、全部使った」

「ごめん。別れて」

「早っ！？」

「一時の気の迷いだったみたい。夏のせいだね」

「う～ん。美佳は大人の女だねぇ」

「何処がだよ」

大人の女ってのは、美しく聡明で優しくって女神で……あれ？　秋姉、条件にピッタリじゃん！

そうか、秋姉は大人の女だったのか。薄々そうじゃないかと思っていたけど、やはり……

「どうしたの佐藤、急にニヤニヤして。パンツでも見えたか？」

「さっきから発言がオヤジ過ぎるぞＭ」

「だって佐藤がエッチいから」

「へ～佐藤君ってエッチなんだ」

エッチだエロスだと騒ぎ立てるＭとＴさん。クラスの連中達は一見無関心を装っているが、明らかに聞き耳を立てている。ヤバイ、このままでは皆に俺がエロだと誤解されてしまう！

「俺はエロくなんかないぞ！　ちょっと姉好きなただのシスコンだ！！」

あ、シスコンは余計だったな。撤回を……

「うん。シスコンなのは知ってる」×１４

「……」

クラスメート達の声が、見事に揃った瞬間だった

今日のテレビっ子

T＞＞＞俺＞＞＞＞＞M

「うわ～ハモった。なんか凄いね～。流石平成のシスコンの王様だね、佐藤君！」

「さ、最後まで見ちゃってくれたのか……金で解決できるかね？」

「え？」

「どうか昨日の事は忘れて下さい……」

「ん～、忘れたらサインくれる？　シスコンの王様、佐藤　恭介、戸田の家に参上って。部屋に飾っておくから」

「絶対忘れる気ないだろ！？」

痛烈

第１２７話：秋の下着泥棒

「大変だ兄貴！」

火曜の夜。部屋で名探偵キテレツを見ていると、いきなりドアが開き、春菜が飛び出してきた。しかし俺は慌てず

「どうしたね春菜君。世の中に慌てる事などそうは無いのだよ」

なんてキテレツさんの名台詞を言い、ゆっくりと振り返る

「パンツ盗まれた！！」

「なに！　それは結構大変な事だな。よし、被害届を出しに行こう！」

再犯の恐れもあるし、用心には用心を重ねて……

「秋姉のが」

「ぶっっっっ殺す！！」

第７回、佐藤家緊急会議

「では会議を始めたいと思います」

議長である夏紀姉ちゃんが眼鏡をかけ直し、俺達を見渡す

ここはリビング。出席者は夏紀姉ちゃん、俺、春菜、母ちゃん。ちなみに秋姉は風呂で、雪葉は就寝中だ

「まず、事件が発生した経緯を確認します。では母さん、証言をお願いします」

姉ちゃんがそう言うと、ノンビリ母ちゃんは椅子から立ち上がって、ノンビリ証言を開始した

「は～い。今日は朝から仕事があったから、昨日の夜の内に洗濯を済ませて2階のベランダに干してたの～。それで今日の夕方前に秋が洗濯物を取り込んでくれて～たたんでいた時に、下着が一枚足りない事に気付いたみたい～」

「犯人を直ちに見つけ、去勢、またはぶっ殺すべきだと思います！！」

神が許しても俺が許さねぇ！

「佐藤　恭介君。今はアンタの発言を許可していません。では次に佐藤　春菜君、盗まれた物の詳細をお願いします」

次に姉ちゃんは、テレビを見ながら煎餅食ってる春菜に証言を求めた

「秋姉のパンツを一枚だけみたい。ストライプの奴」

「もう犯人はぶっ殺しても良いと思います！」

世論は俺の味方だ！

「……アンタはもうアレね、アホを通り越して馬鹿って言うかアホよね」

「アホに戻った!?」

「盗まれたのは秋のだけで良いのかしら?」

無視された……

「うん。他に夏姉や兄貴のもあったけど、秋姉のだけだな」

「……夏紀姉ちゃんのは盗まないか」

敵ながら中々、目利きが効きよるわ

「何か言った?」

「いいえ、なにも」

必殺無表情

「秋のだけねぇ。犯人は子供っぽい下着が趣味なのかしら」

「あるいは秋姉のだと知っていた?　……野郎、ふざけやがって」

「風に飛ばされたって事は無いのかしら?」

「それは無いわ~。だってジャパネットタ〇タお勧めの強力洗濯挟み使ってるもの~」

「そ、そう……」

一気に信憑性が無くなったな

「でも2階でしょう？　足場になるとこも少ないし、どうやって盗ったのかしら？」

「マジックハンドとか使ったんじゃないの？　1、2万だせば、かなり高性能の物があるしって、な、なんでそんな疑惑に満ちた目で俺を？」

「犯人……アンタじゃないわよね？」

「違うよ！」

「怪しいわね……まぁ、良いわ。ところで秋の様子はどうなの？」

「少し怖がっていたけれど、基本的には落ち着いてるわ～。流石よね～」

「そう。……とにかく本当に犯人が居るなら、何か対策を練らなくちゃいけないわね」

「あ、そうだ～。タ〇タさんで簡易地雷グッズが売ってたわ～」

「ま、待って母さん！」

急いで注文しなきゃと、自分の部屋へ行こうとする母ちゃんを、姉ちゃんが捕まえた。ナイス阻止

「そ、それはマズイわよ近所迷惑にもなるし」

「でも娘の危機よ～。何か対策しないと～」

「うう～ん。どうしたものかしら」

悩む二人にまだ煎餅を食ってる一人。このままでは中々結論が出そうにないな……よし！

「はい、議長！」

俺はびしっと手を挙げて

「ん？　なによ？」

「今日から何日間か、俺が夜見張ります！」

高々に宣言をした

「え？　ま、まあそれが一番手っ取り早いかもしれないけど……大変よ？　危ないかも知れないし」

「大丈夫。俺に任せてくれって」

神をも恐れぬ変態野郎に鉄槌を喰らわせてやる！

「……そう。ならスタンガン貸してあげる。もっときなさい」

「じゃあ母さんは日本刀貸すわね～」

「おーし。じゃ私は、トンファー貸してやるよ」

「って何、この武闘派家族!?」

意外と恐い家庭だったんだな俺んち……

「とにかくやるなら気をつけなさいよ。危なくなったら叫ぶ」

「ああ、ありがと姉ちゃん」

犯人が何者だか知らないが、秋姉の安眠は俺が守る!!

秋の下着泥棒　2（前書き）

そのうち削除。

夏のホラー

6月7日

今日、駅前でお兄ちゃんを見掛けた。お兄ちゃんは知らない女と一緒だった

あの女、許さない

お兄ちゃんに近付く女、許さない。死んじゃえば良いんだ

6月10日

今日お兄ちゃんが笑ってくれた。嬉しくて、だから私も笑う。うふふふふふ

「……」

冷たい汗が流れた。この続きを俺は見て良いのだろうか？　恐い。恐いし後悔しそうだが……

「……んっく」

ごくりと唾を飲み込み、俺は恐る恐るページをめくった

お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお

コロスケ。なんちゃって

「……」

題名。忌もうと（仮）

「……」

持ち上げたノートから、ハガキが舞い降る

【夏のホラー。８月１１日締め切り。最優秀賞には賞金百万円。優秀賞に全国の地酒１００選をプレゼント】

地酒１００選の所を、ペンで丸く囲っている

「……」

キュポン。マジックの蓋を抜いて

「落選！！」

秋の下着泥棒　2

「……お風呂、上がったよ」

会議は終わり、皆が武器を取りに行ってる間、一人リビングで瞑想をしていると、パジャマ秋姉がやって来た

「……？」

秋姉は座禅を組む俺を見て小首を傾げ

「どうしたの？」

と、尋ねた

「え？　な、なにが？」

「ん……なんだか凄く緊張してる」

さ、流石秋姉。鋭すぎる

「……大丈夫？」

秋姉は俺の側に寄り、いたわる様に俺の背中に手を添えた。嗚呼、何という温もり。これが俺のシャイニング……

～5分前の回想～

『あと必要なのは餌ね』

『餌？』

『そう、犯人をおびき寄せる餌。……恭介、アンタ、アキから下着借りて来なさい』

『嫌だよ！？』

『真剣に頼めば貸してくれわよ』

『どこの世界に姉のパンツを真剣に頼んで借りる弟が居るんだよ！』

『アンタなら出来るわ』

『出来ないよ！』

『アンタ、秋を守りたいんじゃないの？　そんな事も出来ない程度の覚悟ならやめなさい！』

『う……そ、そこまで言うのなら、姉ちゃんが借りて来てよ！！』

『嫌よ。変態だと思われたくないもの』

『俺なら良いのか！？』

「……」

「……恭介？」

「あ！　あ、あ、ええと……あ、秋姉！」

「ん」

「あ、秋姉のパ、パパ、パパパパ」

「？」

「パ、パパパパ……ぐ、パ、パン！」

「……パン？」

「兄貴～！」

パンとリビングのドアが開き、そこから春菜が飛び出して来て

「秋姉のパンツ、洗面所のカゴん中からゲットしたぜ！」

と、パンツ持つ手を掲げて下さいました

「……」

そんな腕白春菜を見て秋姉はポカンとした表情をし、そのまま固まってしまう。これはレアだな、是非写メを……いやいやいやいや！！

「は、春菜！」

「まだ洗濯してないからちょっと汚ねーかも知れないけど、我慢してくれよな！」

「汚くなんかねぇよ！　人類の宝だよ、世界遺産だよ！！」

あ、あれ？　俺は何を口走って……

「……はるな？」

「ひっ！？」
「ひっ！？」

穏やかな声で春菜を呼ぶ秋姉。しかしなんだ、このプレッシャーは！

「……人の下着で遊んだら駄目だよ？」

「はい、すみませんでした！」
「はい、すみませんでした！」

なんで俺まで！？

「ん。戻して来て？」

「サー・イエッサー！」

普段の三倍の速度で、春菜は飛び出して行った

「……」

そんな春菜を見送る無言の秋姉。その背中に俺はなんと声を掛ければ……

「……恭介？」

「は、はい！」

「それで……パンがどうしたの？」

振り向いた彼女は、微笑んでいました。まるでもう全て分かっているんだよ、と言っているような穏やかな微笑みでした

そんな彼女を見て、私は身体をぶるると震わせ、全てを白状する事にしました。季節は夏。風鈴の音がもの悲しい、夏の夜の出来事です

秋の下着泥棒　3

「かくかくしかじかのかくじかなんだ」

本当は黙っていようと思っていたのだが、結局洗いざらい吐いてしまった俺。やはり秋姉には隠し事が出来ない

秋姉は俺の話を一通り聞いた後、一言

「……駄目」

「あ、いや、でも」

「……危ないから駄目」

じっと真っ直ぐに俺の目を見つめる秋姉。なんとも逆らいづらい魔力がある……が

「俺はやる！」

ここは退いたらいけない所だ！

「……なら私も見張る」

「え！？　だ、駄目だよ危ないから！　あ」

「……私も同じ気持ち。下着はまた買えば良いだけだから……ね？」

ニコッと微笑む秋姉。この微笑みだけで、俺は3百枚下着を買える

「……分かった。止めるよ」

「……ん。明日、被害届を出すから。……ごめんね、恭介」

「ううん。じゃ、俺、風呂入るよ」

「うん」

リビングを出て、廊下を歩き、風呂ではなく自分の部屋へと行く

「……ごめんよ」

秋姉を騙す様で心苦しいが、一度決めた事だし、やめるつもりは無い

「しかし……」

餌をどうするか

「……はぁ」

夏紀姉ちゃんのは眼中に無いだろうし……春菜に借りるしかないか

つー事で、春菜の部屋前

コンコンとドアを二度叩くと、中から入って良いぞと声がある

「邪魔するぜー」

ガチャリと入ると、春菜はパンツ一丁の姿でベッドの上で煎餅食い

ながらテレビを見ていた

「……お前なぁ、シャツぐらい着ろよ」

「もう風呂入るし。あ、トンファーは玄関前に置いといたから」

「お、おう……あのな、春菜」

「なんだ？」

「えっと……その」

意外と言いづらい！

「ん？　なんだよ？」

春菜は面倒臭さそうに起き上がろうとする

「俯せのままで聞いてくれ！」

「え、あ、ああ……変な兄貴」

「パンツ貸せ！」

「……は？」

「お前のパンツ貸せ！」

「い、良いけど……風呂入る前で良いか？」

春菜は履いているパンツのゴムを軽く引っ張って躊躇いがちに言った

「って、それじゃねぇから！　洗濯してるやつよこせ！！」

「な、なんで怒ってるんだ？　パンツならタンスの二段目に入ってるから適当に持ってけよ」

部屋の隅にある白い五段タンスを指差して、再びポリポリと煎餅を食い始める春菜。相変わらず太らないのが不思議でしょうがない食生活を送っていやがる

「……では失礼して」

タンスの前に行き、二段目を開ける。そこには綺麗に畳んである様々な色と形のパンツが、数多く敷き詰められていた

「……」

妹の目の前でパンツを漁る兄……か。なんだか情けなくて涙が出て来るぜ

「……お、これは」

赤のストライプ柄。確か盗まれたのはストライプだったよな

「ん？　あ、それ盗まれた奴と同じだよ。秋姉と買い物行った時に色違い買ったんだ」

「なるほど……これ借りて良いか？」

「やるよ。代わりに今度秋姉と一緒に新しいの買ってくれよな」

「あ、秋姉のもか！」

妹のパンツを漁り、姉にはパンツを贈る弟。もはや救い様の無い変態な気が……

「……んじゃ、借りてくよ」

「お～」

テンションがた落ちでパンツ片手に部屋を出る。とにもかくにも餌は手に入れた。後は夜が更けるのを待つだけ

「恭介～」

とりあえず自分部屋に戻ろうとした時、呑気な声が俺に掛かった。振り向くと

「ぶっ！？」

日本刀を持つ勇ましき母の姿！！

「立花道雪の雷切よ～」

「何その格好良い名前！？」

「はい、貴方に献上するわね～」

「いらないよ！」

「あら～。じゃあ去年お父さんが貰って来た天叢雲剣を～」

「いらないって！！」

なんなんだこの家！？

秋の下着泥棒　4

ＡＭ　０２：１５

「……眠い」

皆が寝静まった深夜2時過ぎ。2階のベランダへシャツかズボン等を適当に物を干し、その中にちょっと隠した感じで餌のパンツを干す

俺はと言うと、ベランダへ即出れる2階の空き部屋の隅で、明かりも点けずカーテン越しに外を見張っている

「……ふぅ」

もうかれこれ2時間は見張っているが、何も変化がない。流石に昨日の今日じゃ来ないかな

「ふぁ～あ」

今日も学校あるし、そろそろ寝ようかな……寝よう！

「よっこい……っ！？」

突然洗濯物が不自然に揺れる。ま、まさか……

カーテンの隙間から、こっそり覗き込む。するとなにか棒のような物がうっすらと見えた

「き、来たのか？」

ゴクリと喉が鳴る。ぶっちゃけかなり怖い

「……よし」

夏紀姉ちゃんに借りたスタンガンを持ち、部屋を出る。なるべく音を立てないように階段を下り、深呼吸

「行くか！」

静かに靴を履き、静かに玄関のドアを開け、とにかく静かに静かに外へと出る

月は赤い三日月。薄暗くて、なんか息苦しい

家の門に手を触れ、ゆっくりと開き――

キキキ

「っ！」

し、しまった！　門の音が！？

その時、ダダダと誰かが道を駆ける音と振動があった

「くそ！」

慌てて道へ出ると、西側へ走り去って行く黒い影が。奴が犯人！？

「ま、待て！」

影を追い、俺も走る。奴は俺より僅かに遅いようで、差は徐々にだが縮まってゆく

そして5分後。家から少し離れた川の近くで、奴の姿を完全に捉えた

「もう逃げられんぞ、貴様！　大人しくお縄につけぃ！！」

「……ふん。全く、俺とした事がつまらない罠に引っ掛かった物だよ。いや……これも必然なのかも知れないな。あそこの家の縞パンツは、余りにも魅力的だったから」

足を止め、男は振り返る

「暴力は使いたく無かったが……」

長袖の黒いシャツに黒いジーンズ。丸い眼鏡をクイッと上げ、男は独り言の様に言う

「や、やる気か？」

「俺はまだ捕まる訳にはいかないんだよ。後、１７枚、縞パンツを手に入れなければならないからね」

「何を言って……」

「俺の名は怪盗ストライプ。９８３枚の縞パンツを持つ男さ」

「怪盗……だと」

「幸いここは人通りが無い。お前を倒して、逃げさせてもらう」

男は、なんの警戒も無しに俺に向かって歩いて来る。俺は右のポケットに手を突っ込み、スタンガンを握った

「ふっ！」

伸ばせば手が届くか届かないかの距離。そこで男の腰は深く沈み、膝のバネを使って一気に突っ込んで来た

「うわ！？」

咄嗟にスタンガンを抜き男に向かって突き出す。しかしそれを男は左手だけで軽くいなし、俺の鳩尾へ右の掌底

「うげ！」

堪らず前屈みになった所で、顎へ打ち上げる肘の一撃！

「うぎゃ！？」

「とどめ」

男は倒れようとする俺の首を両手で抱え、とどめの膝を……

「ふふふ～」

「な！？　なんだこの呑気な笑い声は？」

男は俺の首を離し、周囲を警戒する

「う……ぐぅ」

支えが無くなった俺は、膝に力が入らず崩れ落ちた

「だ、誰だ!?」

「つっ……い、いてぇ……ん?」

犯人が見上げる先を目で追うと、そこには歩道橋の手摺りの上で腕を組んで立つ、一人の女の姿があった

弱い月明かりに照らされた肌は、ただただ白く。薄い桜は頬の色かそう、あれはまさしくオカメ。オカメさん

「ってオカメ!?」

「な、何者!?」

「私はこの町を守護するオカメ、レディーオカメよ～」

などと意味の分からない供述をしているオカメの面を被った女。ツッコミたいが、なんかツッコんだら負けっぽい

「貴方が最近この辺りを荒らしている下着泥棒さんね～」

シュタっと橋から地へ降り立つレディーオカメ。彼女が着ている白い服は良く俺ん家の中で見掛ける気がするが、敢えて気のせいと言う事にしておこう

「誰だか知らないが、邪魔をする気なら女でも容赦はしない！」

「あら～怖いわ～。でも～」

そこでレディーオカメは一度言葉を途切り、ちらっと俺を見て

「やり過ぎよ貴方」

ぞくり

俺の背筋に悪寒が走る。この雰囲気は秋姉……いや、それ以上のプレッシャーを感じる。そう、まるで飢えた白熊と対峙したかのような……

「ふっ。この怪盗紳士、ストライプ。女子供に遅れはとらないよ」

ば、馬鹿！　分からないのかこの危機感が！！

「御託は良いわ、掛かって来なさい」

ごきり。強く握られたオカメの拳

「お仕置きしてあげる」

それは圧縮された闘力！

「に、逃げろ……逃げろストライプ！　殺されるぞー」

「……ストライプハンターとして生きると決めた時から、覚悟は出

来ていた。最後はパンツ片手に野垂れ死のうと。だが今では無い！
　行くぞオカメ！　お前のパンツも奪ってやるりゃぁあ！！」

オカメへ猛スピードで突っ込んで行く怪盗ストライプ！　対してオカメはノーガードで佇んで……

ビシィイイイ！

二人が互いの間合いに入った瞬間、音速を越えたムチが放つ衝撃音が響いた。そして周囲は静まり返る

「……が……」

右拳。それが怪盗ストライプの鼻面に刺さっていた物の名だ

「反省した？」

ぐぽっと嫌な音を立て、引き抜かれる拳。その拳からポタリポタリと落ちる鮮血は、道へ妖しい花を咲かす

「す……すみ……ません……でし……た」

謝りながら崩れ落ちる怪盗ストライプ。今、決着は付いたのだ

「もう泥棒さんはしちゃ駄目よ～」

呑気な声が恐ろしい

「……あ、あの」

「怪我は無いかしら～？」

「う、うん。まぁ……大丈夫」

「良かったわ～。それじゃあ後は任せたわね～。私はオカメの国に帰るから～」

いや、アンタが帰る所は自分の家だろっと、言いたいが我慢しよう

「さ、さようなら。気をつけて」

「さようなら～」

手を振り、明らかに家の方へと走り去って行くレディーオカメ。彼女は敵か味方か母なのか、それは誰にも分からない

「ありがと～、レディーオカメ～」

なんてオカメさんに感謝しつつ、お巡りさんへ電話をして一件落着

……なのかこれ？

今日のヒーロー

オカメ

納豆

第１２８話：千の退屈

「犯人逮捕のご協力、感謝します。ありがとう」

「いえ、市民として当然の事をした迄です」

木曜日の午後。雪ダルマのようなオッサンから感謝状を手渡され、疎らな拍手を浴びる。そう、ここは俺らが住む地域を管轄している警察署の署長室。一昨日現れた怪盗ストライプの逮捕に協力した事で表彰されているのだ

「素晴らしい！　なんと素晴らしい青年だ！！　それに引き替え……我が署で一番始末書が多い片桐巡査長。君は通報を受け現場に駆け付けた際、間違えて彼に手錠を掛けたそうだね？」

「しかし署長殿！　そいつは史上稀に見る変態でして」

「口を慎みたまえ片桐巡査長！！」

「は、はい！！」

「……申し訳無い、佐藤君。うちの署員が失礼な事を」

「誰にでも間違いはあるものです。僕は気にしていません」

「目が死んでいるが、なんと真っ直ぐな心を持つ青年だ……どうだね？　将来は警察官を目指してみる気は無いかね？　目が死んでいるが、構わないだろう。いやしかし見事なぐらい目が死んでいるね君ぃ」

流石に傷付くぞ

「署長殿！　奴はエロテロリストですぞ！！　歩く屍ロリコン発生機ですぞ！？」

酷いあだ名が付いたな

「始末書1枚では足りないのかね、片桐巡査長」

「い、いえ、もう満腹です！」

「よし、2枚追加だ！　たっぷり食べたまえ！」

「お、お許しを～」

てなコントを見せられ、気付けは4時過ぎ。そろそろ帰宅したいと告げると、最後に署長と握手をして表彰式は無事終了。組織の犬は最後まで俺を睨んでいたけどな……

「……ふむ」

署長室から出て、感謝状を広げてみる。なんだかんだ言って、結構嬉しいものだ

「ご苦労様です」

「あ、はい、ご苦労様です」

感謝状を見ていた俺に、正面から声が掛かる。その声に顔をあげると

「あ、綾さん!?」

数メートル先の階段前で制服姿の綾さんが立っていた

「こんにちは、佐藤君。今日は補導ですか?」

ニコニコしながら俺へ近寄る綾さん。相変わらず神出鬼没な人だな

「違いますよ。感謝状を貰いに来たんです」

「感謝状?」

「はい。犯人逮捕に協力したので」

「凄いですね!　ご協力ありがとうございます」

「え、ええ、どういたしまして」

署長と同じ事を言われてしまった……

「綾さんはどうして警察署に?」

「パパの用事で一緒に来ました」

「お父さんとですか?」

「パパと言っても血は繋がっています。援交で捕まった訳ではありませんよ?」

「そんな事、疑ってません」

「そうですか……」

綾さんは何故か残念そうな顔をして

「今度からはちゃんと疑って下さいね？」

「なんで！？」

「会話が広がります」

「いや、普通に閉じますって」

「む～。では代わりに私は股を広げ」

「やめぃ！」

綾さんの頭に軽くチョップ

「あいた！　……やりましたね。犯りましたね」

「字違うぞ～」

「佐藤君！」

「は、はい」

「今のツッコミは間違えています！」

「そ、そうですか？」

「今のところは私を押し倒し、佐藤君の荒くれ棒を私の股にツッコ」

「じゃ俺は帰りますね」

場所が場所なだけに、これ以上付き合っていると逮捕されそうだ

「ちぇ……。と、私も戻らないといけませんね。それでは、さようなら佐藤君。お気をつけて」

綾さんは俺に丁寧なお辞儀をし、階段の方へと行く

「さよなら、綾さん」

俺もさっさと帰ろ

千の退屈　2

警察署を出ると、蝉の声が耳に響いた。額の汗をハンカチで拭き、バス停に向かって歩く

「ふ～」

暑い。早く帰って、シャワーでも浴びよう

暑い中、てくてく歩き、バス停に着く。嬉しい事に、ちょうどバスが来てくれて、直ぐに乗り込む事が出来た

バスの中は弱いけど冷房が効いていて、中々心地良い。空いていた席に座り、再び感謝状を開いてみる

「……」

雪葉に自慢出来るかな？　しかし捕まえたのは母ちゃ……レディーオカメだし、自分の手柄にして良いのだろうか。それに秋姉にも秘密にしてるしな

「うむ～」

腕を組んで考えているとバスは終点の駅前に止まった。ま、考えるのは後にして、とりあえず帰ろう

ミーン、ミーンミーン、ミーン

駅から家まで、歩いて約２０分。蝉は益々元気に鳴き、空もまだま

だ明るい

「……はぁ」

暑い。あつはなつい。

なんて高度なギャグを思い浮かべながら、河川敷を横切ると、ふと誰かに呼ばれた気がした

「？」

「こっち」

足を止めて声のする方、土手の方を見る。かなり段差がある為、見上げる形だ

「ん？　お、千里。何やってんだ？」

土手の上に居たのは千里だった。何をしているのか、そこで寝そべっている

「空見てた」

「へぇ、優雅だな。面白いもんあったか？」

「とくに」

「そっか。でもただ空見てんだけでも、なんか面白いよな」

何となく分かるぜ

「ただ空見ておもしろい人、少ないと思う」

「そ、そう？」

「そう」

「そ、そっか……」

「……」

「……」

会話が続かないぜ

「……じ、じゃあ、そろそろ俺は」

「……ユーフォー探してた」

お、会話が来た！

「へ～、ユーフォーか。居たか？」

「ううん」

「そっか。見付けたら教えてくれよな」

「恭君、ユーフォー信じてるの？」

「ん？　まぁ、いてもおかしくないと思ってるけど……」

「子供すぎ」

「悪かったな！」

「首疲れない？」

「疲れたよ！」

見上げっぱなしだからな

「こっち来て良いよ？」

「そりゃどーも」

別に行きたくも無いんだが、花梨の事も気になるし、少し話してみるか

緩い坂を上がって、千里の横に行く。千里は猛犬注意と書かれた文字の下に、怠そうな熊の絵がプリントされたTシャツを着ている。訳分からない

「胸見てる？」

「見てねーよ！　シャツだシャツ！！」

「ダルックマ」

「パクリ！？」

「着てると怠くなる」

「呪いのアイテム！？」

「でも実は犬」

「熊だろ！？」

「そんなかんじ」

「どんな感じ！？」

「さあ？」

「さあって！？」

疲れるなコイツ！

「はぁはぁ……はぁはぁはぁ」

「胸見てる？」

「シャツだシャツ！！」

以下ループ

千の退屈　3

「もう胸でいいです……ごめんなさい」

不毛な言い合いは、６ループ目に俺の完敗で終わった。もう口答えするのは止めよう……

「つか暑い！」

気付けば全身汗だくで、千里もまた額に汗を浮かべている

「ちょっと水買って来るからお前も飲め」

「ポカリ的すいっと希望」

「ああ、分かった」

この辺に自販機あったよな

急いで坂を駆け降り、近くの自販機へ

「うむ～」

ポカリ売ってねーな。仕方ない、こっちで我慢してもらおう

「悪い、オカエリヤスしかなかった」

よく冷えたオカエリヤスを持って土手に戻り、千里に手渡す

「構わない。似たようなものだし」

「そっか、良かった。外で遊ぶのは良いけど熱中症とか気をつけろよ」

「恭君、やさし」

「そうか？」

「優柔不断でもないし、みんなに好かれるの分かる」

「そ、そう？」

嬉しい事、言ってくれるぜ

「うん。ロリコンを宣言するなんて、常人では出来ないし」

「いつ俺がロリコン宣言をした！？」

「してないの？」

「してるか！」

「じゃあ、なんで好かれるのか分からない」

「どういう基準だよ！」

「国際基準？」

「なんで国際！？」

「なんで？」

「俺に聞くな！　ごほ、ごほ」

く～、さっきから叫びっぱなしだ

「喉痛くない？」

「痛いよ！」

「のど飴……」

千里はスカートのポケットを探り

「無いから酢イカあげる」

酢イカを俺に差し出した

「いや、余計痛くなるから」

「クレイジーチャレンジャー」

「チャレンジしない！」

「へたれ」

「やかましいわ！」

ちくしょう、会話の主導権が全く取れない！

「恭君」

「今度はなんだ！？」

次は負けねぇぜ！

「花梨ちゃんの事」

「うぉう！？」

いきなり本題か！

「なに？」

「い、いや、なんでも……花梨がどうしたって？」

「ちょっと元気ない。私達に気を使ってる感じ」

「……ふむ」

あいつ真面目そうだしな

「でも友達だし、それは大丈夫。問題は恭君の方」

「俺？」

「この間の大会、勝てたの恭君のおかげだし、恭君は大人かもだし、友達とも言えないし、どうしていいか分からないみたい」

「ふむぅ」

俺としては、もう終わった事なんだが、花梨としてはそうもいかないのかも

「今度話してみるよ」

「そこで恭君に朗報。今度の日曜日、花梨ちゃんのうちでパーティーするから。恭君も来て」

「日曜日？　日曜日は予定あるんだよ」

ま、どうせ姉ちゃんとの約束だし、破っても……

「じゃあ土曜日」

「こらこら。勝手に曜日変えるなって」

花梨の代わりにツッコんでおく

「恭君のわがまま。わがままボディ」

「なんでやねん！！」

あ、久しぶりな普通のツッコミ……

「でも分かった、花梨ちゃんと相談してみる。恭君のメールアドレス教えて？」

「え？　あ、ああ」

携帯をポケットから出し、アドレスを開いて千里に渡す

「……ありがと」

千里は携帯の画面を何秒か見た後、俺に返した

「どう致しまして……メモとかしないのか？」

「覚えた」

「マジで！？」

１０桁ぐらいあるんですけど……

千里は無言で携帯を取り出し、めっちゃ早くボタン打ち込む

「送信」

ほぼ同時にブブブと俺の携帯が震え、開いてみると題名にＵ．Ｓ．Ａと書かれたメールが来ていた

「なんでＵ．Ｓ．Ａ？」

疑問に思いながらメールを開いてみると、フ○ックユーの文字

「……お前ね」

「別にリサに対して言った訳じゃないんだけど？」

「なんで被害者づら！？　てかリサの事なんか思い付きもしなかったよ！　ごほごほ！！」

「喉痛くない？」

「痛いよ！」

それからまた何周かループして……

「フゥハァ……つ、疲れた」

もう喋る気力が無い

「恭君へとへと。ちょっと残念」

そう言って千里はケツを払いながら立ち上がり、こくんと頷く

「でも、おおむね満足。ありがと」

「よ、よく分からんが、良かったな」

「じゃあそろそろ帰る。メール送るから」

「お、おう」

「バイバイ」

「ああ、またな」

トトトトと土手を駆け降り、手を振りながら帰っていく千里

「……はぁ」

疲れた

今日の暇つぶし

千＞＞＞＞＞＞＞俺

つらし

第１２９話：院の過去（前書き）

そのうち削除。ＳＭ判別表

母　微妙にＳ

夏紀　ドＳ

秋　どちらかと言えばＭ

春菜　Ｍ

雪葉　わりとＳ

燕　Ｍっぽい

花梨　ややＭ寄り

美月　基本Ｍ

風子　ちょっとＭ

鳥里　中々のＭ

千里　Ｓ

リサ　Ｓになりたいの

綾音　ＳＭ

第１２９話：院の過去

月刊剣道一直線

剣道列伝、ＮＯ．３　土佐の白狼、日永　宗院

今、最も強い剣道家を問うと、読者は昨年全国警察剣道大会で優勝した【六桜　久志】七段を思い浮かべるだろう。豪快な上段からの面は、分かっていてもかわしきれないと恐れられ、近年では敵無しとまで囁かれている

しかし、そんな六桜が高校、大学時代と一度も勝てなかった選手が居る。それが土佐の白狼【日永　宗院】五段だ

日永と六桜の初顔合わせは、二人が高校二年の時に遡る。インターハイ準決勝、それが長い死闘の始まりだった

当初、六桜断然有利の評判の中、一本目を僅か９秒で日永は取る。二本目も１５秒と言う、とんでもない速さで決めた

決まり手は一本、二本同じく喉元への突き。ノーモーションで始まるその突きは、無拍子と呼ばれるもので、日永は１６歳と言う歳で、既に達人の域にあった

当時の六桜のインタビューによると、一本目は気付いたら喉に竹刀が刺さっていた。二本目の時は半分意識を失っていて、覚えていない、とある。日永の突きは、威力、速さともに申し分ないのが分かるだろう

このダークホースの登場に、試合会場は一時騒然となる。しかし日永は、決勝で体調を崩し棄権。結局準優勝で終わった

その後も、あらゆる大会で日永と六桜はぶつかる事となる。数えると、９戦。六桜は一度たりとも日永には勝っておらず、何度かある棄権以外では日永が敗北した事は無かった

冷静沈着な狩人。喉元に鋭く食らい付く様から、いつしか日永は土佐の白狼と呼ばれ、将来を期待されていた。そして、日永が大学三年の時、全日本学生剣道選手権で初の優勝。名実共に学生最強の座につく

だが、そんな栄光の中、日永は大学卒業後、突然消息を絶つ。関係者に聞くと、自分はまだ未熟。鍛え直すなどと言っていたそうだ。しかし十年経った今も日永の消息は不明のままだ

この謎に満ちた剣道家、日永　宗院。筆者はこれ以上彼について語る筆を持ってはいない。なので彼のライバルである六桜七段が優勝後にしたインタビューで締めくくらせて頂こう

『私はまだ日本一ではありません。私より強い男が居るからです。……日永、お前はまだ修業の身か？　妥協を許さないお前だ、己が満足するまで戻っては来ないだろう。だから待っててやるよ。何年でも何十年でも。俺は、強いままで待っててやる。お前と決着を付けるまで』　了

「……か、かっけ～」

学校帰り、たまたま寄った古本屋で凄い物を見付けてしまったな…
…この本、買って帰ろ

今日の立ち読み

俺

「五千円になりま～す」

「高っ！？　いらね！」

つけまつげ

第１３０話：春の部活帰り

「む、う……ん？」

土曜日の朝。起きると、メールが来ていた。寝ぼけまなこを擦り、メールを開いてみる

【おはよ】

おはよ恭君。花梨ちゃんのパーティー来週の日曜日に決まったからお知らせ。予定を調整するの結構大変だった。来ないと私の右拳が火を噴く可能性あり

「……ふむ」

来週の日曜日なら特に予定ないし、大丈夫だな

【Ｒｅ：了解】

雪葉と行く。

で、送信っと

【だめ】

返事早っ！？

驚きつつ、メールを開く

だめ。雪ちゃんは私達と早めに行くし。恭君はゲストだから、後から来るべし

【Ｒｅ：んな事言ったって】

俺、雪葉と一緒じゃないと花梨ちの場所分からないぞ。分かりやすい所にあるか？

【金髪】

恭君のうちに金髪を派遣する。途中で金髪が『花梨のうちなんて本当は行きたく無いんだけど』とか言うと思うけど『じゃあ行くの止める』て返すと、反応おもしろいからオススメ

「……」

やっぱＳだなコイツ

【Ｒｅ：了解】

じゃあ来週。

「……朝めし食お」

朝ご飯は、大盛りのウナ丼でした

「……春菜のリクエスト？」

「そうよ～。今日は土用の丑の日だから～朝昼晩ウナギってお願い

されたの～」

「……あ、そう。いただきます」

渋々ウナギを一口……

「む、むう」

くどく無く、まろやかながらも脂はしっかりと乗り、深みのある甘ダレと山椒の香りが食欲をそそる。……あの母、ただ者じゃない！

「で、春菜は？」

今、食卓には俺と雪葉と母ちゃんだけ。雪葉は俺の隣で一生懸命ウナギ丼を食べている

「春お姉ちゃんと秋お姉ちゃんは部活だよ。春お姉ちゃん、五杯も食べたの。やっぱりお姉ちゃんは凄いなぁ」

雪葉は感嘆の声をあげた

「……まぁ、確かに凄いけどさ」

色々な意味で

「雪葉は俺が起きるまで朝めし食うの待っててくれたのか？」

「え？　う、うん。雪葉が起きた時、お姉ちゃん達はもう食べた後だったから……」

「サンキュー」

思わず頭を撫でてしまう

「……えへ」

ふ、可愛い奴め

はにかむ妹とウナ丼を食い、気付けばあっさり完食

「あ～うまかった。ごちそうさま、母ちゃん」

「トド松～」

「……好きだね、昭和ギャグ」

麦茶を注いで、リビングのソファーに座る。テレビは天気予報をやっていて、今日は快晴３５度越え。暑くなりそうだ

「雪葉。昼過ぎにケーキ屋でも行こうか？」

「うん！」

キンキンに冷えたアイスコーヒーに甘いケーキ。夏の楽しみ方の一つだよな、これ

クリスマス系家族（前書き）

以前外伝として書いていたもので、そろそろ削除をする予定だったのですが、なんだか消すのが勿体なくなってしまって、こちらに移しました

近いうちに整理しますので、なんで夏の話の途中で数年前のクリスマスやるねんって感じで超見苦しいかと思いますが、どうかお許しを……

クリスマス系家族

ジングルベルの歌が商店街に流れる十二月二十四日。空からは小さな雪がホロホロと降る午後四時頃

俺は予約していた十六号のショートケーキと八号のチーズケーキを買い、家を目指し急いでいた

「早く家に戻らなくっちゃ！」

今日は手巻き寿司。遅くなると、春菜がグズッてしまう。来年は絶対自転車を買おう

来年は俺も中学校。去年盗まれたのが腹立って、自転車を買い直さず一年を過ごしたが、不便この上ない

「ふぅ、はぁ、ふぅ、はぁ」

駅前から小走りで走る事十五分。ようやく見えてきた我が家

「着いた！」

家の周囲には誰も居なくて、クリスマスと言う特別な日と、もしかしたら積もるかもな雪とで、テンション上がってしまっていた俺は、妙なスキップをしながら家のドアへ向かった

「おら、おら！　スキップ、スキップ！！」

誰かに見られたら確実に変人だ。その緊迫感が俺をドキドキさせる

ぜぃ

「あ……おか」

「ただいま～！」

ドアを開けて暖かい家の中へ。誰にも見付からなかったぜ！

「あ、おに～ちゃん。おかえりぃ」

達成感に胸を踊らせていると、玄関でフキフキと拭き掃除をしていた雪葉が、掃除を中断して俺を出迎えた

「寒かった？　お風呂にする？　ご飯がい？　それとも雪葉？」

俺のダッフルコートを一緒懸命脱がし、身体一杯でコートを持って屈託無い笑顔で言う雪葉。

ママが見ているサスペンスドラマに影響されているらしい

「ん～。雪葉だ！」

雪葉を抱き抱え、きゃっきゃと笑う雪葉のおでこにキス

「掃除、偉いよ雪葉」

いい子、いい子と頭を撫でて……

「……えり」

「うわっ！？　あ、秋姉さん？　い、居たんだ」

いつの間に居たのか、俺の後ろには白いセーターを着た秋姉さんの姿があった

「……」

ジトーっと、拗ねたような目をする秋姉さん。こんな目をするのは珍しい

「あ、秋姉さんも、いい子、いい子～」

気まずさに、思わず秋姉さんの頭を撫でる

「……ん。着替える」

秋姉さんは猫の様に目を細めた後、自分の部屋へと向かって行く

「……な、何だったんだろう」

我が姉ながら謎だ

「もうすぐご飯だから、お部屋で待っててね、おに～ちゃん」

下ろしてと言う雪葉を下ろすと、雪葉は掃除用具を片付け、とてとてリビングへ向かって行った。多分、ママを手伝っているのだろう

「……ふふ」

俺は雪葉が畳んでくれたコートを手にとり、言われた通り部屋へと向かった

「あ、兄貴。おかえり」

部屋へと入った俺を胡座で出迎えたのは、妹の春菜。奴は俺のベットの上で食パンを食べながら漫画を読んでいやがった

「で、何故に食パン？」

「へ？　ああ、これか。ほら、今日はオレの大好物な手巻き寿司だろ？　下手するとオレ一人で全部食べるかもしんねーじゃん？　せっかくのクリスマスだぜ？　そんなテンション下がる様な事、したく無いじゃん」

だからさ、と、春菜は憂いを帯びた表情で言った

「春菜……お前」

根本的に気遣う部分が違うぞ。そう言いたい所だが、せっかくの妹の成長だ。生温かい目で見守ってあげよう

「ところで兄貴」

「なんだ妹」

「イクラを賭けてゲームしようぜ！」

結局賭けは俺が勝ちましたが、マジ泣きする妹にイクラを譲る事にしました。

「でも春菜。多分そんなに気にする事ないよ」

まだ少しグズッている春菜の背中を撫でながら、リビングへと向かう

「父さんは出張中だし、夏紀姉さんは今日、遅いんじゃない？　姉さんはいっつも遊び歩いてるからな。

不真面目で、不健康、おまけに不衛生。あれで良く生徒会長なんてやってるよ。モテる割には彼氏出来ないし、て、姉さんの本性を知ったら彼氏になるなんて物好き居る訳無いか！　あはは……どうした、春菜？」

春菜は下を向き、ガタガタと震えていた

「で、でも夏姉は頭良いし、オレは大好き～」

「まぁ俺も夏紀姉さんの事は好きだけどね。ただ奥さんや彼女にはしたくないな～。一月の小遣い５００円とか平気でやりそうだ……」

後ろからガシっと頭をわしづかみされ、俺の身体は硬直する

「私も貴方が好きよ？　うふふふふ」

「ぼ、僕も姉さん、大好きっ！　い、今のは姉を慕う弟のくだらない戯れ事で……」

ギリギリギリ

万力に挟まれたかの様に頭が絞まる

「ね、姉さん？　ちょ～っと頭が痛いな～なんて」
「孫悟空っているじゃない？　西遊記の」
「は？」
「あのわっかって、ずーっと絞まり続けるとどうなるのかしら？」
「な、なにを言って？」
「試してみる？」
「い、いえ！　またの機会にぃいいいい～！？」
頭を絞めるパワーが更に倍！　はらたいら！！
「だ～れが行かず後家だぁあああ！！」
「そ、そんなこと言ってないいいい！　助けて春菜～」
「な、夏姉？　兄貴も反省してるみたいだし……」
「ああん！？」
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」
役に立たねぇ！　こうなったら最後の手段！！
「た、助けて、秋ねうわっ！？」

秋姉さんの名前を呼ぼうとすると、頭をギュっと抱きしめられた

「か、可愛い弟よね～、本当に～」

声が震えていますよ？

がちゃ

ずん、ずん、ずん

そんな効果音を出してしまうぐらい、こちらに向かって来る秋姉さんは迫力があった

「……姉さん？」

「あ、あらアキ！　居たのね～。いや～、家に帰ったらこの子が居てさぁ余りにも可愛いから抱きしめちゃったっ！　……そうよね、春菜」

こくこくと頷く春菜

「……そうなの？」

「う、うん。夏紀姉さんがイクラを俺と春菜に全部あげるって言ってさ。驚いちゃったよ」

この家では俺と春菜と夏紀姉さん以外イクラを食べない。ちなみに夏紀姉さんの大好物

「なっ！？　そんな事」

「孫悟空」

「うっ」

「西遊記」

「ううっ」

「わっかが絞まるとどうなるんだろうね？」

「い、イクラ全部あげるわよ」

「わ～い。夏紀姉さんありがと～」

「……仲良し」

ニコッと笑う秋姉さん。気付いてないのだろう、俺と夏紀姉さんの間にある緊迫感を

「おに～ちゃん、おね～ちゃん。ごはんですよ～」

その緊迫感を打ち破る、雪葉の声。廊下で固まっている俺達を不審がるそぶりも無く、夜ご飯を知らせてくれた

「よっしゃ！　ご飯！」

いきなりテンションＭＡＸになった春菜がリビングへ飛び込んで行く。元気な奴……

「じゃ、俺も行くとするか。夏紀姉さん、可愛い弟を抱きしめたい気持ちは判るけど、そろそろ離してくれません？」

「ぐっ！　そ、そうね」

夏紀姉さんは悔しそうに俺を抱擁から解放する

「これからは弟を可愛いがるのも、ほとほどにしないといけませんなぁ」

「こ、このガキ」

「……姉さん？」

「か、カキが食べたいなぁ」

勝った！

「……ん。明日買ってくる」

「あ、ありがと～。お金は出すからね～ホホホのホ」

わざとらしく笑う夏紀姉さん。もうお小遣なさそうなのに無理しちゃって

「……くくく」

「もちろん、あんたも、食べる、わよねぇ？」

「……はい。割り勘にしましょう」

顔は笑顔なのに目が全く笑ってないと言う顔芸を見せられては、黙って頷くしかなかった

クリスマス系家族　2

「一杯食べてね～」

そんなママの声で始まった夕食。

リビングのテーブルには一体何処の相撲部屋ですか？　と言いたくなるぐらい食材と、すしめしが乗っていた

「うっお～！　クリスマス最高！！　いただきま～す！」

若干引いてる俺や夏紀姉さんを無視して、大喜びの春菜。おにぎりみたいな手巻き寿司を作り、頬張る

「……夏紀姉さん、イクラ食べて良いよ？」

大きめの皿に溢れんのイクラ。此処は寿司屋か？

「……たま～にね。たまにだけど、変な家だな～って思う時あるわ」

「……奇遇だね。俺もそんな時あるよ」

「……大人になるってこういう事なのかしら」

「……かもね」

「ほら～、早く食べないとなくなるわよ～」

ママが、ア然とする俺と夏紀姉さんに、そう言ったけど……

「それはないわ」
「それはないよ」

珍しく夏紀姉さんと意見が合った瞬間だった

一時間後

「うぇ～苦しい～」

腹をぱんぱんにさせ、横たわる春菜。春菜でも流石に全部は食えなかった

「食べて横になると牛になるぞ」

「も～」

「え～い、このポッコリお腹め！」

牛の鳴きまねをする春菜のお腹をくすぐる

「ちょ！？　や、やめ！　止めて兄貴！？」

「うりうり～」

「あ、あはははは！　くすぐったい、くすぐったいって兄貴～」

本当、くすぐりに弱いよな～

「ふぅ……。そろそろ勘弁」

「……も～」

勘弁してやろうかと思ったら、横からもう一匹の牛の声が

「へ？」

「へ？」

思わず春菜と顔を見合わせ横を見ると、床からスーッと起き上がる秋姉さんの姿

「……あ、秋姉さん？」

「……な、なんでもない」

秋姉さんはカキの様に顔を真っ赤にさせ、冷蔵庫の方へ行く

「……」

「……あ、兄貴～仕返しだ～」

「う、うわ～やられたぁ～」

気まずさで三文芝居を始める俺ら。何故か途中で雪葉も混ざって、大賑わい

「は～い、それじゃそろそろケーキ食べましょ～」

くすぐりっこが終わって一段落した後、さっき俺が買って来たケーキをママがテーブルに置く

「け、ケーキって……俺達はともかく春菜は」

腹一杯で横たわっていて……あれ？　春菜は

「どうした兄貴。早く椅子に座れよ？」

「お前、凄いな！？」

いつテーブルに！？

「は～い、それじゃみんな席に着いて～」

「は～い」

素早く着席する俺ら。チームワークは最高だ

「ロウソク立てて～、電気消すわね～」

パチっと電気を消すと、ケーキの上に立つロウソク灯が、優しく部屋を照らした

「きれ～」

「……ん。なんだか暖まる」

「たまにはロウソクも良いわね」

「……美味そう」

「一人変な感想の奴が居たぞ！」

「うふふ。……ジングルベ～ル、ジングルベ～ル」

「鈴が鳴る～」

自然と、家族全員で歌い始めたクリスマスソングは、何処か音程がズレていたけど何だか凄く暖ったかくて……

「父ちゃん元気かな～」

「あ、忘れてた」

「あ、忘れてた」

俺と夏紀姉さんの声が見事にハモった瞬間だった

春の部活帰り　2

駅前の喫茶店、茶太郎

「ふぃ～。少し歩いただけでも汗が噴き出るな」

「セミさんも凄い鳴いてるね」

「あれはミンミンゼミだな。さ、入ろうぜ」

「うん！」

自動ドアを潜ると、そこは別世界。ヒンヤリとした空間が汗を冷やす

「いらっしゃいませ。何名様ですか？」

１８０センチはありそうなウェイターの兄ちゃんに二人だと伝え、一番奥の四人掛け用の席へと案内された。割と広い店内の中、客は少なく、のんびり出来そうな雰囲気がある

「涼しいね、お兄ちゃん」

「ああ、ちょうど良い感じだよ」

寒くもなく、生暖かくもなく絶妙な温度だ

「ほら、メニュー。好きなの頼みな」

テーブルに置かれたメニューを開き、雪葉に寄せる

「う～んと……あ！　雪葉、カバさんパフェ！」

「此処でもか！？」

なんなんだ最近のカバブームは。なんだか闇社会の力を感じるぜ……

「お兄ちゃん？」

「あ、ああ……飲み物は要らないのか？　甘いパフェに苦めのアイスティーとかさ」

「ん～ん。太っちゃうもん」

「はは、そっか。じゃ注文するぞ。すみませーん注文お願いします」

「はい、ただいま」

さっきのウェイターが、スムーズな動きでこちらにやって来る

「ご注文、承ります」

「はい。カバさんパフェとアイスコーヒー、それとこのケーキで」

「はい、承りました」

注文を受けた後、ウェイターはメニューを手に取り、数ページめくってテーブルにそっと置いた。見てみると、カバの頭に人間の身体を持つ不気味な生物が五匹でポーズを取って写っている

「ただいまカバフェアをしていましてカバ系二品を注文して頂けると、こちらのスーパーカバ戦隊カバチタレフィギュアを差し上げております」

「ただカバって言いたいだけでしょ？　てかこんな不気味な人形なんか……うっ！？」

「カバさん……」

じーっとメニューを見ている雪葉の目が、キラキラと輝いている！

「カ、カバカレーを追加だ！！」

「ありがとうございます。お味はグリコとバーモンドとハウスがありますが、どちらになさいます？」

「レトルトか！？」

「それはどうでしょう」

「なんで意味ありげなんだよ……ハウスで良いです」

「承りました。では少々お待ち下さい」

そう言い、颯爽と去って行くウェイター

「変な店だな……」

「あ、ありがとう、お兄ちゃん」

「え？」

「カバさんグッズ。欲しかったの！」

「ああ。どういたしまして」

しかしカバさんか……。何度見ても不気味だな

「時に雪葉君。最近学校とかはどうかね？」

メニューを閉じ、兄貴っぽい事を聞いてみる

「うん、凄く楽しいよ。夏休みになっちゃうのがちょっと残念なくらい。あ、そうだ。お兄ちゃん来週の日曜日、何か予定ある？」

「ん？　もしかして花梨のパーティーの事？　大丈夫、俺も行くよ」

改めてみんなに礼を言いたいしな

「え？　お兄ちゃんパーティーの事、知ってたの？」

「ああ、千里に聞いた」

「千里ちゃんが？　……珍しいかも」

「珍しい？」

「うん。千里ちゃんって凄く仲良くならないと、自分から何かをお話しする事ないの。だから」

「ふーん。ちょっと変わった子だよな」

「え？　そ、そう……かな」

雪葉は表情を暗くし、困惑気味に呟く

「あ、ごめん。雪葉の友達に変わってるなんて失礼だった。悪い意味じゃないんだ、個性的で良いと思ってる」

元カノも変わってる奴だったし

「類は友を呼ぶって奴かな。雪葉がいい子だから雪葉の友達もいい子ばっかりだ」

兄は誇らしいぞ

「ん、んと……。あ、ありがとうお兄ちゃん」

照れ臭そうに、はにかむ雪葉。良かった、夏紀姉ちゃんに似なくて

「お待たせしました、カレーです」

「カレー早っ！？」

来たのはごく普通のカレー。カバっぽさのかけらも無い

「まあ良いや。先に食べさせてもらうな」

「うん」

スプーンを手に取り、一口

「……やっぱレトルトか」

バーモンド頼めば良かったぜ

「あ、カバさん」

「え？　……ああ、なるほどね」

ニンジンがカバっぽく切ってありました

春の部活帰り　3

「こうやってな、クシャクシャにしたストローの袋に水を一滴垂らすと、微妙に動くんだぜ」

喫茶店に入って２０分、パフェやケーキも食べ終え、話題が無くなって来ていた

「へぇー。面白いね、お兄ちゃん」

余り興味なさそうだが、雪葉は一生懸命俺の話を聞いてくれる。これが夏紀姉ちゃんなら『で？』と無表情で聞き返し、俺を追い詰めるだろう

「じゃあ、そろそろ出ようか？」

「お兄ちゃんにお任せです」

ニコッと笑顔で雪葉は応える。全く一体誰に似たらこんな良い子が……親父？

「お兄ちゃん？」

「ああ、ごめんごめん。よーし、じゃ引き上げるべ」

「うん！　……あれ？」

伝票を手に取って立ち上がろうとした時、雪葉は店の入口方向を少し驚いた顔で見た

「ん？　どした？」

釣られて振り向いてみると、入口には春菜っぽい後ろ姿の奴と、その友達と見られる二人がウェイターに席を案内されている

「春お姉ちゃん？」

「多分な。一人だけジャージだし」

他の子達は、ちゃんと私服を着ているのに、一人緑色のジャージを着ている様は、もしかしてバカなんじゃないだろうか？　と思わせてくれる

「あ、やっぱり春お姉ちゃんだよ」

「そうだな。部活帰りにちょっと涼みに来たんだろ」

なんと贅沢な！

「雪葉、挨拶してこようかな」

「別にしなくても良いんじゃないか？　なんか盛り上がってるし」

春菜を中心に楽しそうな声が聞こえてくる。その声を何となしに聞くと、春菜の友達だと思っていた二人は、どうやら部活の後輩らしい。三人は俺達とは少し離れた席に座り、会話に花を咲かす

「お疲れ様でした～」

「お疲れ様です、春菜先輩」

「ああ、お疲れ。今日は二人とも結構走り込んでたな」

「はい。でも春菜先輩に比べたら全然……」

「多く走れば良いってもんじゃないからさ。今の自分に合った練習をしねーと。そこいくとお前らは良い感じでやってると思うぜ」

「あ、ありがとうございます！」

「アザッス先輩！」

「……ふむ」

中々先輩してるじゃないか

「後でからかってやろうぜ。さ、帰ろう」

よっこいしょっと腰を上げて……

「あ～あちー。もージャージ脱ぐしかねー」

「本当暑いですよね～。あ！？　せ、先輩！　体操服から……す、透けてます！！」

「透けてる？　ああ、乳首？　邪魔だよなこれ、取れねーかな」

ゴーン！！

「キャ～！？　お兄ちゃんが何故か突然まえのめりに倒れてテーブルに頭を～」

「ぐ、ぐおお～」

「だ、大丈夫、お兄ちゃん？」

「な、なんとか……」

つか、アホかあいつは！

「先輩は部活中ブラジャーとかしない派んすか？　デカイのに」

「蒸れんの嫌なんだよ。暑いし」

あははと笑う春菜を、カッコイイとリクペクトする後輩１。なんつー体育会系だ

「あ、あの……スポーツブラとかありますよ？」

遠慮がちに聞くのは後輩２だ。どうやら彼女は常識人らしい、安心したぜ

「さ、帰ろぜ雪葉」

よっこいしょっと立ち上がって、伝票を

「ふーん。今度兄貴に買ってもらおかな」

「……え？　お、お兄さんにですか？」

「ああ。この前、兄貴が興奮しながらパンツ貸してくれって言うから、やるって言ったら新しいの買ってくれる事になってさ」

スッテーン！！

「キャ～！？　お、お兄ちゃんが何故か突然足を滑らせて体操選手みたいな上下の開脚を～」

「股が～股がぁああ！」

裂けてまう裂けてまう～

「そ、それは……大丈夫なんですか？」

「何が？」

「あ、えっと……春菜先輩のお兄さん、ちょっとアレなのかなって……」

「アレ？　良く分かんねーけど、まあまあ良い兄貴だと思うぜ？私は超好きだけどな！」

「……」

ふ、春菜の奴め

「大丈夫、お兄ちゃん？」

「ああ、心配かけてごめんな。さ、今度こそ帰ろう」

床に落ちた伝票を拾い、俺は財布を手に雪葉と共にレジへと向かった

今日の風評被害

俺

「それに色々知ってんだぜ～。コンドームの使い方とか知ってるか？　兄貴が詳しく教えてくれたんだ」

パコーン！！

「ひゃー！？　つってーな！　何すんだよ！！　いきなり頭叩きやがってって、兄貴！？」

「お前、マジでいい加減にしろ！」

ツヅマニ

第１３１話：夏の海

窓を開けると、強い雨音が耳につく土曜日夜。空は真っ黒で、雨が止む気配は全くない

「凄い雨だな」

「……うふふ」

何となしに呟くと、リビングのソファーで携帯をいじっていた夏紀姉ちゃんが不気味に笑った

「姉ちゃん？」

「天気予報、明日も大雨ですって。どう？　この間の悪さ。ちょっとみんなと海に行きたいなって思ったらこれよ？」

ニヤニヤと余裕ありげに笑っているが、ちょっと涙ぐんでる所が哀れさを誘う

「まぁ夏はこれからだしまた誘えば良いじゃん」

「ふん。どうせまた雨が降るわよ。それとも嵐かしらねアハハのハ」

うわ、相当拗ねてるよ

「つ、次はきっと晴れるよ。うん、間違いない」

「どうだか」

ふんっと鼻を鳴らし、麦茶を注ぐ姉ちゃん。酒が入ってない分、静かって言ったら静かだが……

「まぁまぁ。明日はみんなでドンジャラでもやろうぜ」

「……ドンジャラ」

それから、しょぼくれた姉ちゃんと暫くお茶をして、いつの間にか１２時前。姉ちゃんのアタシ寝るわ発言で解散。海に行けなくなったのは残念だが夏はこれからだ、また行けるチャンスもあるだろう

「じゃ、おやすみ」

「ええ。おやすみ」

う～む、やっぱ元気ないなぁ。明日肩でも揉んでやるか

「……ねむ」

俺も寝よう

歯を磨いて部屋へ戻り、ベッドの上で時計を見ると、１２時過ぎ。久しぶりに目覚ましかけないで寝るか

ＡＭ　０７：０３

ドタドタドタ

「ぐーぐーすやすや」

ドタドタドタドタ

「む……ぐー」

バターン！！

「うわぁ！？　な、なに事だ！」

襲撃か！？

「どーよ！！」

「え？　な、なに？　なんなの？」

パニック状態で部屋を見回すと、ドアの前で姉ちゃんが仁王立ちしていた

「ね、姉ちゃん？」

「海に行くわよ！」

「……うににく和洋？」

何を言ってんのかさっぱり分からん

ぽけーっとしていると、姉ちゃんはズンズン部屋の中へ入って来て

「どう、この青空！　お日様も笑ってるわ！！」

カーテンを開けながらサ○エさんみたいな事を言い出した

「へーどれどれ」

起き上がって窓の外を見上げると、雲一つ無い超快晴

「さぁ、準備しなさい。一時間後に出発よ！」

テンション高いな～

「分かったよ。じゃ顔洗ってくる」

「やっぱり最後は逆転する女なのよねアタシは。持って生まれた強運ってやつかしら」

「……強運ねぇ」

どっちかって言うと、悪運？

「海は広いな～♪」

上機嫌に歌いながら2階へと上がって行く姉ちゃん。凄いテンションだ

「……やれやれ」

ま、元気になって良かったかな

夏の海　2

「夏だ！　海だ！　大好きだ～！！」

海。夏の海。母ちゃんを除いた家族みんなで家から車で一時間の海へとやって来た俺達。真っ先に車から飛び出して浜辺に降り立った春菜は、両手両足を目一杯広げて海の風を全身に浴びている

「元気だな～」

春菜を追って浜辺に出た俺は、半分呆れながらもなんだかほほえましくて暖かい眼差しで見てしまう。やっぱ元気なのが一番だ

「だって海だぜ、海！　夏の海！！　うおおお～最高ー！！」

春菜は俺の方へ猛スピードで走り寄って来て――

「おりゃ～！」

「ぐぼぉ！？」

俺の腹へ矢のようなタックル！　５００のダメージ！！

「あ～にきっ！　って……あれ？　何、寝てんだよ！　せっかく海に来たんだし、もっとテンション上げようぜ！」

「ね、寝ているんじゃない。お前にぶっ倒されたんだ……」

なんつータックルだ。俺でなかったら死んでたかもしれん

「そっかー。ごめんな、兄貴」

謝りながら俺へ伸ばされた春菜の手を取り、起き上がる

「いてて……。全く。気をつけろよ」

しかしまぁ、こんな良い天気だ。はしゃぎたくなる気持ちも分かる

「つか、なんか空でけー」

ものすげー青いし

「海も超でけーぞ！」

「そうだな」

つくづく夏だ

「よーし、今日は超泳ぐぞ～」

そう言い、春菜はおもむろにズボンを脱ぎ始める

「ばっ、お前、こんな所で……なんだもう着替えていたのか」

春菜はズボンの下に、ちゃんと水色のビキニを履いていた。たく、ビビらせやがって

「海に行く時は先に着替えとく。そんなの常識だぜ」

ニヤッと笑い、春菜は両手をクロスさせて裾下から上着をめくって……ぽろり

「あ、上着てくんの忘れてた」

ゴーン！

「ぎゃー！？　な、なにすんだよ！　いきなり頭突きとかひで～よ」

「頼むからもう少し気をつけろって！」

涙が出そうだ

「ちぇ、意味分かんねーの。多分車ん中にあると思うから、水着取って来るわ」

「ああ、そうしろ。間違っても人前で着替えんなよ」

「分かったよ」

どうも釈然としていないようだが、納得はしてくれたらしい

「困った奴だ」

走り去る春菜を見送りながら、溜め息。やっぱ一度本気で夏紀姉ちゃんに教育をしてもらう必要がありそうだけど……

ぶるると身体が震える。俺も一度姉ちゃんの教育受けた事があるが、あれは某ヨットスクールよりも恐ろしい。流石に可哀相だから、雪葉や秋姉に春菜の教育をお願いしてみよう

「さーて」

俺もどっか物陰で着替えてくるとするか

周囲を見回すと、ちょうど隅にボロくて小さな藁葺き小屋があった。
そこの裏を借り、着替えを済ませて服やタオルを袋にしまう

「……よし」

着替え終了だ。秋姉達はもう着替え終わってるかな。とりあえず一度車に戻ってみよう

「あちち」

焼けた砂浜を歩き、階段を登って夏紀姉ちゃんがわざわざ借りて来たワゴン車が置いてある駐車場へと向かう。すると、ちょうど車から水着姿の夏紀姉ちゃんが出て来た

派手な色のペイズリー柄ワンピースが俺の目をチカチカさせる

「はぁ……暑いわね。ずっと車に閉じこもっていたい気分だわ」

基本引きこもりな姉ちゃんは、太陽を見ながらうんざりした口調で呟く。つか、なんで海に誘ったんだこの人

「秋姉達は？」

「クーラーボックスに入れる飲み物をコンビニへ買いに行ったわよ。熱中症対策らしいけど、まめよね」

いや、あんたが用意しとけよ。などとは言えない俺が好き

「お兄ちゃ～ん」

呆れながら姉ちゃんを見ていると、俺を呼ぶ声がした。見てみると数十メートル先に、コンビニ袋を持ったピンクの花柄ワンピースを着た雪葉と春菜と……っ！？

「あ、あれはまさか」

まさか、まさか、まさかぁあああああ！！

「び、びび、びびびびびびびび？！？」

「あん？　……ああ、アキね。あの子今日も学校の水着で来ようとしたから、急遽水着を買って来て……な、なんで号泣してるのよ？」

「ああ、今、心の琴線が激しく震えている！　人は本当の美を前にしてはなんと無力で、ちっぽけな存在なのだろう」

白ビキニ。それは宇宙の誕生に等しい奇跡

白ビキニ。それは輝かしい未来の象徴

「ありがとう世界、ありがとう地球！　ありがとぉお、ありがとぉおおー！！」

僕らの未来はこれからだ！！

「……」

「あ～ありがたや～、ありがたや～。……はっ！？」

ふと背中に感じた強い寒気に我に返り、振り向いてみると、見られただけで思わず石になってしまいそうな冷たい目の姉と目があってしまった

「な、なんちゃって」

「夏休みさ……姉ちゃんとゆっくり話し合いましょう？　ゆ～っくりね」

ニコリと笑う姉。なんと邪悪に満ちた笑顔なのだろう。本人は警戒を解いてるつもりだろうが、こんなのが保険の勧誘をしてたら、相手は裸足で逃げ出すレベルだ

「あ、い、いや、え、遠慮しておくよ。姉ちゃんも忙しいだろうし……」

「大丈夫よ。うふふ」

ああ、俺の夏は今日で終わった

微笑みながら妖しく舌なめずりをする姉ちゃんを見て、俺はひと夏の終わりを覚悟しました

夏の海　3

「ま、今日は許してあげるわ。アンタのシスコンは病気だしね」

「病気扱いしないで！」

そう言われると本格的にヤバそうじゃないか

「俺はただ姉リスペクトなだけであって、シスコンとかそんなんじゃ」

「ただいま、おに～ちゃん」

必死に無実を訴えていると、雪葉が小走りでやって来てエヘーっと俺に寄り添った

「あ、ああ、おかえり。ご苦労様」

「うん！」

「う……」

なんて素直な瞳だ。それにくらべて姉の水着姿で喜んで騒いでいる俺って一体……

「……ただいま」

「おかえり秋姉！」

雪葉に続いて戻って来た秋姉。つか、やっぱビキニは最高ですわ！！

「……減点3ね」

夏紀姉ちゃんがボソッと何かを呟いたが、敢えて気にしない事にしよう

「ん、ただいま……。良い天気だね」

荷物を車内に置き、秋姉は眩しそうに手をかざして空を見上げた

なんて絵になる姿だ。もしこれが自衛隊の募集ポスターだったら、俺は入隊せざるおえない

「早く海いこーぜ」

最後に来た春菜が焦れた声を出す。秋姉はコクンと頷き、買って来た大量の水や氷をテキパキとクーラーボックスに詰め込んだ

「……うん」

頷きながら秋姉はクーラーボックスを肩に担ぐ

「俺が持つよ、秋姉」

「……大丈夫」

ニコっと微笑む秋姉。この微笑みだけで俺は、３０キロの米俵を背負って山を登れる

「良いから恭介に持たせなさい。そのくらいしか役に立たないんだし」

あんたにだけは言われたくねーよ。なんて言えない俺に愛の手を

「でも……」

「大丈夫、大丈夫。俺に任せて！」

「……ありがとう」

秋姉は少しでも動けば触れてしまいそうなぐらい俺の側へ寄り、ゆっくりと自分の肩から俺の右肩へクーラーボックスのベルトをかける

「……手を離すね」

「あいよ！　うっ」

秋姉が手を離した瞬間、ズシっとベルトが肩に強く食い込んだ

「……大丈夫？」

重っ！　めっちゃ重っ！

「へ、へーき、へーき。軽い、軽い」

「……さすが男の子だね。もう私じゃ敵わない」

嬉しそうに微笑んでくれているけど、多分余裕で勝てると思います……

「じゃ、荷物運び頼んだわよ奴隷。アキ、春菜、雪。姉ちゃんに付いて来なさい！」

「誰が奴隷だ」

なんだか分からんが、姉ちゃんは急にテンションを上げ、みんなを引率し始めた。もしかして、重くてスムーズに歩けそうにない俺の顔を立ててくれたのだろうか？

「俺はゆっくり行くからみんなは先に行ってて。春菜、雪葉から離れるんじゃないぞ」

「分かった！　私は雪の姉貴だからな！」

春菜は私が保護者だと言わんばかりに雪葉の手を繋ぎ、夏紀姉ちゃんの後を追ってゆく。どちらかと言えば雪葉の方が保護者なのだが、まぁ良い

「秋姉も行って」

「……うん」

秋姉は若干心配そうな顔をしたが、先に行ってくれた

「……さてと」

四人がちょい先の階段を下りたのを見計らって俺もヨタヨタと歩きだす。２０キロ以上は楽にありそうだな、これ

それから5分。ようやく階段を下りた時には、みんなの姿は無かった。たいした距離じゃないのに随分時間を掛けてしまったな

「えっと……」

まだ時期じゃないのか微妙に客が少ない浜辺を歩き、視界が開けた所で見渡すと、３０メートルぐらい先に、どっかで借りて来たのかビーチパラソルを担いだ春菜が居た。他の三人は見当たらない

「春菜～」

早歩き、とは言ってもやはりヨタヨタしながら春菜の所へと急いで向かう

「ん？　お、兄貴。どうした？」

「みんなは？」

「あっちの海の家。夏姉がナンパしてきた男達に土下座させてる」

「ナンパから土下座になる過程が全く分からないのだが……しかしもうナンパされたのか」

前にも言ったかもだが、うちの家族は水着になると非常に目立つ。ほっとくとナンパされまくりな一日に成り兼ねない

しかも今回はビキニ秋姉と言う、神ですらひざまづかせそうな最終兵器までいらっしゃる。その最終兵器を前にしては男など餓えた狼のようなもの

「俺がみんなを守るしか無いか……。なるべく俺から離れるんじゃないぞ春菜って春菜!?」

さっきまで春菜が居た場所に、ビーチパラソルだけがぶっ刺さっている。ちょっと目を離した隙に消えるとは、忍者みたいな奴だ

「たく……あ、いた」

この暑い中、春菜はダッシュで海の家に向かっていた

「しかも早いし……」

あれじゃ、誰も声掛けてこないわな

「ようようよう」

なんて油断したら後ろから俺を呼ぶ声が！　さっそく絡んで来たか!!

「あ、あれはただのオカマです！　春夫って言うケチな野郎なので、ナンパ、勧誘、その他もろもろお断りです!!」

振り向きもせず、有無を言わさぬ強い否定。これで引かなきゃ拳を交える事になるだろう！

「兄さん、いいケツしてますね～」

さわさわ

「きゃ!?」

やだ。この人、アタシ狙い？　って何故俺のケツを！

「な、何を……あ、綾さん！？」

驚きの中振り向くと、にこやかに微笑む綾さんの姿があった

「はい、綾さんです。偶然ですね」

「え、ええ、偶然過ぎて本当にびっくりしています。ところで……何をしてるんですか？」

綾さんは黒いビキニの上にラムネと書かれたTシャツを着て、重そうなクーラーボックスを肩に担いでいる。汗に濡れたシャツが、なんだか妙にエロい

「アルバイトですよ。稼ぎ時ですので」

そう言って綾さんは、クーラーボックスを開けてラムネを一本俺に手渡す

「あ、はい。いくらですか？」

「お友達価格で無料です」

「え？　あ、ありがとうございます。でも……良いんですか？」

「メガネの時給から引いておきますから」

そう言い綾さんは、春菜が向かった海の家を指差す。そこではどっ

かで見た事ありそうなオッサンが、客引きをしていた

「……大変ですね、あの人も」

凄い人なのに

「今朝は食パンの耳だけを塩をかけて食べていました」

「また悲しくなるエピソードを……」

後で焼きそばでも奢ろうかな

「じゃあラムネ、遠慮なく。ありがとう」

プシュっとラムネのビー玉を落とし、ゴクリと飲む

「く～！　うまい！」

良く冷えた炭酸が、喉を焼くぜ！

「どういたしまして。ついでに触っときます？」

「はい？　って何故唐突に四つん這いになって俺へ尻を突き出す！？」

女豹か！　女豹なのか！

「さっき触らせて頂きましたので」

「もうラムネを頂きましたから、そんな事しないで良いですよ！」

しかし、手が！　俺の手が勝手に!?

「ところで佐藤君」

勝手に動く前に、綾さんはサッと素早く立ち上がってしまった

「……それで良いんですけどね。なんです？」

「私は無難なトランクスは嫌いです。先っぽが出るぐらいの際どいブーメランで冒険して下さい」

「真剣な顔をして、いきなり何ぬかしてんですかアンタは」

「ではフンドシで」

「ハードル上がってますがな」

「……フ○チン？」

「止めて！　美人がフ○チン言うの止めて!!」

なんか嫌だ！

「む～」

全否定すると、綾さんは不満そうな顔で唇を尖らてしまった

「佐藤君！」

「は、はい」

ヤバイ、怒ってる？

「佐藤君はいつまで出し惜しみをする気ですか！」

「……はい？」

「そんなんじゃアレですよ！？　えっと……まぁとにかくアレです！　アレがアレな……加〇鷹にはなれませんよ！！」

「……とっとと仕事に戻ったらどうです？」

これ以上付き合ってると疲れそうだ

「……ごめんなさい、良いオチが浮かばなくて」

綾さんはガックリと肩を落とし、クーラーボックスを肩に担いだ

「加〇鷹ではなく、宮沢〇え。だったらありだったかなと」

いわゆるサンタフェ

「……本当、佐藤君って幾つなんです？」

「ネタが分かる綾さんも中々……」

つか、加〇鷹って……

夏の海　4

「しかし大変ですね。こんな暑い中、ラムネ売りだなんて」

年齢詐称の疑惑は消えないが、太陽が照り付けるこの場所で追及するのは危険だと察し、俺は話を変えてみた

「いえいえ、すごく気持ち良いですよ。普段は室内で汗をかいていますから、たまには外で。あ、今のはエッチな話ではありませんので、あしからずです」

「……」

まったくこの人は……ここらへんで一度ビシっと言っておくか

「綾さん！」

「は、はい！」

「なんでもかんでも下ネタに持って行こうとするのは三流芸人のする事ですよ！　ツッコミ入れる身にもなって下さい！」

「で、ですが、私からエロを抜いてしまったら、ただのツンデレ剣道少女しか残らなくなってしまいます……」

俺の説教を受けて綾さんはしょんぼりしながら、そう言ったってか

「……ツンデレだったんですか貴女？」

また意外な

「そうですよ、こほん。おっぱいなんか揉ませないんだからねっ！」

「……ははは」

俺の口から、乾いた笑いが勝手に出た

「ご、ごめんなさい。自分でも今のは無いなって思います……」

綾さんは顔を赤くさせ、俯く。どうやら流石に恥ずかしかったようだ

「若い内は間違う事もありますよ」

なんて優しくフォロー

「うぅ……と、ところで佐藤君。今日は春菜さんといらっしゃったのですか？」

クーラーボックスを担ぎ直し、綾さんは話をごまかす様に尋ねた

「いえ、兄弟全員で来てますよ。今、あそこの海の家にいます」

海の家を指差すと、春菜っぽい奴が海の家の前をうろちょろしていた。何やってんだアイツ？

「わぁ、それは凄いですね。是非とも皆さんの水着姿を拝見しなくてはいけません」

そう言い、目を輝かせる綾さん。ま、まさかこの人……

「あ、綾さんは女性に興味があったりする人なのですか？」

恐る恐る聞いてみると

「いいえ。立派な男好きですよ」

なんて真剣な顔で返されてしまった

「誤解を招き兼ねない言い方は止めましょうね」

だけど何だかホッとしたぜ

「レズレズな感じは嫌いです。あれは邪道です。おおにたです」

「またレトロなネタを……」

「男性と違って女性はパートナーに求める感情が複雑で曖昧なんです。尊敬や、友情、愛情の境界線や違いが分かりにくいんですね」

「そうなのですか？」

「はい。ですからレズレズな方の恋は、果たしてそれが本当に恋愛なのかどうか疑わしい所です。やはり恋は肉欲に直結するべきものだと私は思っていますので、相手に触りたい、キスしたい、抱きたい、抱かれたい。そのような気持ちが湧きにくく、また想像しにくいのであれば、相手の事を好きだと思っていても、それは友情の延長なのではないかと思います」

「な、なるほど」

なんだか濃い話になってきたな……

「エロマンガの受け売りですけどね」

「またか！」

今度貸して欲しいかも

「と言う訳で、安心して私を口説いて下さいね恭介君」

そう言うと綾さんは表情を和らげ、子供のように無防備な笑顔を俺に見せた

「……気が向きましたらね」

まったく不思議な人だよな、綾さんは

俺は綾さんに微笑みを返し、家族全員のラムネを購入すべく財布をポケットから取り出した

夏の海　5

「じゃあはい、ラムネ代の６００億」

一本１５０円のラムネを４本買い、綾さんの手にお金を渡す

「わぁ、駄菓子ジョークですね！　誰かが使う所初めて見ました、ありがとうございます！」

何故か喜ばれてしまった

「それでは皆さんにラムネをお渡しして来ますね」

「あ、俺も行きます。綾さん、クーラーボックス持ちますよ」

思ったより長話になってしまって、綾さんに負担を掛けてしまった

「ううん、大丈夫です。これも鍛練みたいなものですから。お心づかい、ありがとうございます」

綾さんは俺へ大人っぽい微笑みを見せた後、よいしょと海の家に向かって歩き出した。俺も自分のクーラーボックスを担いで後を追う。

……それにしても

「うむ～」

エロが無い時の、あの落ち着いた雰囲気はやはり同い年とは思えん……。２４歳ぐらい？

「処女ですけどね」

「何いきなり!?」

「え？　何がですか？」

綾さんは振り向き、キョトンとした顔で俺を見つめたって、

「いやいやいや、俺がキョトンですよ！　何いきなりとんでもない事、口走ってるんですか！」

「あれ？　この女のケツは、遊び慣れてる２４歳女（ＯＬ）の熟れたケツだぜグヘヘって視線を感じたのですが……」

「貴女のシックス・センスはぶっ壊れてる！」

すごい勘だけど！

「う～ん、怒られちゃいましたね。佐藤君は処女嫌いっと」

「アホか！！」

「ん？　お、兄貴。やっと来たのか、遅いぜ～」

俺の怒鳴り声を聞き、海の家の前から春菜が走り寄って来た

「こんにちは、春菜さん」

「お～綾ちんじゃん。綾ちんも泳ぎに来たの？」

あ、綾ちん？　年上の先輩に対してなんつーふざけた呼び方を……

「こら春」

「春菜さん。その呼び方は止めて下さい」

ほら、怒らせてしまったじゃないか！　よし此処は俺の謝罪で……

「す、すみま」

「え？　なんで？　呼び易いじゃん」

「呼び易いかも知れませんが、それだけでは相手に不快感を与えてしまう事もあります。相手を呼ぶ時は、相手の立場や状況を考えて、その方に相応しい呼び方をする事が大切です。例えば学校の担任の方には、〇〇先生と。部活の先輩には〇〇先輩と言った風に」

「ええ、その通りです」

たまには良いことを言うな、この人

「ですから、私を綾ちんなどと呼ぶのは止めて下さい。失礼です」

「うんうん、そうだ」

呼ぶのなら綾先輩、または徳永さんとかそう言う呼び方を……

「仮にも私は女です。ですので今後は綾ちんでは無く綾まんと」

「き～さ～ま～！」

綾さんの頬にアイアンクロー！

「きゅー！？」

「変な事、言わないで、下さい、ねっ！」

「ひぅ、ひぅ！」

「よし！」

コクコクと頷く綾さんを解放

「うぅー、ほっぺ痛いです……。なんだか調教された気分」

「あんまり綾まんをイジメるなよな、兄貴」

「本当に呼ぶな！」

「な、何怒ってんだよ。そんな事より早く中入ろうぜ。夏姉が昼飯奢ってくれるってさ」

「夏紀姉ちゃんが？　珍しいな」

雨でも降るか？

「春菜さん。ラムネをどうぞ」

「お、サンキュー、綾まん」

「だから呼ぶなって！」

まったくもう！

夏の海　6

春菜に連れられて海の家に入ると、そこは古代エジプトの風景だった

「遅かったわね」

「そ、それよりも何故そちらの方々は人間ピラミッドを……」

六人用の木のテーブルを一人で陣取っている夏紀姉ちゃん。その横には五人の男達による見事な組み立て体操がある

「あん？　ああ、これ。なんか積み重なりたい気分なんじゃないの」

夏紀姉ちゃんは男達を冷たい目で一瞥し、そう言った

「そ、そうなんだ」

どんな気分だよ……

「じゃ私、その辺をちょっと泳いで来るから。飯来たら呼んでくれよな！」

「あ、ああ。……気をつけろよ」

「ああ！」

そう言って海の家を飛び出して行く春菜。マグロみたいな奴だな……

「こんにちは、夏紀さん

「あら、綾音ちゃんだっけ？　こんにちは」

男達に対するものとは違い、姉ちゃんは柔らかい表情で綾さんに挨拶を返す。この辺りは流石年長者だ

「はい、綾音です。夏紀さん、良かったらラムネをどうぞ」

「へぇ、懐かしい。頂くわ、いくらかしら？」

「お代はもう佐藤君から頂いてます」

「恭介が？　珍しいわね雨でも降るかしら」

俺と同じ事言ってやがる

「はい、どうぞ」

「ありがとう。このビー玉を開ける瞬間が好きなのよね～」

綾さんからラムネを受け取った姉ちゃんは、ラムネに付いている栓を使ってビー玉を押し込む

「うわっとと泡が、泡が」

瓶に慌てて口を付ける様は実に嬉しそうだ。おそらく泡がビールぽくて好きなのだろう……哀れな

「ところで姉ちゃん、秋姉達は？」

「ん？　アキと雪は奥の座敷で幸薄そうなオッサンと、話をしてるわよ。インターハイがどうとかって」

宗院さんの事かな

「インターハイ……。多分、雫さんの事を話しているのだと思います」

「雫さん？」

「はい。六桜　雫。昨年の中学インターハイ覇者であり、六桜　久志七段の一人娘さんです」

「六桜　久志？」

どっかで聞いた事があるような……あ！

「宗院さんのライバル！」

「良く知ってますね。鬼久志とまで呼ばれた剣道家です。昨年お亡くなりなりましたが、私は今も尚、最強の称号はあの方のものだと思っています」

「え？　亡くなられているのですか。……そうですか」

名前しか知らないけど、それでも知ってる人が亡くなるのは残念だ

「私が眼鏡と出会ったのは、六桜さんがお亡くなりになられた後。近所の道場で練習試合をしていた時に声を掛けられました。俺の子を産んでくれと」

「ええ！？」

あの眼鏡、凄い大胆さだな！

「すみません、間違えました。俺の剣を継いでくれです」

「どうやったら間違うんですか！」

「はじめ、何言ってんだこの眼鏡は。眼鏡割れて死ねなどと思ったのですが――」

「き、キャラが違いますよ綾音さ～ん」

「手合わせをしてみますと、これが強くって。眼鏡の癖に」

「どんだけ眼鏡が嫌いなんですか……」

「もう悔しくって。あんな眼鏡が本体なのか、本体が眼鏡なのか分からない眼鏡に負けるなんて……」

「なんかもう、眼鏡ですね」

「それで再戦を申し出たのですが、あの眼鏡、私を強くするとか言い出しまして眼鏡」

「語尾がおかしいですよ～」

「それから擦った揉んだがありまして、あ、胸の事ではありませんので、シクヨロです」

「何でもない会話から、良くそこまで下ネタに持っていけますね」

「最終的にはうちの剣道部のセクシャルアドベンチャーに就任した訳なのですが」

「スペシャルアドバイザーでしょう。色物ＡＶのタイトルみたいな事、言わないで下さい」

「その時に頼まれたのです。私を必ず強くする。だけどその代わりに、眼鏡の剣を受け継ぎ、私としてでは無く、眼鏡の後継者としてある女子と戦って欲しい、と」

「それが六桜さん……」

「はい。それにしても佐藤君は相変わらず的確なツッコミをして下さいますね～。とっても話易いです！」

「そりゃどうも」

普通に話せばもっと話易いと思うけど

「しかし何故、そんな事を……」

「……六桜七段は、最後まで眼鏡との戦いを熱望し、死んでいったそうです。そんな父親に憧れて剣を手に取り、その死を看取った今、雫さんには剣道に未練などありません。あるのはただ、眼鏡への憎しみ。今や雫さんの剣は眼鏡を倒す為だけにある、そう言っても良いでしょう」

「そ、そんな……」

なんて根暗な

「これは六桜七段から逃げ続け、その娘さんにまで憎まれる事となった眼鏡の懺悔です。自分の身代わりとして私を出し、六桜家との決着をつけようとする、ヘタレ眼鏡の逃げなのです」

「あのヘタレ眼鏡め！」

なんだか怒りが込み上げてくるぜ！　って

「じゃ、ヘタレ眼鏡は秋姉を綾さんの代わりにする気で？」

「それは無理ですよ。秋さんはもう、自分の型を完成させています。後はそれを極めてゆくだけ、ヘタレ眼鏡の出る幕はありません」

「そうなんですか？」

流石、俺の姉

「でもそれじゃ、何の話を？」

「多分、忠告と懇願だと思います。雫さんに教えてあげて欲しいと」

「教える？」

「自分よりも強い人がいる事を」

「そ、それは……」

「佐藤　秋。一戦限りの試合であれば、おそらく今、最も強い高校生だ。眼鏡が言ってました」

「うっ！」

な、なんだこの燃える展開は……これが主人公って奴じゃないのか！？　流石秋姉……秋姉ならば主人公の座、譲る！

「誰もアンタを主役なんて思って無いわよ」

「久しぶりに喋ったと思ったら、いきなり心読まないでっ！」

エスパーか！？

「そ、それはともかくとして……。雫さんとはどんな人なんです？」

「そうですね……、一言で言えば天才。二言で言うとロリ顔ですね」

「二言目は要らなくない？」

「彼女は、はっきり言いまして桁外れの強さですよ。認めたくはありませんが、今の私よりずっと強いです」

「そ、そんなに？」

「はい。学生で剣道をしている方なら、その存在を知らない方は居ないと思います。先日行いました県大会の試合模様は全国の剣道高校生の注目の的であり、その試合内容は研究されつくし、ＤＶＤはマニアな方達にも高値で売られる程です」

「ちょっ！？　マニアに高値でって……」

「ちなみに秋さんのも」

「秋姉も！？」

「一本一万円です」

「買った！　ってそうじゃなくて！！」

「私のも結構売れてるんだからねっ！」

「ツンデレ！？」

「彼女は映像で私の無拍子を見て、眼鏡と私の愛人関係を見抜いたでしょう」

「話飛びすぎ！？」

「彼女は思った筈です。私こそが眼鏡の後継者であり、自分が倒すべき相手であると」

「話についてけねー」

「しかし私は秋さんに敗れました。その結果、雫さんの憎悪は秋さんに移ってしまったかも知れません」

「なんて迷惑な！」

「雫さんは今大会に出て来ます。そして秋さんとぶつかった時、彼女は後の試合の事などは一切考えず、死に物狂いで来るでしょう」

「やっぱり迷惑！！」

死に物狂いな相手程、怖いものは無いし！

「……ごめんなさい」

「え？」

「本当にごめんなさい。眼鏡と私のせいで、秋さんに余計な敵を増やしてしまいました……」

綾さんは急にしょんぼりとしてしまい、本当に申し訳なさそうに頭を下げた

「もっと早くお話するつもりだったのですが、中々言えず……私もヘタレ眼鏡の事を言えません」

「綾さん……」

何て言って良いのか分からない

「大丈夫よ」

「姉ちゃん？」

まだ居たんだ

「あの子はいつだって全力だから。相手がどうであれ、あの子は自分の力を信じ、いつものように馬鹿正直にぶつかって行くわ」

「……そうだね」

それが秋姉。不器用で真っ直ぐで、そして

「強い子だもの」

だから、きっと勝つだろう。心配する事は無い

「やっぱ秋姉は凄いぜ」

安心感が半端ない。星が落ちてきても何とかしてくれそうだ

「そうね。……ところでさ、さっき頼んだ焼きそば遅いんだけど、どういう事？」

「俺に聞かれても……」

「え？　う～ん、おかしいですね。早い！　けどマズイ！　がこの店唯一の売りなのですが……あれ？　店長？」

綾さんは、人間ピラミッドを見てそう呼んだ

「な、夏紀様、そろそろお許しを～」

「綾音ちゃんはお腹空いてる？」

「え？　あ、は、はい」

戸惑いながら、頷く綾さん。どうやら流石の綾さんも、女王バージョンの夏紀姉ちゃんを前に少し萎縮しているようだ

「美味しい焼きそばを六人前。一つは大盛り。もちろんただで」

「は、はい！　今、すぐに！！」

「よし、崩れ！」

「サー！」

夏紀姉ちゃんの合図でピラミッドは見事に崩れ、一番下だった店長は、はい出たのち厨房へすっ飛んで行った

「じゃ、俺は春菜でも呼びに行くか」

今頃、腹を空かせているだろうしな

夏の海　7

「さてと……ん？」

海の家を出て、軽く辺りを見回す。春菜の姿は見えないが、なんだか少し浜辺が騒がしい

「ひ、人だ～人が溺れているぞ～！」

なんだって！？

海を見て騒いでいる集団に走り寄り、その視線を追う。するとかなり沖の方で、人影らしきものがうっすらと見えた

「た、大変じゃないですか！　ライフセーバの人は！？」

「それが辺りに居ないんだよ！　だから今、消防署に連絡した！」

「間に合うんですか！？」

「分からない！　しかし待つしか無いんだよ！」

怒声に近い返事に、とんでもなく緊迫した事態なのだと言う事を知る

「……お、俺が」

ちょっと待て、何を言おうとしているんだ俺は

「なんだ！？　何か言ったか！」

他人だぞ、他人。なんで他人の為に命を掛けないといけないんだってのの

「お、おい、なんか沈んでないか？　やばいんじゃないか、あれ！？」

そう他人。……だけど、もしあれが春菜だったらどうする？　俺、多分一生後悔する

後悔して、後悔して、後悔し続けて生きる。そんなのは――

「……最悪だ」

なら……なら、行くしかねぇだろ！

「俺が助けに行く！」

「な、なに！？　止めとけ兄ちゃん！　素人が行ったって二重事故になるだけだ！」

「行くったら、行くんだよ！　オリャアア！！」

海に飛び込み、直ぐにクロール。海は温かくて流れも穏やか。これぐらいなら余裕がある

１０メートル、３０メートル、７０メートル、１２０……後少し！

「ハァハァ……おーい、大丈夫か～」

「た、……けっ、ぶくぶくぶく」

ジタバタ暴れながら、浮かんだり沈んだりしている二十前後の女性。
春菜じゃない？

「よ、良かった……」

いやいや、良くは無いだろ！

「今、助けるぞ～」

溺れてる人に正面から向かうと、抱き着かれて大変危険らしい。俺は女の背後へ回り込む様に泳ぐ

「どご、どご行ぐの!?　だ、だずけ！」

「あ、こっち向くな！　貴女は何もしなくて良いから、目をつぶって待ってて！」

「じにたぐない、じにだぐな、ぶくぶくぶく」

やべ、完全に沈んだ！

「だ、大丈夫か！」

女が沈んだ所へ、慌てて行くと……ぐぃ

「な、なんだ!?」

足を引っ張られた！　妖怪か!?

「ぬ、ぐぅう！」

沈まない様に必死に泳ぐ俺の身体を、妖怪はよじ登ってきて――

「づがまえたぁあ、げほげほ！」

「ギャアアア！？」

ワカメの化け物～って

「さっきの人か！」

パーマをかけているらしい濡れた長い髪が、べたーっと顔を覆っていて、世にも恐ろしい事になっている

「だずけで、だずげてぇえええ」

「た、助けるから、離れて！」

とても女とは思えない強い力で、がっちりしがみつけられて身動きが取れない！

「いや、いや！　はなざない～」

「ぐっ！」

このままでは俺まで溺れてしまう！　仕方ない！！

「ボディ！　へい、ボディ！！」

暴れる女にボディへの二連発！

「うげ！　ぐ、ぐぐ……あ、あなだ私を見殺じにずる気ね……」

「ちっ、まだ息があるのか！」

手強いな！

「う、怨んでやる、怨みまぐってやる、盆休みに化げで出でやるぅう」

「ボディ！　ボディ、ボディ！！」

怒涛の三連発！

「うぎ！　うげ！　うっご……がく」

女から力が抜けた。もう大丈夫だろう

「……ふぅ」

疲れた。この人連れて岸まで戻るのはキツそうだし、後は浮かんで助けが来るのを待つとするか

「感謝状貰えるかな」

貰えたら今度こそ、俺の感謝状だ。自慢しよ

「早くこねーかな……」

まだ助かりきってない不安な気持ちを独り言でごまかしながら、俺は女の背中を胸で抱いて、プカプカ浮かびながら助けが来るのを待つ

「う～みは広いな大きいな～。……ん？　な、なんだ？」

岸からこちらへ、高い水しぶきが一直線で向かって来る。つか……早い！

「さ、サメ？」

いや、サメは水しぶきなんかたてない。となるとあれはマグロ……い、いや、あれは！

「あにき～」

「は、春菜！」

魚雷みたいな早さで、春菜が向かって来る

「助けに来たぞ、兄貴」

「た、助けに来たって言ってもな……」

いくらなんでも春菜一人で俺達二人を同時に助ける事なんて出来る筈がない

「ほら浮輪」

「へ？」

春菜は、何故かビニールロープ付きの浮輪を俺に投げ寄越した

「ロープで引っ張っててやるから、ちゃんと浮輪を持ってろよ。じゃ、行くぞ～」

「引っ張る？　うお！？」

岸に向かって再び泳ぎ出す春菜に、浮輪が身体ごと引っ張られる

「ま、マジかよ……」

化け物かコイツ？

「やっぱ、ちょっと重いな～。距離が短くて良かったぜ！」

「短いって……」

「波が来たらこうやって蹴ると良いんだぜ。おりゃ～！」

水を切り裂く凄まじい蹴りだ

「……」

今後、春菜とケンカするの止めよ……

夏の海　8

「英雄だ～英雄が帰還したぞ～」

岸に戻った俺達を迎えたのは、人々の大歓声だった

「なんてカッコイイ人なんだ。正直、憧れる！」

「ふふふ」

照れるぜ

ワカメの人を腕抱きしながら海を出ると、人々はワーっと歓声を上げる。そして俺の元へ……

「最高にカッコ良かったぜ、お嬢さん！」

来ないで春菜の方へ行きやがった！

「男が海へ飛び込んだって話をした後、止める俺らを振り払って沖へ向かって行ったアンタを見た時には、漢を感じたぜ……アンタ最高だよ！」

「……」

皆は危うく死にかけた俺やワカメさんを放置し、春菜を褒めたたえる。いや、別に悔しい訳じゃないけどさ！

「と、それよりワカメの人は……」

ワカメの人は俺の腕の中で、くでーっと伸びている。肺が規則正しく上下している事から、きちんと呼吸は出来ているようだ

「……まったく」

人騒がせなワカメちゃんだぜ

「う、ううん……」

お、目を覚ますか？

「大丈夫ですか？」

声をかけると、ワカメのまぶたが微かに震え、ゆっくりと開かれてゆく

「ここは……あ！　あなた!?　ふ、ふふふ」

「な、なんだ？」

「どうやら地獄へ道連れに出来たようね。私を見捨てようとしたからよ！　あ～はっはっは」

「……」

元気そうだな

「お礼はそこの屋台のイカ焼き二つで良いですよ」

ワカメを下ろし、海の家横の屋台を指差す

「イカ焼き？　……もしかして私、助かったの？」

「一応病院に行った方が良いですよ。どっかおかしくなってるかも知れないし」

頭とか

「た、助かった……の」

ワカメはキョロキョロと左右を見回し、最後に俺を見て囁く様に言う

「た、助けてくれて……ありがとう」

「どういたしまして」

ま、なにはともあれ全員無事で良かったぜ

「あ～、うるせー！　もうほっとけよ！！」

「ん？」

なんかあっちで春菜が騒いでいるな

「どうした、春菜」

集団に近寄りながら声を掛けると、集団の中から春菜が人を掻き分けて強引に出て来た

「たく！　こいつら私をヒーローだ何だってしつこいんだよ！　私は兄貴を助けただけだって」

「いや、貴女こそ海の守護神！　まさにポセイドン！！」

そこは女の神様にしてやれよ……

「うるせーうるせー！　もう行こうぜ、兄貴！」

そう言って春菜は俺の腕を組み、海の家の方へ引っ張って行く

「とと、わ、分かったから引っ張るなっての」

「あ、君！」

「イカ焼きはまた今度会った時で良いですよ。それじゃお大事に」

「あ、あの、ち、ちょっととー！」

「病院だ、この姉ちゃんを病院に運べ～」

「アイサー！」

「キャ～！　ひとさらい～」

「……」

騒がしい人達だな

「イカ焼き……」

「……は？」

「イカ焼き食いてー！　も～腹減った～」

「そうだよな～。今頃みんな焼きそば食い終わってるだろうし……ごめんな春菜」

後てイカ焼き奢ってやろう

「兄貴が謝る事じゃねーよ。よく分かんねーけど兄貴、あのワカメみたいな人を助けに行ったんだろ？」

やっぱりワカメか

「まぁな。だけど結局お前に助けられちまったな」

「気にすんなって。兄貴は私が助ける、そんなの当たり前だ。……ただ」

「ん？」

「あんまり一人で危ない事……、しないでよ？」

春菜は不安げな顔で俺を見つめ、俺の腕をギュッと強く抱いた。きっと俺が、親父みたいに突然居なくなってしまう事を怖がっているのだろう

「……ああ、そうするよ。しかし良く俺が沖に居るって分かったな」

「うん？　ああ。なんかこの世に未練が無さそうな死んだ目をした男が、まるで自殺するかのように海に飛び込んだって聞いてさ。兄貴の事だと思ったんだ」

「今の会話から俺を連想するお前にちょっと小言を言いたい気分だよ」

「腹も減ってたし、違ったらめんどくせーって思ったんだけど、本当に兄貴だったら後悔するからさ。良かった、後悔しないで」

にこっと屈託なく笑う春菜。思わず頭を撫でてしまう

「うわあぁ、な、なにするんだよ～」

「お前やっぱ、俺の妹だ」

コイツいい子に育ってるぜ親父

「ちぇ、意味分かんねーの。あ、そう言えばさっき綾まんが兄貴を探してたぜ？　なんか水着コンテストがどうとかって」

「良く分からんが、とりあえず綾まん言うの止めろ……」

ちょっと馬鹿だけど

夏の海　9

「おかえりなさいませ、ご主人様方。にゃ」

「……」

海の家に戻ると、何故か天使のような白い翼を背中に着けた綾さんが俺達の側に駆け寄り、意味の分からない事を物凄くやる気なさそうな語尾を付けて言った

「ご主人様。先程、水着コンテストの出場登録しておきました、時間は四時からです。でもご主人様、こういうご趣味もお持ちだったんですね。ちょっと意外です。にゃ」

「ち、ちょっと待って下さい。一体何の話をしているのか良く分からないのですが……」

「え？　うちのお店が主催となってやる水着コンテストの事ですよ？　先程、夏紀さんが出場するとお決めになられたのですが……。にゃ」

「姉ちゃんが？」

不思議だな。姉ちゃんはそういうもんに出たがらない筈なんだけど……

「兄貴～、私、先に夏紀姉ちゃんとこ行ってる。腹減ったし」

横でポケーっと話を聞いていた春菜が焦れた様にそう言い、奥で店

長に皿回しさせている夏紀姉ちゃん達の方に目をやる

「ああ。あ、春菜」

「ん？　なんだ？」

「さっきの事、姉ちゃん達には秘密な。心配させたくないし」

「オッケー。兄貴と私だけの秘密な」

春菜はニカっと笑い、姉ちゃん達の方へと歩いていった

「前に一度お会いしましたが、春菜さんはやっぱり美人さんですね～。ええと……春菜さんに夏紀さん、それに雪葉さん。秋さんと燕さんと綾音さん。う～ん、もはやハーレム状態ですね。よ、王様！　にゃ」

「さりげなくハーレムの一員にならないで下さい」

って言うか立場的には王より奴隷に近いし……おっと涙がこぼれそうだ

「と、それより水着コンテストの事ですが、賞品か何か出るんですか？」

主に酒とか

「優勝者には、賞金５万円がでます。頑張って下さいね。にゃ」

「それ目当てなのかな？」

最近金欠らしいし

「佐藤君なら、きっと優勝出来ます。……にゃ」

「そうですかねぇ」

姉ちゃんは秋姉なんかと比べてしまうと、神とカブトガニぐらいの差があるが、まぁ、あれでも一応美人の部類らしいし、もしかしたら優勝を狙えるかもしれない

「四時でしたっけ？　楽しみです」

冷やかしてやろう

「う～ん、私は余り興味無いのですが、佐藤君が出るのなら見学させて頂きます。にゃ」

「ええ、是非。……ところで、この店、何で皆さん背中に翼をつけてるんですか？」

店内には綾さんを入れて四人ほど店員が居るが、全員翼をつけている。邪魔そうだ

「ねこねこ喫茶、海のねこ。タイムサービスでこのお店、お昼過ぎから二時間だけコスプレして、語尾に、にゃをつけるんですよ。にゃ」

「ねこ？？」

猫って言うか、鳥？

「うみねこです。にゃ」

「あ、あ～、なるほど。しかし……」

綾さんはともかく、さっきから奥の方でちらちら見える翼の生えた眼鏡オヤジが非常にウザイ

「マニアックですね、うみねこなんて」

言われなきゃ分からない

「私も普通にネコミミ喫茶とかの方が、可愛いと思います。奇をてらい、失敗するタイプですね、うちの店長。にゃ」

「なんだかテンション低いですね～」

「これ、上げる方が難しいです。にゃ。でもお給料は良いんですよね～。にゃ」

ちりん、ちりん

せちがらい世の中。稼ぐのも大変だなって思っていると、店内に軽快な鈴の音が響いた

「にゃ。お客様のお呼び出しです、行って来ますね。にゃ」

「行ってらっしゃい、頑張って下さいね」

「はい。……にゃふ」

溜め息に近い鳴き声を漏らし、綾さんはテーブル席へと向かって行った

「うむ～」

無理してるなぁ

綾さんの今にも天国に飛んでっちゃいそうな後ろ姿を見送り、姉ちゃん達の所へ

「姉ちゃ」

「い、いつもより多く回しております～。いかがですか夏紀様～」

「ふん。皿なんて今時、猿でも回せるのよ。アタシを本気で楽しませたいのなら、カバでも回してみなさい！」

「ひぃ～」

「……」

まだ店長いじめてたのか

「ね、姉ちゃん？」

哀れな店長から目を逸らしつつ、相変わらず偉そうに座っている姉ちゃんに声を掛ける。その横には春菜がテーブルに顔を伏せって座っているが、秋姉達の姿は無い

「あん？　ああ、何処ほっつき歩いてたのよ。もうアンタらの焼きそば食べちゃったわよ？　そこの眼鏡なオッサンが」

「久しぶりに肉を頂きました！」

別の席で皿を片付けている眼鏡オッサンが、感極まった声で応えた

「そうですか……」

後でイカ焼き奢ってあげよう……って俺、なんでこんなにイカ焼きを押してんだ？

「ところで、秋姉達は？」

「雪葉とトイレよ。この店に無いから、駐車場の方まで行ってるわ」

口元に手を当て、欠伸をしながら教えてくれた。退屈そうだ

「そういえば水着コンテスト？　出るんだって？　珍しいね」

「ん？　……ふふふ」

退屈そうな顔から一変。夏紀姉ちゃんは目を細くし、妖しく微笑む

「ど、どうしたの？」

「いいえ。うふふふふ」

怖っ！？

「へい、昇天地獄ラーメンお待ち！」

店員の一人が、2、3キロはありそうなラーメンの器を両腕抱えで持って来た。なんつーでかさだ

「待ってました！　うひょ～」

勢い良く起き上がり、これまた勢い良くラーメンを食い始める。器の中のラーメンはみるみる減ってゆき、それと比例して春菜の腹が膨らんでゆく

「野生動物みたいな奴だな……」

食える時に食って、貯めておくってか

「う～ん。まずいなこのラーメン！」

「まずいのか」

なんで嬉しそうなんだ、コイツ

「海の家のラーメンは美味しくない。そんな基本を忠実に守って作っている、自信作でございます」

なんで自信満々なんだ、この店長

「あ～もう皿、回さなくて良いわ。仕事に戻りなさい」

「はい！　ありがとうございました女王様！！」

「誰が女王様よ！」

あ、そこは否定なんだ

「……あ、京介。戻っていたんだ」

「ごめんなさい、お兄ちゃん。先にご飯食べちゃった」

女王様を見ていると、秋姉と雪葉が手を繋ぎながら戻って来た。これで全員集合だ

「よっし！　ごちそうさま！！」

「食うの早いなお前」

ぽっこりとした腹が、なんか面白い

「食ったら即動く！　泳ぎに行こうぜ兄貴！」

「早死にしそうな生き方だよなお前って……」

ま、付き合うか

「ちょっとまた泳いでくるけど秋姉達は？」

「パス。めんどい」

「海……浮かばない」

「雪葉もちょっと海恐いかも……」

「そう？」

何だかみんな、あんまり乗り気じゃないな。てかぶっちゃけ俺もそんなに海が好きって訳じゃないし……

「……ん、雪葉。後で砂でお城作ろう？」

「うん、秋お姉ちゃん！」

「アタシはパラソルの下で寝てるわ。三時過ぎてまだ寝てたら起こしなさい」

「そっか、了解。じゃ後で」

まぁ、海の楽しみ方なんて人それぞれだよな。姉ちゃんはいつも通りだけど

「よし、行くべ春菜」

「ああ！　どっちが長く泳ぎ続けられるか、競争だ！！」

「……普通に泳ごうぜ」

合宿メニューじゃないんだからさ

夏の海　１０（前書き）

その内削除

雪葉さんに質問。友達について

風子について

「えっと、風ちゃんは大人っぽくてカッコイイ女の子。綺麗だし、絵も上手だし、胸も……。色々凄くて羨ましいです！」

花梨について

「花梨ちゃんは凄くしっかり者な女の子です。私達のリーダーで、いっつもみんなの事をまとめてくれます。花梨ちゃん、この間作って来てくれたおやつ、とっても美味しかったよ。今度作り方教えてね」

美月について

「美月ちゃんは元気で明るい女の子。器用な美月ちゃんは、何でも出来る感じです。春菜お姉ちゃんに、ちょっと似てるかな」

鳥里について

「宮ちゃんは、お花や動物が大好きな優しい女の子です。お兄ちゃんと、もう少し仲良くしてほしいかな……」

千里について

「千里ちゃんは……ええと、物静かで、頭良くって……ふ、不思議で可愛い女の子です！」

リサについて

「髪がキラキラしていて凄く綺麗。あんまり遊んだ事無いけれど、もっと仲良くなりたいな。あ、花梨ちゃんとは凄く仲良いよね。二人は息ピッタリだと思います」

以上です。ありがとうございました

「うん。どういたしまして」

オマケ

雪葉さんへの返事。

風子

「ありがとう雪。僕も雪のおおらかさや、優しさが羨ましいと思っているよ。胸は……大丈夫、きっと僕よりも大きくなるから」

花梨

「アタシは雪の方がしっかりしてるし、リーダーだと思っているわ。でも何だか嬉しい。ありがと雪。後、おやつの事なんだけど……う

うん、今度教えるわ。パンの耳とお砂糖があれば直ぐ出来るから」

美月

「う～ん、わたし別に器用じゃないよ？　失敗するの多いし。そんなことより遊ぼ～よ雪！」

鳥里

「あ、ありがとう雪ちゃん。雪ちゃんも優しくて可愛くて、素敵だよ。雪ちゃんのお兄さんと仲良くは……ご、ごめんなさい！」

千里

「ふじさんろくにおーむなく。すいへーりーべーぼくのふね……頭良さげ？」

リサ

「髪を褒めて下さってありがとう。私も貴女と仲良くしたいと思っていたわ、今度一緒に遊びましょう。ただ……花梨なんかと仲良くなんてないから！」

夏の海　１０

「兄貴、あ～にき。早く早く～」

「い、いい加減、少し休ませろ……」

春菜と泳ぎ始めてから、俺の脳内時計で約３０分の時が過ぎていた。
その間、休みと言うものは一切無く、ただひたすらに泳ぎまくっている

「大丈夫、大丈夫。兄貴なら全然余裕だって！」

「お前は俺を買い被り過ぎている」

所詮、俺は雑魚。スライムで言ったら、スライムベス程度のものさ……

「も～情けない事ばっか言うなよな～」

春菜は何故か嬉しそうに言い、こっちに泳いでくる

「ほら、手繋ごーぜ。引っ張ってってやるよ」

「一体お前は俺を何処に引っ張ってく気だ……。つか喉渇いたし、やっぱ一度上がろう」

「ちぇ、仕方ねーの。じゃ向こうまで競争な！」

そう言って直ぐ、春菜はモータボートの様に岸へ向かってすっ飛ん

で行ってしまった。早過ぎて競争にもなりゃしない

「まったく」

それでも俺は、いつもより多少急いで泳ぎ、春菜を追う

「はぁ～あ」

なんか勝手に溜め息が出てしまう。今日は色々あって疲れてんのかな。流石にこれ以上、変な事無いだろうけど……

「やれやれ、と」

春菜より大分遅れたが、なんとか岸へと辿り着けた。もう俺も歳だし、余り無理させて欲しくないぜ

「私の勝ちだな兄貴！」

先に泳ぎ切っていた春菜が、俺を見付けてそのまま側に駆け寄ってくる

「走るな、走るな」

胸が揺れて、こぼれ落ちそうだ

「それより兄貴～。イカ焼き、イカ焼き～」

「分かった、分かったから。取り敢えず落ち着けって」

落ち着き無く俺の周りを跳ね回る春菜を宥めて、腕時計を見ると

「まだ2時か」

秋姉達は、どうしてるかな

ぐるーっと辺りを見回すと、パラソルの下でシートを敷いて横になっている姉ちゃんを発見。その四方を四人の屈強なる男達が睨みを効かせてガードしているが、彼らは一体……

「夏姉、寝てばっかだよな。運転疲れたのかな」

春菜は俺の視線を追い、姉ちゃんを見て心配そうに言った

「歳じゃね？」

最近、姉ちゃんから若さを感じられない

「で、秋姉達は……」

「あれじゃない？」

「ん？　……城！？」

春菜が指差す方には、全長1メートルはありそうな、天守閣付きの見事な日本城が建っていた

「ほら、いた。あれ全部砂だろ？　すげーな」

「こだわりの人だからな秋姉は」

意外と職人気質なのだ

「お前も、なんか飲むだろ？　イカ焼きと一緒に奢ってやるよ」

「マジ！？　やった～。兄貴大好き！」

春菜は俺の左腕に飛び付き、そのまま絡ませる

「……お前、本当変わったよな」

馬鹿兄貴呼ばわりされていた頃が懐かしい

「そうか？　別に変わってねーと思うけど……。あ、つか、やべ！　何か急にしょんべんしたくなってきた！！」

「しょんべん言うな！　お花摘みとか言い方があるだろって、何故海に向かおうとする！！」

「だからしょんべんに」

「トイレに行け、トイレに！　付き合ってやるから！」

「良いよ、面倒臭いし」

「イカ焼き奢ってやらねーぞ！」

「ええ～。……ちぇ、面倒臭せーの」

「よし、じゃ行くぞ！」

渋々だが納得した春菜を連れて、駐車場へと向かう

「さて……トイレは何処にあるんだ？」

駐車場には直ぐ着いたけど、トイレらしき場所は見当たらなかった

「……やべ、出そ」

「え！？」

「いいや、もう！　そっちの陰で……」

「ま、待て！　後5分、5分で良いから！！　えっとえっと……居た！」

サーフボードを持って歩いていた人へダッシュで向かい、血走ってるであろう目でトイレの場所を聞く

「む、むこうにコンビニあるから、そこでしてくれば？」

「ありがとう！」

礼を言いマッハで春菜の所へ戻ると、春菜は太股と太股の間に手を挟み、プルプル震えながらしゃがんでいた

「あ、兄貴……私、もう駄目だ。ごめんな兄貴」

潤んだ瞳で俺を見上げる春菜。コイツそんなに限界だったのか……

「よ、弱気になるな！　まだ大丈夫、まだ助かるから！」

「あ、兄貴」

「さ、俺の肩に捕まるんだ。なーに、最後には笑い話になってるさ」

「今歩くと……やばい」

「お、俺の背に乗れ。おぶってやるから」

よろよろと立ち上がる春菜をおぶり、いざトイレへ！

「う……、この微妙な振動……やばい」

「や、止めろよ！　俺の背中にだけは止めてくれよ！？　そんな事したら絶交だからな！！」

んでもって１０分後

「ふ～。すっきしだ！」

「良かったな……」

何とか間に合ったが、本当疲れた

「やっぱしょんべんは我慢して出すのが最高だよな！」

「お前……」

いや、何も言うまい。今はただ、無事に生還出来た喜びに浸ろう

「じゃイカ焼き食べようぜ、兄貴！」

「お前……」

いや、何も言うまい。とにかく浜辺に戻ろう

それから三倍の早さになった春菜と浜辺でイカ焼きを食い、城を完成させた秋姉達とかき氷を頂き候。ナンパに来た野郎共を追い払っていると、あっという間に3時近くとなった

「そろそろ姉ちゃんを起こさないといけないか」

ほっとくと、後がうるさいし

「雪葉がお姉ちゃんを起こしてくる？　お兄ちゃん」

「いいよ。寝起きは狂暴だから、あれ」

冬眠中の熊みたいなものだ

「じゃ、行ってくるよ」

しかしせっかく海へ来たのに、寝てばっかいて勿体ないな

半分呆れながら姉ちゃんが寝ているパラソルへ向かう。すると、直立不動で姉ちゃんをガードする四人組の一人に止められた

「待たれい。これより先は天帝がおわす御所。通す訳にはいかん」

「は？　……いや、その天帝とか言う人の弟なんですけど俺」

「ふん、見え透いた嘘を付く。貴様の様な輩が、天帝の血を引く筈が無いではないか。消えよ、今ならば見逃そう」

「……」

なんつー面倒臭い設定と兄ちゃんなんだ。こうなったら

「……サッポロ！」

「生ビール！　……ん？　あら、恭介。もう3時なのかしら？」

伸びをし、立ち上がる姉ちゃん。つかマジで起きるとは……

「ふぅ、良く寝たわ。それじゃアタシは一度車に戻るから、アンタはさっきの海の家で待ってなさい」

「あいよ」

顔を伏せながらひざまずく四人の男達には眼もくれず、姉ちゃんは駐車場の方へと歩いて行く

「……失礼しました。まさか本当に弟様だとは」

「あー別に良いですよ。似てないし」

てか一体誰に似たらあんな女王様に育つんだ？　やっぱり母ちゃん？

「じゃご苦労様でした」

男達に軽く頭を下げ、俺も海の家へ向かう事にした

夏の海　11

がや、がやがや

夏紀姉ちゃんと別れてから秋姉達と合流し、海の家へと入る。昼間より混んでいたが、ちょうど店を出る人達がいて、運良く席が開いてくれた

「いらっしゃいませ」

普通の状態に戻った綾さんは、開いた席まで俺達を案内し、頑張って下さいねと俺に一枚のチラシを渡した

「あ、どうも」

何を頑張るんだ？

「ん～どれどれ」

厨房に入って行った綾さんを見遣り、チラシに目を通す。チラシには女装水着コンテストのお知らせと、そのルールが書かれている

「へぇ、女装水着コンテストするんだ。変わってる……ま、まさか！？」

「待たせたわね恭子」

「恭子！？」

薄いジャケットを羽織って店に来た姉ちゃんは、俺の隣に座り、もう一人の俺を呼ぶ

「安心しなさい恭子。アタシがアンタを綺麗にしてあげる」

「う、うん。ありがとうお姉様って、何言ってのアンタ！？」

「水着コンテスト、必ず優勝しなさい。これは命令よ」

「アホか！」

誰がそんなもん出るかっての！

「お兄ちゃんが女の子……見たいかも」

「え！？」

「恭姉、頑張れよ！」

「ええ！？」

「……恭子ちゃん。ちょっと有り」

秋姉まで！？

「心配しないで下さい。私も出場しますから」

「えええ！？」

オボンを持った眼鏡の人が突然俺達の会話に割り込み、不気味な事

を言った

「一緒に頑張りましょう恭子さん」

「いや、てか、あれ？」

なんでこんな展開に？

「なーに、お金の為だと思えば、そんなに抵抗はありませんよ」

「あ、いや、確かに五万円は魅力ですけど……」

抵抗は普通にあるだろ

「稼げる時に稼ぐ。大切な事です」

「ま、まぁ確かに」

ってヤバイ、ヤバイ！　流されてるぞ俺！　此処は冷静に

「コホン。ですが、宗院さんって土佐の白狼とかって言われてた人なんですよね？　こんな事をしたらいけない人なのではないのですか？」

「プライドでご飯は食べれません。五万円……ふふふ、私の十ヶ月分の食費と同じです」

「普段、何食ってるんですか……」

心配になってくるじゃないか

「ま、そういう事で。とにかく頑張りなさい」

「いきなり話まとめないでよ……はぁ」

しかし秋姉の大会を見に行く資金が欲しいのは確かだ。祭りだと思って我慢するか

「三万は貰うからね」

「良いわよ。むしろ優勝したら全額あげるわ」

お、気前良いな

「それじゃ、車に戻りましょう。準備は出来てるから」

「準備？」

「水着と化粧よ」

「化粧って……水着はこれで良いんじゃない？」

「……行けば分かるわ」

急に無表情になった姉ちゃんは、そう言い店を出て行く

「……」

嫌な予感しかしない

「……お兄ちゃん？」

「あ、ああ……行って来るよ」

「うん。行ってらっしゃいお兄ちゃん」

「……心配だから、私も……」

「じゃ、後でな」

和み系な妹の笑顔に見送られ、俺は店を出て夏紀姉ちゃんの後を追う

「……恭」

「結構早いな……」

もう駐車場前の階段まで行ってる。よし、走るか

「……あ、まっ」

おら！　ダッシュ、ダッシュ！！

てな感じでダッシュしたものの、結局姉ちゃんに追い付いたのは、車の直ぐ目の前の所だった

「姉ちゃん」

横に並んだ所で声をかけると、姉ちゃんはやっぱり無表情

「姉ちゃん？」

「……ふふ」

「ね、姉ちゃん？」

「恭介。アンタが着るのはこれよ」

姉ちゃんは車の後部席を開けて袋を手に取り、俺に手渡す

「これは……！？」

女もののビキニ！？

「アンタに合いそうなサイズ、地元の人間に探させたけど、探すの大変だったらしいわよ。間に合って良かったわ」

「ち、ちょっと待って！　流石に女物の水着なんて着れないって！色々マズイだろ！？」

俺のキングパンサーが、飛び出してしまう！

「パレオでも巻いとけば何とかなるわよ。ほら、これ」

そう言い、ハワイアンな柄の布を俺に投げよこした

「ば、馬鹿な……」

こんな馬鹿げた話が成り立って良いのか？

「ほら、早く車の中で着替えなさい。化粧出来ないでしょう」

「だ、だけど……」

「男らしく無いわね。仕方ない、アタシが着替えさせてあげるわ……うふふ」

悪魔みたいな笑みを浮かべ、手をワキワキさせながら迫る姉ちゃん。

や、殺られる！

「止めて！　せめてビキニは止めて！！」

「言ってもアンタに合うサイズは、これしか無いのよ。良いから着ろ！」

「嫌だ～！！」

ワンピースを、ワンピースをくれ～

「……恭介」

「ギャー！？」

「キャー！？」

パンツを掴まれ、そのまま車の中に押し込まれそうな時、いきなり車内から秋姉が現れた！

「あ、秋姉……。い、いつからそこに？」

そう尋ねると、秋姉はジト目になって

「……恭介が姉さんと話している時」

と、拗ねた口調で言う

「あ、ご、ごめん」

全然気付かなかった……

「……これ」

秋姉はそっと俺の手を取り、手提げ袋を渡して下さる

「こ、これは……」

まさか秘密道具！

震える手で袋を開くと、その中には！

「スクール水着やないかーい！」

思わずツッコミ

「ん……ばっちり」

グッと自信満々に親指を立てて下さいますが、流石にそれは間違っていますよ姉様……

「てかこれってまさか……あ、秋姉の？」

「……伸縮性もばっちり」

「うわ〜い。それなら俺でも着られるねって、いやいやいやいや！」

なんか今日秋姉、おかしい！

「あ、ありがとう。だ、だけどそれは……」

それはもはやシスコンではなく変態の領域。足を踏み入れてはいけない未知の世界だ

「……恭介？」

「あ、いや、その……」

じっと俺を見つめる秋姉に、脂汗流しながら断り方を考えていると、秋姉はふわりと微笑み

「……なんちゃって」

「……え？　も、もしかして……冗談？」

「ん。コント」

「こ、コントね。あ、あははは、これは一本取られたな〜」

「……やった」

正直、秋姉のお笑いは分かり難い

「……は〜びっくりした。まだ心臓ドキドキしてるわ。それは

ともかく、アタシが用意したビキニかアキの水着、どっちでも良いからとっとと着がえなさい」

「どっちでも良いって言われても……」

秋姉のを着れる訳無いべさ……

「じゃ……ビキニ」

「よし。それじゃ、アキとコンビニ行ってるからその間、着替えときなさいよ」

「……了解」

なんで俺がこんな目になんで俺がこんな目になんで俺がこんな目に……

燕さん

最近燕の影が薄いと言われがちなので

今日の燕さん。その６

全国でも有数の進学校、鳴神学園。その中で時に教師以上の発言力を持つ組織がある。それが生徒会

生徒会の仕事は学校行事のセッティングや代表挨拶に始まり、部活等の予算決め、生徒指導、校則の改正などもある。他にも授業のカリキュラムや招き入れる教師の選別、果てはテスト内容まで決めているとかいないとか

知力、体力、人望、心。その全てが揃い、尚且つ運も無ければ入る事は難しい、それが鳴神学園生徒会だ。それ程までに難しく、輝かしい生徒会は全生徒達の憧れであり、頂点である

だが、その選ばれし頂点の者達を持ってしても、届かないと言わしめる頂きがある。それこそが鳴神学園創立史上初の女性による生徒会長、菊水　燕、その人だ

彼女は、かの有名な菊水流宗家の嫡女であり、学園トップの成績、美貌を持つ才女である

そんな彼女は今、とても悩んでいた。それは学園の行く末、堕落しきった日本の政治、乱れる世界情勢などについて……ではなく――

「ううむ～」

7月の夕方、太陽が西の空に沈み始めた午後6時頃。駅前デパートの五階にあるゲームコーナーの入口で、燕は悩んでいた

入口には、本日最新機種入荷と書かれたポスターが貼ってある。それは燕が入荷を心待ちにしていた格闘ゲーム、ブッチャーファイターZの最新作の事だ

まさか今日が入荷日だったとは……。燕はトイレに行っている友人を待ちながら、プレイしてみるかどうかを悩んでいたのだ

「うむむ～」

しかし今は制服姿。放課後は速やかに帰宅するのが生徒の義務である。友人の付き添いとは言え、デパートへ寄り道をした事だけでも、彼女としては、かなりの融通を効かせたと言える

「……彼はもう遊んでみただろうか」

ポスターを見ながら呟いたのは、燕の元彼である屍の事だ。このゲームは屍との思い出のゲームなのである

『燕、このゲーム面白いんだぜ？　ちょっとやってみろよ』

当時ゲームなど触った事も無かった燕は、彼氏のそんな誘いにうろたえながらも頷き、始めてゲームに触れてみた

『お、今の動き良いぞ。やるな燕！』

燕にとってゲーム自体はとくに面白い物では無かったが、彼氏が喜び、自分を褒めてくれるのがとても嬉しくて、この日、燕は心からゲームを楽しんだ

『上手くなったな、燕。また、いつか勝負しようぜ』

今はもう、その褒めてくれる彼氏は居ない。だけど、たとえ恋人関係ではなくても、友人としてまた一緒に楽しくゲームが出来ればと、燕はずっと一人で練習をしていた

しかし、その格闘ゲームは余り人気が無く、あっという間に撤去されてしまう

もう、君と一緒に遊ぶ事は出来ないのだな。最後に撤去された店を出て、とぼとぼと帰宅する燕の耳に、神の奇跡か悪戯かゲーマー達の会話が届いた

『7月にブッチャーZの最新作が出るでごわす。ごっつぁんです』

と、こんなエピソードを回想した所で、現在

「うむむ～」

是非とも一度遊んでみたい。これから夏期休校に向かう今、生徒会の仕事に休みなどないし、家の方も来月には舞踊の発表会がある。自由に使える時間は非常に少ない燕にとって、今は数少ないチャンスなのだ

しかし、しかし。制服姿で、それも友人を待っている時に、そんな

不埒な事をして良いものだろうか

否。自分は鳴神全生徒の模範である。模範足るべき者は、自分の欲望で動いてはいけないのだ

燕は後ろ髪を引かれる思いで諦め、ポスターから離れる。そこへ、ちょうど友人がトイレから戻って来た

「お待たせ、燕」

「うむ。では行こうか」

「うん。……あ、これブッチャーZ3！　入ったんだ～、ずっとやりたかったんだよねー」

友人は燕の横を通り過ぎ、直ぐさまゲーム機に飛び付く。その手には既に１００円玉が握られていた

「あ！」

ずるい！　もとい不真面目だ！！　燕は顔をしかめ、友人を見る

「ごめん、燕！　これ出るの、ずっと待ってたのよ。ワンプレイだけお願い！　ね？」

「む……一回だけだぞ」

余り煩く言い過ぎるのも大人げ無いだろう。うむうむ頷きながら、燕はそう自分を納得させた

「やった！　ありがと。よーしやるぞー」

腕を捲くって気合いを入れた友人の背後へ、燕は素早く回り込む。
一番クリアにモニター画面を覗き込める、ベストポジションだ

「見ててね、一発クリアーするから」

「ほう」

自信があるようだ、これは期待しても良いだろう
腕を組み、じっくり見学体勢となった燕。しかし

「あ、負けた。う～ん、前より難しくなってるわこれ」

「初戦で負けるな！」

特に盛り上がる事なく、あっさり終了。相変わらず今日も微妙な生徒会長であった

夏の海　１２

「お、思ったよりも強烈ね」

ビキニと言う屈辱の聖衣を着て、車で一人待っていた俺への第一声がこれ

「なんて言えば良いのかしら……ザ・変態って感じ？」

「……ははは」

笑うしかない

「さてと。気持ち悪いものを見た所で化粧でもしますか」

「気持ち悪いって……」

貴女の弟ですよ

「大丈夫。綺麗にしてあげるわ」

「綺麗って……」

「ん……楽しみ」

「じゃ、始めましょう」

で、２０分後

「か、完成……よ？」

メイクを施された俺を、顔にハテナマークが浮かびまくった姉ちゃんが見つめる

「……う」

見つめ返すと、奴は視線を逸らした

「な、なによ。結構可愛く出来たじゃない。こっち見るな！」

見るなってオイ

「……うん。可愛い」

じっと横で見ていた秋姉が、感心したように言う

「そ、そう？」

秋姉に言われると何だか自信がつくぜ

「と、とにかく海の家に戻りましょう」

「その前に鏡を」

車のバックミラーを覗き込むと、そこには見覚えの無い不気味な男が無表情で写っていた

「……え？　これ、俺？」

「き、綺麗よ恭子」

「嬉しい、お姉様って酷くないこれ！？」

超オカマじゃん！

「か、髪を整えれば中々になるわよ」

櫛を取り出し、姉ちゃんは俺の髪をとく

「……おかしいわ。やればやるほど変に」

「……」

「あ～分からない！　何んなのアンタ！？」

「何で逆ギレ！？」

「もう良いわ、完成！」

「もう良いわって……適当過ぎるぞ、姉ちゃん！」

人前に晒される俺の身にもなれってんだ！

「これ以上どうしようもないもの」

「姉ちゃん！」

「何よ！」

「なにさ！！」

睨み合う俺達。こういう確執が、いずれ不幸な事件を生むのだ

「……喧嘩だめ」

そんな俺達を、秋姉がやんわり止める

「だ、だってコイツが」

「……乗り気じゃない恭介にお願いしたのは、私や姉さん。無理矢理はだめ」

言い訳しそうになった夏紀姉ちゃんを、秋姉はぴしゃりと止めた。なんと毅然で美しい姉なんだろう

「……分かったわよ。悪かったわね、恭介。大会出なくて良いわ」

「あ、いや」

素直に謝られると調子が狂うな

「……ごめんね恭介。恭介が妹だったらどうなっていたのだろうって、見てみたかったから」

「そ、そうなの？」

ご期待に添えず、すみません……

「ん……思った通り凄く可愛いかったよ」

にこっと笑顔の女神様

「お、俺、やっぱり出場するよ！　姉ちゃん、俺に力を貸してくれ！！」

秋姉の笑顔の為ならば、俺はオカマバーで三ヶ月働ける

「アンタ……よし、分かった！　アタシも本気出す！！」

姉ちゃんは、自分用の化粧箱を手に取り開く。中には、高そうな化粧品がきちんと揃えられていた

「全部で約２０万。惜しみ無く使ってあげるわ。先ずはキャビアの化粧水で……」

２５分後

「……」

「……」

化粧が終わり一分。俺と姉ちゃんは、無言で見つめ合う

「……アンタ、本当にアタシの弟？」

「な！？」

鬼かこの女！

「ん……グッド」

親指を立て、頷く秋姉。しかし化粧がきつくなった分、さっきより酷くなった気が……

「と、とにかくもう時間ね。雪達も待たせてるし海の家に戻るわよ」

「……」

戻りたくない

「ほら、とっとと車から出なさい！」

「……はいはい」

もう全てを諦めよう

俺は肩を落とし、車から出る。そんな俺に秋姉は心配そうな顔で寄り添ってくれた

「ありがとう秋姉」

「……無理だめだよ？」

「大丈夫。やると決めたらとことんやるよ」

「……ん。応援するね」

「秋姉……」

「へいそこの彼女達～。オラ達と茶でもしばかんか～」

秋姉の微笑みにほんのりしていると、後からそんな声が掛かった

「……またかよ」

うんざりしながら振り向くと

「ば、化け物～」

「ひ、ひぃい！？　喰わないで～」

二人は腰を抜かして逃げて行く

「……ふ」

目からこぼれ落ちるこれは涙じゃないさ。潮風が染みただけさ

その後も海の家に向かう途中、同じ様な事が続いた。怯える女性、泣く子供。吠える犬に祈る老夫婦

女装水着コンテストで沸き立っていた浜辺は、今や混沌に包まれようとしていた

そんな中、海の家の前で春菜と雪葉の姿を見付ける

「ゆ、雪葉～」

「あ、お兄……」

嬉しそうに振り向いた雪葉の笑顔が凍り付く。そして

「う、うわぁあああん！」

号泣！？

「兄貴……ぐす」

「お前も泣くな！」

せめて笑って！

「……なんか、ごめん」

「謝らんといて！」

姉ちゃんまで沈むと、俺まで泣きたくなるじゃないか

「おや、佐藤君」

「え？　げ！？」

海の家から顔を白粉で埋めた花柄ワンピース姿の化け物が現れた

「ま、まさか……宗院さん？」

眼鏡を掛けて無いので、確証は持てないが、不気味な生物である事は確かだ

「ええ、私です。それにしても……ふふふ、見違いましたよ佐藤君。エスコートをさせて頂きたい所ですが、今宵は私も淑女の一人。さぁ、行きましょう、私達の戦場へ」

「え？　ち、ちょっと」

腕をグイっと引っ張られる。細身な癖して、めっちゃ力強い

「ま、待って！　心の準備がまだ」

「……恭介」

「あ、秋姉……。行って来ます！」

ビシっと敬礼！

「……うん。行ってらっしゃい。頑張って」

雪葉達を宥めながら見送る秋姉に精一杯の作り笑顔を見せ、俺は自らの意思で戦場への第一歩を踏み出した

夏の海　１３

戦場は海の家から約２０メートル程の場所にあった
木材で作られた高さ２メートル、幅４メートル、長さ７メートル程度の立派なお立ち台。この舞台の上でオカマ野郎共の死闘が繰り広げられるらしい

「ほう、中々の強豪が揃っているようですよ」

舞台の裏。何も無い控え場で、七人の男だか女だか分からない変態達が、出番を今か今かと待ち侘びている

「佐藤君」

そんな中、場にそぐわない可憐な声で俺を呼ぶ声があった

「……綾さんか」

「これは……中々高度なツッコミが必要です。ごめんなさい、私にはその技術がありません」

綾さんは本当にすまなそうな顔をして、そんな事を言う

「……ドンマイ」

いや、むしろ俺がドンマイ

「はい、佐藤君には５番の札です。眼鏡は縁起の悪い４番をどうぞ」

「ありがとうございます」

「4番ですか……4番バッターと言う訳ですね」

「志村～。だったりするかも知れませんね」

ニッコリ笑顔でそう言い放った綾さんに、宗院さんはそうですかと首を傾げた

「……ぷっ」

宗院さんにちょっと志〇けんの雰囲気があって、思わず吹き出してしまう

「それでは私は、表に回ってお客さんと一緒に応援させて頂きます。頑張って下さいね、佐藤君。もし優勝したらご褒美あげちゃいますから」

「ご褒美ですか？」

「はい。ご褒美は――」

綾さんは顔を赤らめ、俺の耳に唇を寄せて囁く

「綾の一番大切なもの……、です」

「遠慮しておきます」

なんか嫌な予感がするので

「ちなみに真心です」

「貴女は山口百恵かって止めて下さいよ、変なツッコミさせるの」

俺まで年齢を疑われてしまうじゃないか

「あはは。じゃあ、優勝しましたら何か奢らせて頂きますね」

「ええ。是非」

せっかくだし、ラーメンでも奢ってもらおう

《え～皆さま、おまったせしました。これより、うみのねこ主催であります、水着コンテストを開始したいと思います》

綾さんが去って直ぐ、舞台の上に用意されたスピーカーから、店長の声が流れた。いよいよ始まるらしい

《あ～色々挨拶考えてたんですけど……此処でまごまごしてても仕方ないですかね。皆が見たいのは俺じゃなく、美少女達だ～！》

テンションを上げた店長の言葉に、そうだそうだと肯定の返事があり、わははと笑い声が沸く

《じゃあ登場してもらおうか！　１番の子、カモーン！！》

「お、俺か……」

１番の札を持ったオカマが、売られてゆく仔牛の様にトボトボと階

段を上がってゆく
そして壇上に上がった瞬間、爆笑が起きた
なんだありゃ～
オカマでももう少し女っぽいって
「酷いな……」
「……見世物かよ、俺ら」
盛り上がる会場を舞台裏から見て、盛り下がる俺達
《それじゃ1番の子。このマイクを持ってパフォーマンス宜しく》
「パフォーマンス!?」
1番が困惑の悲鳴をあげたのと同様に、俺達にも動揺が広がる
「パフォーマンスって、んな事するのかよ!」
「お、俺、棄権する」
「俺も止める!　やってられねぇよ!!」
オカマ達の半分が、止めだ止めだと引き上げるそぶりを見せた。残りの半分も、止めるかどうか迷っている風に見える
俺?　俺はもう、金に魂を売った男。人数が減るなら、それはそれ

で好都合さ

「待ちなさい！」

そんな姑息な事を考えていると、宗院さんが皆の前に出て一喝した

「一度自分の意思で戦場に立ったのなら、最後まで戦いなさい。嫌な事があったら直ぐ逃げる。それでは、大切なものは守れませんよ！」

ワンピース姿で、ビシっと決めた宗院さん。なんか格好良く見えてしまうのは、きっと気の迷いなのだろう

「……そうだ。一度決めた事なんだ」

「やってやる……やってやるぜ！」

迷っているのは俺だけでは無いらしい。棄権しようとしていたオカマ達に気合いが入り、その目はギラギラと光っている

「そう。これこそが若さです……素晴らしい」

宗院さんは、皆を眩しそうに見て微笑む。ノリに着いていけない俺は、この光景をポカンと見ていた

《1番ありがと～、次は2番カモーン》

「俺か！　行くぜ！」

2番は気合い入れて階段を上がって行き、また爆笑。しかし彼が戻

って来た時は、やり遂げた男の顔をしていた

《2番さんサンキューでした。次3番さ～ん、来ておくれ～》

そして3番が行き、パフォーマンスが始まった

「……次は私の出番ですね」

「頑張って下さい、師匠！」

「綺麗です……綺麗ですよ師匠！」

「君達……私も可愛い弟子達を持てた。ありがとう、ありがとう」

舞台裏は益々混沌とし始めていた。もはや俺にはどうする事も出来ない。せめて離れて見守ろう

《ありがとう3番。それじゃ4番の子どうぞ～》

「では行って来ます……佐藤君」

「は、はい！？」

他人の振りをしていたのに、いきなり声を掛けられてしまった

「貴方の美しさは本物です。本物に偽物は勝てないかも知れません。しかし、私には私の戦い方があります……。勝負ですよ佐藤君！」

宗院さんは勝手に俺をライバル認定し、颯爽と階段を上がって行った

《来た～4番。こ、これは凄いな！》

うわ、きつ……

やべえ、吐きそう

引っ込め眼鏡～

舞台の裏側、見上げても宗院さん達の後ろ姿しか見えない。しかしネガティブな歓声だけはハッキリと聞こえる（一部聞き覚えのある声）

しかし、宗院さんの背中は何も動じておらず、マイクを受け取り一言

《宗子で～す。好きな食べ物はパンの耳！　嫌いな食べ物は米の研ぎ汁っみんなそんな宗子を可愛いがってね～》

「……」

帰りたい

夏の海　１４

一体俺は何をやっているのだろう。てゅーか何故此処に居るの？
むしろ何で生きてるの？　命って何？　宇宙て何なの？

あはは、そうだ、これはきっと夢だ幻だ、悪夢を見ているんだ。ほら試しに頬っぺたをつねってみろ、全然痛くな

「っ、いてー！」

《どうした５番の子～緊張しちゃったかな～》

「あ、あぁ……う」

宗院さんの出番が終り、渋々壇上へ乗った俺。しかし客の前に出た瞬間、頭は真っ白になり、ぐるぐると宇宙を巡る

もう、どうしたら良いのか分からない。誰か助けて……

「……あれ？　実はちょっと可愛ね、あいつ」

「さっきが酷すぎたからな。ただ、あの恥じらい方……正直そそる」

「ひぃ！？」

俺を馬鹿にして笑っていた観客達の一部に、ヤバイ会話をし始めた奴らが現れ出す。その中にはパレオの下を覗き込もうとしている奴も居る始末

「か、勘弁してよ……」

「良いぞ～兄ちゃん～」

「なんか色っぽい！　こっち向いて～」

「脱げ～。脱いで１５センチメンタリズムの松茸さんを見せてみろ～。あいた！」

こ、この国は何処に向かっているんだ！

《凄い人気だね～。それじゃ５番。まずは自己紹介宜しく》

「あ……はい」

開き直れ恭介、こういうのは恥ずかしがっているから見苦しいし、おかしいんだ。さぁ歩き出せ、その一歩が新な道を切り開き、夢を繋ぐ。いけ、いくんだ恭介！　お前は男だ、勇者だ、女の子だ！　今こそお前の女気を見せてやるんだ！

《どうしたんだい可愛い子ちゃん、恥ずかしがらず自己紹介をお願い～》

「っ！」

行くぜ！！

《あ、あたし、佐藤　恭子１６歳！　みんなからは、恭ちゃんって呼ばれています。えっと彼氏は……募集中！　みんな恭子のお友達になって下さい！！》

「いいぞー」

「可愛いぜ、兄ちゃん！」

「15センチメンタリストな松茸さんを見せろ～あいたぁ！？」

やんややんやと大歓声（一部聞き覚えあり）

「……ふ、ふふふ」

死んだ。弱かった俺は今死んだ。ほら見てみろ、この盛り上がりを。家族を、夏紀姉ちゃん達の温かい眼差しを……

「……もう駄目ね、アイツ」

冷たっ！

《それじゃ恭子ちゃん、最後に君のパフォーマンスを見せておくれ》

《く……こ、こうなったら、やけくそだ！！　5番佐藤　恭子、歌を歌いま～す！　ラ～ブラブラブ海の家、大好き大好きマッスル～》

「お、お兄ちゃん……」

「ストレス溜まってんのかな、兄貴」

「……恭子ちゃん。やっぱり有り」

「え！？」

「ええ！？　だ、駄目、秋お姉ちゃん！　お兄ちゃんはお兄ちゃんじゃなきゃ駄目！」

「……ん、そうだね。恭介は恭介のままが一番素敵。頑張って、恭介」

《み～ん～な、大好き～よ～。あっは～ん♪》

今日の優勝

俺

ありがとうございました

夏の海　１４（後書き）

これ、今までで一番書くのに苦労しました。夏の海。書き終えた今、ただただ虚しい……

そのうち削除なオマケ。

僕らの死人、恭介さんが考える登場人物の人気ランキング

１位　佐藤　秋

「これはもう世界の常識でしょう？　日本で投票したら多分一億票ぐらい入るんじゃない？　少ない？」

２位　佐藤　雪葉

「悩んだけど、やっぱ雪葉だな。素直で可愛い自慢の妹だ」

３位　佐藤　夏紀

「俺的には１２位ぐらいにしたいけど、男には人気あるから。姉ちゃんが通う大学の男の八割以上が、奴隷化しているって姉ちゃんの友達から聞いたし……」

４位　風見　風子

「風子は俺から見ても格好良いからな。もし男に生まれていたら、坂田少年以上に人気あっただろうよ」

5位　坂上　美月

「素直で元気な一番子供らしい子だな。子犬系で可愛いと思うぞ」

6位　佐藤　春菜

「身内の目から見ても整った顔してるし、スタイルも良いと思う。ただ、もう少し常識が無いと困るけど」

7位　霧島　花梨

「生意気なガキんちょだが、大人になればかなりの美人になると思うぞ。リーダーシップもあるみたいだし、頼りになるかもな」

8位　俺

「このくらいの人気は……」

9位　菊水　燕

「優しく、おしとやかで可愛いと思うけど、超変な奴だからな。今だにバスの乗り方知らないらしいし」

10位　徳永　綾音

「綾さんは喋らなければ……ねぇ」

1914

第１３２話　俺の事件

水着コンテストが無事に終わって、一時間後。夏紀姉ちゃんが運転するワゴン車で帰宅途中の俺達

綾さんや宗院さんも一緒に帰ろうと誘ったが、二人はまだ仕事があるらしく、海の家に残った

帰りは近道で行こう。姉ちゃんの提案に疲れていた俺達は頷き、ショートカット出来る山道へと入る車。しかし突然雲行きが悪くなり、強い雷雨が俺達を襲う

このまま運転するのは危ない、どこかで時間を潰そう。夏紀姉ちゃんの言葉に俺達は賛同し、休めそうな場所を探す

しかし此処は山道。店も無く、俺達は困り果てていた。その時、誰かがポツリと呟く。あっちに明かりが……と

桜庭山荘事件

Ｆｉｌｅ１

細い道を右に曲がり、緩やかな坂を降りた所に二階建ての建物があった。木材で出来たそれは、軽井沢等で良く目にする別荘の様に見える

「ちょっと雨宿りさせてもらいましょうか？」

「俺が聞いてみるよ」

止めた車から降りると、強い雨風が俺の身体を刺す。直ぐにドアを閉めようとした俺を秋姉は呼び止め、夏紀姉ちゃんが海で羽織っていたジャケットを手渡す

「……頭に被って」

「ありがとう！」

ドアを閉め、ジャケットを傘に建物の玄関前へと走る。地面は雨でぐしゃぐしゃになっており、一歩毎にズボンの裾が泥にまみれる

ピンポーン

木で出来たドアの横にあるインターフォンを押し数十秒待つと、ドア向こうに人の気配がし始めた

「……どちらさまでしょう？」

若い女性の声だ。俺は怪しまれない様、極めて明るい声で応える

「突然押しかけてしまいすみません。実はこの雨で運転が出来なくなってしまったのですが、この辺に店が無くって……雨が少し収まるまで、俺を含めて五人。玄関先にでも置いて頂けませんでしょうか？」

「そうですか……少々お待ち下さい。ただ今旦那様にお聞きして来ます」

「ありがとうございます」

ドア向こうから気配が消え、俺は服の雨を払いながら暫く待つ。すると再び気配がし、ドアの鍵を外す音がした

「旦那様にお聞きしました所、構わないとの事でした。どうぞお入り下さい、お客様としてお迎え致します」

白メイド服に身を包んだ少女。セミロングの髪は青みがかっており、その瞳は漆黒の闇の様に深い

「あ、よ、宜しくお願いします。今、みんな呼んで来ます」

「お車を駐車場へご案内致します。この建物の裏なのですが、少々分かり難いので」

少女は感情を感じさせない声で言い、手に持っていたカッパを羽織り、数本の傘を脇に抱えた

「す、すみません。あの車です」

「お客様はお入りになってお待ち下さい。これ以上お客様を濡らせてしまったら、旦那様に叱られてしまいます」

一緒に車まで行こうとした俺を少女はやんわりと止め、頭を深く下げて車へと走って行く

「……入れって言われてもな」

流石にそこまでは図々しくなれない。俺はドアを閉め、軒下でみん

なを待つ事にした

それから数分後、先程の少女と、彼女に続いて俺の家族達がやって来た。雨と風が強い為、傘を差していてもみんな濡れているが、最後尾の秋姉だけは濡れている様子が無い。流石だ

「は～凄い雨だわ。ありがとうね、佐久さん」

「いいえ、夏紀様」

玄関前に付き、姉ちゃんは安堵の声を出す。そしてどうやら少女の名は佐久さんと言うらしい。佐久さんは待っていた俺に一礼し、ドアを開いた

「それでは皆様方、どうぞお入り下さい」

その声に俺達は急いで中へと入る。淡いオレンジ色の光に照らされた広い玄関は、高そうな絵や壷が置かれていた

「ただいまタオルをお持ちします」

「……色々とありがとうございます」

奥へ行く佐久さんへ秋姉が頭を下げる。すると佐久さんは振り返り、やはり感情を感じさせない声で言う

「桜庭山荘へようこそ。皆様方にとってこの不運な雨が、幸運に変わります様、精一杯ご奉仕させて頂きます」

紫色の稲光と共に、強い雷が落ちた。それはまるで、これから何か

不幸が起きる事を示唆しているかのような不気味な雷だった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3184g/

女系家族

2011年11月19日16時26分発行